

道
原
遺
跡

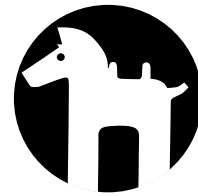
道 原 遺 跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一二年

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2012

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

道 原 遺 跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（栃木県側から南西方向を望む。中央付近が道原遺跡。手前の川は渡良瀬川。中央上は金山。）



遺跡遠景（群馬県側から東方向を望む。中央付近が道原遺跡。右上が足利市街。）

序

道原遺跡は太田市北東部にあり、北関東自動車道の建設に伴って、平成16年度から17年度にかけて当事業団が発掘調査を実施いたしました。北関東自動車道関連で調査された遺跡の中では県内最東端にあたり、遺跡の北東を流れる渡良瀬川を渡ればすぐ栃木県となる位置になります。発掘調査では縄文時代から中近世に及ぶ数多くの遺構・遺物が見つかり、大きな成果を得ることができました。

発見された主な遺構には、縄文時代の竪穴住居、古墳時代の周溝墓、古墳、水田、平安時代の道路、中世の土坑墓群などがあり、各時代にわたって多種多様なものが見られるのが一番の特徴と言えます。それらはこの地が縄文時代から今日まで、連綿として人々の暮らしの舞台であり続けたことを示しています。このような成果は、本地域の歴史を理解する上で貴重なものであり、今後の地域史研究に役立つものと確信しております。

最後になりましたが、東日本高速道路株式会社(旧日本道路公団)、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の刊行に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成24年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設に伴い発掘調査された道原遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 所在地 太田市只上町1676-4、1681-3～6、1682-1～4・7・12～15・20～24・26～29・33、1683-1、1684-1、1687-1、1688-1・4、1689-1・5
- 3 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社(旧日本道路公団)
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間・面積 平成16年8月1日～平成17年3月31日 5,818㎡
平成17年7月1日～平成17年12月31日 3,308㎡
- 6 発掘調査体制は次の通りである。
平成16年度 発掘調査担当 専門員 柿沼弘之、調査研究員 須田貞崇
遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量：株式会社栗原総合測量
空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
自然科学分析：株式会社古環境研究所
平成17年度 発掘調査担当 専門員 柏木一男、専門員 柿沼弘之
遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量：株式会社栗原総合測量
空中写真撮影・測量：株式会社シン技術コンサル
- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。
整理期間 平成22年10月1日～平成24年3月31日
整理担当 上席専門員 木津博明(平成22年度)、主任調査研究員 橋本 淳(平成23年度)
遺物写真撮影 補佐(総括) 佐藤元彦 保存処理 補佐 関 邦一
- 8 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 上席専門員 木津博明、主任調査研究員 橋本 淳
執筆 上席専門員 神谷佳明(遺物観察表：土師器・須恵器・埴輪、鉄器)、上席専門員 大西雅広(遺物観察表：中近世遺物、銭貨)、上席専門員 岩崎泰一(遺物観察表：石器石製品)、主任調査研究員 橋本 淳(遺物観察表：縄文土器)、上席専門員資料2課長事務取扱 大木紳一郎(遺物観察表：弥生土器)、主任調査研究員 高井佳弘(上記以外)
- 9 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 10 出土人骨・人歯・馬歯の鑑定は、宮崎重雄氏(古生物学会会員)に委託し、鑑定結果は第4章第3節に掲載した。
- 11 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)
群馬県教育委員会、太田市教育委員会、木下 良(古代交通研究会名誉会長)、木本雅康(長崎外国語大学)

凡 例

- 本文中に使用した方位は、総て国家座標(2002.4改正前の日本測地系)の第IX系を使用している。なお、座標北と真北との偏差は、本遺跡中央付近の $X=37150$ 、 $Y=-38050$ で東偏 $15^{\circ}04.17''$ である。
- 遺構断面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、最適と思われる縮尺に適宜変更したことがある。

遺構 竪穴住居 1:60 炉 1:30

古墳・周溝墓 平面図 1:100 石室平面図 1:40 断面図 1:40か1:100

土坑・土坑墓・火葬墓・集石・井戸 1:40 溝・堀 平面図 1:40か1:100 断面図 1:40

水田・畠 1:100

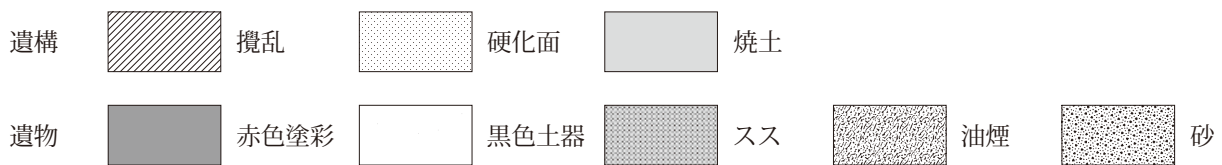
遺物 縄文～古代の土器・中近世陶磁器・石器(打製石斧・凹石など)・石製品(板碑など) 1:3

縄文土器・中近世陶磁器の大型品・石製品(石臼・石鉢・五輪塔など) 1:4か1:6

鉄器・石器(石核など) 1:2 石鏃・錢貨 1:1

なお、1:3以外の縮尺の遺物は、遺物番号のあとに縮尺を入れてある。

- 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示している。



- 遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西 90° 以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合 $N - \circ^{\circ} - E$ とした。住居床面積と水田面積の計測にはプランメーターを用い、3回計測してその平均値を採用した。
- 遺物観察表の記載内容は以下の通りである。

- ・色調は『新版標準土色帖2005年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に基づいている。

- ・「出土位置」の項の+○という数値は、床面とのレベル差を示している。単位はcmである。縄文時代の竪穴住居では、遺物の出土位置を、炉との位置関係から「炉南側」というように示す場合がある。

- ・土師器・須恵器の計測値の略号は、口:口径、底:底径、高:器高、台:高台径、稜:模倣杯などの稜径、脚:脚部底径、胴:甕などの胴部最大径、頸:頸部最小径である。

- ・銅銭の径は縦、横の2ヶ所で計測し、その順に数値を記した。

- ・計測値の()は推定値を、[]は残存値を示している。

- ・「成形・整形の特徴」の項にあるハケ目の本数は、1cm当たりの本数を記入した。

- 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000 「桐生」(平成14年5月1日発行)、「上野境」(平成14年12月1日発行)

「足利北部」(平成15年1月1日発行)、「足利南部」(平成14年9月1日発行)

1:50,000 「桐生及足利」(平成11年6月1日発行)、「深谷」(平成10年9月1日発行)

国土地理院 地勢図 1:200,000 「宇都宮」(平成18年4月1日発行)

太田市 1:2,500地形図(平成18年8月測図)

目次

カラー口絵	7	ピット	121
序	8	遺物集中部	122
例言	9	遺構外出土の遺物	124
凡例	第6節	平安時代の遺構と遺物	126
目次	1	1 竪穴住居	126
挿図・表・写真目次	2	2 道路状遺構	127
	3	3 畠	131
	4	4 遺構外出土の遺物	131
第1章 調査の経緯・経過・方法	第7節	中・近世の遺構と遺物	134
第1節 調査に至る経緯	1	1 竪穴状遺構	134
第2節 調査の方法と経過	2	2 土坑墓・火葬墓	136
1 調査の方法	3	3 土坑	148
2 調査の経過	4	4 集石	170
3 遺構名称の改訂	5	5 井戸	179
第2章 遺跡の位置と環境	6	6 堀	189
第1節 地理的環境	6	7 溝	191
第2節 歴史的環境	6	8 道路状遺構	198
第3節 基本土層	16	9 畠・耕作痕	200
第3章 調査の成果	10	10 遺構外出土の遺物	201
第1節 成果の概要	18	第4章 自然科学分析	
第2節 旧石器時代の調査	20	第1節 道原遺跡北調査区の火山灰分析	210
第3節 縄文時代の遺構と遺物	22	第2節 道原遺跡南調査区の地質調査	217
1 竪穴住居	22	第3節 出土人骨・歯・獣骨	221
2 土坑	41	1 道原遺跡出土の人歯・人骨	221
3 その他の遺構	48	2 道原遺跡1号井戸出土の馬骨	229
4 遺構外出土の遺物	48	第5章 総括	229
第4節 弥生時代の遺構と遺物	56	遺物観察表	235
1 土坑	56	写真図版	
2 遺構外出土の遺物	59	抄録	
第5節 古墳時代の遺構と遺物	62		
1 竪穴住居	62		
2 古墳・周溝墓	68		
3 土坑	101		
4 水田	104		
5 畠	110		
6 溝	118		
付図 1 道原遺跡南調査区(1区)第1面全体図(1/200)			
2 道原遺跡南調査区(1区)第2面全体図(1/200)			
3 道原遺跡南調査区(1区)第3面全体図(1/200)			
4 道原遺跡南調査区(1区)第4面全体図(1/200)			
5 道原遺跡南調査区(1区)第5面全体図(1/200)			
6 道原遺跡北調査区(2～4区)全体図(1/250)			

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第58図	1号古墳石室展開図	74
第2図	道原遺跡調査区周辺地形図	2	第59図	1号古墳石室遺物分布図	75
第3図	調査区設定図	3	第60図	1号古墳石室石材番号図	76
第4図	道原遺跡周辺地形分類図	7	第61図	1号古墳石室根石・石室掘方平面図	79
第5図	道原遺跡周辺の遺跡	9	第62図	1号古墳掘方平面図	80
第6図	基本土層	17	第63図	1号古墳出土遺物(1)	81
第7図	旧石器時代の調査・トレンチ配置図(南調査区=1区)	20	第64図	1号古墳出土遺物(2)	82
第8図	旧石器時代の調査・トレンチ配置図(北調査区=2~4区)	21	第65図	2号古墳平面図	83
第9図	3号住居平面図	22	第66図	2号古墳石室平面図	84
第10図	129号土坑・ピット断面図・遺物出土状態図	23	第67図	2号古墳石室底面舗石・掘方平面図・出土遺物	85
第11図	3号住居出土遺物(1)	24	第68図	1号周溝墓平面図	86
第12図	3号住居出土遺物(2)	25	第69図	2号周溝墓断面図	87
第13図	3号住居出土遺物(3)	26	第70図	2号周溝墓平面図	88
第14図	4号住居平面図	27	第71図	2号周溝墓遺物出土状態図	89
第15図	4号住居炉平面図・出土遺物(1)	28	第72図	2号周溝墓周溝断面図・出土遺物(1)	90
第16図	4号住居出土遺物(2)	29	第73図	2号周溝墓出土遺物(2)	91
第17図	4号住居出土遺物(3)	30	第74図	2号周溝墓出土遺物(3)	92
第18図	4号住居出土遺物(4)	31	第75図	3号周溝墓平面図	92
第19図	4号住居出土遺物(5)	32	第76図	3号周溝墓周溝断面図・出土遺物	93
第20図	5号住居平面図	33	第77図	4号周溝墓平面図	94
第21図	5号住居遺物出土状態図・炉平面図・ピット断面図 ・出土遺物(1)	34	第78図	4号周溝墓周溝断面図・出土遺物	95
第22図	5号住居出土遺物(2)	35	第79図	5号周溝墓平面図・出土遺物	96
第23図	5号住居出土遺物(3)	36	第80図	6号周溝墓平面図・掘方平面図	97
第24図	7号住居平面図	37	第81図	6号周溝墓周溝断面図・遺物出土状態図	98
第25図	7号住居遺物出土状態図・炉平面図・ピット断面図 ・出土遺物(1)	38	第82図	6号周溝墓出土遺物(1)	99
第26図	7号住居出土遺物(2)	39	第83図	6号周溝墓出土遺物(2)	100
第27図	7号住居出土遺物(3)	40	第84図	43・86号土坑平面図、43号土坑出土遺物	102
第28図	90~92・98号土坑平面図、92・98号土坑出土遺物	43	第85図	117~120・122・123・125~128号土坑平面図、 122号土坑出土遺物	103
第29図	93・97号土坑平面図、97号土坑出土遺物(1)	44	第86図	南調査区(1-1区)第4面水田区画図	105
第30図	97号土坑出土遺物(2)、99・101号土坑平面図、 99号土坑出土遺物、101号土坑出土遺物(1)	45	第87図	南調査区(1-2区)第4面水田区画図	106
第31図	101号土坑出土遺物(2)	46	第88図	南調査区(1-1区)第4面水田平面図・出土遺物	107
第32図	101号土坑出土遺物(3)、103~105・107・108号土坑平面図、 103号土坑出土遺物	47	第89図	南調査区(1-2区)第4面水田東半部平面図	109
第33図	25号ピット出土遺物	48	第90図	南調査区(1-2区)第4面水田西半部平面図	110
第34図	縄文時代・遺構外出土の遺物(1)	49	第91図	南調査区第3面島区画図	111
第35図	縄文時代・遺構外出土の遺物(2)	50	第92図	南調査区(1-1区)第3面島①区画平面図	112
第36図	縄文時代・遺構外出土の遺物(3)	51	第93図	南調査区(1-1区)第3面島②・③区画断面図	113
第37図	縄文時代・遺構外出土の遺物(4)	52	第94図	南調査区(1-1区)第3面島②・③区画平面図	114
第38図	縄文時代・遺構外出土の遺物(5)	53	第95図	南調査区(1-2区)第3面島④区画平面図	115
第39図	縄文時代・遺構外出土の遺物(6)	54	第96図	南調査区(1-2区)第3面島⑤・⑥区画平面図	116
第40図	縄文時代・遺構外出土の遺物(7)	55	第97図	南調査区(1-2区)第3面上層の島	117
第41図	109・121・124号土坑平面図・出土遺物	57	第98図	18・19号溝平面図	119
第42図	116号土坑平面図・出土遺物	58	第99図	20・21号溝平面図	120
第43図	弥生時代・遺構外出土の遺物(1)	59	第100図	1~3号遺物集中部位置図	122
第44図	弥生時代・遺構外出土の遺物(2)	60	第101図	1~3号遺物集中部出土遺物	123
第45図	弥生時代・遺構外出土の遺物(3)	61	第102図	3号遺物集中部出土遺物	124
第46図	6号住居平面図	62	第103図	古墳時代・遺構外出土の遺物(1)	124
第47図	6号住居炉平面図・遺物出土状態図	63	第104図	古墳時代・遺構外出土の遺物(2)	125
第48図	6号住居掘方平面図・出土遺物(1)	64	第105図	1号住居平面図	126
第49図	6号住居出土遺物(2)	65	第106図	1号住居掘方平面図・出土遺物	127
第50図	6号住居出土遺物(3)	66	第107図	2号道路状遺構側溝断面図	128
第51図	9号住居平面図・出土遺物	67	第108図	2号道路状遺構平面図	129
第52図	9号住居掘方平面図	68	第109図	2号道路状遺構側溝3・4号溝出土遺物	131
第53図	1号古墳平面図	69	第110図	平安時代・遺構外出土の遺物(1)	131
第54図	1号古墳周堀断面図	70	第111図	南調査区(1-1区)第2面島平面図	132
第55図	1号古墳石室平面図	71	第112図	平安時代・遺構外出土の遺物(2)	133
第56図	1号古墳石室断面図	72	第113図	1号竪穴状遺構平面図・出土遺物	135
第57図	1号古墳石室閉塞状況平面図	73	第114図	1号土坑墓平面図	136
			第115図	1号土坑墓出土遺物	137
			第116図	2号土坑墓平面図	137
			第117図	2号土坑墓出土遺物	138

第118図	3・4号土坑墓平断面図	138	第167図	1号井戸出土遺物(5)	183
第119図	4号土坑墓出土遺物	139	第168図	1号井戸出土遺物(6)	184
第120図	5・6号土坑墓平断面図・出土遺物	140	第169図	2号井戸平断面図・出土遺物	185
第121図	7号土坑墓平断面図・出土遺物	141	第170図	3・4号井戸平断面図・出土遺物	186
第122図	8号土坑墓平断面図・出土遺物(1)	141	第171図	5号井戸平断面図・出土遺物(1)	187
第123図	8号土坑墓出土遺物(2)	142	第172図	5号井戸出土遺物(2)	188
第124図	9号土坑墓平断面図	142	第173図	6号井戸平断面図	188
第125図	9号土坑墓出土遺物	143	第174図	6号井戸出土遺物	189
第126図	10号土坑墓平断面図・出土遺物(1)	143	第175図	1号堀平断面図	190
第127図	10号土坑墓出土遺物(2)	144	第176図	1号堀出土遺物	191
第128図	14号土坑墓平断面図・出土遺物(1)	144	第177図	5～7号溝平断面図	192
第129図	14号土坑墓出土遺物(2)	145	第178図	8号溝平断面図	194
第130図	15号土坑墓平断面図・出土遺物	145	第179図	9・10・12号溝平断面図	195
第131図	16号土坑墓平断面図・出土遺物	146	第180図	11・13・14・16号溝平断面図	197
第132図	1～3号火葬墓平断面図	147	第181図	15号溝平断面図	198
第133図	1～4号土坑平断面図、4号土坑出土遺物(1)	151	第182図	1号道路状遺構平断面図	199
第134図	4号土坑出土遺物(2)	152	第183図	1号道路状遺構断面図・出土遺物	200
第135図	4号土坑出土遺物(3)	153	第184図	中・近世・遺構外出土の遺物(1)	201
第136図	5～7号土坑平断面図、5・6号土坑出土遺物	154	第185図	中・近世・遺構外出土の遺物(2)	202
第137図	8～15号土坑平断面図、15号土坑出土遺物	155	第186図	中・近世・遺構外出土の遺物(3)	203
第138図	16～20・38～40号土坑平断面図、17号土坑出土遺物	156	第187図	中・近世・遺構外出土の遺物(4)	204
第139図	21～37号土坑平断面図、21～25号土坑断面図	157	第188図	中・近世・遺構外出土の遺物(5)	205
第140図	26～31・33～37号土坑断面図、41・42号土坑平断面図	158	第189図	中・近世・遺構外出土の遺物(6)	206
第141図	44～53号土坑平断面図	159	第190図	中・近世・遺構外出土の遺物(7)	207
第142図	54・56～59号土坑平断面図	160	第191図	中・近世・遺構外出土の遺物(8)	208
第143図	60～62・81号土坑平断面図、62・81号土坑出土遺物	161	第192図	中・近世・遺構外出土の遺物(9)	209
第144図	63～66号土坑平断面図、63・65号土坑出土遺物	162	第193図	北調査区(4区)土層断面の柱状図	215
第145図	67～69・71～74号土坑平断面図	163	第194図	2号周溝墓セクションC-C'の土層柱状図	215
第146図	76～80・82号土坑平断面図、80号土坑出土遺物	164	第195図	6号周溝墓セクションB-B'の土層柱状図	215
第147図	83号土坑平断面図・遺物出土状態図・出土遺物(1)	165	第196図	北調査区(4区)土層断面の火山ガラス比ダイヤグラム	216
第148図	83号土坑出土遺物(2)	166	第197図	北調査区(4区)土層断面採取軽石の重鉱物組成ダイヤグラム	216
第149図	83号土坑出土遺物(3)、84・85・87～89号土坑平断面図	167	第198図	火山灰分析・地質調査実施地点	216
第150図	100・102・106・110～112号土坑平断面図	168	第199図	南調査区3号トレンチ深掘1の土層柱状図	219
第151図	113～115号土坑平断面図	169	第200図	南調査区東壁の土層柱状図	220
第152図	1号集石平断面図・出土遺物	170	第201図	南調査区3号トレンチ深掘3の土層柱状図	220
第153図	13号集石平断面図・出土遺物	171	第202図	1号土坑墓出土歯	221
第154図	15号集石平断面図・出土遺物	172	第203図	2号土坑墓出土歯	221
第155図	16号集石平断面図・遺物出土状態図	173	第204図	3号土坑墓出土歯	223
第156図	16号集石出土遺物(1)	174	第205図	7号土坑墓出土歯	223
第157図	16号集石出土遺物(2)	175	第206図	8号土坑墓出土歯	224
第158図	17号集石平断面図・遺物出土状態図	175	第207図	9号土坑墓出土歯	225
第159図	17号集石出土遺物(1)	176	第208図	10号土坑墓出土歯	225
第160図	17号集石出土遺物(2)	177	第209図	14号土坑墓出土歯	225
第161図	18号集石平断面図・出土遺物	177	第210図	15号土坑墓出土歯	226
第162図	19号集石平断面図・遺物出土状態図・出土遺物	178	第211図	15号土坑出土歯	226
第163図	1号井戸平断面図・出土遺物(1)	179	第212図	81号土坑出土歯	228
第164図	1号井戸出土遺物(2)	180	第213図	太田市周辺の推定東山道駅路の位置	232
第165図	1号井戸出土遺物(3)	181			
第166図	1号井戸出土遺物(4)	182			

表目次

第1表	遺構名称の改訂	5	第13表	7号住居剥片石材組成一覧	37
第2表	道原遺跡周辺遺跡一覧表(1)	10	第14表	縄文時代土坑一覧表	42
第3表	道原遺跡周辺遺跡一覧表(2)	11	第15表	97号土坑石器器種別石材組成一覧	42
第4表	道原遺跡周辺遺跡一覧表(3)	12	第16表	97号土坑剥片石材組成一覧	42
第5表	道原遺跡周辺遺跡一覧表(4)	13	第17表	101号土坑石器器種別石材組成一覧	42
第6表	3号住居石器器種別石材組成一覧	24	第18表	101号土坑剥片石材組成一覧	42
第7表	3号住居剥片石材組成一覧	24	第19表	縄文時代ピット一覧表	48
第8表	4号住居石器器種別石材組成一覧	27	第20表	遺構外出土縄文土器分類表	48
第9表	4号住居剥片石材組成一覧	27	第21表	南調査区石器器種別石材組成一覧	49
第10表	5号住居石器器種別石材組成一覧	33	第22表	南調査区剥片石材組成一覧	49
第11表	5号住居剥片石材組成一覧	33	第23表	北調査区石器器種別石材組成一覧	49
第12表	7号住居石器器種別石材組成一覧	37	第24表	北調査区剥片石材組成一覧	49

第25表	弥生時代土坑一覧表	56	第58表	遺物観察表(8)	242
第26表	1号古墳石室石材一覧表(1)	76	第59表	遺物観察表(9)	243
第27表	1号古墳石室石材一覧表(2)	77	第60表	遺物観察表(10)	244
第28表	1号古墳石室石材一覧表(3)	78	第61表	遺物観察表(11)	245
第29表	1号古墳石室石材組成一覧表	78	第62表	遺物観察表(12)	246
第30表	古墳時代土坑一覧表	101	第63表	遺物観察表(13)	247
第31表	水田区画計測値一覧表・1-1区	105	第64表	遺物観察表(14)	248
第32表	水田区画計測値一覧表・1-2区	106	第65表	遺物観察表(15)	249
第33表	古墳時代ピット一覧表	121	第66表	遺物観察表(16)	250
第34表	中・近世土坑一覧表(1)	149	第67表	遺物観察表(17)	251
第35表	中・近世土坑一覧表(2)	150	第68表	遺物観察表(18)	252
第36表	火山ガラス比分析結果	214	第69表	遺物観察表(19)	253
第37表	重鉍物組成分析結果	214	第70表	遺物観察表(20)	254
第38表	周溝墓周溝におけるテフラ検出分析結果	214	第71表	遺物観察表(21)	255
第39表	屈折率測定結果	214	第72表	遺物観察表(22)	256
第40表	1号土坑墓出土歯計測表	222	第73表	遺物観察表(23)	257
第41表	2号土坑墓出土歯計測表	222	第74表	遺物観察表(24)	258
第42表	3号土坑墓出土歯計測表	223	第75表	遺物観察表(25)	259
第43表	7号土坑墓出土歯計測表	223	第76表	遺物観察表(26)	260
第44表	8号土坑墓出土歯計測表	224	第77表	遺物観察表(27)	261
第45表	9号土坑墓出土歯計測表	225	第78表	遺物観察表(28)	262
第46表	10号土坑墓出土歯計測表	225	第79表	遺物観察表(29)	263
第47表	14号土坑墓出土歯計測表	226	第80表	遺物観察表(30)	264
第48表	15号土坑墓出土歯計測表	227	第81表	遺物観察表(31)	265
第49表	15号土坑出土歯計測表	227	第82表	遺物観察表(32)	266
第50表	81号土坑出土歯計測表	228	第83表	遺物観察表(33)	267
第51表	遺物観察表(1)	235	第84表	遺物観察表(34)	268
第52表	遺物観察表(2)	236	第85表	遺物観察表(35)	269
第53表	遺物観察表(3)	237	第86表	遺物観察表(36)	270
第54表	遺物観察表(4)	238	第87表	遺物観察表(37)	271
第55表	遺物観察表(5)	239	第88表	遺物観察表(38)	272
第56表	遺物観察表(6)	240	第89表	遺物観察表(39)	273
第57表	遺物観察表(7)	241	第90表	遺物観察表(40)	274

写真目次

P L . 1	1	遺跡遠景(北東から)	6	7号住居全景(東から)	
	2	調査区全景(南調査区調査中、南西から)	7	7号住居遺物出土状態(東から)	
P L . 2	1	調査区全景(南調査区調査中、西から)	8	7号住居炉(東から)	
	2	南調査区全景(第3面調査中、東から)	P L . 9	1	7号住居全景(南西から)
P L . 3	1	南調査区全景(第3面調査中、上が北東)		2	7号住居炉掘方(東から)
	2	北調査区全景(東から)		3	90号土坑全景(北東から)
P L . 4	1	北調査区(2・3区)全景(東から)		4	91号土坑全景(南西から)
	2	北調査区(2・3区)全景(上が北西)		5	92号土坑全景(南東から)
P L . 5	1	南調査区(1-1区)旧石器調査状況(南東から)	P L . 10	1	93号土坑全景(南東から)
	2	北調査区旧石器調査状況(東から)		2	97号土坑遺物出土状態(南西から)
	3	北調査区旧石器調査状況(南東から)		3	97号土坑全景(南西から)
	4	基本土層B(2号トレンチ北壁、南から)		4	98号土坑全景(東から)
	5	3号住居全景(西から)		5	99号土坑全景(南東から)
P L . 6	1	3号住居遺物出土状態(西から)		6	101号土坑遺物出土状態(南から)
	2	3号住居遺物出土状態(西から)		7	101号土坑全景(南から)
	3	3号住居遺物出土状態(西から)		8	103号土坑全景(南西から)
	4	3号住居全景(南から)	P L . 11	1	104・105号土坑全景(南西から)
	5	4号住居全景(西から)		2	107号土坑全景(南から)
P L . 7	1	129号土坑(北東から)		3	108号土坑全景(南西から)
	2	4号住居炉(南西から)		4	109号土坑全景(南東から)
	3	4号住居炉掘方(南西から)		5	1-1区第5面全景(南西から)
	4	5号住居遺物出土状態(南から)	P L . 12	1	1-2区第5面全景(北西から)
	5	5号住居全景(南西から)		2	南調査区(1区)第5面全景(南西から)
P L . 8	1	5号住居遺物No.2出土状態(西から)	P L . 13	1	116号土坑遺物出土状態(南東から)
	2	5号住居遺物No.5~7出土状態(東から)		2	116号土坑全景(南東から)
	3	5号住居埋葬炉(東から)		3	121号土坑全景(南から)
	4	5号住居埋葬炉掘方(南東から)		4	124号土坑全景(東から)
	5	5号住居1号土坑(南西から)		5	6号住居全景(北西から)

- P L. 14 1 6号住居全景(南西から)
2 6号住居遺物出土状態(北西から)
3 6号住居遺物出土状態(北西から)
4 6号住居遺物No.5 出土状態(北東から)
5 6号住居炉全景(南西から)
6 6号住居P 1 断面(南西から)
7 6号住居P 1 全景(南西から)
8 6号住居P 2 全景(南西から)
- P L. 15 1 9号住居全景(南西から)
2 9号住居遺物出土状態(南西から)
3 9号住居P 1 (南西から)
4 9号住居P 2 (南西から)
5 9号住居P 3 (南西から)
- P L. 16 1 9号住居P 4 (南西から)
2 9号住居掘方全景(南西から)
3 1号古墳全景(南から)
4 1号古墳全景(東から)
5 1号古墳全景(南から)
- P L. 17 1 1号古墳全景(上が北)
2 1号古墳周堀内礫出土状態(南から)
3 1号古墳南部周堀内礫出土状態(東から)
4 1号古墳周堀断面C-C' (南から)
5 1号古墳周堀断面C-C' (南から)
- P L. 18 1 1号古墳周堀北辺(東から)
2 1号古墳周堀東辺(北から)
3 1号古墳周堀北辺掘方(東から)
4 1号古墳周堀東辺掘方(北から)
5 1号古墳石室全景(南から)
- P L. 19 1 1号古墳石室全景(北から)
2 1号古墳石室全景(上が北)
3 1号古墳石室全景閉塞石除去前(南から)
4 1号古墳石室閉塞状態(南から・羨門から内側を見る)
- P L. 20 1 1号古墳石室閉塞状態(北から・玄室から外側を見る)
2 1号古墳石室閉塞状態(北東から・玄室から外側を見る)
3 1号古墳東翼垣(南西から)
4 1号古墳西翼垣(南東から)
5 1号古墳羨道東壁(西から)
6 1号古墳羨道西壁(東から)
7 1号古墳羨門部(南から)
8 1号古墳玄門から羨道(北から)
- P L. 21 1 1号古墳玄室(南東から)
2 1号古墳奥壁(南から)
3 1号古墳玄室西壁(東から)
4 1号古墳玄室東壁(西から)
5 1号古墳石室遺物出土状態(北から)
6 1号古墳石室遺物出土状態(北から)
7 1号古墳石室床石除去後(南から)
8 1号古墳石室床石除去後(東から)
- P L. 22 1 1号古墳石室床石除去後(西から)
2 1号古墳石室床石除去後奥壁(南から)
3 1号古墳石室床石除去後奥壁と西壁(南東から)
4 1号古墳石室床石除去後奥壁と東壁(南西から)
5 1号古墳石室床石除去後玄室西壁(東から)
6 1号古墳石室床石除去後玄室東壁(西から)
7 1号古墳石室床石除去後西側玄門部(北東から)
8 1号古墳石室床石除去後東側玄門部(北西から)
- P L. 23 1 1号古墳石室床石除去後羨道西壁(東から)
2 1号古墳石室床石除去後羨道東壁(西から)
3 1号古墳石室根石(南から)
4 1号古墳石室根石(東から)
5 1号古墳石室根石除去後(南から)
6 1号古墳石室根石除去後(南東から)
7 1号古墳石室掘方全景(南から)
8 1号古墳石室掘方(南西から)
- P L. 24 1 2号古墳全景(南から)
2 2号古墳全景(石室掘方、上が北東)
- P L. 25 1 2号古墳周堀断面A-A' (西から)
2 2号古墳周堀断面B-B' (南から)
3 2号古墳周堀断面C-C' (西から)
4 2号古墳周堀断面D-D' (南から)
5 2号古墳周堀遺物出土状態南西部(南西から)
6 2号古墳周堀遺物出土状態北西部(南西から)
7 2号古墳周堀遺物出土状態北部(東から)
8 2号古墳周堀遺物出土状態南部(東から)
- P L. 26 1 2号古墳石室全景(南西から)
2 2号古墳石室全景(南から)
3 2号古墳石室全景(西から)
4 2号古墳石室中央部(西から)
5 2号古墳石室鋪石面全景(東から)
- P L. 27 1 2号古墳石室鋪石面全景(南から)
2 2号古墳石室鋪石(南から)
3 2号古墳石室鋪石(西から)
4 2号古墳石室掘方(南から)
5 2号古墳石室掘方(東から)
- P L. 28 1 1号周溝墓全景(上が北西)
2 1号周溝墓全景(南西から)
3 1号周溝墓全景(北西から)
4 2号周溝墓周溝断面C-C' (南東から)
5 2号周溝墓周溝断面D-D' (南西から)
- P L. 29 1 2号周溝墓全景(上が北東)
2 2号周溝墓全景(南西から)
- P L. 30 1 2号周溝墓周溝断面E-E' (北西から)
2 2号周溝墓周溝断面F-F' (南西から)
3 2号周溝墓周溝北東辺遺物出土状態(西から)
4 2号周溝墓周溝北西辺遺物出土状態(南西から)
5 2号周溝墓周溝南西辺遺物出土状態(南から)
6 2号周溝墓周溝南西辺遺物No.17出土状態(南東から)
7 2号周溝墓周溝北東辺(南東から)
8 2号周溝墓周溝南東辺(北東から)
- P L. 31 1 2号周溝墓周溝南西辺(北西から)
2 2号周溝墓周溝北西辺(南西から)
3 3号周溝墓全景(上が北東)
4 3号周溝墓全景(南東から)
5 3号周溝墓全景(北東から)
- P L. 32 1 3号周溝墓周溝遺物出土状態(東から)
2 3号周溝墓周溝西半部(北東から)
3 3号周溝墓周溝北辺(北西から)
4 3号周溝墓周溝北辺(南東から)
5 4号周溝墓全景(上が北東)
- P L. 33 1 4号周溝墓全景(南東から)
2 4号周溝墓全景(南西から)
3 4号周溝墓全景(北東から)
4 4号周溝墓周溝断面A-A' (北西から)
5 4号周溝墓周溝断面B-B' (南西から)
- P L. 34 1 4号周溝墓周溝断面C-C' (北西から)
2 4号周溝墓周溝断面D-D' (南西から)
3 5号周溝墓全景(上が北東)
4 5号周溝墓周溝断面A-A' (東から)
5 5号周溝墓周溝断面C-C' (北東から)
- P L. 35 1 5号周溝墓全景(南東から)
2 6号周溝墓全景(上が北)
- P L. 36 1 6号周溝墓全景(東から)
2 6号周溝墓全景(西から)
3 6号周溝墓周溝断面A-A' (南東から)
4 6号周溝墓周溝断面B-B' (西から)
5 6号周溝墓周溝断面C-C' (南から)
- P L. 37 1 6号周溝墓周溝遺物出土状態(東から)
2 6号周溝墓周溝南辺西半分遺物出土状態(北から)
3 6号周溝墓周溝南辺東半分遺物出土状態(北から)
4 6号周溝墓周溝東端部(南から)
5 6号周溝墓周溝南辺(西から)
6 6号周溝墓周溝西端部(南東から)

	7	43号土坑遺物出土状態(南東から)		5	4号溝全景(南東から)
	8	43号土坑全景(北西から)		6	4号溝全景(北西から)
P L. 38	1	86号土坑全景(西から)	P L. 51	1	4号溝断面G-G'(南東から)
	2	86号土坑全景(東から)		2	4号溝断面H-H'(南東から)
	3	86号土坑東半部(西から)		3	4号溝断面I-I'(南東から)
	4	86号土坑断面(西から)		4	4号溝断面J-J'(南東から)
	5	86号土坑掘方全景(西から)		5	17号溝全景(北西から)
	6	86号土坑掘方全景(南から)		6	17号溝全景(南東から)
	7	117号土坑全景(南西から)	P L. 52	1	17号溝断面K-K'(南東から)
	8	118号土坑全景(南から)		2	17号溝断面L-L'(南東から)
P L. 39	1	120号土坑全景(南西から)		3	17号溝断面M-M'(南東から)
	2	122号土坑遺物出土状態(南西から)		4	17号溝断面N-N'(南東から)
	3	122号土坑全景(南西から)		5	1-1区第2面島全景(北西から)
	4	123号土坑全景(南から)	P L. 53	1	1号竪穴状遺構全景(南東から)
	5	125号土坑全景(南から)		2	1号竪穴状遺構掘方全景(南西から)
	6	126号土坑全景(南から)		3	1号竪穴状遺構P1(南東から)
	7	127号土坑全景(南西から)		4	1号竪穴状遺構P8(南東から)
	8	128号土坑全景(南から)	P L. 54	1	1号土坑墓遺物出土状態(東から)
P L. 40	1	南調査区(1区)第4面水田全景(上が北東)		2	1号土坑墓全景(南から)
	2	1-1区第4面水田全景(上が北東)		3	2号土坑墓遺物出土状態(北西から)
P L. 41	1	1-2区第4面水田全景(上が北東)		4	2号土坑墓全景(北西から)
	2	1-1区第4面水田西半部(南から)		5	3号土坑墓人骨出土状態(南東から)
	3	1-1区第4面水田中央部(南西から)		6	3号土坑墓全景(南東から)
	4	1-1区第4面水田東半部(南西から)		7	4号土坑墓遺物出土状態(南東から)
	5	1-2区第4面水田東半部(南西から)		8	4号土坑墓全景(南東から)
P L. 42	1	1-1区第3面島(南西から)	P L. 55	1	5号土坑墓遺物出土状態(東から)
	2	1-2区第3面島(南西から)		2	5号土坑墓人骨・古銭出土状態(東から)
P L. 43	1	1-1区第3面島(北東から)		3	5号土坑墓全景(東から)
	2	1-1区第3面島(南西から)		4	6号土坑墓全景(西から)
	3	1-1区第3面島(畝間完掘後、南から)		5	7号土坑墓全景(南から)
	4	1-1区第3面島断面A-A'西半部(南西から)		6	8号土坑墓確認面の遺物出土状態(東から)
	5	1-1区第3面島断面B-B'東半部(南西から)		7	8号土坑墓遺物出土状態(西から)
	6	1-2区第3面島(北西から)		8	8号土坑墓全景(東から)
	7	1-2区第3面島(南東から)	P L. 56	1	9号土坑墓遺物出土状態(西から)
	8	1-2区第3面島断面E-E'東半部(南西から)		2	9号土坑墓全景(南東から)
P L. 44	1	1-2区第3面直上島(西から)		3	10号土坑墓遺物出土状態(南西から)
	2	1-2区第3面直上島(北東から)		4	10号土坑墓全景(南から)
	3	18号溝(1-1区部分)全景(南東から)		5	11・12号土坑墓遺物出土状態(西から)
	4	18号溝(1-2区部分)全景(南東から)		6	11・12号土坑墓全景(西から)
	5	18号溝断面A-A'(南東から)		7	13号土坑墓遺物出土状態(南から)
	6	18号溝断面C-C'(南東から)		8	13号土坑墓全景(南から)
P L. 45	1	19号溝全景(東から)	P L. 57	1	14号土坑墓遺物出土状態(西から)
	2	19号溝断面A-A'(南東から)		2	14号土坑墓全景(西から)
	3	21号溝全景(南から)		3	15号土坑墓遺物出土状態(北西から)
	4	21号溝断面A-A'(南西から)		4	15号土坑墓全景(北西から)
	5	20号溝(1-1区部分)全景(南東から)		5	16号土坑墓遺物出土状態(北東から)
	6	20号溝(1-2区部分)全景(南東から)		6	16号土坑墓全景(南から)
P L. 46	1	20号溝断面A-A'(南東から)		7	1号火葬墓人骨出土状態(南西から)
	2	20号溝断面C-C'(南東から)		8	1号火葬墓全景(南西から)
	3	1-1区第4面遺物集中部(1号が手前、2号は奥、南から)	P L. 58	1	2号火葬墓人骨出土状態(南西から)
	4	1-2区第4面3号遺物集中部(南から)		2	2号火葬墓全景(南西から)
	5	1号住居全景(北から)		3	3号火葬墓全景(南西から)
P L. 47	1	1号住居全景(東から)		4	2・3号土坑全景(南東から)
	2	1号住居遺物出土状態(北から)		5	5・6号土坑全景(南西から)
	3	1号住居掘方全景(北から)		6	12・13号土坑全景(南西から)
	4	1号住居掘方遺物No.2出土状態(南から)		7	21~24号土坑全景(南から)
	5	2号道路状遺構全景(上が北)		8	38~40号土坑全景(北西から)
P L. 48	1	2号道路状遺構全景(北西から)	P L. 59	1	1号土坑全景(南西から)
	2	2号道路状遺構全景(北西から)		2	4号土坑遺物出土状態(南西から)
P L. 49	1	2号道路状遺構全景(南東から)		3	4号土坑全景(南西から)
	2	3号溝全景(南東から)		4	5号土坑遺物出土状態(南西から)
	3	3号溝全景(北西から)		5	7号土坑全景(西から)
P L. 50	1	3号溝断面D-D'(南東から)		6	9号土坑全景(南から)
	2	3号溝断面E-E'(南東から)		7	10・11号土坑全景(南西から)
	3	3号溝断面F-F'(南東から)		8	14号土坑全景(南西から)
	4	3号溝遺物出土状態(南東から)			

	9	15号土坑礫出土状態(南から)		15	6号井戸全景(南西から)
	10	15号土坑全景(南から)	P L . 64	1	1号集石確認状態(西から)
	11	16・17号土坑全景(南西から)		2	1号集石完掘(東から)
	12	18号土坑全景(南西から)		3	13号集石確認状態(北東から)
	13	19号土坑全景(南東から)		4	13号集石完掘(南西から)
	14	20号土坑全景(南西から)		5	15号集石確認状態(南から)
	15	21号土坑全景(南から)		6	15号集石完掘(南東から)
P L . 60	1	25号土坑全景(南から)		7	16号集石確認状態(南西から)
	2	26号土坑全景(西から)		8	16号集石完掘(南西から)
	3	27～32号土坑全景(西から)	P L . 65	1	17号集石遺物出土状態(南から)
	4	33・34号土坑全景(西から)		2	17号集石完掘(南から)
	5	35～37号土坑全景(西から)		3	18号集石遺物出土状態(南から)
	6	21～37号土坑全景(西から)		4	18号集石完掘(西から)
	7	41号土坑全景(南西から)		5	19号集石遺物出土状態(南から)
	8	42号土坑全景(南から)		6	19号集石完掘(南から)
	9	44号土坑全景(南西から)		7	1号堀全景(上が北東)
	10	45号土坑全景(北西から)	P L . 66	1	1号堀(北東から)
	11	46号土坑全景(南西から)		2	1号堀(南西から)
	12	47号土坑全景(南西から)		3	1号堀断面の形状(北東から)
	13	49号土坑全景(南西から)		4	1号堀礫出土状態(北西から)
	14	52号土坑全景(北西から)		5	1号堀礫出土状態(北東から)
	15	56号土坑礫出土状態(南から)	P L . 67	1	1号堀硬化面上の石敷(北西から)
P L . 61	1	57号土坑全景(南西から)		2	1号堀硬化面上の石敷(北東から)
	2	58・59号土坑全景(南東から)		3	5～7号溝全景(北西から)
	3	60号土坑全景(南東から)		4	5～7号溝全景(南東から)
	4	61号土坑全景(南から)		5	5号溝断面C-C'(南東から)
	5	62号土坑全景(北東から)		6	6号溝断面B-B'(南東から)
	6	63号土坑全景(南西から)	P L . 68	1	8号溝全景(北西から)
	7	64号土坑全景(北西から)		2	9号溝全景(東から)
	8	65号土坑全景(南西から)		3	8号溝断面A-A'(南東から)
	9	66号土坑全景(南西から)		4	9号溝断面A-A'(東から)
	10	67・68号土坑全景(南西から)		5	10号溝全景(北東から)
	11	69号土坑全景(東から)		6	10号溝断面A-A'(北東から)
	12	71号土坑全景(南東から)	P L . 69	1	11号溝東全景(北西から)
	13	72・73号土坑全景(南東から)		2	11号溝断面C-C'(南東から)
	14	74号土坑全景(北西から)		3	12号溝全景(南東から)
	15	76号土坑全景(南から)		4	13号溝全景(南西から)
P L . 62	1	77号土坑全景(南西から)		5	14～16号溝全景(南西から)
	2	78号土坑全景(南西から)		6	15号溝全景(南西から)
	3	79号土坑全景(南西から)	P L . 70	1	14号溝断面A-A'(南西から)
	4	80号土坑全景(西から)		2	15号溝断面A-A'(南西から)
	5	81号土坑遺物出土状態(西から)		3	1号道路状遺構全景(南東から)
	6	81号土坑全景(東から)		4	1号道路状遺構東側硬化面(南東から)
	7	82号土坑全景(南東から)		5	1号道路状遺構西側硬化面(南東から)
	8	83号土坑遺物出土状態(南西から)	P L . 71	1	1号道路状遺構全景(北西から)
	9	83号土坑全景(南西から)		2	1号道路状遺構断面A-A'(南東から)
	10	84号土坑全景(南西から)		3	1号道路状遺構断面A-A'北側溝(南東から)
	11	85号土坑全景(南西から)		4	1号道路状遺構断面A-A'南側溝(南東から)
	12	87・88号土坑全景(南東から)		5	1号道路状遺構断面B-B'(南東から)
	13	89号土坑全景(東から)	P L . 72	1	1号道路状遺構断面B-B'北側溝(南東から)
	14	100号土坑全景(南西から)		2	1号道路状遺構断面B-B'南側溝(南東から)
	15	102号土坑全景(北西から)		3	1号道路状遺構断面C-C'(南東から)
P L . 63	1	106号土坑全景(南西から)		4	1号道路状遺構断面C-C'北側溝(南東から)
	2	110・111号土坑全景(東から)		5	1-1区第1面全景(南西から)
	3	112号土坑全景(南西から)	P L . 73	1	1-2区第1面畝間痕跡確認状態(北西から)
	4	113号土坑全景(南西から)		2	1-2区第1面下層の畝の畝間痕跡(西から)
	5	114号土坑全景(南西から)	P L . 74		出土遺物(3号住居)
	6	115号土坑全景(南東から)	P L . 75		出土遺物(3・4号住居)
	7	1号井戸獣骨出土状態(南東から)	P L . 76		出土遺物(4号住居)
	8	1号井戸全景(北東から)	P L . 77		出土遺物(4・5号住居)
	9	2号井戸全景(南西から)	P L . 78		出土遺物(5・7号住居)
	10	3号井戸全景(東から)	P L . 79		出土遺物(7号住居)
	11	4号井戸全景(南西から)	P L . 80		出土遺物(92・97～99・101号土坑)
	12	5号井戸礫出土状態(南東から)	P L . 81		出土遺物(101・103号土坑、25号ピット、縄文時代・遺構外)
	13	5号井戸断面(南東から)	P L . 82		出土遺物(縄文時代・遺構外出土遺物)
	14	5号井戸全景(南東から)	P L . 83		出土遺物(縄文時代・遺構外出土遺物)

- P L . 84 出土遺物(縄文時代・遺構外出土遺物)
- P L . 85 出土遺物(縄文時代・遺構外、109・116・121・124号土坑、
弥生時代・遺構外)
- P L . 86 出土遺物(弥生時代・遺構外)
- P L . 87 出土遺物(弥生時代・遺構外、6号住居)
- P L . 88 出土遺物(6・9号住居)
- P L . 89 出土遺物(1・2号古墳、2号周溝墓)
- P L . 90 出土遺物(2～4・6号周溝墓)
- P L . 91 出土遺物(6号周溝墓、122号土坑、2号遺物集中部)
- P L . 92 出土遺物(3号遺物集中部、古墳時代・遺構外)
- P L . 93 出土遺物(1号住居、3・4号溝、平安時代・遺構外、
1号竪穴状遺構、1・2・4号土坑墓)
- P L . 94 出土遺物(5～10・14号土坑墓)
- P L . 95 出土遺物(15・16号土坑墓、4・15・81・63・65・80号土坑)
- P L . 96 出土遺物(83号土坑、1・15号集石)
- P L . 97 出土遺物(16～19号集石)
- P L . 98 出土遺物(1号井戸)
- P L . 99 出土遺物(1・3・5号井戸)
- P L . 100 出土遺物(5・6号井戸、1号堀、1号道路状遺構、中・近世
・遺構外)
- P L . 101 出土遺物(中・近世・遺構外)
- P L . 102 出土遺物(中・近世・遺構外)

第1章 調査の経緯・経過・方法

第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。平成12年6月、日本道路公団、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議において、道路公団から橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、平成12年8月から発掘調査実施の要請があった。これを受けて当事業団は用地解決状況、残土場の確保、側道と本線の調査地区分の検討等、調査実施への準備を進めた。

平成12年8月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、

当事業団の3者による「北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、また、協定書に基づく公団と事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市書上遺跡から着手となった。

太田市の金山以東の地区については、用地買収が比較的進展している大道西遺跡がまず対象となり、平成14年度4月から調査が開始され、その後用地買収の進展に伴ってその他の遺跡に調査範囲が広がられた。道原遺跡は平成16年度8月から開始することになり、まず多くの遺構が予想される、県道足利伊勢崎線以北の地区を対象として調査に着手し、年度末まで調査を行った。県道の南の地区は翌平成17年7月～12月に調査し、現地における調査はすべて終了した。



第1図 遺跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」(平成18年4月1日発行)使用)



第2図 道原遺跡調査区周辺地形図

(この地図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500分の1地形図(平成18年8月測図)を使用し複製した)

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

道原遺跡の調査に当たっては、以下のように1～4区に地区分けをした(第3図参照)。対象地は県道足利・伊勢崎線を挟んで南北に分かれているので、北調査区と南調査区の2地区に分けられる。平成17年度に調査を行った南調査区は1区と呼んだが、その中央に現道があるため、東側を1-1区、西側を1-2区と細分した。平成16年度に調査を行った北調査区は、その内部に水路や道路などの顕著な境界線はないが、旧宅地の境界などを用いて2～4区の3地区に分けた。この地区分けは工程管理などの便宜上行ったものであり、実際の調査ではこの3地区を同時に調査していて相互に独立したものではない。本報告書では、遺構の所在地点を大まかに示すためにこの2～4区という名称を使う場合があるが、特にそれ以上の意味はないので、注意していただきたい。

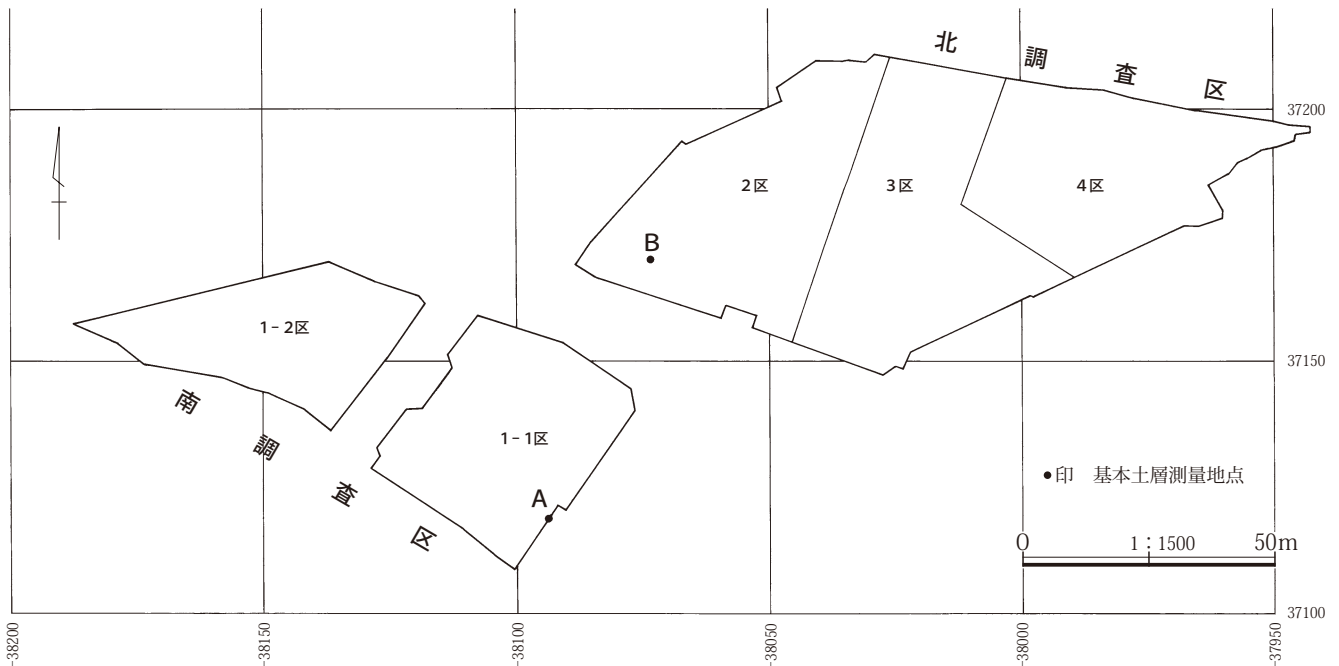
調査に用いたグリッドは5m×5mを基本とした。その名称は本遺跡特有のものを設定することはせず、国土座標区系(旧国土座標系=日本測地系)を用い、X・Y座

標について、その下3桁を用いて表すことにした(例：X=37180、Y=-38050の場合、180-050と表す)。地点を細かく表示する場合は、この下3桁の数字をそのまま用いた場合も多い(例：5mないし10mグリッドにこだわらず、1m単位で181-052と表す場合がある)。

調査方法に特殊なものはなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は基本的にバックホーを用いた。表土除去終了後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。北調査区(2～4区)の遺構の種類は古墳、周溝墓、竪穴住居のほか、土坑、溝、ピットなどであり、それぞれに適した方法を用いた。南調査区(1区)では、北端付近の一部を除いて低地になっており、畠・水田など、古墳時代～中近世にかけての複数の遺構面が存在した。調査に当たっては、各遺構面間の覆土が厚い場合はバックホーを用い、薄い場合は作業員によって掘り下げた。

遺構名は調査区にかかわらず、全て続き番号で表した。遺構の測量は、断面図は作業員により手実測で行い、平面図は原則として測量業者に委託し、平板・電子平板を用いて実測した。ただし、南調査区では古墳時代の水



第3図 調査区設定図

田が見つかっており、これについては航空測量を行って期間の短縮を図った。また、古墳の石室など、難易度の高い実測図なども測量業者に委託した。縮尺は1/10、1/20、1/40を遺構の性格に合わせて適宜使用した。写真撮影は6×7・6×6白黒、35mm白黒、35mmカラーリバーサルの3種類を基本とした。調査区的全景写真は業者に委託し、ラジコンヘリによる空中撮影を行った。

遺構の調査終了後、南調査区の1-1区北端付近と北調査区全域とでローム層の堆積が良好であったため、旧石器時代の調査を行った。調査は2×4mのトレンチを全域に設けて行ったが、遺構・遺物とも見つからなかった。

2 調査の経過

調査は平成16年度(2004年)、平成17年度(2005年)の2回に分けて行った。

平成16年度の調査

平成16年度は8月1日から翌平成17年3月31日まで調査した。

この年度に調査したのは、県道北側の北調査区(2~4区)である。

8月2日より現地における調査準備を開始し、4日より重機による表土除去を開始した。表土除去は排土置き場の確保が必要であったため、大きく2回に分けて実施した。まず8月4日~18日にかけては調査区西半部(2・3区)を中心として行い、その後調査区北側の溝に仮設橋を架け、排土置き場を調査区外に確保したのち、その他の全域の表土除去を10月8日~11月9日に実施した。それら以外に、1号古墳周辺や一部洪水層が残存していた部分については、適宜重機を導入して掘り下げを行った。

遺構の確認作業は表土除去が進むにしたがって並行して実施し、確認できた遺構から調査を開始した。まず確認できたのは古墳、溝、土坑、ピット、集石などであり、溝以下の比較的小さな遺構の調査を行いながら、古墳の調査も開始した。古墳については1~3号墳まで確認した時点で、2・3号墳は方形周溝墓であるらしいことが分かり、これらは2号墳→1号方形周溝墓、3号墳→2号方形周溝墓と名称を変更し、以後確認されたものについては、古墳と方形周溝墓とを区別しながら調査した。最終的に古墳は2基、方形周溝墓は6基を確認した

が、方形周溝墓の中には方形ではなく円形のものもあるので、整理作業の中でさらに「周溝墓」と名称変更を行ったので注意が必要である(整理作業時における名称変更については第1表参照)。周溝墓については主体部が残存しておらず、比較的早く調査が進んだが、古墳については、特に1号古墳は横穴式石室の下部が良好に残っており、調査にはかなりの時間を要した。1号古墳は9月10日から開始し、全ての作業が終了したのは3月24日である。2号古墳は11月4日より開始し、2月9日に終了した。

土坑は数多くあるので、調査の全期間を通じて調査を行ったが、その中には火葬墓・土坑墓などの墓と思われるものがあった。火葬墓は10月25日に初めて確認し、以後合計3基を調査した。土坑墓は11月17日に調査を開始し、以後合計16基を調査した。

住居は12月9日に1号住居を確認し、以後合計7軒の調査を行った。これについても名称の変更があるので、第1表を参照していただきたい。

12月13日には調査区の東端部で規模の大きな溝を確認した。これはより東にある道原城に関わる堀であると思われる。多くの石を埋土に含み、硬化面などもあったので調査には時間を要し、3月14日に終了した。

また11月24日には、調査区南西部に、現在の県道と並行する方向で道路状の遺構が見つかり、1月11日まで調査した。

ラジコンヘリによる空中写真撮影は、遺構調査の区切りにあわせて、2月9日に実施した。

なお、11月21日には現地説明会を実施した。

以上の多くの遺構を調査したのち、2月17日から、調査が終了した部分から旧石器時代の調査を開始した。この調査は3月30日まで続き、翌3月31日には撤収作業を行って当年度の調査は全て終了した。

平成17年度

この年度に調査したのは、県道南側の1区である。中央に現道があるため、この東側を1-1区、西側を1-2区として調査した。この両区では大きく分けて5面の調査を行っている。

調査は7月1日より開始し、即日重機による表土除去を1-1区から開始した。1-1区は12日には終了し、すぐに1-2区に移り、21日まで実施した。この面が第

1面となる。遺構確認作業は7日より開始し、溝、土坑、ピットなどの遺構を確認した。また、下層の状態を確認するためのトレンチ掘削を25日から8月8日まで行った。遺構の調査は8月8日から開始し、26日には終了、30日には高所作業車で全景写真を撮影、以後平面図の補足を行って第1面の調査は終了した。この面で注目されるのは1-1区北東部に見られる2本の平行する溝(3・4号溝)で、道路跡の可能性が考えられた。

第2面までは薄いため、人力で掘り下げ、作業は8月31日から開始した。1-1区では第2面は南半部のみにあるが、畝の畝間痕が見つかり、その面で掘り広げた。掘り広げる作業は9月12日には終了し、13日には精査を行い、14日には全景写真を撮影し、その後測量を行った。1-2区では22日まで掘り下げ作業を行い、畝間痕はなかったが、4基の土坑を見つけた。土坑は遺構確認作業と並行して調査し、26日には全景写真を撮影、その後測量を行ってこの面の調査を終了した。

第3面までは深いので重機を使用することとし、第2面の調査を先に終了した1-1区から、9月20日に掘り下げを開始した。掘り下げは26日に終了し、翌27日から1-1区の遺構確認を行った。重機は1-2区に移動し、28日から10月4日まで掘り下げを実施した。この区の遺構確認は9月30日から開始した。この第3面では1-1区、1-2区とも畝の畝間痕を広い範囲で確認し、10月21日に空撮を実施した。その後補足調査を行い、25日にこの面の調査は終了した。なお、1-1区北西部で、第1面で見つかった道路跡に平行する溝(17号溝)が見つかり、道幅の変遷があったのではないかと考えられたため、その部分については個別に調査を行った。

第4面までの掘り下げも重機を使用した。10月24日から1-2区で開始し、28日に1-1区に移り、11月4日まで続けた。この面では両区で水田面が見つかったため、11日に航空測量を行い、実測作業時間の短縮を図った。その後水田面の断ち割り調査を行い、25日にこの面の調査を終了した。

最終面となる第5面までの掘り下げも重機を使用し、28日から1-1区で開始した。12月1日に1-2区へ移動し、8日には終了した。遺構確認は28日から行い、土坑、ピットと弥生時代を中心とする土器片が数多く出土した。12月15日にこの面の全景写真を撮影し、この面の

調査を終了した。

第5面の終了に先立ち、1-1区の北東隅付近では北調査区からローム台地が続いていたため、ここについては12月2日から13日まで旧石器時代の調査を行ったが、遺構・遺物は出土しなかった。

その後19日から21日まで撤収作業を行い、現地における発掘調査は終了した。

3 遺構名称の改訂

整理作業に伴って、一部の遺構について名称改訂や認定解除をした。また、南調査区の調査面の名称も、わかりやすい名称に改めた。それらについては下表の通りである。

第1表 遺跡名称の改訂

調査時の名称	改訂した名称
1号方形周溝墓	1号周溝墓
2号方形周溝墓	2号周溝墓
3号方形周溝墓	3号周溝墓
4号方形周溝墓	4号周溝墓
5号方形周溝墓	5号周溝墓
6号方形周溝墓	6号周溝墓
2号住居	1号竪穴状遺構と併せる
8号住居	4号住居と併せる
2～11・14号集石	攪乱と考えられるため欠番
12号集石	1号井戸
10号土坑の一部	11号土坑
55号土坑	13号土坑墓
70号土坑	5号井戸
75号土坑	74号土坑と併せる
94～96号土坑	攪乱と考えられるため欠番
206号ピット	1号ピット
212～279号ピット	2～69号ピット
(1区)第1面-II	第2面
(1区)第2面-I	第3面
(1区)第2面-II	第4面
(1区)第2面-III	第5面

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

道原遺跡は群馬県太田市只上町にある。太田市街の北東、東武伊勢崎線太田駅からは5.5km離れている。本遺跡は北関東自動車道に関わる遺跡の中では最東端に当たり、北東側には渡良瀬川が流れ、その対岸は栃木県足利市となる。遺跡の南西3.5kmには太田市のシンボルである金山(標高235.8m)が聳えている。

本遺跡の立地する金山北東部一帯の自然地形は、北東方向に足尾山地が連なり、南西方向には金山・八王子丘陵がのび、その間隙を、渡良瀬川が北西から南東に向かって流れている。遺跡は、この渡良瀬川が形成した扇状地上か、葦川台地(本遺跡の部分は市場台地ともいう)と呼ばれる台地上にあると推定される。渡良瀬扇状地は、桐生市赤岩橋付近(標高120m)を扇頂部とし、太田市下小林から足利市御厨地区(標高30m)にかけてを扇端部にする、南北18km、東西7.5kmに及ぶ大規模なものであり、『太田市史 通史編 自然』(1996 太田市)の澤口宏「第6節平野の地形・地質」によれば、Ⅰ～Ⅲ面に区分されている。それぞれの面は幅が狭く、現流路に沿って北西―南東に細長く分布していて、最古期のⅠ面は最も丘陵側にあり、以下東の現渡良瀬川に向かってⅡ面、Ⅲ面が並んでいる。各面の年代は、Ⅰ面がAs-BP降下以前に遡り、Ⅱ面は洪積末の再堆積ローム、Ⅲ面については完新世の所産とされている。葦川台地は澤口宏前掲文献によれば、大間々扇状地の岩宿面に相当するとのことである。本遺跡周辺はこの扇状地と葦川台地、渡良瀬川の旧河道などが複雑に入り組んだ場所にあるが、北調査区の土層を観察した結果、葦川台地上にあることが確実となった。葦川台地は形成年代が不明確で、渡良瀬川の流路変遷や扇状地の形成史にも不明な点があるので、ロームに含まれる火山灰の分析を行い、第4章第1節にその分析結果を掲載した。それによれば、本遺跡では約4.5万年前よりも遡ると推定されている赤城鹿沼テフラ(Ag-KP)を含む砂層の上にロームが堆積し、その最も下位には榛名箱田テフラ(Hr-HA：約3万年前)が含まれていることが判

明し、地形発達史の再検討に一つの資料を提供することができた。

遺跡周辺は宅地や畑地などの開発によって、現状では平坦な地形が広がるように見えるが、詳細に見ると、調査地の北側には旧河道があり、南側には矢場川が流れているなど、本来は複雑な地形の中にあつたことが分かる。調査範囲内の現地表面の標高は、南北の調査区の間にある県道付近が最も高く、約48.0mである。北調査区はほとんど平坦であり、南調査区は南西方向の矢場川に向かって下がる地形となり、南端付近で約46.0mである。

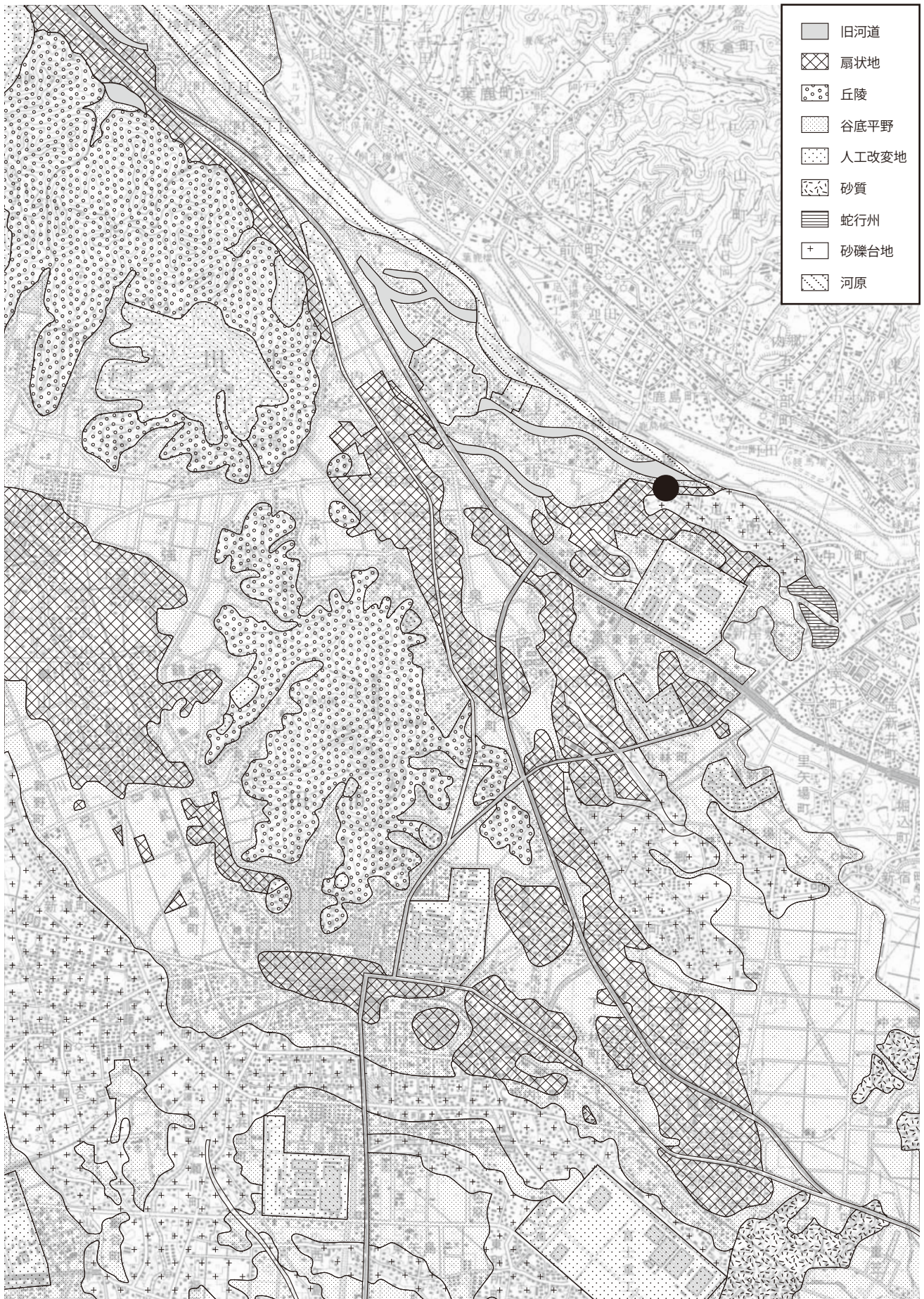
第2節 歴史的環境

本遺跡を中心とした太田市北東部の地域は、数多くの遺跡があることで知られている。特に渡良瀬川流域から丘陵地まで、地形的に変化に富み、いろいろな種類の遺跡がみられることが特徴であると思われる。以下、現在は栃木県となる渡良瀬川左岸の遺跡も含め、本遺跡周辺の歴史的環境を述べることにする。

旧石器時代

本地域における旧石器時代の遺跡は、これまでさほど多く調査されていなかったが、近年調査例が増加している。渡良瀬川扇状地上では、東長岡戸井口遺跡(118、○内の数字は第5図の遺跡番号。以下同じ。)や焼山南遺跡(112)などがある。前者は石刃と石刃製ナイフ型石器を伴う大規模な石刃石器群で、この地域の考古旧石器時代後半期を代表する遺跡である。北関東自動車道に関連する調査では、矢部遺跡(5)と、八ヶ入遺跡(46)がある。前者では礫層上面からチャート製の剥片が出土し、後者ではAs-YP下から湧別技法による細石刃石器群を中心に、1,665点の石器・礫が出土している。

また、本遺跡からはやや離れるが、金山丘陵北の地域では、やはり北関東自動車道関連で峯山遺跡が調査され、AT下層の暗色帯からチャート製の石器群が、As-BP中・上部から黒曜石製の切出形ナイフ形石器を組成する石器群が出土している。



第4図 道原遺跡周辺地形分類図

(地形分類は群馬県『土地分類基本調査・深谷』(1991)、『同・桐生及足利』(1997)による。

国土地理院5万分の1地形図「深谷」(平成10年9月1日発行)、『桐生及足利』(平成11年6月1日発行)使用)

渡良瀬川左岸の地域には旧石器時代の遺跡は少なく、平石遺跡(185)からチャート製の石器が出土している程度である。

本遺跡ではこの時期の遺物は出土していない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は渡良瀬扇状地 I 面に多く、下宿遺跡(83)や細田遺跡(114)、東長岡戸井口遺跡(118)などがあるが、より東側の地域には少ない傾向が指摘されている。これは東に行くに従って、渡良瀬川の氾濫層が厚く堆積しているためと考えられる。

北関東自動車道関連の調査ではこの時代の遺構・遺物が多く確認されている。大道東遺跡(43)では、中期後半から後期前葉の住居12軒、土坑93基を調査したほか、多数の土器、石器、石製品が出土している。楽前遺跡(42)でも、大道東遺跡に近い調査区で、集落の続きと思われる住居2軒などを調査している。その南東に近接する東今泉鹿島遺跡(45)では、前期の土坑4基と早期から晩期に至る土器多数が包含層から出土している。さらに東をみると、矢部遺跡(5)では土坑数基がみられる。

渡良瀬川左岸では前期までの遺跡が多く、宿居館跡(187)で撚糸文系の土器や前期の土坑が、平石遺跡(185)でも撚糸文系土器を含む草創期から前期の遺物が出土しており、春日遺跡(182)では前期の集落が調査されている。中期以降になると遺跡は減少し、遺構もほとんど見つかっていない。この地域では、縄文時代中期以降、古墳時代前期に至るまで遺跡が少なく、居住活動はあまり活発ではなかったものと考えられる。

本遺跡では中期の住居4軒と土坑13基、中期から後期にかけての土器多数が出土している。

弥生時代

周辺地域では弥生時代の遺跡はきわめて少なく、金山東方の磯之宮遺跡(91)で中期の住居が調査されているほかは、いくつかの遺跡で土器片の散布がみられるのみである。北関東自動車道関連の遺跡でも同様な状況であるが、大道西遺跡(41)で中期前半を中心とした土器片が出土し、中には再葬墓の存在を窺わせるものがあることが特筆されよう。

渡良瀬川左岸でもこの時代の遺跡は少なく、立岩古墳群(168)、大前西山遺跡(193)などで遺物の散布がみられる程度である。

本遺跡でも住居跡などの明確な遺構は見られなかったが、南調査区を中心として土器片が出土し、4基の土坑が弥生時代に属する可能性が強いものと考えられる。

古墳時代

まず集落の動向からみていくが、前期の集落は少なく、調査例はさほど多くない。本遺跡周辺では、丸山北遺跡(26)、金山東方の駒形遺跡(90)、磯之宮遺跡(91)、矢場向遺跡(138)、駒形南遺跡(141)、南に4.5km離れた下小林上遺跡(129)で調査例がある。また、東今泉鹿島遺跡(45)で前期末から中期初頭の住居11軒が調査されている。本遺跡では前期の住居2軒を調査している。

中期から後期になると集落遺跡が増え、北関東自動車道関連の遺跡でも、八ヶ入遺跡(46)、大道西遺跡(41)、大道東遺跡(43)、楽前遺跡(42)、東今泉鹿島遺跡(45)、向矢部遺跡(14)、新島遺跡(3)などで住居が調査されているが、本遺跡ではこの時期の住居はみられない。

後期になると特徴的なのは、金山丘陵北東部を中心とした地域で、須恵器生産が開始されることである。開始年代は表採資料によれば6世紀前半であるが、大規模に生産されるようになるのは6世紀中頃以降で、以後一大生産地に発展する。7世紀末から8世紀初頭になると丘陵西側に移動しながら生産を続ける。また、八王子丘陵にある萩原窯跡(第5図の範囲外)では7世紀末に太田市寺井廃寺の所用瓦の生産を開始するし、埴輪の生産も母衣埴輪窯跡(71)、金井口埴輪窯跡(72)等で行われるなど、窯業生産が盛んな地域と言える。

その他の生産遺跡では、鉄生産が7世紀末から峯山遺跡(第5図の範囲外)で開始され、以後多くの遺跡が見られるようになり、金山丘陵と、その西側の一帯は鉄の一大生産地となる。以上のように金山丘陵とその周辺の地域は、古墳時代後期以降、須恵器・瓦・埴輪・鉄などを生産する、一大工業地帯となっていくのである。

また、この地域では、古墳時代の水田跡の調査例はこれまでほとんど知られていなかったが、本遺跡では南調査区で水田跡を調査している。

古墳は、大型のものは本遺跡周辺には少ないが、南東に4～5km程度離れて、前期の前方後方墳として著名な藤本観音山古墳(151、全長117.8m)、前方後円墳の矢場薬師塚古墳(145、全長80m)があり、南に約5km離れて中期の天神山古墳(第5図の範囲外)、女体山古墳(第5



第5図 道原遺跡周辺の遺跡

(国土地理院2万5千分の1地形図「桐生」(平成14年5月1日発行)、「上野境」(平成14年12月1日発行)、「足利北部」(平成15年1月1日発行)、「足利南部」(平成14年9月1日発行)を縮小して使用)

第2章 遺跡の位置と環境

第2表 道原遺跡周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・島■遺物のみ△													備考	文献				
			縄文					弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世						
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前							中	後		
1	道原遺跡					○				△		●	■		●		○	○	○	縄文中期集落 古墳前期周溝墓・後期古墳 平安時代道路(西側が今回の調査区)	本書
2	国済寺城跡(道原城跡)																	○		16世紀 堀 土居	60
3	新島遺跡																	○		奈良平安集落 古墳後期～平安島	49
4	只上深町遺跡																	○■	■	平安集落・島	29・46・47
5	矢部遺跡					○	○									○	○		○	縄文中～後期土坑 奈良平安集落 漆紙文書出土	28・29・37・43・46・47・49
6	市場古墳群																			後期群集墳	1
7	八幡林遺跡												△							古墳遺物散布	44
8	市場城跡																	○		二重堀 土居 16世紀	60
9	市場稲荷山古墳																			後期円墳 径32m 6世紀前半	1
10	高瀬前原遺跡					△														縄文遺物散布	44
11	高瀬台遺跡					△														縄文遺物散布	44
12	源氏屋敷跡																		○	源氏屋敷の字名 遺構不明	62・63
13	猿楽遺跡																			後期古墳群 奈良平安集落	1・38・42
14	向矢部遺跡																		○	古墳後期～平安集落	32・33・34・35・50
15	矢部城跡																		○	16世紀 堀 土居 碑	60
16	只上の砦跡																		○	16世紀 堀	60
17	七日市古墳群																			古墳後期	44
18	丸山古墳群																			6世紀末～7世紀前半前方後円墳 1基 円墳 8基	1
19	流作場遺跡																			古墳中後期集落 埴輪棺	1・22
20	吉祥寺遺跡																			時期不明ピット群	22
21	諏訪古墳																			後期円墳	44
22	反丸遺跡																			古墳後期集落 古墳 祭祀遺構	1・22・53
23	原宿川向遺跡																			古墳遺物散布	44
24	落内遺跡																			古墳後期・奈良集落	1・25
25	宮の上遺跡																			古墳遺物散布	25
26	丸山北遺跡																			古墳前期集落	24
27	丸山の砦跡																			16世紀 腰郭 烽火台	60
28	丸山遺跡																			弥生・古墳遺物散布	44
29	丸山腰巻遺跡																			須恵窯 1基	36
30	小丸山遺跡																			縄文～平安遺物散布 瓦塔出土	1
31	二の宮遺跡					○														縄文前期集落 奈良平安集落	53
32	古水条里制水田跡																			As-B下水田	1・53
33	寺中遺跡																			平安鍛冶遺構	1
34	寺前遺跡																			古墳集落	16
35	上宿遺跡																			古墳・平安集落	38
36	東田遺跡																			平安集落	27
37	矢田堀前田遺跡																			時期不明土坑等	25
38	矢田堀館跡																			16世紀 堀 土居 戸口	60
39	矢田堀古墳群																			終末期群集墳	44
40	巖穴山古墳																			1辺30m方墳 複式構造横穴式石室 7世紀中葉	1・21
41	大道西遺跡																			東山道駅路 馬形埴輪出土	23・54
42	楽前遺跡																			縄文中期～後期集落 古墳後期～平安集落	1・25・26・27・30・31・52
43	大道東遺跡																			縄文中期～後期集落 古墳後期～平安集落 東山道駅路	1・55
44	鹿島浦遺跡																			奈良平安集落 東山道駅路	56
45	東今泉鹿島遺跡					○														縄文前期土坑 古墳前期末～平安集落 漆紙文書出土	51
46	八ヶ入遺跡	△																		古墳中期・奈良平安集落 東山道駅路	57
47	菅ノ沢Ⅱ遺跡																			灰原 須恵器出土	21
48	菅ノ沢御廟古墳																			直径30m円墳 横穴式石室	1
49	今泉口八幡山古墳																			前方後円墳 横穴式石室 家形石棺 6世紀末～7世紀初	1・16
50	菅ノ沢古墳群																			円墳 5 7世紀	1・21
51	八ヶ入窯跡																			灰原 須恵器・鉄滓出土	44
52	諏訪ヶ入遺跡																			灰原 須恵器出土	44
53	菅ノ沢Ⅰ遺跡																			須恵窯 炭窯 製鉄炉 古墳	1・3・6・21
54	菅ノ沢Ⅲ遺跡																			生産遺跡	44
55	川西遺跡																			須恵窯	44
56	八幡Ⅰ遺跡																			須恵窯 4基 灰原	20

第3表 道原遺跡周辺遺跡一覽表(2)

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・畠■遺物のみ△														備考	文献			
			縄文						弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世					
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中							後		
57	八幡IV遺跡													◆					窯 灰原	20	
58	八幡II遺跡													◆					窯2基 灰原	20	
59	八幡V遺跡													◆●					窯 灰原 円墳1基	20	
60	八幡III遺跡													◆					窯1基 灰原	20	
61	狸ヶ入II遺跡													△					灰原 須恵器出土	44	
62	辻小屋遺跡													◆					須恵窯4基	1	
63	辻小屋窯跡群													◆					須恵窯4基	20	
64	大長谷遺跡														◆				須恵窯	19	
65	狸ヶ入I遺跡													◆					窯1基	44	
66	狸ヶ入館跡																	○	堀 土居 戸口	60	
67	今泉城跡																	○	16世紀 堀 土居	60	
68	入宿II遺跡													△					灰原	20	
69	入宿I遺跡													△					灰原	20	
70	入宿III遺跡													△					灰原 須恵器出土	20	
71	母衣埴輪窯跡													◆					埴輪窯	1	
72	金井口埴輪窯跡													◆					埴輪窯3基以上	1	
73	聖天沢遺跡													●				●	円墳 横穴式石室 中世墓	5	
74	丸屋敷の砦																	○			
75	西山古墳群													●					終末期群集墳	1	
76	金井口古墳群												●							44	
77	東金井城跡																	○	15・16世紀 堀 土居 戸口 腰郭	60	
78	亀山古墳群													●					後期群集墳	1	
79	亀山京塚古墳													●					後期円墳 陶棺 6世紀中	1	
80	亀山窯跡													◆					須恵窯2基 灰原	1	
81	金井口遺跡	△			△									◆	◆				埴輪窯2基 製鉄窯1基	9	
82	宿裏遺跡												△					△	古墳・平安遺物散布	11	
83	下宿遺跡		○								○							○	縄文草創期土坑 古墳前期・平安集落 中世溝	10・12・13	
84	正郷遺跡												△						古墳遺物散布	44	
85	富田館跡																	○	16世紀 堀 土居 戸口	60	
86	堂目木遺跡																	◆	●	10世紀小鍛冶 中世火葬墓	26
87	宗金寺環濠遺構																	○	16世紀 2重の堀	60	
88	相方遺跡																	△	平安遺物散布地	1	
89	植木野城跡																	○	16世紀 堀 土居 戸口	44	
90	駒形遺跡								○	○		○							古墳前期～中期集落	1・24	
91	磯之宮遺跡								○	○								○	弥生中期・古墳前期・平安集落	1・25	
92	上小林稲荷山古墳												●						中期円墳 径60m	1・25	
93	八坂神社古墳												●							44	
94	西浦遺跡									○								○●●	平安集落 中世墓坑	25	
95	安良岡古墳群																	●	後期群集墳	1	
96	塚本遺跡												○						古墳集落	41	
97	原店遺跡												△						古墳遺物散布	44	
98	塩ノ山遺跡												●						円墳1基	1	
99	焼山北遺跡 焼山北古墳	△	△						△				●△						旧石器～古墳遺物包蔵地 後期円墳または帆立貝式古墳	1・2	
100	内並木古墳群													●					円墳3基現存	1	
101	内並木遺跡	△											△	△					旧石器包蔵地 灰原 須恵器出土	1	
102	馬塚古墳群													●					後期群集墳	1	
103	寺ヶ入遺跡 寺ヶ入古墳群													●					円墳約30基現存	1・14	
104	富士山古墳群												●							44	
105	東山古墳群													●					終末期群集墳	1	
106	金山城跡																	○	1469年築城 石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸等	15・17・18	
107	高山古墳													●					後期前方後円墳	1	
108	本陣跡																	○	礎石建物 土坑	39	
109	宮内遺跡		△							○		○						○	古墳前期～後期・平安集落	40	
110	浜町古墳群													●					後期群集墳	1	
111	北田環濠遺構群																	○	堀 二つの環濠	60	
112	焼山南遺跡 焼山古墳	△			△				△	△			●△					△	旧石器～平安遺物包蔵地 後期前方後円墳	1・2	
113	焼山古墳群												●						前方後円墳1基(焼山古墳) 円墳6基以上	1・2	

第2章 遺跡の位置と環境

第4表 道原遺跡周辺遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・畠■遺物のみ△														備考	文献				
			縄文							弥生		古墳		奈良	平安	中世			近世			
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後									
114	細田遺跡	△			○									●				○			旧石器包蔵地 古墳前期方形周溝墓 縄文前期・平安集落	7・8
115	伊豆ノ山遺跡	△																			旧石器包蔵地	1
116	安良岡遺跡											△									古墳遺物散布	44
117	星ノ宮遺跡											△									古墳遺物散布	44
118	東長岡戸井口遺跡	△	○															○			縄文・古墳中期～平安集落 中世館跡	48
119	東長岡I遺跡				△							△									縄文・古墳散布地	44
120	東長岡金井町遺跡		○										○								縄文土坑 古墳前期溝 奈良集落	1
121	旧太田工業高校北裏遺跡												○								古墳中期集落	4
122	溝所遺跡											△									古墳遺物散布	44
123	新堀遺跡											△									古墳遺物散布	44
124	石原二ツ山古墳													●								44
125	雷遺跡		△																		縄文遺物包蔵地	59
126	大日山古墳														●						35×41mの円墳 礫礫 6世紀初	1
127	大日山古墳群													●								44
128	下小林館跡(大倉城)																	○			15・16世紀 堀 土居 戸口	60
129	下小林上遺跡				○								○								縄文前期・古墳前期集落	59
130	清水田遺跡				○													○			古墳～平安集落	1・58
131	清水田II遺跡																	○	○	○	古墳～平安集落	1
132	登戸遺跡											△									古墳遺物散布	44
133	本矢場城跡																	○			堀 土居 戸口 16世紀	60
134	相場観音経塚																			●	一字一石経塚 江戸中期か	44
135	矢場寄合遺跡												△		○	△					古墳後期集落	1
136	稲荷宮遺跡																	○			平安集落	24
137	矢場氏累代の墓																		●		五輪塔・宝篋印塔等の墓石群 永禄5年等の銘あり	44・45
138	矢場向遺跡													○				○			古墳前期・平安集落	1・24
139	芋の森遺跡				△												△				縄文・弥生土器・土師器・須恵器散布	1
140	里矢場温井遺跡																				土師器・須恵器散布	1・62
141	駒形南遺跡													○		○	○				古墳前期・後期・奈良集落	1
142	里矢場上屋敷館跡																		○		中世館跡 土塁現存	62
143	丹波倉遺跡 杉原遺跡												△	△		△				△	古墳中期土師器出土	1・62
144	矢場川古墳群																				約90基存在したか 現存数基	1・62
145	矢場薬師塚古墳													●							前期前方後円墳 全長80m 4世紀代か	1
146	鶴巻山古墳													●							前期前方後方墳 全長43m 4世紀後半	1
147	上宿古墳(勢至堂裏古墳)																				前方後円墳 6世紀前半か 全長45m	1・68
148	淵ノ上古墳																				後期前方後円墳 全長64m	1
149	矢場川城跡																	○			中世城郭 矢場国隆が築城か	62
150	新宿遺跡		△										△								土師器・須恵器・埴輪散布	62
151	藤本観音山古墳													●							前期前方後方墳 全長117.8m 4世紀中葉か	77
152	堀込新田遺跡																				土師器・須恵器散布	62
153	堀込宮前遺跡																	△			土師器散布	62
154	大將陣跡																		○		伝源義家陣跡 遺構・遺物なし	62
155	南大町遺跡													●		○	○				古墳後期・古代集落 古墳前期方形周溝遺構確認	1・62・76
156	南大町古墳群																				現存なし 8基ほど存在したか	62
157	八幡山古墳群																				円墳71基現存 直刀・金環・切子玉・埴輪等出土	62・75・78
158	八幡山遺跡				△																縄文・弥生土器散布	62
159	八幡八幡宮																	○	○		神社跡 江戸後期社殿現存 土塁	62・74
160	神宮寺跡																		○		八幡八幡宮の別当寺院 現在は廃寺	62
161	古河堤跡																			○	近世渡良瀬川堤防	62
162	水道山・足利公園古墳群																				後期群集墳 16基以上存在か	64・65・66・67・68・78
163	緑町廃寺																		○		寺院跡 現在は宅地化	62
164	連信寺跡																		○		中世寺院跡	62
165	足利公園遺跡				△																縄文土器・石器散布	62
166	宝幢寺跡																		○		寺院跡 溝検出 近世瓦出土	62・65
167	立岩遺跡				△								△								縄文土器が主に散布	62
168	立岩古墳群																				円墳7基現存	62
169	吾妻古墳群																				円墳7基現存	62
170	東山古墳群																				円墳7基現存	62
171	物見古墳群																				円墳13基現存	62

第5表 道原遺跡周辺遺跡一覧表(4)

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・畠■遺物のみ△													備考	文献		
			縄文					弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世				
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前							中	後
172	中堀古墳群																	円墳1基現存	62
173	西山古墳群																	円墳1基現存	62
174	丹南藩五十部陣屋跡																○	近世岡田家陣屋跡	62
175	中山古墳群																	円墳3基現存	62
176	離山遺跡				△													縄文土器散布	62
177	山前駅遺跡																	土師器散布	62
178	鹿島薬師庵寺																○	寺跡 中世瓦・須恵器・板碑等出土	62
179	山下台遺跡																△	土師器・中近世土器散布	62
180	山下本郷館跡																○	中世館跡 堀・土塁現存	62
181	春日岡古墳群																	方墳1基・円墳7基現存	62
182	春日遺跡				○												○	縄文前期集落・古墳・古代鋳造炉等検出	70
183	山王遺跡				△												△	縄文・古墳～平安・中近世の遺物散布	62
184	智光寺跡																○	中世寺跡 基壇・礎石建物検出	71
185	平石遺跡	△	○															縄文草創期～前期遺物出土 摺糸文系土器多数	64・69・72・78
185	平石古墳群																	円墳3基現存	62
186	大平古墳群																	17基現存	62
187	宿居館跡				△	○	△	△	△								○	縄文前期土坑 摺糸文系土器 中世後半居館跡	73
188	宿古墳群																	円墳2基現存	62
189	大前堀之内館跡																○	中世館跡 小此木備中守の居館か	79
190	東台遺跡					△												縄文土器・土師器・埴輪散布	62
191	台山遺跡					△												縄文土器散布	62
192	宇津木遺跡																○	奈良平安集落 中世堀検出	66
193	大前西山遺跡					△												縄文・弥生土器散布	69
194	大前坂遺跡					△												縄文土器散布	62
195	上山古墳群																	3基現存	62

参考文献

<p>1 太田市1996『太田市史 通史編 原始古代』</p> <p>2 はにわの会1968『埴山遺跡総合調査報告』</p> <p>3 日本考古学会1970『考古学雑誌』56巻3号</p> <p>4 太田市教育委員会1972『太田工業高等学校北東遺跡発掘調査報告書』</p> <p>5 太田市教育委員会1972『聖天沢遺跡調査報告書』</p> <p>6 駒沢大学考古学研究会1978『管ノ沢遺跡・巖六山古墳調査概報』</p> <p>7 太田市教育委員会1978『細田遺跡発掘調査概報』</p> <p>8 太田市教育委員会1979『細田遺跡発掘調査略報Ⅱ』</p> <p>9 太田市教育委員会1979『金井口遺跡発掘調査略報-第2次調査-』</p> <p>10 太田市教育委員会1985『下宿遺跡発掘調査概報』</p> <p>11 太田市教育委員会1986『下宿遺跡-宿裏地区-』</p> <p>12 太田市教育委員会1987『下宿遺跡E地点』</p> <p>13 太田市教育委員会1988『下宿遺跡F地点』</p> <p>14 太田市教育委員会1992『寺ヶ入遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』</p> <p>15 太田市教育委員会1994『金山城跡大手道発掘調査』H6年3月</p> <p>16 太田市教育委員会1997『今泉口八幡山古墳発掘調査報告書』</p> <p>17 太田市教育委員会1997『金山城跡・月ノ池』</p> <p>18 太田市教育委員会2001『史跡金山山城跡環境整備報告書発掘調査編』</p> <p>19 太田市教育委員会2002『長手谷遺跡群発掘調査報告書』</p> <p>20 駒沢大学考古学研究会2007『群馬・金山丘陵遺跡群Ⅰ』</p> <p>21 駒沢大学考古学研究会2009『群馬・金山丘陵遺跡群Ⅱ』</p> <p>22 群馬県教育委員会1983『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>23 群馬県教育委員会1984『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>24 太田市教育委員会1985『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>25 太田市教育委員会1986『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>26 太田市教育委員会1987『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>27 太田市教育委員会1988『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>28 太田市教育委員会1989 3月28日『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>29 太田市教育委員会1989 3月31日『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>30 太田市教育委員会1988『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』</p> <p>31 太田市教育委員会1994『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-菜前遺跡-』</p> <p>32 太田市教育委員会1996『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅱ次農政分)-』</p> <p>33 太田市教育委員会1996『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅱ次文化庁分)-』</p> <p>34 太田市教育委員会1997『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅲ次農政分)-』</p> <p>35 太田市教育委員会1997『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅲ次文化庁分)-』</p> <p>36 太田市教育委員会2000『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-丸山腰巻遺跡-』</p> <p>37 太田市教育委員会1993『市内遺跡Ⅺ』</p> <p>38 太田市教育委員会1997『市内遺跡ⅩⅢ』</p>	<p>39 太田市教育委員会2003『市内遺跡ⅩⅨ』</p> <p>40 太田市教育委員会2005『市内遺跡21(第Ⅱ次)』</p> <p>41 太田市教育委員会1992『埋蔵文化財発掘調査年報2』</p> <p>42 太田市教育委員会1993『埋蔵文化財発掘調査年報3』</p> <p>43 太田市教育委員会1994『埋蔵文化財発掘調査年報4』</p> <p>44 太田市教育委員会2006『太田市の遺跡地図』</p> <p>45 太田市H P 太田の文化財恵林寺矢場氏墓石群</p> <p>46 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『年報24』</p> <p>47 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『年報25』</p> <p>48 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『東長岡戸井口遺跡』</p> <p>49 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『矢部遺跡・新島遺跡』</p> <p>50 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『向矢部遺跡』</p> <p>51 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『東今泉鹿島遺跡』</p> <p>52 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『菜前遺跡(1)』 2010『菜前遺跡(2)』</p> <p>53 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『古水条里水田跡・二の宮遺跡』</p> <p>54 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『大道西遺跡』</p> <p>55 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『大道東遺跡(1)』 2010『大道東遺跡(2)』 2010『大道東遺跡(3)』</p> <p>56 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『鹿島浦遺跡』</p> <p>57 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『八ヶ入遺跡Ⅰ』 2010『八ヶ入遺跡Ⅱ』</p> <p>58 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『太田東部遺跡群』</p> <p>59 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1980『庚塚・上・雷遺跡』</p> <p>60 群馬県教育委員会1989『群馬県の中世城館跡』</p> <p>61 群馬県文化財情報システムWEB版</p> <p>62 足利市教育委員会1988『足利市遺跡地図』</p> <p>63 足利市教育委員会1989『昭和62年度埋蔵文化財発掘調査年報』</p> <p>64 足利市教育委員会1992『平成2年度埋蔵文化財発掘調査年報』</p> <p>65 足利市教育委員会1993『平成3年度埋蔵文化財発掘調査年報』</p> <p>66 足利市教育委員会1994『平成4年度埋蔵文化財発掘調査年報』</p> <p>67 足利市教育委員会1995『平成5年度埋蔵文化財発掘調査年報』</p> <p>68 足利市教育委員会1996『平成6年度埋蔵文化財発掘調査年報』</p> <p>69 足利市教育委員会1998『平成8年度文化財保護年報』</p> <p>70 足利市教育委員会1977『春日遺跡第1次発掘調査報告書』</p> <p>71 足利市教育委員会2000『智光寺跡第2次発掘調査報告書』</p> <p>72 毛野古文化研究所1973『平石遺跡』</p> <p>73 足利市教育委員会2001『宿居館跡発掘調査報告書』</p> <p>74 足利市教育委員会1983『八幡八幡宮土塁発掘調査報告書』</p> <p>75 足利市教育委員会1986『八幡山古墳群山辺小学校裏第4号墳発掘調査報告書』</p> <p>76 足利市教育委員会1999『南大町遺跡第1次発掘調査報告書』</p> <p>77 足利市教育委員会2005『藤本観音山古墳発掘調査報告書Ⅰ』</p> <p>78 栃木県教育委員会1981『栃木県史資料編考古Ⅱ』</p> <p>79 栃木県教育委員会1982『栃木県の中世城館跡』</p>
--	--

図の範囲外)などがある。金山北東地域で大規模なものとしては、6世紀末～7世紀初頭の、長さ約50mの前方後円墳である今泉口八幡山古墳(49)があり、横穴式石室の中に家形石棺の存在が確認されている。その近くには径約30mの円墳である菅ノ沢御廟古墳(48)があり、そのすぐ東側の平地部に下りたところには、一辺約30mの巖穴山古墳(40)がある。築造時期は7世紀中頃と推定され、東毛地域随一の終末期方墳として有名である。

後期の群集墳はこの地域にも数多く存在している。すぐ南東側には市場古墳群(6)があり、そのさらに南西には市場稲荷山古墳(9、径32mの円墳)がある。西には猿楽遺跡(13)、七日市古墳群(17)、丸山古墳群(18)などがあり、さらに離れて金山丘陵にかかる部分や渡良瀬川左岸の足利市域の丘陵部にも多くの古墳群が知られている。本遺跡では、この時期の古墳が2基調査されている。南東の市場古墳群とは、間に国済寺城跡(道原城跡、2)を挟むので、古墳分布が続いていることを確認できるわけではないが、地形的には連続するので、同一の古墳群である可能性も考えられる。

また、本遺跡では前期の周溝墓が6基(そのうちの1、2基は古墳の可能性もある)調査されているが、この地域では同時期の周溝墓は調査例が少ない。南西に3.5km離れた細田遺跡(114)、南東に2.5km離れた南大町遺跡(155)で方形周溝墓が確認されている程度であり、本遺跡の周溝墓は貴重な調査例となる。

奈良・平安時代

7世紀後半以降、律令制が確立していく中で、地方は国一評(のち郡)一里(古くは「五十戸」。のち郷)という行政組織に編成されていくことになった。本地域は、『和名抄』によれば「山田郡」に属し、隣郡の「新田郡」との境界はほぼ金山と八王子丘陵とを結んだ線と推定される。渡良瀬川左岸の地域は「下野国」であり、本地域は当時の国境地帯となる。これは古代の本地域を考える上で忘れてはならない要素の一つである。

ただし、本地域の属する「山田郡」という郡名の史料上の初見は8世紀末であり(ほかに「山田」という8世紀後半の文字瓦が存在するが、郡名かどうかは不明)、それ以前にどのような行政区画であったのかは、実は明確ではない。

山田郡の郡家は本遺跡の西約3.5kmにある「古氷」の地

であると推定されているので、本遺跡の西側一帯は古代山田郡の中心地域であったと考えられる。残念ながら郡家の存在を裏付ける直接の証拠は見つかっていないが、北関東自動車道関連の調査で奈良・平安時代の大集落が調査され(大道西遺跡(41)、大道東遺跡(43)、楽前遺跡(42)、鹿島浦遺跡(44)、東今泉鹿島遺跡(45)、向矢部遺跡(14)、矢部遺跡(5)などでこの時期の住居が数多く見つかっている)、また、東今泉鹿島遺跡や矢部遺跡で漆紙文書が出土していること、八ヶ入遺跡(46)で瓦や三彩陶器といった寺院の存在を示すような遺物が出土していることなどから、近傍に郡家がある可能性は高いといえよう。

さらにこの地域の古代を代表する遺跡としては、道路跡もあげられる。上野国東部では、伊勢崎市東部から太田市北西部にかけての地域で、東西に直線的のびる古代道路が2本見つかっている。このうち南側のものは「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれているもので、側溝心一線で測って約13mの規模をもっている。北側のものはそれよりもやや狭く、側溝心一線で測って約12mあり、「下新田ルート」と呼ばれている。どちらも遺物がほとんど出土しないので、使用年代の確定は困難であるが、7世紀後半から8世紀代のものと考えられている。牛堀・矢ノ原ルートは、さらに西側は高崎市や玉村町で見つかっている古代道路につながるものと思われ、これが東山道駅路であると推定される。下新田ルートは東に延長すると新田郡家である天良七堂遺跡を通り、逆の西に延長すると佐位郡家である伊勢崎市三軒屋遺跡の南を通過することになる。このため、郡家同士をつなぐ道である伝路ではないかという説や、牛堀・矢ノ原ルートが廃された後の東山道駅路ではないかという説がある。

牛堀・矢ノ原ルートと下新田ルートの2本の道路跡は、東へ延長すると本遺跡周辺のどこかを通過することになる。しかし、その間には金山丘陵と八王子丘陵があり、それをどこでどのように越えるかが問題となっていた。従来は、最も低くなる部分を通り、足利市中心部へと向かうルート、すなわち、現在の県道足利・伊勢崎線に重なるルートが最も妥当であると考えられていた。ところが、大道西遺跡(41)で側溝心一線で約13mの幅をもつ道路跡が見つかり、その後八ヶ入遺跡(46)、大道東遺跡(43)、鹿島浦遺跡(44)でも延長部が確認されて、約

1 kmもの間直線的に延びていることが判明した。想定されていたルートとは大きく異なる位置ではあるが、その規模から考えてこれが東山道駅路で、牛堀・矢ノ原ルート¹の東延長部である可能性が高まっている。ただし、このルートは発掘調査の結果、7世紀第3四半期から8世紀第1四半期の中に収まり、かなり早く廃絶していたことが判明している。とすれば、廃絶後のルートがどこを通過しているのかが次の問題となるが、『延喜式』に記される平安時代のルートになるまでにはまだいくつかの変遷が考えられる。本遺跡では平安時代の道路状遺構が見つかったが、ごく短い範囲であり、東山道駅路のような幹線道路となるかは明らかではない。

古墳時代から盛んになった須恵器・鉄の生産は、奈良時代になっても盛んに行われている。須恵器の生産は、金山丘陵西側の地域で7世紀末以降盛んとなる。また、やはり7世紀末くらいから八王子丘陵東側にも窯跡が増加し、萩原窯跡(第5図の範囲外)のほか、丸山腰巻遺跡(29)などで生産している。鉄生産は金山丘陵中に菅ノ沢I遺跡(53)、高太郎I・II遺跡(金山西側、第5図の範囲外)などがあるが、北関東自動車道関連の調査では、北西に約8 km離れた西野原遺跡(第5図の範囲外)で大規模な製鉄遺跡が見つかり、先述した峯山遺跡などと併せてこの地域で鉄が大規模に生産されていたことが判明してきている。

また、以上の多くの遺跡の存在を支えた水田跡は、古氷条里制水田跡(32)などで、浅間B軽石に埋もれた平安時代末のものが調査されている。本遺跡では同時期の水田は見つからないが、畠の耕作痕があり、当時の農業生産の一端を知ることができる。

中近世

本地域の中世については、金山城(106)と藪田御厨がよく知られている。

中世の荘園としては金山丘陵西側の新田荘が有名であるが、それに対し本遺跡のある金山の北東側には園田御厨があった。範囲については史料上に明記がないが、当地域は古代の「山田郡園田郷」であったと推定され、また、園田御厨の規模が200余丁と広いので、本遺跡も範囲内にあった可能性は残る。新田荘同様、12世紀中頃に立荘された御厨である。

金山城は本遺跡の南東に聳える金山(標高235.8m)に

築かれた山城である。中世の山城として遺存状態がいいことから昭和9年に国の史跡に指定されている。文明元(1469)年に岩松家純によって築城された。以後、享禄元(1528)年には岩松氏の重臣横瀬氏へ、さらに天正12(1584)年には後北条氏へと城主が変わっているが、その間東毛地区の中心的な城として重要な役割を果たし、難攻不落を誇っていたという。天正18(1590)年に後北条氏が滅亡した後は廃城となった。金山城の範囲は広大で、山頂部を中心にして、派生する尾根上に主要な曲輪を配している。発掘調査は平成4(1993)年度から行われ、その結果を受けて史跡整備が行われている。

その他、周辺地域には中世の城館跡が多く見られるが、これらもちろん金山城の存在に関連したものが多くであろう。本遺跡の東側には国済寺城跡(道原城跡・2)があり、その他、周辺には市場城跡(8)、矢部城跡(15)、只上の砦跡(16)、丸山の砦跡(27)、矢田堀館跡(38)、狸ヶ入館跡(66)、今泉城跡(67)、丸屋敷の砦(74)、東金井城跡(77)、富田館跡(85)、宗金寺環濠遺構(87)、植木野城跡(89)、北田環濠遺跡群(111)、下小林館跡(大倉城跡・128)などがあり、これらの多くの城館に囲まれた中に本遺跡がある。北関東自動車道関連の調査では、本遺跡以外にも中世の遺構が見つかったが、それらは金山丘陵北東部に多い傾向があるようである。

本遺跡では前述の堀の他、竪穴状遺構1基と土坑墓、土坑多数などが中世の遺構で、多数の遺物も出土しており、中世の集落の一部であったことがわかる。

徳川家康の関東入国(天正18・1590年)の際、遺跡のあった只上村は榊原館林藩十萬石の領地となる。以後幾多の変遷があるが、ここでは省略する。只上村には五つの集落があり、遺跡はそのうち「下屋敷上」の範囲に入るらしい。遺跡の南と北を分ける県道は古くからの道であり、それに平行する1号道路状遺構はその前身であったと思われる。遺構の方向はそれに大きく規制されている。遺跡内からは近世の陶磁器や寛永通宝が出土しており、本遺跡が近世の村落の中にあることを示している。

第3節 基本土層

基本土層は第6図に示す通りである。南調査区の1-1区と、北調査区の2区の土層柱状図を掲載したが、それを測量した地点は第3図に●印で示したとおりである。1-1区の大部分は低地であるため、後述するように洪水層などの堆積によって5面の遺構面があり、ここでは表土からその最下層までを示した。2区では表土を除去したのちの、遺構確認面以下の土層を作図した。これが本遺跡における縄文時代以前の標準的な堆積である。この土層に含まれるテフラなどについては、第4章第1節も参照していただきたい。

北調査区は台地上になるので、基本的に1面のみの調査であったが、一部縄文包含層(B地点基本土層の1層)やその上部の洪水層が残り、それらを除去して縄文時代の遺構の調査を行ったところがある。

南調査区は、1-1区北西隅のみは北調査区から続く台地であり、そこにはロームが堆積していたが、そこから南側は矢場川に向かって下がる地形となり、その斜面には何層もの堆積層が認められた。それらの層の中には複数の遺構面が確認できたため、それぞれについて調査を行った。それは以下の5面である。

第1面 A地点基本土層の5層である灰白色砂質土を取り除いた面。As-Bを含む、締まりのよい褐色土の面である。出土遺物から、中近世の面だと考えられる。

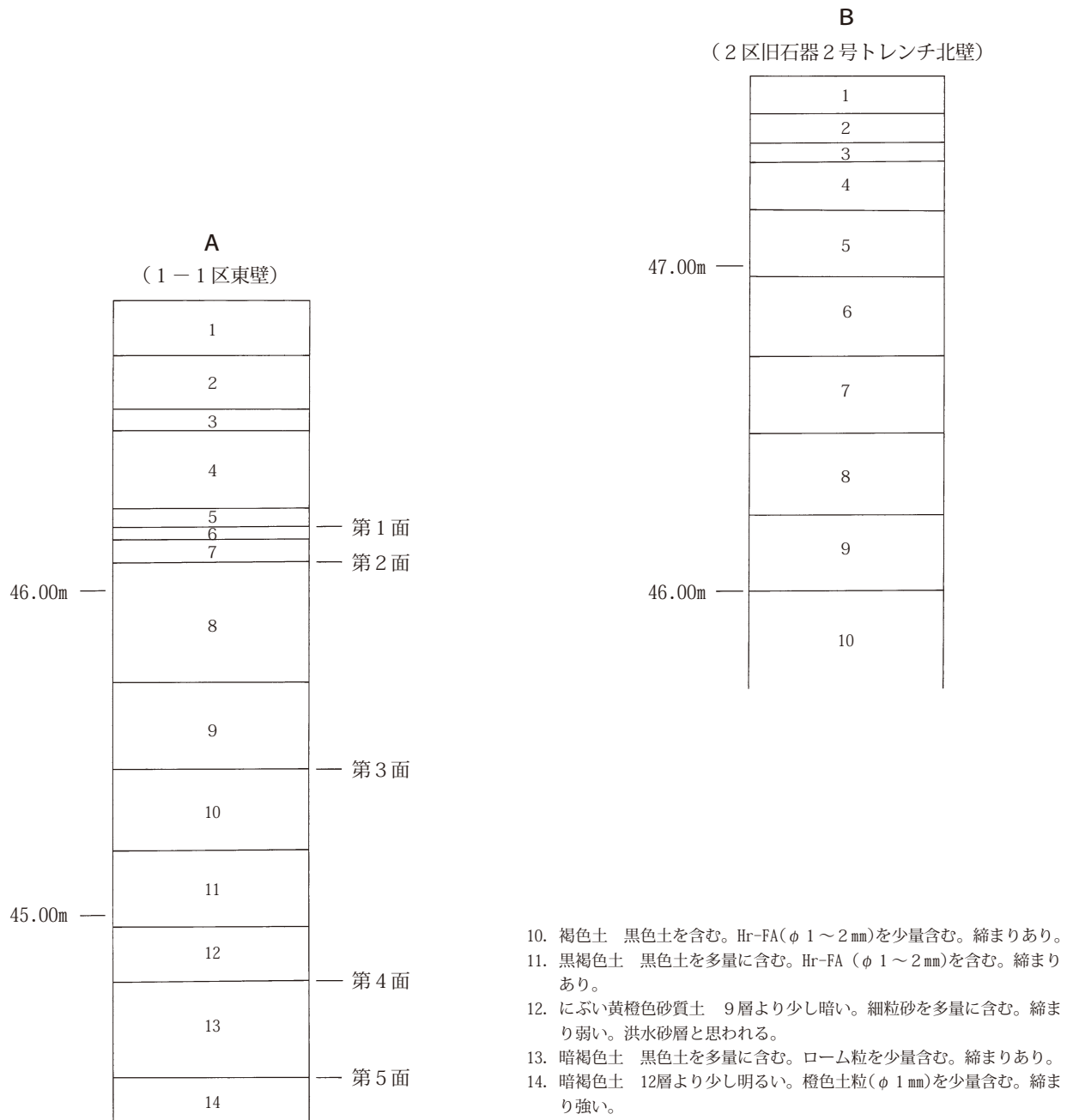
第2面 6・7層はAs-Bを含む層で、それを除去したところ1-1区では畝の畝間痕跡を、1-2区では土坑を確認したので、これを第2面として調査した。平安後期以降の面である。

第3面 9層は締まりの弱い砂質土で、これに対して10層は締まりのある土であったため、その間の層位で掘り広げたところ、1-1区、1-2区の両区で畝畝間痕跡が確認できたので、この面を第3面とした。10層はFAを含む層なので、この面の年代は古墳時代後期以降となるが、1-1区北西部では平安時代と思われる溝(17号溝)がこの面で見つかり、下限がその頃にまで下がることは確実である。

第4面 12層は洪水層と思われる層であり、1-1区ではその下面で小区画の古墳時代の水田を確認したの

で、この面を第4面とした。この面の直上からは古墳時代の土器も出土している。1-2区では12層がないので、13層に相当する層の上面で掘り広げたところ、水田痕跡を確認した。そのためこれを同じく第4面として調査したが、水田区画の大きさなどが異なるので、1-1区と1-2区の水田は時期が異なる可能性が高い。詳細は104ページ以下に述べたが、1-1区は5～6世紀頃の極小区画水田であり、1-2区はそれより時期が遡る、C混土を耕作土とした水田痕跡であると思われる。

第5面 13層を取り除いた面を第5面とした。トレンチ調査によればこの面より下層からは遺物が出土しないので、この面が最終面と判断した。この面では1-1区、1-2区両区で土坑・ピットが見つかり、この面の遺構は遺物を出土しないものも多く、所属年代を決めるのは難しい。13層からは縄文～古墳時代の土器が出土し、1-1区の土坑には古墳時代中期の遺物を出土するものもあるので、かなり広い時期差があるものと思われるが、13層上面の水田の時期が異なることに伴って、この面の年代も、1-1区は縄文～古墳時代中期、1-2区は縄文～古墳時代前期という範囲の中で理解すべきだと思われる。



A (1-1区東壁)

1. 褐灰色土 現代の盛土。
2. 灰黄褐色土 旧耕作土。
3. 明黄褐色土 鉄分の沈着が認められる。白色軽石粒(φ 1~3mm)を少量含む。締まりあり。
4. 黄褐色土 白色軽石粒を含む。橙色土粒(φ 1~2mm)を含む。締まりあり。
5. 灰白色砂質土 As-Bを含む。白色軽石粒を含む。締まり弱い。
6. 褐色土 As-Bを含む。白色軽石粒を含む。締まりあり。
7. 暗褐色土 As-Bを少量含む。白色軽石粒を少量含む。締まりあり。
8. 浅黄橙色砂質土 細粒砂を多量に含む。締まり弱い。洪水砂層と思われる。
9. にぶい黄橙色砂質土 細粒砂を多量に含む。締まり弱い。洪水砂層と思われる。

B (2区旧石器2号トレンチ北壁)

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。白色軽石粒を少量含む。締まり弱い。縄文包含層。
2. 暗褐色土 1層に似るが、1層より明るい。
3. 黄褐色土 ローム主体。As-YPを少量含む。締まりあり。
4. 黄褐色土 3層より明るい。As-ok1を含む。締まり強い。
5. 黄褐色土 3層より少し明るい。締まり強い。
6. 褐色土 As-BPを含む。締まり強い。
7. 暗褐色土 暗色帯。締まり弱い。
8. 暗褐色土 暗色帯下層。7層より少し明るい。橙色土粒を含む。締まり強い。
9. 黄褐色土 3層より暗い。砂質。締まり強い。
10. 黒褐色砂質土 砂層。Ag-KPをブロック状(φ 10~40mm)に含む。締まり強い。

第6図 基本土層

第3章 調査の成果

第1節 成果の概要

本遺跡で調査した遺構の総数は、竪穴住居7軒、竪穴状遺構1棟、古墳2基、周溝墓6基、土坑123基、土坑墓13基、火葬墓3基、集石7基、井戸6基、堀1条、溝19条(後述の道路状遺構側溝も含む)、水田1面、畠4面、道路状遺構2条などであり、多種多様なものが見られる。これらを以下時期別に報告するが、まずその概要をまとめておく。

旧石器時代

南調査区の1-1区北端付近と北調査区の全域にロームが残っていたため、旧石器時代の調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

縄文時代

竪穴住居4軒、土坑13基、ピット3基がこの時期のものと思われる。ピット2基を除いて北調査区にある。竪穴住居4軒は狭い範囲に集中している。なお、南調査区では最終面の第5面に土坑・ピットが見つかったが、出土した土器には縄文時代から古墳時代のものまでが混在しており、遺構の年代を確定するのは難しい。そのため、縄文時代の土器のみを出土するピット2基をこの時代のものとして認定した。

弥生時代

南調査区を中心として中期の遺構・遺物が出土しているが、遺構は土坑4基と少なく、この時期の遺跡の様相は不明確である。

古墳時代

竪穴住居2軒、古墳2基、周溝墓6基、土坑12基、水田1面、畠2面、溝4条、遺物集中部3ヶ所がこの時期の遺構と考えられる。

竪穴住居は2軒とも北調査区東端近くにあり、近接している。残りは悪いが、主軸方位もほぼ共通するようである。出土遺物から古墳時代前期のもので、周溝墓との関連が考えられる。調査区の東側にさらに集落が延びる可能性もある。

2基の古墳は北調査区の中央と西端近くにあり、東西に30m程離れて並んでいる。不整形な円墳で、周溝を含む直径が12～15mの小型の古墳である。2号古墳は残りが悪いが、1号古墳には横穴式石室の下部が残っていた。石室内部からは釘などが出土したが、それ以外の副葬品は見られなかった。いずれも埴輪は出土しておらず、明確な伴出遺物もないが、石室や古墳の形状から7世紀代のものと考えられる。

周溝墓は6基ですべて北調査区にある。平面形は方形2基(2・6号)、円形2基(4・5号)、やや不整な円形2基(1・3号)である。削平のため、いずれも周溝のみが残っている状態であった。方形の2基は出土遺物から4世紀後半、円形の2基は出土遺物が少ないがやはり4世紀後半のものと思われる。やや不整な円形の2基は出土遺物が少なく時期を確定できないが、1・2号古墳と平面形が共通しており、古墳である可能性もある。

北調査区にある2基の土坑のうち、そのうち86号土坑はごく浅い長方形の土坑であるが、確認面に多くの礫が見られ、礫床墓である可能性が考えられるものである。古墳時代のものとして扱った。

水田は南調査区の第4面で見つかったものであるが、1-1区と1-2区とでは形態が異なり、時期が異なる可能性が高い。おそらく、1-1区のものは古墳時代中期から後期初頭にかけての時期、1-2区のものはAs-C降下後の古墳時代前期のものと考えられる。4条の溝のうち2条は、この水田に関わるものであり、残りの2条は水田耕作土を除去して発見されたものである。また、遺物集中部3ヶ所は、この水田面を覆う土層の中で見つかった。水田に関わる何らかの祭祀行為が行われていたらしい。

畠は南調査区の第3面で調査したものである。FA混土上面で見つかったので古墳時代のものとして扱ったが、さらに新しくなる可能性も否定できない。耕作痕の状態で見られるもので、複数時期の畝間痕跡が重複している。また、第2面から第3面に掘り下げる過程で、一部で第3面よりも上層に畠の耕作痕跡を見つけている。第2面から第3面にかけては洪水起源の厚い層であり、

それは耕作と洪水とを繰り返して形成されたい。

平安時代

この時期の遺構は少なく、竪穴住居1軒、道路状遺構1条、畠1面があるのみである。

竪穴住居は北調査区南東にあり、9世紀後半のものである。北調査区には平安時代の遺構はこれのみしか存在しない。

道路状遺構は南調査区1-1区の北東端近くにある。この位置は北調査区から続くローム台地の南端に当たる。3条の溝が平行するので、それらが道路側溝である可能性が高いものと判断した。北側溝1条と、時期の違う南側溝2条であり、ある時期に道路幅が変更になったと思われる。道路幅は溝心一心で計測して、広い方が7.0～7.5m、狭い方が5.3～5.45mである。出土遺物から平安時代前期に機能していたものと思われ、とすると、道の規模から考えて、当時の幹線道路であった可能性があり、東山道駅路との関連が考えられる。

畠は南調査区第2面で見つかったもので、古墳時代のものと同様、耕作痕の状態である。耕作土にAs-Bを含むので、平安時代末以降のものである。

中・近世

遺構・遺物とも数多い。竪穴状遺構1棟、土坑墓13基、火葬墓3基、土坑93基、集石7基、井戸6基、堀1条、溝12条、道路状遺構1条、畠1面がこの時期に属する遺構だと思われる。それらのうち6基の土坑と、溝、畠のすべては南調査区にあるが、それ以外は北調査区にあり、この時代の遺構が北調査区を中心に分布していることが分かる。

竪穴状遺構は火の使用が見られず、竪穴住居とは思えないものである。遺物が少なく、時期を特定できないが、出土した北宋銭の種類から12世紀以降のものである。

その他の遺構で特に注目されるのは土坑墓と火葬墓である。これらの墓は北調査区南西の限られた範囲に集中し、この部分に中世の墓地が作られていたようである。出土遺物がないものも多いが、遺物は15世紀前半を中心とする時期のものであり、その前後の比較的短い期間に墓地が造営されたい。1号道路状遺構はそれらの土坑と重複しているので、その墓地造営期間中に短期間使われた道らしい。

土坑として調査したものは中世から近世までの広い時

期のものが含まれる。また、出土遺物がなく、時期を特定できないものもここで扱った。土坑の中には人骨が出土したものがある。それらは土坑墓の可能性があり、特に墓地の範囲内にあるものはその可能性がより強いと思われる。

集石という遺構は、確認面で石が集中していることからそのように名付けた遺構であるが、石が多く見られることの意味については、特に埋土や遺物などに特徴的なことは見られないので不明である。調査当時は18基を調査したが、整理の過程でそのうちの11基は近現代のものであると判断されたので、それ以外の7基について報告する。出土遺物から、いずれも近世のものである。

井戸は北調査区南西側に散在している。素堀の井戸で、井戸枠などは見られなかった。1号井戸は出土遺物が豊富であったが、これは上層に大量の石と遺物を投げ込んでいるためであり、その他の井戸は遺物が少なかった。3号、6号の2基は出土遺物から中世にまで遡る可能性があるが、それ以外は近世末以降に埋没したものと考えられ、使用されていた期間はそれに遡る時期と考えられる。

堀は、東に存在する道原城のものではないかと、調査当時は考えたものである。しかし、埋土の下層から「寛永通寶」と思われる鉄銭が出土していることから、埋没したのは18世紀中頃以降の可能性が強く、関連を考えるのは困難である。直線的なしっかりとした溝であり、水が流れた痕跡が見られないので、東側にある何らかの重要な施設の区画溝と思われるが、それ以上の性格は不明である。

畠は南調査区第1面に耕作痕として把握できるもので、特に1-2区に多く見られる。複数の時期が見られ、中世から近現代にわたりこの地が畠として耕作されてきたことを示すものと思われる。

また、北調査区の場所は近世に屋敷地として利用されていたようで、近世の陶磁器類が大量に出土した。1号井戸やいくつかの集石、土坑など、多く出土する遺構もあるが、大部分は近現代の攪乱からの出土であり、それらが近現代になってまとまって廃棄されたい。中には「元文一分金」があり注目されるが、これは北関東自動車道関連の調査では萩原遺跡に次いで2例目となる。

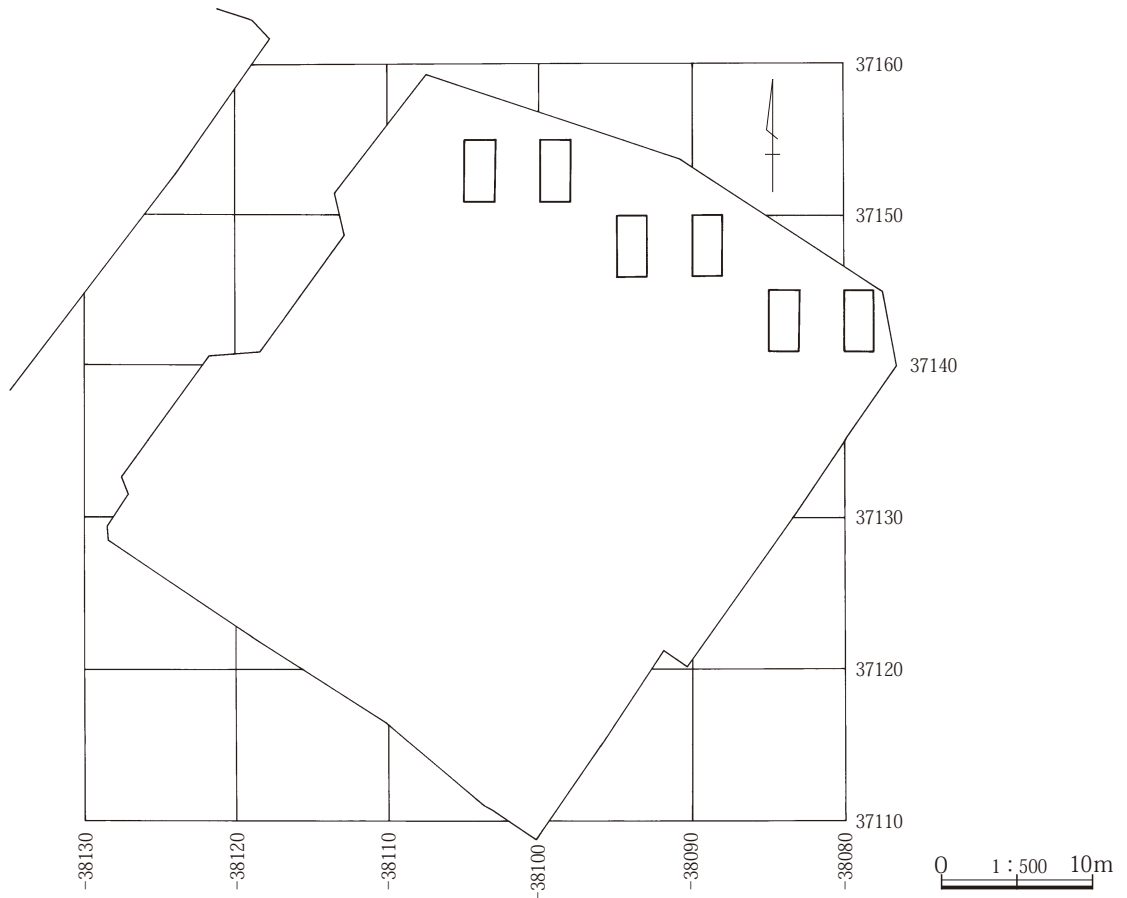
第2節 旧石器時代の調査

道原遺跡1区の北端付近と2～4区の全域、合計約6,000㎡には、比較的良好にロームが残っていたため、遺構の調査終了後に旧石器時代の調査を行った。調査は、2m×4mのトレンチを全域に設定(対象面積の5.9%相当)し(第7・8図)、その内部をジョレンなどを用いて慎重に掘り下げ、遺物等が出土すれば周囲を掘り広げるという方法で行った。各トレンチの間隔は、北調査区では10m間隔に等距離に配置し、全域を網羅する形で設定した。南調査区ではそれよりも狭い間隔で、ロームの残る部分に設定した。

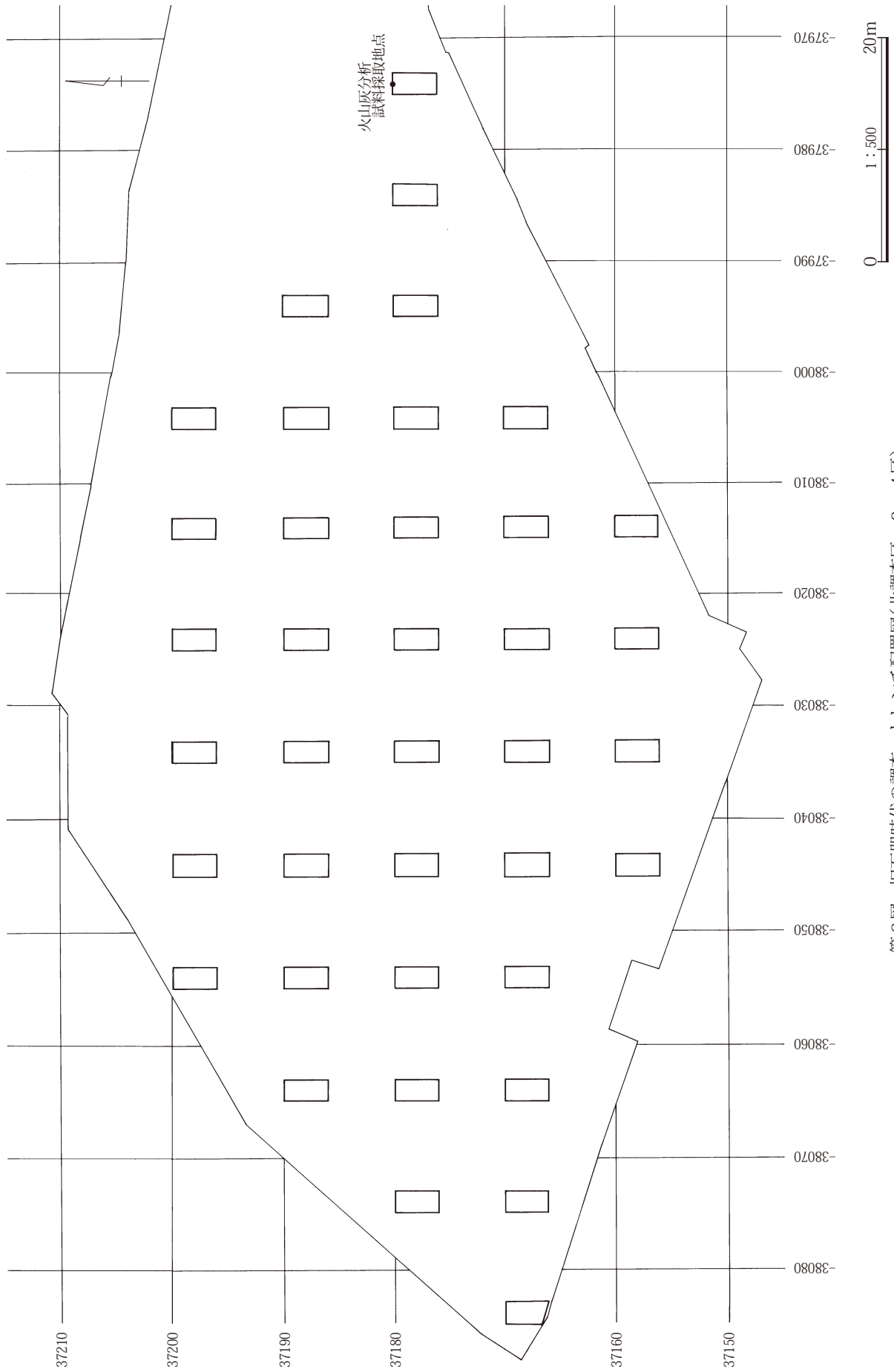
各トレンチでは暗色帯の下層にある砂層(基本土層の10層にあたる)まで掘り下げたが、遺構・遺物は全く出土しなかった。

なお、本遺跡におけるロームの層序については第2章第3節の「基本土層」を、また、含まれるテフラの分析等については第4章第1・2節を参照していただきたい。

調査したトレンチの数は、1区では6ヶ所、2～4区で38ヶ所の合計44ヶ所である。



第7図 旧石器時代の調査・トレンチ配置図(南調査区=1区)



第8図 旧石器時代の調査・トレンチ配置図(北調査区=2~4区)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

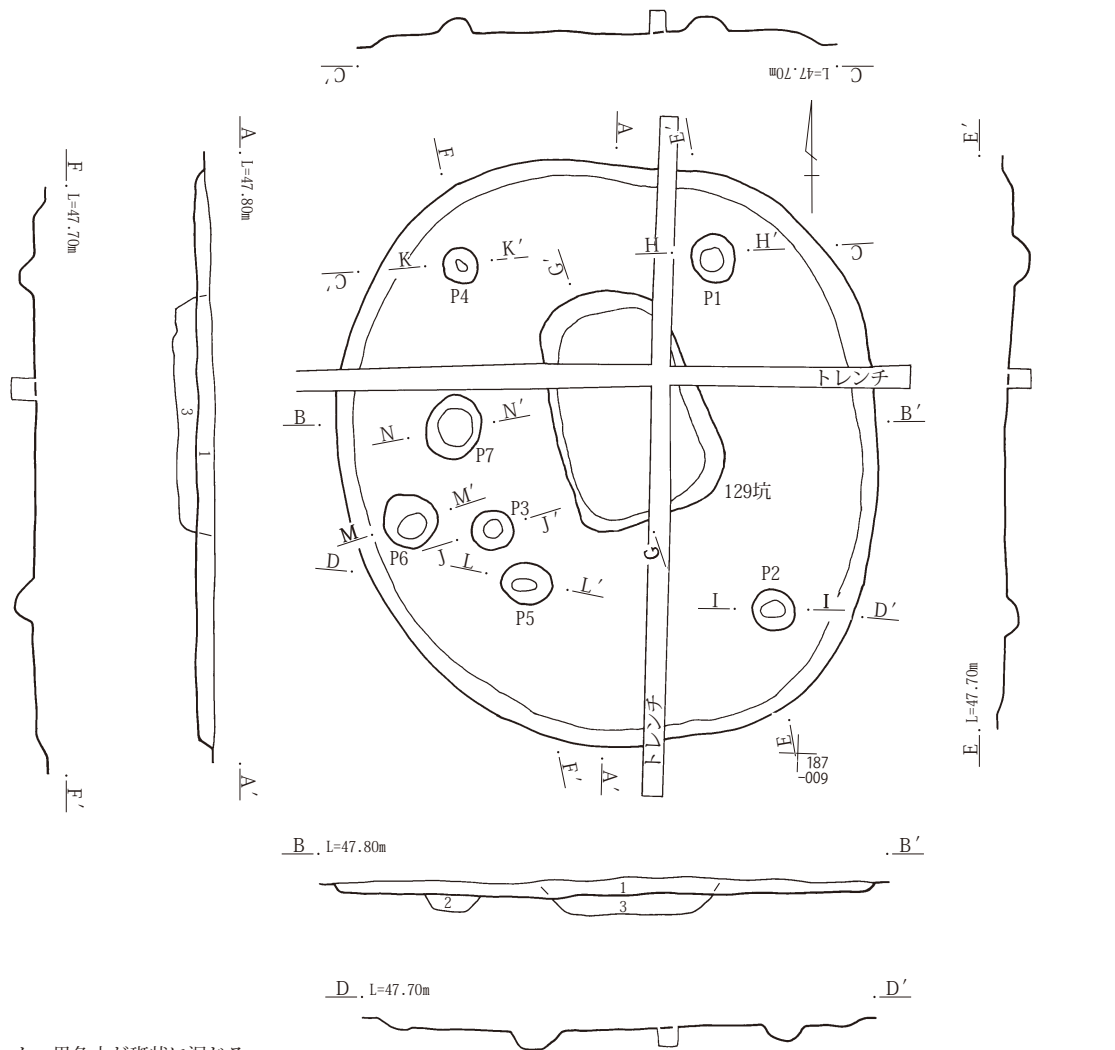
縄文時代の遺構は竪穴住居4軒、土坑14基、ピット3基である。ピット2基を除いて北調査区にある。竪穴住居は狭い範囲に集中し、すべて中期加曽利E3式の土器を出土する。土坑はその住居の周囲に分布している。そのほか、遺構外からは前期～晩期の土器・石器が出土している。

1 竪穴住居

縄文時代の竪穴住居は4軒であり、北調査区(2～4区)の北側中央の狭い範囲に集まっている。いずれも縄文時代中期加曽利E3式の土器を出土し、ほぼ同時期のものである。

3号住居(第9～13図、第6・7・51・52表、P L.5-5～6-4, 7-1, 51, 52)

北調査区北半部中央やや東よりにある、やや小型の竪穴住居である。



3号住居

1. 暗褐色土 地山ローム、黒色土が斑状に混じる。焼土粒、炭化物粒(φ 1mm以下)、白色軽石粒を少し含む。締まりややあり。
2. 黄褐色土 黒褐色土ブロック、地山ロームブロックを含む。白色軽石粒、炭化物粒を少し含む。締まりややあり。P7。
3. 黄褐色土 地山ローム、黒色土を含む。炭化物粒、白色軽石粒を少し含む。締まりあり。129号土坑。

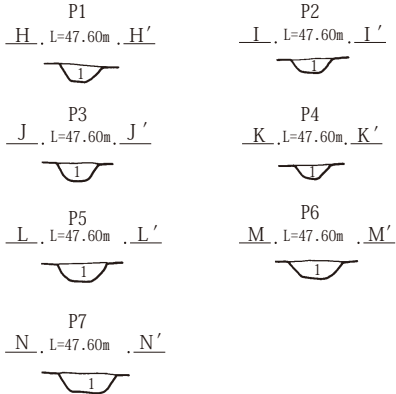
第9図 3号住居平面断面図

129号土坑



129号土坑

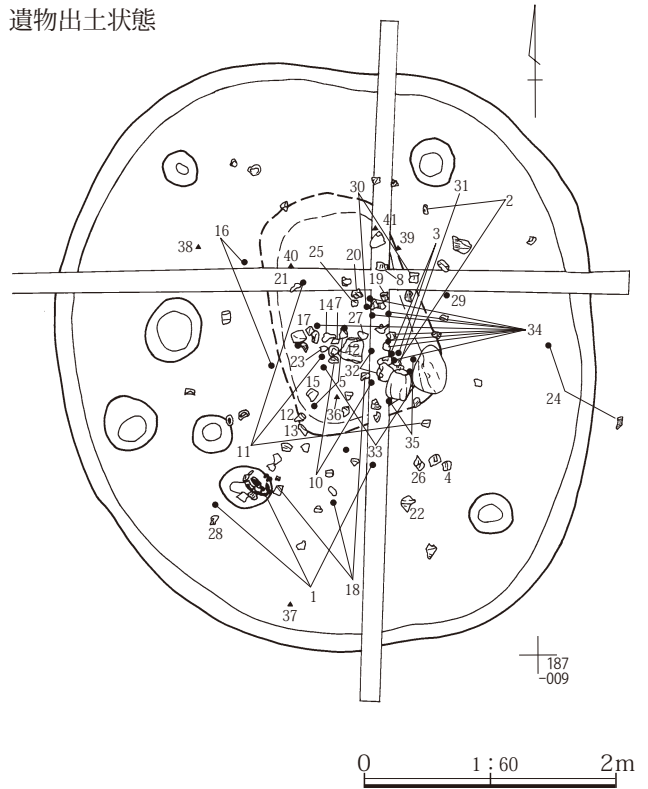
1. 黄褐色土 地山ローム、黒色土を含む。炭化物、白色軽石粒を少し含む。縄文土器片、チップ出土。縮まりあり。



3号住居ピット(P 1～7)

1. 黄褐色土 黒褐色土ブロック、地山ロームブロックを含む。白色軽石粒、炭化物粒を少し含む。縮まりややあり。P 2からはやや大きな炭化物粒が出土している。

遺物出土状態



第10図 129号土坑・ピット断面図・遺物出土状態図

位置 X=37187～192、Y=-38008～013。 **重複**

構 中央に129号土坑があり、本住居が古い。 **形態** やや楕円形。 **方位** N-29°-W。 **規模** 4.84m×4.23m。 **床面積** 14.17㎡。 **壁高** 0.04～0.10m。

覆土 上面が削平されて浅い。現状では暗褐色土1層で埋まっている。 **床面** 平坦でよく締まっている。

柱穴 床面には7基のピットが見つかったが、いずれも浅い。それぞれの計測値は下記の通り(長径×短径×深さ、m)。このうち、支柱穴の可能性があるのはP 1、P 2、P 4、P 5と考え、それを通した断面図を掲載したが、浅いので疑問があり断定できない。

P 1 0.38×0.35×0.12

P 2 0.34×0.32×0.12

P 3 0.33×0.30×0.15

P 4 0.27×0.27×0.12

P 5 0.40×0.33×0.15

P 6 0.44×0.42×0.12

P 7 0.51×0.43×0.16

周溝 確認できなかった。 **炉** 129号土坑に壊された

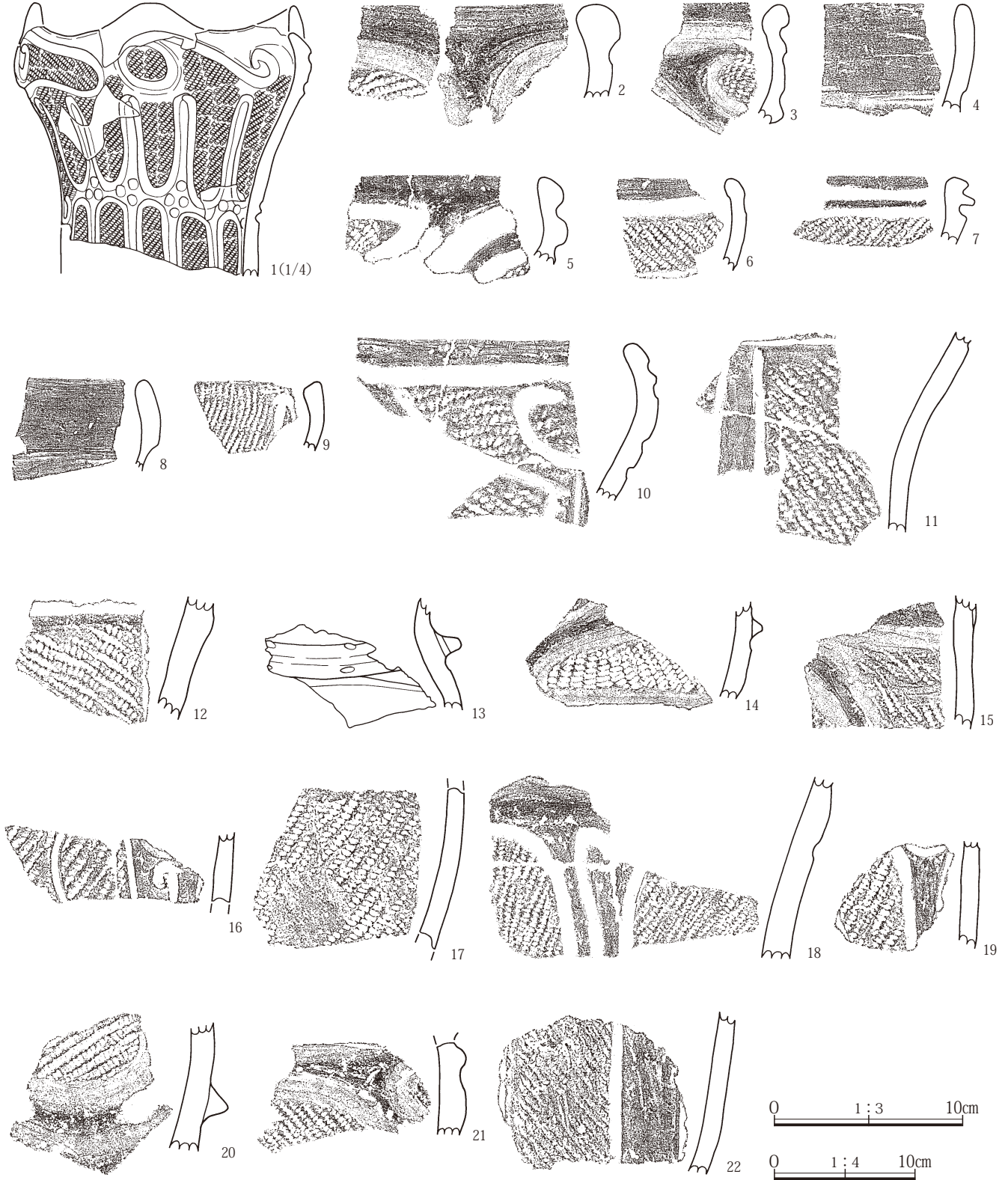
らしい。 **129号土坑** 住居中央にある、長さ1.84m、幅1.22mの長方形の土坑である。セクションでの判別ができなかったため、調査当時住居よりも古いものと考えたが、遺物が相互に接合することと、炉がないのはこの土坑が破壊している可能性が高いと考えられることから、この土坑が住居よりも新しいと思われる。床面からの深さは0.20mだが、確認面からは0.30mである。 **遺物** 住居中央付近に散布するように出土したが、中央のものは129号土坑出土ということになる。住居部分から出土したものは、床面から少し浮いたものが多い。掲載した土器は深鉢の破片34点、石器は7点である。38の石鏃は床面近くから出土した。未掲載遺物は、土器は加曾利E 3式167点、同E式(小破片のため細分できなかったが、E 3式の可能性が強いもの) 22点、中期末葉～後期前葉6点が出土している。石器等は加工痕ある剥片1点、剥片24点が出土している。石器、剥片それぞれの石材組成は、第6・7表のとおりである。 **所見** 縄文時代中期加曾利E 3式の時期の竪穴住居である。

第6表 3号住居石器種別石材組成一覧

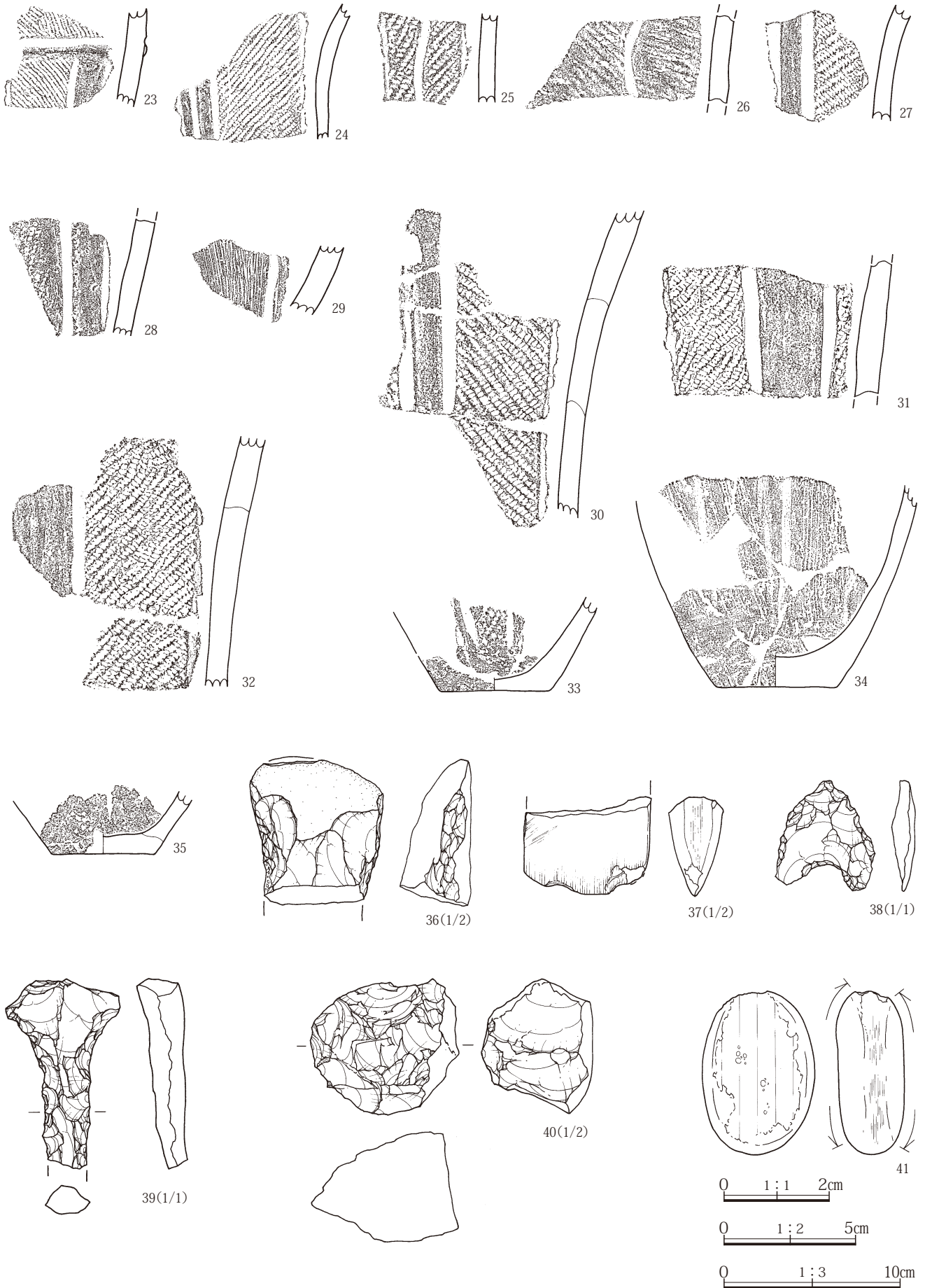
石材	打製石斧	磨製石斧	石鏃	石錐	削器	石核	加工痕ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	多孔石	合計
凝灰質泥岩		1												1
チャート			1	1		1								3
ホルンフェルス	1						1							2
粗粒輝石安山岩									1		1			2
合計	1	1	1	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	8

第7表 3号住居剥片石材組成一覧

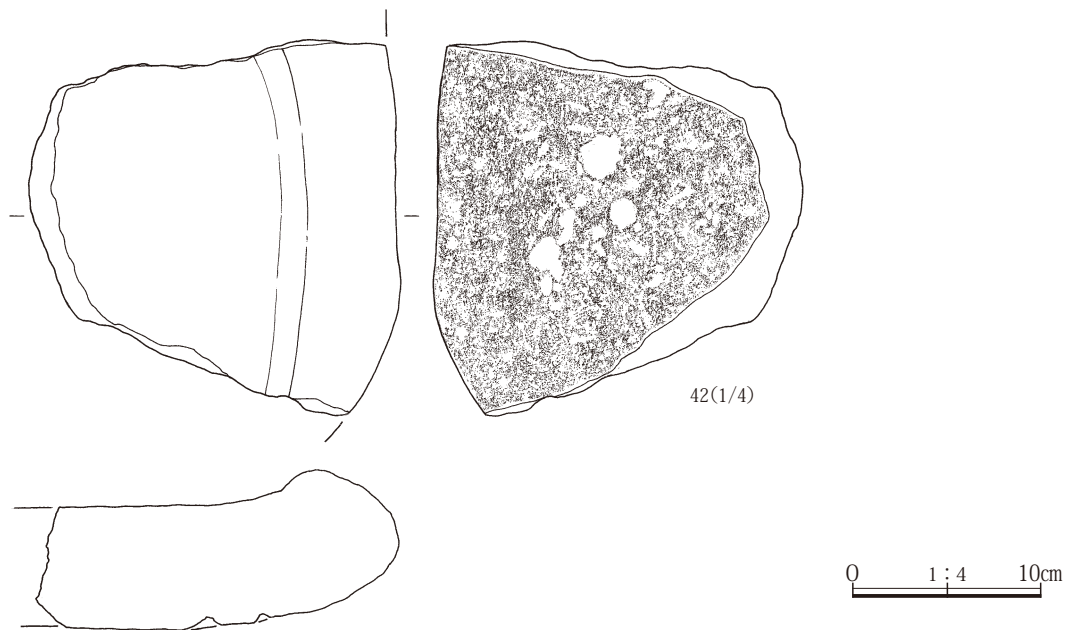
石材	個数	重量 (g)
凝灰質泥岩		
チャート	10	21.87
ホルンフェルス	14	603.6
粗粒輝石安山岩		
合計	24	625.47



第11図 3号住居出土遺物(1)



第12図 3号住居出土遺物(2)



第13図 3号住居出土遺物(3)

4号住居(第14～19図、第8・9・52～54表、P.L.6-5, 7-2・3, 75～77)

北調査区北半部中央にある竪穴住居である。発掘調査当時には下層に一回り小さな別の住居があると考え、それぞれ4号住居、8号住居と名付けて2軒として調査したが、その後の検討によりこれらには時期差が認められず、1軒の住居であると判断されるに至った。そのため、ここでは4号住居として報告し、8号住居は欠番とする。P.L.6-5の写真に写っている白線は、この8号住居の範囲を示したものだが、上述の通り、この線は誤りである。

位置 X=37188～195、Y=-38014～022。 **重複遺構** なし。 **形態** やや歪んだ円形。 **方位** N-26°-E。 **規模** 6.56m×6.00m。 **床面積** 26.40㎡。

壁高 0.15～0.29m。 **覆土** 地山ロームブロック、黒色土ブロックを含む褐色土ないし黄褐色土で埋まっている。 **床面** ほぼ平坦で締まっている。 **柱穴** 床面では見つからない。 **炉** 住居中央やや西寄りにある石組み炉である。平たい河床礫を5個用いて築いている。石の大きさは最も大きいもので34×26cm、最も小さいもので20×20cm程度である。炉の大きさは石の内法の最下部で計測して、25～26cmであり、掘方は69×65cmの楕円形で深さは18cmである。内部には焼土、炭化物が見られるが、あまり焼けてはいない。 **貯蔵穴・周溝**

いずれも確認できなかった。 **遺物** 出土した遺物は多い。土器は数多く出土し、住居中央付近から北西部にかけて細かい破片となって散らばっていた。掲載したのは52点で、1点を除き(48は後期前葉)加曾利E3式である。しかし、ある程度器形が分かる程度まで復元できたのは2点(1・2)のみで、ほかは破片である。これらのうち床面直上から出土したのは18、19、37、40、44、51であり、それ以外は床面からかなり浮いた状態で出土した。石器も数が多く、やはり住居中央付近から北西部にかけて出土している。掲載したのは合わせて18点で、打製石斧1点、石鏃10点、石錐2点、削器1点、凹石2点、磨石1点、敲石1点である。57の石鏃と69の磨石が床面直上から出土している以外は、床面からかなり浮いた状態で出土している。未掲載遺物は、土器は黒浜式1点、加曾利E3式244点、同E式(小破片のため細分できなかったが、E3式の可能性が強いもの)36点、中期末葉～後期前葉4点が出土している。石器等は打製石斧2点、石鏃5点、削器1点、石核4点、加工痕ある剥片5点、剥片1,087点が出土している。石器、剥片それぞれの石材組成は第8・9表のとおりであるが、剥片類は数が多く、チャート製の破片類が大部分を占める点が注目される。以上のように床面直上から出土した遺物は少なく、大部分は浮いた状態で出土していることから、これらの遺物は、3

号住居同様、住居が埋まり始めた頃に投棄されたものと考えられる。所見 縄文時代中期加曾利E 3式の住居である。石囲炉をもつ。当初2軒として調査していたこともあり、床面では炉以外の施設を確認することができなかった。多量のチャート製破片類が出土しており、石

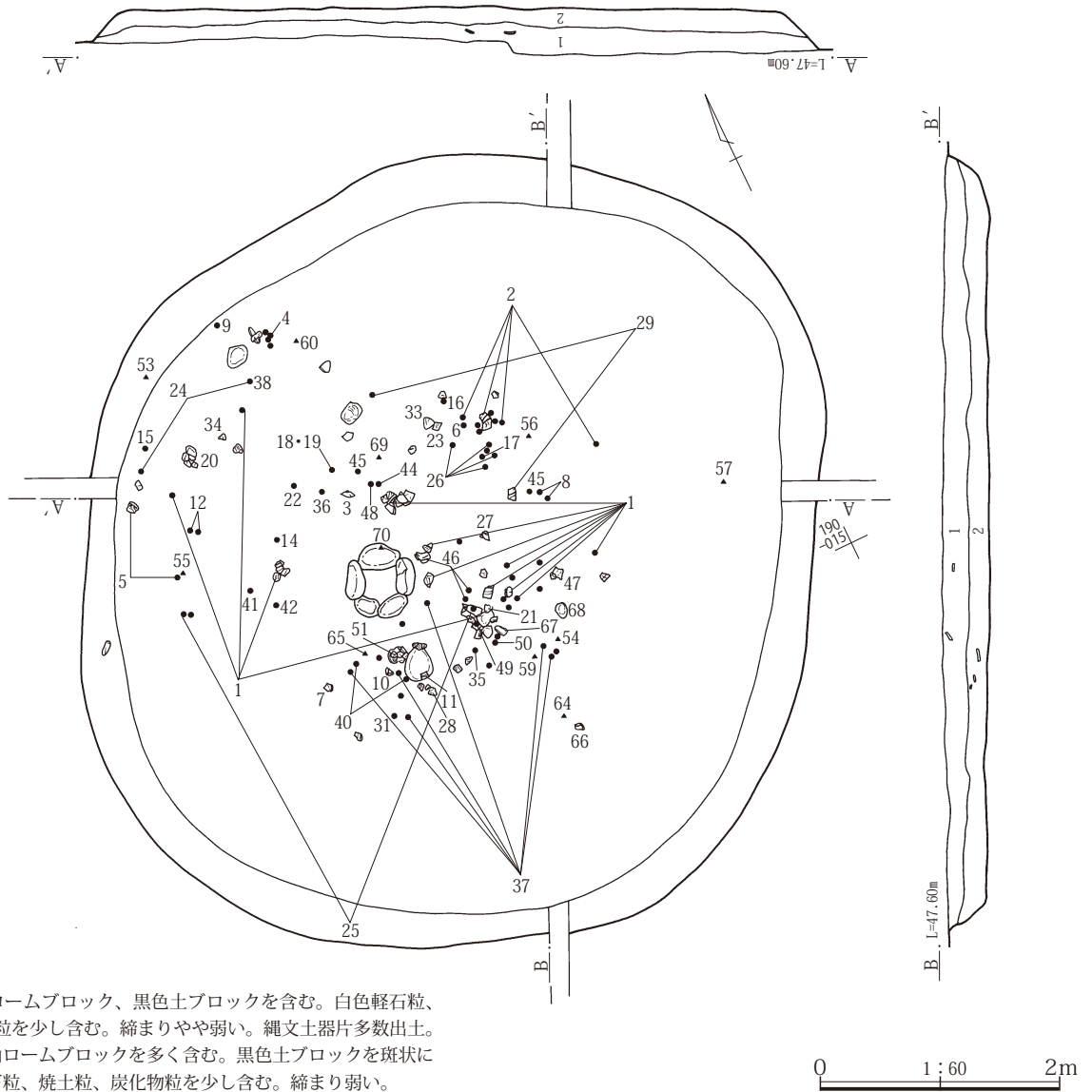
鋸製作に伴う石器類の廃棄地点である。隣接する101号土坑からも同様な破片類が数多く出土しており、関連しているものと考えられる。

第8表 4号住居石器器種別石材組成一覧

石材	打製石斧	磨製石斧	石鋸	石錐	削器	石核	加工痕ある剥	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	多孔石	合計
珪質頁岩			2		1									3
砂岩														0
黒色安山岩														0
チャート			14	2		4	3							23
ホルンフェルス	2				1		3							6
粗粒輝石安山岩								2	1	1				4
石英														0
合計	2	0	16	2	2	4	6	2	1	1	0	0	0	36

第9表 4号住居剥片石材組成一覧

石材	個数	重量 (g)
珪質頁岩	1	3.91
砂岩	1	11.19
黒色安山岩	2	2.19
チャート	1003	1630.549
ホルンフェルス	69	2574.16
粗粒輝石安山岩	9	545.52
石英	2	4.48
合計	1087	4771.999

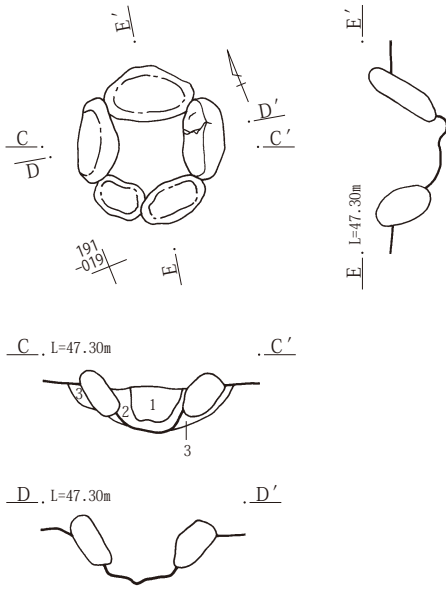


4号住居

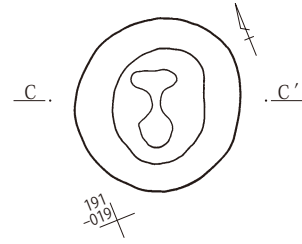
1. 褐色土 地山ロームブロック、黒色土ブロックを含む。白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒を少し含む。締まりやや弱い。縄文土器片多数出土。
2. 黄褐色土 地山ロームブロックを多く含む。黒色土ブロックを斑状に含む。白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒を少し含む。締まり弱い。

第14図 4号住居平断面図

炉

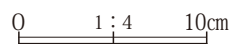
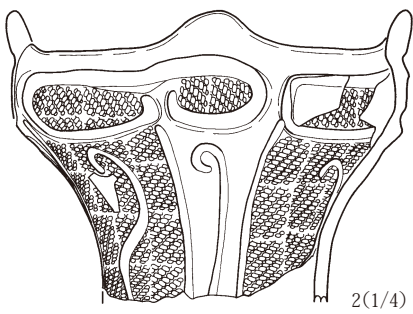
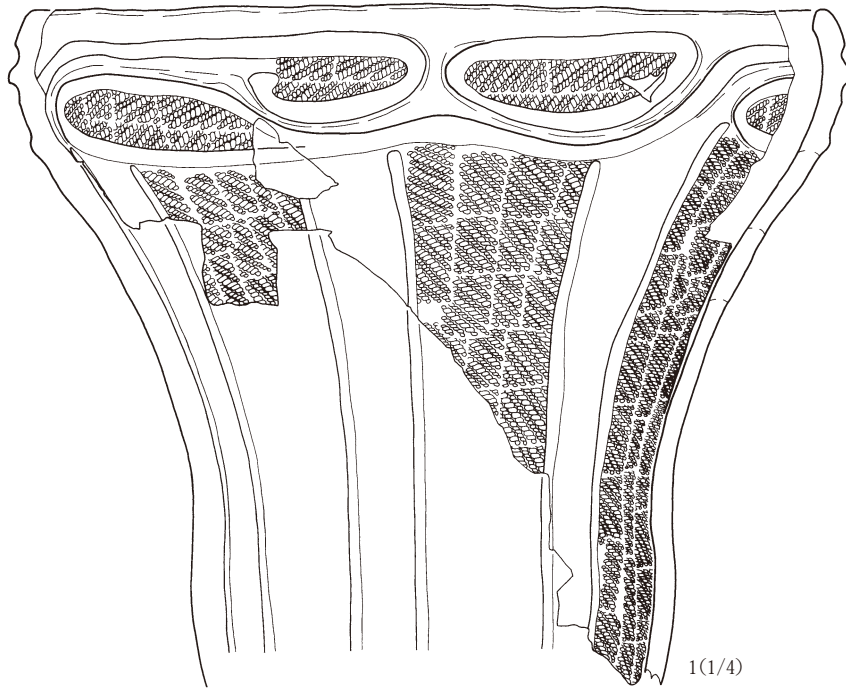
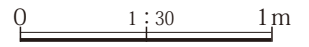


炉掘方

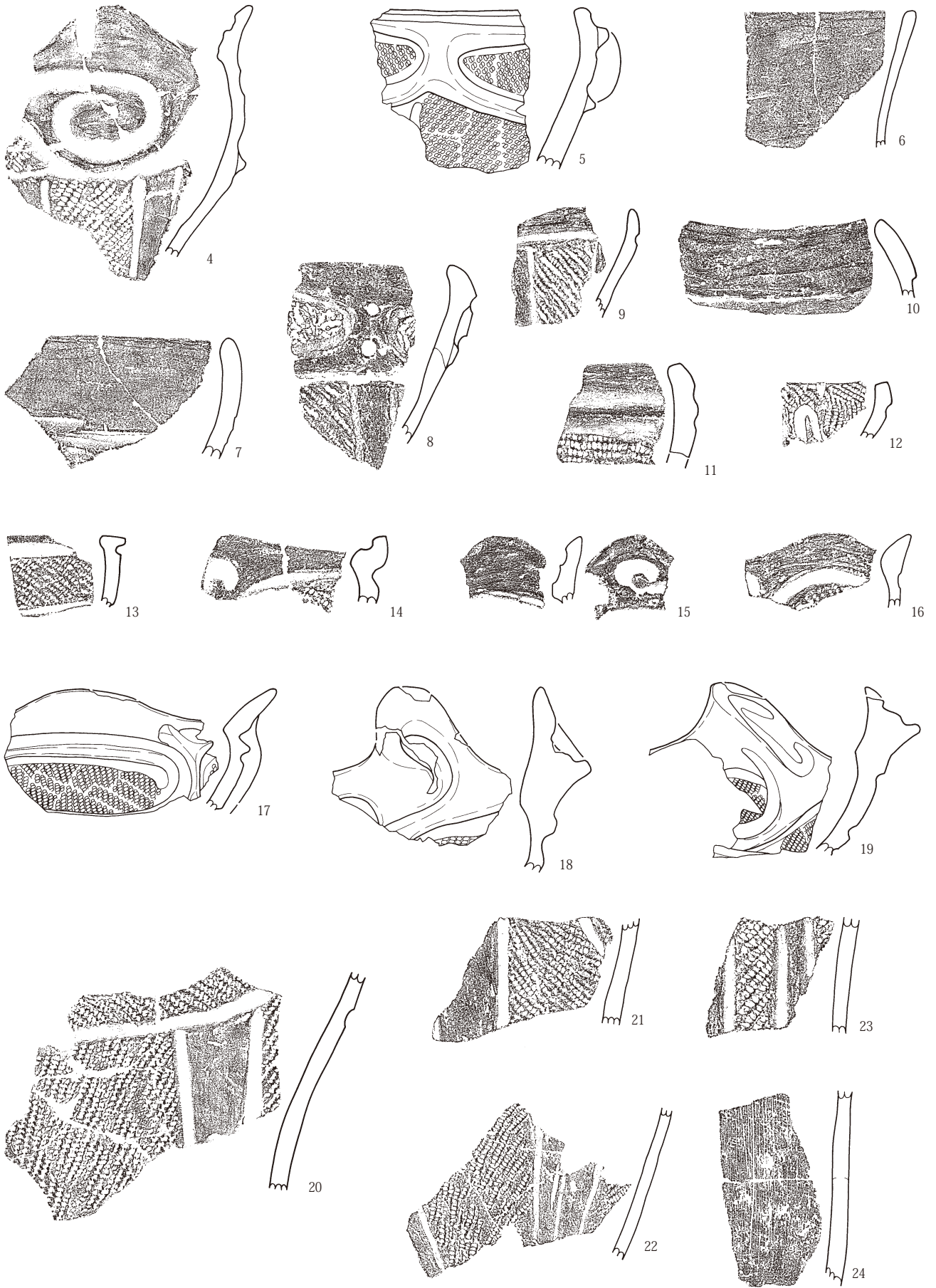


4号住居炉

1. 暗褐色土 黑色土を多量に含む。ローム粒、焼土粒(φ 1mm)、炭化物粒(φ 1~3mm)、白色軽石粒(φ 1mm)を含む。締まり強い。
2. 褐色土 黑色土、ローム粒、焼土粒を含む。使用面直上に硬化した橙色ロームブロック(φ 10~30mm)がある。ロームブロック(φ 10mm)を少量含む。締まりあり。
3. 褐色土 2層より少し明るい。黑色土、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む。締まりあり。

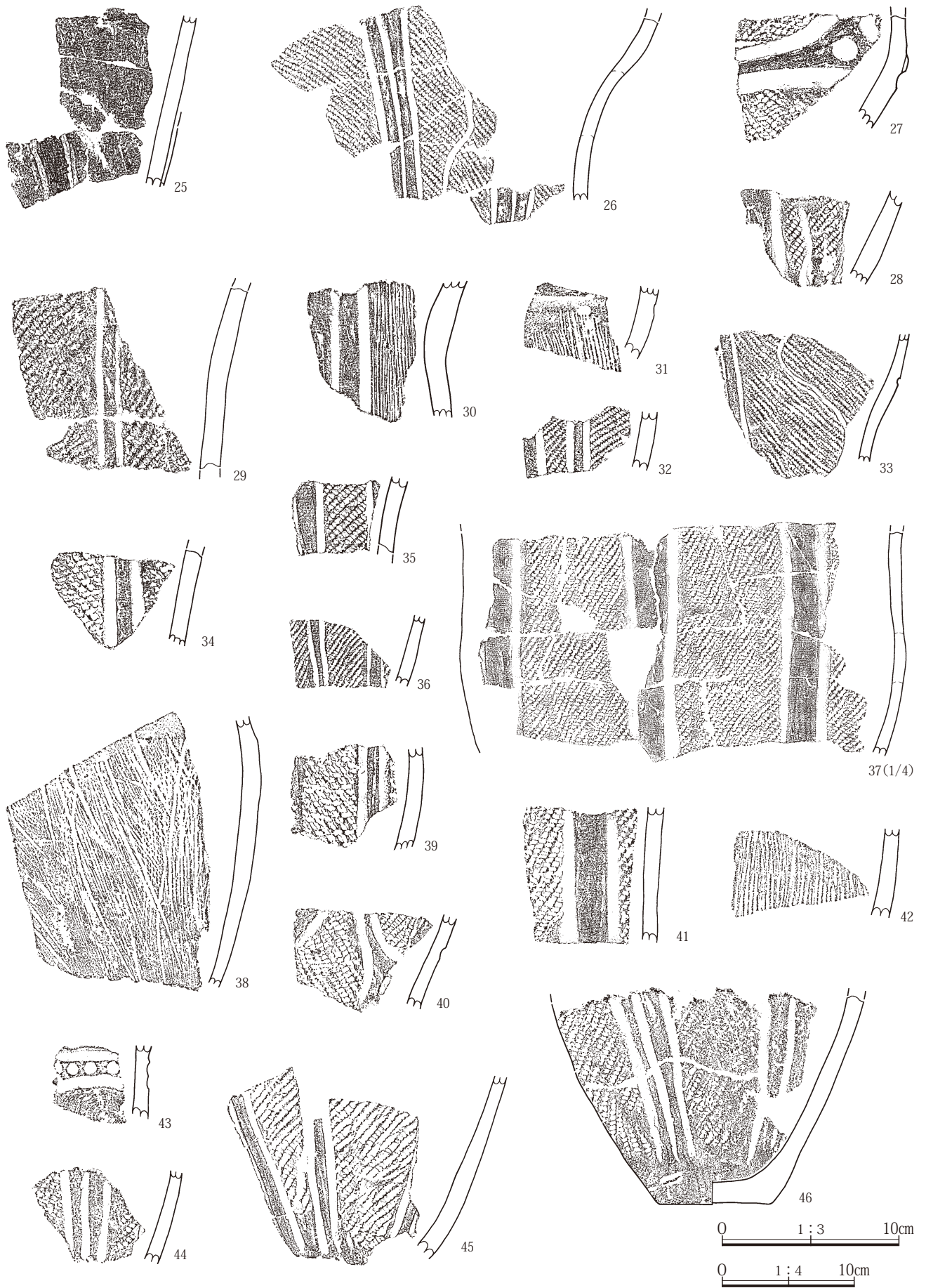


第15図 4号住居炉平断面図・出土遺物(1)

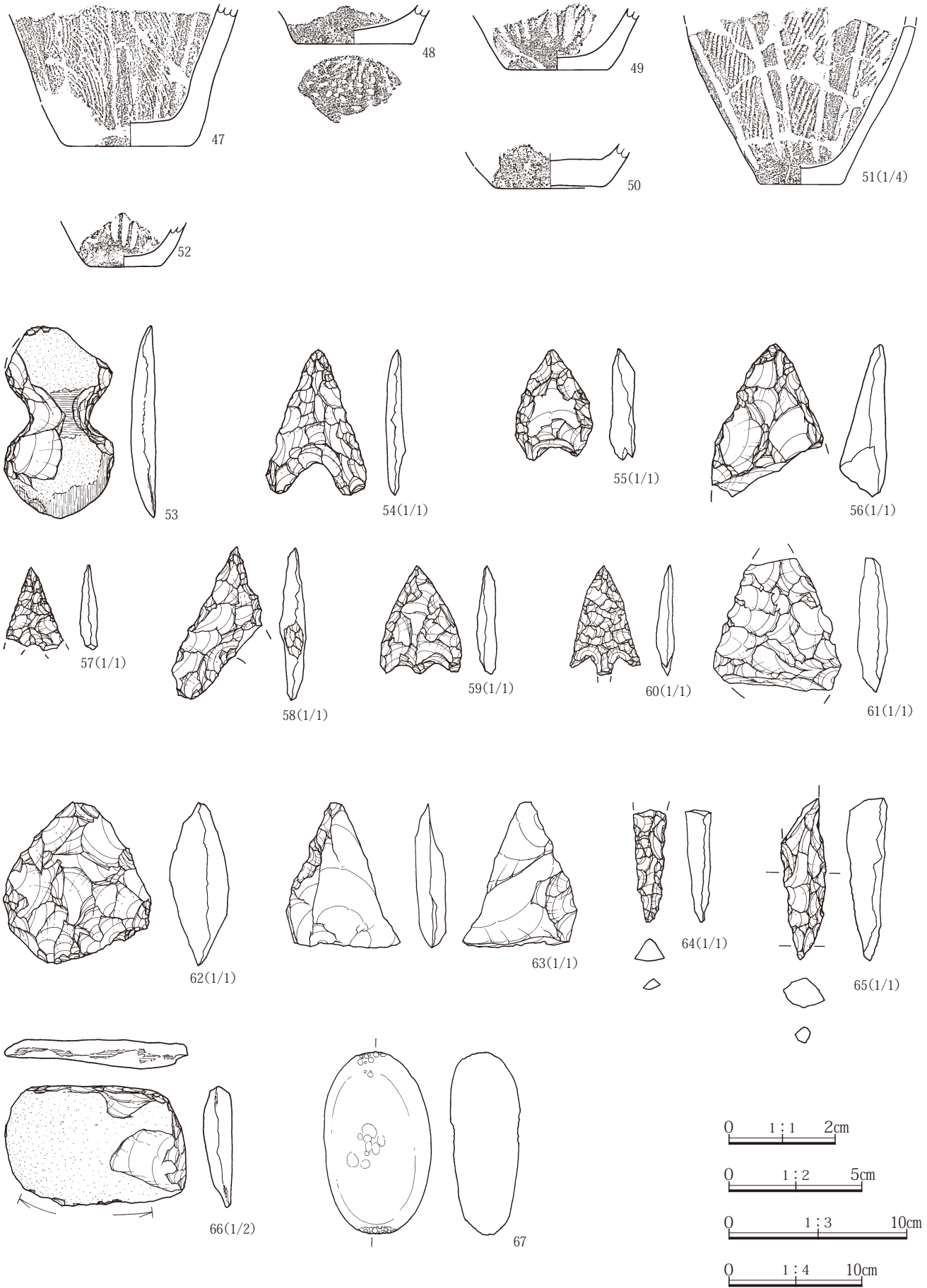


第16図 4号住居出土遺物(2)

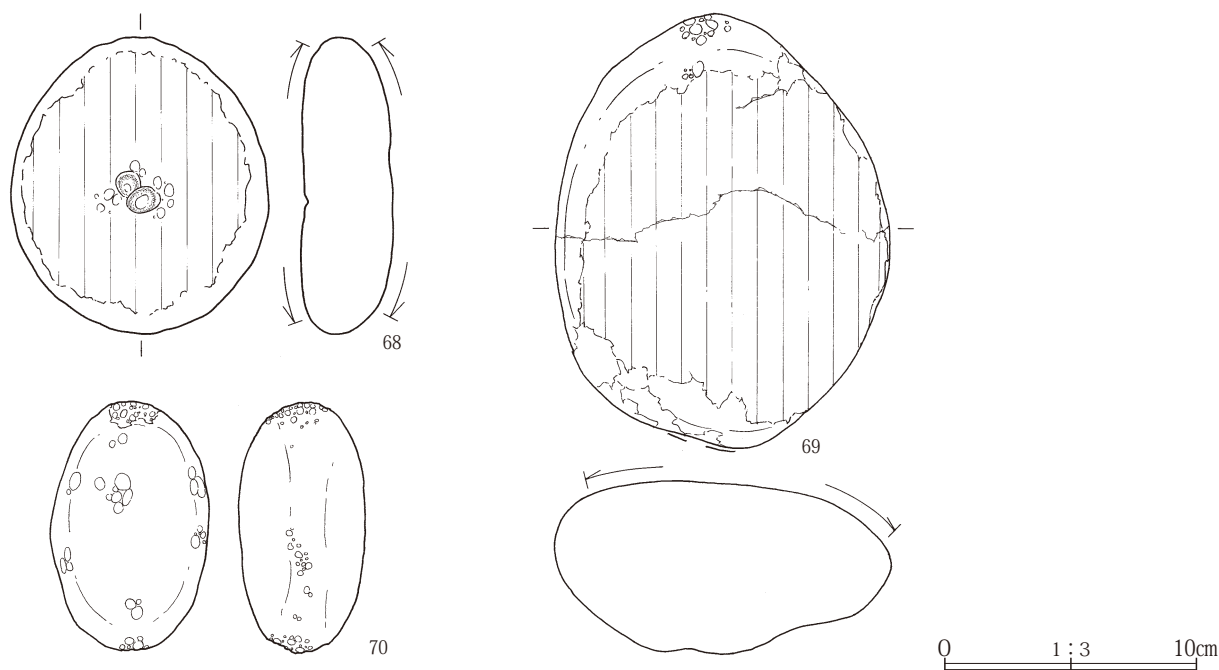
0 1:3 10cm



第17図 4号住居出土遺物(3)



第18図 4号住居出土遺物(4)



第19図 4号住居出土遺物(5)

5号住居(第20～23図、第10・11・54・55表、P L.7-4～8-5, 77, 78)

北調査区北端中央付近にある住居である。上面を攪乱で大きく削平されているため、ごく薄くしか残っていない。

位置 X=37197～203、Y=-37998～38004。 **重複遺構** 東端に42号土坑が重複する。本住居が古い。 **形態** 北側がややふくれているが、ほぼ円形に近い楕円形。

方位 N-17°-E。 **規模** 5.18m×(4.12)m。

床面積 土坑と重複する部分を復元して16.79㎡。 **壁高** 0.01～0.04m。 **覆土** 上面が攪乱で削平されており、きわめて浅い。褐色土1層で埋まっている。 **床面** 平坦でよく締まっている。 **柱穴** 床面では次の13基のピットが見つかった。P 8、P 12、P 13のように深いものもあるが、大部分は柱穴としてはやや浅い。それぞれの計測値は下記の通り(長径×短径×深さ、m)。このうち主柱穴の可能性のあるのはP 1～4である。

- P 1 0.42×0.38×0.29
- P 2 0.40×0.40×0.30
- P 3 0.44×0.43×0.34
- P 4 0.46×0.40×0.29
- P 5 0.34×0.28×0.08
- P 6 0.36×0.30×0.15

- P 7 0.30×0.29×0.16
- P 8 0.36×0.31×0.40
- P 9 0.33×0.25×0.11
- P 10 0.32×0.30×0.23
- P 11 0.35×0.31×0.16
- P 12 0.32×0.28×0.41
- P 13 0.28×0.26×0.29

炉 床面の中央に埋甕炉がある。掘方は0.70×0.60mの楕円形で、深さは0.25mあり、その中央に4の土器が埋設されていた。土器内の土には焼土、炭化物を含み、炉として使用していたことが分かる。土器の推定口径は40.5cmである。 **土坑** 炉の東に小さな土坑(1号土坑)がある。長さ0.86m、幅0.74mの楕円形で深さは0.20mである。遺物は出土せず、用途は不明である。 **周溝** 確認できなかった。 **遺物** 覆土が浅いものの遺物は多い。土器には他の住居に比べて形をとどめたものが多く、それらは住居中央から南部にかけて出土している。特に南側の壁近くに大きな破片が多い。2が床面にめり込む形で出土している以外は、床面からやや浮いて出土している。掲載するのは合計21点であり、すべてが加曽利E3式である。石器は少なく、掲載したのは打製石斧、石鏃、凹石、敲石、磨石各1点である。このうち26の敲石は住居西端近くの床面直上から出土したが、それ以外は土器

同様、床面からやや浮いた状態で出土している。未掲載遺物は、土器は加曾利E3式102点、同E式(小破片のため細分できなかったが、E3式の可能性が強いもの)11点が出土している。石器等は加工痕ある剥片2点、石核1点、剥片25点が出土している。石器、剥片それぞれの石材組成は第10・11表のとおりである。 **所見** 縄文時

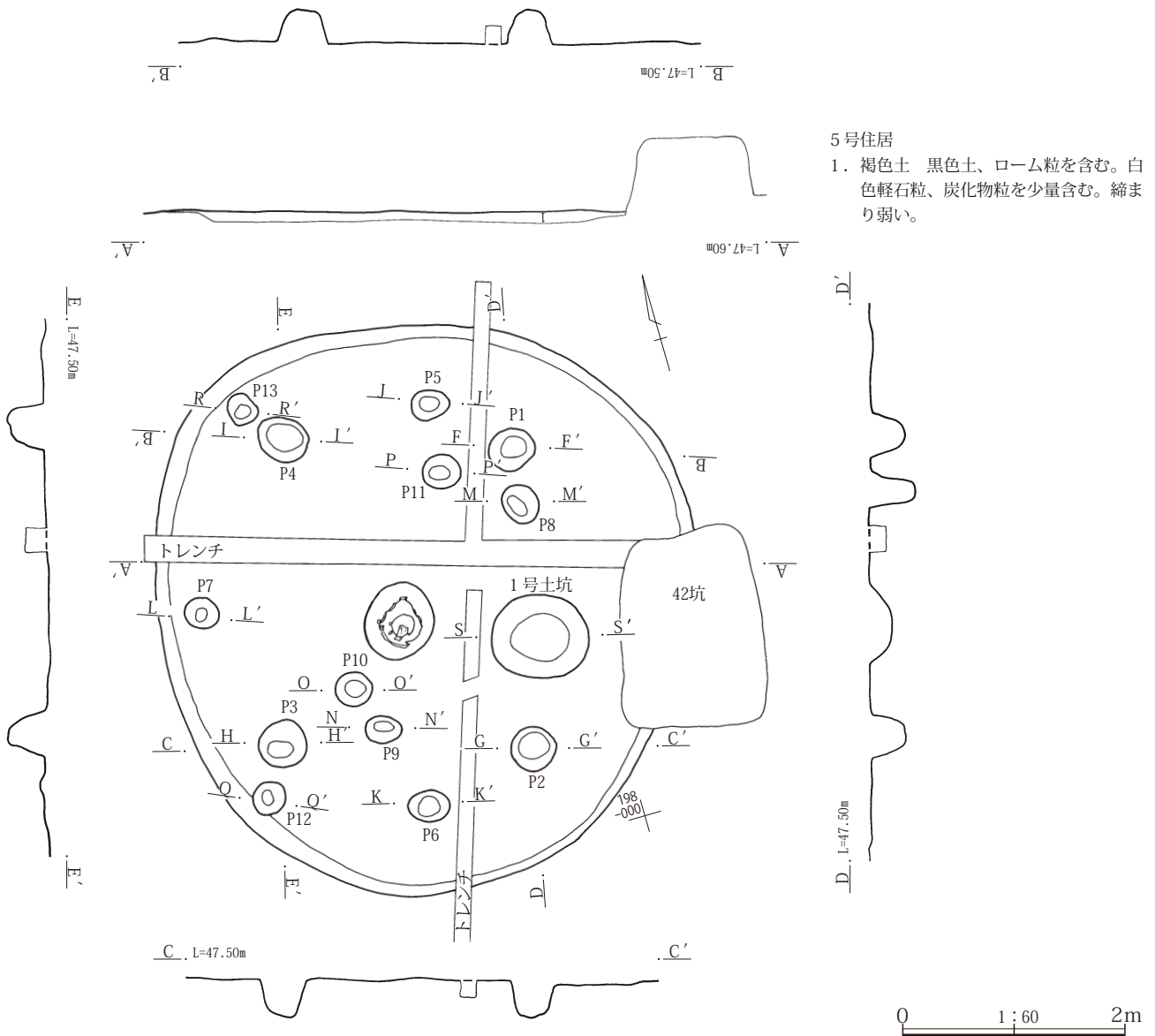
代中期加曾利E3式の住居である。埋嚢炉をもつ。上面を削平されていたが、炉、柱穴を含めて比較的残りがよかった。P1～4の4本が支柱穴になるものと思われる。

第10表 5号住居石器器種別石材組成一覧

石材	打製石斧	磨製石斧	石鏃	石錐	削器	石核	加工痕ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	多孔石	合計
砂岩										1				1
チャート			1			1								2
ホルンフェルス	1						2							3
粗粒輝石安山岩								1	1					2
合計	1	0	1	0	0	1	2	1	1	1	0	0	0	8

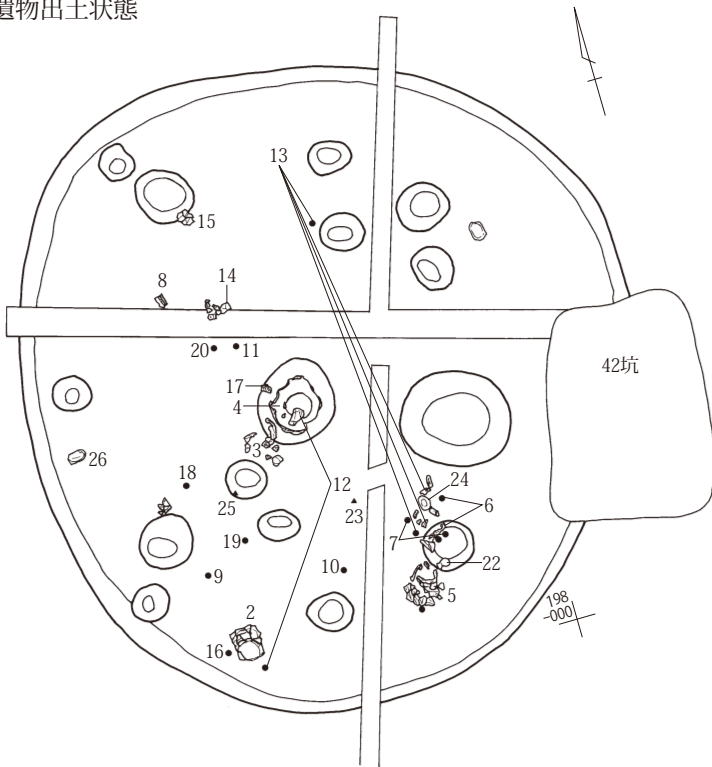
第11表 5号住居剥片石材組成一覧

石材	個数	重量(g)
砂岩		
チャート	19	286.71
ホルンフェルス	6	729.64
粗粒輝石安山岩		
合計	25	1016.35

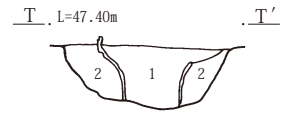
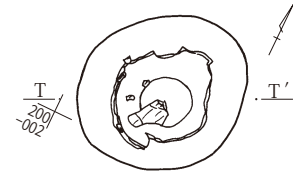


第20図 5号住居平断面図

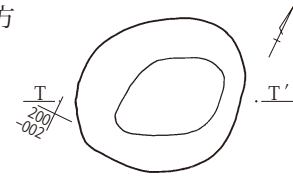
遺物出土状態



炉

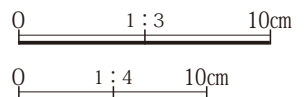
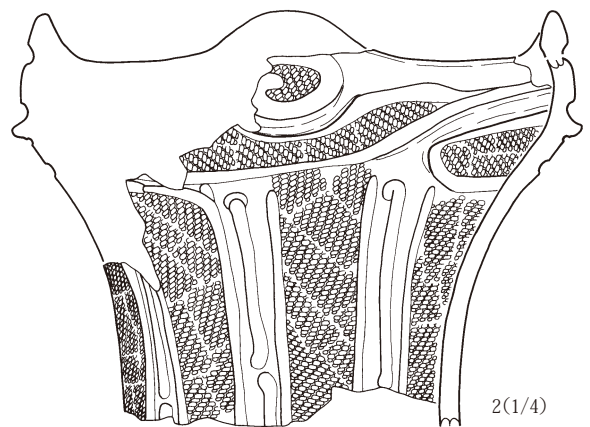
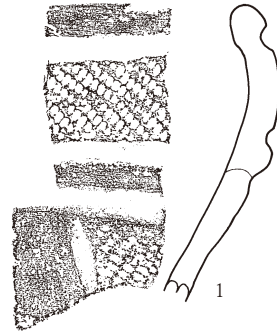
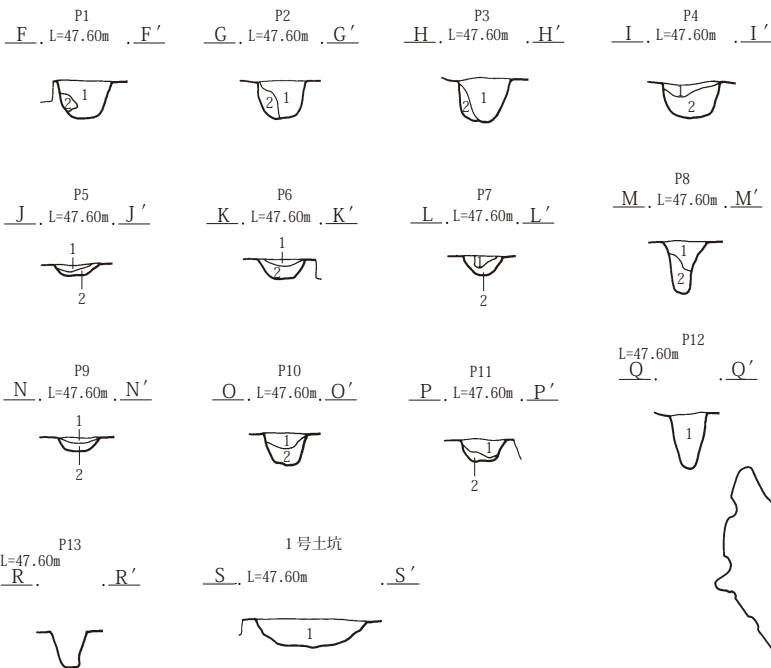
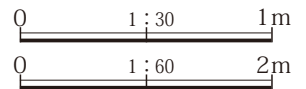


炉掘方



5号住居炉

1. にぶい黄褐色土 黒色土、白色軽石粒、炭化物粒、焼土粒を含む。地山ロームを多く含む。締まりあり。
2. 黄褐色土 白色軽石粒を少し含む。ローム、黒色土を含む。締まりあり。



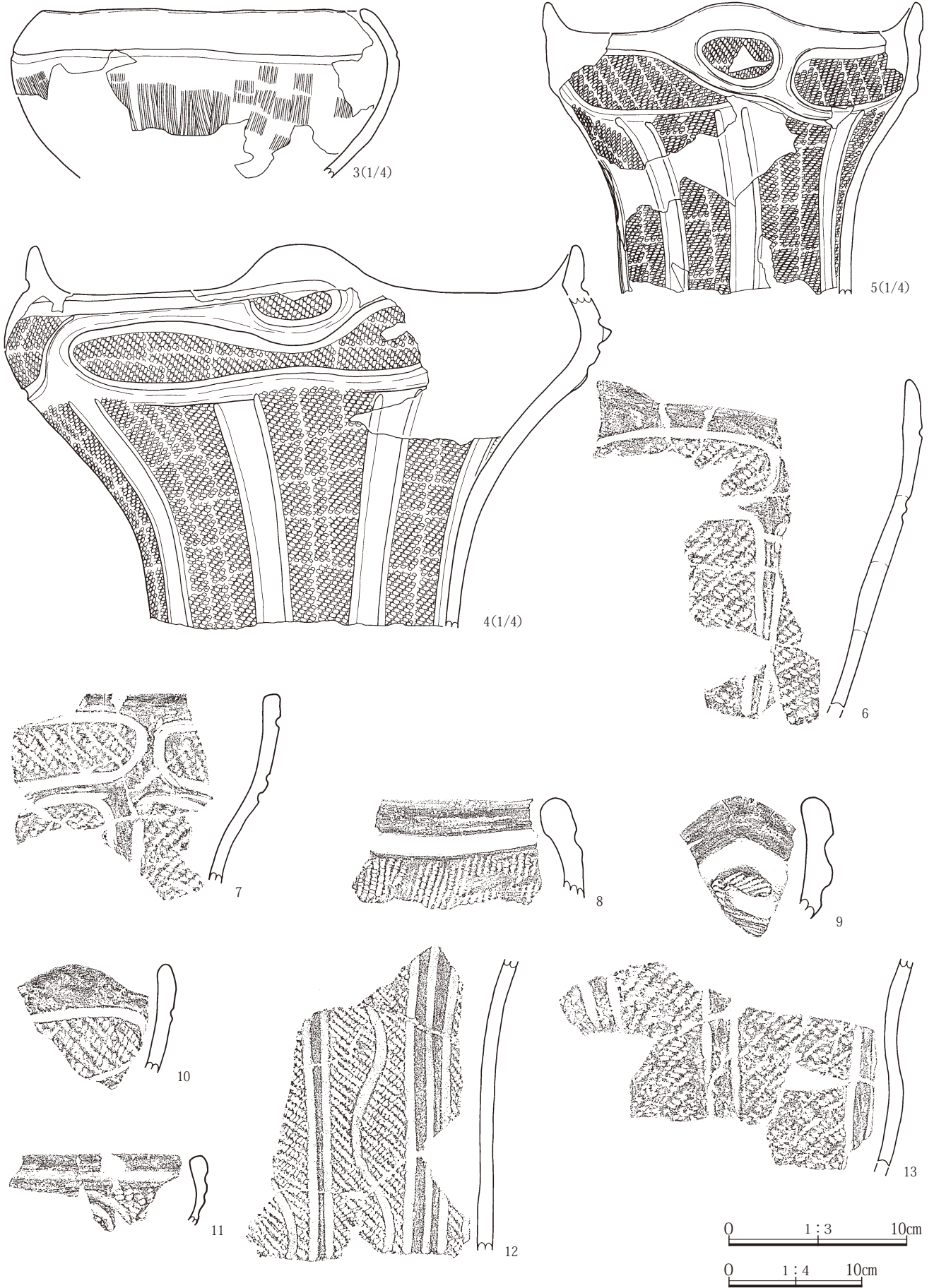
5号住居ピット

1. 褐色土 黒色土、ローム粒を含む。炭化物粒(φ 1~3mm)、白色軽石粒(φ 1mm)を少量含む。黒色土ブロック(φ 5~15mm)を斑状に含む。締まりあり。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。炭化物粒(φ 1mm)、白色軽石粒(φ 1mm)をわずかに含む。ロームブロック(φ 5~10mm)を含む。

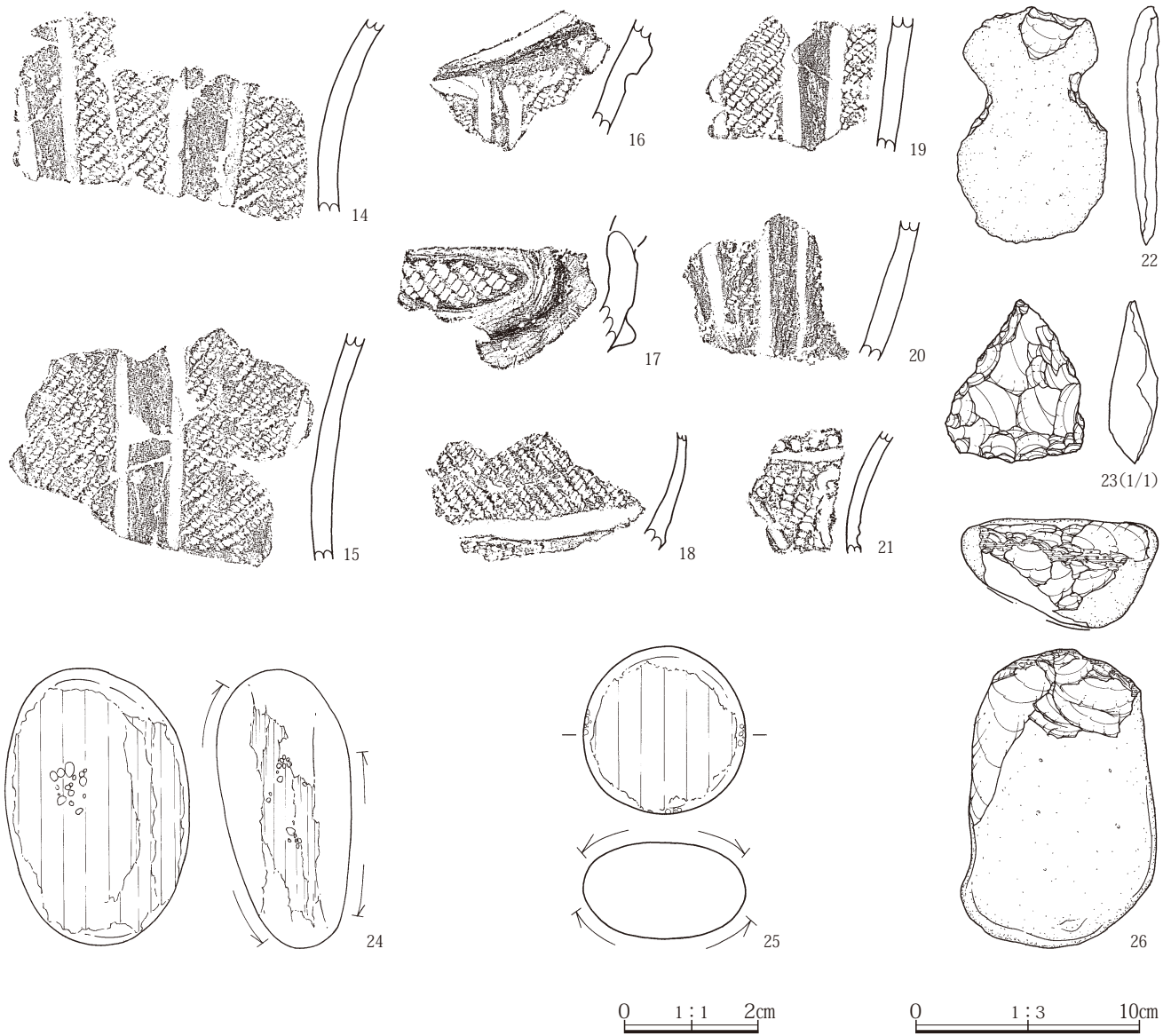
5号住居1号土坑

1. 褐色土 硬化した黒色土ブロック、黒色土、ローム粒を含む。炭化物粒(φ 1~3mm)、白色軽石粒(φ 1mm)を少量含む。締まりあり。

第21図 5号住居遺物出土状態図・炉平面断面図・ピット断面図・出土遺物(1)



第22図 5号住居出土遺物(2)



第23図 5号住居出土遺物(3)

7号住居(第24～27図、第12・13・55・56表、P L.8-6～9-2, 78, 79)

北調査区北半部中央やや西にある。2号周溝墓に西側を破壊されている。

位置 X=37187～193、Y=-38029～034。 **重複遺構** 西側に2号周溝墓が重複する。本住居が古い。 **形態** ほぼ円形。 **規模** 5.44m×5.23m。 **床面積** 現存部分で18.01㎡。 **壁高** 上面が大きく削平されているため、最も深いところでも4cmしかない。 **覆土** 厚いところでも6cmしか残っていない。ロームブロックを斑状に含む褐色土で埋まっている。 **床面** 平坦でよく締まっている。 **柱穴** 床面では10基のピットを調査したが、いずれも深さ20～30cm程度であり、配置も不揃いで、どれが支柱穴なのか明確には把握できなかった。

それぞれの計測値は以下の通り(長径×短径×深さ、m)。

- P 1 0.45×0.42×0.21
- P 2 0.42×0.36×0.19
- P 3 0.41×0.41×0.33
- P 4 0.49×0.45×0.25
- P 5 0.52×0.45×0.22
- P 6 0.50×0.49×0.25
- P 7 0.51×0.47×0.33
- P 8 0.48×0.40×0.27
- P 9 0.57×0.52×0.24
- P 10 0.50×0.48×0.20

炉 中央に石組みみ炉がある。平たい石を6個用いて築いているが、北側が空いているので、この部分は石が抜き取られているものと思われる。本来は7、8個の石で径

70cm位に囲ったものであろう。石の中には石皿1点(34)と多孔石2点(36・37)が再利用され、その他は河床礫だった。炉の中には焼土を多く含む赤褐色土が堆積し、その上面中央部は焼け締まっているので、よく使用されていたことが分かる。周溝 確認できなかった。遺物 遺物は比較的少なく、南半部を中心に出土した。土器は細片となって散っていた。報告するのは25点で、1点(9)を除いて加曽利E3式である。ある程度器形が復元できたのは2点のみである。ほぼすべての土器が床面からやや浮いた状態で出土し、床面直上から出土したのは8の小破片だけである。石器は12点で、打製石斧2点、石鏃2点、凹石2点、磨石1点、敲石1点、石皿1点、台石

1点、多孔石2点である。このうち、石皿と多孔石は炉の石として再利用され、29の凹石、31の磨石は床面直上から出土しているが、その他は土器同様、床面からやや浮いた状態で出土した。未掲載遺物は、土器は加曽利E3式100点、同E式(小破片のため細分できなかったが、E3式の可能性が強いもの)7点、中期末葉～後期前葉18点が出土している。石器等は石鏃1点、削器2点、石核4点、加工痕ある剥片3点、凹石2点、磨石1点、敲石1点、多孔石1点、剥片59点が出土している。石器、剥片それぞれの石材組成は第12・13表のとおりである。

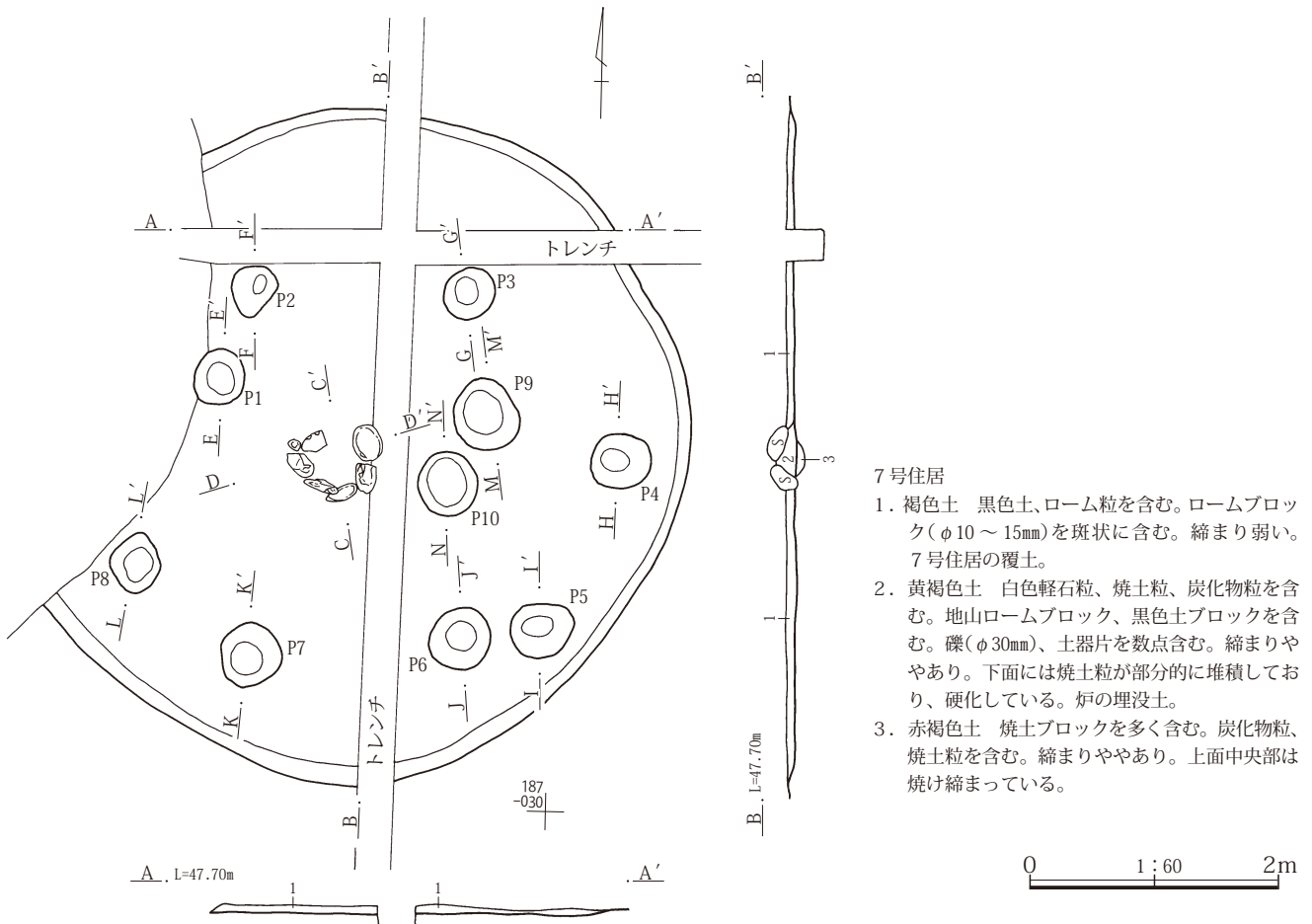
所見 縄文時代中期加曽利E3式の住居である。

第12表 7号住居石器器種別石材組成一覧

石材	打製石斧	磨製石斧	石鏃	石錐	削器	石核	加工痕ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	多孔石	合計
頁岩														0
珪質頁岩														0
黒色安山岩			1		1									2
赤碧玉														0
チャート			2		1	2	2							7
ホルンフェルス	1					2	1			1				5
粗粒輝石安山岩								4	1		1			9
溶結凝灰岩									1	2		1		4
合計	1	0	3	0	2	4	3	4	2	3	1	1	3	27

第13表 7号住居剥片石材組成一覧

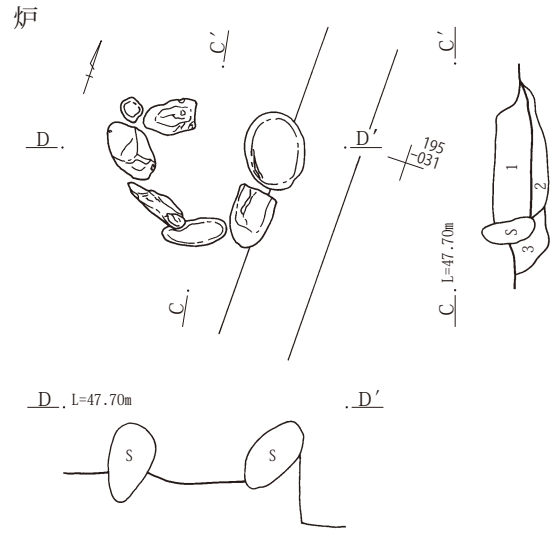
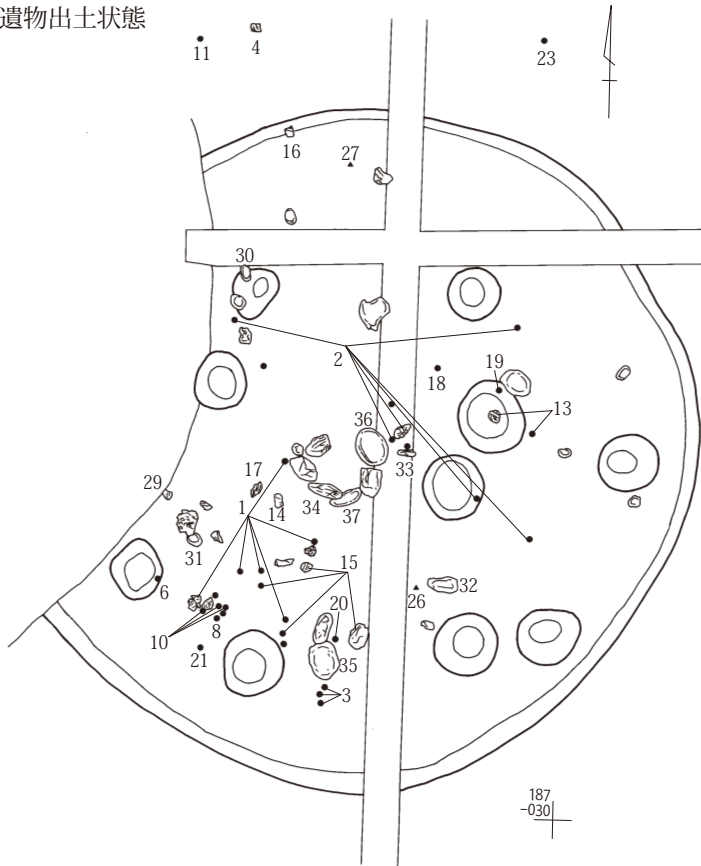
石材	個数	重量(g)
頁岩	1	1.9
珪質頁岩	1	0.56
黒色安山岩		
赤碧玉	1	2.53
チャート	39	239.4
ホルンフェルス	17	753.68
粗粒輝石安山岩		
溶結凝灰岩		
合計	59	998.07



- 7号住居
1. 褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ10～15mm)を斑状に含む。締まり弱い。7号住居の覆土。
 2. 黄褐色土 白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒を含む。地山ロームブロック、黒色土ブロックを含む。礫(φ30mm)、土器片を数点含む。締まりややあり。下面には焼土粒が部分的に堆積しており、硬化している。炉の埋没土。
 3. 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を含む。締まりややあり。上面中央部は焼け締まっている。

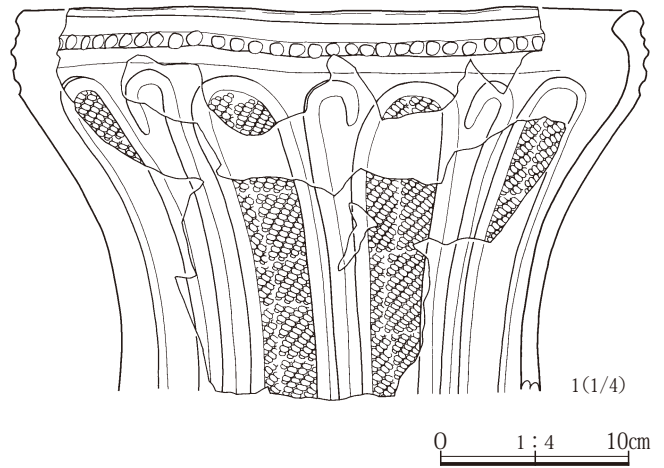
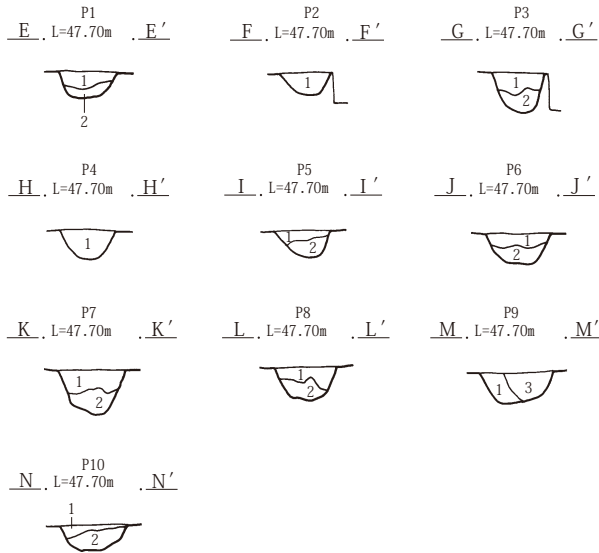
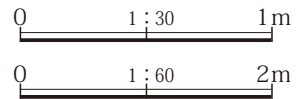
第24図 7号住居平断面図

遺物出土状態



7号住居炉

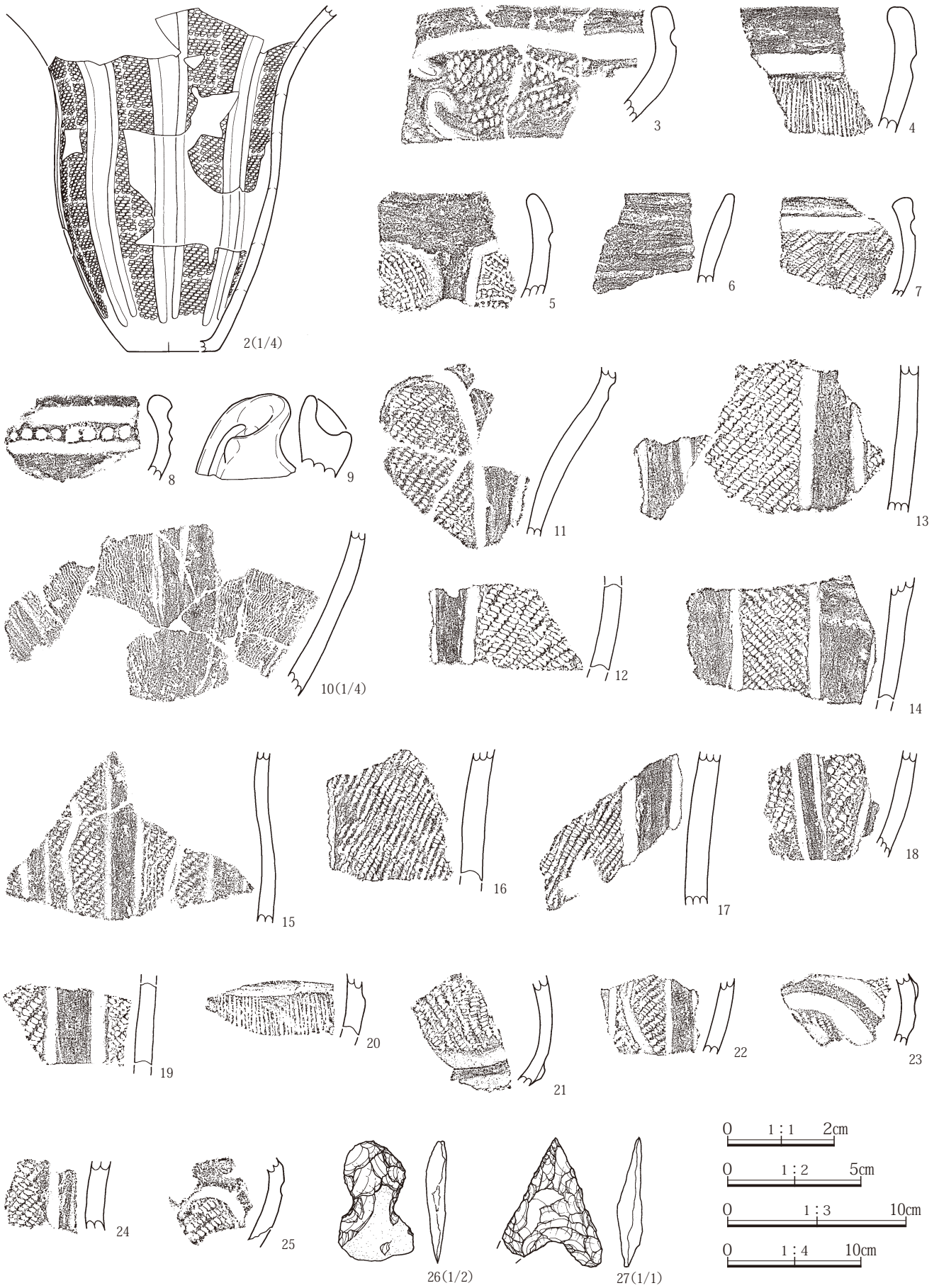
1. 黄褐色土 白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒を含む。地山ロームブロック、黒褐色土ブロックを含む。礫(φ30mm)、土器片を数点含む。縮まりややあり。下面には焼土粒が部分的に堆積しており、硬化している。炉の埋没土。
2. 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を含む。縮まりややあり。上面中央部は焼け縮まっている。
3. 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒を少し含む。黒色土、地山ロームを含む。縮まりややあり。



7号住居ピット

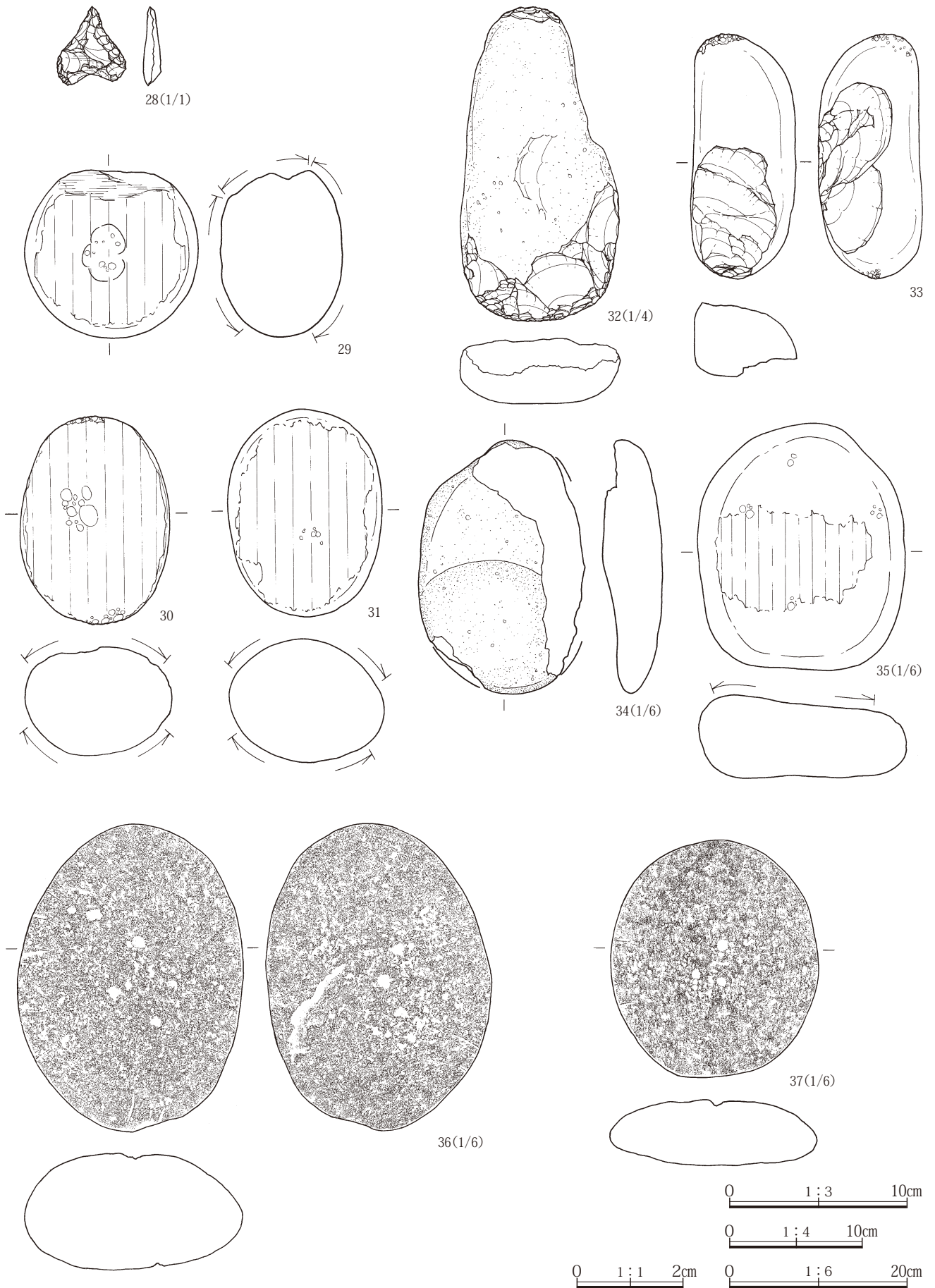
1. 褐色土 黒色土、ローム粒を含む。白色軽石粒(φ 1mm)、炭化物粒(φ 1~3mm)、小礫(φ 2~5mm)を少量含む。縮まり弱い。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。ロームブロック(φ 10~15mm)を斑状に含む。白色軽石粒(φ 1mm)をわずかに含む。縮まり弱い。
3. 黒褐色土 黒色土を多量に含む。炭化物粒(φ 1~2mm)、ローム粒を少量含む。縮まり弱い。

第25図 7号住居遺物出土状態図・炉平断面図・ピット断面図・出土遺物(1)



第26図 7号住居出土遺物(2)

第3章 調査の成果



第27図 7号住居出土遺物(3)

2 土坑

出土遺物や土層の特徴から縄文時代に属すると判断した土坑は合計14基である。すべて北調査区(2～4区)にあり、その中でも、住居の多い北半分に集中する傾向がある。形態は、円形かそれに近い楕円形で断面が逆台形のもの(91・92・97・98・99・101・108号土坑)、長方形かそれに近い楕円形で断面が逆台形のもの(90・93・104・129号土坑)、不整形のもの(103・105・107号土坑)に分類できる。いずれの形態も埋没土は多様であるが、かなり深いものでも1層で埋まったものが多く、それらは人為的に埋没した可能性が高い。遺物が多く出土する土坑はいずれも円形のものであり、これらは集落の存続期間内にある程度明確な意図を持って掘られたものであろう。中には101号土坑のように、住居(4号住居)の遺物と共通し、石鏃の未製品・破片類の廃棄場所と思われるものがあり、住居と土坑との有機的な関係を示すもので注目されるが、その他のものは用途を確定できない。129号を除いた長方形の3基は、黒褐色土か暗褐色土の1層で埋まっている点で共通するが、大きさが異なり用途が同じとは思えない。最大の93号土坑は陥し穴の可能性がある。不整形の3基は断面形もやや不整で、形態に明確な意図があったとは思えず、やはり用途は不明である。

92号土坑(第28図、第56表、P L. 9-5, 80)

北調査区中央やや南寄りにあり、東半部を近現代の溝に破壊されている。本来は直径1.30mのほぼ円形であったと推定され、深さは0.64mである。断面は逆台形で、底面にはわずかな凹凸がある。埋土から加曽利E3式の土器が出土している。掲載するのは深鉢4点であるが、その他に7点の小破片が出土している。他に用途不明の石製品(5)が出土した。

93号土坑(第29図、P L. 10)

北調査区の北側中央付近にあり、東端の一部を近現代の溝に破壊されている。長さ3.47m、幅1.66mの長方形で、深さは0.80mである。その形態から陥し穴の可能性はあるが、逆茂木などの痕跡は発見されなかった。埋土から加曽利E3式の小破片1点出土している。

97号土坑(第29・30図、第15・16・56表、P L. 10-2・3, 80)

北調査区の中央付近にある。1.20m×1.10mのほぼ円形で、深さは0.42mである。断面は逆台形だが、上部の傾斜がやや緩くなっている。埋土からは加曽利E3式の土器27点とE式(おそらくE3式に分類できるものと思われる)の土器が3点出土している。ここではそのうちのE3式の深鉢5点を掲載する。石器は磨石1点を掲載したが、他に剥片22点が出土している。石器、剥片それぞれの石材組成は第15、16表のとおりである。

98号土坑(第28図、第56表、P L. 10-4, 80)

北調査区中央のやや北西寄りにある。0.80m×0.68mの楕円形で、深さは0.41mである。断面は箱形である。埋土からは加曽利E3式の土器が4点、称名寺式が1点、中期末葉から後期前葉に分類できるものが1点出土している。掲載したのは加曽利E3式の深鉢2点である。

99号土坑(第30図、第57表、P L. 10-5, 80)

北調査区の南半部の中央付近にある。1.60m×1.44mの楕円形で、深さはやや浅く0.25mである。埋土からは加曽利E3式の土器2点が出土し、掲載したのは口縁部破片1点である。その他剥片1点(チャート)が出土している。

101号土坑(第30～32図、第17・18・57表、P L. 10-6・7, 80, 81)

北調査区中央やや北寄り、3号住居と4号住居とのほぼ中間にある。2.00m×1.92mのほぼ円形の土坑で、深さは0.68mである。断面は逆台形だが、中ほどで傾斜が緩くなる。中層の2層に焼土を多く含むので、この中で火を焚いた可能性も考えられる。

この土坑からは多くの縄文土器と石器類が出土した。断面図に明らかなように、土器の大きな破片は4層の上部にのるような形で出土し、それ以外の遺物の大部分は1～3層から出土している。土器はいずれも加曽利E3式で61点が出土し、そのうち深鉢5点を掲載した。石器は36点が出土したが、掲載したのは石鏃5点、楔形石器1点、加工痕ある剥片3点、石核2点、石製研磨具1点である。未掲載のものは、石鏃9、加工痕ある剥片13、石核2、剥片206点以上である。石器、剥片それぞれの石材組成は第17、18表のとおりである。チャートとホルンフェルスの剥片が数多く出土している。近接している4号住居からもチャートの破片類が多く出土していて関連が考えられる。これらには多量の石鏃未製品類・破片

第3章 調査の成果

類が含まれており、遺跡内で石鏃を製作していることは
 確実である。

103号土坑(第32図、第57表、P L. 10-8, 81)

北調査区中央付近にある。1.75m×1.38mの不整形で、
 深さは0.33mである。断面も不整形ではっきりとした土
 坑ではないが、加曽利E3式の土器が1点出土している。

104号土坑(第32図、P L. 11-1)

北調査区中央付近にあり、1号古墳周堀の下層にある。
 3.27m×1.03mの長方形で、深さは0.40m。断面は逆台
 形のしっかりとした土坑である。北東部に105号土坑が
 重複し、本土坑が古い。掲載していないが加曽利E3式

の土器1点が出土していること、3、4号住居や101、
 103号土坑といった縄文時代の遺構に囲まれていること
 から、縄文時代の遺構として扱ったが、弥生時代中期前
 半の土器も1点出土しており、その時期まで下る可能性
 もある。ただし、出土している弥生土器はわずか2cmほ
 どの小破片であり、混入の可能性もあるので、ここでは
 縄文時代の遺構として掲載した。弥生時代中期前半の土
 器は、次節で述べるように、南調査区で多く出土してい
 るが、北調査区でもこの他に72点出土している。その他、
 剥片1点(チャート)が出土している。

第14表 縄文時代土坑一覧表

番号	調査区	所在グリッド	主軸方位	大きさ		備考
				長辺×短辺×深さ(m)		
90	2区	195-040	N-23°-E	(1.18)×0.68×0.31		2号周溝墓より古い。
91	3区	160-030	N-38°-W	1.05×1.00×0.49		
92	3区	165-030		1.30×(1.24)×0.64		縄文土器11点、石製品1点出土。
93	3区	200-020	N-61°-W	3.47×1.66×0.80		縄文土器1点出土。
97	2区	180-030	N-62°-W	1.20×1.10×0.42		縄文土器30点、磨石1点、剥片22点出土。
98	2区	195-030	N-15°-E	0.80×0.68×0.41		縄文土器6点出土。
99	3区	160-010	N-13°-W	1.60×1.44×0.25		縄文土器2点、剥片1点(チャート)出土。
101	3区	185-010		2.00×1.92×0.68		縄文土器61点、石器36点、剥片206点以上出土。
103	3区	180-020	N-67°-W	1.75×1.38×0.33		縄文土器1点出土。
104	3区	185-020	N-26°-E	3.27×1.03×0.40		105号土坑より古い。1号古墳の下層にある。縄文土器1点、剥片1点(ホルンフェルス)、弥生土器1点出土。
105	3区	185-015	N-48°-E	(0.95)×0.80×0.16		104号土坑より新しい。1号古墳の下層にある。
107	3区	170-005	N-81°-E	1.08×0.74×0.20		
108	4区	185-980	N-14°-E	1.28×1.20×0.29		剥片1点(チャート)出土。
129	3区	185-005	N-19°-W	1.84×1.22×0.20		3号住居より新しい。

第15表 97号土坑石器器種別石材組成一覧

石材	打製 石斧	磨製 石斧	石鏃	楔形 石器	削器	石核	加工痕 ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	研磨 具	合計
珪質頁岩														0
黒色安山岩														0
チャート														0
ホルンフェルス														0
粗粒輝石安山岩									1					1
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

第16表 97号土坑剥片石材組成一覧

石材	個数	重量 (g)
珪質頁岩	1	5.7
黒色安山岩	2	4.5
チャート	16	82
ホルンフェルス	3	415.8
粗粒輝石安山岩		
合計	22	508

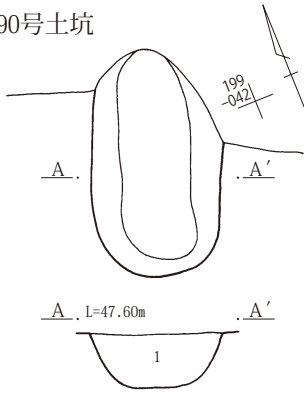
第17表 101号土坑石器器種別石材組成一覧

石材	打製 石斧	磨製 石斧	石鏃	楔形 石器	削器	石核	加工痕 ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	研磨 具	合計
珪質頁岩														0
黒色安山岩			1				1							2
チャート			12	1		4	15							32
ホルンフェルス			1											1
粗粒輝石安山岩													1	1
合計	0	0	14	1	0	4	16	0	0	0	0	0	1	36

第18表 101号土坑剥片石材組成一覧

石材	個数	重量 (g)
珪質頁岩	4	5.6
黒色安山岩	19	38.6
チャート	119+α	944.2
ホルンフェルス	64	451.6
粗粒輝石安山岩		
合計	206+α	1440

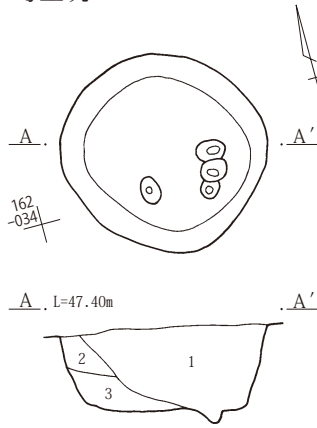
90号土坑



90号土坑

1. 黒褐色土 黒色土を多く含む。地山ロームブロックを斑状に含む。白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒、小礫(φ10mm程)を少し含む。やや砂質。締まりややあり。

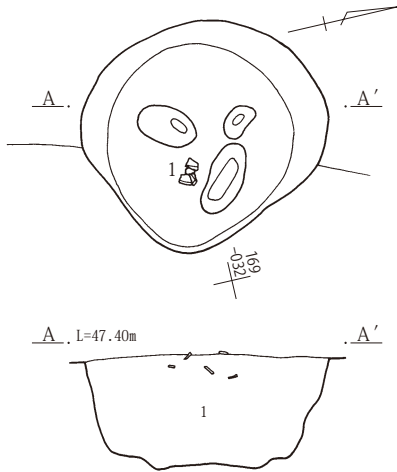
91号土坑



91号土坑

1. 黒褐色土 黒色土を多く含む。地山ロームブロックを斑状に含む。白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒、小礫(φ10mm程)を少し含む。やや砂質。締まりややあり。
2. にぶい黄褐色土 地山ロームを多く含む。黒色土ブロックを斑状に含む。白色軽石粒、焼土粒を少し含む。締まりやや弱い。
3. 黄褐色土 地山ローム、黒色土を斑状に含む。ローム粒、炭化物粒、白色軽石を含む。締まりあり。

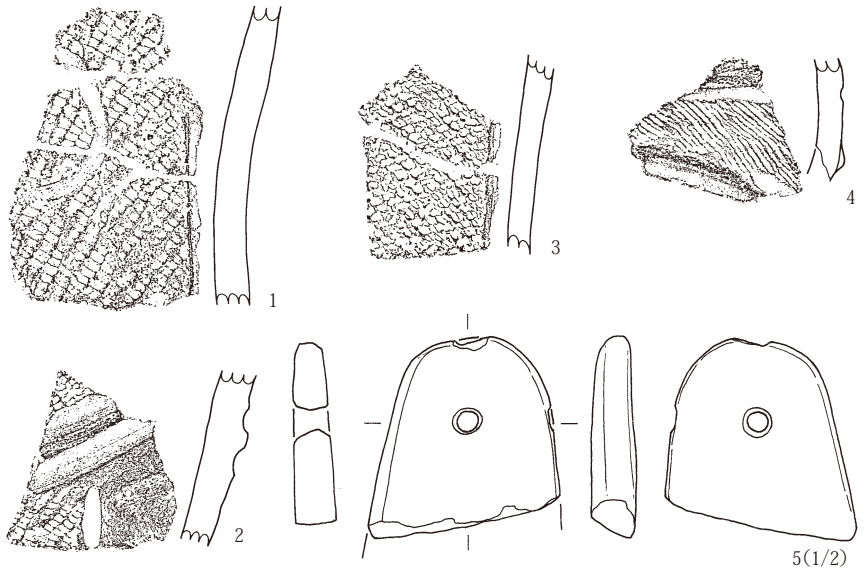
92号土坑



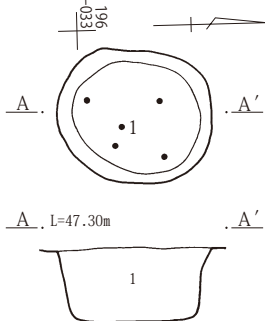
92号土坑

1. 黄褐色土 地山ロームブロックを多く含む。黒色土ブロックを含む。焼土粒、炭化物粒、白色軽石粒を少し含む。ブロック状に硬く締まった黒色土ブロックあり。締まりあり。縄文土器片出土。

92号土坑出土遺物



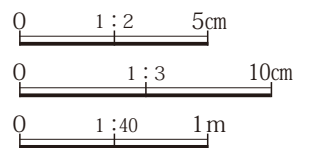
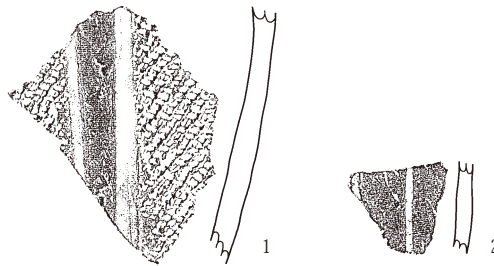
98号土坑



98号土坑

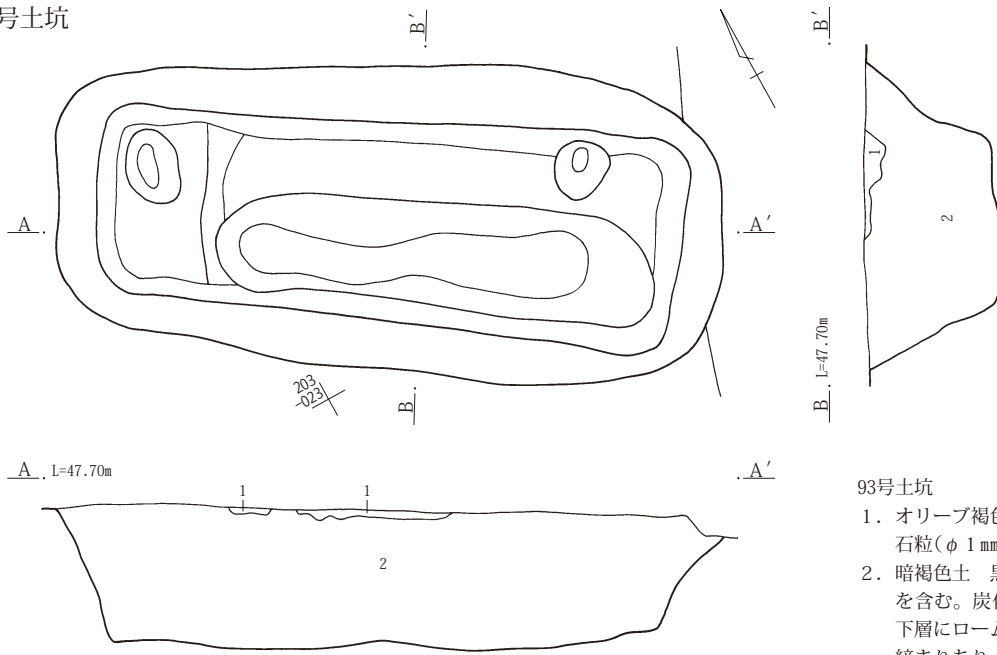
1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒、炭化物粒(φ1mm)を少量含む。ロームブロック(φ5~10mm)を斑状に含む。締まりあり。

98号土坑出土遺物



第28図 90～92・98号土坑平断面図、92・98号土坑出土遺物

93号土坑

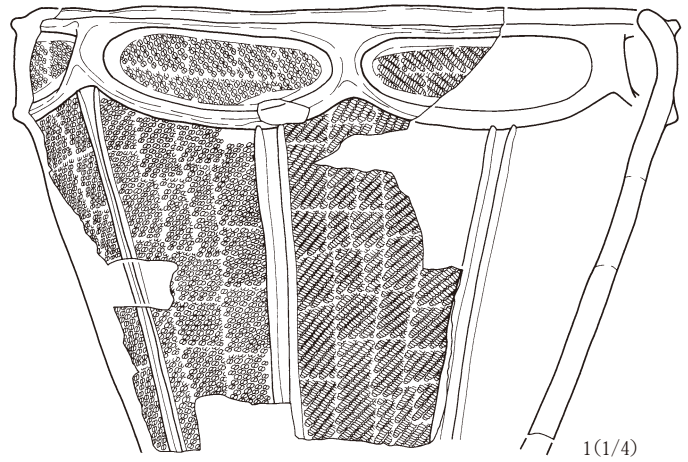
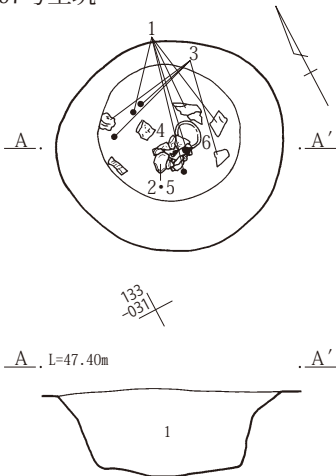


93号土坑

1. オリーブ褐色土 黒色土を少量含む。白色軽石粒(φ 1mm)を含む。縮まりあり。
2. 暗褐色土 黒色土、白色軽石粒(φ 1~2mm)を含む。炭化物粒(φ 1~2mm)を少量含む。下層にロームブロック(φ 10~15mm)を含む。縮まりあり。

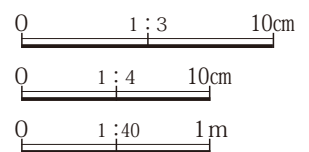
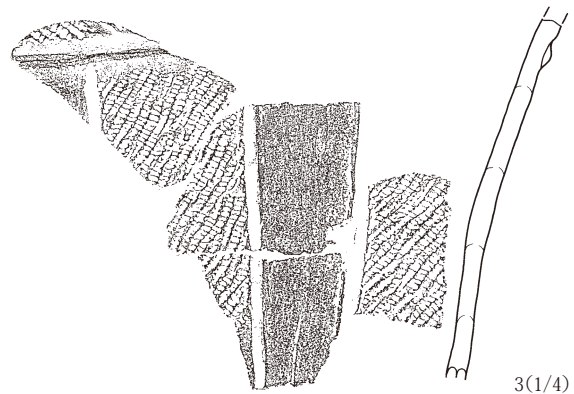
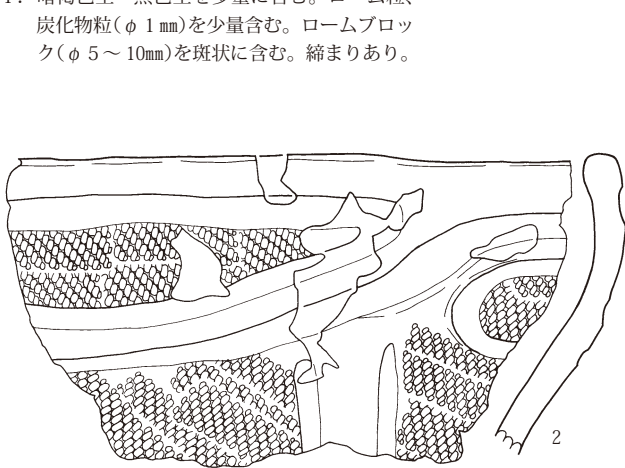
97号土坑

97号土坑出土遺物

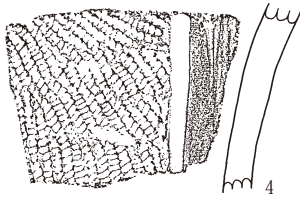


97号土坑

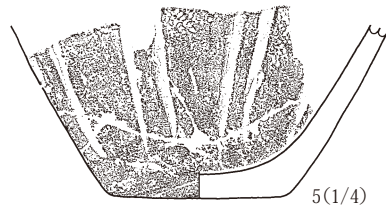
1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒、炭化物粒(φ 1mm)を少量含む。ロームブロック(φ 5~10mm)を斑状に含む。縮まりあり。



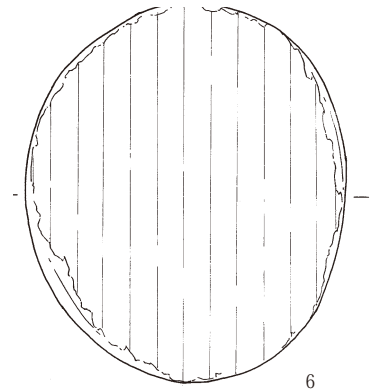
第29図 93・97号土坑平断面図、97号土坑出土遺物(1)



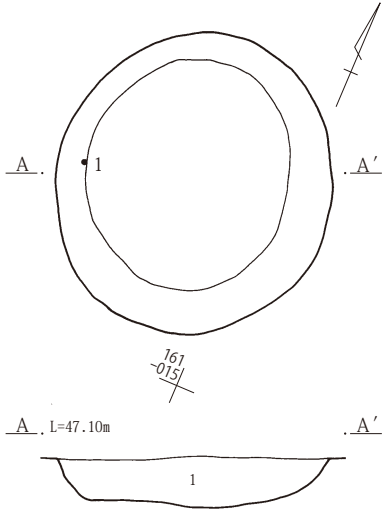
99号土坑



101号土坑

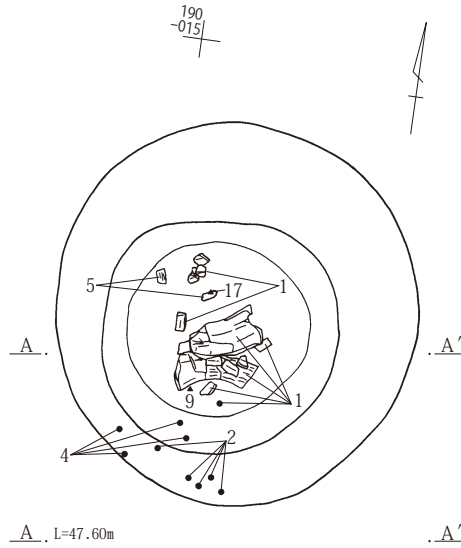


6



99号土坑

1. 暗褐色土 黑色土を多量に含む。ローム粒を含む。焼土粒(φ 1mm)、炭化物粒(φ 1~2mm)、白色軽石粒(φ 1mm)を少量含む。ロームブロック(φ 10~15mm)を斑状に含む。縮まりあり。



101号土坑

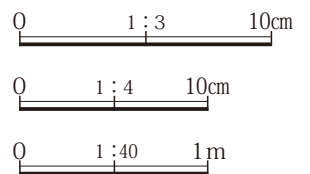
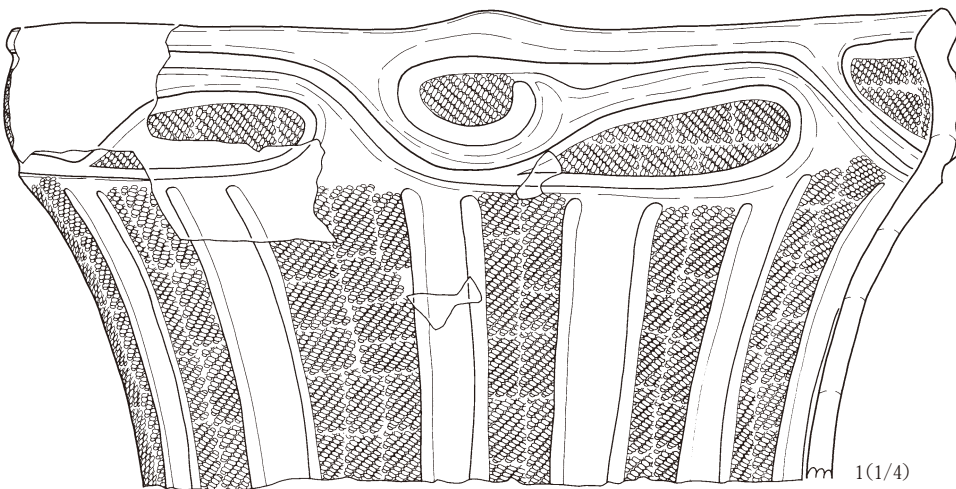
101号土坑

1. 暗褐色土 黑色土を多量に含む。ローム粒、焼土粒(φ 1~2mm)、炭化物粒(φ 1~3mm)、白色軽石粒(φ 1mm)を含む。縮まりあり。
2. 明赤褐色土 黑色土、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む。焼土粒が全体に広がっている。縮まり強い。
3. 黄褐色土 ローム主体。黑色土を含む。縮まり弱い。
4. 褐色土 黑色土、ローム粒を含む。焼土粒、炭化物粒を少量含む。縮まりあり。

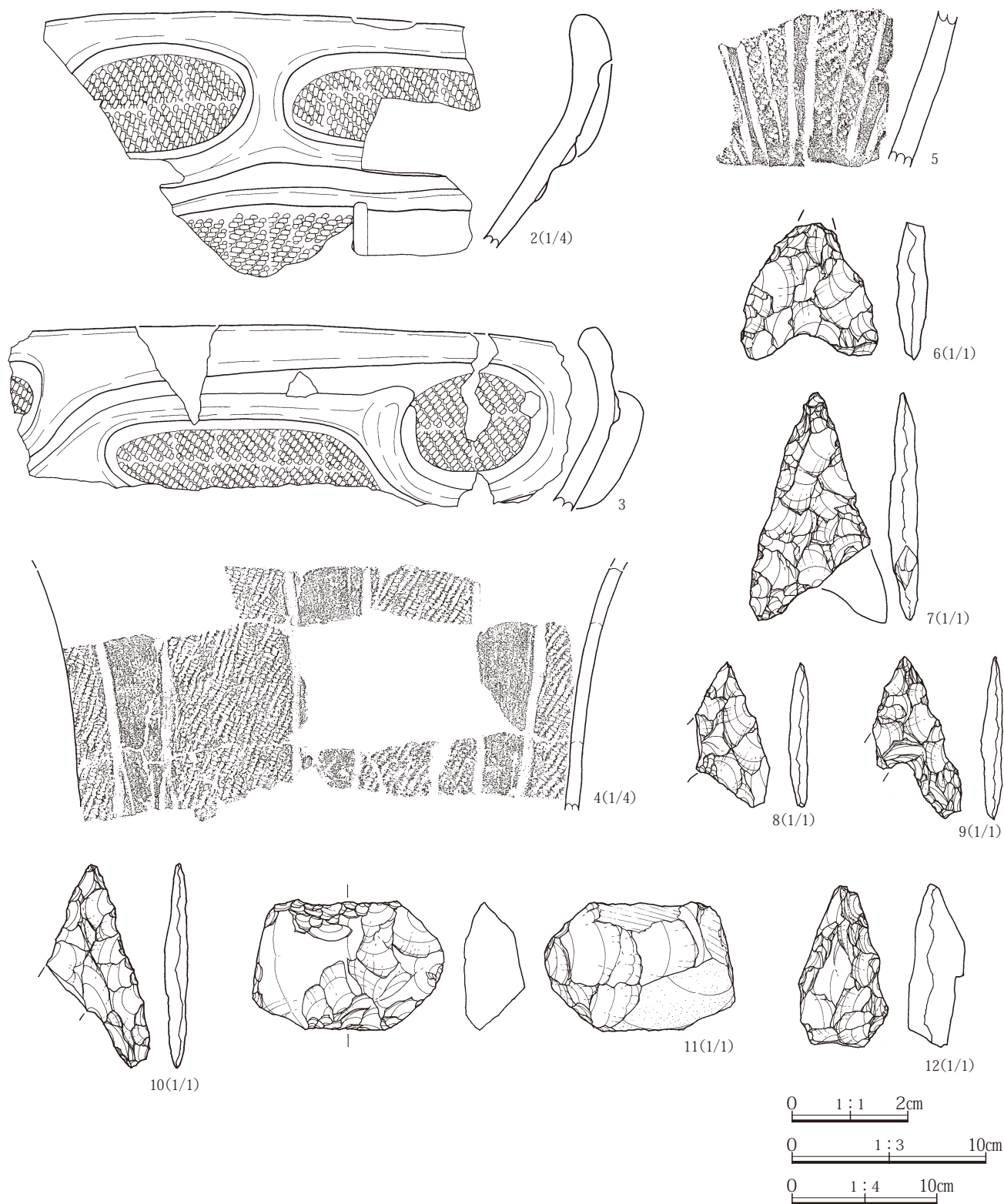
99号土坑出土遺物



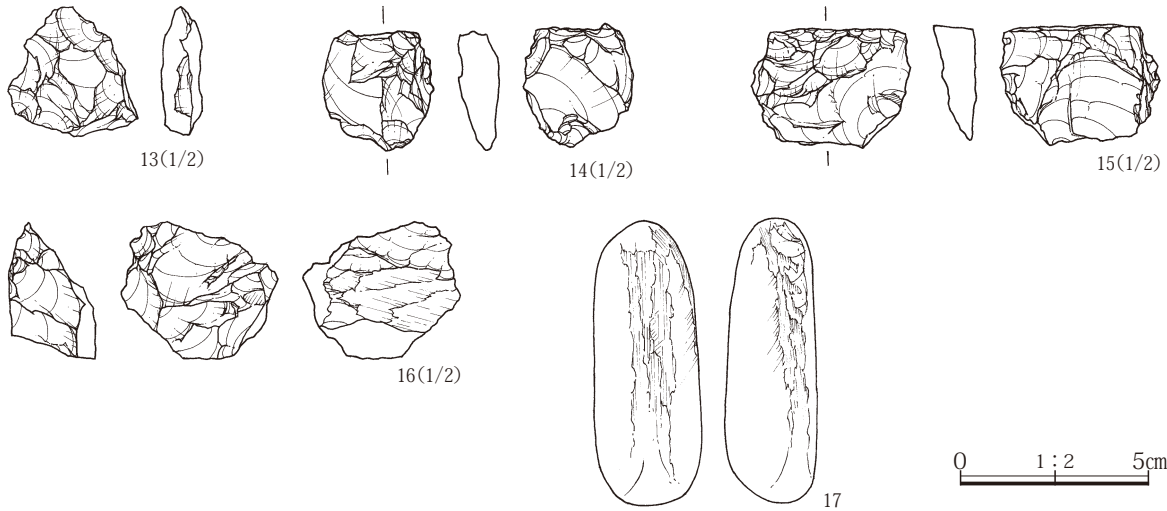
101号土坑出土遺物



第30図 97号土坑出土遺物(2)、99・101号土坑平断面図、99号土坑出土遺物、101号土坑出土遺物(1)



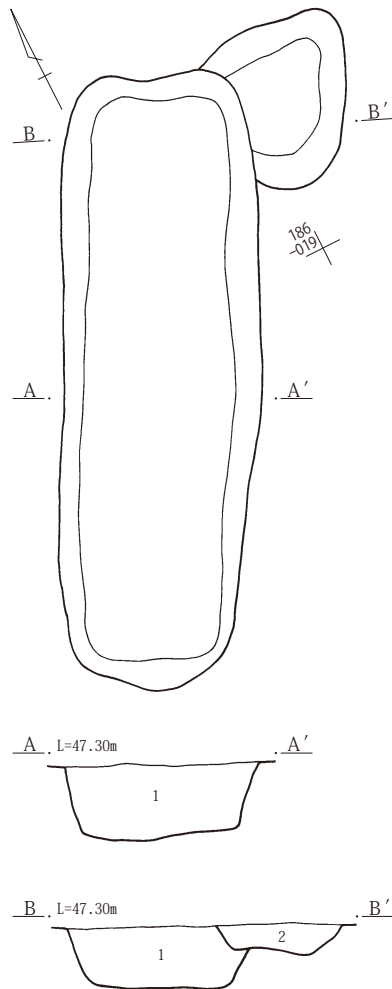
第31図 101号土坑出土遺物(2)



0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

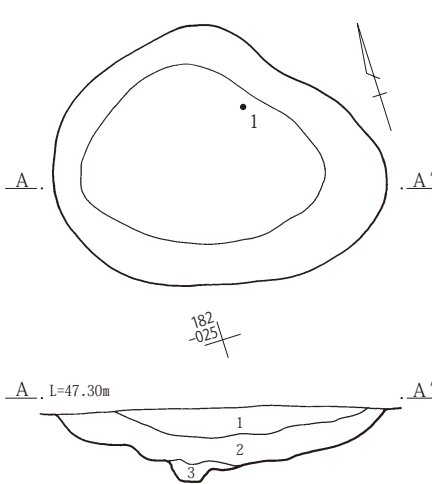
104・105号土坑



104・105号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒、ロームブロック(φ10~15mm)を含む。締まり弱い。104号土坑。
2. 暗褐色土 1層に似るが、やや明るい。105号土坑。

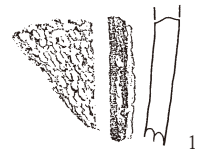
103号土坑



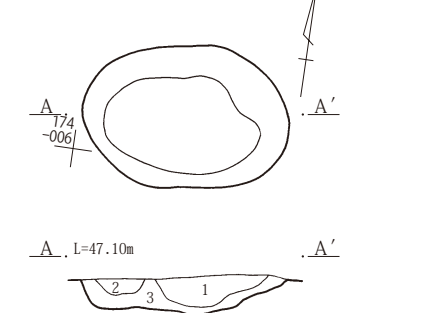
103号土坑

1. 暗褐色土 黒色土をやや多く含む。ロームブロックを含む。締まりやや弱い。縄文土器片少量出土。
2. 褐色土 黒色土、ロームを含む。締まりやや弱い。
3. にぶい黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土を少し含む。締まりあり。

103号土坑出土遺物



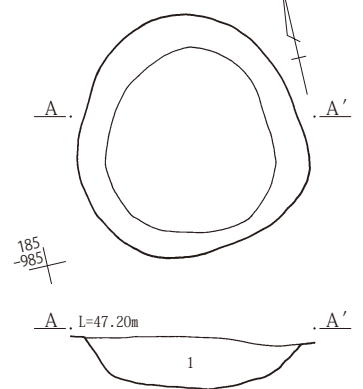
107号土坑



107号土坑

1. 黒褐色土 黒色土を多く含む。ローム、白色軽石を少し含む。締まり非常に硬く、粘質。
2. 暗褐色土 1層に似るが、ロームブロックをより多く含んでいる。
3. にぶい黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土を少し含む。底面は非常によく締まっている。

108号土坑



108号土坑

1. 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを斑状に含む。締まりよく硬い。炭化物粒を含む。

0 1:40 1m

第32図 101号土坑出土遺物(3)、103~105・107・108号土坑平断面図、103号土坑出土遺物

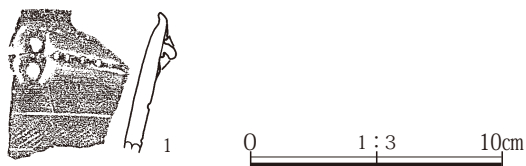
3 その他の遺構

その他、縄文時代に属する可能性のある遺構は数少なく、遺物の出土から縄文時代と考えられるのは北調査区の1号ピットと、南調査区1-2区の25、58号ピットの合計3基のピットのみである。南調査区では5面に68基のピットがあり、調査時にはそのいずれもが縄文時代のもので推定されたが、整理作業の結果、この面では縄文から古墳時代にかけての土器が出土しており、時期を特定することは難しいことが明らかとなった。そのため、25、58号ピットも新しい時期のもので、土器は混入である可能性が生じるが、ここでは土器の出土を重視して縄文時代の遺構として報告し、その他は古墳時代で扱うことにする。ピットのデータは下表の通りである。位置は付図を参照のこと。

遺物は縄文土器片が1点ずつ出土しているだけである。掲載した遺物は25号ピットから出土した深鉢の口縁部破片(第33図、第57表、P.L. 81)である。堀之内2式のものと思われる。その他2基のものは小破片であるが、南調査区の58号ピットのものは同じく堀之内2式、北調査区の1号ピットのものは加曾利E式と思われる。

第19表 縄文時代ピット一覧表

番号	調査区	グリッド	大きさ(cm)		備考
			長径×短径×深さ		
1	4区	195-000	55×50×30		縄文土器1点。
25	1-2区第5面	155-170	41×36×18		縄文土器1点。
58	1-2区第5面	150-140	39×31×27		縄文土器1点。



第33図 25号ピット出土遺物

4 遺構外出土の遺物

遺構外から出土した縄文時代の土器は1,082点である。前期から晩期まで、各期の土器が出土しているが、それを各調査区別に集計したものが第20表である。ここではそれらの土器のうち、合計85点を掲載した。以下南調査区(1区)、北調査区(2~4区)に大別し、その中で第20表に上げた時期順に実測図を掲載する。

土器のうち多数を占めるのは加曾利E3式であり、これはこの時期の住居が4軒調査されていることから見ても当然の結果である。その他の時期の遺構は調査区内では見つかっていないので、近傍の遺跡からの混入品であると思われる。

石器も数多く出土しているが、縄文時代のもので弥生時代のもので区別するのは困難であり、ここでは「石鋤」を除いた石器を縄文時代のもので扱うことにした。それらは南北調査区を合わせて168点出土しているが、掲載したのは35点である。その他、剥片が261点出土しており、石器、剥片それぞれの石材別の組成は第21~24表にあげたとおりである。

ここで竪穴住居・土坑から出土したのもも含めて石材組成の全体的な傾向をまとめておく。チャート、ホルンフェルスが大部分を占め、その他の石材は少ない。特に黒曜石は2点しかなく、その消費量はきわめて少ない。石材の産地は、チャート・ホルンフェルス・砂岩・頁岩等は在地渡良瀬川、黒色頁岩・黒色安山岩は利根川流域の石材、片岩類は三波川、黒曜石は信州産であると思われる、赤碧玉は不明である。

第20表 遺構外出土縄文土器分類表

		黒浜	諸磯 a	阿玉台	中期中葉	加曾利 E3	加曾利 E	中期末葉 後期前葉	称名寺	堀之内 1	堀之内 2	加曾利 B	後期前葉	晩期	不明	総計
南調査区	1区	5	3			46		80	3	4	1			3		
北調査区	2区	53	3		2	169	54	40	5		10	1		2	1	
	3区	28	1	6		288	65	48	9		2	2	1		12	
	4区	2				111	17	2	2	1						
小計		88	7	6	2	614	136	170	19	5	13	3	1	5	13	1082

第21表 南調査区石器器種別石材組成一覽

石材	打製石斧	石鏃	石錐	削器	石核	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	三角錐形石器	多孔石	石製研磨具	合計
黒色頁岩						1							1			2
頁岩															1	1
珪質頁岩	1		1													2
砂岩					1											1
黒色安山岩																0
黒曜石					1											1
チャート		5			2											7
ホルンフェルス	19	1		2	4	12				1						39
細粒輝石安山岩	1															1
粗粒輝石安山岩								10	10	7	1	1		5		34
溶結凝灰岩								1								1
雲母石英片岩																0
合計	21	6	1	2	8	13	0	11	10	8	1	1	1	5	1	89

第22表 南調査区剥片石材組成一覽

石材	個数	重量 (g)
黒色頁岩	10	32.1
頁岩		
珪質頁岩	4	24.4
砂岩		
黒色安山岩	6	50.78
黒曜石		
チャート	41	519.01
ホルンフェルス	56	1725.56
細粒輝石安山岩	1	11
粗粒輝石安山岩		
溶結凝灰岩		
雲母石英片岩	1	6
合計	119	2368.85

第23表 北調査区石器器種別石材組成一覽

石材	打製石斧	石鏃	石錐	削器	石核	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	三角錐形石器	多孔石	石製研磨具	合計
黒色頁岩																0
頁岩															1	1
珪質頁岩		1					1									2
珪質粘板岩						1										1
砂岩						1										1
黒色安山岩						1										1
黒曜石		1														1
赤碧玉																0
チャート		12			3	7			1							23
ホルンフェルス	9				3	10										22
粗粒輝石安山岩								6	11	5		1				23
溶結凝灰岩									1	2						3
閃緑岩											1					1
合計	9	14	0	0	6	20	1	6	13	8	0	1	0	0	1	79

第24表 北調査区剥片石材組成一覽

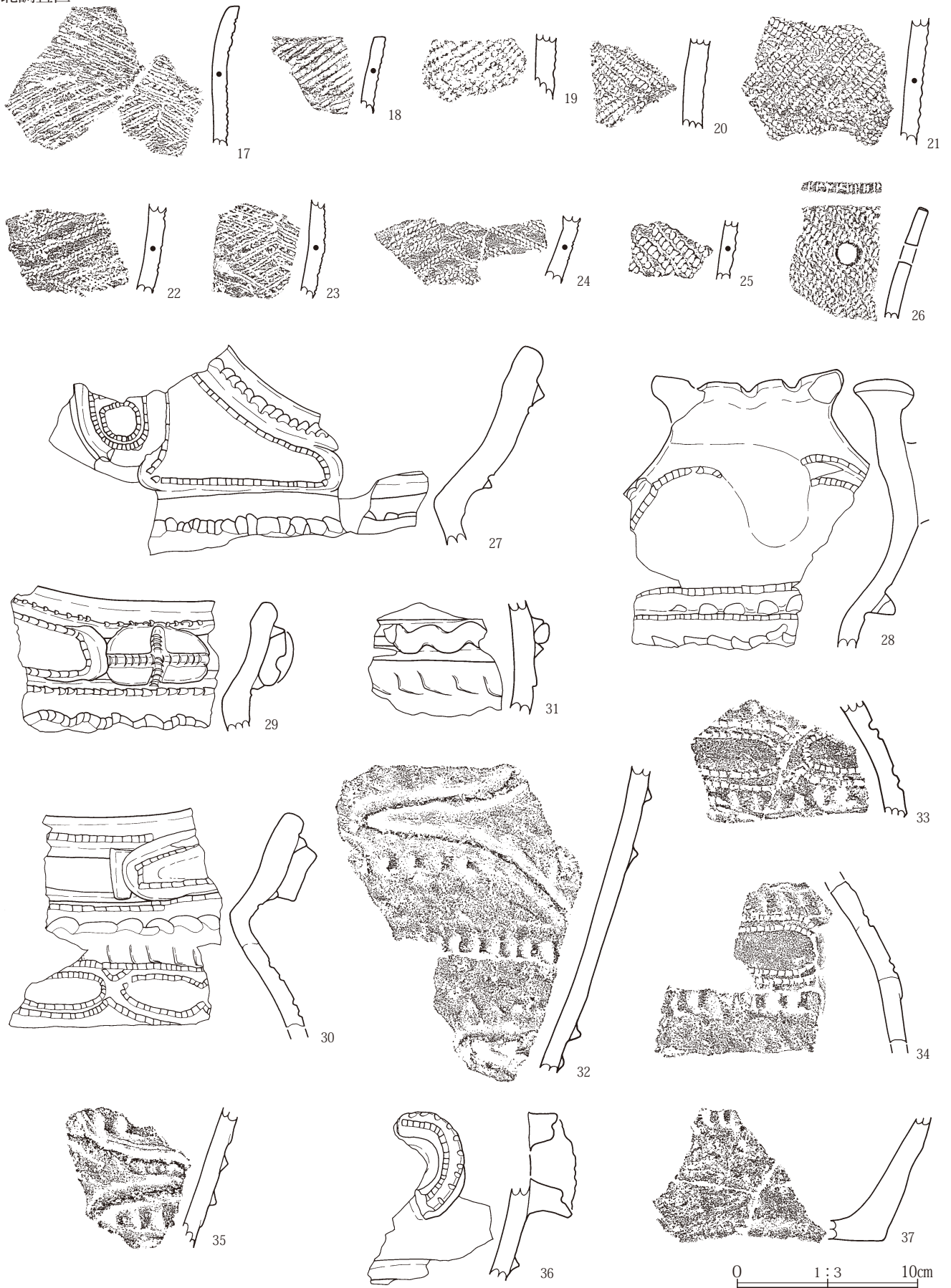
石材	個数	重量 (g)
黒色頁岩	3	84.2
頁岩	1	19.1
珪質頁岩	3	11.9
珪質粘板岩		
砂岩		
黒色安山岩		
黒曜石		
赤碧玉	1	5
チャート	76	669.2
ホルンフェルス	57	2094.4
粗粒輝石安山岩	1	12.1
溶結凝灰岩		
閃緑岩		
合計	142	2895.9

南調査区

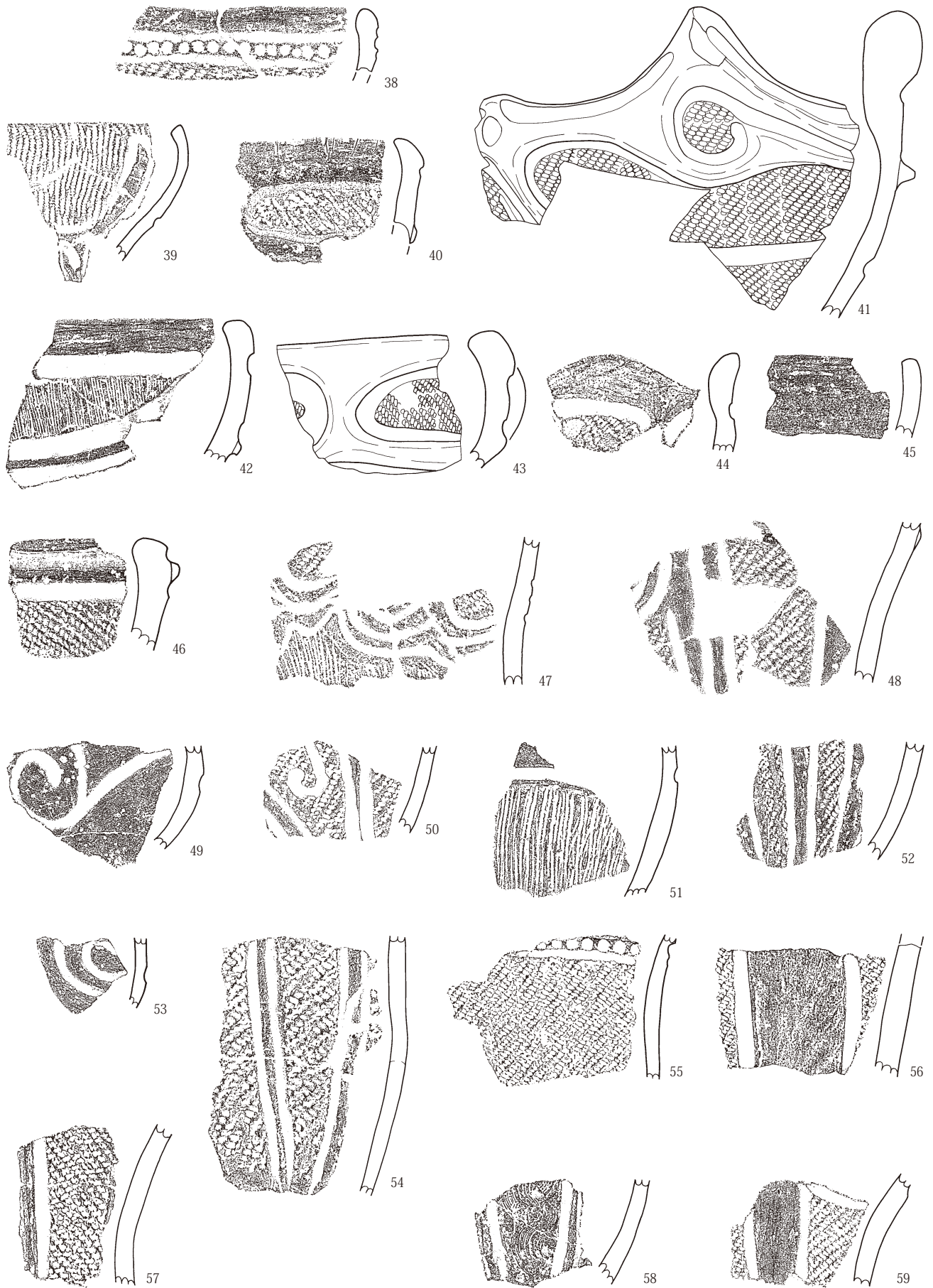


第34図 縄文時代・遺構外出土の遺物(1)

北調査区

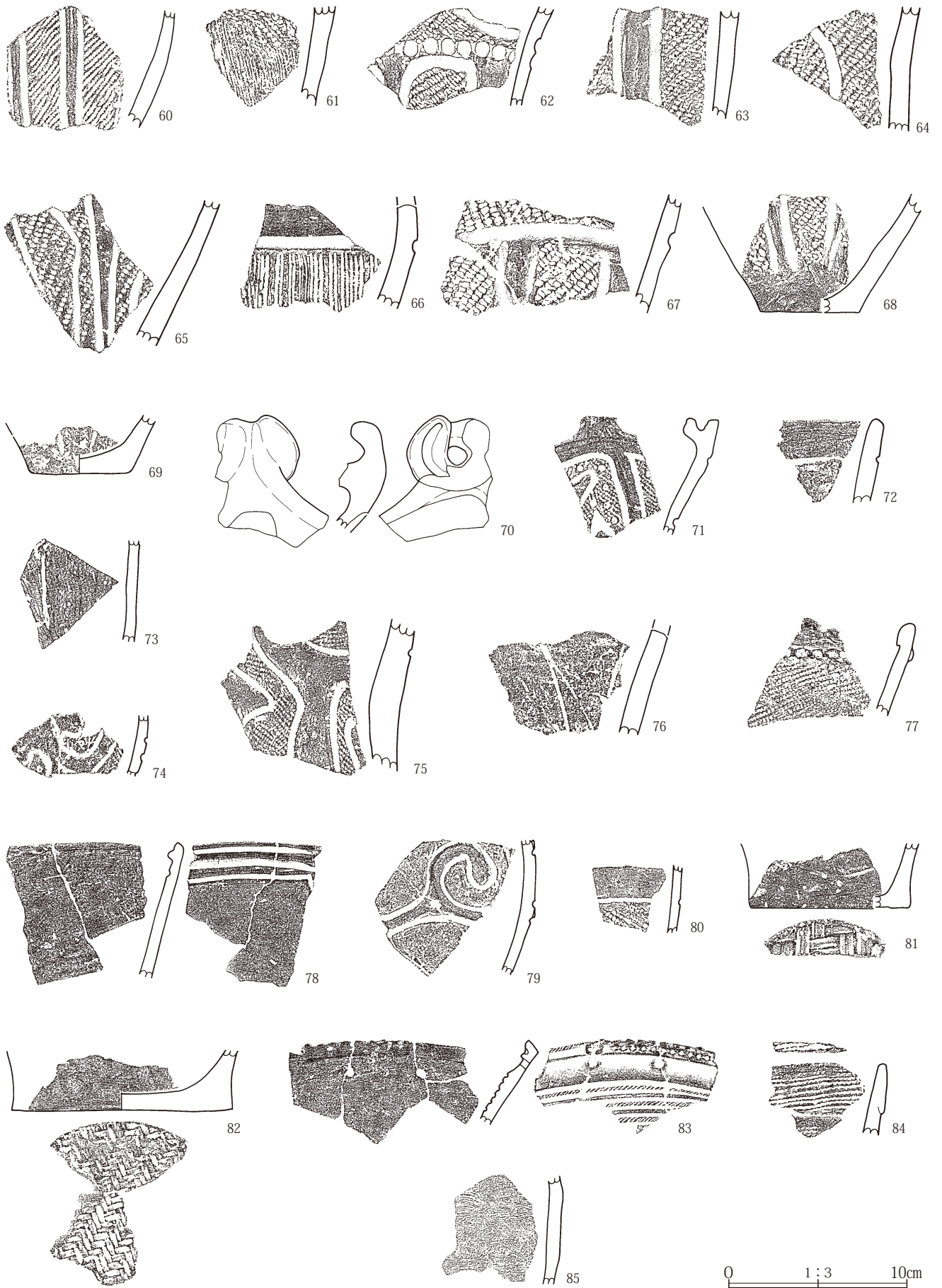


第35図 縄文時代・遺構外出土の遺物(2)



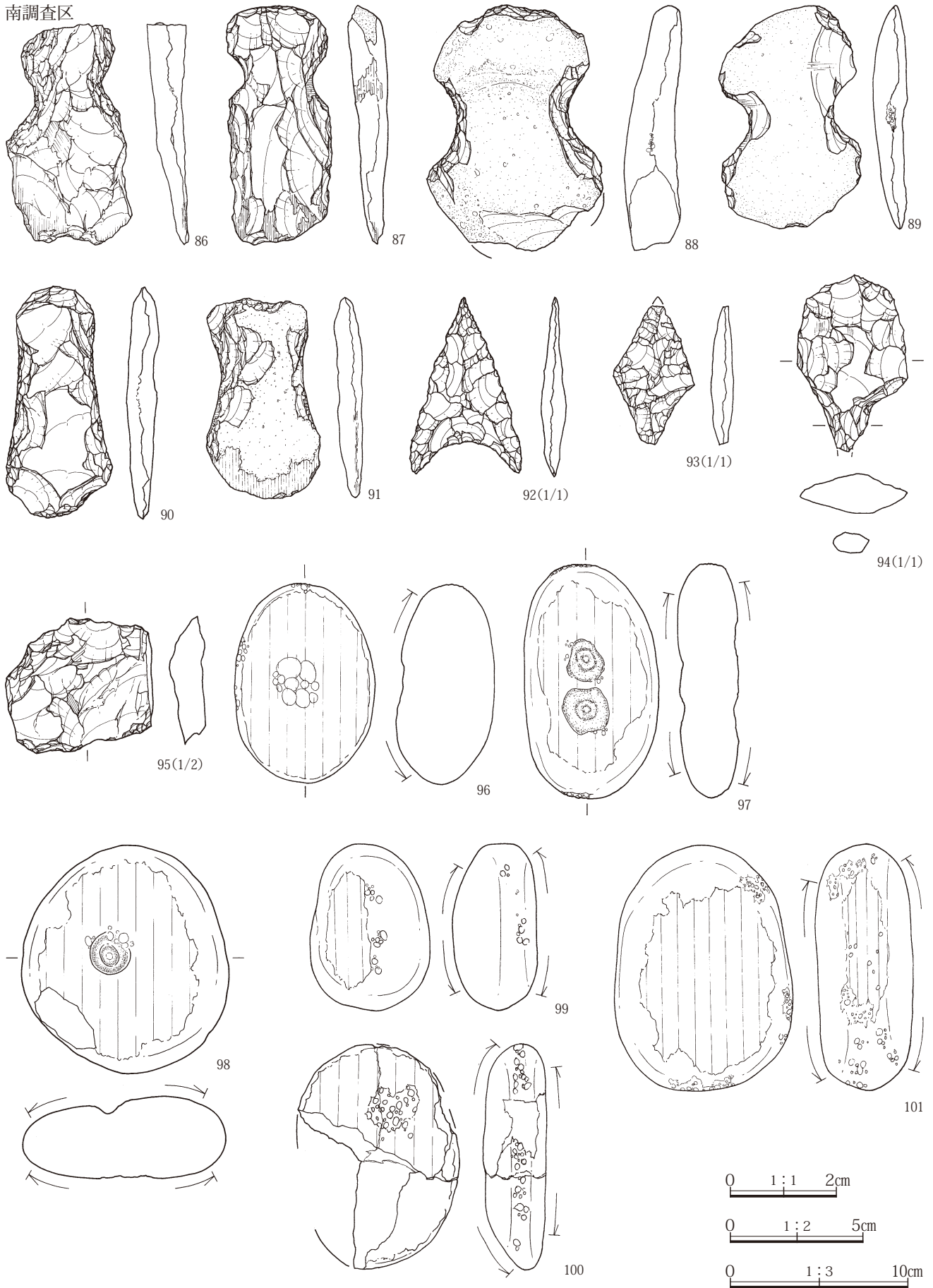
第36図 縄文時代・遺構外出土の遺物(3)

0 1:3 10cm



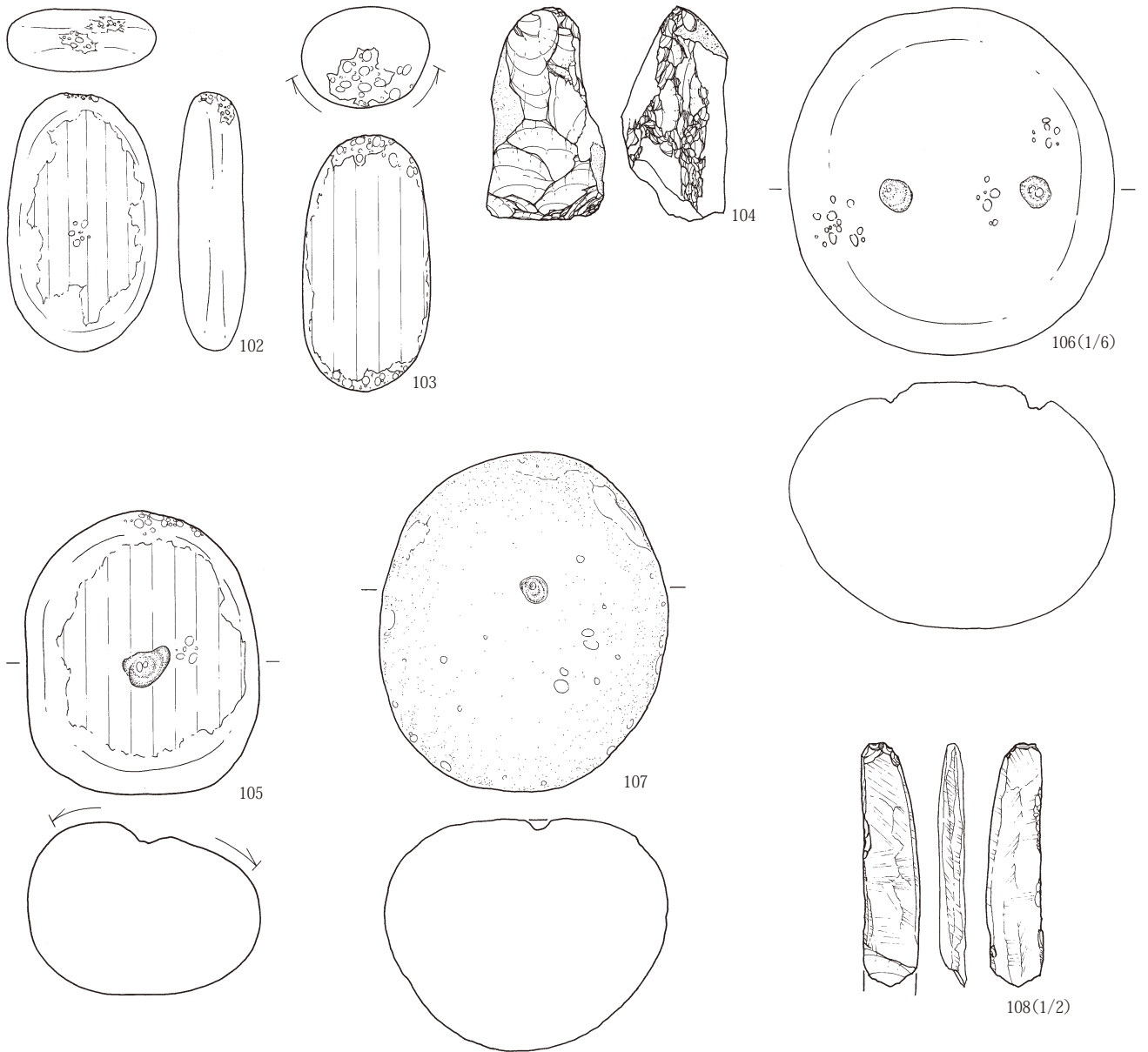
第37図 縄文時代・遺構外出土の遺物(4)

南調査区

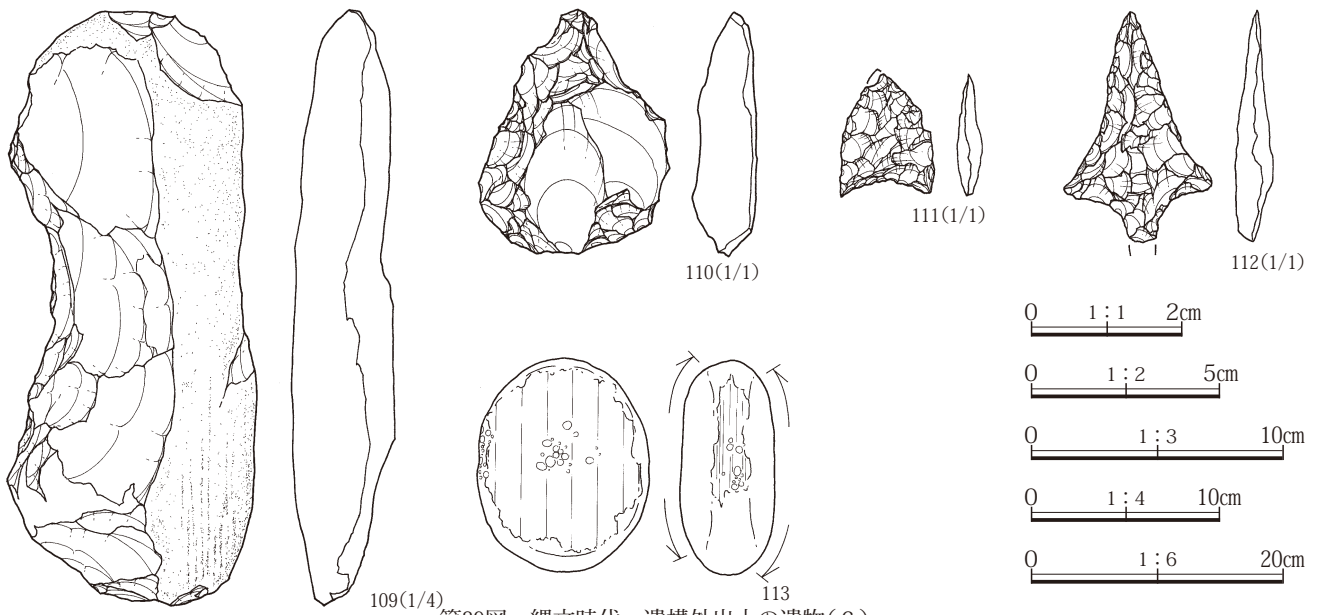


第38図 縄文時代・遺構外出土の遺物(5)

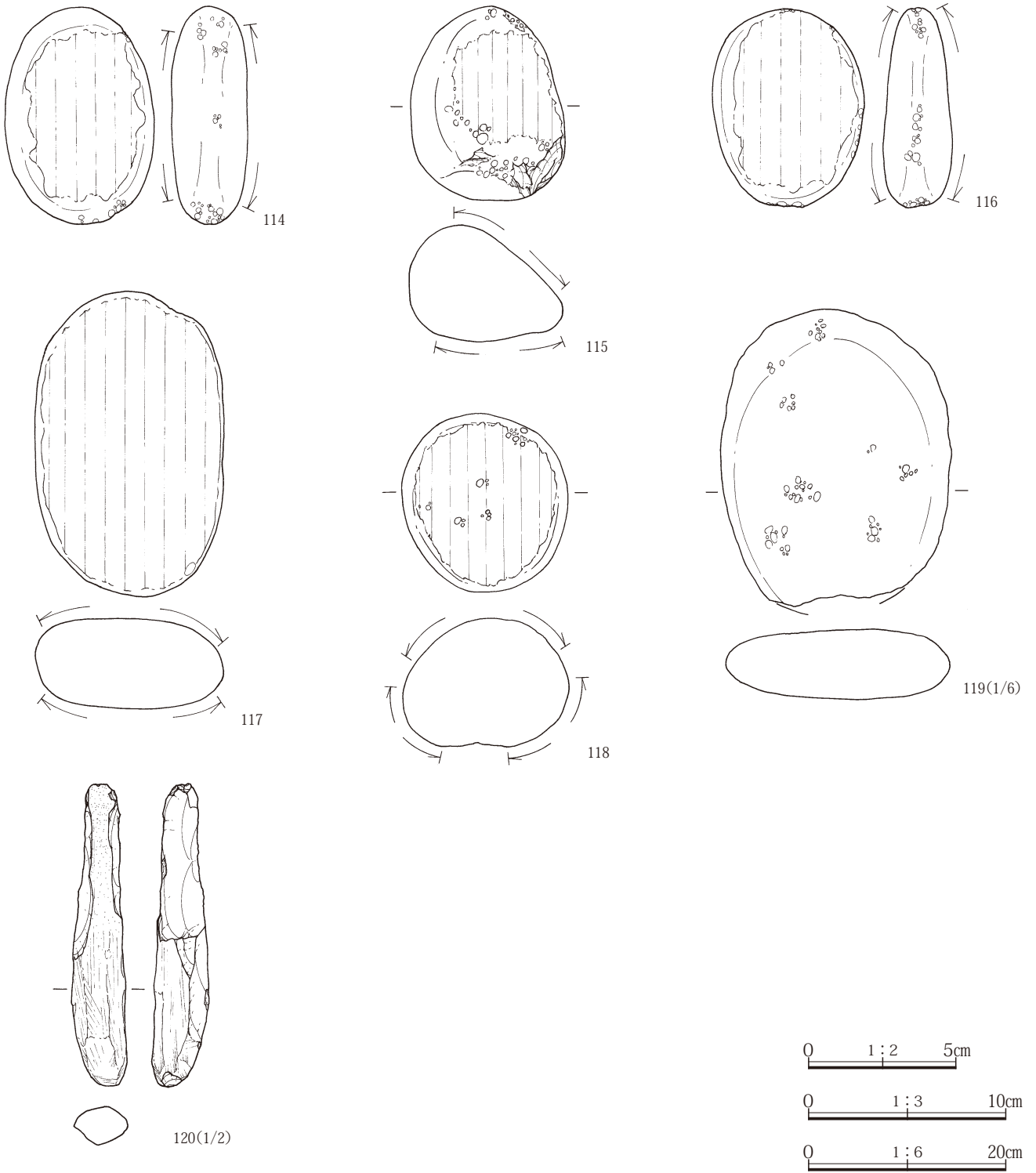
第3章 調査の成果



北調査区



第39図 縄文時代・遺構外出土の遺物(6)



第40図 縄文時代・遺構外出土の遺物(7)

第4節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代は、竪穴住居などの顕著な遺構が見つかったわけではなく、本遺跡内におけるこの時代の様相はあまりはっきりしない。この時代の遺物は南調査区(1区)から多く出土し、弥生土器全出土数769点のうち、90%の689点が集中している。このため、南調査区に弥生時代の遺跡があったものと考えられる。実際、この地区の第5面からは弥生時代の土器が出土する土坑が見つかったが、第3節でも述べたように、この面からは縄文～古墳時代前・中期の土器が出土しており、各遺構の所属年代の決定は難しい。ここでは南調査区で見つかった遺構のうち、弥生土器が出土した土坑3基と、弥生土器と縄文土器が出土した土坑1基を弥生時代に属するものとして報告する。

1 土坑

前述のように、弥生時代に属すると思われる南調査区の土坑は4基である。このうち、121、124号土坑は第5面で調査したものである。109号土坑は1-1区北部のローム台地上にあり、第1面として調査したが、弥生土器だけが7点出土しているので、本節では弥生時代の遺構として扱った。また116号土坑は109号土坑のそばにありながら第1面調査時には確認できず、第5面の精査時に新たに確認できたものであるが、やはり弥生土器のみが出土するため、この時代のもと思われる。

土坑の形態は、円形のもの(109・116号土坑)、不整形のもの(121・124号土坑)に分けられる。円形ものは断面が箱形で整っており、その形態にある程度明確な意図があったものと思われる。遺物も比較的多く出土しているので、近傍に想定される集落の存続期間に近い時期のものである可能性が高いが、用途は明らかにできなかった。不整形のものは大小あり、そのうち124号は大きく

深く、埋土には多くの礫を含んでいたが、用途は不明である。

109号土坑(第41図、第61表、P.L. 11-4, 85)

1-1区の北端部隅にある。前述のようにこの部分は北調査区から続くローム台地であるため、第1面の調査の際に見ついている。4号溝と重複し、本遺構が古いことは断面図に明らかである。北西の半分ほどが調査区外となるが、ほぼ円形の土坑と思われ、直径は調査区境のところで計測して1.31mである。深さは0.44mで、断面は逆台形である。弥生土器は7点が出土したが、掲載するのはそのうちの4点である。いずれも弥生時代中期前半のものと思われる。

116号土坑(第42図、第61表、P.L. 13-1・2, 85)

1-1区北端近くにある。この付近は109号土坑同様ローム台地上となるので、第1面で見つかったはずの土坑であるが、第1面調査時にはその存在に気がつかず、第5面としてこの付近を精査していた時に新たに確認できたものである。弥生土器22点と石器・剥片類16点が出土したため、弥生時代の遺構と思われる。ここではそれらのうち、弥生土器6点と磨石2点、敲石2点を掲載する。弥生土器は中期前半の古段階のもので、神保富士塚式よりも古相を示すものである。

121号土坑(第41図、第61表、P.L. 13-3, 85)

1-1区西隅付近にある。0.57m×0.46mの小さな不整形の土坑で、深さは0.10mしかない。弥生土器が1点のみ出土している。中期前半の台付鉢であると思われる。

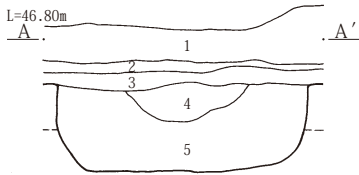
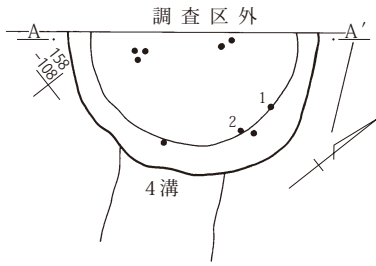
124号土坑(第41図、第62表、P.L. 13-4, 85)

1-2区北側中央付近にある。3.61m×2.30mの不整形で、深さは0.92mある。埋土には礫が大量に含まれていた。出土した遺物は弥生土器2点、縄文土器2点であり、弥生土器2点を掲載した。いずれも中期後半のものである。縄文土器は小破片であるが、中期末葉から後期前葉にかけてのものであると思われる。

第25表 弥生時代土坑一覧表

番号	調査区	所在グリッド	主軸方位	大きさ	備考
				長辺×短辺×深さ(m)	
109	1-1区	155-105	N-37°-E	1.31×(0.74)×0.44	4号溝より古い。弥生土器7点出土。
116	1-1区	155-100	N-65°-W	1.48×1.35×0.50	弥生土器21点、石核1点、磨石2点、敲石8点、剥片5点出土。
121	1-1区	135-120	N-84°-E	0.57×0.46×0.10	弥生土器1点出土。
124	1-2区	160-140	N-66°-E	3.61×2.30×0.92	弥生土器2点、縄文土器2点出土。

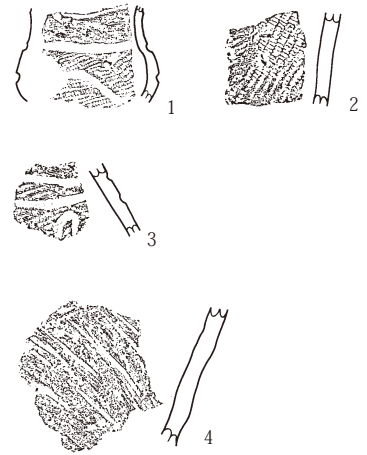
109号土坑



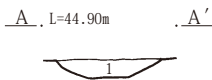
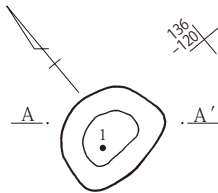
109号土坑

1. 褐灰色土 褐色土を含む。縮まりあり。現代の盛土
2. 明黄褐色土 鉄分の沈着が認められる。縮まりあり。
3. 褐灰色土 1層より少し暗い。褐色土を含む。黒色土を少量含む。縮まりあり。
4. 暗褐色土 5層より少し明るい。黒色土を多量に含む。ローム粒を少量含む。白色軽石粒(φ1~2mm)を少量含む。縮まりあり。4号溝の覆土。
5. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。縮まりあり。

109号土坑出土遺物



121号土坑

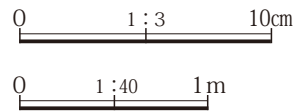


121号土坑出土遺物

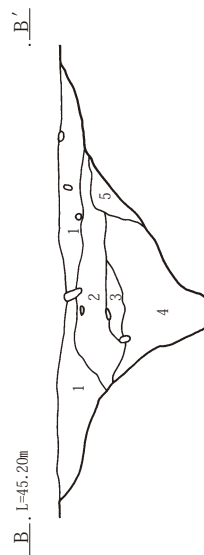
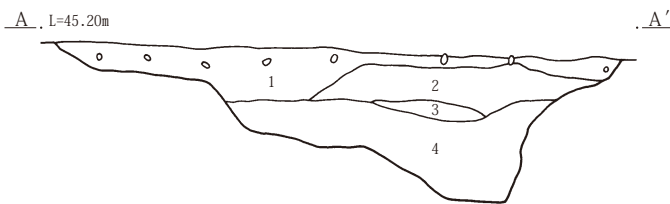
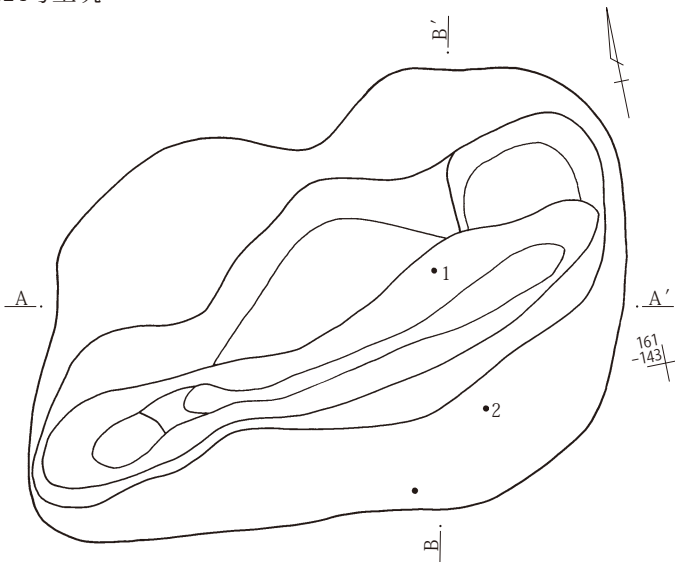


121号土坑

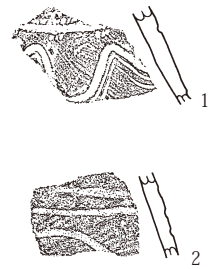
1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少し含む。粘性強く、縮まりあり。



124号土坑



124号土坑出土遺物

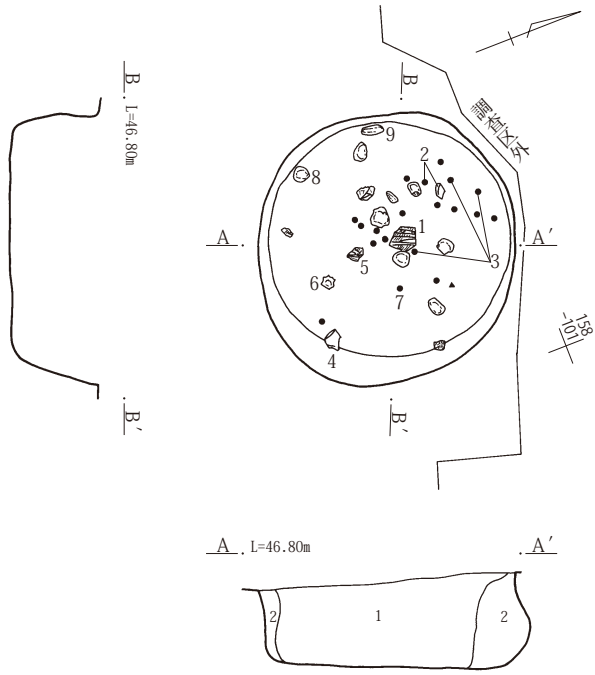


124号土坑

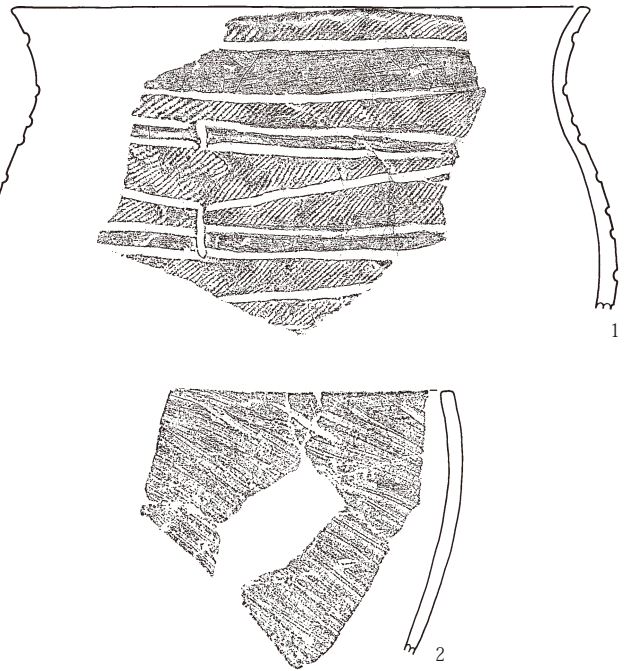
1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少し含む。粘性強く、縮まりあり。小礫を含む。
2. 灰黄褐色土 1層が混入する。縮まりあまりない。大小礫を含む。
3. 黄褐色土 砂質。小礫を少し含む。
4. 明緑灰色土 砂層。大小礫を多く含む。
5. 黄褐色土 砂質。小礫を含む。

第41図 109・121・124号土坑平断面図・出土遺物

116号土坑

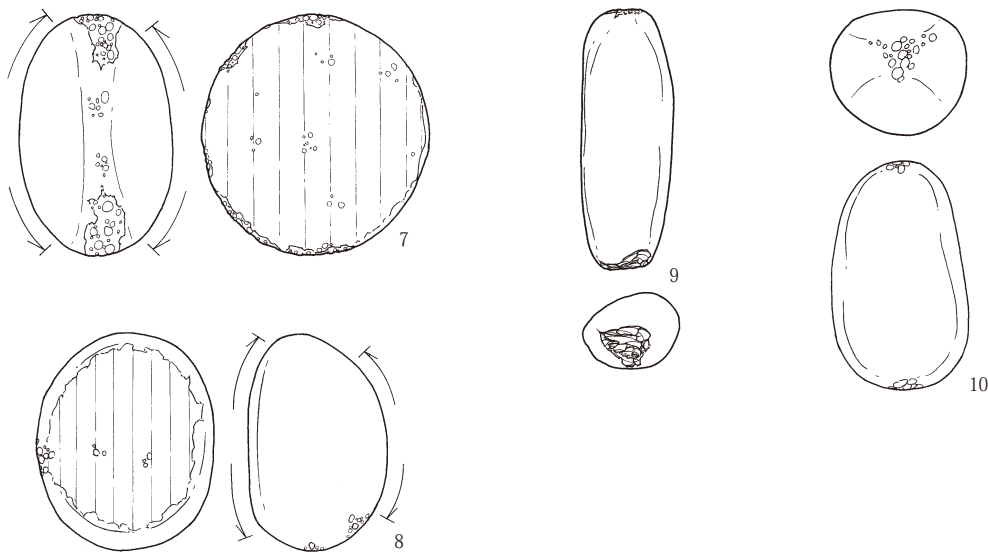
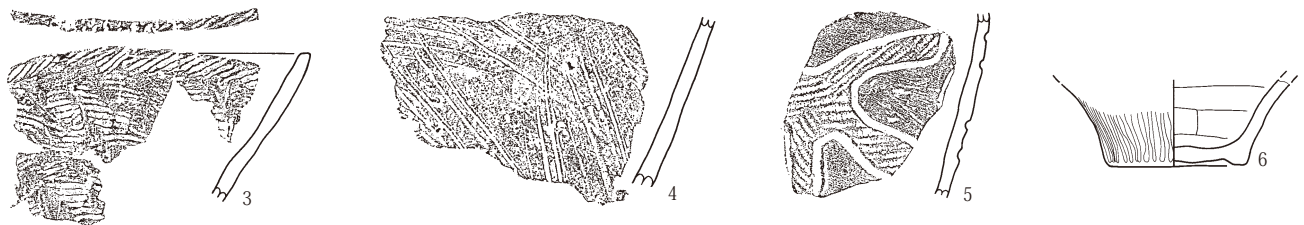


116号土坑出土遺物



116号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。縮まりあり。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を含む。縮まり弱い。



0 1:3 10cm

0 1:40 1m

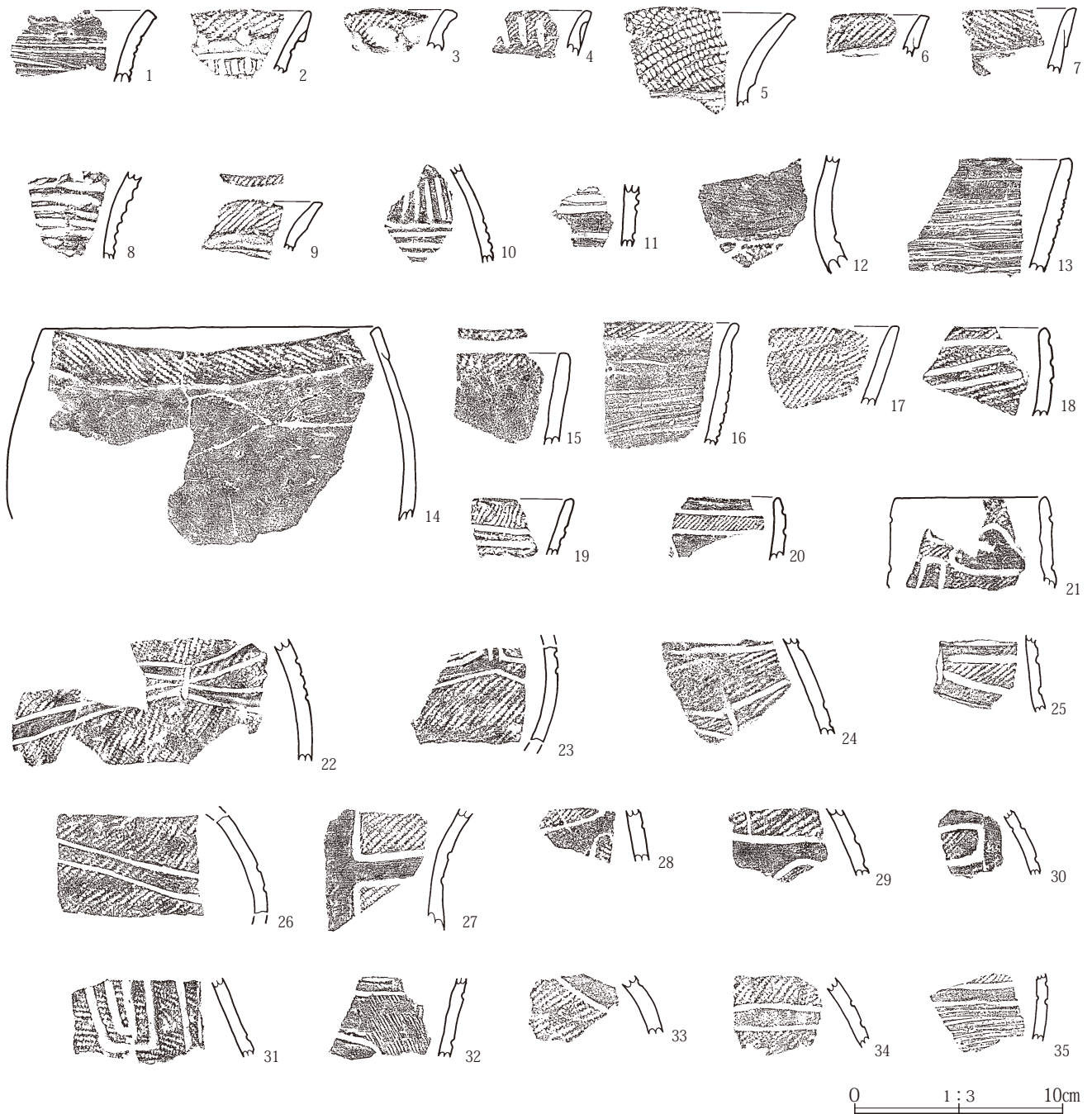
第42図 116号土坑平断面図・出土遺物

2 遺構外出土の遺物

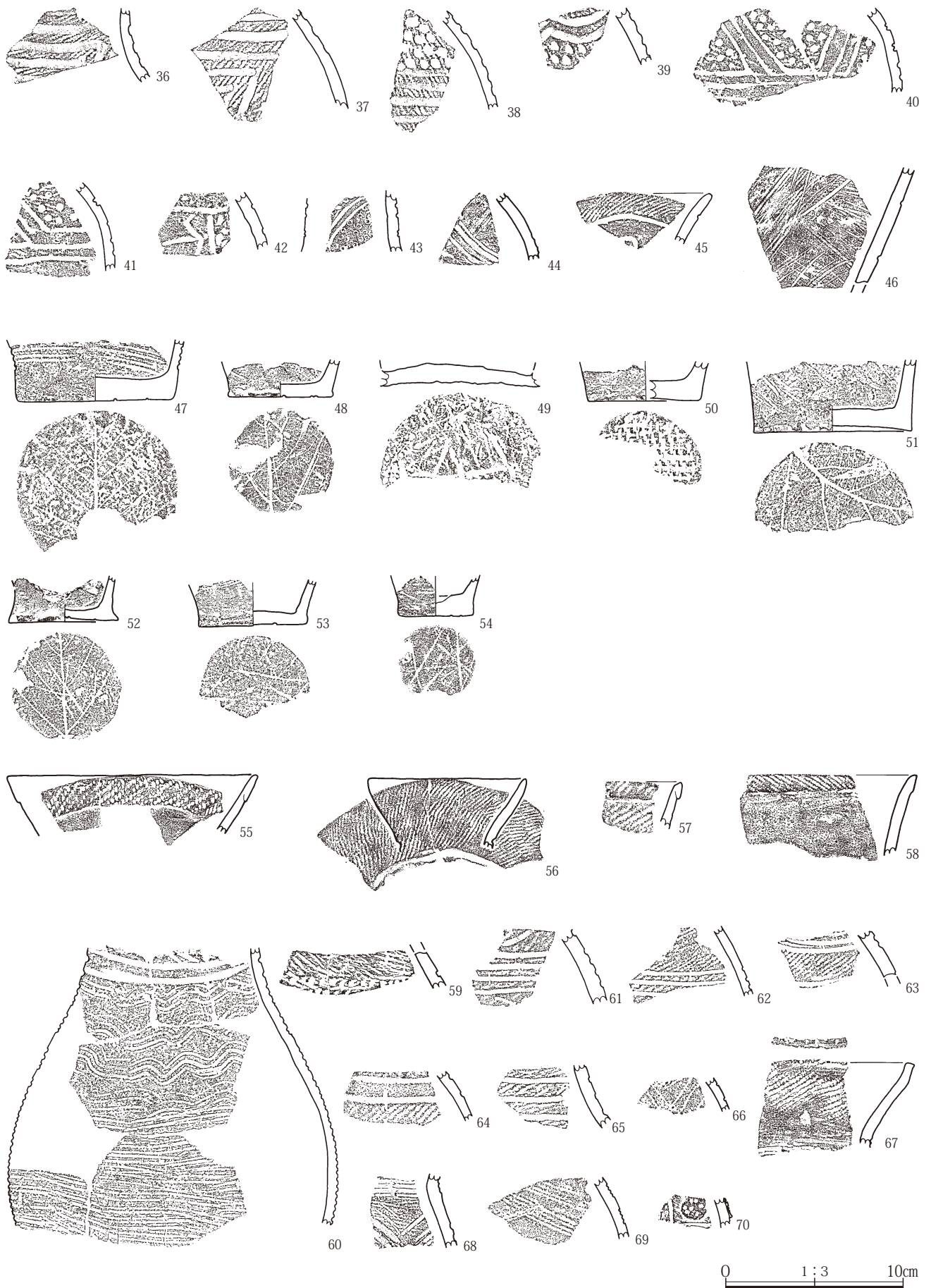
弥生土器は遺構外から合計737点出土しているが、大部分は小破片であり、そのうち、660点が南調査区から出土している。第3面から第5面にかけての包含層からの出土が多い。ここではそれらのうち70点を掲載する。いずれも弥生中期のもので、中期前半が54点、中期中葉～中期後半が16点である。

石器は、第3節4で述べたように、縄文時代のものと

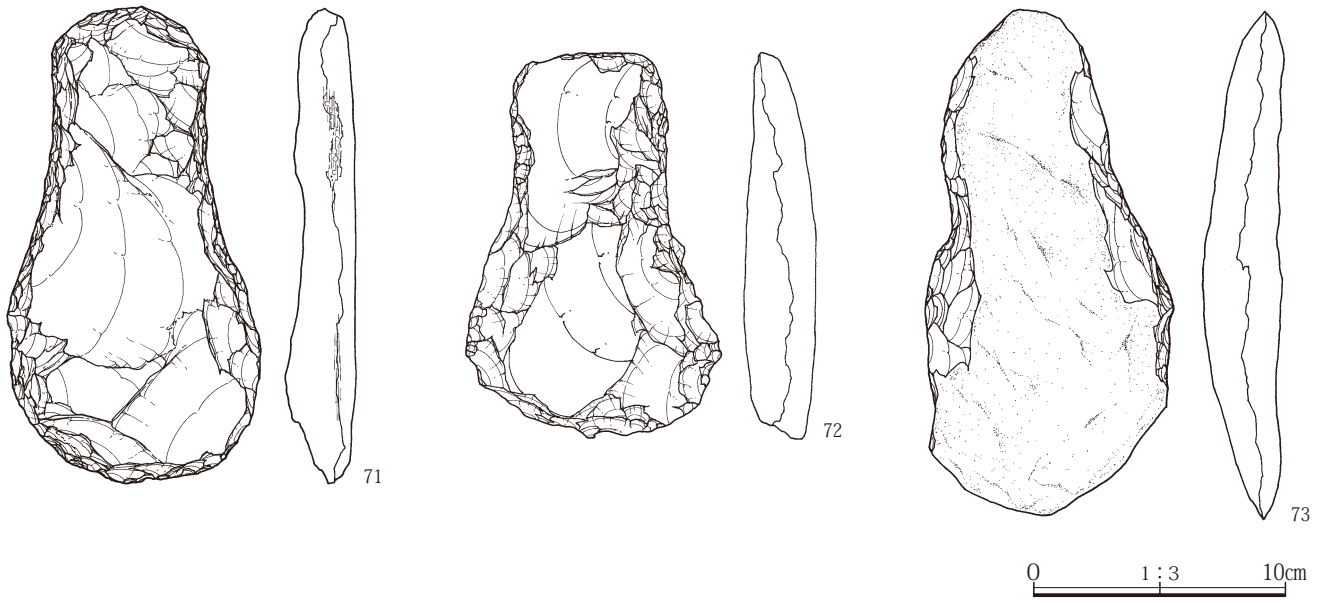
区別が難しい。ここでは「石鋤」に限って取り上げ、その他は縄文時代のものとして第3節4で取り上げることにする。



第43図 弥生時代・遺構外出土の遺物(1)



第44図 弥生時代・遺構外出土の遺物(2)



第45図 弥生時代・遺構外出土の遺物(3)

第5節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴住居2軒、古墳2基、周溝墓6基、土坑12基、水田1面、畠2面、溝4条、ピット66基、遺物集中部3ヶ所で、竪穴住居、古墳、周溝墓、土坑2基は北調査区にあり、その他は南調査区にある。畠は古墳～平安時代より細かい時期は特定できず、ピットも時期不明だが、古墳と1-1区の水田は古墳時代後期のもの、それ以外は前期に属する。古墳・周溝墓とも残りは悪いが、1基の古墳には石室の基部が残っていた。周

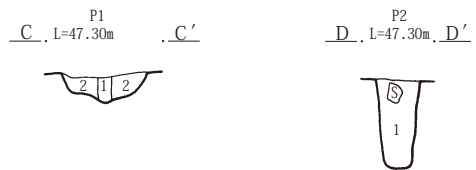
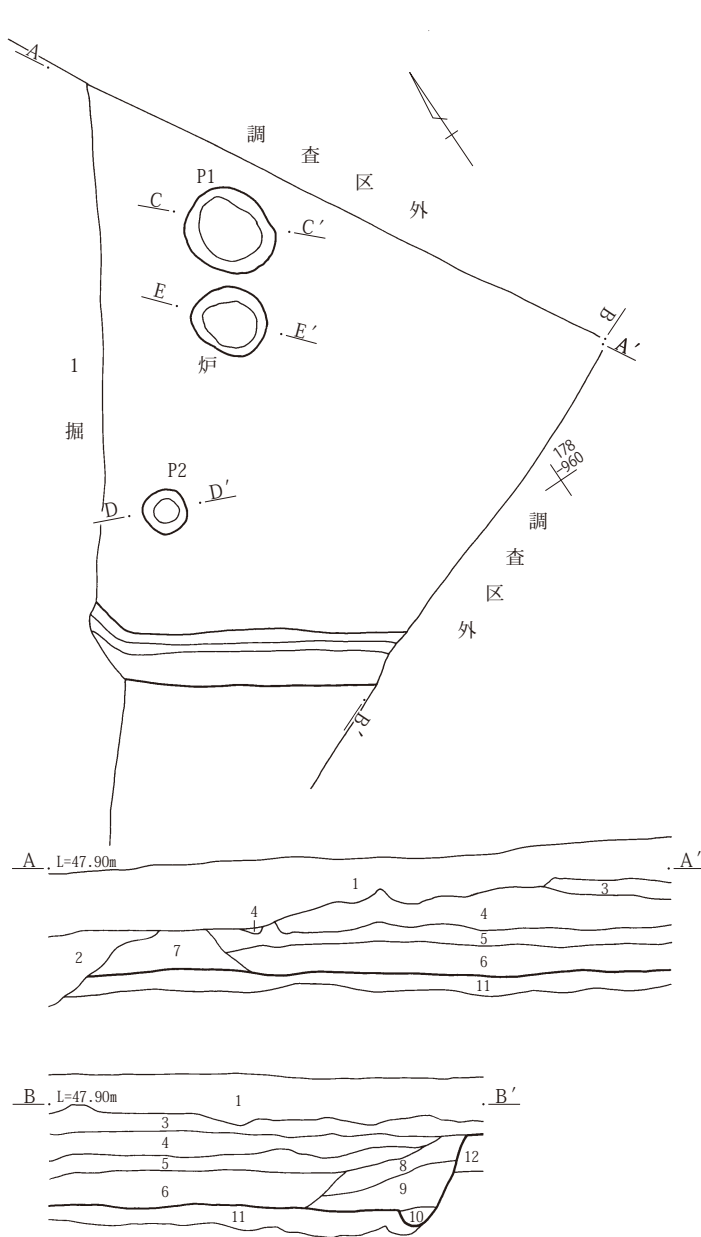
溝墓には方形・円形共に見られるが、不整形のものは古墳である可能性もある。

1 竪穴住居

古墳時代の竪穴住居は、北調査区の東端近くで2軒見つかっている。いずれも古墳時代前期のもので、周溝墓との関連が考えられる。

6号住居(第46～50図、第64・65表、P.L.13-5～14-8, 87, 88)

北調査区東端付近で、調査区が三角形に突出する部分で見つかった住居である。そのため、調査範囲が限定され、発掘できたのは全体の1/2～1/3程度である。



6号住居

1. 表土
 2. 堀の埋没土
 3. 黒褐色砂質土 As-Bを多く含む。As-C、FAを少し含む。ローム、As-Bアッシュをブロック状に少し含む。締まりやや弱い。
 4. 黒褐色土 As-C、FA、焼土粒、ローム粒を含む。締まりあり。
 5. 黄褐色シルト質土 As-Cを含む。黄褐色シルト(古墳時代の洪水層か)をサシ状にやや多く含む。焼土粒、炭化物粒、黒色土を少し含む。締まりややあり。洪水層か。
 6. 暗褐色シルト質土 As-Cを含む。黄褐色シルト、黒色土を含む。焼土、炭化物粒をやや多く含む。締まりあり。住居埋没土、5層に似るが黒色土がやや多い。下面床面。
 7. 褐色土 As-Cを含む。黒色土ブロック、ロームブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。締まりあり。
 8. 暗褐色土 As-C、焼土粒、炭化物粒、ローム粒を多く含む。黄褐色シルトをサシ状に少し含む。締まりあり。
 9. 暗褐色土 8層に似るが黒色土を多く含み、焼土粒、炭化物粒、ローム粒が少ない。締まりあり。
 10. 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを斑状に含む。炭化物粒、焼土粒を含む。締まりあり。黄褐色シルトは含まない。周溝埋没土。
 11. 褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを斑状に含む。締まりやや弱い。上面は床面で硬く締まっている。
 12. 暗褐色土 黄褐色シルトをサシ状に含む。As-C、FAを含む。締まりやや弱い。
- 6号住居 P 1
1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。締まりやや弱い。(柱痕か)。
 2. 褐色土 黒色土ブロック、ロームブロックを斑状に含む。焼土粒、炭化物を少し含む。締まりあり。土師器片出土。
- 6号住居 P 2
1. 褐色土 黒色土、ロームを含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。礫(φ20×10cm)1個出土。

第46図 6号住居平面断面図

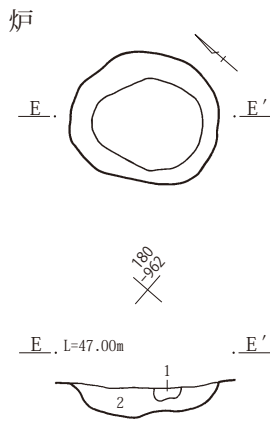
位置 X=37177～183、Y=-37959～964。 **重複遺構** 西側に1号堀が重複する。本住居が古い。 **形態** 西側を1号堀に切られ、また、北・東側が調査区外となるため全形は不明であるが、住居の南西辺になるとと思われる壁が直線的であり、住居の時期からみても方形になることは間違いない。 **方位** 主軸方位は不明だが、南西辺の方位はN-57°-W。 **規模** (4.55)m×(4.00)m。 **床面積** 現存部分で9.74㎡。 **壁高** 表土除去の際、やや掘り下げすぎてしまったらしい。調査区壁面で実測したセクションB-B'を見ると56cmある。 **覆土** As-Cを含む土で埋没している。中央部には水成堆積と思われるシルト質の土があり(5層)、洪水によって堆積した土と思われる。 **床面** 掘方を褐色土で埋め戻して床面とする。 **柱穴** 床面ではP1、P2の2基のピットを調査したが、そのうち深いP2が柱穴になると思われる。住居南西壁の北西端が少し屈曲しているのが隅部になると思われ、とすればP2が南西隅の柱穴になると考えられる。P1は柱痕と思われるものが断面で確認できたが、浅いので本住居の床面から掘ったものとは考えがたく、上面から掘られた時期の異なる柱穴と考えた方がよいであろう。P1とP2の規模は以下の通り

(長径×短径×深さ、m)。

P1 0.73×0.63×0.22

P2 0.35×0.33×0.68

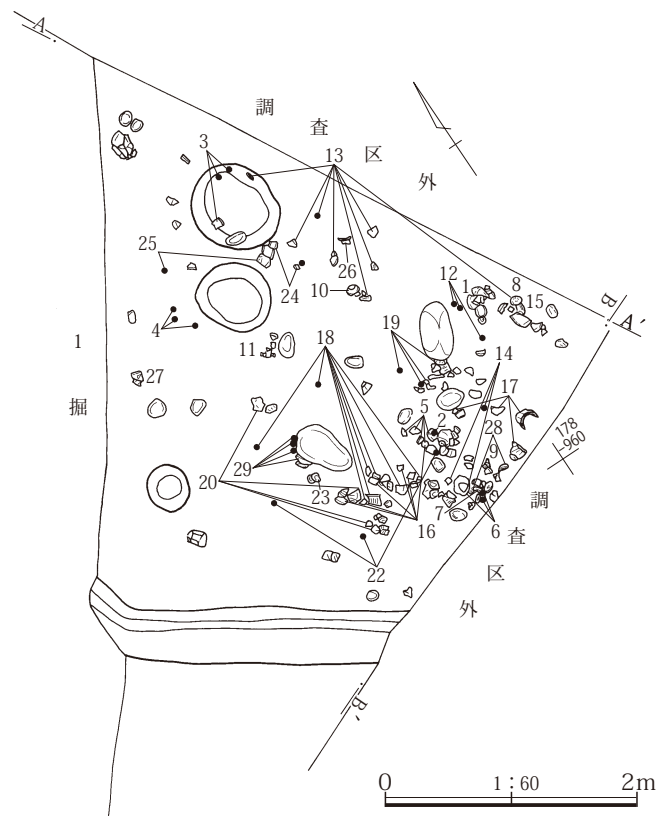
炉 P1とP2の間にある。いわゆる地床炉であり、長さ0.60m、幅0.50mの楕円形で、深さ0.12mである。底面は硬化している。この位置は住居西側にあたり、北西壁から1m程度離れた場所になると考えられる。 **貯蔵穴** 調査した範囲では見つからなかった。 **周溝** 南西辺には途切れずに存在する。幅は約25cmで、深さは10～12cmであり、明瞭な周溝である。 **掘方** 床面から掘方底面までは10～20cmある。西側をわずかに低く掘る傾向があるほか、南西壁に沿って溝状に掘り下げている。 **遺物** 遺物は数多いが、ほとんどは床面からやや浮いた状態で出土しており、住居廃絶後やや時間を置いてから入り込んだものである。調査できた範囲では南半部に多いが、これは住居の中央南西寄りに当たる位置である。掲載したのはすべて土師器で、有孔鉢1、高杯4、器台4、埴2、壺2、直口壺1、台付甕10、甕5である。その他小破片として、甕・壺類が6,530g、高杯・器台類が310g出土している。 **所見** 遺物の特徴から古墳時代前期、4世紀後半の住居である。



6号住居炉

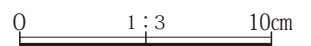
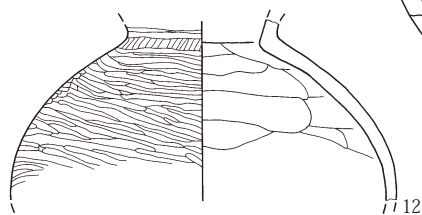
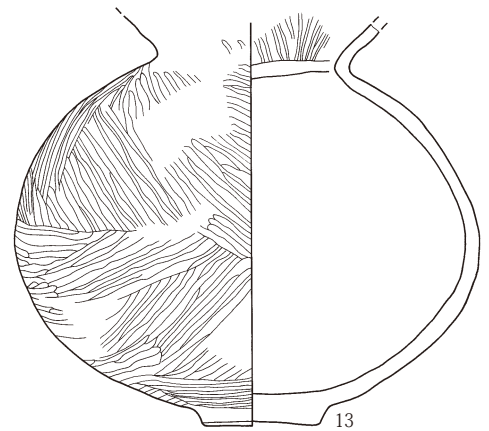
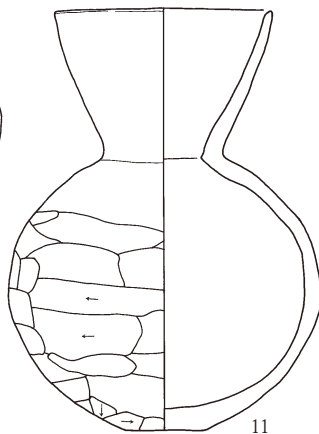
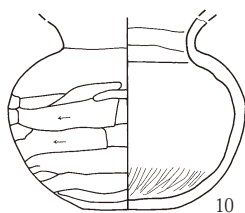
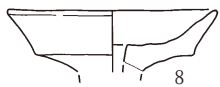
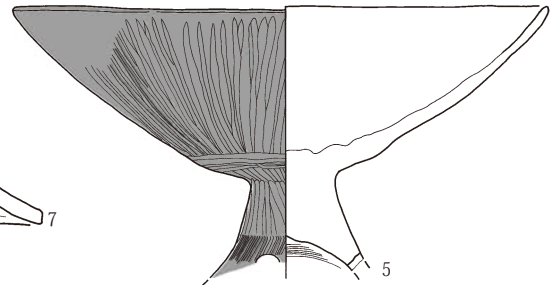
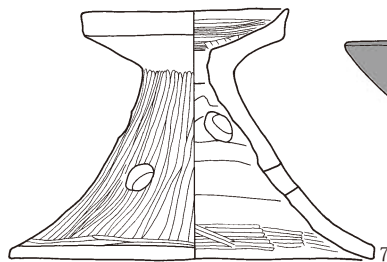
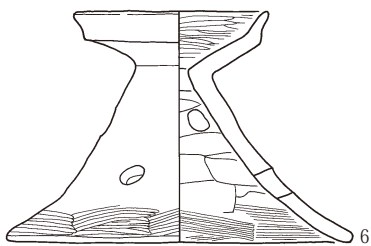
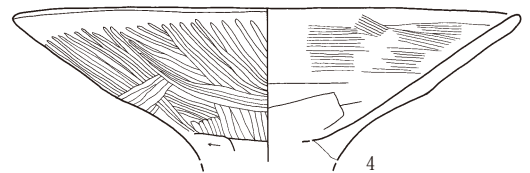
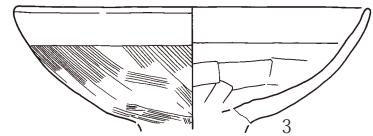
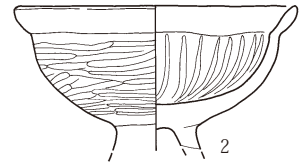
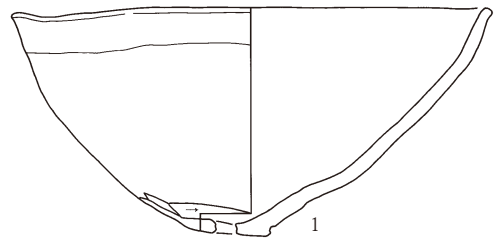
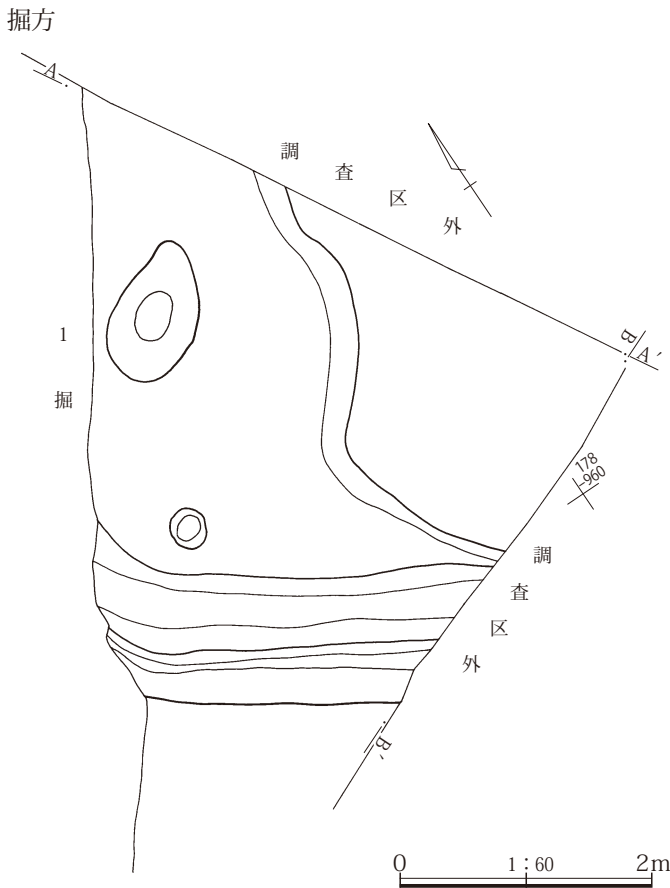
1. にぶい赤褐色土 焼土ブロック主体。縮まりあり。
2. 褐色土 黒色土ブロック、ロームブロックを斑状に含む。焼土粒、炭化物をやや多く含む。縮まりあり。下面は硬化している。

0 1:30 1m

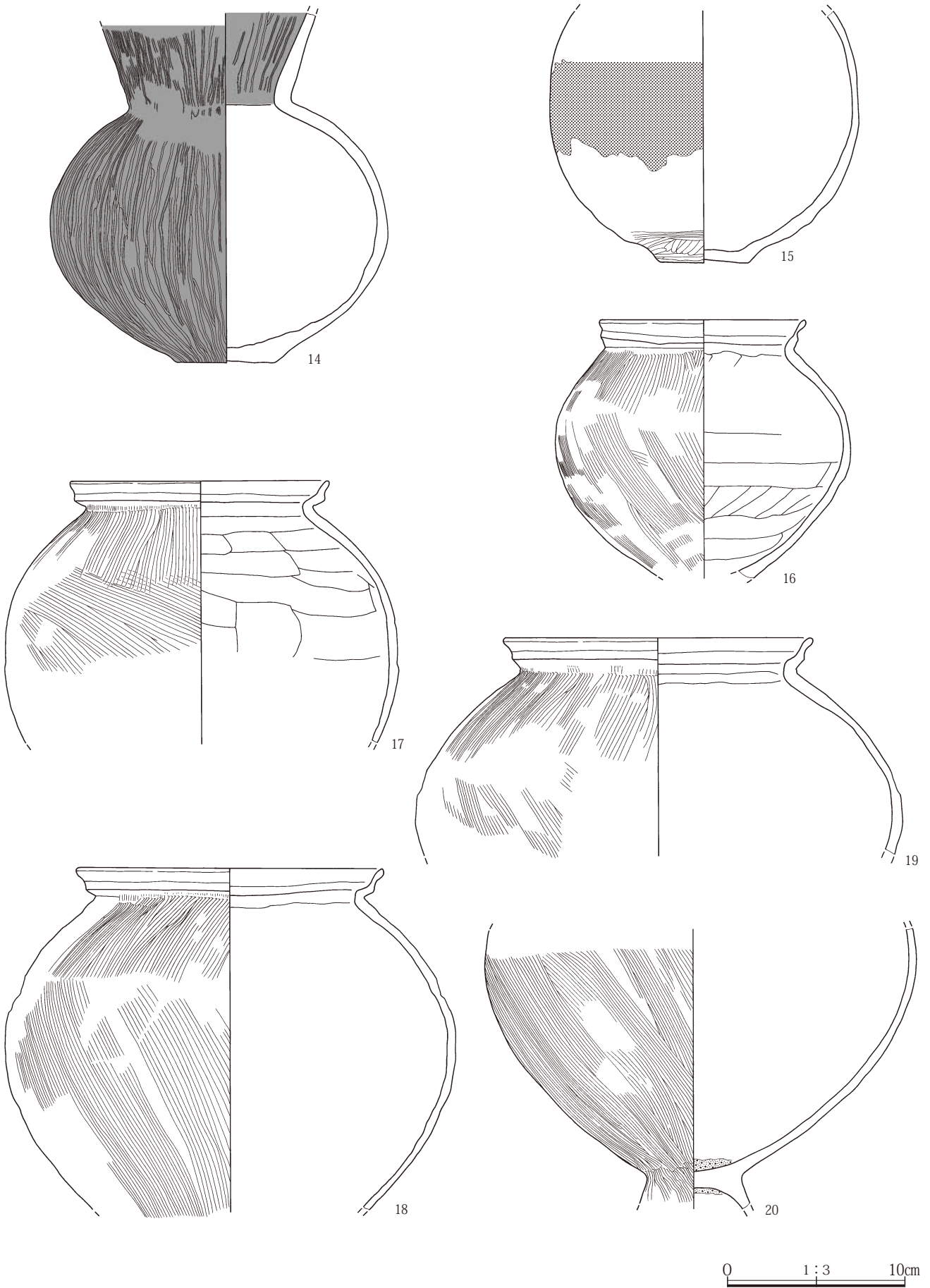


第47図 6号住居炉平断面図・遺物出土状態図

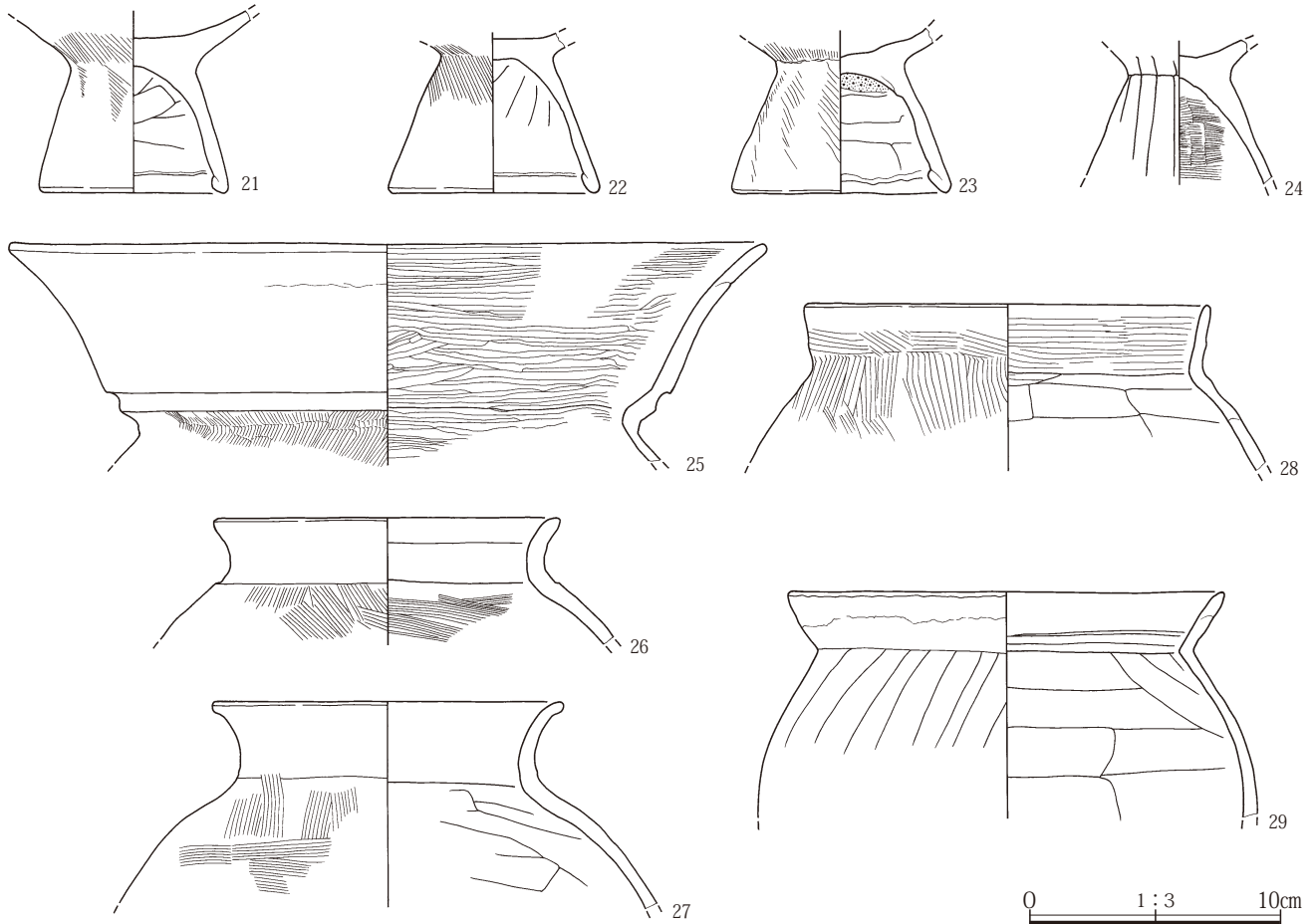
掘方



第48図 6号住居掘方平面図・出土遺物(1)



第49図 6号住居出土遺物(2)



第50図 6号住居出土遺物(3)

9号住居(第51・52図、第65表、P L.15-1～16-2, 88)

北調査区東端付近で見つかった住居で、上面を削平されているため残りが悪い。6号住居とは主軸方向が近い。

位置 X=37181～188、Y=-37968～975。

重複遺構 重複遺構はないが、北東側に大きく攪乱が入り、床面まで削平されている。

形態 やや歪んだ方形。

方位 N-53°-W。

規模 5.60m×5.12m。

床面積 攪乱部分を復元して24.83㎡。

壁高 最も残りのいいところで0.13m。

覆土 黒色土ブロック、ロームブロックを含む暗褐色土で埋まっている。

床面 掘方を、ロームブロックを多く含む黄褐色土で埋め戻し床面とする。

柱穴 支柱穴4本が住居各隅にある。いずれも深くしっかりとした柱穴で、P 1とP 4は柱痕が明瞭であった。大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、m)。

P 1 0.50×0.48×0.70

P 2 0.43×0.36×0.48

P 3 0.42×0.40×0.64

P 4 0.46×0.42×0.56

炉 確認できなかった。

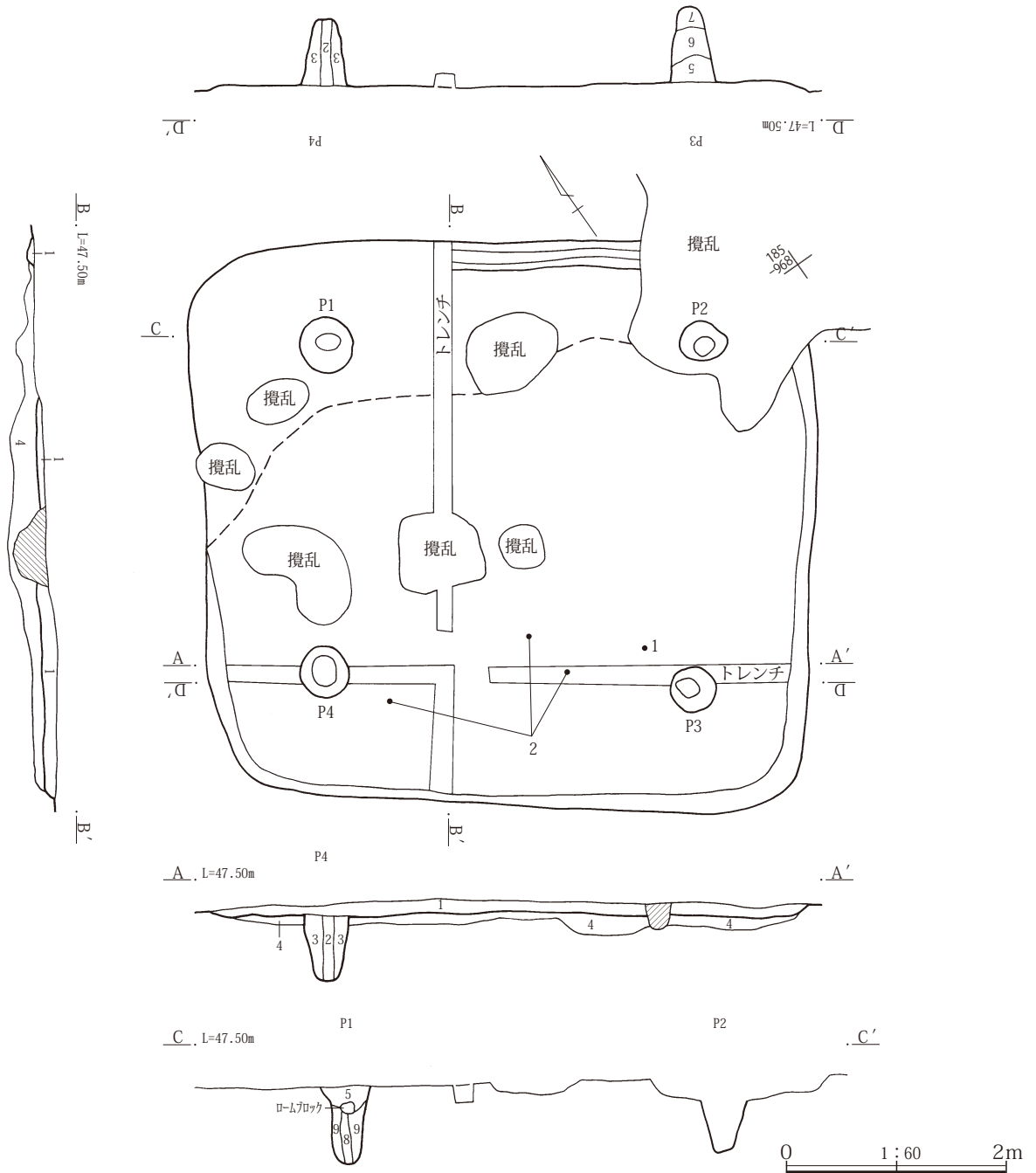
貯蔵穴 確認できなかった。

周溝 床面が削平されている北東部では見つかっていないので、本来は全周していた可能性が高いが、その他の部分では確認できなかった。

掘方 掘方底面には凹凸があり、一部は土坑状に掘り下げられている。床面からの深さは5～25cm程度である。

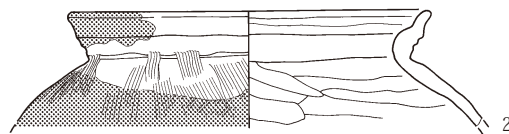
遺物 遺物は非常に少なく、掲載できるのは土師器2点(高杯1、台付甕1)のみである。住居南西側で、床面からやや浮いた高さから出土している。その他小破片として土師器壺甕類330gが出土しているだけである。

所見 残りの悪い住居で詳細は不明だが、6号住居同様、古墳時代前期4世紀後半のものであると思われる。



9号住居

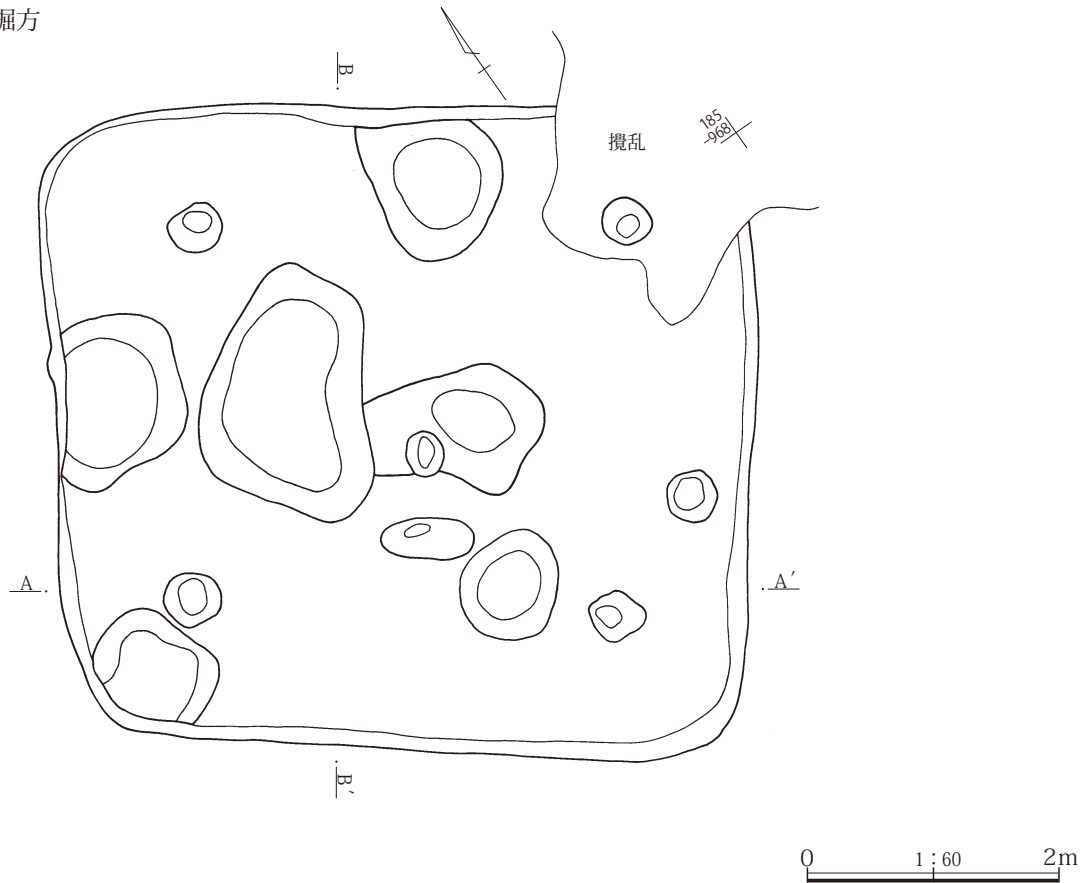
1. 暗褐色土 黒色土ブロック、ロームブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。縮まりあり。土師器片出土。上層から現代の攪乱を多く受けている。
2. 暗褐色土 黒色土をやや多く含む。ロームブロックを少し含む。縮まり弱い。柱痕。
3. 黄褐色土 ロームブロックが多い。黒色土ブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。縮まり弱い。
4. にぶい黄褐色土 ロームブロックを多く含む。黒色土を少量含む。縮まりややあり。掘方。
5. 黄褐色土 黒色土ブロック、ロームブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。縮まりやや弱い。
6. 暗褐色土 黒色土をやや多く含む。ロームを含む。縮まり弱い。
7. 暗褐色土 6層に似る。黒色土、ロームを含む。縮まり弱い。
8. 暗褐色土 黒色土をやや多く含む。ロームブロックを少し含む。縮まり弱い。柱痕。
9. 黄褐色土 5層に似ているがロームブロックが多く、縮まり弱い。



0 1:3 10cm

第51図 9号住居平断面図・出土遺物

掘方



第52図 9号住居掘方平面図

2 古墳・周溝墓

古墳と周溝墓は、古墳2基、周溝墓6基の合計8基を調査した。すべて北調査区にある。調査開始以前には、北調査区の範囲内は宅地や畑地として利用されていて、これらの古墳・周溝墓は完全に削平され、その存在は分からなかった。

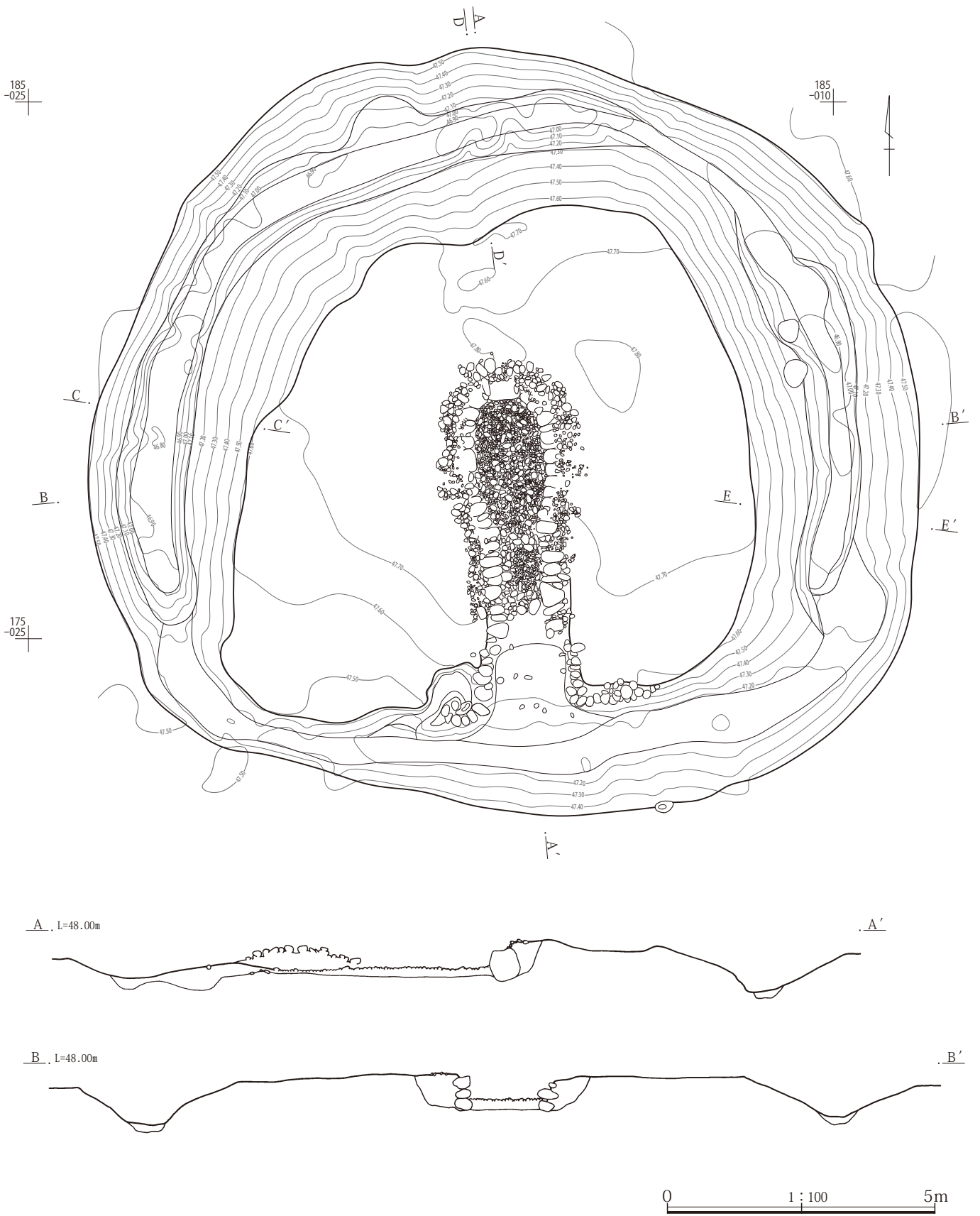
周溝墓は調査当時すべて「方形周溝墓」と呼称されていたが、平面図に明らかなように円形のものも含まれているため、本報告書では「周溝墓」と改称した。ただし、今回「周溝墓」として調査したものの中には、あるいは古墳ではないのかと疑われるものもある。しかし、出土遺物が少なく断定できなかったため、ここでは調査時のまま「周溝墓」として報告し、その疑いのあるものについてはその旨を明記した。

1号古墳(第53～64図、第26～29・65・66表、P.L. 16-3～23-8, 89)

北調査区中央付近にある古墳である。横穴式石室の下部が良好に残存していた。

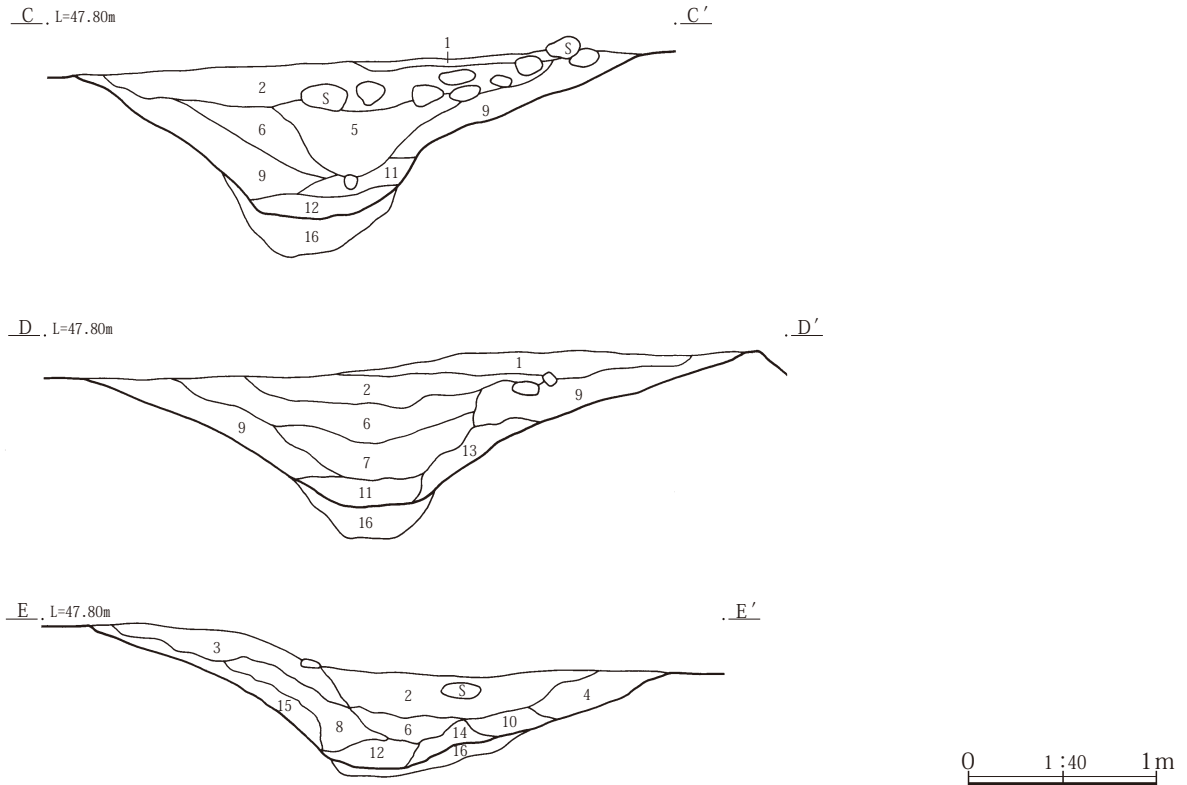
墳丘(第53図) 古墳の平面形は歪んだ円形である。特に南側の周堀が直線的で、南西側が張り出しているような形となっているので、この部分で歪みが大きくなっているが、円墳の範疇に入る形であると言えよう。石室付近を中心として墳丘盛土がわずかに残っていたが、墳丘の形など、詳細は明らかではない。直径は周溝を入れて13.7～15.5m、周溝内法では9.2～11.1mである。内法で11.1mを計測したのは南西側の張り出している部分であり、その部分を避ければ9.2～9.5m程度となるので、本来の墳丘の直径は9m前後に復元できると思われる。

周堀(第53・54図) 周堀は、南辺を除いて断面が逆台形であり、底部近くで傾斜がやや急になっている。規模は南辺を除いて上幅2.30～3.50m、深さ0.53～0.94mであるが、南辺だけは狭く浅く、上幅0.80～2.25m、深さ0.17～0.43mである。また、底面は掘方状にさらに10～20cm深く掘られている部分が多く(第62図)、それ



第53図 1号古墳平面断面図

第3章 調査の成果



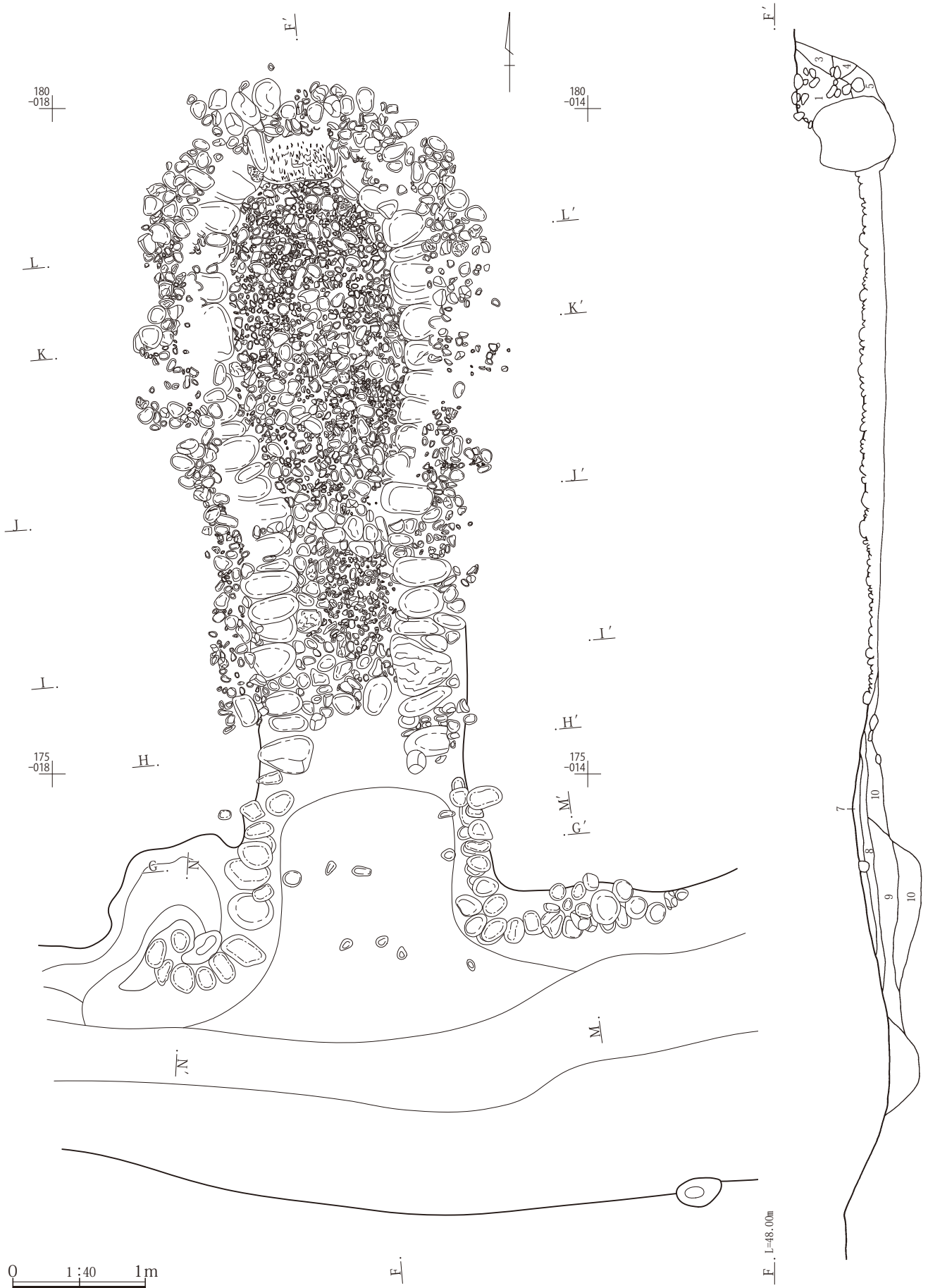
周堀

1. 黒褐色砂質土 As-B、黒色土、暗褐色土ブロックを斑状に含む。縮まり弱く、粗。葺き石の崩落数点あり。
2. 黒褐色土 ローム粒(φ 1mm)、FA (φ 1~5mm)、As-C (φ 1mm)をやや多く含む。焼土粒(φ 1mm)、炭化物粒(φ 1mm)を少し含む。縮まりややあり。砂質。葺き石の崩落有。
3. 暗褐色土 ローム(φ 1mm)、暗褐色土を含む。縮まりあり。密。
4. 暗褐色土 ロームを多く含む。FAを含む。上層にAs-B混土が堆積。砂質。縮まりややあり。
5. 黒褐色土 2層に似るがFA、ローム粒を多く含んでいる。砂質。縮まりややあり。
6. 暗褐色土 2層に似るがローム、暗褐色土がやや多い。FAを少し含む。縮まりややあり。
7. 暗褐色土 6層に似るがローム、暗褐色土が多い。縮まりややあり。
8. 暗褐色土 3層に似るがローム粒がやや多く、粒子が細かい。縮まりややあり。密。
9. 褐色土 ロームブロック主体。黒色土を含む。縮まりややあり。
10. 褐色土 黒褐色土ブロック+ロームブロック。縮まりややあり。
11. 暗褐色土 ローム粒、黒色土を含む。白色軽石を少し含む。底面にロームブロックあり。縮まり弱い。
12. にぶい黄褐色土 ロームブロック、暗褐色土ブロックを斑状に含む。縮まりやや弱い。
13. 黄褐色土 ロームブロック主体。縮まり弱い。
14. ロームブロック。
15. 黄褐色土 ローム主体。縮まりやや弱い。
16. ロームブロックと黒色土の混合。古墳構築時に埋め戻したと考えられる層。

石室裏込め・前庭部掘方(第55・56図)

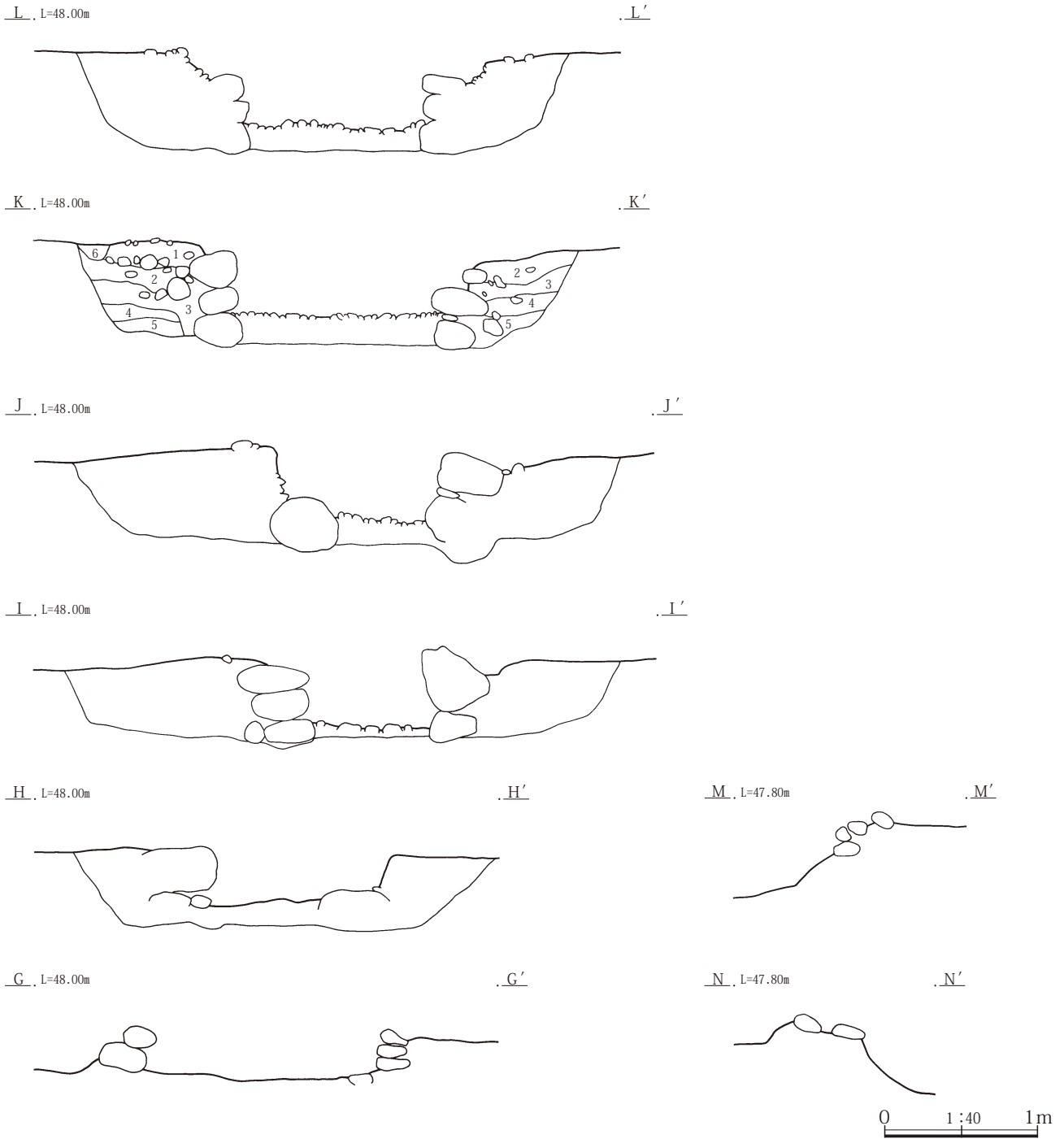
1. 黄褐色土 ローム主体。黒色土、焼土粒、炭化物粒をやや多く含む。縮まりなく、もろい。礫を多く含む。
2. にぶい黄褐色土 ロームをやや多く含む。黒色土を含む。焼土粒、炭化物粒を含む。縮まりあり。
3. 褐色土 黒色土を多く含む。ロームブロック(φ 10mm程)を含む。炭化物粒、焼土粒を含む。縮まりよく、粘性がある。礫を含む。
4. 暗褐色土 黒色土ブロック、ロームブロック(φ 10mm程)を含む。炭化物粒、焼土粒を含む。縮まりややあり。礫を含まない。
5. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少し含む。縮まりやや弱い。礫を含まない。
6. ロームブロック
7. 黒褐色土 As-C、FAをやや多く含む。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。小礫(φ 20mm程)、礫(φ 100mm程)を含む。硬く縮まっており、密。(前庭、翼垣構築時の貼り床)上面は硬く踏み縮まっている。石材加工時の剥片少量出土。
8. 黒褐色土 7層に似る。ロームブロックがやや多い。縮まりあり。FA、As-Cを含む。(前庭、翼垣構築時の貼り床)
9. 暗褐色土 As-C、FAを含む。ロームブロック、黒色土ブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。縮まりあり。前庭、翼垣構築時の貼り床。上面に硬化面らしき面有り。
10. 褐色土 ロームを多く含む。黒色土、FA、焼土粒、炭化物粒を少し含む。縮まりあり。

第54図 1号古墳周堀断面図



第55図 1号古墳石室平面断面図

第3章 調査の成果



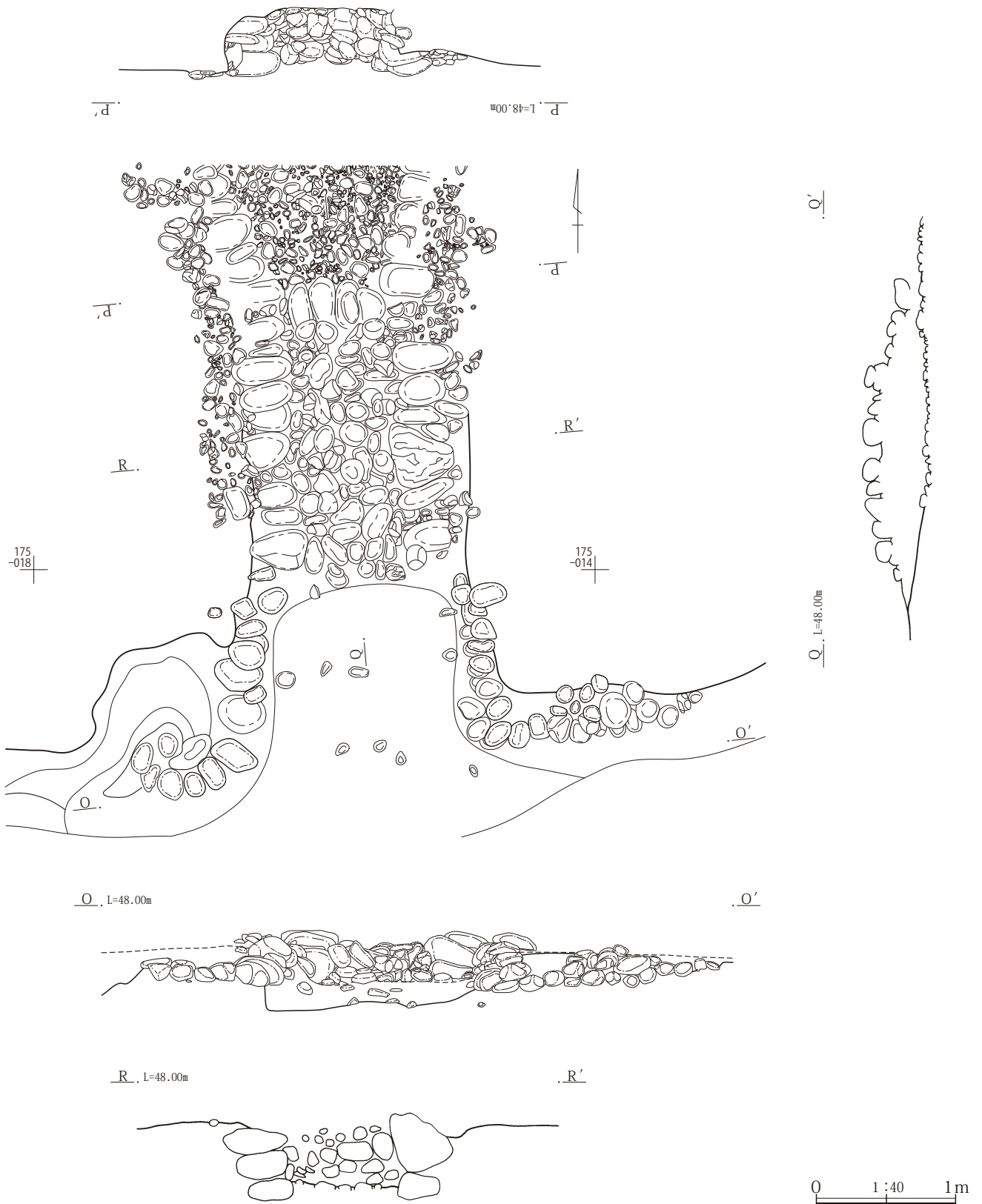
第56図 1号古墳石室断面図

をロームブロックと黒色土との混合土で埋め戻し、構築時の底面としている。

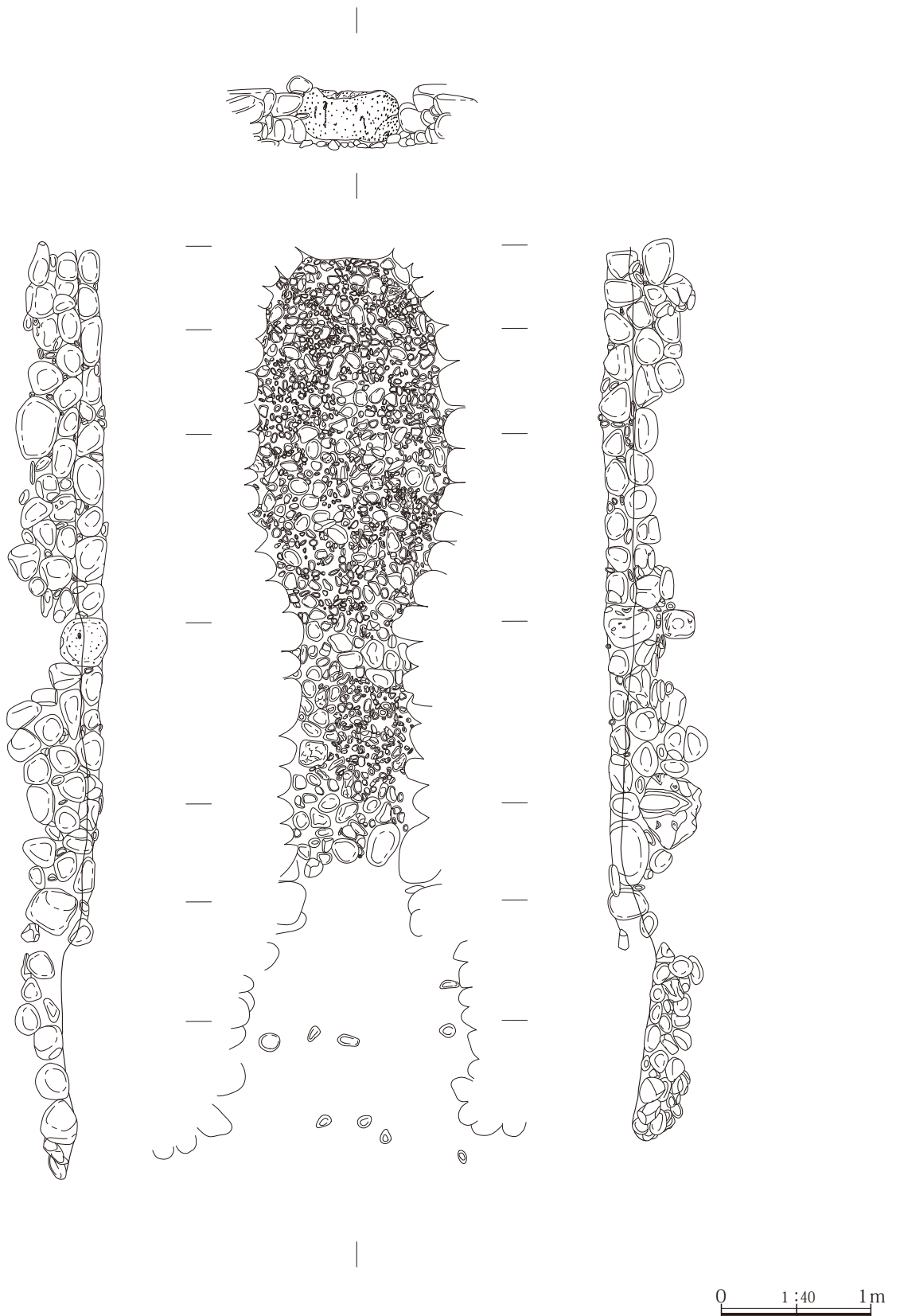
葺石 葺石は、石室翼垣に接続する部分がわずかに残るのみで、それ以外の部分は既に失われていた。しかし、周堀埋土の上層には径10～30cmの礫を多く含む層(第54図、2層)があり、その礫は葺石が崩落したものと思われるので、本来は全面に葺石が葺かれていたものと思わ

れる。2層以下の埋土には礫を含まないので、周堀がほとんど埋まってしまうまでは古墳墳丘は崩れていなかったと推定される。

前庭(第55図) 前庭部は狭い。前垣がほとんどなく、翼垣も開かないので、長さ、幅とも1.40mのほぼ正方形となっている。石積み残存状況は非常に悪い。前垣は羨門の石材で構成されるが、現状では基部の1段しか残って



第57図 1号古墳石室閉塞状況平断面図



第58図 1号古墳石室展開図

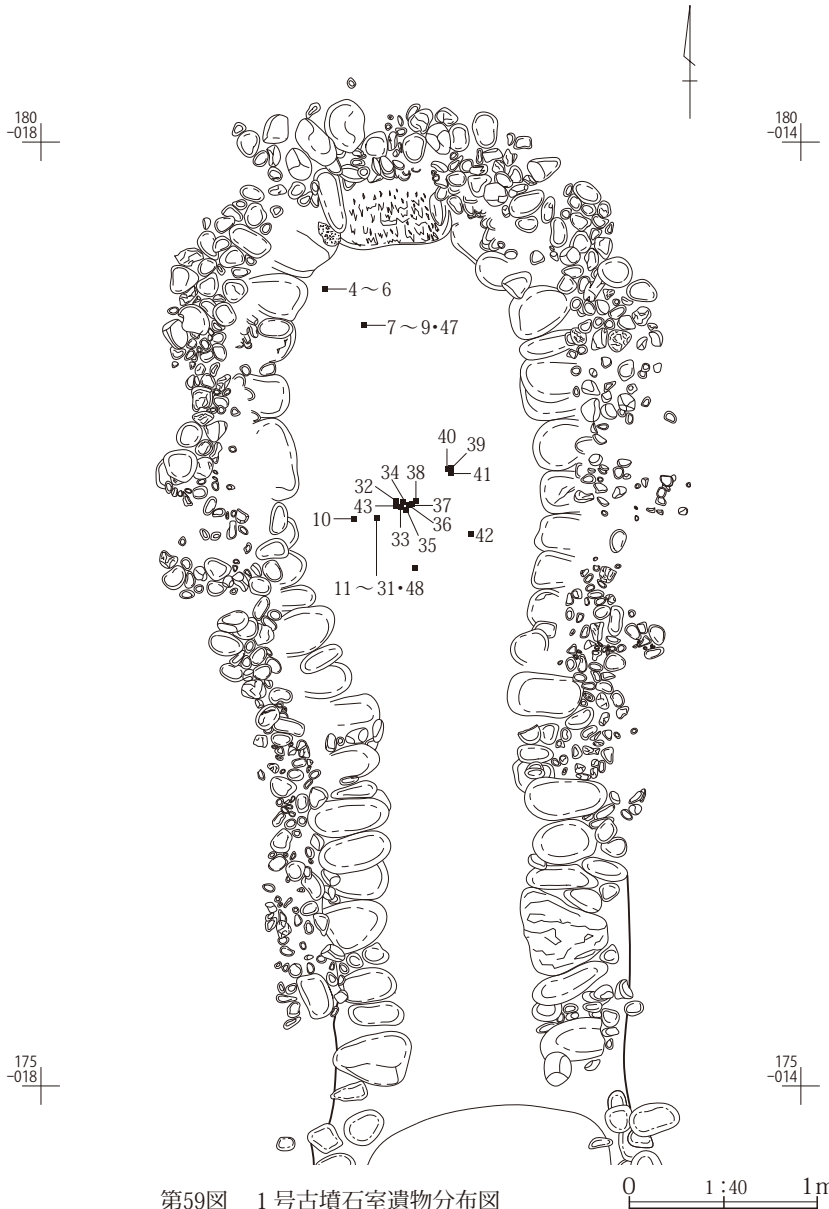
第5節 古墳時代の遺構と遺物

30～35cm、幅15～20cmの細長い石を、小口を玄室に向けて並べ、その上に礫を積み上げている。

石室の奥壁は幅79cm、高さ64cm、奥行き59cmの大きな1個の石が残る。この上にさらに1～2段石がのせられていたものと思われる。側壁は一部分を加工した程度のやや細長い自然石を用い、多くを小口積みにして隙間に小礫を差し込み、石室を築いている。残りのいいところで3段まで残っていた。

各部の規模は次の通りだが、高さは上面が破壊されているため、残存部分を計測したものである。

- 石室全長 主軸位置で4.42m
- 玄室長 主軸位置で2.34m
- 玄室幅 奥壁は1個の石が残り0.61m
中央付近の最も広いところで1.35m
玄門際で0.86m
- 玄室高 奥壁は1個の石が残り0.35m
東壁の最も高いところで0.42m
西壁の最も高いところで0.44m



第59図 1号古墳石室遺物分布図

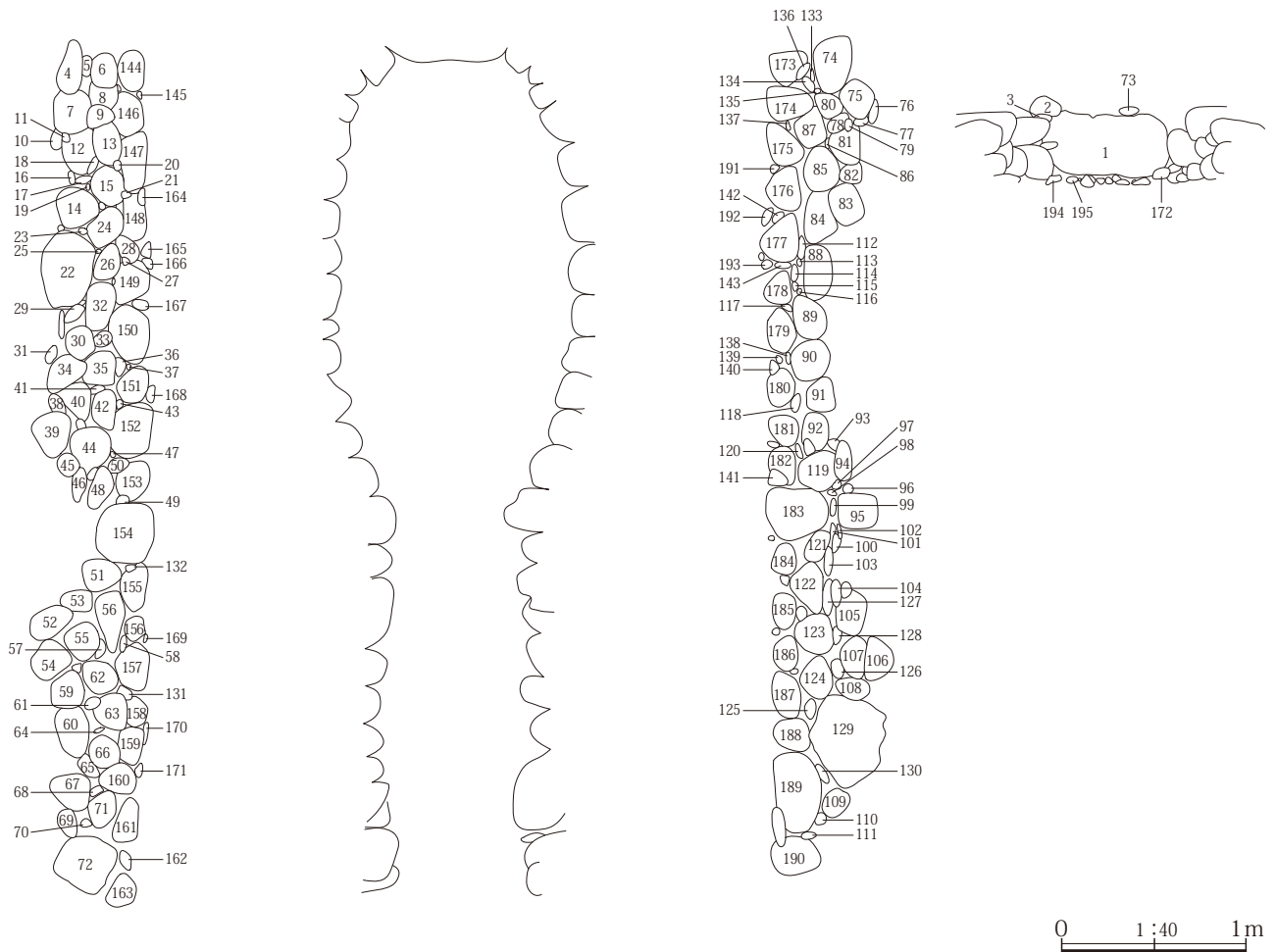
いない。置かれている石の大きさは、東側は長さ48cm、幅29cm、高さ29cm、西側は長さ60cm、幅38cm、高さ32cmであり、この長さの分が前垣の幅となっている。翼垣は東西で様相が異なり、東側は長さ20cm、幅15cm程度の小さな石を積むのに対し、西側は大きく、長さ23～35cm、幅12～25cmの石を用いている。積み方は小口面を内側に向け、かなり雑に積み上げている。東側は3、4段、西側は1、2段が残るにすぎず、高さは東西とも30cmである。

石室(第55～61図) 石室は無袖型横穴式石室で、玄室には胴張りがある。南向きに開き、主軸方位はN-5°-Wである。羨道部の閉塞状況は、羨道部分全体に径5～30cmの礫を積み上げているが、玄門側の最下部は長さ

- 玄門高 東側0.41m
西側0.15m
- 羨道長 主軸位置で2.08m
- 羨道幅 玄門部0.68m
中央付近0.78m
羨門部0.70m
- 羨道高 東壁の最も高いところで0.52m
西壁の最も高いところで0.49m
- 羨門高 東側0.10m
西側0.47m

石室の床面は、玄室・羨道とも径2～15cmの礫を厚さ10～20cm敷き詰めている。その下面には明確な舗石は存

第3章 調査の成果



第60図 1号古墳石室石材番号図

第26表 1号古墳石室石材一覧表(1)

番号	大きさ(cm)			重量(kg)	積み方	石材	備考
	高さ	幅	奥行				
1	64	79	59	150以上	基礎	粗粒輝石安山岩	奥壁
2	10	20	43	10.2	小口積	砂岩	
3	4	8	16	0.5	平積	粗粒輝石安山岩	間積み石
4	14	27	38	31.6	平積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
5				0.8		粗粒輝石安山岩	間積み石
6	21	21	41	20.0	小口積	石英班岩	面加工あり
7	16	22	40	35.5	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
8	16	20	34	19.0	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
9	17	12	29	6.3	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
10	7	10	18	1.6	小口積	粗粒輝石安山岩	
11				0.2		頁岩	間積み石
12	18	27	41	31.4	平積	石英班岩	面加工あり
13	17	27	33	18.4	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
14	16	22	36	29.8	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
15	21	26	36	30.6	小口積	石英班岩	面加工あり
16				0.3		粗粒輝石安山岩	間積み石
17				0.8		粗粒輝石安山岩	間積み石
18				0.4		粗粒輝石安山岩	間積み石
19						粗粒輝石安山岩	間積み石
20				0.3		粗粒輝石安山岩	間積み石
21				0.5		流紋岩質溶結凝灰岩	間積み石
22	28	46	33	46.0	平積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
23				0.4		砂岩	間積み石

番号	大きさ(cm)			重量(kg)	積み方	石材	備考
	高さ	幅	奥行				
24	20	23	32	18.9	小口積	溶結凝灰岩(半月山)	面加工あり
25							欠
26	16	20	31	16.4	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
27				0.4		溶結凝灰岩(半月山)	間積み石
28	15	15	31	8.7	小口積	粗粒輝石安山岩	
29	8	8	29	4.4	小口積	粗粒輝石安山岩	
30	15	23	39	16.2	小口積	流紋岩質溶結凝灰岩	面加工あり
31	5	11	18	1.3	平積	礫岩	
32	18	25	30	21.4	平積	溶結凝灰岩(半月山)	面加工あり
33	14	11	31	6.0		粗粒輝石安山岩	
34	14	23	42	21.4	小口積	石英班岩	面加工あり
35	22	27	36	25.8	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
36	6	13	17	1.2	平積	溶結凝灰岩(半月山)	面加工あり
37						頁岩	
38	7	13	24	2.4	平積	粗粒輝石安山岩	
39	21	25	47	32.4	小口積	溶結凝灰岩(半月山)	面加工あり
40	17	27	42	23.8	小口積	石英班岩	面加工あり
41				0.6		石英班岩	間積み石

第27表 1号古墳石室石材一覧表(2)

番号	大きさ(cm)			重量(kg)	積み方	石材	備考
	高さ	幅	奥行				
42	17	27	37	19.0	小口積	石英班岩	面加工あり
43				0.3		粗粒輝石安山岩	間積み石
44	26	25	37	32.3	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
45	6	13	24	2.5	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
46	10	20	31	6.3	平積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
47				0.7		粗粒輝石安山岩	間積み石
48	20	25	38	23.6	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
49				0.4		粗粒輝石安山岩	間積み石
50	13	10	16	1.7	小口積	流紋岩	間積み石
51	22	26	32	20.3	平積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
52	22	20	43	22.5	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	
53	20	13	39	12.2	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	
54	20	22	39	20.6	小口積	粗粒輝石安山岩	
55	25	23	44	26.4	小口積	粗粒輝石安山岩	
56	20	35	50	32.5	平積	石英班岩	面加工あり
57	2	9	18	1.3	小口積	砂岩	
58	8	12	19	1.5	小口積	粗粒輝石安山岩	
59	18	25	39	21.7	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	面加工あり
60	22	30	53	32.0	小口積	粗粒輝石安山岩	
61	12	2	19	1.7	小口積	粗粒輝石安山岩	間積み石
62	22	22	40	29.9	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
63	19	23	36	22.2	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	
64				0.3		砂岩	間積み石
65	11	14	28	3.9	小口積	粗粒輝石安山岩	
66	18	21	43	21.8	小口積	石英班岩	面加工あり
67	23	24	44	29.0	小口積	流紋岩	
68				1.2		石英班岩	間積み石
69	10	14	30	6.1	小口積	粗粒輝石安山岩	
70				1.0		粗粒輝石安山岩	間積み石
71	16	20	31	12.9		粗粒輝石安山岩	面加工あり
72	32	38	60	98.9	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
73	4	9	18	0.8	小口積	粗粒輝石安山岩	奥壁の押さえ
74	21	34	40	31.6	平積	石英班岩	面加工あり
75	20	24	40	23.5	小口積	石英班岩	面加工あり
76	6	14	14	1.0	平積	粗粒輝石安山岩	間積み石
77				0.8		石英班岩	間積み石
78	11	14	26	4.3	小口積	粗粒輝石安山岩	
79				0.1		粗粒輝石安山岩	間積み石
80	17	16	38	11.8	小口積	石英班岩	面加工あり
81	18	27	36	23.6	小口積	石英班岩	面加工あり
82	16	12	31	6.8	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	
83	20	27	36	23.6	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
84	22	32	38	30.0	小口積	石英班岩	面加工あり
85	24	27	39	31.5	小口積	石英班岩	面加工あり
86				0.2		粗粒輝石安山岩	間積み石
87	20	24	35	19.0	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
88	19	28	42	26.6	小口積	粗粒輝石安山岩	
89	20	22	40	26.7	小口積	不明	面加工あり
90	22	27	41	33.3	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
91	23	20	36	19.6	小口積	石英班岩	面加工あり
92	20	23	38	23.5	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
93	11	9	15	1.2	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	間積み石
94	8	20	22	1.8	平積	粗粒輝石安山岩	

番号	大きさ(cm)			重量(kg)	積み方	石材	備考
	高さ	幅	奥行				
95	24	23	40	36.7	小口積	石英班岩	面加工あり
96	8	6	15	0.8	小口積	粗粒輝石安山岩	
97	9	9	20	1.3	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	
98				0.2		溶結凝灰岩 (半月山)	間積み石
99				0.5		粗粒輝石安山岩	間積み石
100				1.0		粗粒輝石安山岩	間積み石
101				0.3		頁岩	間積み石
102				0.8		溶結凝灰岩 (半月山)	間積み石
103	10	15	26	2.2	小口積	粗粒輝石安山岩	
104	6	19	14	1.4	平積	粗粒輝石安山岩	間積み石
105	20	24	46	31.7	小口積	粗粒輝石安山岩	
106	14	24	34	15.4	小口積	粗粒輝石安山岩	
107	17	24	37	21.0	小口積	石英班岩	
108	22	16	40	14.4	小口積	粗粒輝石安山岩	
109	16	16	42	11.2	小口積	粗粒輝石安山岩	
110				0.5		頁岩	間積み石
111	12	8	20	1.5		粗粒輝石安山岩	間積み石
112				0.7		粗粒輝石安山岩	間積み石
113				0.1		流紋岩	間積み石
114				1.6		溶結凝灰岩 (半月山)	間積み石
115				0.9		粗粒輝石安山岩	間積み石
116				0.1		粗粒輝石安山岩	間積み石
117				0.3		溶結凝灰岩 (半月山)	間積み石
118	8	12	17	1.3	平積	粗粒輝石安山岩	間積み石
119	24	26	46	30.9	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
120				0.4		粗粒輝石安山岩	間積み石
121	22	21	36	15.5	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
122	20	28	38	19.7	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	面加工あり
123	20	23	41	27.6	小口積	石英班岩	
124	16	25	42	21.5	小口積	粗粒輝石安山岩	
125	9	14	24	3.8	小口積	粗粒輝石安山岩	間積み石
126				1.1		粗粒輝石安山岩	間積み石
127	6	21	24	3.3	平積	粗粒輝石安山岩	
128				1.1		粗粒輝石安山岩	間積み石
129	41	47	47	81.4	切石積み	粗粒輝石安山岩	加工痕あり
130	6	9	19	1.1	小口積	粗粒輝石安山岩	
131	8	10	14	1.2	小口積	粗粒輝石安山岩	
132				0.3		頁岩	間積み石
133				0.2		石英班岩	間積み石
134	11	15	29	4.6	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
135				0.4		粗粒輝石安山岩	間積み石
136				0.2		粗粒輝石安山岩	間積み石
137				0.5		砂岩	間積み石
138				0.4		粗粒輝石安山岩	間積み石
139				0.5		粗粒輝石安山岩	間積み石
140						頁岩	間積み石
141	9	11	21	2.0	小口積	石英班岩	間積み石
142				0.6		流紋岩質 溶結凝灰岩	間積み石
143				0.5		礫岩	間積み石
144	14	26	34	22.7	平積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
145				0.7		粗粒輝石安山岩	間積み石
146	21	27	38	37.5	小口積	石英班岩	面加工あり
147	15	34	26	22.5	平積	石英班岩	面加工あり
148	14	26	35	21.6	平積	石英班岩	面加工あり
149	21	25	34	24.5	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	

第3章 調査の成果

第28表 1号古墳石室石材一覧表(3)

番号	大きさ(cm)			重量(kg)	積み方	石材	備考
	高さ	幅	奥行				
150	30	33	36	34.8	小口積	粗粒輝石安山岩	
151	19	23	31	20.2	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
152	21	34	36	40.1	平積	粗粒輝石安山岩	
153	21	21	34	20.1	小口積	石英斑岩	面加工あり
154	41	31	45	62.8	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
155	17	25	36	24.5	平積	石英斑岩	面加工あり
156	19	14	26	6.7	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	
157	23	33	46	43.3	小口積	砂岩	
158	22	19	35	17.0	小口積	粗粒輝石安山岩	
159	20	20	33	22.3	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
160	33	18	40	25.9	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	
161	16	26	37	28.1	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
162	15	13	25	4.4	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	
163	28	25	56	49.4	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	
164				0.5		粗粒輝石安山岩	間積み石
165	8	14	29	4.3	小口積	粗粒輝石安山岩	
166				0.6		粗粒輝石安山岩	間積み石
167				1.1		流紋岩	間積み石
168				0.8		粗粒輝石安山岩	間積み石
169				0.1		流紋岩質 溶結凝灰岩	間積み石
170				1.0		流紋岩質 溶結凝灰岩	間積み石
171				1.7		粗粒輝石安山岩	間積み石
172				0.5		砂岩	間積み石
173	23	33	41	44.9	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
174	24	24	39	33.2	小口積	石英斑岩	面加工あり
175	19	24	33	20.2	小口積	石英斑岩	面加工あり
176	18	30	45	39.7	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	
177	21	25	44	41.8	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
178	17	24	38	23.1	小口積	溶結凝灰岩 (半月山)	面加工あり
179	17	28	42	33.4	平積	粗粒輝石安山岩	
180	17	26	40	32.7	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
181	16	19	36	20.9	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
182	17	25	34	27.8	小口積	粗粒輝石安山岩	面加工あり
183	46	27	42	51.8	小口積	粗粒輝石安山岩	

在しなかった。奥壁から羨門までの床面は平坦で、玄室と羨道との高低差はないが、前庭部は20cm高く、羨門の部分で急激に高くなる。前庭部は南に向かって緩やかな下り傾斜である。

石室内からは金属製品46点が出土した(第59図)。すべて床に敷かれた礫の上、あるいはその間から出土している。大部分は釘と思われる鉄製品で、それ以外に銅線1点と不明鉄製品1点がある。その出土分布を見ると、大部分は石室中央付近に集中しているので、釘のすべてが棺の材を留めたものと考えにはやや疑問がある。あるいは盗掘後の、棺材が中央に集められてしまった状況を示すのかもしれない。その他の副葬品は全く出土しな

番号	大きさ(cm)			重量(kg)	積み方	石材	備考
	高さ	幅	奥行				
184	16	25	39	25.8	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	面加工あり
185	15	25	41	26.8	小口積	粗粒輝石安山岩	
186	16	25	42	23.9	小口積	石英斑岩	
187	17	24	41	27.3	小口積	粗粒輝石安山岩	
188	30	18	34	16.8	小口積	流紋岩質 溶結凝灰岩	面加工あり
189	23	47	31	49.4	基礎	粗粒輝石安山岩	
190	29	29	48	63.0		流紋岩質 溶結凝灰岩	
191				0.7		溶結凝灰岩 (半月山)	間積み石
192	5	14	28	5.4	小口積	粗粒輝石安山岩	間積み石
193				1.2		溶結凝灰岩 (半月山)	間積み石
194	10	17	24	3.7	小口積	粗粒輝石安山岩	間積み石
195				0.7		チャート	間積み石

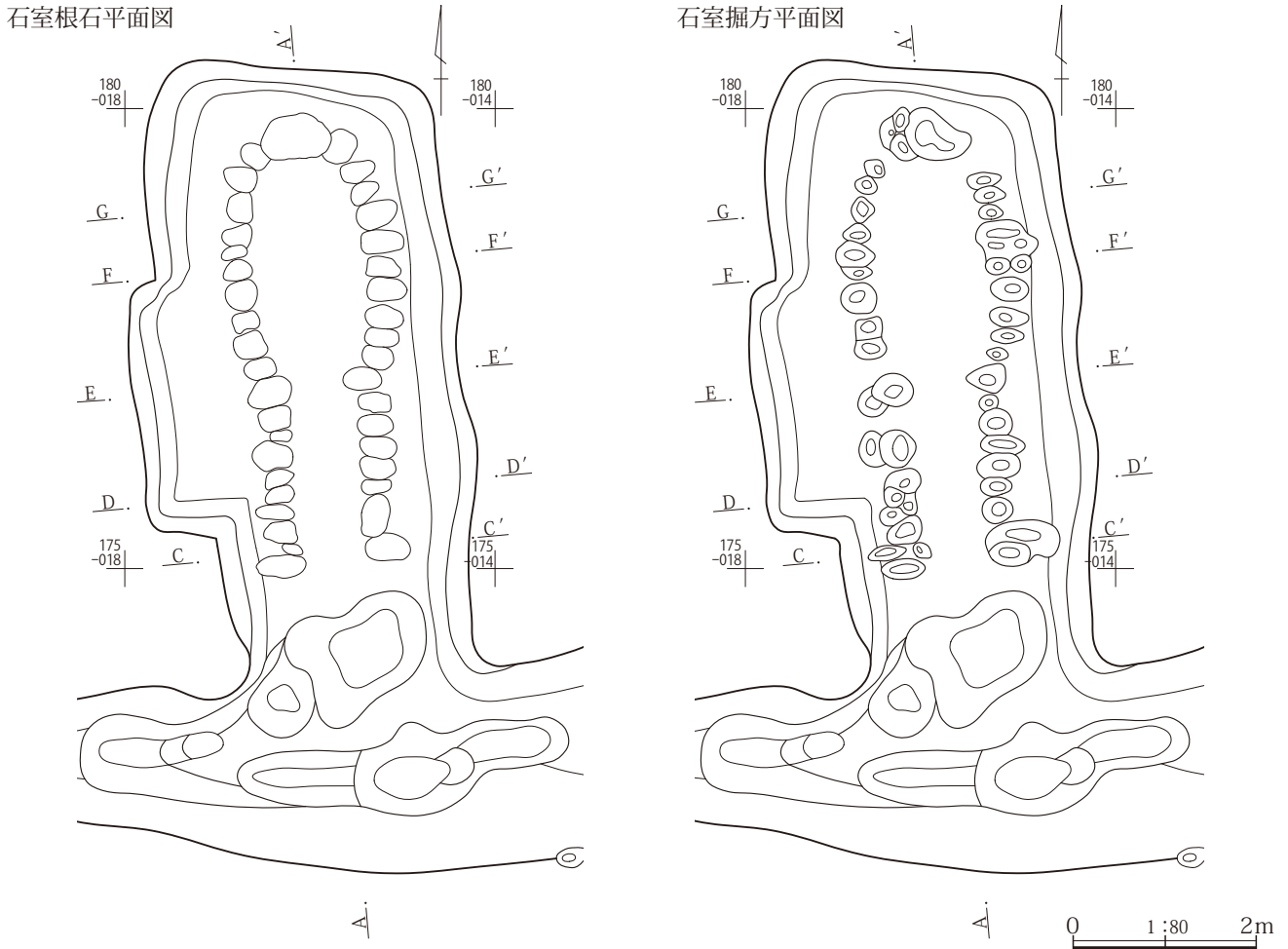
第29表 1号古墳石室石材組成一覧表

石材	個数
粗粒輝石安山岩	101
流紋岩	4
石英斑岩	31
溶結凝灰岩(半月石)	23
流紋岩質溶結凝灰岩	18
礫岩	2
砂岩	7
頁岩	6
チャート	1
不明	2
合計	195

かったので、やはり盗掘を受けた可能性が高いものと考えられる。

解体調査 石室の解体に際しては、主軸方向に平行して1ヶ所(第55図F-F')、それに直交して1ヶ所(第55・56図K-K')のベルトを設定し、断面観察を行った。

石室の解体時には石室を構成する各石材について観察を加え、大きさ、積み方、石材、加工の有無などを記録した。その結果は第26～29表の通りである。石材は赤城火山の粗粒輝石安山岩が52%を占めて最も多く、次いで石英斑岩、溶結凝灰岩(半月石)、金山流紋岩類や藪塚層に見られる流紋岩質溶結凝灰岩の順に多い。いずれも渡良瀬川など遺跡周辺で容易に得られる石材である。前



第61図 1号古墳石室根石・石室掘方平面図

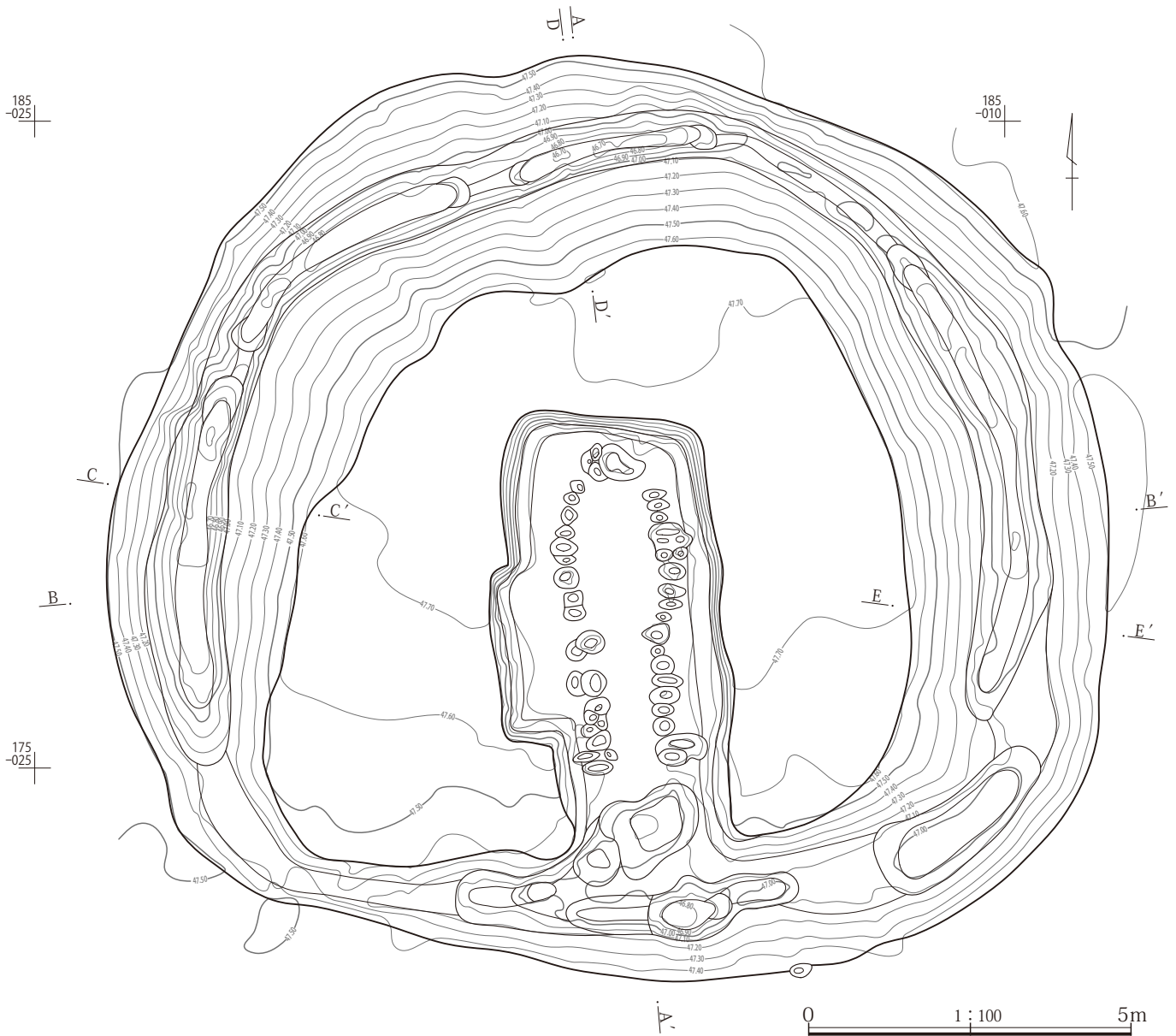
庭部や葺石の石材は集計しなかったが、石室ではほとんど使用されていない砂岩、チャート、花崗岩、ホルンフェルスも見られた。石室の各石材には面を整える程度の加工がされているものが多いが、いずれも自然石に近い状態である。石の積み方は大部分が小口積みであり、一部に平積みのものがある。

石室根石(基底石)は、すべての石材が石室掘方面に直置きされていた(第61図左)。ごく一部を除いて、小口面を内側に向けて置かれている。周囲に栗石などは見られなかった。

石室掘方(第61図右)は長方形で、西側に張り出し部をもつ。前庭部と一続きに掘っており、長さは主軸位置で計測して7.08m、幅は張り出し部分の中央付近で3.54m、それ以外の部分では2.43～3.23mである。深さは中央付近で0.61mである。底面は石室根石の置かれていた圧痕が見られる以外は平坦である。掘方を埋めた土は、第55・56図にみるように5層に分層できるが、本来の掘方

埋土は2～5層で、1層は石材を取り外した後にいった土であると思われる。この2～5層を見るとおおむね水平になっているので、石材を置きながら少しずつ土を埋め戻していったのであろう。埋土中には礫を含むが、さほど多くはなく、裏込石の機能を果たしたものは疑問である。前庭部の掘方はやや深く、一部は土坑状になっている。それらを黒褐色土や暗褐色土(第55図7～10層)で埋め戻し、使用面としている。

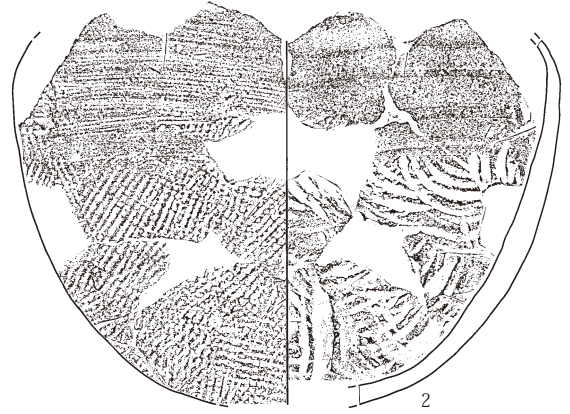
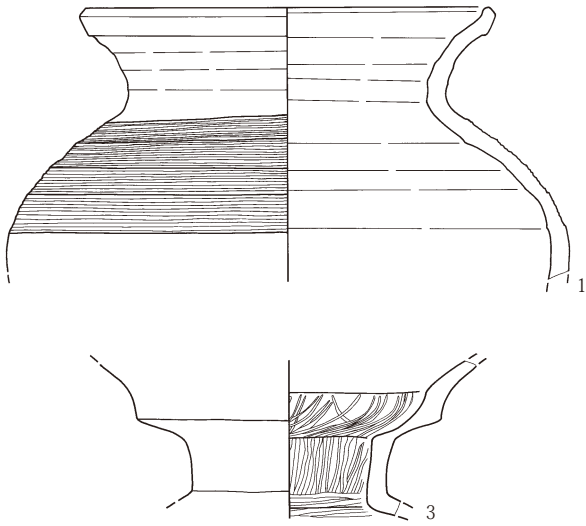
出土遺物(第63・64図) 周堀からは土器片が出土しているが、大部分は2層以上から出土している。2層の直下となる4層にはAs-B軽石が含まれているので、2層は明らかに平安後期以降の層であり、また、ここから出土する遺物には年代幅が大きい遺物が混じていたので、その中からこの古墳に伴うものを抽出することは困難である。ここではそれらの中から古墳時代の遺物3点、すなわち須恵器甕2点、土師器壺1点を取り上げた。しかし、そのうち1の壺は古墳時代前期のもので混入品であり、



第62図 1号古墳掘方平面図

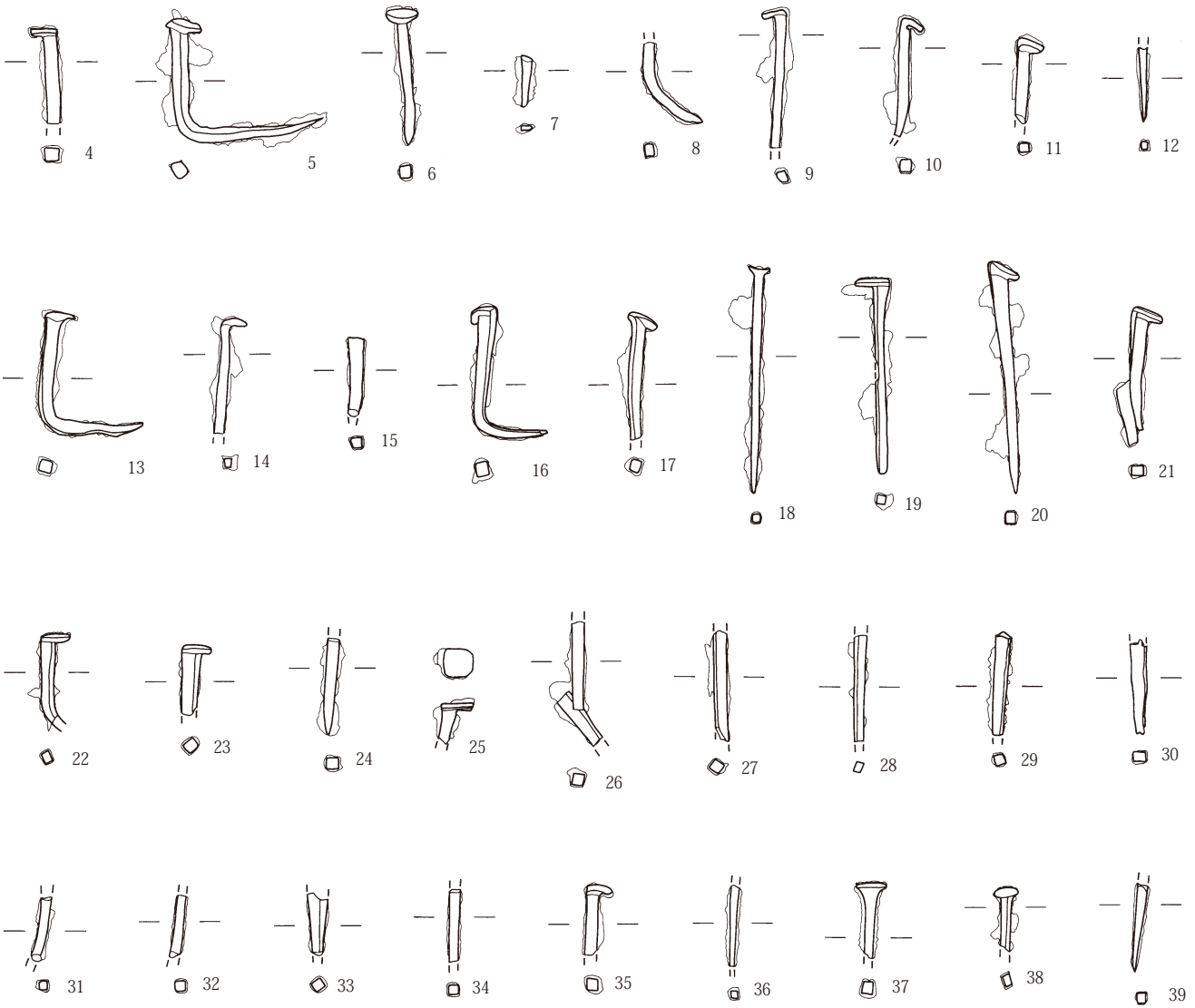
本遺構に伴う可能性があるものは2と3の須恵器甕のみである。その他、土師器杯1点、黒色土器杯1点、須恵器杯2点、同甕1点が出土しているが、これらは平安時代のもので明らかに混入であり、131・133ページで取り上げた。なお、埴輪は出土していない。石室からは前述のように釘を中心とした金属製品が出土した。その他、小破片として土師器甕類が795g、同杯類が30g、須恵器甕類が240g、同杯類60gが出土している。

時期 古墳に伴うことが確実な土器がないのでその面から考察することはできないが、埴輪が出土しないことと前庭部を有する石室の形態から、7世紀代と考えられる。



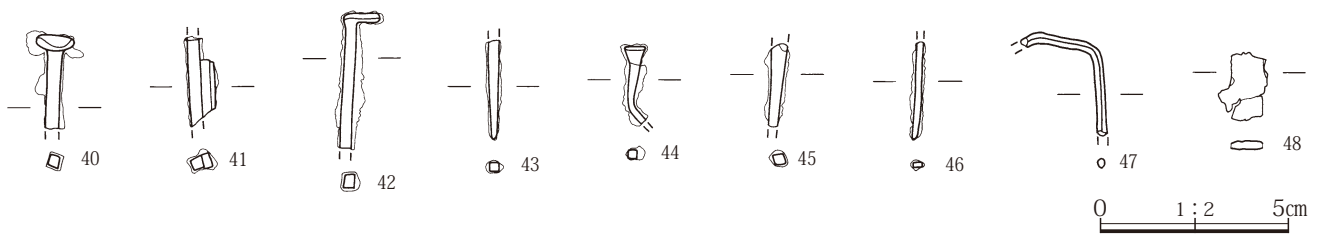
0 1:3 10cm

以下金属製品は1/2



0 1:2 5cm

第63図 1号古墳出土遺物(1)



第64図 1号古墳出土遺物(2)

2号古墳(第65～67図、第67表、P.L. 24-1～27-5, 89)

北調査区西端中央にある古墳である。1号古墳よりも削平が深くまで及び、石室の底部がかろうじて残る程度の残存度であった。北東部に6号井戸が重複するが、本古墳が古い。

墳丘(第65図) 古墳の平面形は歪んだ円形である。1号古墳同様、南辺の周堀がやや直線的であるため、歪みが強調されているが、円墳と呼んでよいであろう。径は周溝を含めて12.04～12.96m、周溝内法では7.85～9.90mであり、1号古墳より小さい。墳丘は完全に削平され、盛土は全く残っていなかった。葺石らしい石は周溝内からも出土しないので、その存否は不明である。

周堀(第65図) 周堀は場所によって幅・深さが異なり、断面形も大きく異なる。東辺のように逆台形でやや深い部分もあるが、大部分は広く浅い皿状である。上幅は0.68～2.77m、深さは0.09～0.46mで、南辺は深さ0.11～0.20mと浅い傾向がある。土器片が西隅から南西部にかけてやや集中して出土しているが、いずれも小破片で、しかもほぼすべてが上層(第65図断面図の2層)から出土しており、本古墳に明確に伴うものはない。

石室(第66・67図) 石室の底部がわずかに残るのみで、石室を構成する壁面の石はすべて失われていた。石室の掘方は長方形で、長さ4.79m、最大幅2.53mであり、主軸方位はN-9°-Eである。削平は掘方の内部にまで及んでいた(第66図の1層)が、北半部中央を中心とした範囲に舗石と思われる石が残っていた。これは径10～30cm程度のやや平たい石を平置きにしたもので、より南側には見られない。その上面には径2～15cm程度の礫が多量に残っていたので、1号古墳同様、舗石の上には礫が敷き詰められ、それが石室の床面になっていたと思われる。これらの礫を取り除いて掘方底面を精査したところ、石室根石(基底石)を置いた痕跡と思われる凹みが見つかった。その痕跡から石室の大きさを確定すること

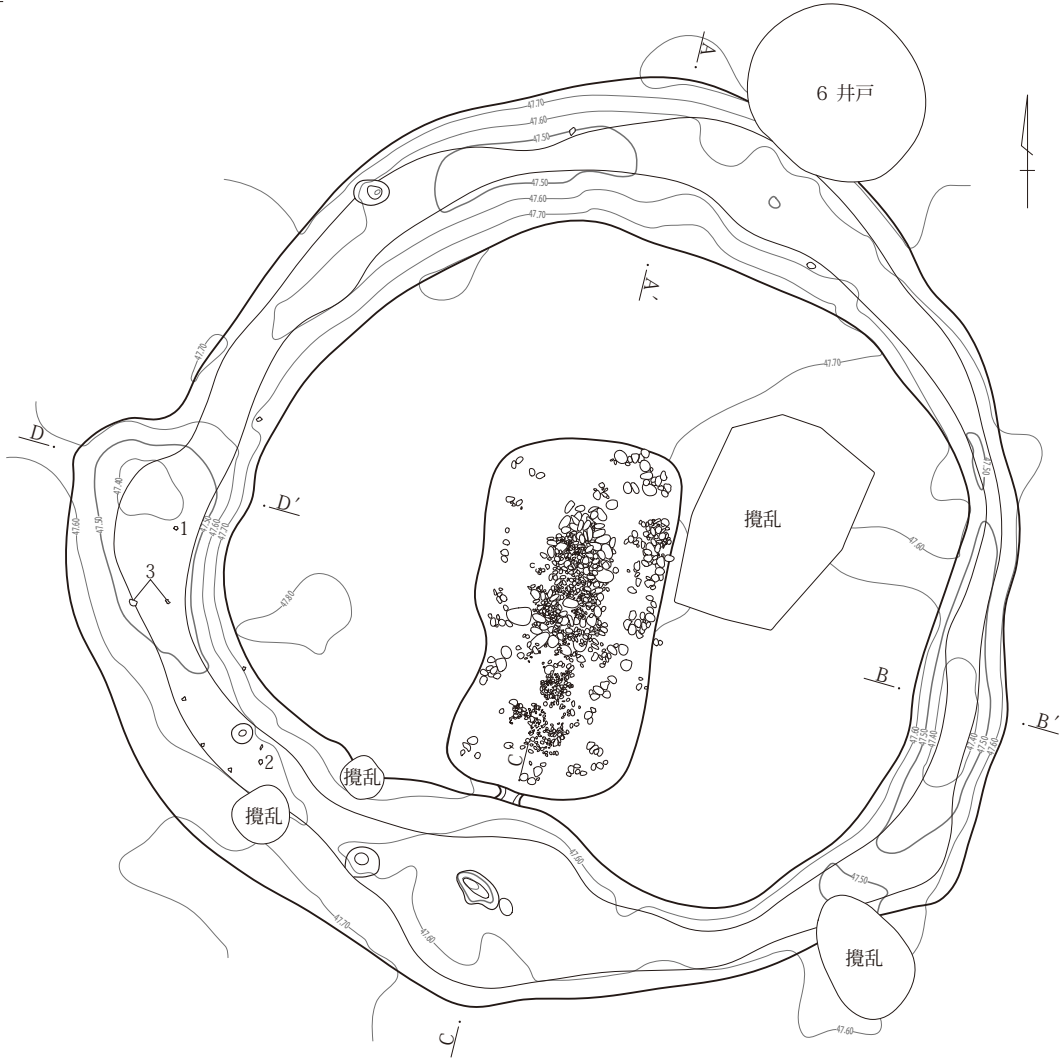
は困難であるが、平面的な形態は、1号墳と同様、無袖型の横穴式石室で、玄室にはやや胴張りがある形に復元できるものと思われる。玄室中央付近で東西の痕跡の間隔を計測してみると1.10m程度となるので、玄室の底面幅はそれよりも狭いことになり、1号古墳よりも小ぶりの石室になるものと思われる。なお、掘方の深さは、0.18～0.21m程度であり、底面は南端部がごくわずかに浅いのと、根石の痕跡以外はごく平坦にされている。石室部からの出土遺物は、釘と思われる鉄製品が1点出土しているだけである。

出土遺物(第67図) 出土遺物は少ない。土器はすべて周堀から出土したもので、5点を掲載した。いずれも土器で、杯、高杯、埴、甕、台付甕が1点ずつである。前述したとおり出土層位は覆土の上層であり、古墳に伴うものとは断定できない。その他小破片として、土師器甕類が2,221g、同杯類が20g、同高杯・器台類が20g出土している。鉄製品は1点であり、釘だと思われる。これは石室部の覆土から出土した。

時期 古墳に確実に伴う遺物がないので確定は難しいが、埴輪を伴わないことや推定される石室の形などが1号古墳と共通していることから、1号古墳同様、7世紀代のものと考えられる。

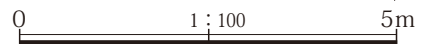
195
-070

195
-055

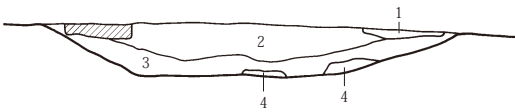


180
-070

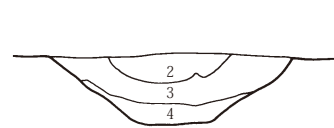
180
-055



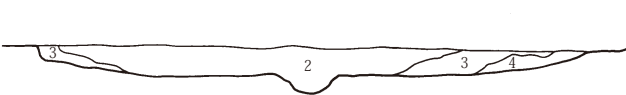
A, L=48.00m .A'



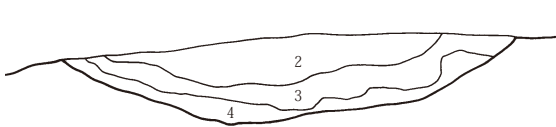
B, L=48.00m .B'



C, L=48.00m .C'



D, L=48.00m .D'

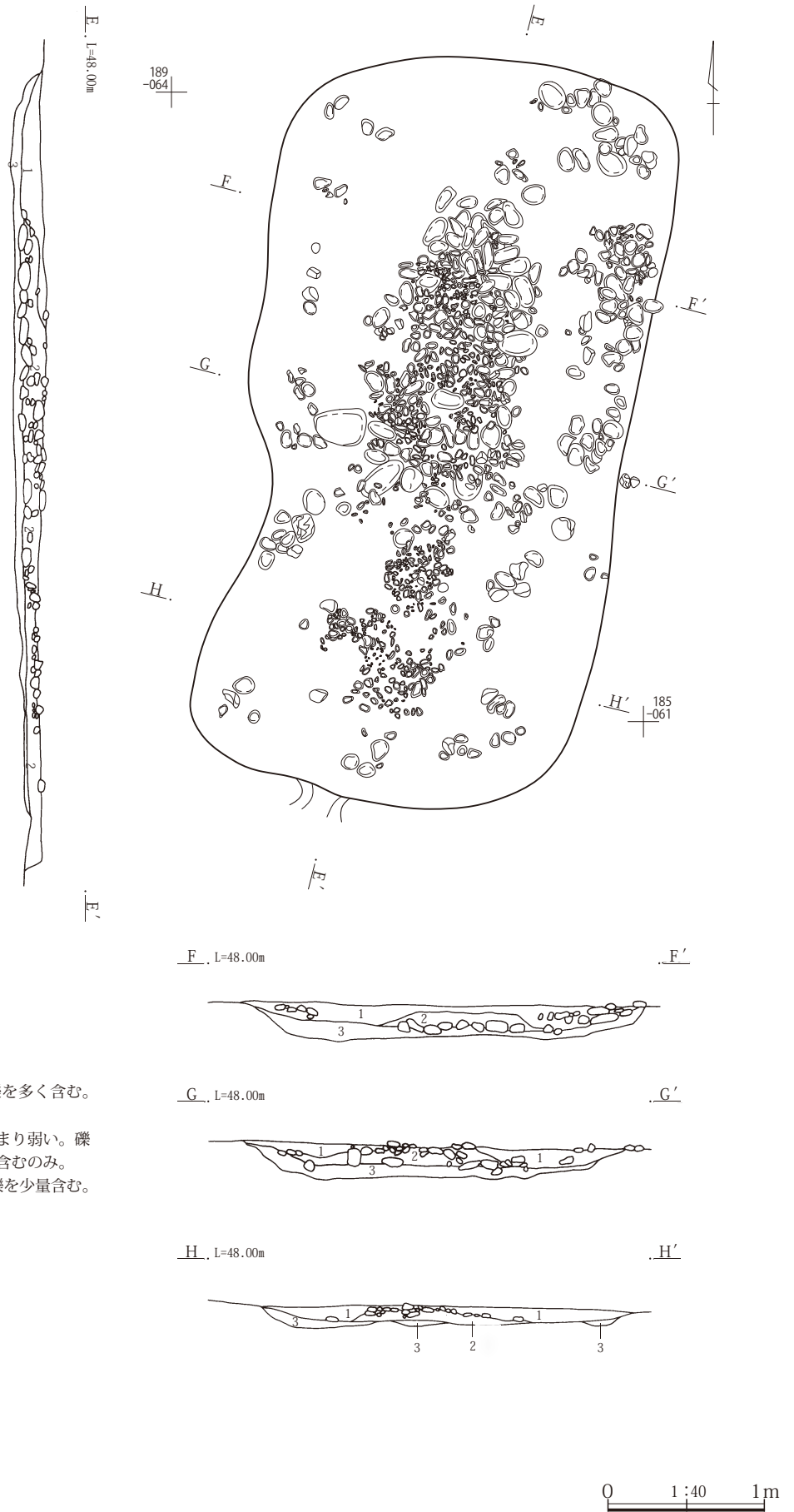


周堀

1. As-Bの二次堆積 As-Bをブロック状に含む。黒色土を含む。砂質。
2. 黒褐色土 FAパミス(φ 1~3mm)をやや多く含む。ローム粒、暗褐色ブロックを少し含む。縮まりややあり。砂質。
3. 暗褐色土 白石軽石粒(φ 1mm)を少し含む。ローム、黒色土を含む。縮まりややあり。
4. 黄褐色土 黒色土ブロック+ロームブロック。縮まりやや弱い。



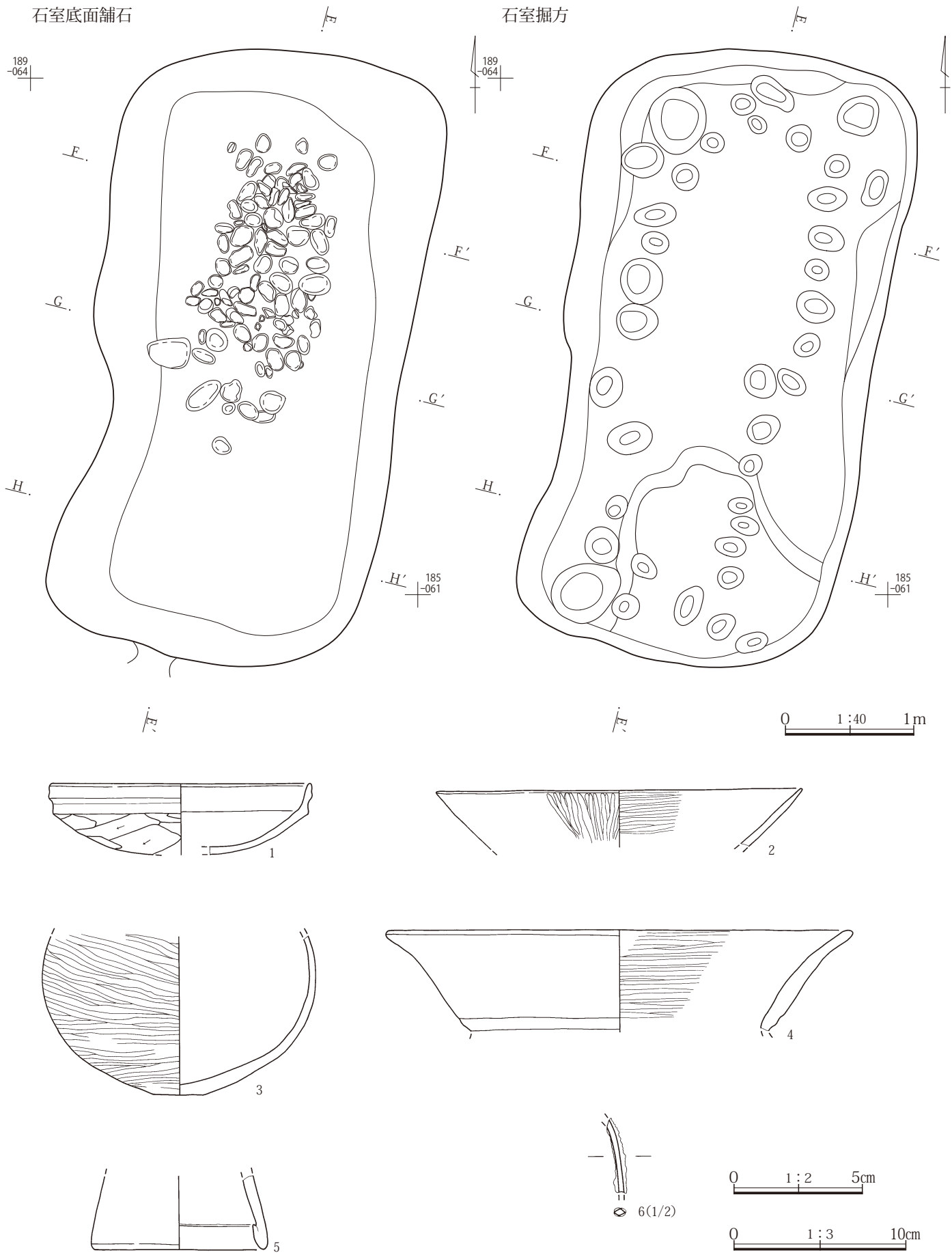
第65図 2号古墳平断面図



石室底部

1. 暗褐色土 ローム、黒色土を含む。礫を多く含む。縮まりややあり。近世の攪乱。
2. 暗褐色土 ローム、黒色土を含む。縮まり弱い。礫多量(玉砂利)。土は玉砂利の間に少し含むのみ。
3. 暗褐色土 地山ローム主体。黒色土、礫を少量含む。縮まりあり。

第66図 2号古墳石室平断面図



第67図 2号古墳石室底面舗石・掘方平面図・出土遺物

1号周溝墓(第68図、P.L. 28-1~3)

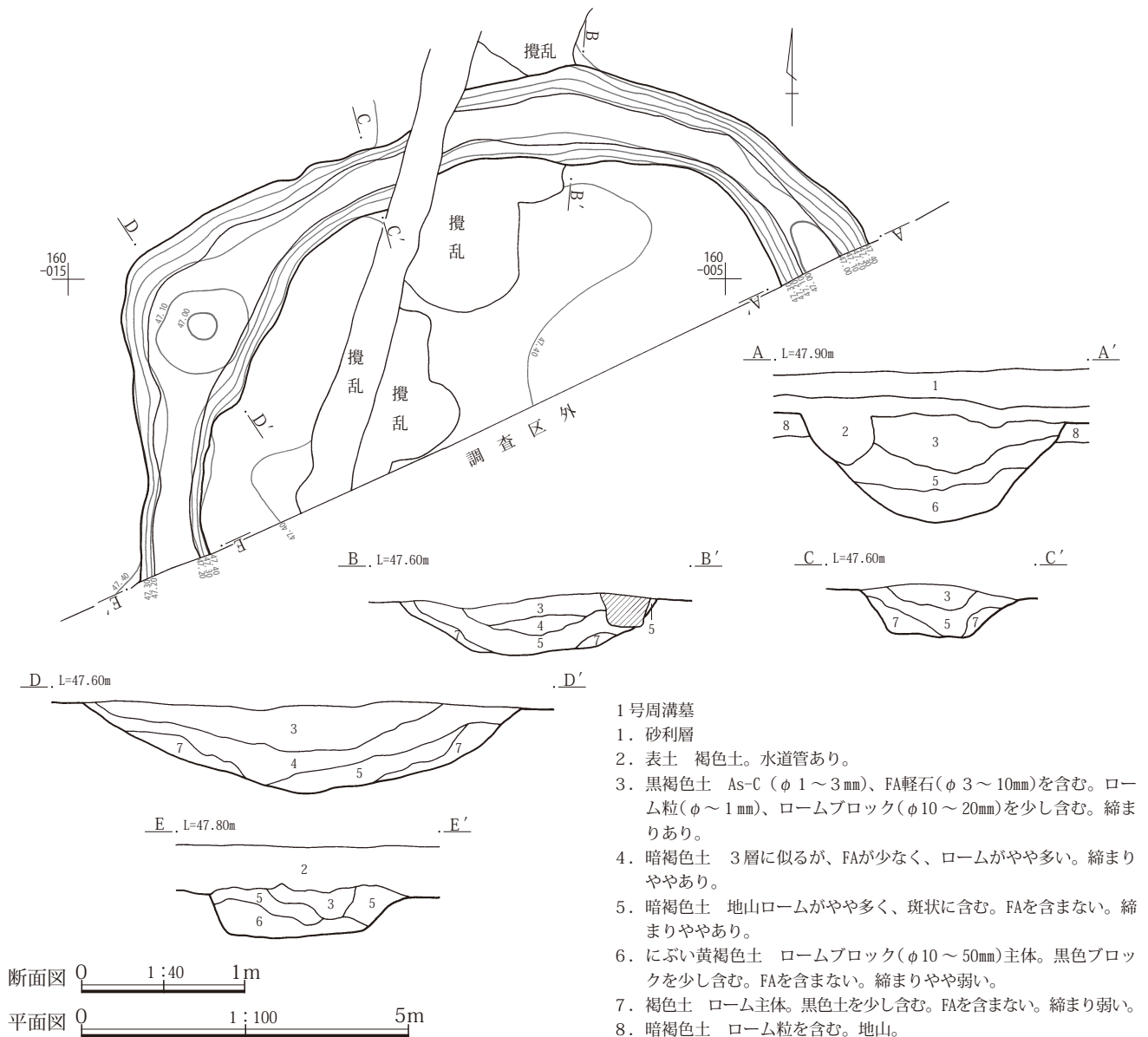
北調査区南端のやや東寄りにあり、南半部が調査区外となる。調査時に2号溝と名付けた現代溝と、浅い攪乱とによって中央部を破壊されている。他の遺構との重複はない。

北側の1/3程度が調査区にかかっていると考えられるが、調査できた範囲内では周溝の形がかなり不整形であり、全体の形がどのようなになるのかは不明確である。周溝の東西に隅のように見える屈曲部があるので、それを重視すれば、かなり不整な方形になるのではないかと推定される。大きさも不明確だが、調査区南壁に沿った位置で計測すると、周溝内法で9.58mとなる。周溝は上幅0.84~1.52m(西側の隅と思われる部分を計測すると

2.30m)、下幅は0.40~1.00m(同じく1.45m)、深さは0.21~0.53mである。断面は逆台形であり、底面はほぼ平坦になっている。

全体に削平されており、盛土などは全く認められず、主体部も見つかっていない。

出土遺物もきわめて少なく、土師器の甕類の破片が52g、同じく高杯類が15g出土しているにすぎない。そのため、時期を明確にすることは困難であるが、不整な形態である点で1・2号古墳とよく似ており、同時期の古墳である可能性もあると思われる。ただし、3号周溝墓のように溝覆土下部にまでFA軽石が含まれているということはないので、古墳時代後期にまで引き下げる根拠はより少ないと言えよう。



- 1号周溝墓
1. 砂利層
 2. 表土 褐色土。水道管あり。
 3. 黒褐色土 As-C (φ 1~3mm)、FA軽石(φ 3~10mm)を含む。ローム粒(φ ~1mm)、ロームブロック(φ 10~20mm)を少し含む。締まりあり。
 4. 暗褐色土 3層に似るが、FAが少なく、ロームがやや多い。締まりややあり。
 5. 暗褐色土 地山ロームがやや多く、斑状に含む。FAを含まない。締まりややあり。
 6. にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ 10~50mm)主体。黒色ブロックを少し含む。FAを含まない。締まりやや弱い。
 7. 褐色土 ローム主体。黒色土を少し含む。FAを含まない。締まり弱い。
 8. 暗褐色土 ローム粒を含む。地山。

第68図 1号周溝墓平断面図

2号周溝墓(第69～74図、第67・68表、P L. 28-4～31-2, 89, 90)

北調査区西側中央やや北寄りにある。7号住居、1号竪穴状遺構、41・90号土坑と重複し、本遺構は1号竪穴状遺構、41号土坑よりも古い。7号住居、90号土坑は縄文時代のものであり、本遺構の下層で調査したものである。その他数カ所の攪乱が重複する。

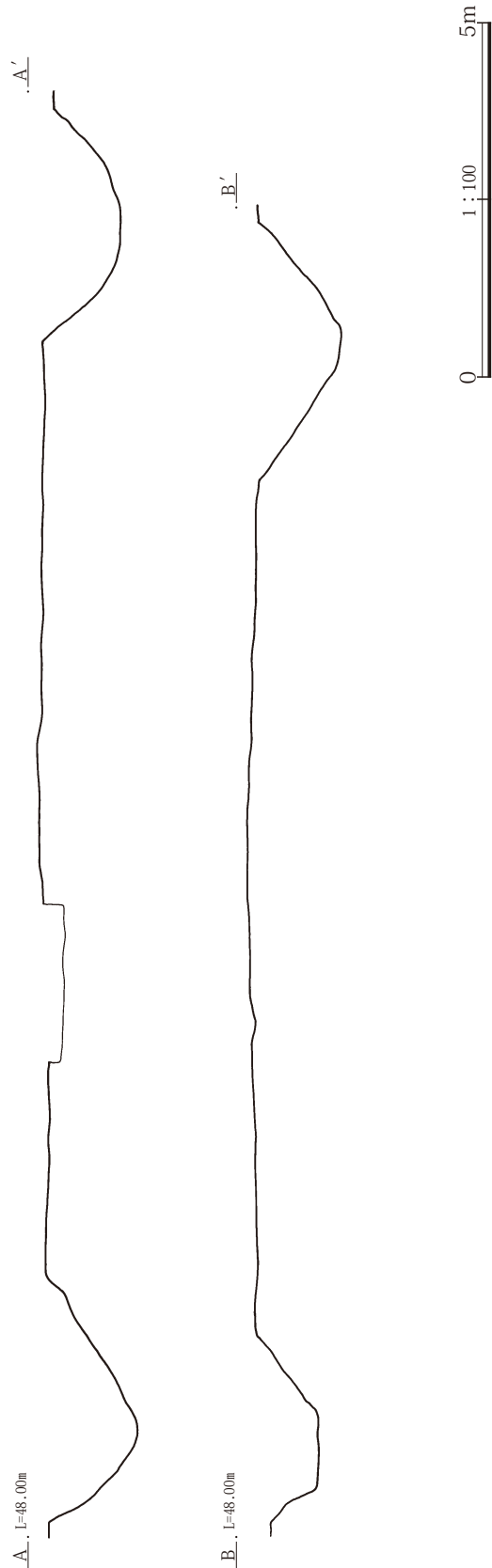
整った長方形であり、方形周溝墓である。長軸の方位はN-48°-Wである。大きさは各軸の中央で計測すると、周溝を含めて19.00m×18.10m、周溝内法では12.80×11.90mである。周溝は広狭の凹凸が少なく、上幅2.60～3.65m、下幅0.45～1.20m、深さは各辺の中央付近が細長く深く1.10～1.28mもあるが、それ以外の場所は0.55～0.94mと浅い。断面は逆台形のところが多い。

全体に削平されており、盛土などは全く認められず、主体部も見つかっていない。

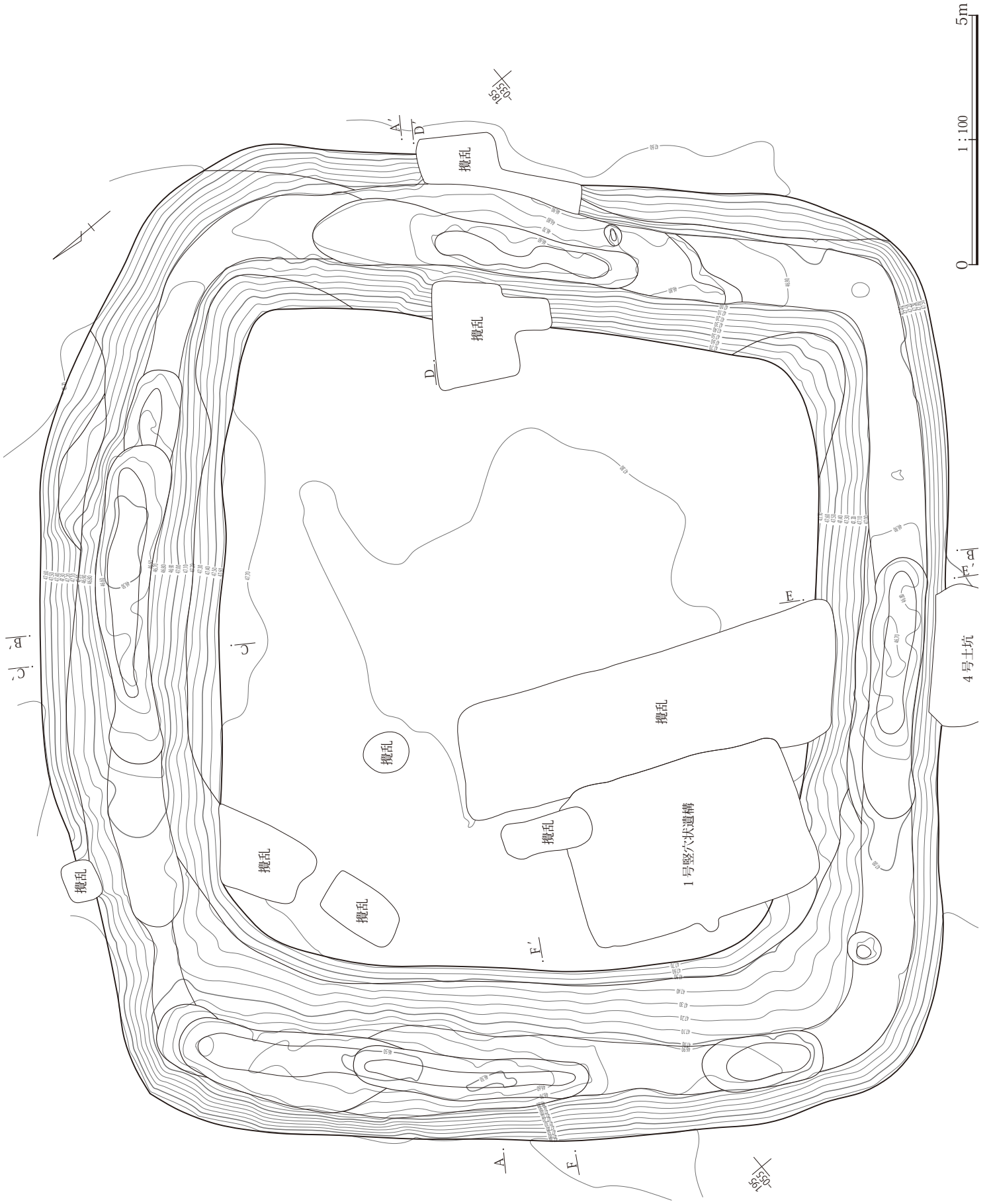
周溝の埋土を見ると、A-A'セクションの19層など、内側からの流れ込みと思われる顕著な層があり、これは盛土の崩れた土であると思われる。また、中層にある14層はF A降下以前の洪水層と思われ、遺物はこの上下の層から多く出土した。また、A-A'セクションの9層は非常に硬く締まっており、この上面が何らかの理由で踏み固められたことがあったらしい。あるいはまだ完全には埋まりきっていない周堀の凹みが、道として利用されていたのかもしれない。

遺物が多いが小破片が大部分である。周溝の全域から出土しているが、掲載した資料のようにある程度の大きさまで復元できたものは、北東辺のやや南寄りと、南西辺から西隅にかけて出土している。写真(P L. 30-3～6)に見るように、ほとんどの遺物は底面よりも高いレベルから出土しており、周溝がある程度埋まった後に入り込んだものであろう。掲載できたものは土師器19点と釘1点である。土器の器種は多く、小型鉢1、高杯2、器台1、埴2、小型壺1、壺2、台付甕6、小型甕1、甕3が見られる。15の甕は北東辺の南寄りで、多くの小破片になった状態で出土した。いずれの破片も底面から50cm前後高い位置から出土している。17の甕は南隅付近から出土し、1/2ほどの大きな破片は底面から5cmの高さから出土している。その他、小破片として土師器甕・壺類が9,980g、同高杯・器台類が230g出土している。

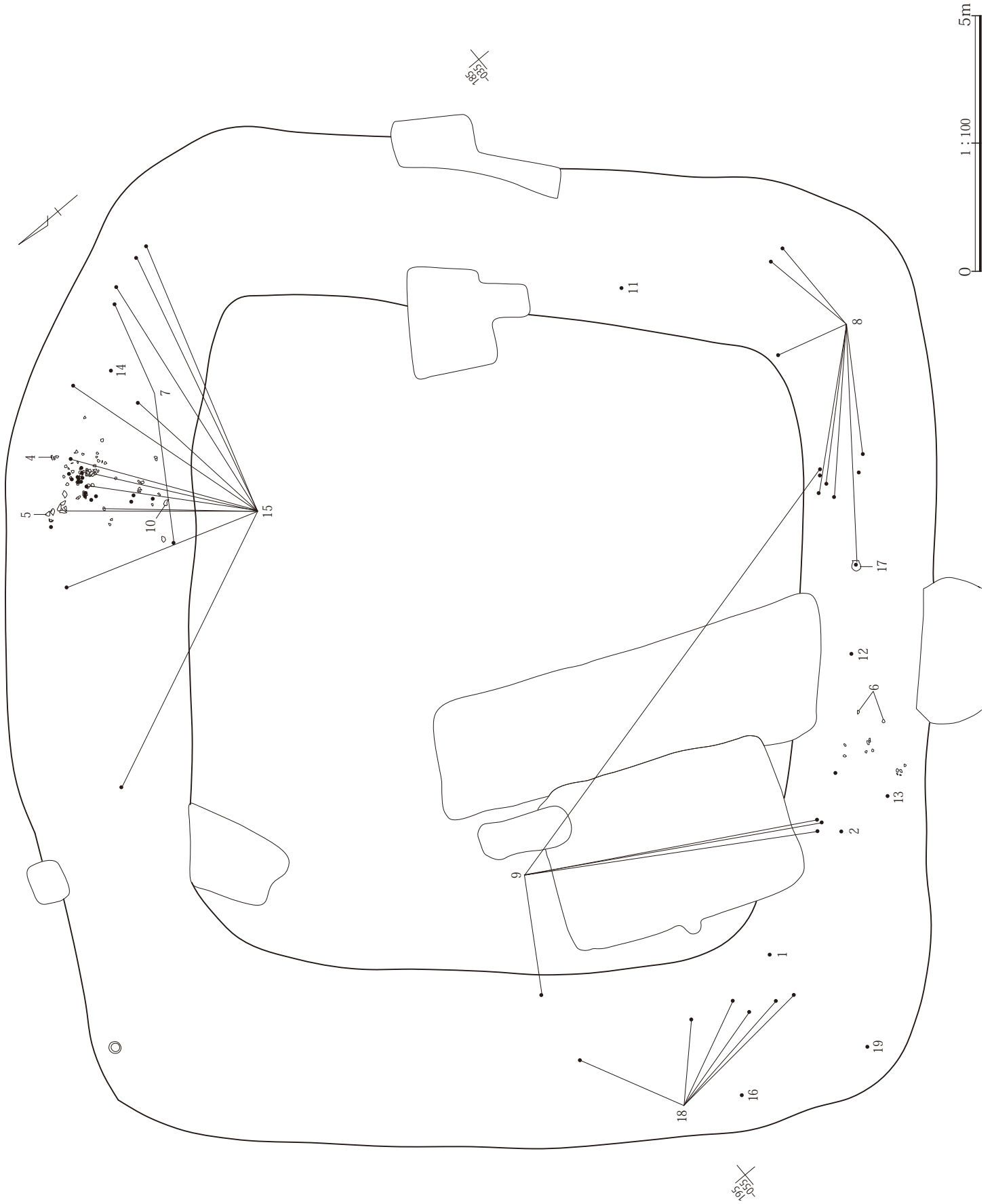
これらの出土遺物から、この周溝墓の時期は4世紀後半と考えられる。



第69図 2号周溝墓断面図

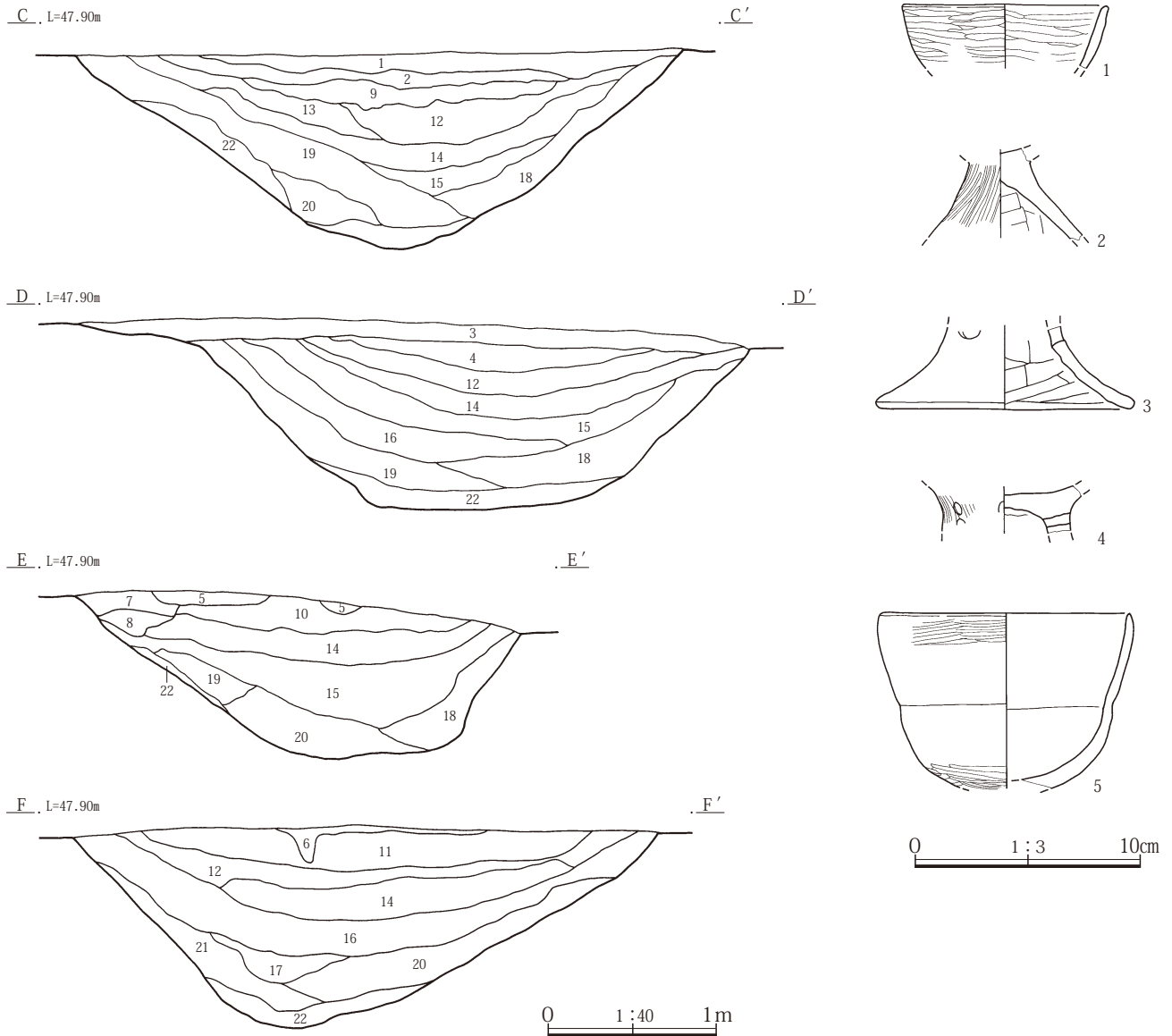


第70図 2号周溝墓平面図



第71図 2号周溝墓遺物出土状態図

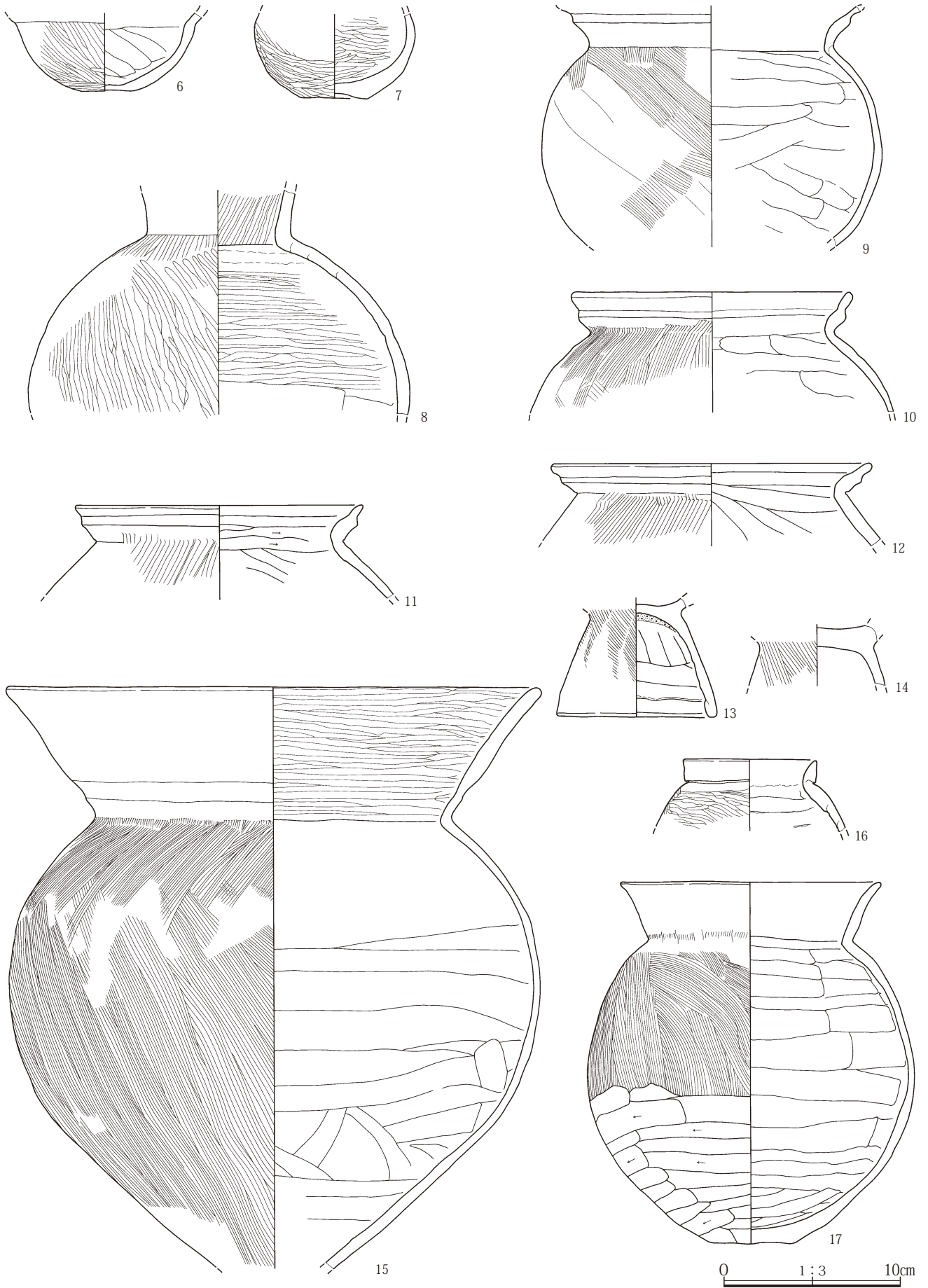
第3章 調査の成果



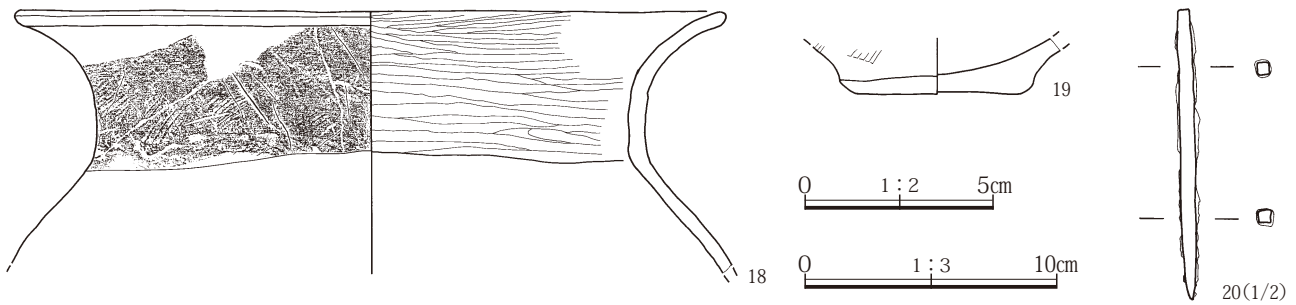
2号周溝墓

1. 褐色土 FA (φ 1mm程)を少し含む。2層に似るが土壌化してやや黒色が強い。締まりあり。
2. 暗灰黄褐色土 ローム、暗褐色土を含む。FAパミス(φ 1mm程)、焼土粒を少し含む。締まりやや弱い。
3. 黄褐色土 As-C、FA (φ 1mm)、焼土粒、炭化物粒を含む。砂質(As-Bか)。
4. 褐色土 3層に似るが、As-C、FAが少ない。締まりあり。
5. 明黄褐色 ローム、小礫を含む。締まり弱い。中・近世の埋没土。
6. As-B 二次堆積のAs-B。黒色土を含む。鋤痕か。
7. 黄褐色土 ローム粒、FA、焼土粒を含む。5層のブロックを含む。締まりやや弱い。後世の溝か。
8. 黄褐色土 7層に似るが、ローム粒、FA、焼土粒がやや多い。締まり弱い。後世の溝か。
9. 黒褐色土 FAパミス(φ 3~5mm)を多く含む。As-C (φ 1~3mm)、焼土粒、炭化物粒、小礫(φ 1~3mm)を含む。非常に硬く締まっており、道として使用されていた可能性あり。
10. 黒褐色土 9層に似る。下層の洪水層(14層)ブロックや暗褐色土ブロックを含む。
11. 黒褐色土 9層に似るが硬化面は見られない。暗褐色土ブロック、FAを含む。締まりあり。
12. 暗褐色土 As-C (φ 1mm程)、焼土粒、炭化物粒、小礫(φ 1~3mm)を少し含む。14層、黒色土を含む。締まりあり。
13. 暗褐色土 12層に似るが、14層、ローム、焼土粒が多い。締まりやや弱い。
14. にぶい黄色土 粒子が非常に細かく、シルト質。締まりやや弱い。FA降下以前の洪水層か。遺物はこの層の上下から多く出土。
15. 暗褐色土 As-C (φ 1mm)を少し含む。ローム・黒色土を含む。
16. 暗褐色土 ローム、黒色土を斑状に含む。部分的に炭化物、焼土粒、ローム粒を含む。19層に似るが、黒色土がやや多い。締まりやや弱い。
17. 暗褐色土 As-C (φ 1mm)を少し含む。ローム・黒色土を含む。やや攪乱されているように見える。
18. 褐色土 ロームと黒色土の混合。As-C (φ 1mm)、焼土粒をごく少量含む。締まりやや弱い。
19. 褐色土 18層に似るが、ロームがやや多い。締まりやや弱い。
20. にぶい黄褐色土 黒色土とロームブロックの混合。ロームブロック(φ 1~5cm)、ローム粒を斑状に含む。締まり弱く粗い。
21. 褐色土 ロームと黒色土の混合。As-C (φ 1mm)、焼土粒をごく少量含む。締まりやや弱い。
22. にぶい黄褐色土 20層に似るが、ロームブロック主体。

第72図 2号周溝墓周溝断面図・出土遺物(1)



第73図 2号周溝墓出土遺物(2)



第74図 2号周溝墓出土遺物(3)

3号周溝墓(第75・76図、第68表、P.L. 31-3～32-4、90)

北調査区南端中央やや西寄りにある。南半部が調査区外となる。調査時に1号溝と名付けた現代溝、1号道路状遺構南側溝、15号土坑、1・2号火葬墓、18号集石といった遺構と重複し、本遺構はそれらすべてよりも古い。

大部分が調査区外になるものと思われるが、周溝の両端付近が急角度で曲がっているため、やや不整ではあるものの方形になると思われる。

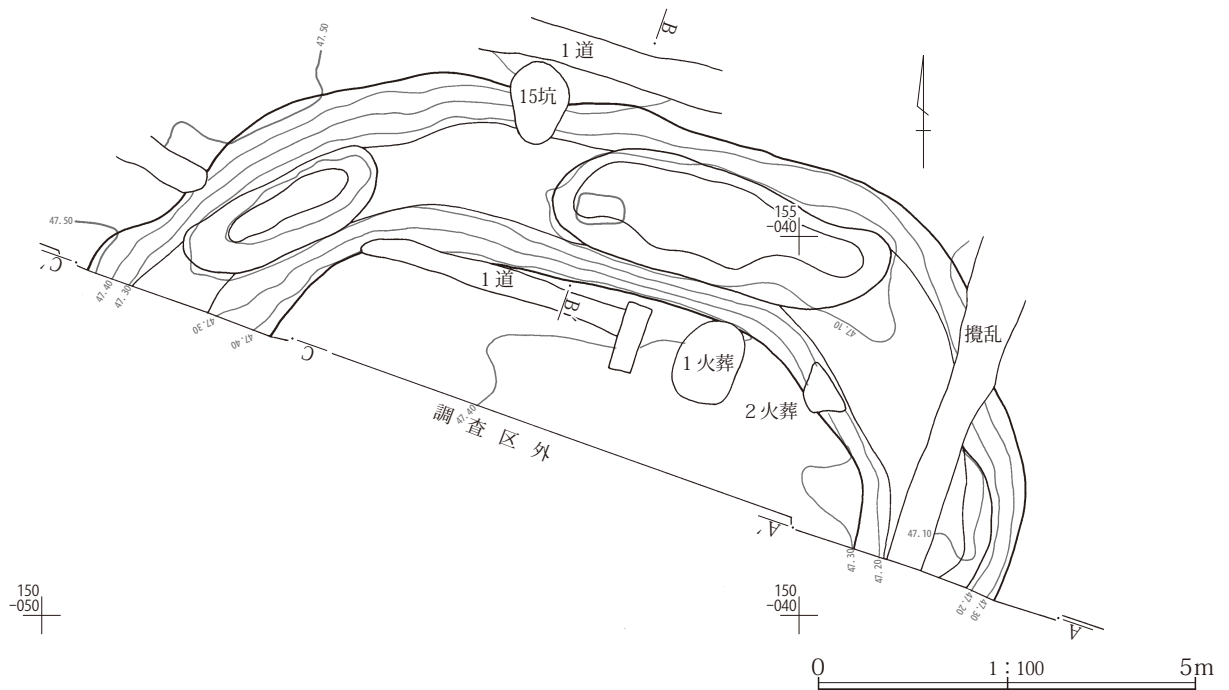
大きさは調査区南壁に沿った位置で計測すると、周溝内法で8.18mである。周溝は上幅2.00～2.60m、下幅0.82～1.60m、深さは0.30～0.33mで底面は大体平坦であるが、一部が土坑状に深くなりそこは0.42～0.55mである。

全体に削平されており、盛土などは全く認められない。主体部は調査区外になるとおもわれる。

出土遺物はきわめて少ない。掲載したのは須恵器甕の

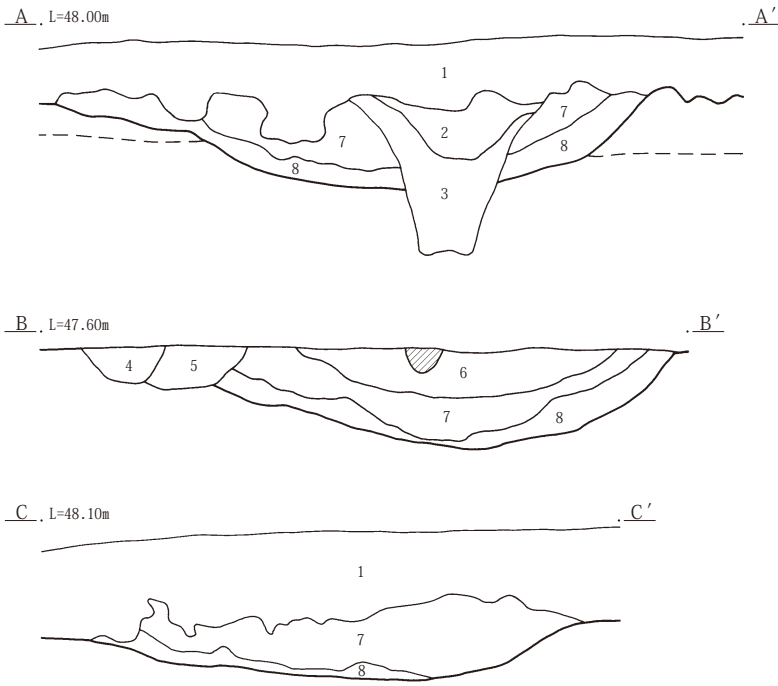
小破片2点である。その他、土師器甕類が230g、杯類が10g、須恵器甕類が30g出土しているにすぎない。

本遺構の時期は、須恵器が出土していることを重視すれば古墳時代後期になるとと思われるが、掲載した破片は周溝の覆土上層で出土しており、本遺構に伴うものと断定することはできない。また、掲載しなかった須恵器甕類30gのうち1点もやはり上層で出土しているため、本遺構に須恵器が伴った確実な証拠はないと言えよう。その他の遺物も小破片であり、それらから時期を特定することは困難である。ただし、1号周溝墓同様、不整な形態が1・2号墳と似ていることと、調査時の所見では溝の覆土の最下層(8層)でもFA軽石の含有が認められており、FA降下後に周溝が埋没したと考えられることから、古墳時代後期の古墳である可能性は高いものと思われる。



第75図 3号周溝墓平面図

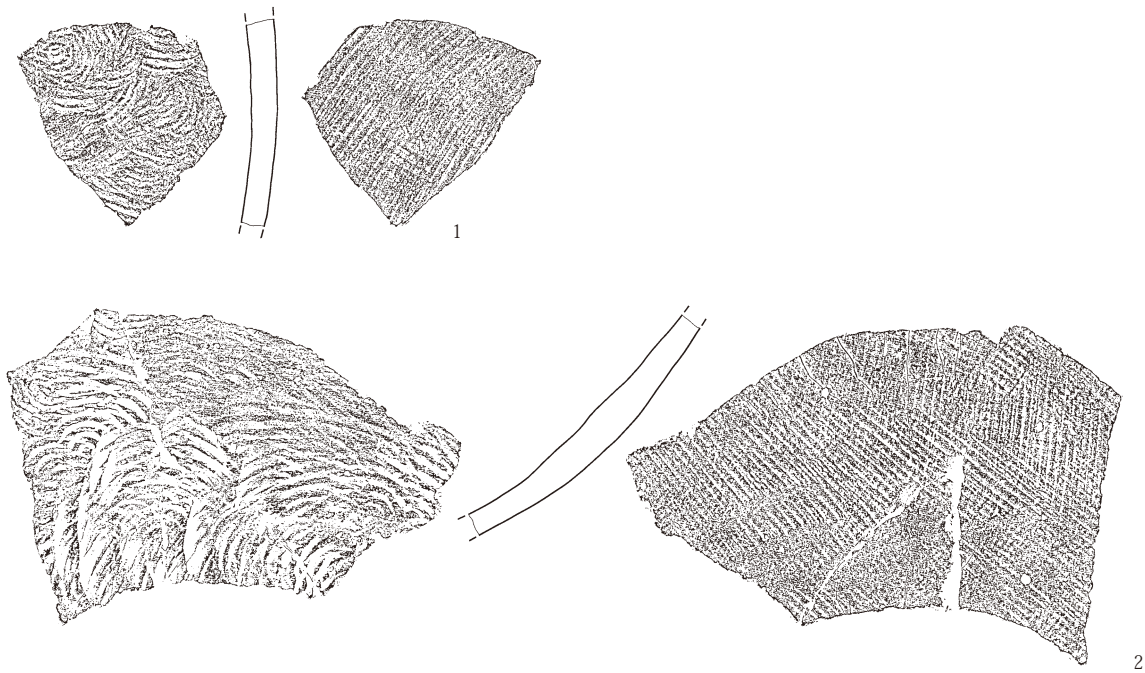
第5節 古墳時代の遺構と遺物



3号周溝墓

1. 表土
2. ロームブロックと暗褐色土ブロックの混合 締まり弱い。礫、陶磁器出土。1号溝。
3. 褐灰色土 ローム、炭化物、礫を含む。締まり弱い。陶磁器出土。1号溝。
4. 暗褐色土 1号道路状遺構北側溝。
5. 暗褐色砂質土 As-Bらしい砂粒を多く含む。As-C(?)を少量含む。黒色土、ローム粒を含む。砂質だが締まりはよい。古銭出土。
6. 黒褐色土 As-C、FAパミスを含む。ローム粒を含む。締まりあり。
7. 暗褐色土 6層に似るが、ローム粒をやや多く含む。As-C、FAパミスを少し含む。焼土粒炭化物粒をわずかに含む。締まりややあり。
8. にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ 1~3cm)を斑状に含む。黒色土、焼土粒、炭化物粒を含む。As-C、FAパミスを含む。締まりややあり。

0 1:40 1m



0 1:3 10cm

第76図 3号周溝墓周溝断面図・出土遺物

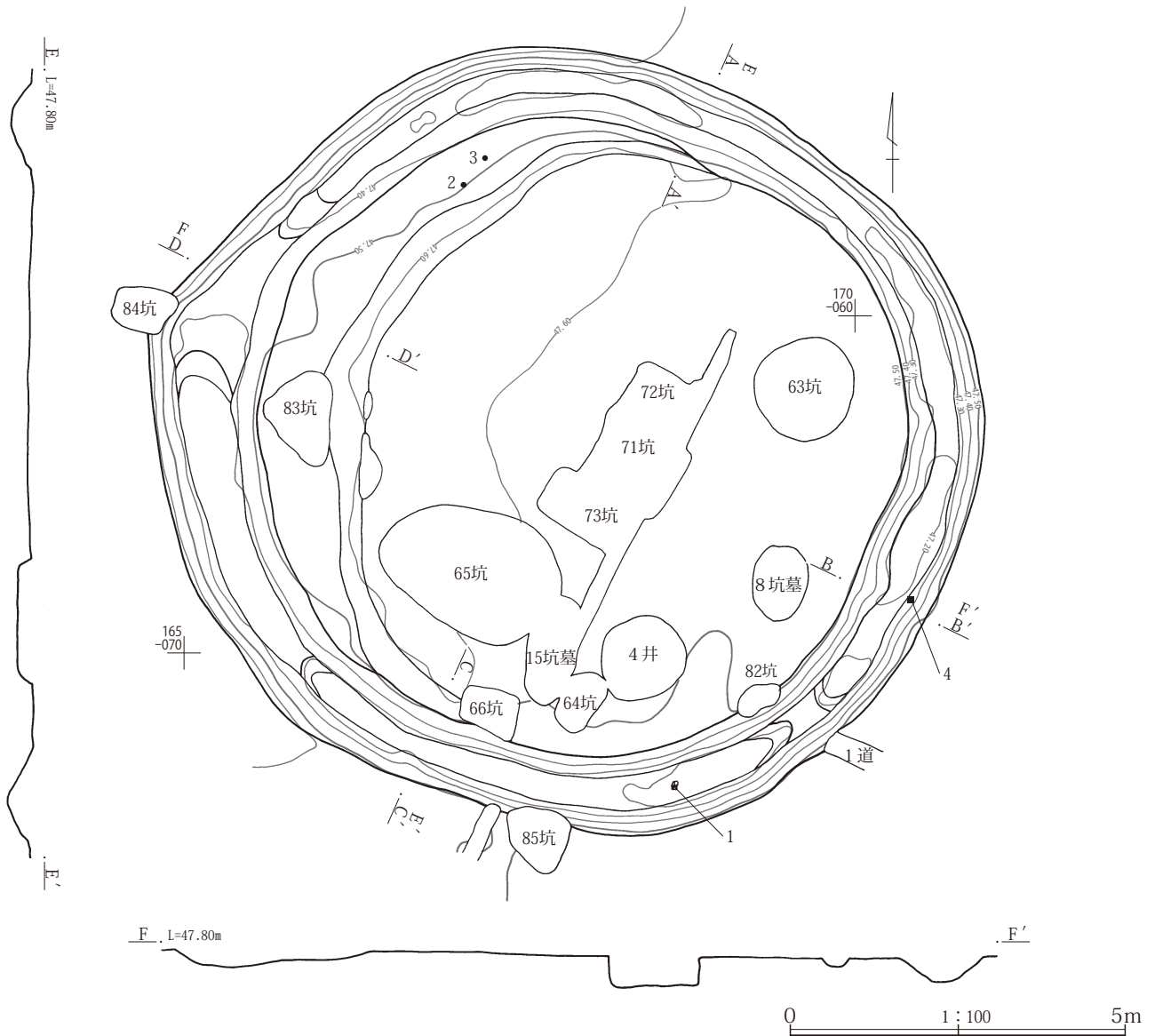
4号周溝墓(第77・78図、第68表、P.L. 32-5～34-2, 90)
 北調査区南西隅近くにある。63～66・71～73・82～85号の11基の土坑と、8・15号土坑墓、3号火葬墓、4号井戸、1号道路状遺構の南北両側溝など、多くの遺構と重複している。それらすべてよりも古い。

形はほぼ正円に近い。大きさは周溝も入れて11.20～12.40mであり、周溝内法では9.50～9.60mである。周溝はほぼ同じ幅であり、西側で太く見えているのは、D-D'セクションで明らかのように、調査時に誤って掘りすぎてしまったからである。本来この部分は構築土で、周溝は他の部分と同じ程度に狭かったようである。上幅は、その西側を除いて0.84～1.29m、下幅は0.27～0.78m、深さは0.23～0.39mである。断面は逆台形のところもあるが、椀状あるいは逆三角形のところが多い。

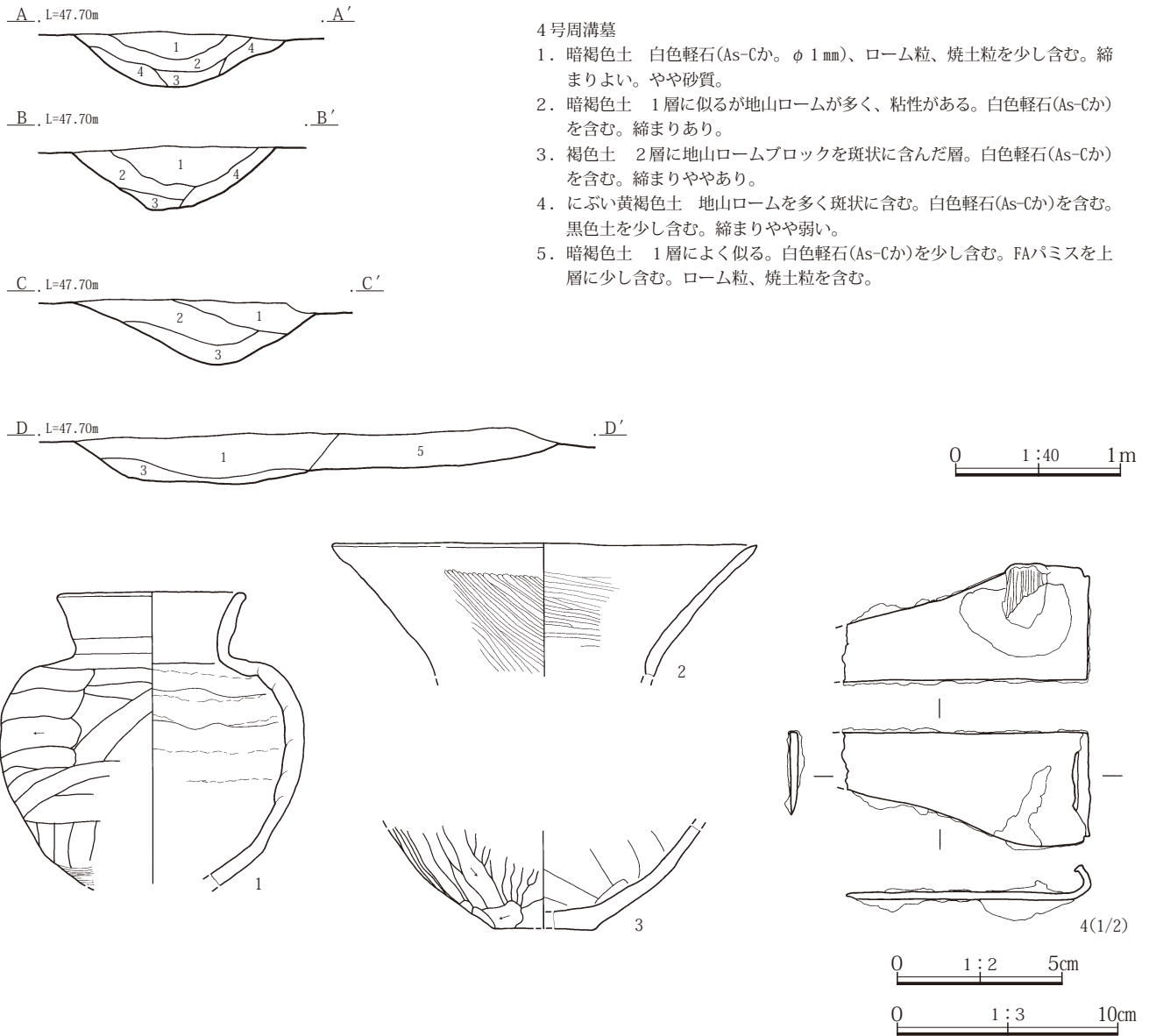
やはり全体が削平されており、盛土などは全く認められず、主体部も見つかっていない。

出土遺物は少ない。北西部の周溝につながる斜面に土器の小破片が集中していた以外は、散在的な出土分布である。掲載したのは土師器3点(壺2、甕1)と鎌と思われる鉄器1点である。1の壺は周溝南部から出土したが、底面からは23cm高いレベルから出土した。2・3の壺・甕は北西部の構築土の中から出土しているので、1とは埋没時期に差があることになる。鉄器は周溝南東部から出土したが、底面からは23cm高いレベルからの出土である。その他、小破片として土師器甕・壺類430g、同高杯・器台類130gがあるにすぎない。

以上のように、明確に時期を示す遺物は見られないが、これらの遺物から4世紀後半のものと考えられる。



第77図 4号周溝墓平断面図



第78図 4号周溝墓周溝断面図・出土遺物

5号周溝墓(第79図、第68表、P L. 34-3 ~ 35-1)

北調査区南西隅にある。南西部の大部分が調査区外になっているものと思われる。38 ~ 40号土坑、1号道路状遺構の南北両側溝と重複し、それらよりも古い。北側の周溝南壁に重複する、連続するピット状の凹みは攪乱であると思われる。

調査区に入っているのは北東隅の1/4程度だと思われるが、この範囲内では周溝はきれいな弧を描いているので、全体はほぼ正円に近い形であろう。

大きさは周溝を含めて径約18.30m、周溝内法では径約15.30mと推定される。周溝の幅は大きな凹凸はなく、

上幅1.22 ~ 1.90m、下幅0.58 ~ 0.92m、深さ0.29 ~ 0.38mである。断面は逆台形かあるいは椀形である。

全体に削平されており、盛土などは全く認められず、主体部も見つかっていない。

出土遺物は非常に少ない。掲載したのは土師器台付甕1点のみであり、その他小破片として土師器甕・壺類が4点(50g)出土しているだけである。

出土遺物が少ないので時期を確定するのは困難であるが、掲載した台付甕は4世紀代のものであり、溝の覆土の下層にFA軽石が認められないことから、古墳時代前期にまで遡る可能性が強いものと考えられる。

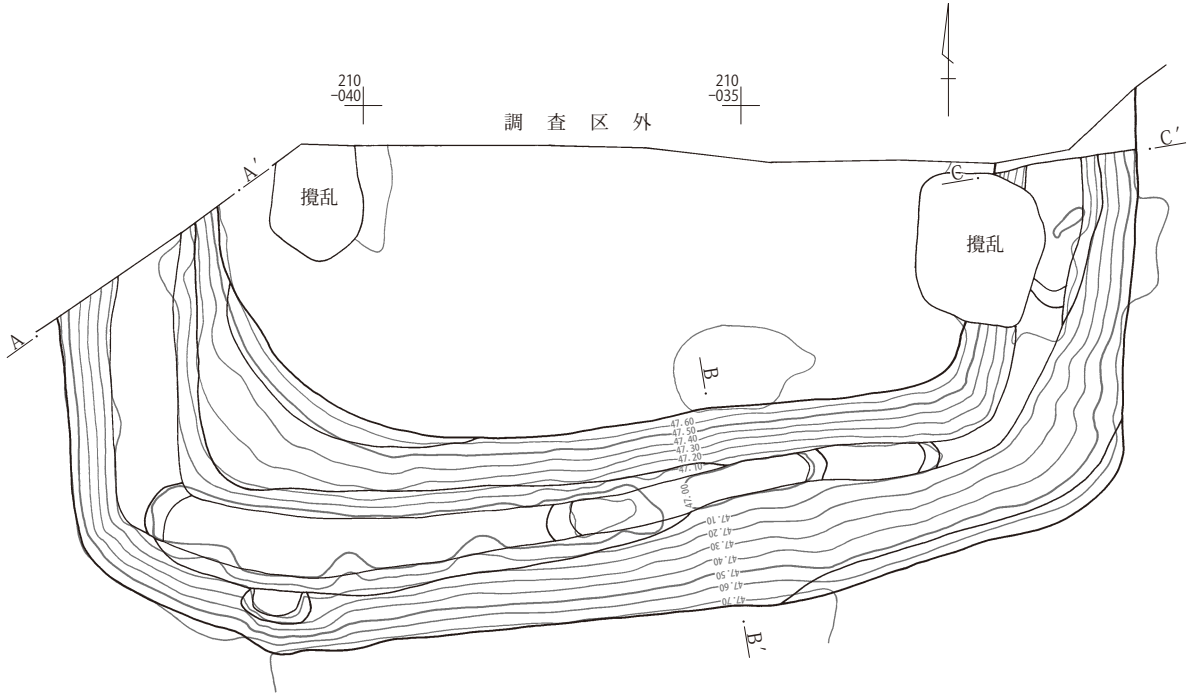
6号周溝墓(第80～83図、第68・69表、P.L. 35-2～37-6, 90, 91)

北調査区南西隅にあり、北側の大部分が調査区外となる。重複する遺構はない。

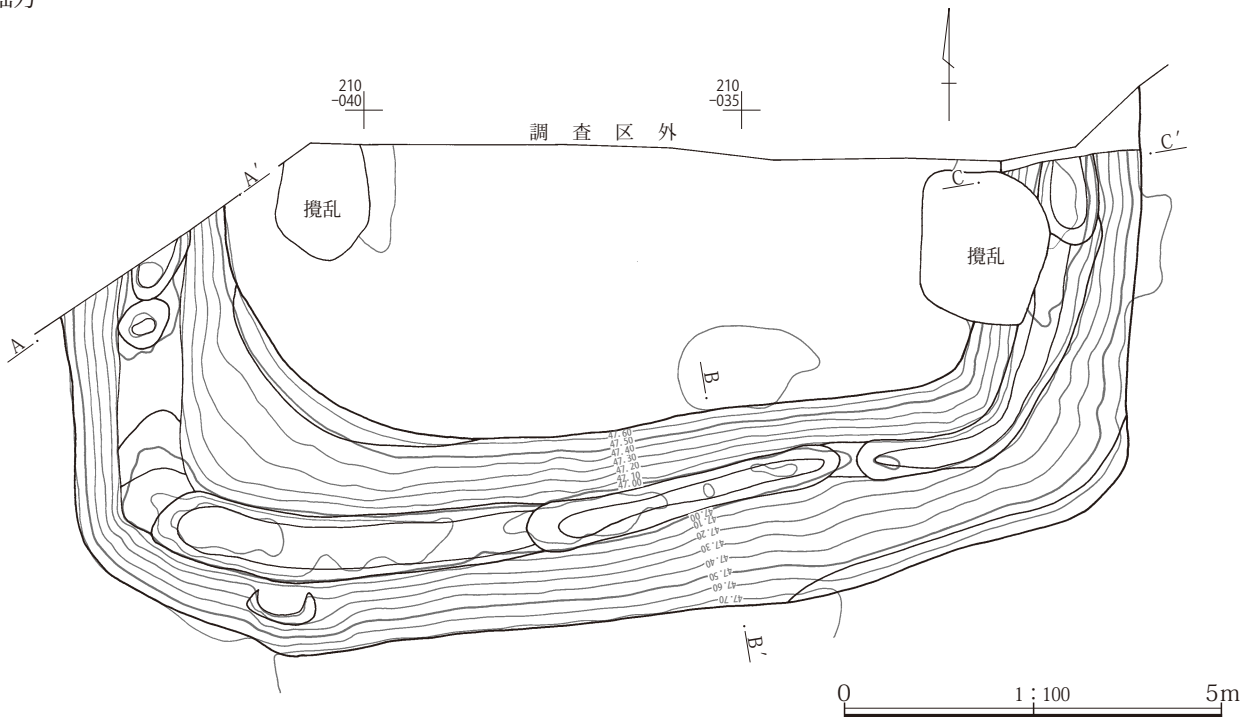
調査区にかかっている周溝はほぼ東西方向に延び、両端が直角に北に曲がるので、全形は方形になるものと思われる。東西幅は周溝を入れて11.45m、周溝内法では9.90m(攪乱が入っているため推定長)で、主軸方位は南

辺の溝を計測するとN-84°-Eである。

周溝は上幅2.07～2.53mで、南西隅は内側の壁の上部が削れて広がっている。下幅は0.28～0.88mである。底面は掘方状に深く掘り、それを褐色土で埋め戻している。その上面は硬く締まっているので、これが完成時の底面であると判断した。そこまでの深さは0.54～0.82mであり、掘方底面までの深さは0.61～0.94mである。断面は逆台形である。土層を見ると、掘り直しが認められ

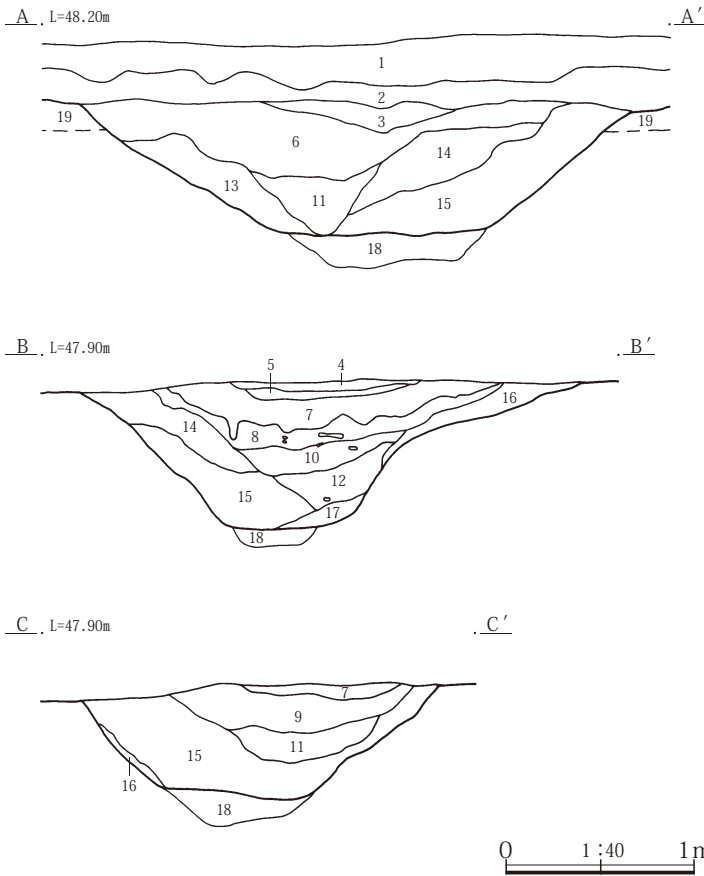


周溝掘方



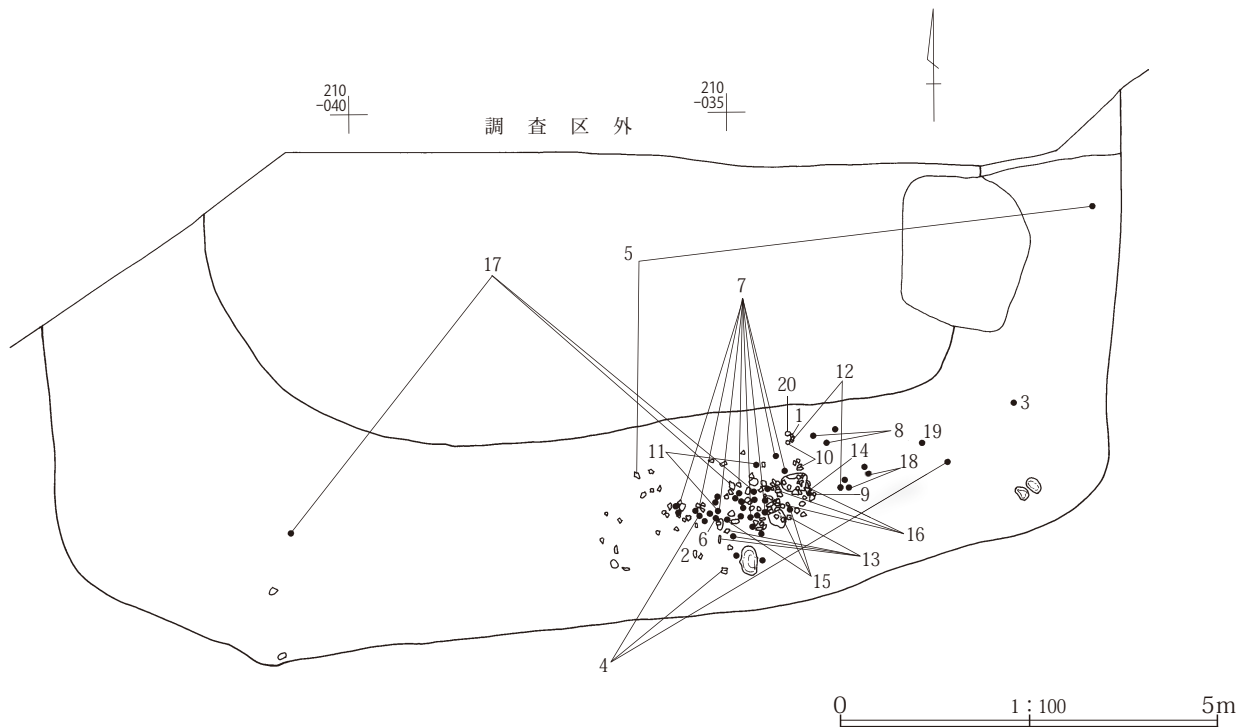
第80図 6号周溝墓平面図・掘方平面図

第3章 調査の成果



6号周溝墓

1. 現代の耕作土
2. 暗褐色土 As-C、FAを含む。黄褐色土ブロック、ロームブロックを斑状に含む。焼土粒、炭化物粒を少し含む。縮まり弱く、砂質。上部からの攪乱多い。
3. 暗褐色土 2層に似るが黄褐色砂質土(洪水層)ブロック、黒褐色土ブロックを含む。縮まりあり。
4. 暗褐色土 As-C (φ 1mm程)、焼土粒、炭化物粒、小礫 (φ 1~3mm)を少し含む。7層、黒色土を含む。縮まりあり。
5. 暗褐色土 4層に似るが、7層、ローム、焼土粒が多い。縮まりやや弱い。
6. にぶい黄褐色土 As-C、焼土粒、炭化物粒をやや多く含む。洪水層ブロックを含む。縮まりあり。
7. にぶい黄色土 粒子が非常に細かく、シルト質。縮まりやや弱い。FA降下以前の洪水層か。
8. 褐色土 As-C、黒褐色土、7層洪水砂を含む。遺物の崩落が集中する。縮まりあり。
9. 暗褐色土 As-C、7層ブロックを含む。炭化物粒、焼土粒、ローム粒を少し含む。縮まりあり。
10. 暗褐色土 As-C (φ 1mm)を少し含む。ローム・黒色土を含む。
11. 暗褐色土 As-C、焼土粒、炭化物粒、ローム粒を少し含む。縮まりやや弱い。
12. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を多く含む。As-Cを少し含む。縮まりやや弱い。
13. 明黄褐色土 ローム主体。黒色土を含む。縮まりやや弱い。
14. 暗褐色土 10層に似るがローム粒、焼土粒、炭化物粒を多く含む。縮まりあり。
15. 褐色土 ローム粒、黒褐色土を斑状に含む。縮まり弱い。
16. にぶい黄褐色土 ローム主体。縮まりやや弱い。
17. ロームブロック主体の層
18. 褐色土 ロームブロック+黒色土ブロックが斑状に堆積。上面は硬く縮まっている。縮まりあり。掘方を貼床状に埋めた層。
19. 暗褐色土 地山。縄文~古墳までの遺物包含層。



第81図 6号周溝墓周溝断面図・遺物出土状態図

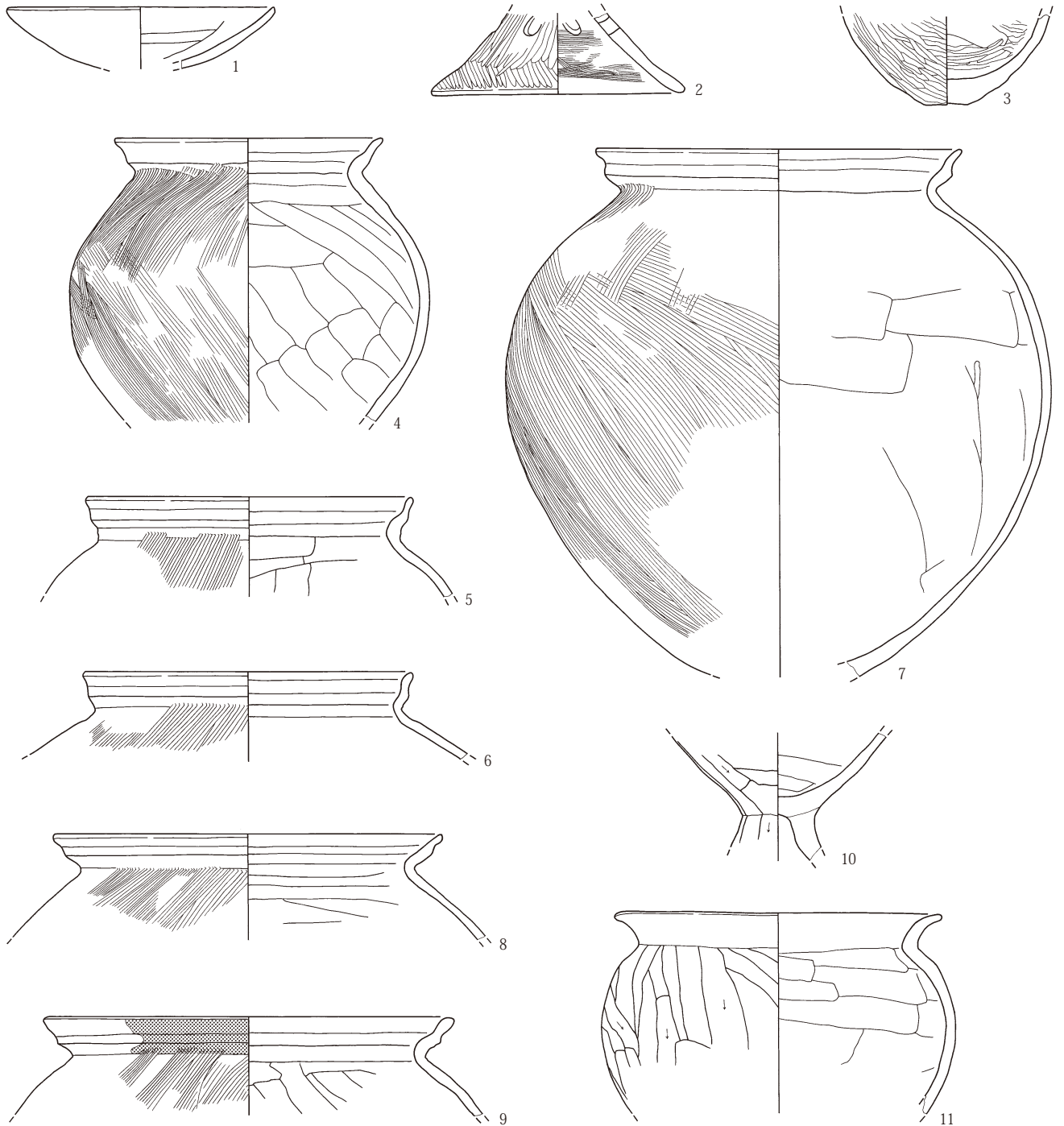
る。周溝がほぼ埋まりきった時に、墳丘から遠いところに幅が狭く浅い溝(土層番号3~12)を新たに掘っているが、掘り直しの詳細な時期は明らかにできなかった。

全体に削平されており、盛土などは全く認められず、主体部も見つかっていない。

出土遺物は多いが、小破片となって散在していた。特に多いのは南辺であるが、写真(P L.37-1~3)に見る

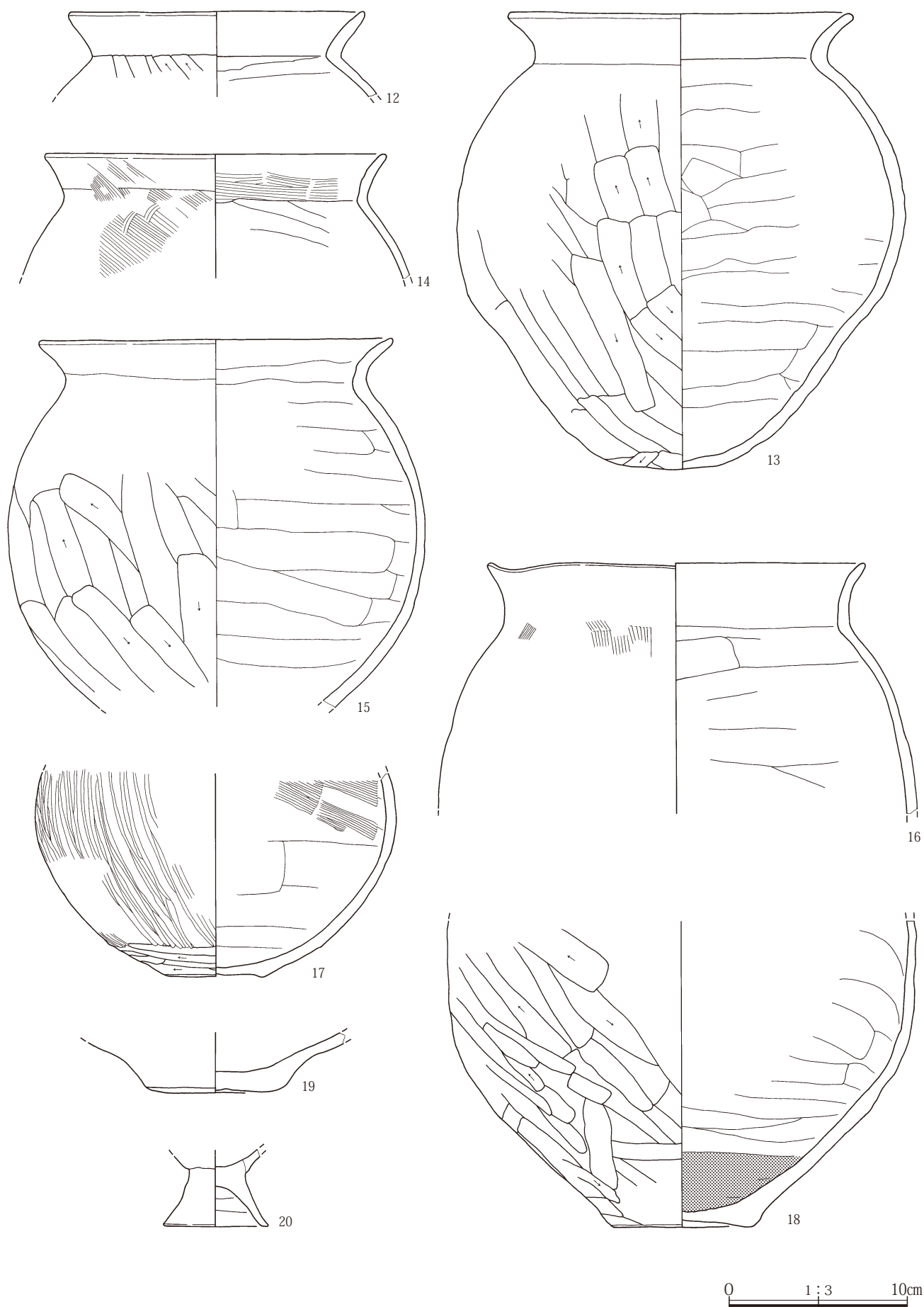
ように、ほとんどの遺物は周溝覆土の中~上層から出土している。掲載するのは土師器のみで、高杯1点、高杯か器台1点、壺1点、台付甕7点、甕9点、ミニチュア品と思われる高杯1点である。その他、小破片として甕・壺類6,670g、高杯・器台類790gが出土している。

遺構の時期はこれらの出土遺物から4世紀後半と考えられる。



第82図 6号周溝墓出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第83図 6号周溝墓出土遺物(2)

3 土坑

計12基を報告する。そのうち、北調査区の43号土坑と南調査区の122号土坑は古墳時代の土器が出土し、北調査区の86号土坑は形態から同時代の礫床墓と思われるので、古墳時代のものであろう。残る南調査区第5面の9基は遺物が出土せず、また、この面を覆う層からは縄文～古墳時代の遺物が出土しているもので時期を特定できないが、最も新しい時期のものとして本項で取り上げた。

12基の土坑とも、主として暗褐色土で埋没しており、大きな違いはない。遺物が伴う3基は整った形だが、形態は異なる。43・122号は複数の遺物が出土するが、特に用途を特定できる痕跡はない。122号からは時期の異なる遺物が出土することが注目される。86号は礫床墓の可能性もある。それ以外の9基は不整形で、形態に明確な意図があったものとは思えず、用途は特定できない。

以下では遺物が出土した土坑について記述する。

43号土坑(第84図、第69表、P L. 37-7・8)

北調査区西側中央付近にある。重複する遺構はない。長さ1.68m、幅1.25mの長方形で、深さは0.16mである。主軸方向はN-38°-Eである。覆土からS字状口縁甕の口縁部2点が出土しており、古墳時代前期の土坑であると思われる。その他、小破片として土師器甕類160gが出土している。

86号土坑(第84図、P L. 38-1～6)

北調査区中央やや北寄りにある。土坑として調査したが、その形態から礫床墓の可能性が考えられる。

調査できたのは底面部分のみで、それよりも上部は既

に削平されていた。長さ3.00m、幅0.65～0.70mの範囲に径3～5cmの礫が敷かれ、周囲には長さ10～25cmの大きな礫がややまばらに並んでいる。東端には大きな礫が置かれたように集中している。

周囲の大きな礫は現状ではまばらになっているが、その配置から見て、本来は小礫の周りを囲むように一列に並んでいたと推定される。西端部分は残りが悪いらしく、小礫がまばらに見られるだけで、東端と同様に大きな礫が置かれていたかどうかは明らかではない。掘方は礫の敷かれた部分よりも一回り大きな長方形で、長さ4.20m、幅1.47m、深さは最も深いところで0.22mである。

土師器甕の小破片が3点出土しているのみなので時期は明らかにしがたい。しかし、北調査区には古墳時代前期の周溝墓が分布するので、この遺構も同時期である可能性が強いものと考えられる。

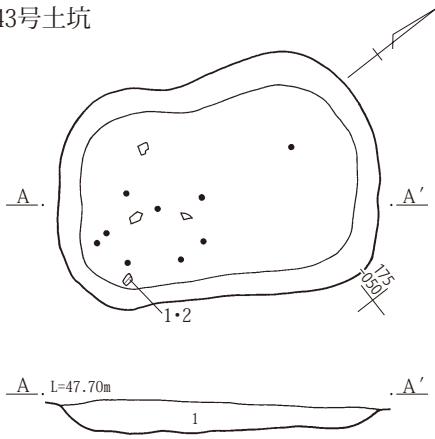
122号土坑(第85図、第69表、P L. 39-2・3, 91)

南調査区1-1区の南西端近くにある。0.70m×0.70mのやや膨らんだ隅丸方形の土坑である。断面は逆台形で、深さは0.16mと浅い。比較的出土遺物が多いが、5世紀代のものと思われる小型甕が出土しており、これがこの土坑の時期を示す遺物だと思われる。その他、弥生土器1点、凹石1点、石鍬1点、剥片1点、土師器甕類3点が出土している。そのうち凹石は縄文時代の遺物として第3節4で、石鍬は弥生時代の遺物として第4節2で取り上げてあるが、それ以外は小破片である。

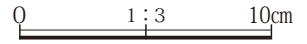
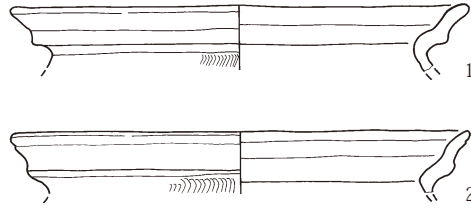
第30表 古墳時代土坑一覧表

番号	調査区	所在 グリッド	主軸方位	大きさ		備考
				長辺×短辺×深さ(m)		
43	2区	170-050	N-38°-E	1.68×1.25×0.16		S字状口縁甕出土。
86	3区	185-000	N-88°-E	4.20×1.47×0.22		礫床墓か。土師器甕類3点出土。
117	1-1区5面	130-090	N-70°-E	0.92×0.50×0.36		
118	1-1区5面	130-090	N-36°-E	0.77×0.44×0.28		
119	1-1区5面	130-095	N-65°-E	1.34×0.64×0.19		
120	1-1区5面	130-100	N-59°-W	0.70×0.50×0.18		
122	1-1区5面	115-110		0.70×0.70×0.16		弥生土器1点、凹石1点、石鍬1点、剥片1点、土師器4点出土。
123	1-1区5面	125-115	N-70°-E	0.66×0.44×0.12		
125	1-2区5面	150-165	N-76°-W	1.12×0.76×0.15		
126	1-2区5面	155-165	N-75°-W	0.86×0.78×0.22		
127	1-2区5面	140-135	N-57°-W	0.77×0.48×0.31		
128	1-2区5面	145-130	N-10°-W	0.80×0.54×0.11		

43号土坑



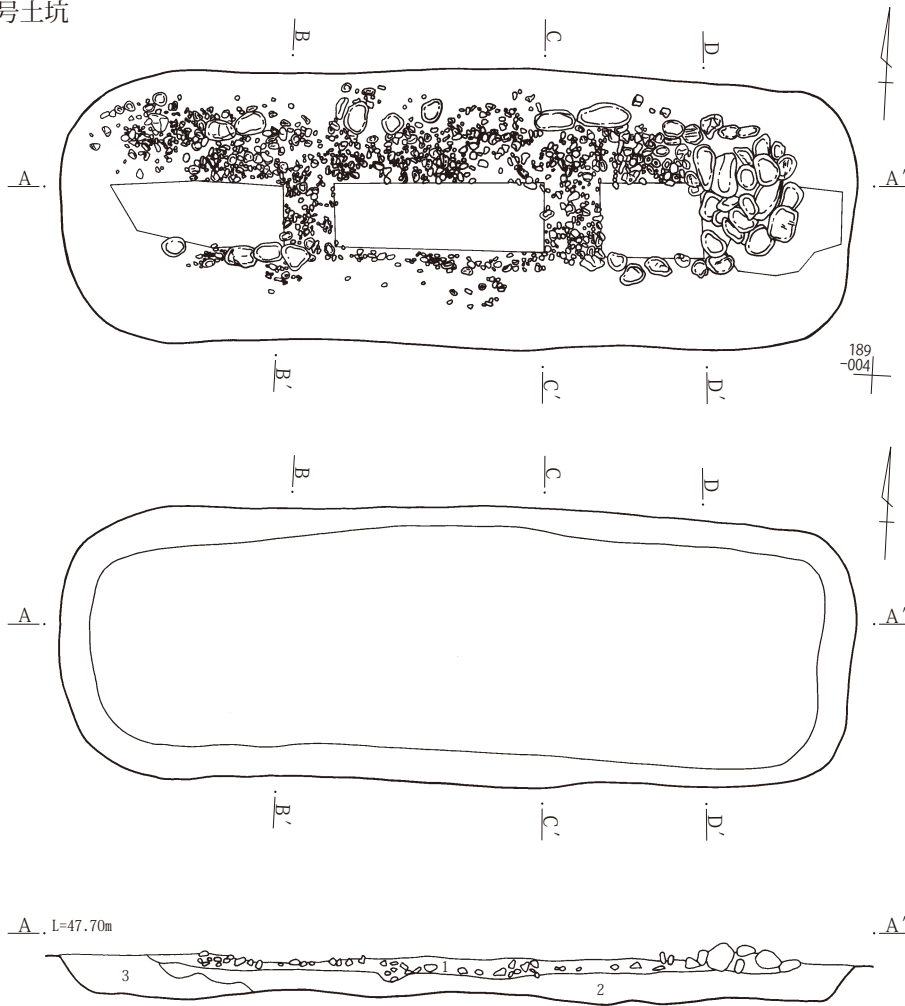
43号土坑出土遺物



43号土坑

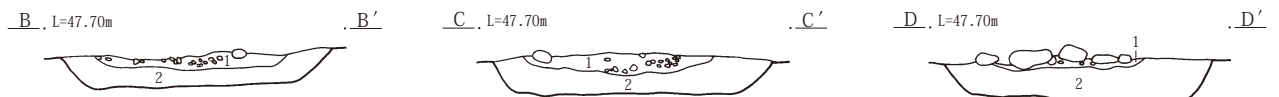
1. 暗褐色土 白色軽石(φ 1~3mm、As-Cか)をやや多く含む。炭化物粒、焼土粒(φ 1mm)を少し含む。ローム粒を含む。縮まりややあり。やや砂質。土師器片を含む。

86号土坑



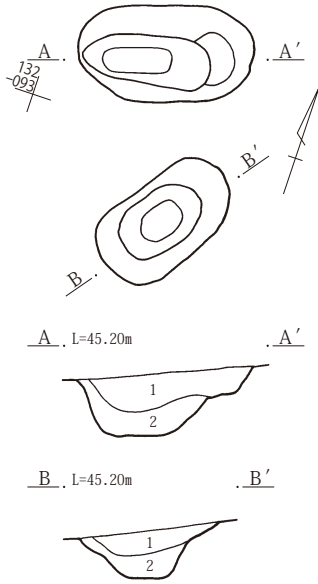
86号土坑

1. 暗褐色土 ローム、黒色土を含む。礫(φ 30~50mm)を多く含む。縮まりやや弱い。石敷。
2. 暗褐色土 黒色土をやや多く含む。地山ロームブロックを含む。焼土粒、白色軽石粒、遺物(土師器片)を少し含む。縮まりあり。
3. にぶい黄褐色土 ローム主体。黒色土を少し含む。縮まりあり。



第84図 43・86号土坑平断面図、43号土坑出土遺物

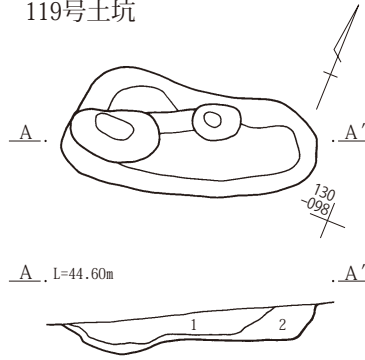
117・118号土坑



117・118号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少し含む。縮まりややあり。
2. 灰黄褐色土 縮まりあまりない。

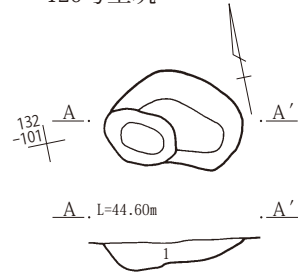
119号土坑



119号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少し含む。粘性強く、縮まりあり。
2. 灰褐色土 粘性強く、縮まりあり。

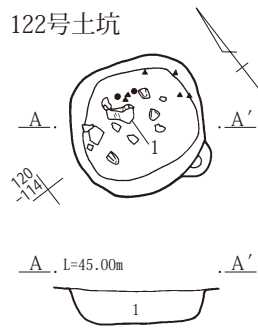
120号土坑



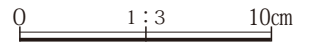
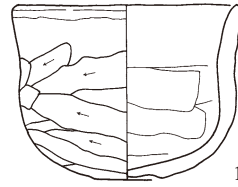
120・122・123・125～128号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少し含む。粘性強く、縮まりあり。

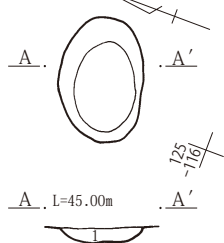
122号土坑



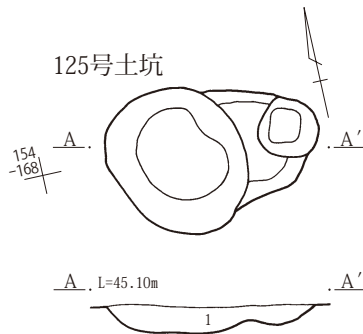
122号土坑出土遺物



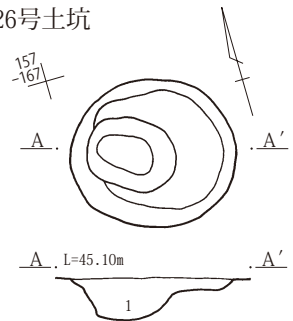
123号土坑



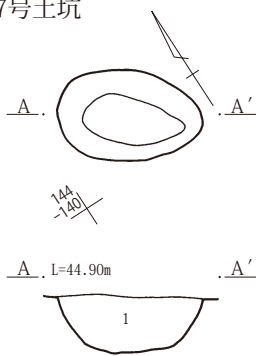
125号土坑



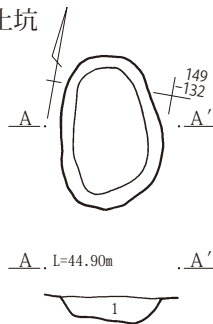
126号土坑



127号土坑



128号土坑



第85図 117～120・122・123・125～128号土坑平断面図、122号土坑出土遺物

4 水田

水田が見つかっているのは、南調査区の第4面である。

南調査区付近の地形は、北側に北調査区へと続く、やや高い平坦面があり、そこから南西にある矢場川に向かって、段丘状に下がるようになっている。南調査区の第4面の地形は、全体図(付図4)にみるように、北東側に標高差1m程度の急な斜面があり、北東が高く、南西が低くなっているが、この段差で一度大きく標高が下がり、浅く広い谷を作ったあと、今度は逆に南西に向かってごく緩やかに上がり、さらに南は後世の削平によってなくなっている。水田は、この南西に向かって上がる、緩やかな傾斜の部分に作られている。

水田は南調査区の東西、すなわち1-1区(東側)、1-2区(西側)の両方で見つかっているが、その両者は、以下の理由から、時期が異なるものと考えられる。1-1区では、洪水砂層であると考えられるにぶい黄橙色砂質土(基本土層の12層・17ページ第6図)の下層で水田面が見つかっているのに対し、1-2区ではこの砂層がなくなってしまったため、1-1区の水田面に相当する、13層の上面を広げる形で調査を行った。その結果、1-2区でも水田と思われる区画が見つかったが、この区の水田区画は土色・土質の違いによってかろうじて畦畔が確認できるものであることから、この面は水田面そのものではなく、水田耕作土下層で把握できる水田痕跡(疑似水田)だと思われ、また、1-2区における水田の区画は1-1区に比べて大きく、様相がかなり異なる。以上のことから、両者は同じ時期のものとは思えず、時期が異なるものであると思われる。

1-1区はいわゆる小区画水田であり、合計80区画分を把握できたが、そのうち全体が分かるのは39区画である。それらの大きさは第31表の通りで、平均面積は3.90㎡である。畦の幅は20～30cm程度で、高さは1～5cm程度とごく低い。一つの区画は長方形で、長辺が等高線とほぼ平行する方向に整然と並んでいる。畦に水口は確認できなかった。この区画では給水用の溝がはっきりしないが、1-2区の19号溝のように、南西側にあるものと思われる。残念ながらその部分は後世に削平されてしまったので確定できないが、それが正しければ、南側の給水路から水を取り入れ、隣接する水田区画を次々に給

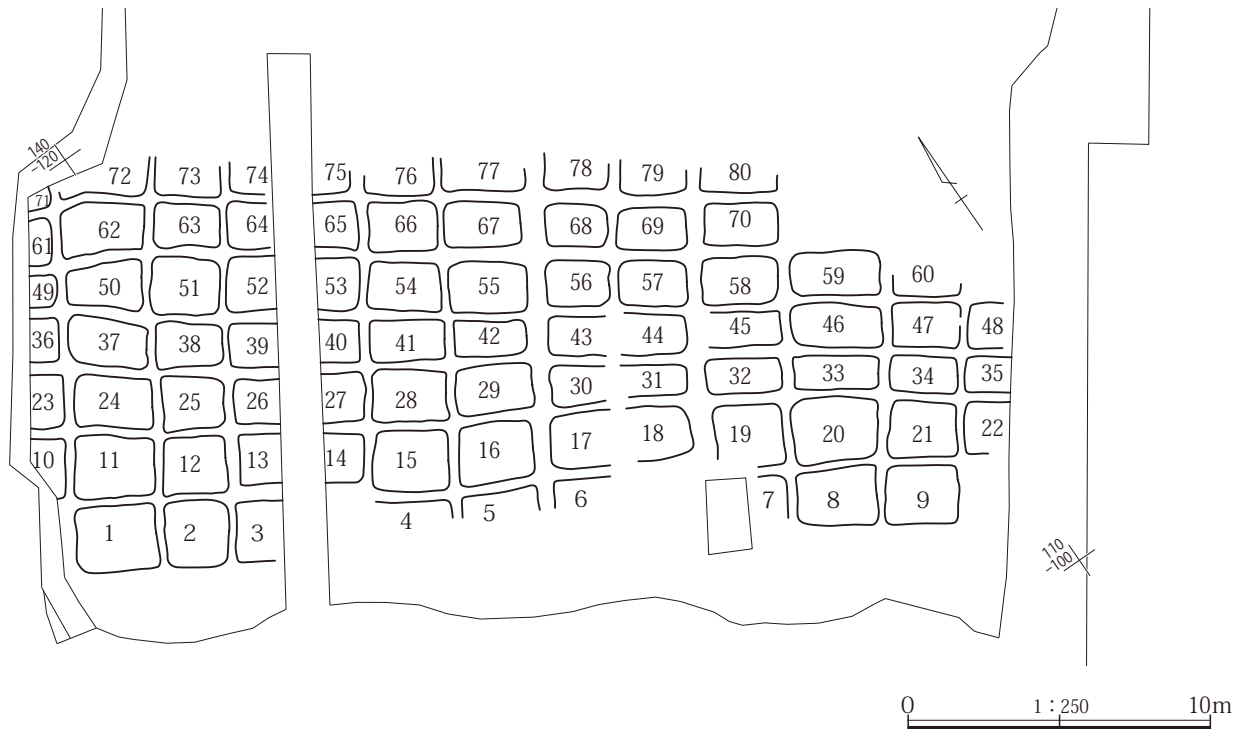
水したあと、北東にある浅い谷に沿って排水したのだと考えられる。水田西端の最も高いところの標高は45.35m、東端の最も低いところは44.75m、比高差は0.60mであり、長辺が隣接する区画の比高差は0.02～0.11mである。

遺物は水田面に散在していたが、いずれも小破片である。掲載した2点の土師器もごく小さな破片であるが、穿孔があるのが注目されるため、あえて取り上げた。1は小型鉢の口縁部、2は甕類の胴部と考えられる。

この区の水田の時期については推定する根拠に乏しく確定が難しい。水田面を埋没させているのが洪水砂層(12層)であり、明確なテフラを含まないからである。前述したように水田面には土師器の小破片が散在していたが、いずれもごく小さな破片であり、これだけでは時期の特定は困難である。しかし、この砂層の上位にある10層、11層にはF A軽石と思われるものが含まれているのに、水田面以下には含まれていないこと、水田の形態が古墳時代後期に一般的な小区画水田であることなどから、古墳時代中期から後期にかけて、すなわち5世紀～6世紀初頭のものである可能性が強いと考えられる。

1-2区の水田は、前述のように、耕作土下層で把握できる水田痕跡(疑似水田)であると考えられる。この水田痕跡は調査区の中央付近と南西隅とに残っているが、やはり1-1区と同様、南西に向かってごく緩やかに上る斜面に作られている。合計28区画分が把握でき、そのうち全体が分かるのは6区画のみである。各区画の大きさは第32表に示したとおりで、面積にはややばらつきがあり14.61㎡～28.29㎡、平均は20.20㎡である。一見して分かるおと、この区の水田区画は1-1区のものよりも大きく、また畦畔も不規則で、1-1区ほど整然としていない。畦畔には水口と思われる部分も2ヶ所見つかっている。調査区東隅の最も高い部分に19号溝が見られ、これが給水用の溝だと思われる。水はこの溝から水田に入り、隣接する区画に次々に給水した後、北東部の浅い谷に沿って排水されたものと思われる。西端の最も高い部分の標高は45.50m、東端の最も低い部分の標高は45.10mであり、比高差は40cmである。

この区の水田の時期を確定することもやはり難しい。調査面からは1-1区と同様に遺物が散在して出土しているが、いずれも小破片であり、時期を判断するのは困



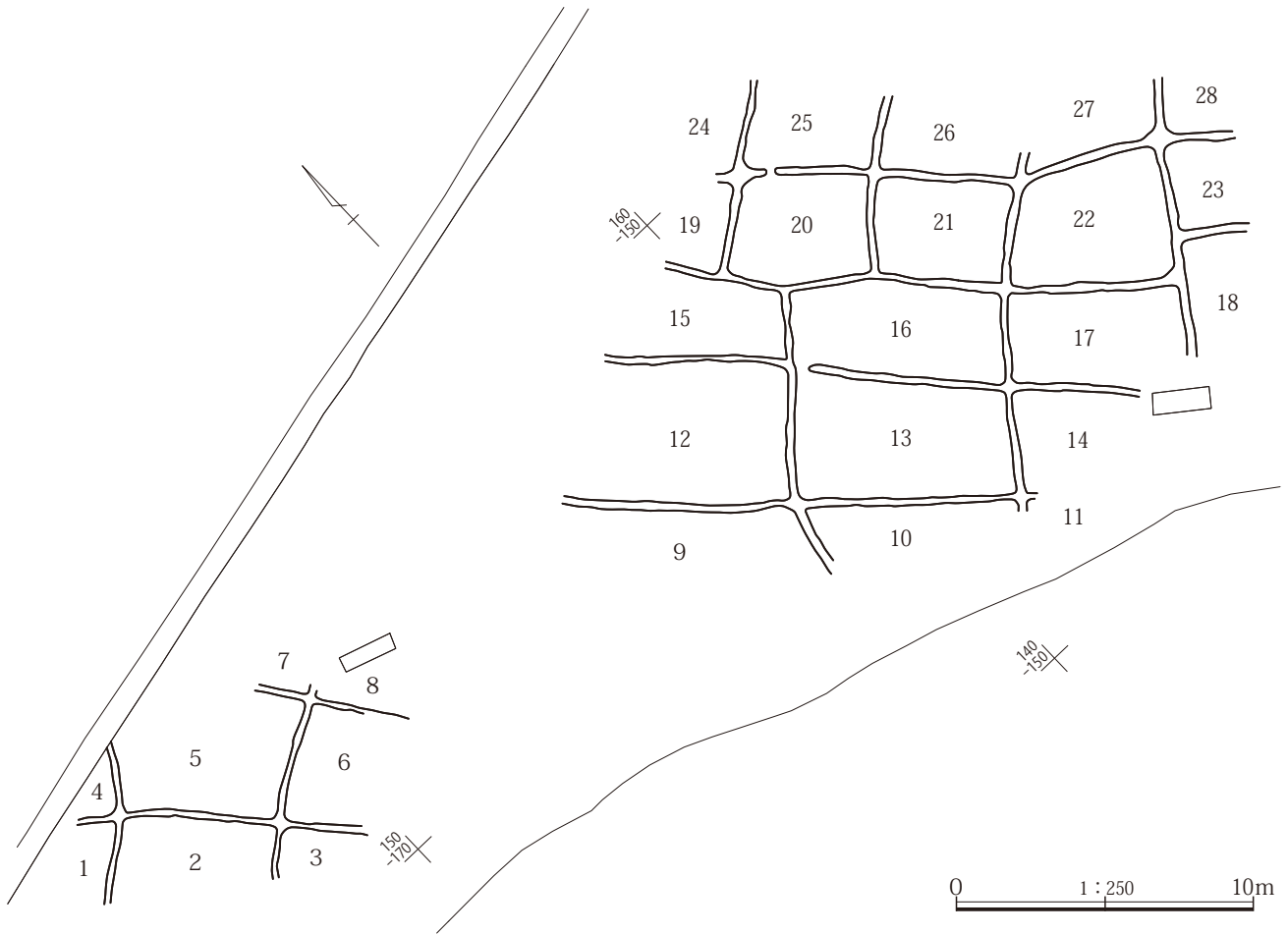
第86図 南調査区(1-1区)第4面水田区画図

第31表 水田区画計測値一覧表・1-1区

番号	標高(m)	長さ(m)	幅(m)	面積 (㎡)
1	45.30	2.66	2.18	5.85
2	45.32	2.14	2.24	4.50
3	45.31		2.02	
4	45.25			
5	45.24	2.53		
6	45.19			
7	45.17			
8	45.18	2.14	1.87	4.87
9	45.15	2.43	1.94	4.60
10	45.22		1.97	
11	45.21	2.68	2.08	5.37
12	45.23	2.15	1.86	3.92
13	45.25		1.66	
14	45.23		1.62	
15	45.20	2.53	2.04	4.94
16	45.20	2.48	2.00	4.77
17	45.15		1.84	
18	45.08		1.81	
19	45.07	2.21	2.10	4.61
20	45.08	2.78	2.13	5.82
21	45.05	2.24	1.82	4.06
22	45.04		1.72	
23	45.16		1.81	
24	45.14	2.61	1.66	4.28
25	45.13	2.01	1.74	3.46
26	45.18		1.45	
27	45.13		1.60	

番号	標高(m)	長さ(m)	幅(m)	面積 (㎡)
28	45.10	2.42	1.72	4.16
29	45.11	2.58	1.60	3.92
30	45.08		1.36	
31	45.01		1.02	
32	44.98	2.55	1.16	2.81
33	44.99	2.76	1.11	3.09
34	44.98	2.26	1.22	2.63
35	44.96		1.18	
36	45.08		1.44	
37	45.08	2.61	1.57	3.93
38	45.09	2.23	1.44	3.16
39	45.10		1.46	
40	45.05		1.40	
41	45.01	2.46	1.38	3.32
42	45.00	2.39	1.18	2.72
43	45.00		1.30	
44	44.95		1.40	
45	44.91		1.18	
46	44.89	3.02	1.50	4.13
47	44.91	2.21	1.46	3.22
48	44.89		1.50	
49	45.03		1.05	
50	45.02	2.51	1.55	3.51
51	45.01	2.34	1.90	4.18
52	44.99		1.81	
53	44.97		1.74	
54	44.94	2.45	1.61	3.72

番号	標高(m)	長さ(m)	幅(m)	面積 (㎡)
55	44.92	2.58	1.70	4.25
56	44.91	2.08	1.53	3.08
57	44.88	2.26	1.50	3.30
58	44.84	2.54	1.56	3.82
59	44.84	2.96	1.41	4.18
60	44.85	2.21		
61	44.96		1.50	
62	44.94	2.77	1.61	4.35
63	44.95	2.20	1.41	3.05
64	44.91		1.51	
65	44.92		1.50	
66	44.88	2.26	1.60	3.71
67	44.85	2.56	1.52	3.72
68	44.82	2.07	1.40	2.77
69	44.83	2.32	1.41	3.14
70	44.80	2.45	1.38	3.35
71	44.89			
72	44.89	2.85		
73	44.88	2.17		
74	44.87			
75	44.88			
76	44.85	2.31		
77	44.83	2.78		
78	44.79	2.15		
79	44.77	2.20		
80	44.77	2.53		



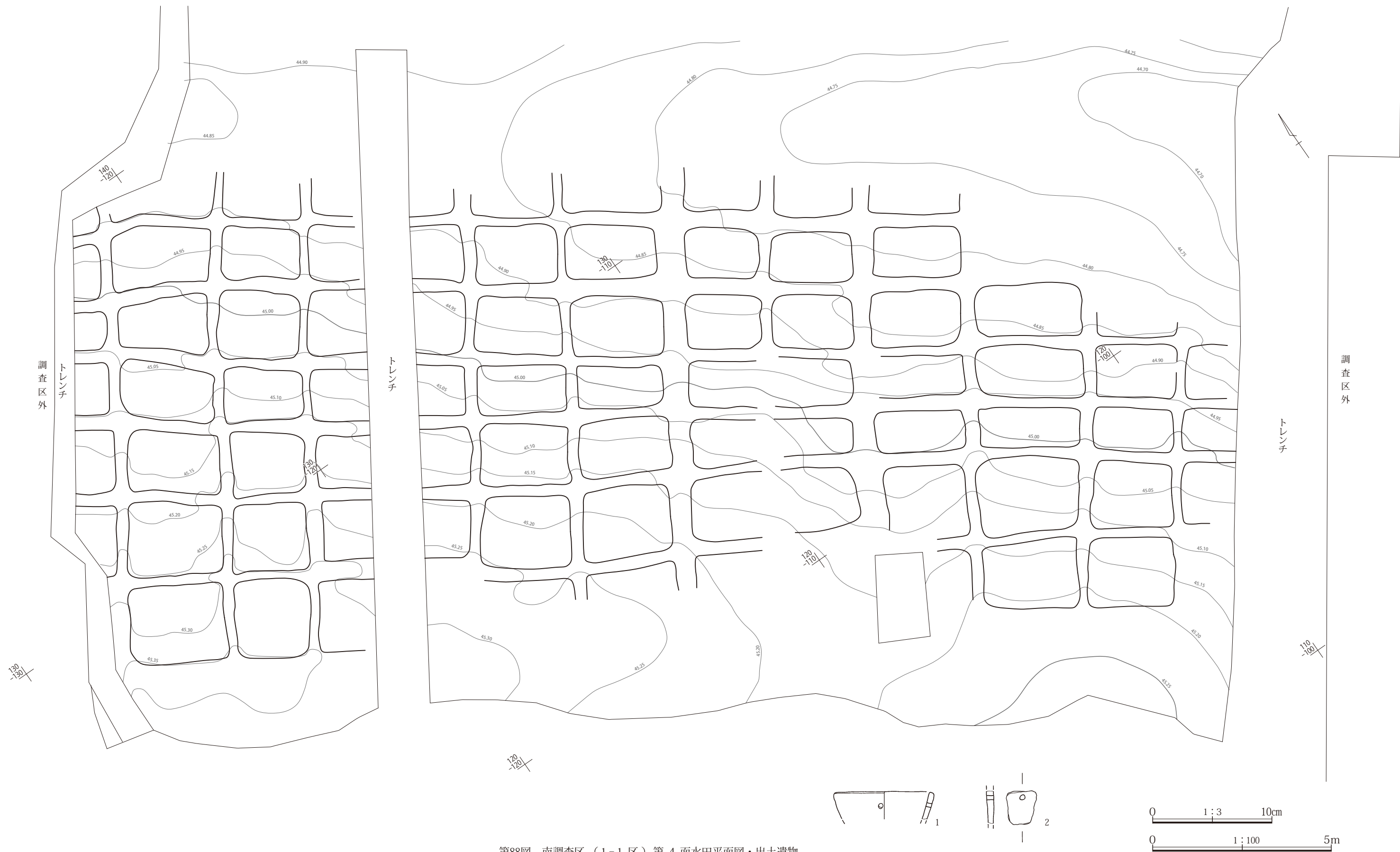
第87図 南調査区(1-2区)第4面水田区画図

第32表 水田区画計測値一覧表・1-2区

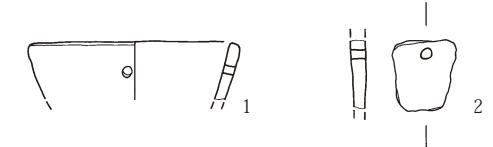
番号	標高(m)	長さ(m)	幅(m)	面積 (㎡)	番号	標高(m)	長さ(m)	幅(m)	面積 (㎡)	番号	標高(m)	長さ(m)	幅(m)	面積 (㎡)
1	45.48				11	45.28				21	45.23	4.42	3.30	14.61
2	45.46				12	45.31		4.92		22	45.18	5.20	4.02	20.80
3	45.43	5.23			13	45.28	7.30	3.85	28.29	23	45.14		2.98	
4	45.48				14	45.25				24	45.23			
5	45.46	5.64			15	45.29		2.46		25	45.22	4.28		
6	45.43		3.93		16	45.26	7.10	3.15	21.43	26	45.18			
7	45.43				17	45.23	5.95	3.09		27	45.15			
8	45.42				18	45.17				28	45.12			
9	45.34				19	45.27								
10	45.30				20	45.25	4.48	3.64	15.87					

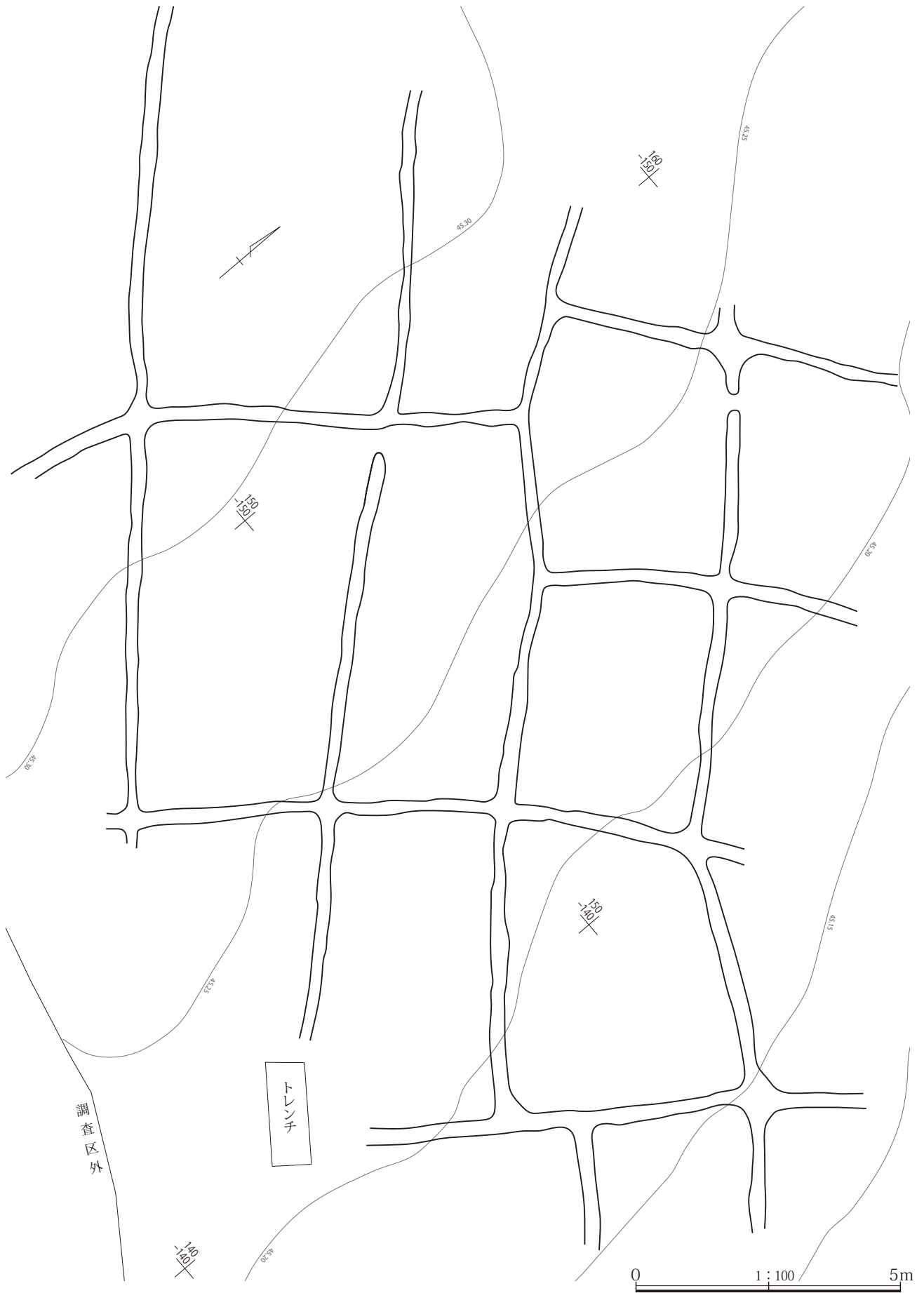
難である。1-1区の上を覆っていた洪水層(12層)がこの区にはなく、調査面を覆っているのはより新しい11層であり、その層が攪拌を受けたものであることから、1-2区では1-1区と同一の水田面は既に削平されていると考えられる。とすれば、1-2区の水田痕跡は、1-1区の水田よりも古いものであると言えよう。その他わずかに時期を推定する根拠としては、①水田の区画が1-1区の小区画水田よりも大きく、県内の他の遺跡

で調査されている古墳時代前期の水田痕跡に似ていること、②同じ面で見つかっている18号溝の下層に20号溝が見つかっているが、これにはAs-Cが多く含まれているので、この調査面は少なくともAs-C降下後であると考えられることであり、これらのことから、この水田の時期はAs-C降下以降の古墳時代前期と考えることが可能であろう。

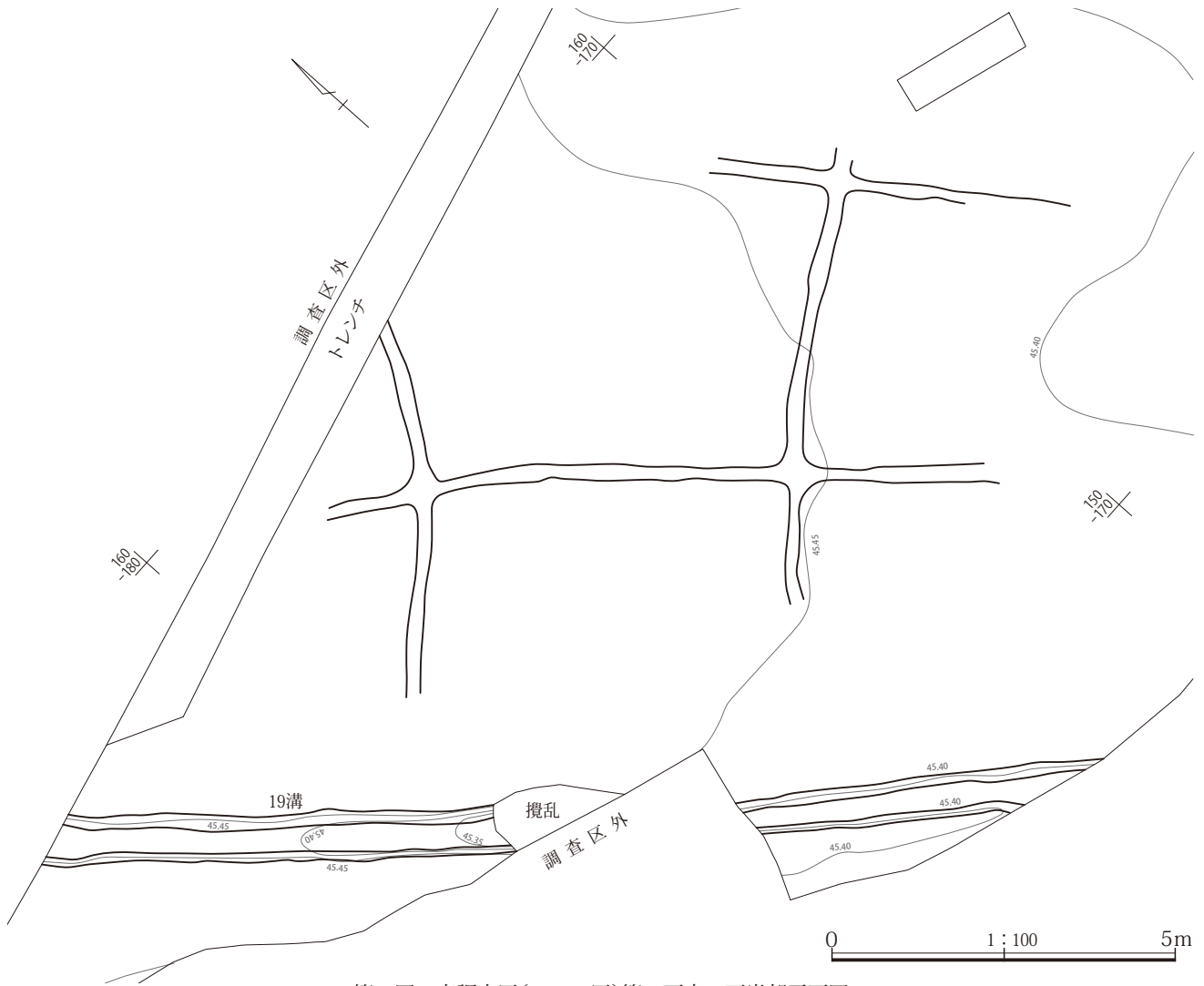


第88図 南調査区（1-1区）第4面水田平面図・出土遺物





第89図 南調査区(1-2区)第4面水田東半部平面図



第90図 南調査区(1-2区)第4面水田西部半部平面図

5 畠

南調査区においては、第3面として畠(耕作痕)を調査した。この面は1-1区基本土層(第6図)の10層の上面にあたり、上層の9層(締まりの弱い黄橙色砂質土)とは土質が大きく異なるため、この上面で調査を行って以下に述べる遺構を見つけたものである。10層は締まりのよい褐色土であり、F A 軽石を含むので古墳時代後期以降の土であると思われるため、本節で取り上げることにした。

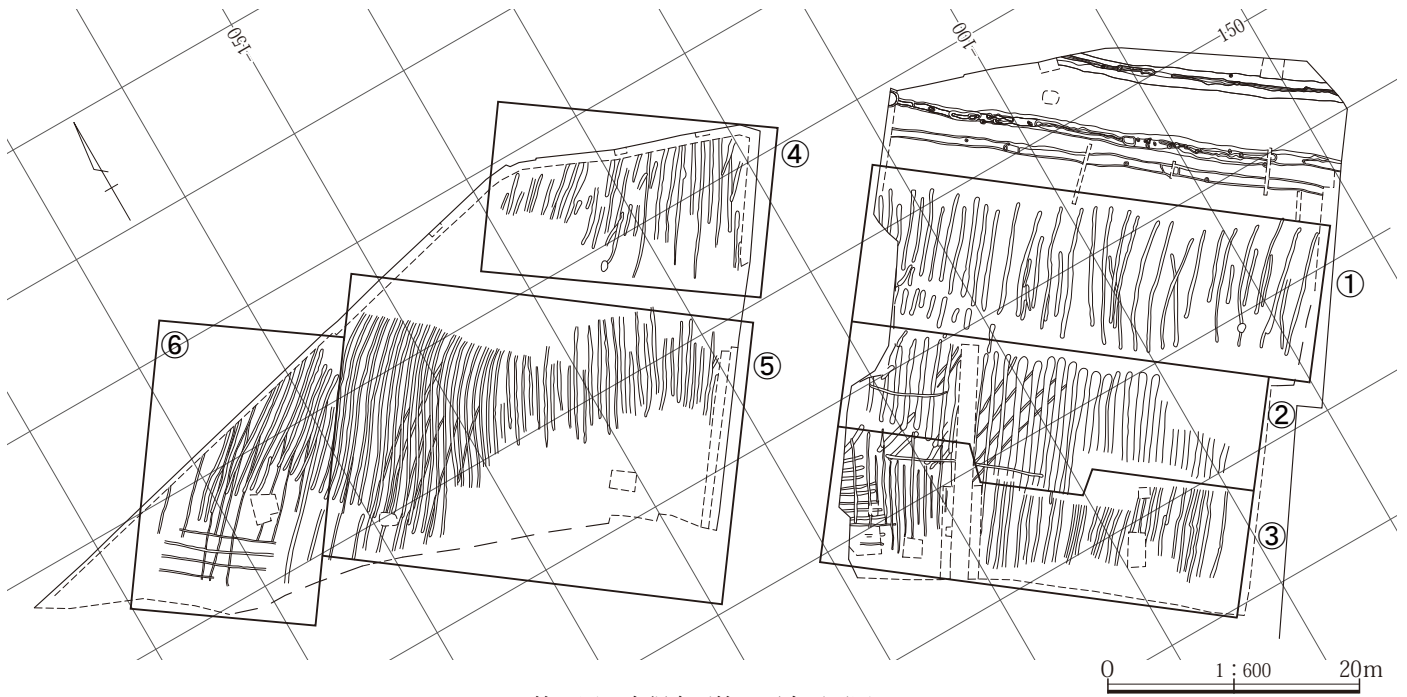
この面の地形は第4面とほぼ同様である。北東部が高く、そこから南西に向かってやや急に下がった後、今度は逆に南西に向かって緩やかに上がっている。その間は浅い谷となっている。

この面で調査したのは1条の溝(17号溝)と畠(耕作痕)である。17号溝は第6節2で述べるように平安時代のも

のと思われるので、ここでは取り上げない。

畠と思われる遺構は、1-1区北西部付近を除いた全域で見ついている。その平面形態は、付図3や第91図にみるように、何列も平行する細い溝状の遺構である。この第3面を覆っているのが洪水層や火山灰層のようなものではなく、攪拌を受けた砂質土であるので、その下面は畠面=旧地表とは思えず、これらの細い溝は耕作痕、すなわち、畝間を深く掘った痕跡が耕作土の下層で見えているものであると思われる。平面図に見るように、違った方向の溝が重複して見えているのはそれを裏付ける事実である。

これら耕作痕のうち、特に顕著なのは1-1区で等高線に直交する方向に並んだものであり、同じ方向のものが1-2区でも全面に見られる。これらは、その方向、畝間痕の間隔などから、ごく大まかに6グループに分けられる(第91図)。



第91図 南調査区第3面畠区画図

まず①～③は1-1区に並んでいる。

①は北東から南西に向かって下がる斜面に作られているもので、畝間痕は最も長いもので11mである(第92図)。畝間痕の中には重複しているものもあり、長さの短いものもあるなど、複数回分の耕作痕があると思われるが、幅約35mの間に39本程度の畝間痕が見える。各々の畝間痕は幅20～30cm程度と狭く、畝間の間隔はやや広い。

②は逆に北東から南西に向かって上がる斜面に作られているもので、畝間痕の幅が40～50cmと広いのが特徴的なものである(第93・94図)。畝間痕の長さは最も長いもので10.5mで、南東部は7m程度と短くなっている。幅約29mの間に29本の畝間痕が見える(1本トレンチで壊されていると思われる)。中央から北西寄りには、より古い時期の畝間痕が斜めに重複している。これらは幅10cm程度と非常に狭く、6本が確認できる。

③は1-1区の南西側にあるもので、やはり北東から南西に向かって上がる斜面に作られている(第93・94図)。畝間痕の長さは最も長いもので約8.5m、幅は20cm程度とやや狭い。幅約30mの間に41本の畝間痕が確認できるが、トレンチによって2～3本破壊されているものと思われる。北西端には直角に交わる畝間痕が見え、ここでは幅約7mの間に11本が確認できる。

④～⑥は1-2区にある。

④は1-2区の北東隅にあり、位置からみて①の続きで

あろう(第95図)。最も長い畝間痕は約11mであるが、短いものやや方向が違い重複するものなどが見られ、①と同様、複数回分の耕作痕が見えているものと思われる。最も顕著な畝間痕を数えると、幅約19mの間に27本あるようである。畝間痕の幅は20cm前後で①よりもやや狭い傾向にある。

⑤は1-2区の中央にある(第96図)。この付近は比較的平坦な地形である。畝間痕の長さには大きな違いがあり、南東側が短く、北西側が長い。最も長いものは約16.5mあるが、長い部分の畝間痕は緩やかなS字状にカーブしている。幅約30mの間に52本の畝間痕が見える。畝間痕の幅は20cm前後とやや狭い。北西部には方向の異なった、より古い畝間痕が見えている。

⑥も比較的平坦な部分にあるもので、少なくとも3組の方向の異なる畝間痕がある(第96図)。最も新しいと考えられるものは幅7mの中に12本ある。畝間痕の幅は20cm前後とやや狭い。次に古いものは南西側にあり、方向が90°近く異なる。畝間痕の幅が10cm前後と狭く、約3.5mの間に4本確認できる。最も古いと考えられるのは、また方向が90°異なり、畝間痕の幅が10cm前後と狭く、幅約10.5mの間に、飛び飛びに9本確認できる。

これらの他、ごく一部にはさらに方向の異なるものもあり、少なくとも3時期以上の耕作痕がこの面で見えているものと思われる。ただし、①と②の間と、④と⑤の



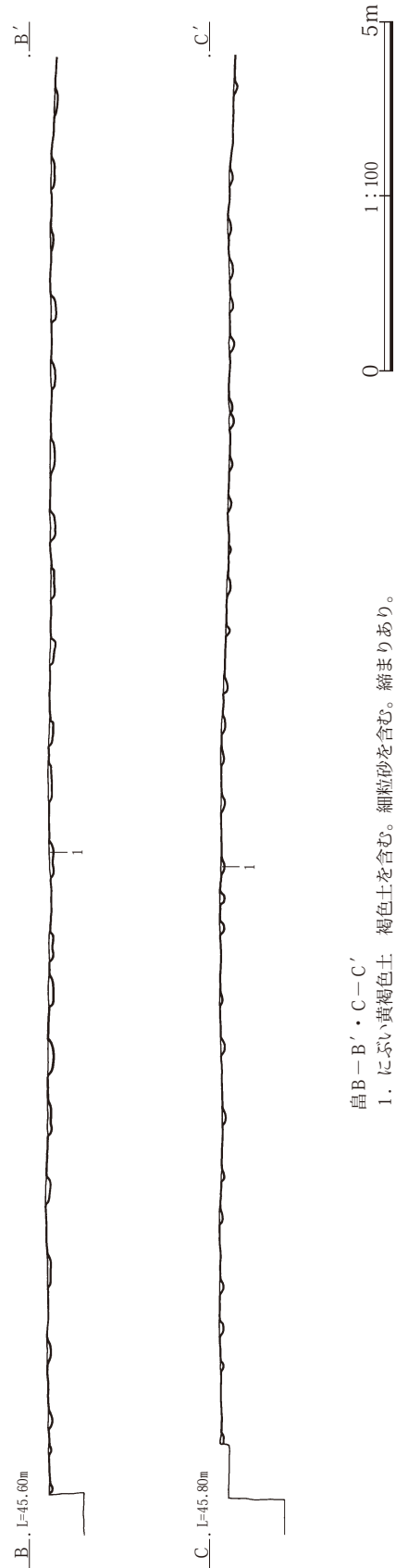
島 A - A'
 1. 褐色土 黒色土を含む。Hr-FA (φ 1 ~ 2 mm)を少量含む。締まりあり。

第92図 南調査区(1 - 1区)第3面島①区画平面断面図

間の最も低い部分には畝間痕が認められない部分が細長く存在する。おそらく、この部分は通路や排水路として使用されていたのではないだろうか。

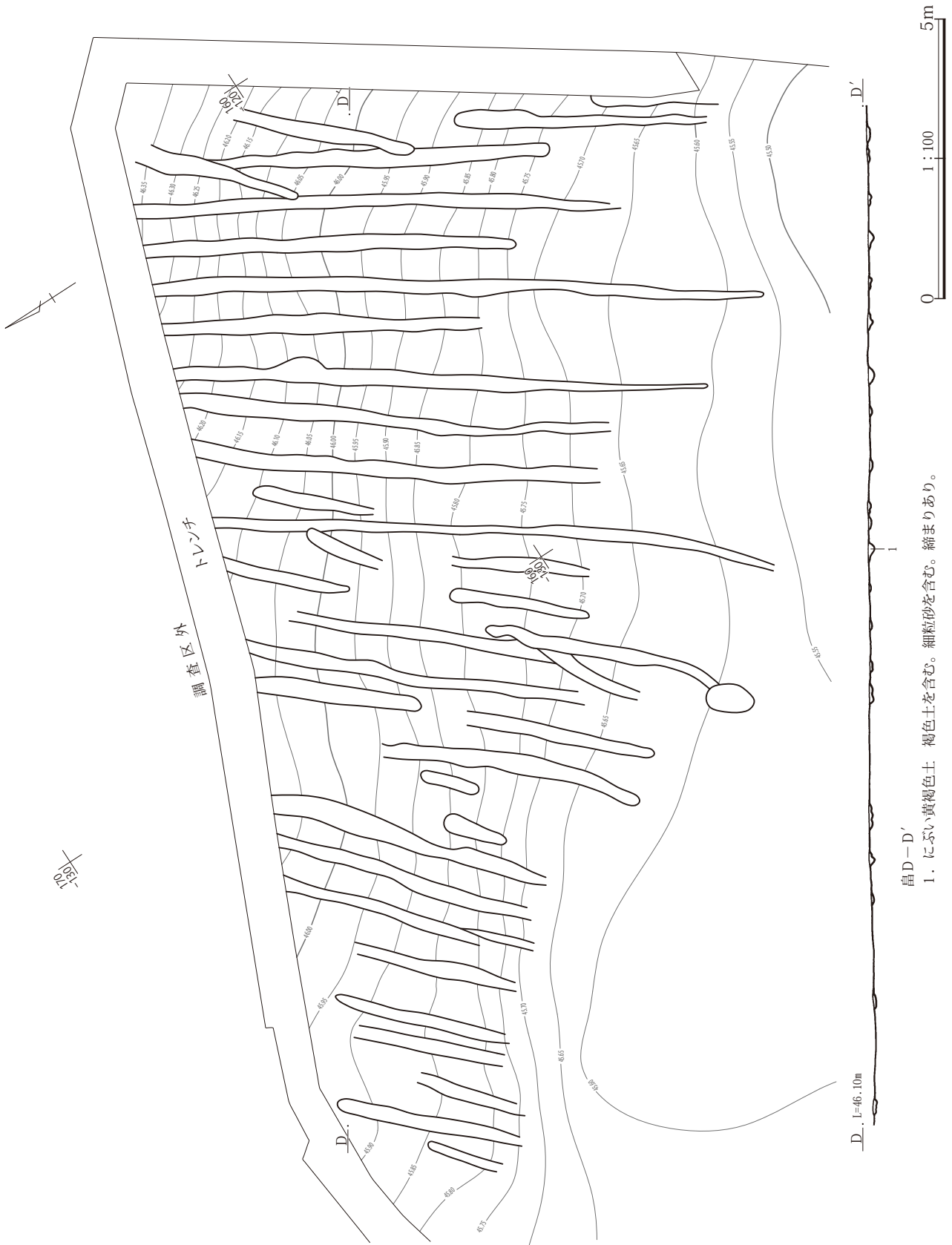
なお、第2面から第3面まで掘り下げる途中、1-2区の西端付近、前述の⑥の畝の約15cm上層で、やはり畝間痕跡と思われる遺構が見つかったため、この部分ではその層位で掘り広げて調査を行っている。第97図がその平面図である。やはり第3面同様、複数の時期の畝間痕跡が見えているようで、東半部では異なる方向の畝間痕跡が重複している。この面で確認できる最も新しい時期の畝間痕跡は、北東-南西の方向に掘られており、第3面とほぼ同様な方向を取っている。しかし、幅20mほどの間に19~21本の畝間しかなく、間隔がかなり広いので、様相はやや異なる。特に西側が広く見えるが、あるいは東側の畝間には同方向を取る2時期以上の重複があるのかもしれない。この面は基本土層の9層の間で見つかったので、この層が耕作により攪乱された土層であることが分かる。この9層は、洪水堆積物による埋没と、耕作とを繰り返して形成されたものと思われ、それはその上層の8層も同様であったであろう。

この第3面の畝の時期については、確定できる根拠に乏しい。この面を覆う層から出土した遺物はいずれも小破片であり、土師器甕・壺類が90g、須恵器甕類1点があるのみで時期を確定することはできない。層位的には、遺構は10層上面で見つかり、それにはF A軽石を含むので、少なくとも古墳時代後期(F Aは6世紀初頭以降)以降のものであることは確かである。しかし、下限がどこまで遡るかは不明である。一つ新しい面である第2面は、As-B混土の下層となり、平安時代後期が年代の一つの定点となるものと思われる。最大限の下限はそこに求めることができようが、第2面と第3面との間には洪水起源と思われる厚い層があり(基本土層をとった地点で60cm)、それは先述したように耕作と洪水による埋没とを繰り返して形成されたらしい。それを重視すれば、ある程度の時間差を見込むことが可能であろうが、現状では、古墳時代後期~平安時代というやや広い年代を考えるのが妥当であると思われる。

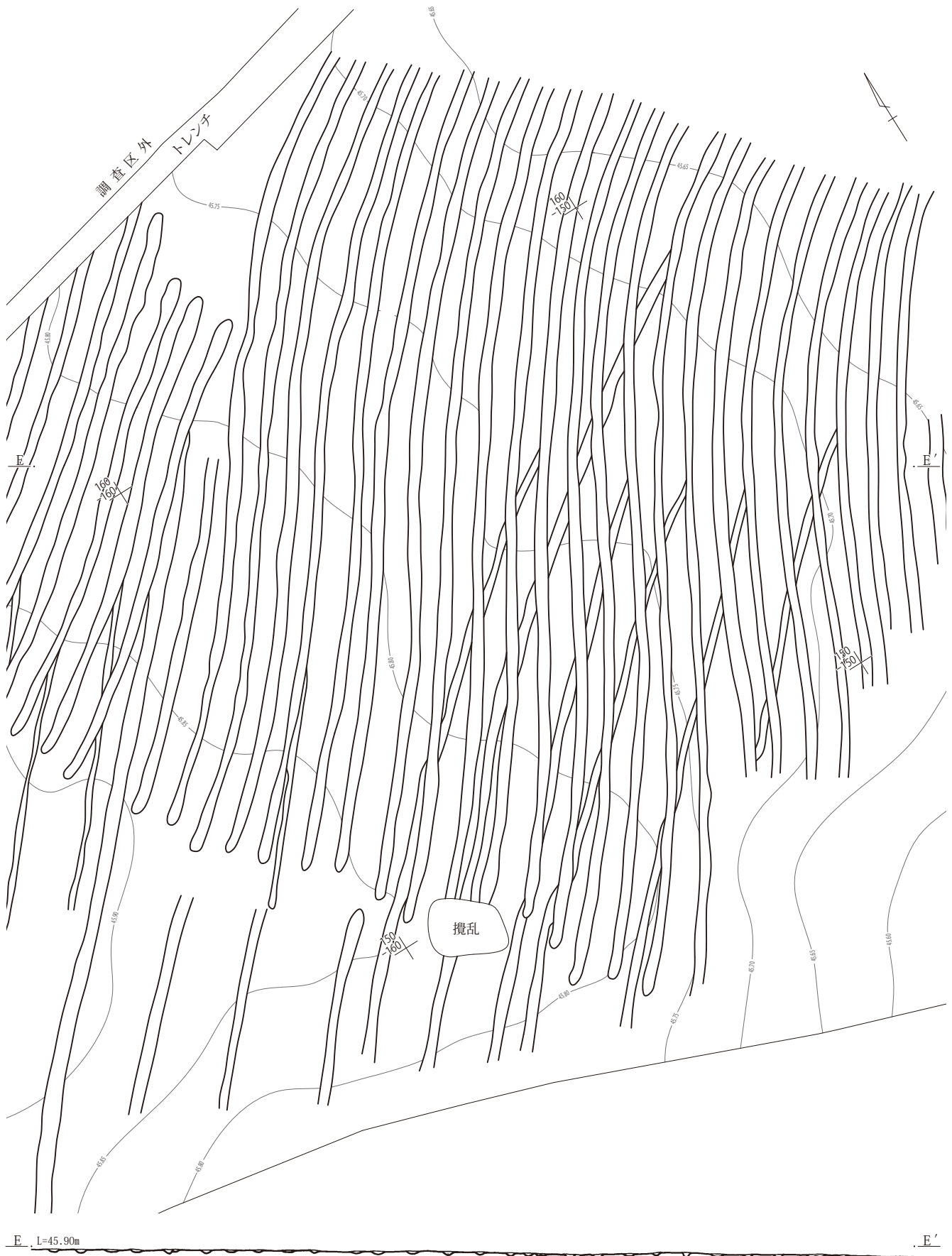


畝B-B'・C-C'
1. にぶい黄褐色土 褐色土を含む。細粒砂を含む。締まりあり。

第93図 南調査区(1-1区)第3面畝②・③区画断面図

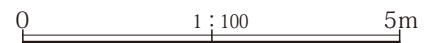


畠D-D'
 I. にぶい、黄褐色土 褐色土を含む。細粒砂を含む。縮まりあり。
 第95図 南調査区(1-2区)第3面畠④区画平面断面図



畠E-E'

1. にぶい黄褐色土 褐色土を含む。細粒砂を含む。締まりあり。



第96図 南調査区(1-2区)第3面畠⑤・⑥区画平面断面図

6 溝

古墳時代の溝は18～21号までの4条で、すべて南調査区で見ついている。このうち18号と19号は、第4面の水田面と同一の面にある。20号、21号溝は、18号溝付近を掘り下げた際に見つかったもので、第4面の下層にあたり、特に20号溝は18号溝とほぼ同じ位置にある。いずれの溝からも遺物は出土していない。

18号溝(第98図、P L. 44-3～44-6)

南調査区(1区)の第4面の水田の北東側にある直線的な溝である。1-1区・1-2区を貫いて北西-南東に延び、両端は調査区外となっている。この付近の地形は北東から南西に向かって下がる、やや急な傾斜になっており、18号溝はこの傾斜の途中に、等高線とほぼ平行した方向に掘られている。

溝の全長は、1-1区と1-2区間の現道部分を含めて、約62.8mを確認している。幅は、南東部でごく一部太くなっているところがあるが、それを除けばほぼ一定で、0.52～0.88mである。深さは1-1区ではやや深く、0.10～0.20mあるが、1-2区では0.03～0.09mと浅い。埋土は主として砂質の灰褐色土であり、流水があったとは断定できないが、底面の標高は北西から南東に行くにしたがって低くなっており、水が流れるとすればその方向に流れるはずである。溝底面の標高は北西端で45.61m、南東端で45.26mであり、標高差は0.35mである。走行方向は、両端を結べばN-50°-Wだが、東側の1-1区はわずかに湾曲しておりN-52°～57°-Wである。

この面で見ついている水田とは、間に浅い谷を挟むので、それに給水するものではない。より下流へと導水する溝であると思われる。

19号溝(第98図、P L. 45-1・2)

南調査区の1-2区西端部にある。長さ15.5mが調査区内にかかり、両端は調査区外に延びている。この部分は調査区が狭く、ごく一部が調査できたに過ぎない。幅はほぼ一定で、0.51～0.76m、深さはセクションを実測した部分で0.13m、断面は浅い逆台形である。走行方向はやや湾曲するが、全体としてN-44°-Wである。

埋土は暗灰白色砂であり、水流があったと思われる。北西から南東に向かって流れたものと思われるが、底面の標高は北西部で45.43m、南東部で45.37mであり、その差は0.06mである。

この溝の位置は第4面の水田の南西部で、その標高は水田よりも高く、これが水田に水を供給する溝だったのであろう。溝の南東延長部は攪乱によりなくなっているが、おそらく1-1区の南西部にも続いているものと思われる。1-1区の水田は1-2区の水田より新しい時期のものと思われるが、その水田に供給する溝もこの位置付近にあったと推定される。

20号溝(第99図、P L. 45-5～46-2)

18号溝の下層を調査した際に見つかった溝であり、18号溝と全く同じ位置にある。そのため、走行方向、長さは18号溝と共通し、長さ約62.8m、走行方向は全体としてN-50°-W、1-1区ではN-52°～57°-Wである。幅はほぼ一定で0.46～0.78m、深さは最も深いところで0.29mであり、形態も18号溝とほぼ同じである。おそらくこの溝が洪水堆積物などにより埋没してしまったため、同じ位置に18号溝を再度掘削したのであろう。

埋土には砂などを含まないので水が流れていたことは確認できないが、水が流れていたとすれば、18号溝と同様、北西から南東に流れていたはずである。底面の標高は北西端で45.43m、南東端で45.06mであり、標高差は0.37mである。

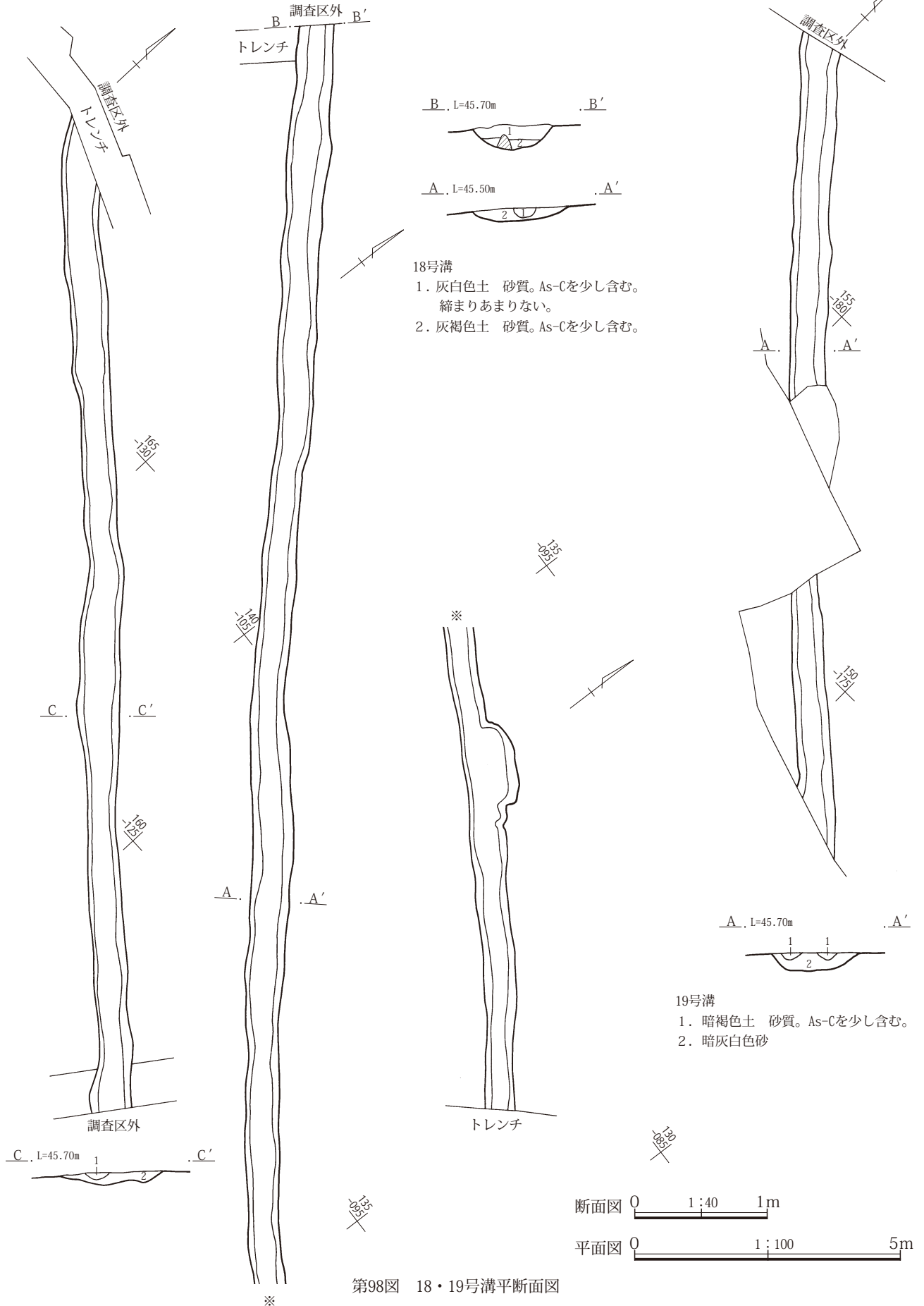
埋土にはAs-Cを多く含むので、As-Cが降下後さほど経たないうちに埋没したものと思われる。1-2区第4面の水田はこの溝よりも上層にあったことになるが、この付近の開田時期は、この溝の存在により、さらに溯ると思われる。

21号溝(第99図、P L. 45-3・4)

20号溝同様、南調査区の1-2区の第4面を掘り下げて調査した際に見つかった溝である。細長い土坑と言わなければならない形状であり、長さ2.83m、幅0.47m、深さは最も深いところで0.14mである。走行方向はN-40°-Eである。20号溝と直交し、埋土にAs-Cを多く含むことが共通するので関連が考えられるが、ごく短い溝であり、性格は不明である。

18号溝

19号溝



第98図 18・19号溝平断面図

7 ピット

古墳時代に属するとして取り上げるピットは合計66基であり、すべて南調査区第5面にある。この第5面では合計68基のピットが調査されているが、それぞれのピットからの出土遺物はほとんどなく、所属年代の確定は非常に困難である。しかも、第5面とその上層から出土している遺物は、縄文時代から古墳時代前期のものが混在しており、時期を絞ることができない。そのため、遺物の出土しないピットについては、古墳時代のものとして本項で扱うことにし、縄文土器が出土した25号ピット、58号ピットの2基のみについては、遺物が出土したことを重視し、縄文時代の遺構として48ページで扱うことと

した。なお、ピットの埋土はいずれも黒色土を多量に含む暗褐色土(1-1区基本土層の13層と同じ)で共通しており、土層から分類することはできなかった。

ピットの位置は付図5に示したとおりであり、計測値などのデータは第33表の通りである。分布をみると、調査区全体に散在しており、特に集中するところはない。さらに浅いものが多いことから考えて、これらのピットは建物の柱穴ではないと思われる。この上面となる第4面には古墳時代の水田があるので、あるいはその時期に伴う、何らかの施設である可能性も考えられるが、断定する根拠はなく、性格は不明である。

第33表 古墳時代ピット一覧表

番号	グリッド	大きさ(cm)	備考
		長径×短径×深さ	
2	135-085	37×36×19	1号ピットは縄文時代。
3	130-090	35×30×14	
4	140-095	36×31×20	
5	135-100	36×29×18	
6	130-100	33×30×15	
7	140-105	27×25×18	
8	135-105	38×36×18	
9	135-105	31×24×10	
10	145-090	53×50×27	
11	130-100	45×42×12	
12	125-100	30×29×11	
13	125-100	61×43×13	
14	120-105	54×48×27	
15	120-105	47×35×14	
16	115-100	61×50×27	
17	125-110	53×48×20	
18	125-110	34×34×10	
19	130-120	35×33×12	
20	130-120	32×30×11	
21	130-120	47×42×11	
22	130-120	38×34×12	
23	115-110	34×29×17	
24	150-175	50×40×19	
26	155-170	56×46×13	25号ピットは縄文時代。
27	150-165	40×38×11	
28	155-160	37×33×9	
29	155-160	52×44×25	
30	155-160	48×38×16	
31	155-165	73×60×38	
32	160-155	58×57×45	
33	160-155	38×30×14	
34	160-150	50×42×20	
35	155-150	58×55×16	

番号	グリッド	大きさ(cm)	備考
		長径×短径×深さ	
36	155-150	51×47×27	
37	160-150	50×25×16	
38	155-145	33×29×7	
39	155-145	28×24×5	
40	150-150	35×25×11	
41	150-150	47×42×12	
42	145-150	38×34×20	
43	150-145	28×28×17	
44	145-150	55×53×19	
45	145-145	41×38×17	
46	150-145	29×27×12	
47	145-145	44×37×15	
48	145-140	57×46×29	
49	145-140	30×30×10	
50	145-135	48×34×14	
51	145-130	42×31×10	
52	145-130	29×23×7	
53	150-135	30×29×14	
54	150-135	29×24×8	
55	150-135	61×60×17	
56	150-135	69×30×21	
57	150-140	42×41×17	
59	155-130	43×32×33	58号ピットは縄文時代。
60	150-130	28×19×17	
61	150-130	42×34×22	
62	150-140	30×28×14	
63	160-145	31×24×7	
64	160-145	37×36×17	
65	160-145	39×30×14	
66	165-145	35×34×16	
67	165-145	30×27×9	
68	165-145	27×23×10	
69	160-145	39×29×18	

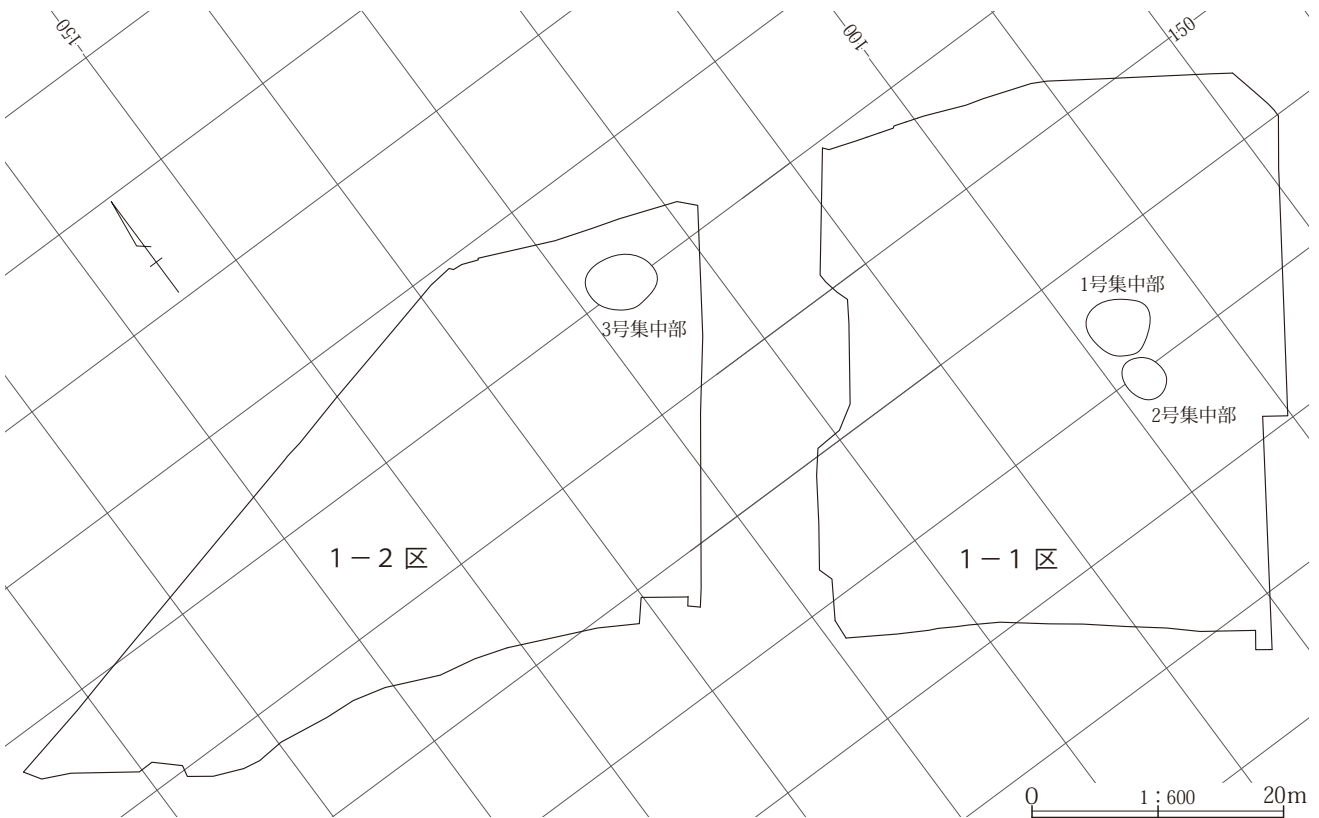
8 遺物集中部

南調査区の北東側にある、南西に向かって下がる斜面では、第3面から第4面に掘り下げる途中で、土器片が多く散布しているのが見つかった。これらの土器片は第4面が埋没する過程で北東側から流れ込んだものと思われるが、それらの中で特に遺物が集まっているところが3ヶ所あったため、これらを1号～3号遺物集中部と名付け、土器片の出土位置を記録して取り上げた。この付近では、第3面から第4面までの深さは20～30cmであるが、土器片はいずれもその中位から出土しており、第4面の水田や第3面の畠に直接関わる遺物ではない。

3ヶ所のうち1、2号遺物集中部は1-1区中央やや東寄りにあり、1号は斜面の上部、2号は斜面の下部で見ついている。1号遺物集中部は3.5×4.5mの範囲に28点の土器片が散っていたが、接合できたのはそのうちの6点のみで、土師器甕の胴部であった。2号遺物集中部は1.7×2.8mの範囲に67点の破片が散っていた。そのうちの大部分の51点が接合し、土師器・甕に復元できた。これら2点の土器は5世紀中頃のものと思われ、ほぼ同時期のものと考えられる。

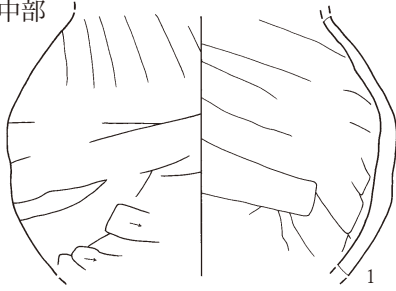
3号遺物集中部は1-2区東端近くで、斜面の中ほどで見つかったものである。4.0×5.0mの範囲に96点の土器片が散っていた。接合作業の結果、ここでは5点の土師器が復元でき、内訳は壺3点、台付甕1点、手捏ね土器の椀1点である。これらの土器の時期は4世紀後半と思われる。壺は磨きによって丁寧に整形され、ほぼ完形に復元できた2点はほとんど同形同大で、それらが同時に出土していることに何らかの意味を感じさせる。このように比較的狭い範囲に完形かそれに近い土器が複数出土し、手捏ね土器も含まれることから、単に廃棄されただけではなく、何らかの祭祀行為に伴うものであった可能性も考えられる。

前述のように、これらの土器は、第4面の水田が埋没する過程で北東側から流れ込んだものであろう。その方向に位置する北調査区では、4世紀後半の竪穴住居と周溝墓が見つかっており、3号遺物集中部の土器と時期的に一致する。1・2号遺物集中部と一致する5世紀代の顕著な遺構は見つかっていないが、同時期の遺物は少数ながら見つかっており、近傍に集落などの存在が推定できる。遺物集中部に限らず、この斜面から出土した土器片は、それらの集落と関わるものであろう。

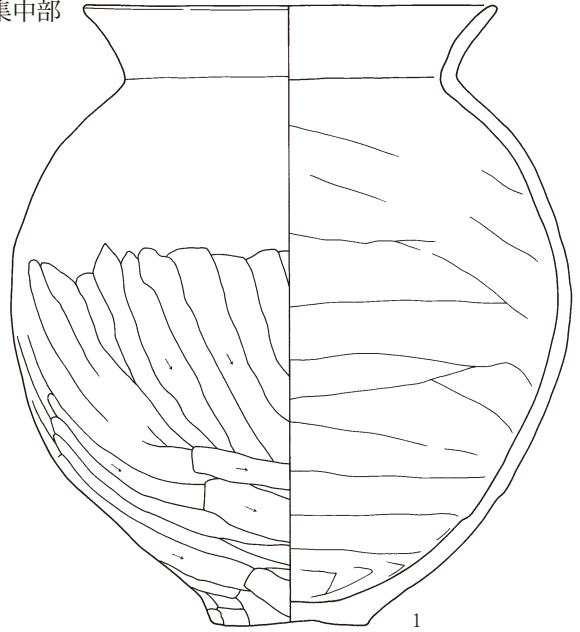


第100図 1～3号遺物集中部位置図

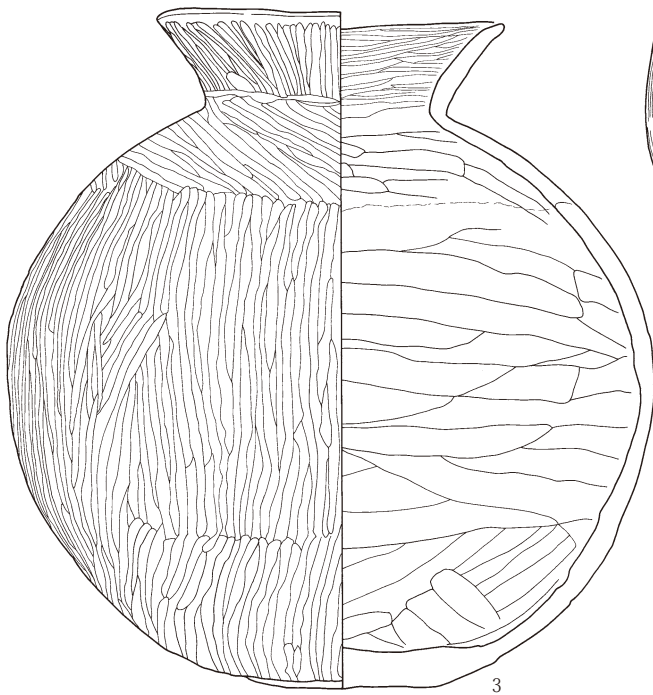
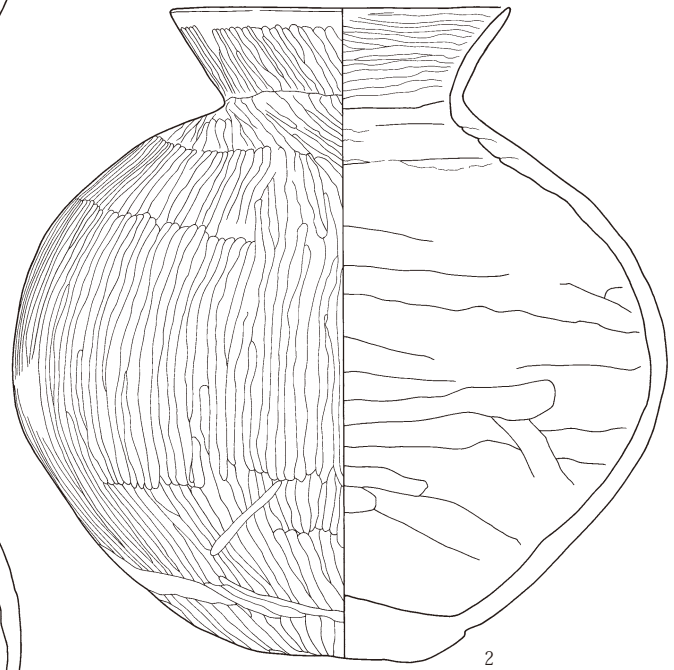
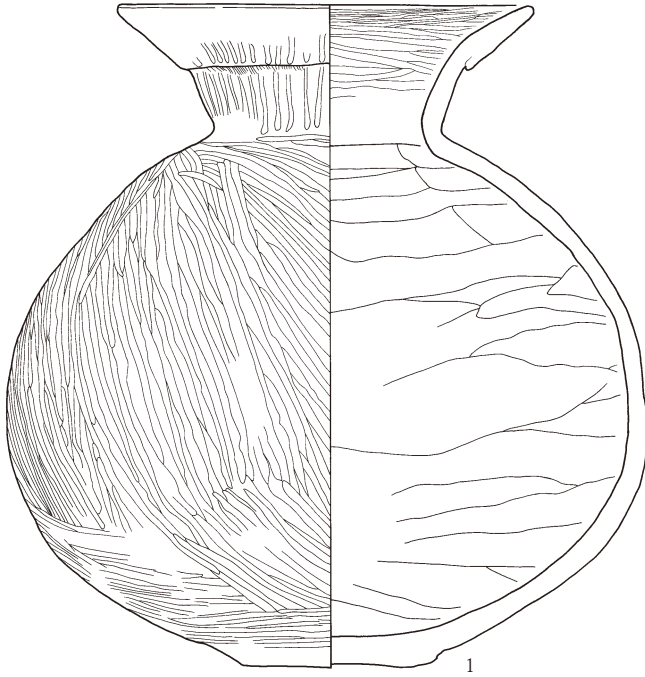
1号遺物集中部



2号遺物集中部

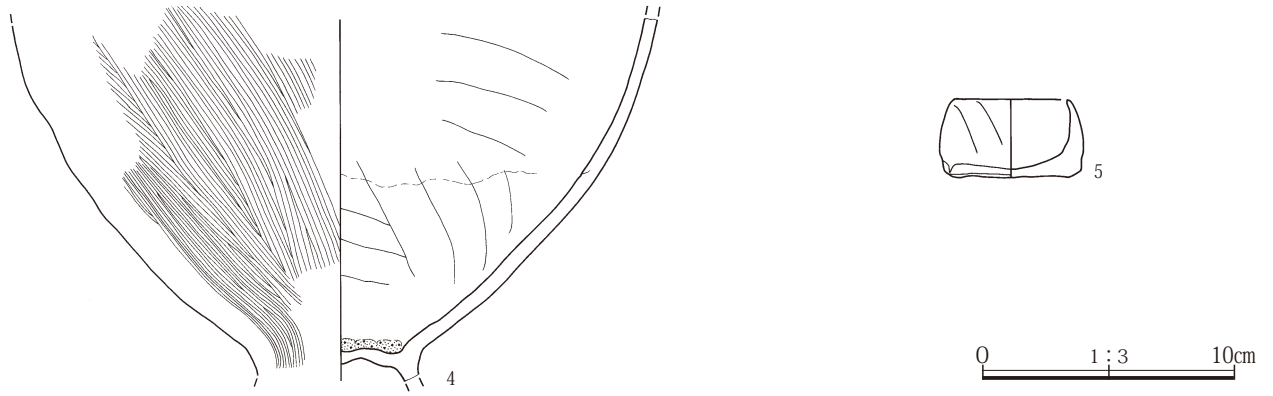


3号遺物集中部



0 1:3 10cm

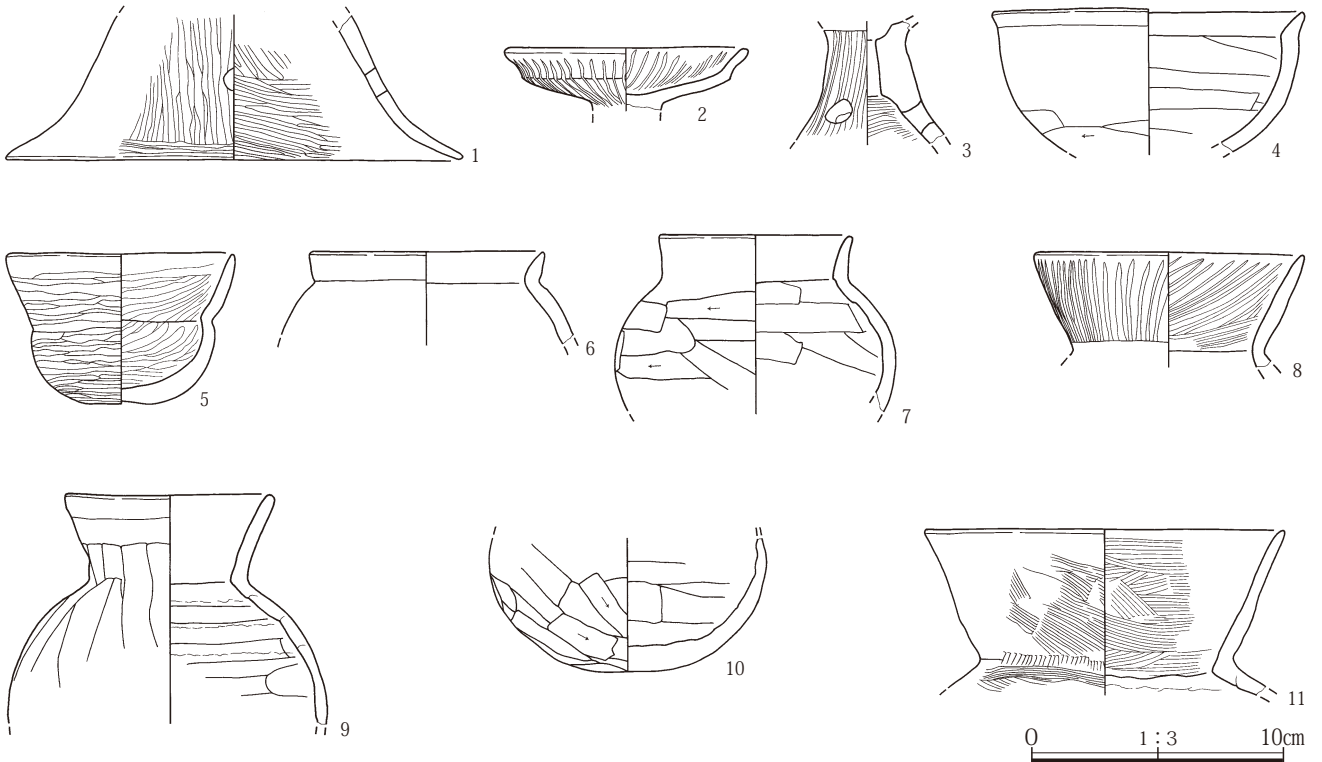
第101図 1～3号遺物集中部出土遺物



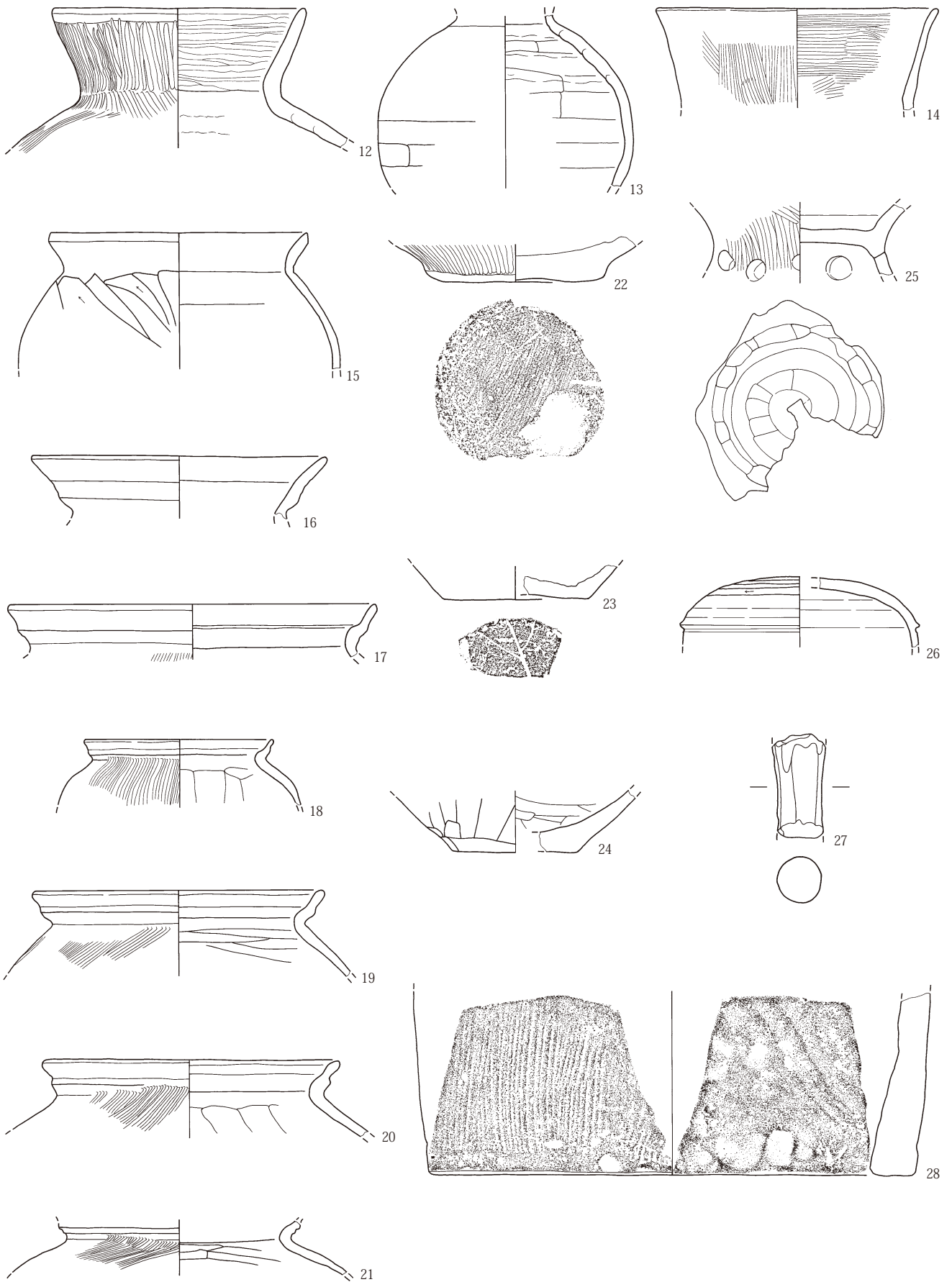
第102図 3号遺物集中部出土遺物

9 遺構外出土の遺物

遺構外からも多くの遺物が出土している。しかし、土師器・須恵器の小破片については、古墳時代のものと奈良・平安時代のものとの区別できない場合が多いので、本項では、遺構外、あるいは中近世の遺構に混入して出土した遺物のうち、ある程度の大きさに復元でき、古墳時代に属すると思われるものを取り上げた。その他小破片は、奈良・平安時代に属すると思われるものも含めて、土師器甕類12,601g、同杯類1,272g、須恵器甕類712g、同杯類283gが出土している。



第103図 古墳時代・遺構外出土の遺物(1)



第104図 古墳時代・遺構外出土の遺物(2)

第6節 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は少なく、北調査区に竪穴住居1軒、南調査区に道路状遺構1条、畠1面があるのみである。畠は平安時代末以降のものだが、竪穴住居と道路状遺構は9世紀後半頃の平安前期のものである。

1 竪穴住居

1号住居(第105・106図、第70・71表、P.L.46-5～47-4, 93)

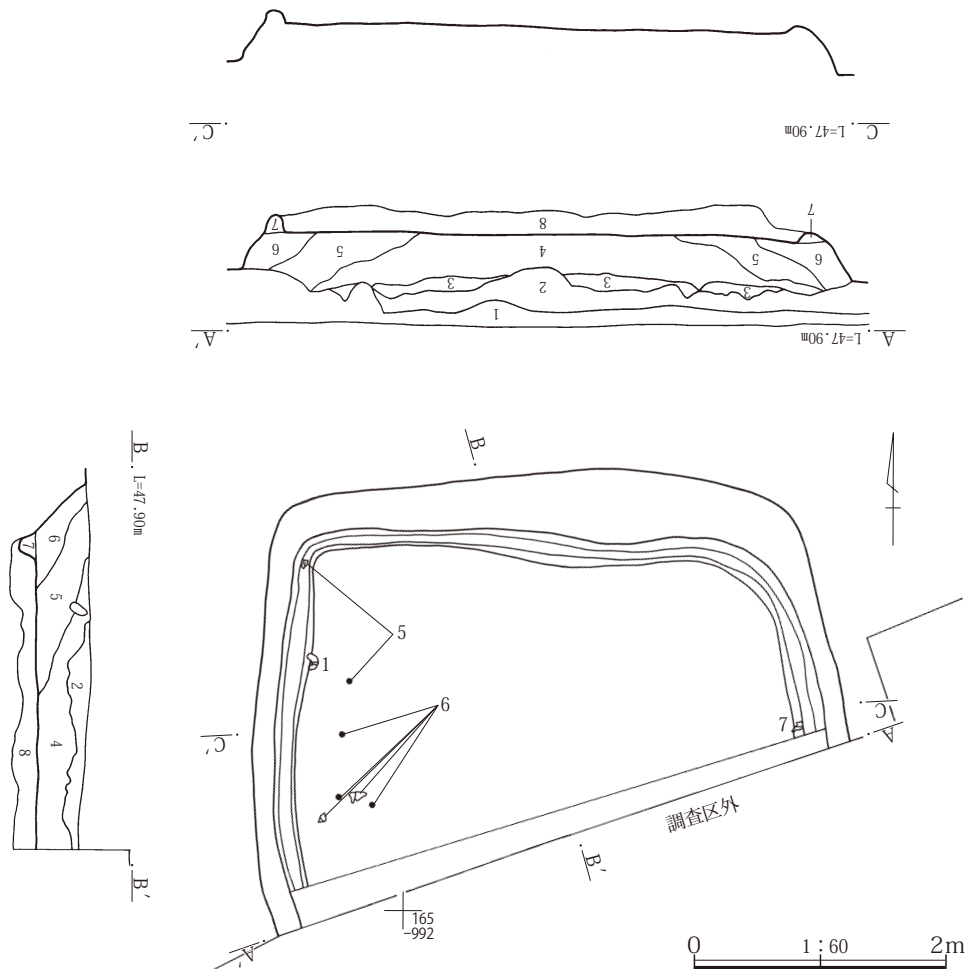
北調査区の東半部にある竪穴住居であり、南半分が調査区外となる。本遺跡では平安時代の遺構は少なく、北調査区ではこれが唯一である。

位置 X=37164～169, Y=-37988～994。 **重複遺構** なし。 **形態** 南部が調査区外となるため不明であるが、方形と思われる。 **方位** 東に竈があると想定してN-90°。 **規模** 4.74m×(3.35)m。 **床面積**

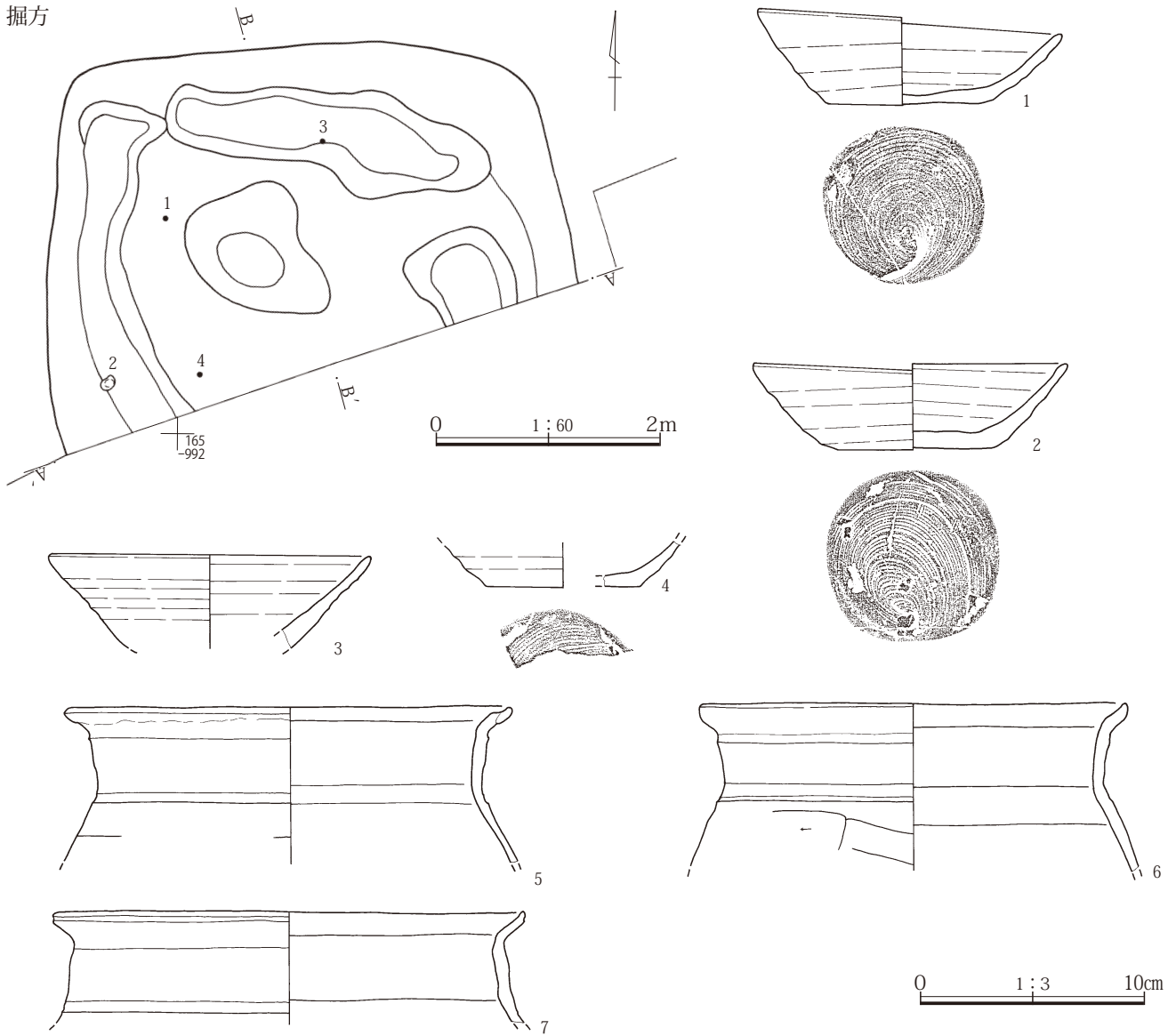
9.96㎡。 **壁高** 0.22～0.37m。壁の傾斜は緩やかである。 **覆土** 4層以下が住居の覆土であり、その直上をAs-Bを含む土が覆っている。壁際にロームを多く含む層(5・6層)が堆積しており、周堤帯の崩れた土が流れ込んだものである可能性がある。 **床面** 掘方を暗褐色土とロームブロックとの混合土で埋め戻し、床面とする。中央付近はよく締まり硬化していたが、壁際付近は硬化面が不明瞭であった。 **柱穴** 見つからなかった。 **貯蔵穴** 調査区内では確認できなかった。 **周溝** 調査区内では全周している。幅11～25cm、深さ7～13cmの明瞭な周溝である。 **竈** 確認できなかった。東辺あるいは南辺にあるものと思われる。 **掘方** 床面と掘方底面までは10～23cmと厚い。壁際と中央部分をやや深く掘っている。 **遺物** 遺物は比較的多い。掲載するのは須恵器杯4点、土師器甕3点である。その他小破片として土師器甕類1700g、同杯類60g、須恵器杯類100gが出土している。 **所見** 出土した土器から9世紀後半と思われる。

1号住居

1. 表土
2. 浅黄色土 As-Bをブロック状に多く含む。黄色土を多く含む。炭化物、小礫(φ～1mm)を少し含む。締まりやや弱い。上層からの攪乱か。
3. 黒褐色砂質土 As-Bをブロック状に非常に多く含む。アツキ色のアッシュもブロック状に確認。締まり弱い。
4. 黒褐色土 As-C(φ～1mm)、FAパミス(φ1～2mm)をやや多く含む。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を少し含む。締まりあり。周溝墓や古墳の埋没土と似ている。
5. 暗褐色土 4層に似るが、ロームを多く含む。締まり弱い。
6. にぶい黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土、炭化物、焼土粒を少し含む。締まりややあり。
7. にぶい黄褐色土 ロームブロック、黒色土を含む。締まり弱い。周溝の埋没土。
8. 暗褐色土+ロームブロック 焼土粒、遺物を含む。締まりやや弱い。掘方。



第105図 1号住居平断面図



第106図 1号住居掘方平面図・出土遺物

2 道路状遺構

平安時代の道路状遺構は南調査区で見つかっており、これを2号道路状遺構と名付けた。それは、調査区の東隅に、平行する3本の溝として把握できたものである。この部分は北調査区から続く低台地上であり、ちょうどこの溝の部分から南西側は、矢場川に向かってやや急な下り斜面となっている。この付近では渡良瀬川に沿ってこのような低台地が北西-南東の方向に細長く延びており、これら3本の溝はそれとほぼ同じ方向に掘られているが、矢場川はちょうど調査区の部分で北に大きく屈曲するため、この部分では台地の端に溝が掘られているようになっている。

これら3本の溝のうち、北側の2本(3、4号溝)は

第1面で見つかったものである。それに対して最も南にある17号溝は、その上に洪水起源の土層がかぶっていたため、それを除去した第3面で見つかったのだが、溝の埋土は3者ともよく似ており、ほぼ同時期のものであると思われる。3、4号溝がある部分は先述の通り、南調査区でも最も高い部分であり、17号溝を覆っていた層は既に削平されていると考えられ、そのために調査面が異なったのだと考えられる。

この溝を道路跡と考えたのは、3本の溝が平行し、直線的に延びていることからである。硬化面や道路の構築に関わる痕跡は全く見つからないので、その点では「道路」と断定するのは躊躇せざるを得ないが、溝の配置からそれが道路の側溝である可能性が高いと判断した。先述のように、最も高い部分は後世の削平によって上面

がなくなっていると思われるので、路面もその際に削り取られてしまったのだと考えられる。

溝の長さは最も長い4号溝で35.50m分が調査できた。その形状はいずれもほぼ同じで、底面はやや凹凸があり、断面は椀状の部分と逆三角形の部分がある。それぞれの溝の幅は3号溝が1.10～1.62m、4号溝が0.55～1.45m、17号溝が0.62～1.05mである。深さは、ピット状に深く掘られているところを除いて、3号溝が0.19～0.35m、4号溝が0.10～0.32m、17号溝が0.05～0.22mである。南の溝ほど狭く浅いのは、南ほど上面が削平されているためと考えられる。エレベーション図で分かるように、溝の底面の標高は3条ともほぼ同じであり、南ほど遺構上面の高さが削平により下がっているため、溝が狭く浅くなっているのであろう。溝の底面の高さがほぼ同じことから、道路使用時の路面はほぼ水平で、側溝もほぼ同じ幅だったのではないだろうか。走行方向は、N-52°-Wである。

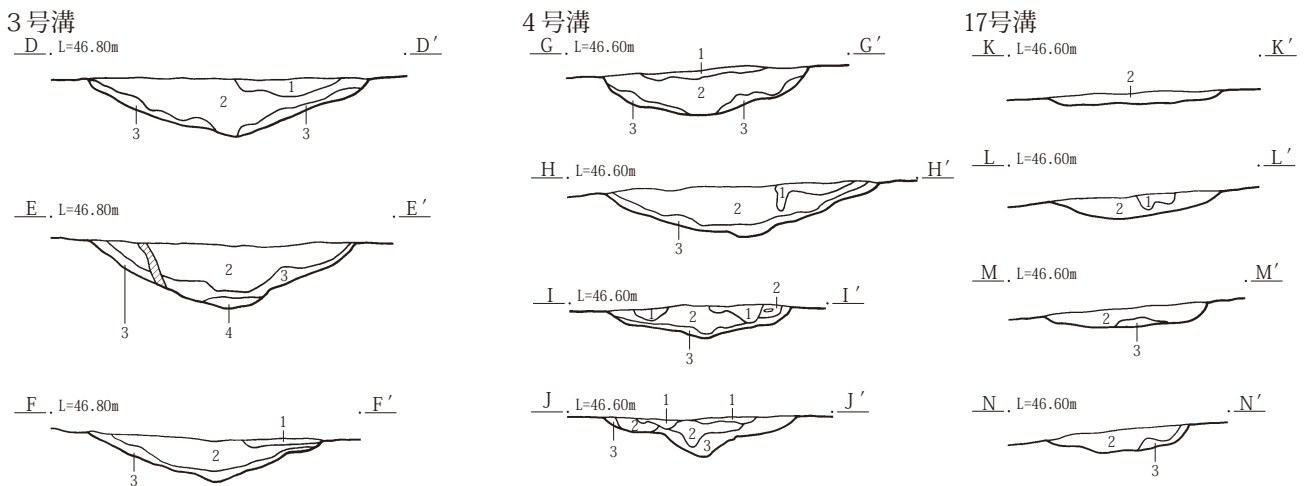
底面に凹凸があり、埋土には砂をほとんど含まないので、水流はなかったものと思われる。水が流れるとすれば、北西から南東の方向であり、溝底面の両端部の標高差は、3号溝で8cm（北西端46.43m、南東端46.35m）、4号溝で13cm（北西端46.42m、南東端46.29m）、17号溝

溝で5cm（北西端46.36m、南東端46.31m）である。

これらを道路の側溝だとすると、3号溝と4号溝、3号溝と17号溝という2つの組み合わせが考えられ、2時期の道路が重複していると考えられる。道路幅は溝の心-心で計測して、3-4号溝で5.30～5.45m、3-17号溝で7.00～7.50mであり、時期により幅が異なっている。それら2時期の新旧関係は、4号溝と17号溝が重複していないため、明確に把握することはできなかった。

3号溝、4号溝の埋土からは時期の判別が可能な土器が出土している。掲載したのは3号溝が5点（須恵器杯2点、同甕1点、土錘1点、砥石1点）、4号溝が1点（須恵器杯）である。その他小破片として、3号溝から土師器甕類150g、同杯類1点4g、須恵器甕類1点20g、同杯類140g、4号溝から土師器甕類50g、同杯類3点20g、17号溝から土師器甕類2点30gが出土している。

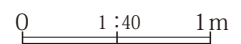
3号溝の1・2の須恵器杯は9世紀前半、4号溝の1の須恵器杯は9世紀後半のものと思われる、それらが溝埋没年代の一端を示すものである。出土数が少ないので断定はできないが、側溝が埋没したのは9世紀後半以降であり、この道路跡は平安時代前期のものと考えてよいであろう。この道路跡の意義については第5章で述べる。



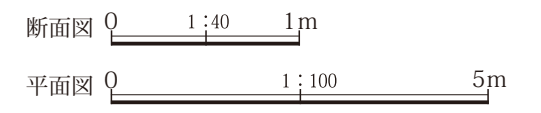
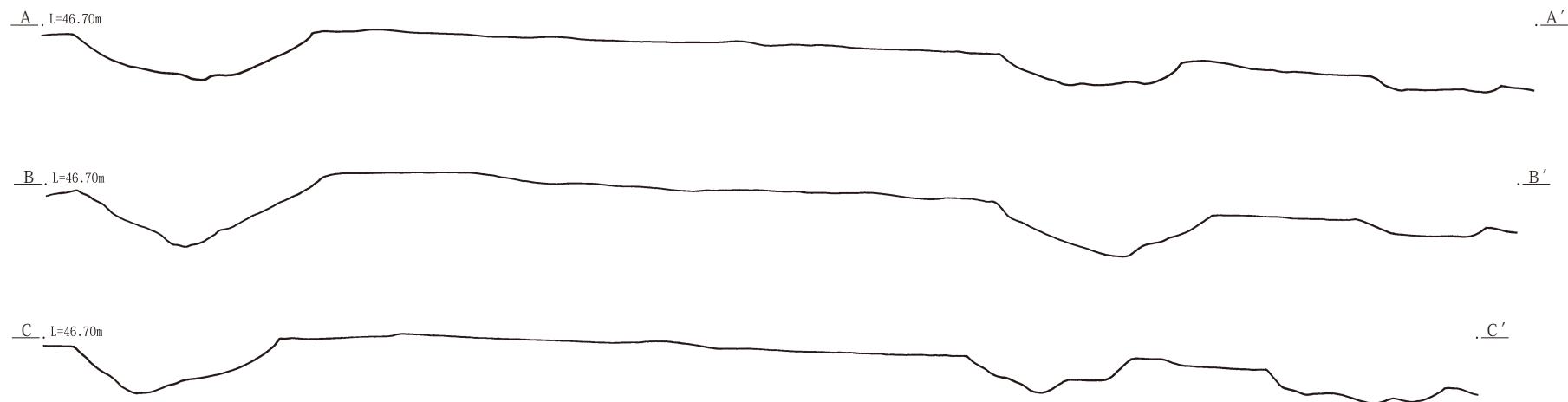
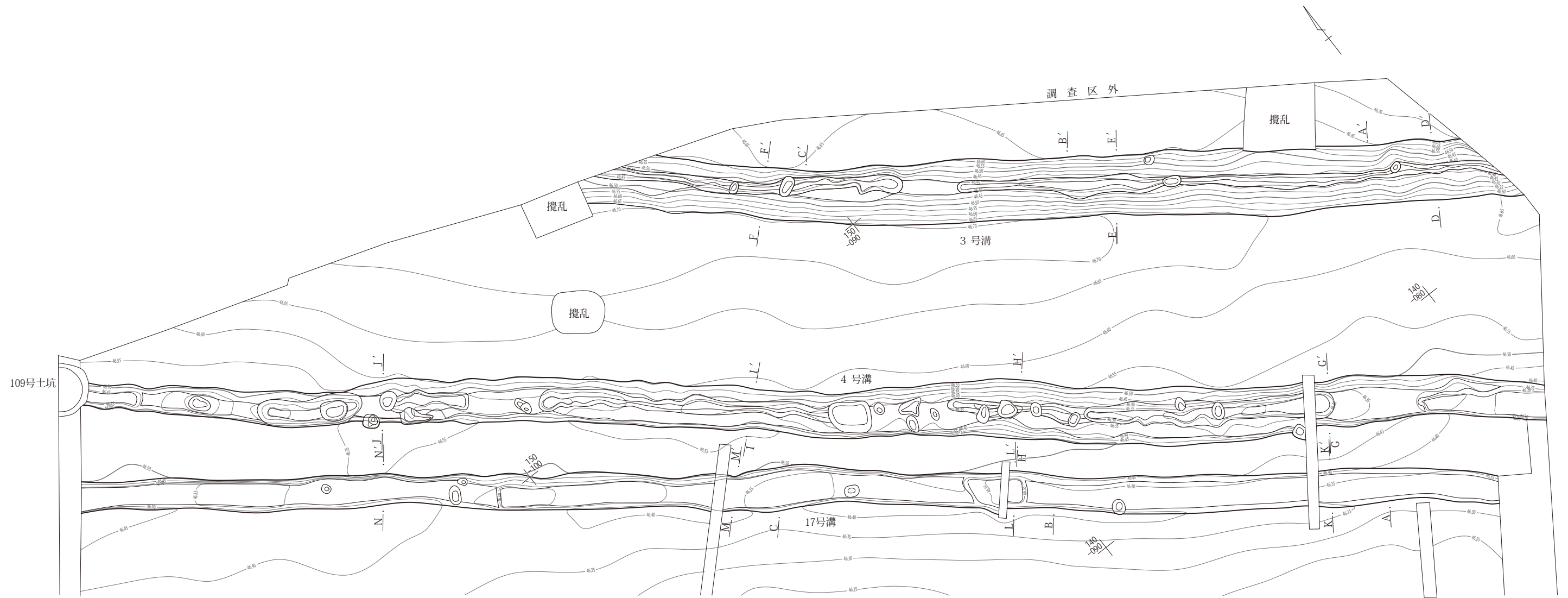
- 3号溝
1. 褐灰色土 褐色土を含む。縮まりあり。現代の盛土。
 2. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少量含む。縮まりあり。
 3. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。縮まり弱い。
 4. 黒褐色砂質土 砂層。砂礫(φ2～5mm)を多量に含む。縮まりなし。

- 4号溝
1. 褐灰色土 褐色土を含む。縮まりあり。現代の盛土。
 2. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少量含む。白色軽石粒(φ1～2mm)を含む。縮まりあり。
 3. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。縮まり弱い。

- 17号溝
1. 褐灰色土 褐色土を含む。縮まりあり。
 2. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を少量含む。白色軽石粒(φ1～2mm)を含む。縮まりあり。
 3. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。縮まり弱い。

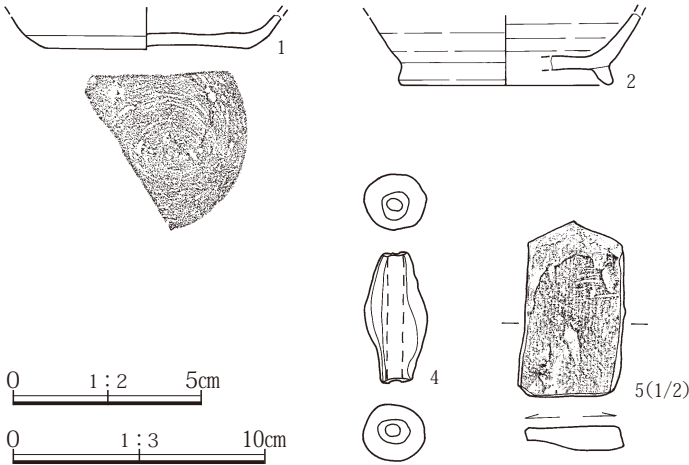


第107図 2号道路状遺構側溝断面図

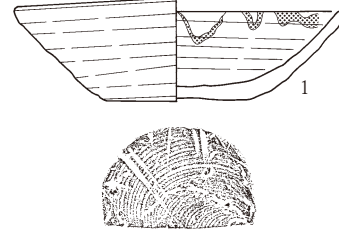


第108图 2号道路状遺構平断面图

3号溝出土遺物



4号溝出土遺物



第109図 2号道路状遺構側溝3・4号溝出土遺物

3 畠

平安時代のものと思われる畠は南調査区の1-1区第2面で見つっている。これ以外に第3面の畠も古墳時代後期～平安時代のものと思われるが、それについては前節(110ページ)で取り上げた。

畠は1-1区の南西側で見つっている。1-1区の第2面の地形も他の面同様、北東部が高く、そこから南西に向かって下がり、一旦谷状になった後、今度は逆に南西に向かって緩やかに高くなっていく。畠はこの南西に向かって高くなる斜面に作られている。

畠を覆う土層は洪水層ではなく、As-Bを含む攪拌された土であり、耕作土だと考えられる。そのため、この畠の面は畠の地表面ではなく、第3面で見つっている畠と同じく、耕作土下層の畠痕跡＝耕作痕の面である。平行する溝状の遺構は畠間を深く掘り下げた際の耕作痕であり、長さは最長で14.5mで、幅約20mの間に13条が見えている。畠間と畠間の間隔は0.70～1.75mで広狭が

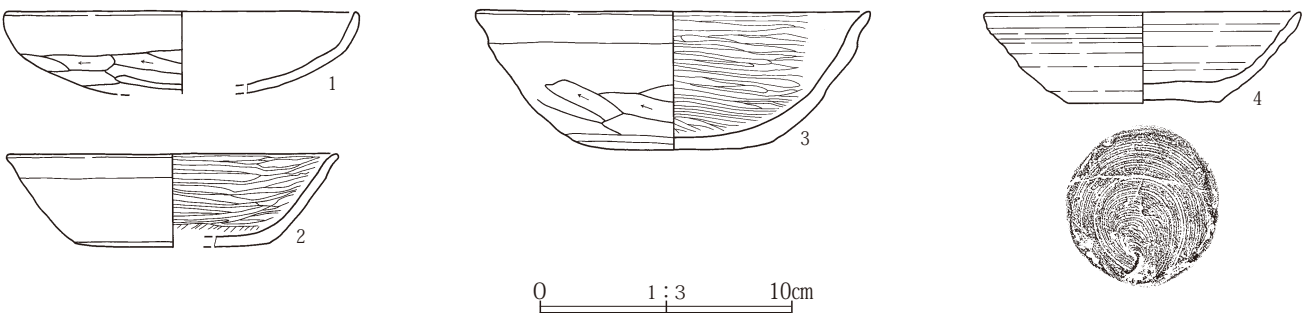
あり、中央部が狭く、外側は広い傾向があるが、全体として間隔は広い。

畠の時期は明確な出土遺物がなく特定は難しいが、耕作土にAs-Bを含み、それ以下には含まないので、平安時代末期以降のものである。

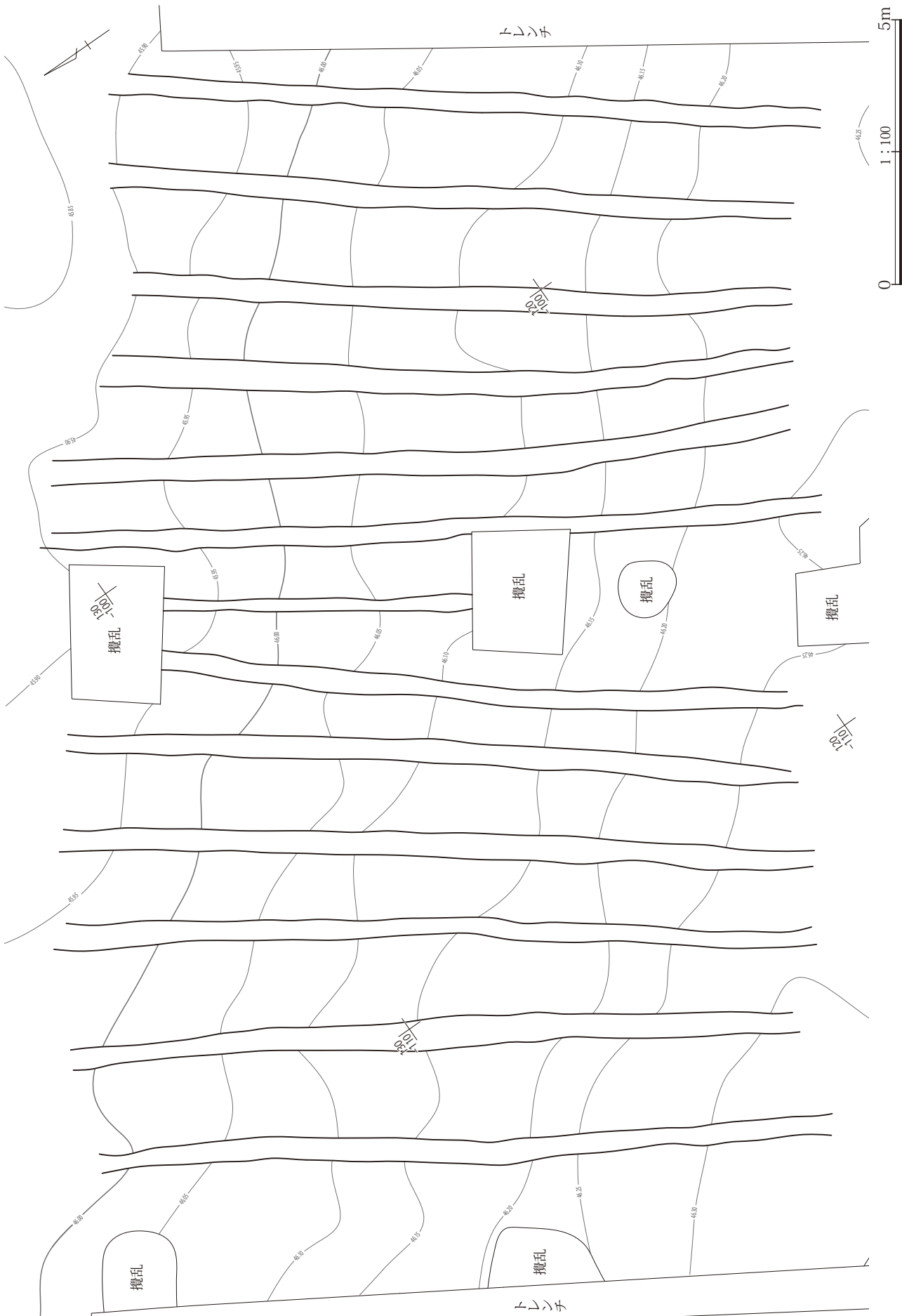
4 遺構外出土の遺物

遺構外から出土する平安時代の遺物は少ない。ここでは遺構外から出土、あるいはより新しい時期の遺構に混入した遺物のうち、ある程度の大きさに復元できたものを取り上げる。小破片の数量については、古墳時代のものと判別しにくいものがあるため、前節(124ページ)で記述したとおりである。

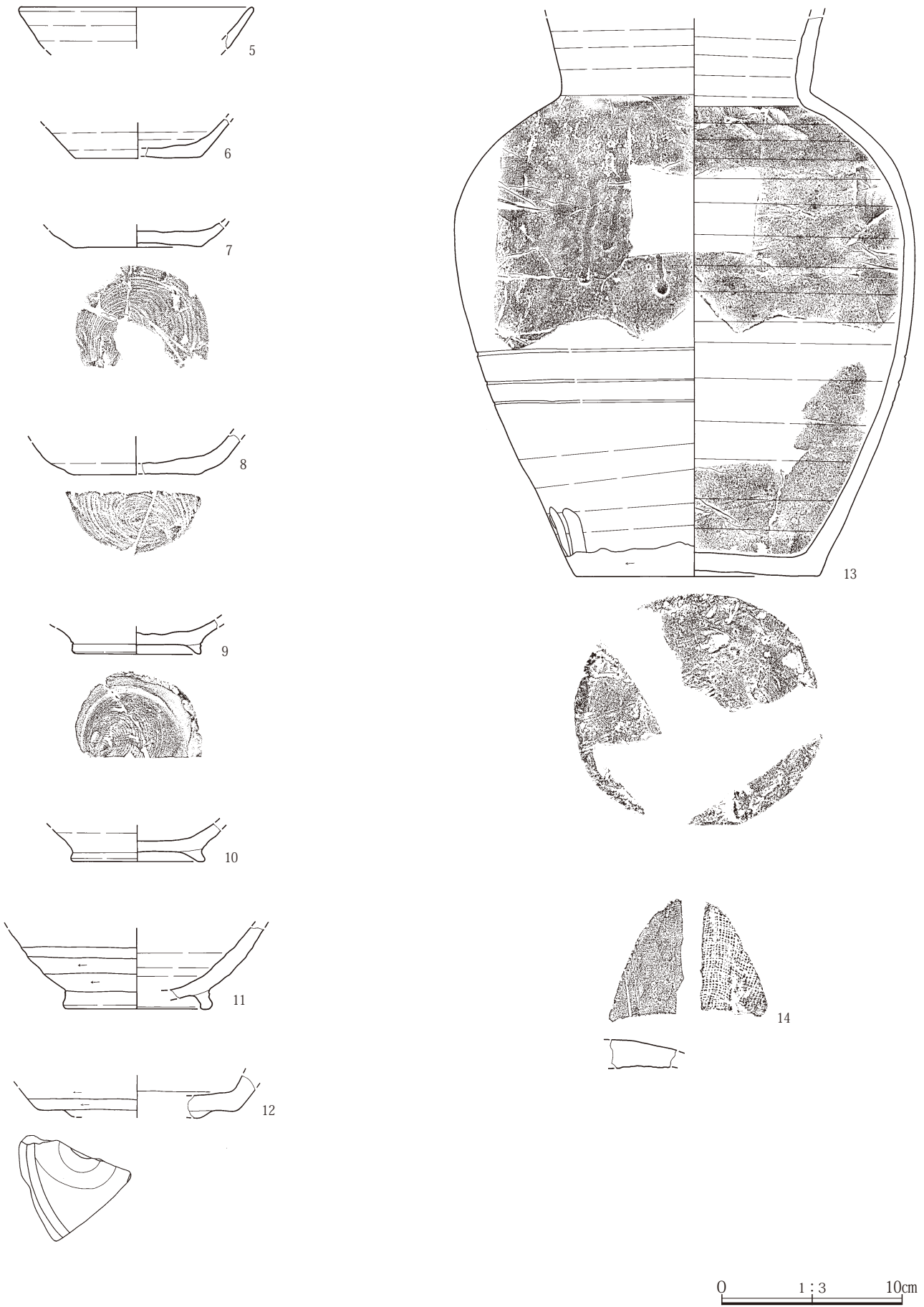
掲載したのは土師器杯2点、黒色土器椀1点、須恵器杯7点、同瓶1点、同香炉1点、同甕1点、丸瓦の小破片1点である。これらのうち7点は1区から出土している。この区には住居などは見られないが、道路状遺構が通過していることが遺物の多い要因かもしれない。



第110図 平安時代・遺構外出土の遺物(1)



第111図 南調査区(1-1区)第2面島平面図



第112図 平安時代・遺構外出土の遺物(2)

第7節 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構遺物は数多く存在し、竪穴状遺構1基、土坑墓13基、火葬墓3基、土坑93基、集石7基、井戸6基、堀1条、溝12条、道路状遺構1条、畠1面がある。6基の土坑とすべての溝と畠は南調査区にあるが、それ以外は北調査区にある。

これらのうち特に注目されるのは土坑墓と火葬墓である。これらの墓は北調査区南西の限られた範囲に集中し、この部分に中世の墓地が作られていたようである。15世紀前半を中心とする時期のものであり、1号道路状遺構はその墓地造営期間中に短期間使われた道らしい。その他、竪穴状遺構も中世のものと思われるが、それ以外の遺構は遺物が少なく、時期を特定できないものが多い。

堀は、東に存在する道原城のものではないかと、調査当時は考えたが、遺物から見ると埋没したのは18世紀中頃以降の可能性が強く、関連を考えるのは困難である。

また、北調査区の場合は近世に屋敷地として利用されていたようで、近世の陶磁器類が大量に出土した。大部分は攪乱からの出土であり、近現代になってそれらがまとまって廃棄されたい。中には「元文一分金」があり注目されるが、これは北関東自動車道関連の調査では萩原遺跡に次いで2枚目の出土である。

1 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(第113図、第71・72表、P L .53-1～5, 93)

北調査区西半、2号周溝墓の周溝内にあり、一部重複している。その形状から中世の竪穴状遺構であると判断したが、同様なものは周囲にはなく単独で存在する。

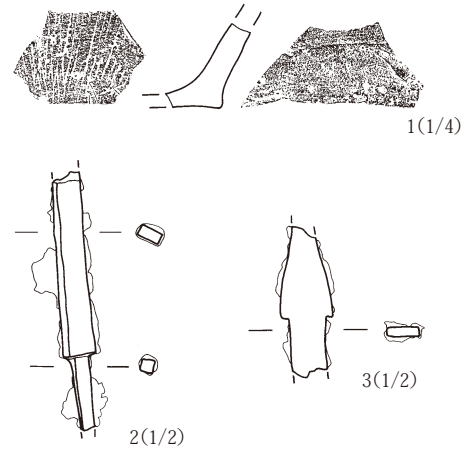
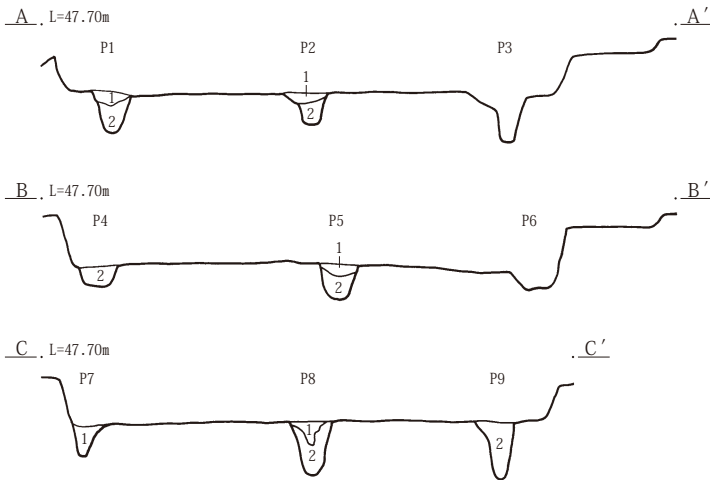
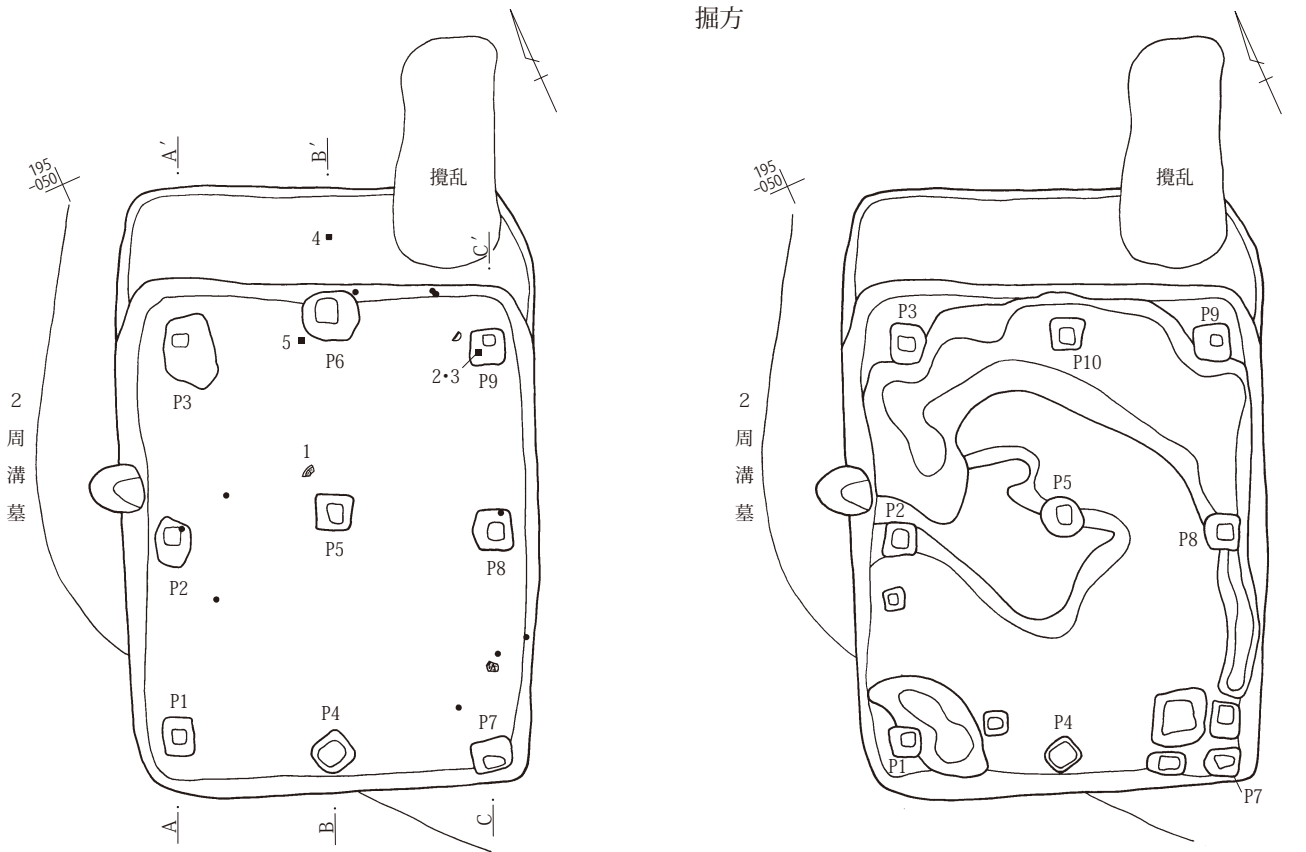
位置 X=37189～195、Y=-38046～052。 **重複遺構** 2号周溝墓よりも新しい。 **形態** 長方形で、北側に浅い張り出し部が付く。 **方位** N-22°-E。 **規模** 4.76m×3.27m。 **床面積** 13.32㎡。 **壁高** 0.32～0.46m。張り出し部は0.03～0.10m。 **床面** ほぼ平坦である。掘方を埋め戻して床面としているところが大部分であるが、一部では地山を直接床面としている。 **柱穴** 床面では9本のピットを調査した。平面形はいずれも方形である。四隅と各辺の中央、さらに住居中央に1本ずつ配

置されており、これが主柱穴になるものと思われる。このうち北辺中央のP6は、浅いために掘方底面では見られなくなるが、そのやや南に新たに柱穴が1本(P10)見つかった。そのP10の位置は、北西隅のP3と北東隅のP9とを結んだ直線に近いので、P10はP6よりも古い時期の主柱穴であろう。その他掘方底面では、P2のやや南、P1とP4の間、P7の周囲にピットが見ついている。配置としてはやや不規則になるが、これらも平面形が方形であり、ある時期には建物の構造に関わる柱穴であったと思われる。これら方形の柱穴には角材の柱が立てられていたと思われるが、柱穴の形状から、柱材の各面は本遺構の向きに揃えられていることが分かる。南西辺中央のP4だけは45°傾いているが、その理由は不明である。ピットの大きさは下記の通りである(長辺×短辺×深さ、m)。

P 1	0.30×0.24×0.32
P 2	0.36×0.29×0.24
P 3	0.58×0.40×0.38
P 4	0.29×0.29×0.17
P 5	0.29×0.28×0.28
P 6	0.45×0.39×0.14
P 7	0.31×0.25×0.24
P 8	0.32×0.32×0.42
P 9	0.28×0.28×0.45
P 10	0.26×0.26×0.12

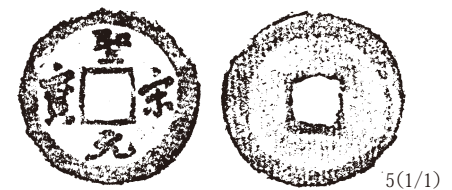
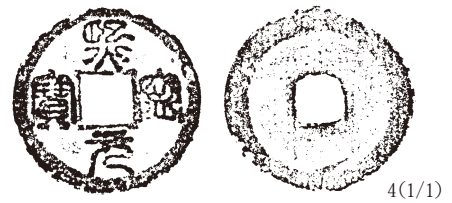
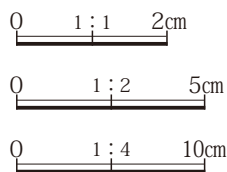
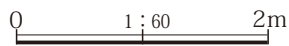
周溝 床面では確認できなかったが、掘方底面には東辺に沿って細く溝状に掘られた部分があるので、一部には周溝があった可能性もある。 **掘方** 床面から掘方底面までは0～25cmある。掘方底面は凹凸があり、北辺から東辺に沿って深く掘られているのに対し、中央西寄りには高く掘り残した部分がある。 **遺物** 出土遺物は少ない。掲載したのはすり鉢(丹波陶器か)1点、「熙寧元寶」(北宋、1068年初鑄)1点、「聖宋元寶」(北宋、1101年初鑄)1点、鉄鏃と思われる鉄製品2点である。その他小破片として土師器瓿類450g、同杯類25g、鉄滓1点が出土している。 **所見** すり鉢は近世以降のものであると思われる。確認面から出土していることから混入の可能性が強い。そのほか、宋銭以外に時期を示すものがないので年代を確定できないが、少なくとも12世紀以降の中世のものと考えられる。

掘方



1号竖穴状遺構

- 1. 暗褐色土 黒色土を含む。ロームブロック(φ30~50mm)を斑状に含む。炭化物を少量含む。
- 2. 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土を少し含む。締まり弱い。



第113図 1号竖穴状遺構平面図・出土遺物

2 土坑墓・火葬墓

人骨が出土することなどから墓だと判断したものは、土坑墓16基、火葬墓3基の計19基であり、全て北調査区にある。これらのうち11～13号土坑墓の3基(P L. 56-5～8)は、棺桶のタガが鉄製であることと、11号土坑墓から合成樹脂製の櫛が出土したことで近代のものだと判断できるので、以下土坑墓については、それらを除いた13基を報告する。土坑墓と火葬墓との区別は、焼骨、焼土、炭化物の存在の有無によって判断した。

このように調査時に「墓」と判断した遺構以外に、次項の「土坑」の中にも人骨が出土するものがある。これらの中には本来墓であったものが含まれている可能性があるが、本書では混乱を避ける意味から土坑として報告している。それらのうち、土坑墓の可能性の高いものは15、64、81号土坑であり、火葬墓の可能性のあるものは47号土坑である。これらの土坑も、本遺跡の墓地を考える上では併せて検討する必要がある。

以上の4基の土坑も含めて墓の分布をみると、近代の3基を除いた以外は、北調査区の南西辺に沿った、幅8m、長さ30mほどの細長い範囲にほぼ集中している。以下、この部分を「墓集中部」と呼称することにする。この墓集中部から外れるのは47号土坑だけであり、その点からみるとこの土坑は墓ではないかもしれない。

土坑としたものを含めて、これらの墓から出土する遺物をみるとすべて中世に属している。そのため、墓集中部は江戸時代以前の中世の墓地であったと思われる。しかし個々の墓の年代を絞り込むのは難しい。副葬品と思われる在地系土器の皿が出土している場合は、その皿が墓の年代を示すと思われるが、それが出土しない墓も多いからである。銅銭が出土する墓は多いが、銅銭は長期間使用されるものであり、銭の铸造年代と墓の造営年代には大きな差があるのが普通である。また、比較的多く出土する五輪塔は、本来墓の上に置かれるものであり、墓の内部に入るべきものではない。おそらく、新たに墓を造営した時に、付近に散乱していた五輪塔が入り込んでしまったものと思われる。そのため、これも墓の年代を直接示すものではない。このように、個々の墓の年代を決定するのは困難であるが、出土している在地系土器の皿の年代が15世紀前半頃であり、土器を出土しない墓

もそれに近い年代のものと考えてのが妥当であろう。

なお、出土した骨・歯については宮崎重雄氏に鑑定を委託した。本項でもその結果を略述するが、詳細は第4章第3節(221～228ページ)を参照していただきたい。

1号土坑墓(第114・115図、第72表、P L. 54-1・2, 93)

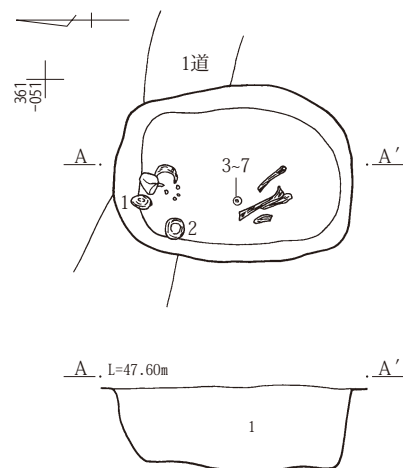
墓集中部の中央付近にある。1号道路状遺構北側溝に重複し、本土坑墓が新しい。

長さ1.33m、幅0.98mの長方形で、深さ0.46m、主軸方位はほぼ正しい南北方向である。

人骨・歯が出土し、その特徴から被葬者は壮年期後半から熟年期前半の年齢の女性であると推定される。

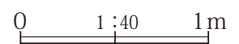
出土遺物は在地系土器皿2点、古銭5点であり、古銭は「唐國通寶」(南唐、959年初鑄)、「宋通元寶」(北宋、960年初鑄)、「祥符元寶」(北宋、1008年初鑄)、「元祐通寶」(北宋、1086年初鑄)、「淳祐元寶」(南宋、1241年初鑄)である。

2点の在地系土器皿は15世紀前半のものと思われる、これがこの墓の年代を示す遺物だと思われる。

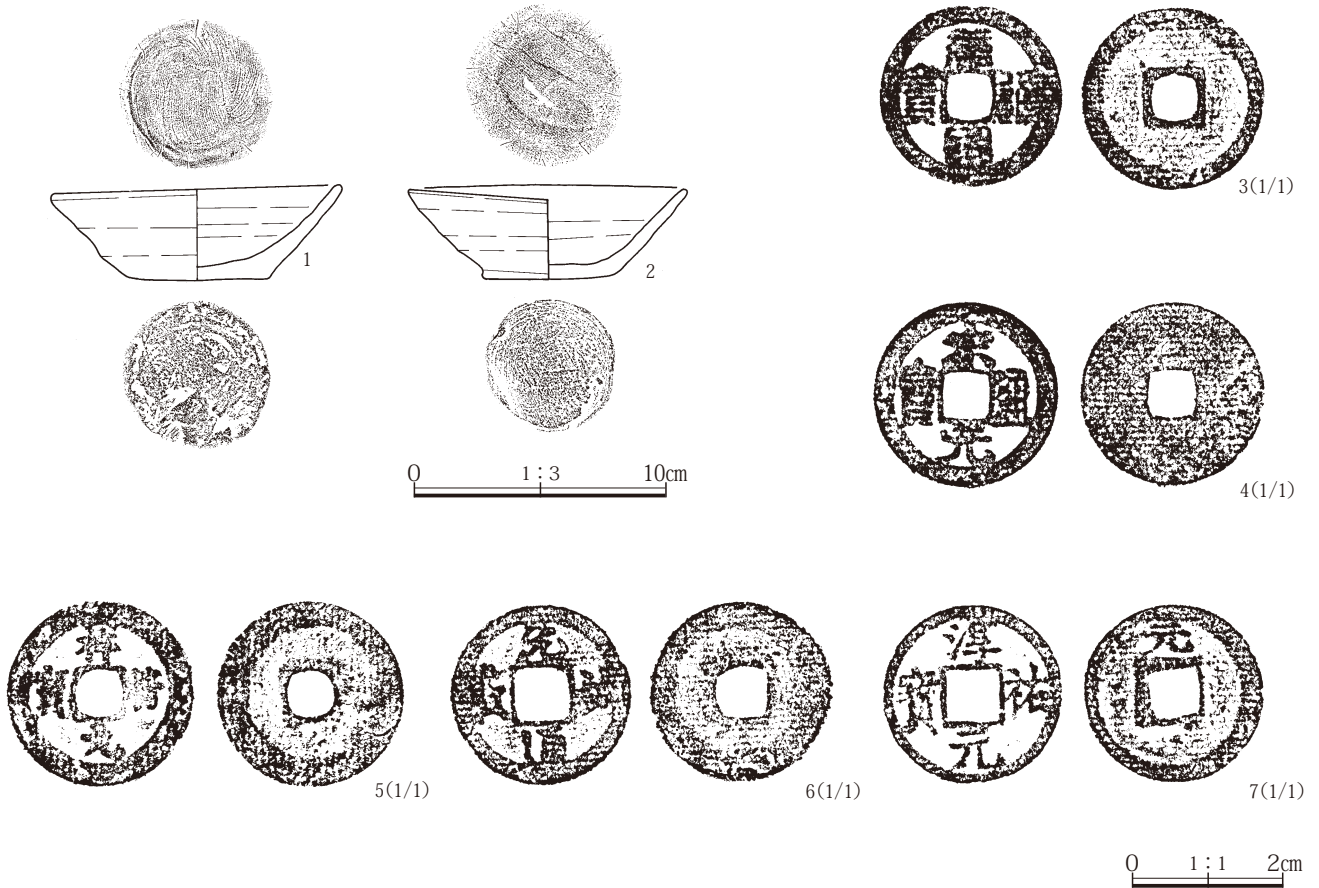


1号土坑墓

- 1. 黄褐色土 ロームブロック(φ10mm)、黒色土ブロック(φ10mm)を斑状に含む。礫(φ5～10mm)を少し含む。底面付近から古銭、人骨、土器、石(φ100mm)が出土。縮まり弱く、粗。



第114図 1号土坑墓平断面図



第115図 1号土坑墓出土遺物

2号土坑墓(第116・117図、第72表、P L. 54-3・4, 93)

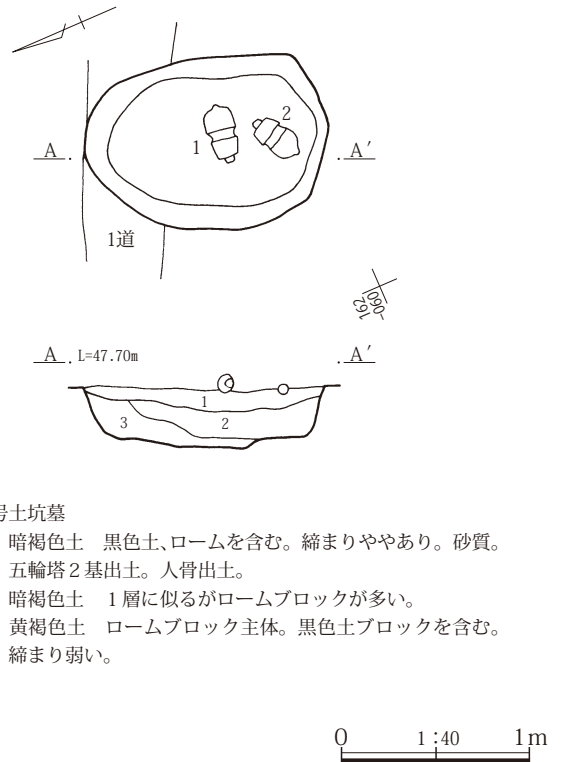
墓集中部の西半にある。1号道路状遺構北側溝と重複し、本土坑墓が新しい。

長さ1.30m、幅0.90mの楕円形で、深さは0.30m、主軸方位はN-18°-Eである。

骨の残りは悪く、出土量も少なかったが、歯は9本残っていた。その特徴から被葬者は壮年期後半から熟年期前半の女性であると推定される。

出土遺物は、確認面から五輪塔の空風輪が2点出土したのみであり、埋土からは何も出土していない。

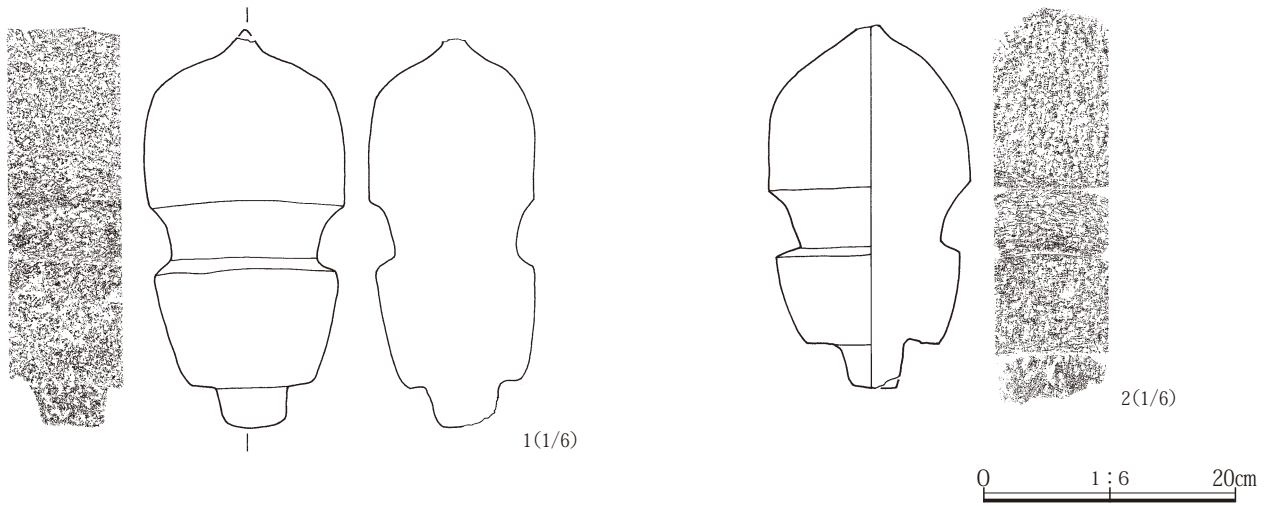
出土遺物が五輪塔しかないので、時期を推定する根拠に乏しいが、墓集中部の中にあり、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものと思われる。



2号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。締まりややあり。砂質。五輪塔2基出土。人骨出土。
2. 暗褐色土 1層に似るがロームブロックが多い。
3. 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土ブロックを含む。締まり弱い。

第116図 2号土坑墓平断面図



第117図 2号土坑墓出土遺物

3号土坑墓(第118図、P L. 54-5・6)

墓集中部の西半にある。1号道路状遺構南側溝と重複し、本土坑墓が新しい。

長径1.29m、短径1.15mの不整な円形で、深さは0.23m、主軸方位はN-52°-Eである。

底面から人骨が出土している。それらは下顎骨、頭蓋骨、大腿骨などであるが、残りはきわめて悪い。歯は4本が出土し、その特徴から被葬者は老年期の女性と推定される。

出土遺物がないため時期は特定できないが、墓集中部の中にあり、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものと思われる。

4号土坑墓(第118・119図、第72表、P L. 54-7・8, 93)

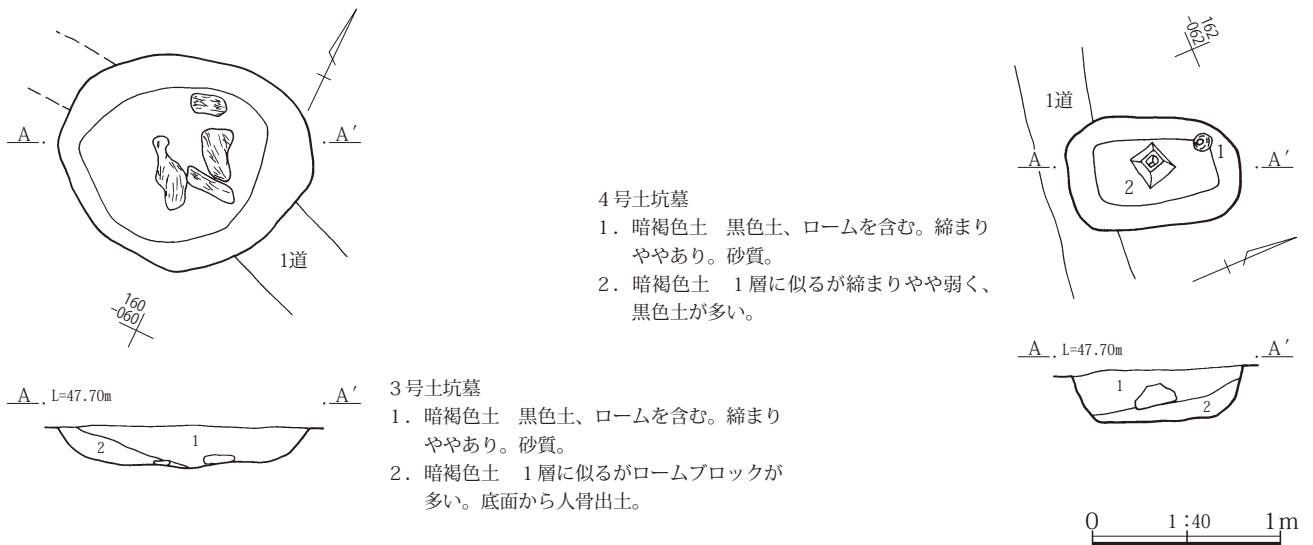
墓集中部の西半、3号土坑墓のすぐ西側にある。1号道路状遺構南側溝と重複し、本土坑墓が古い。

長さ0.91m、幅0.59mの長方形で、深さは0.32m、主軸方位はN-19°-Eである。

骨は微細な破片になったものが少量見られるだけで、取り上げるほど良好なものは見られなかった。

出土遺物は、埋土から在地系土器皿1点と五輪塔の火輪1点が出土している。

出土した在地系土器皿は14世紀後半～末のものと思われる、それが墓の年代を示すと考えられる。



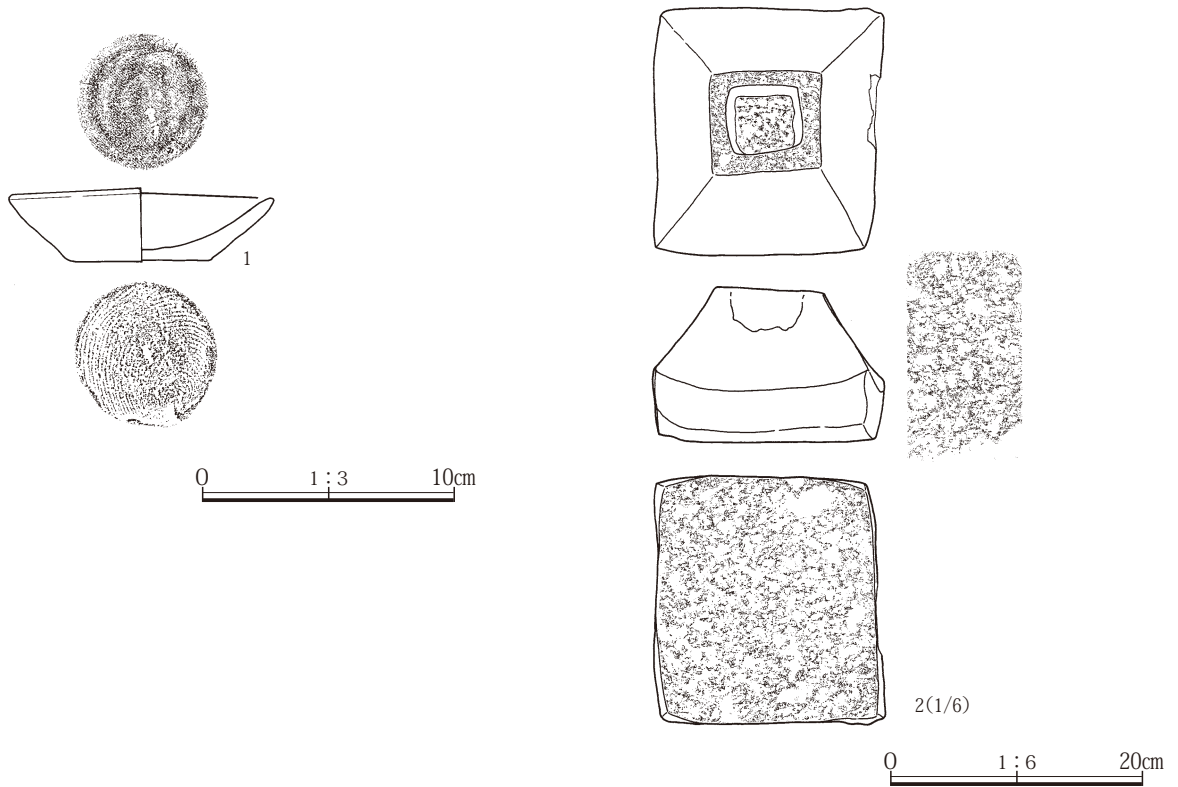
4号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。締まりややあり。砂質。
2. 暗褐色土 1層に似るが締まりやや弱く、黒色土が多い。

3号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。締まりややあり。砂質。
2. 暗褐色土 1層に似るがロームブロックが多い。底面から人骨出土。

第118図 3・4号土坑墓平断面図



第119図 4号土坑墓出土遺物

5号土坑墓(第120図、第72表、P L. 55-1～3, 94)

墓集中部の中央付近にある。1号道路状遺構南側溝、81号土坑と重複する。本土坑墓が新しい。この81号土坑も人骨が出土していることから、これも本来は土坑墓に分類すべき遺構であると考えられる。

長さ0.78m、幅0.64mの楕円形で、他の土坑墓に比べてやや小さい。深さは0.21m、主軸方位はN-16°-Eである。

骨は残りが悪く、形のまま取り上げるのは困難であった。部位が分かるものは大腿骨の一部と思われるものが残る程度であり、歯も残っていなかったことから、被葬者の性別・年齢等は不明である。

遺物は確認面から五輪塔の水輪1点が出土しているほか、人骨の周辺から古銭が3点出土しており、その内訳は「治平元寶」(北宋、1064年初鑄)、「紹聖元寶」(北宋、1094年初鑄)、「永樂通寶」(明、1408年初鑄)である。

「永樂通寶」が出土していることから15世紀以降のものであるが、墓集中部の中にあることから、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものであろう。

6号土坑墓(第120図、第73表、P L. 55-4, 94)

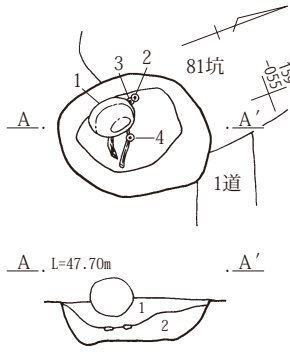
墓集中部の中央付近にある。1号道路状遺構南側溝と重複し、本土坑墓が新しい。

長さ0.99m、幅0.86mの不整形で、深さは0.25m、主軸方位はN-16°-Eである。

骨は頭蓋骨の微細な骨片が多数と、歯5点が残っていた。歯の特徴から、被葬者は青年期から壮年期の女性と推定される。

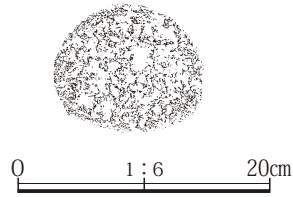
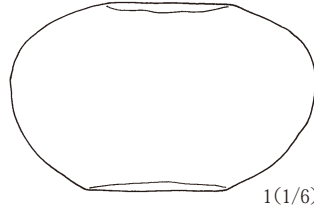
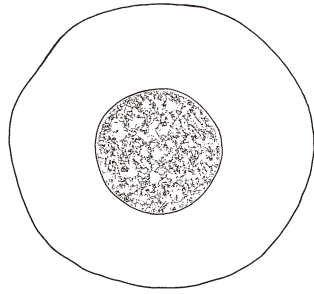
出土遺物は古銭6点で、6点が癒着する形で底面付近から出土した。その内訳は「宋通元寶」(北宋、960年初鑄)、「祥符元寶」(北宋、1008年初鑄)、「大觀通寶」(北宋、1107年初鑄)、「洪武通寶」(明、1368年初鑄)、「永樂通寶」(明、1408年初鑄)が各1点と、鏽がひどく銭文不明のものが1点である。

「永樂通寶」が出土していることから15世紀以降のものであるが、墓集中部の中にあることから、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものであろう。

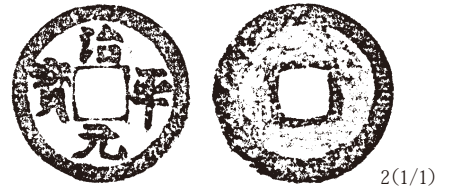


5号土坑墓

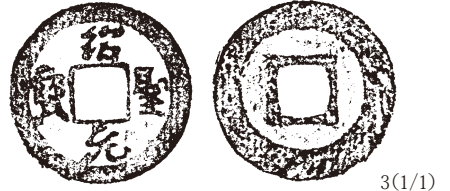
1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。縮まりややあり。砂質。
2. 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土ブロックを含む。縮まり弱い。



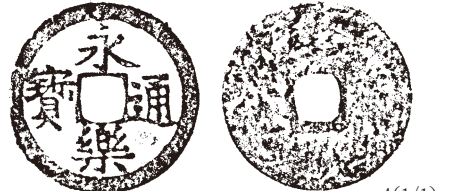
0 1:6 20cm



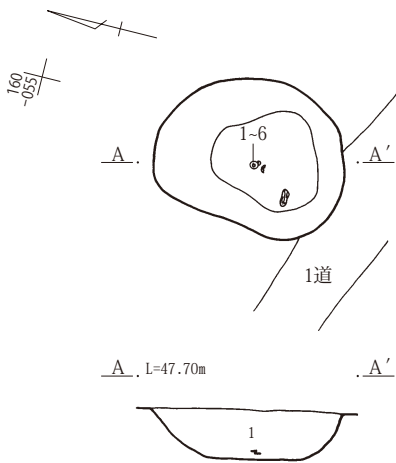
2(1/1)



3(1/1)



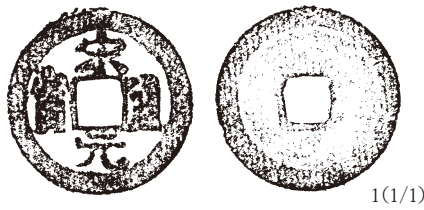
4(1/1)



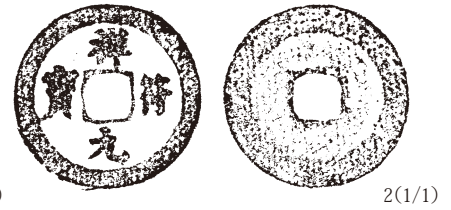
6号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。縮まりややあり。砂質。

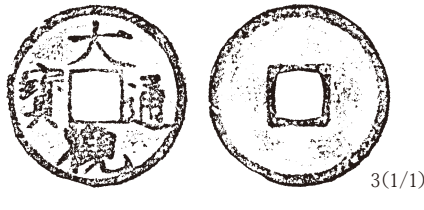
0 1:40 1m



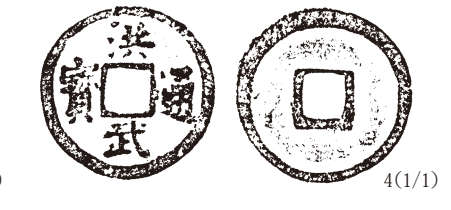
1(1/1)



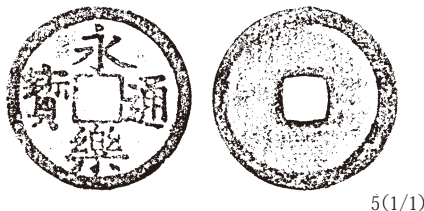
2(1/1)



3(1/1)



4(1/1)



5(1/1)



6(1/1)

0 1:1 2cm

第120図 5・6号土坑墓平断面図・出土遺物

7号土坑墓(第121図、第73表、P L. 55-5, 94)

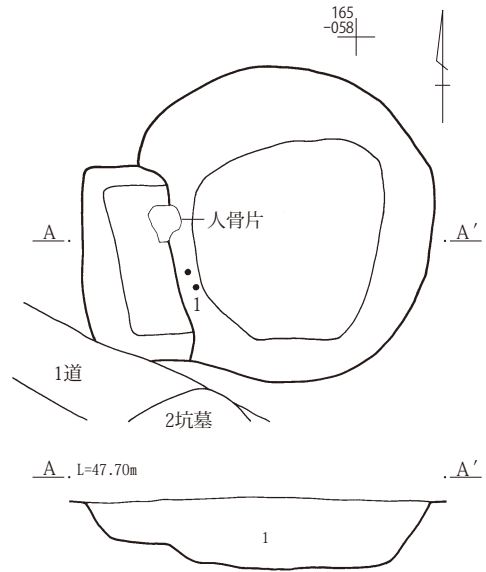
墓集中部の西半にある。2号土坑墓のすぐ北側で、1号道路状遺構北側溝とわずかに重複する。新旧関係は不明である。

長さ1.85m、幅1.67mで、円形の土坑の西側に方形の張り出し部が付くような形態である。深さ0.38m、最も長い部分を主軸とすると、その方位はほぼ正しい東西方向である。

頭蓋骨の微細破片が多数と歯が出土している。歯の特徴から、被葬者は青年期～壮年期の女性と考えられる。

掲載した出土遺物は古銭1点のみで、「永楽通寶」(明、1408年初鑄)である。

「永楽通寶」が出土していることから15世紀以降のものであるが、墓集中部の中にあることから、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものであろう。



7号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。縮まりややあり。砂質。

8号土坑墓(第122・123図、第73表、P L. 55-6～8, 94)

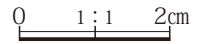
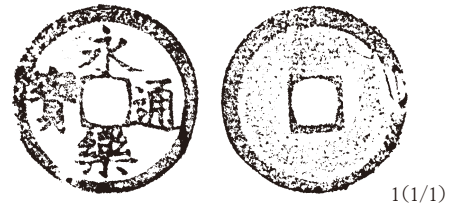
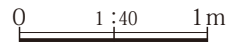
墓集中部の北西部にある。直接重複する遺構はないが4号周溝墓の内側にあり、本土坑墓が新しいと思われる。

長さ1.10m、幅0.82mのやや歪んだ楕円形で、深さは0.32m、主軸方位はN-6°-Eである。

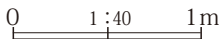
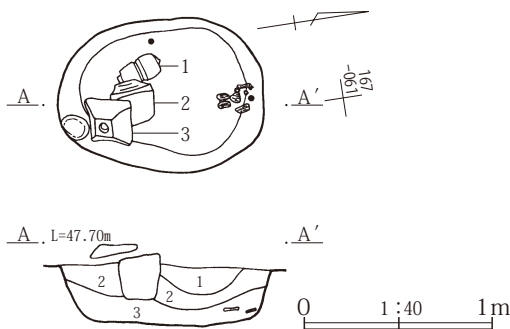
頭蓋骨の微細破片のほか、歯が出土している。歯の特徴から、被葬者は壮年期～熟年期の女性と推定される。

出土遺物は五輪塔の空風輪1個、火輪2個が出土しているのみである。

時期を示す遺物はないが、墓集中部の中にあることから、周囲の土坑墓同様、15世紀のものであろう。

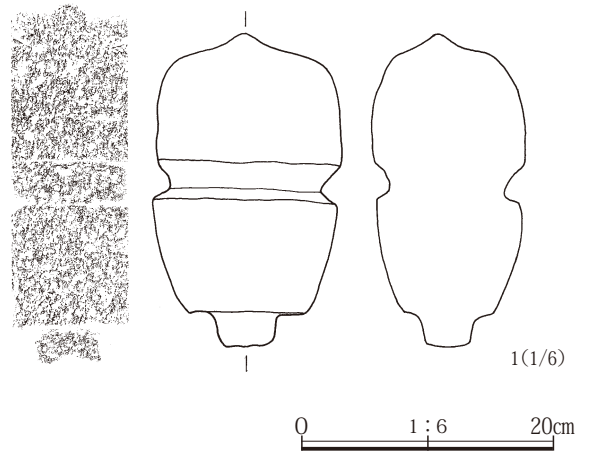


第121図 7号土坑墓平断面図・出土遺物

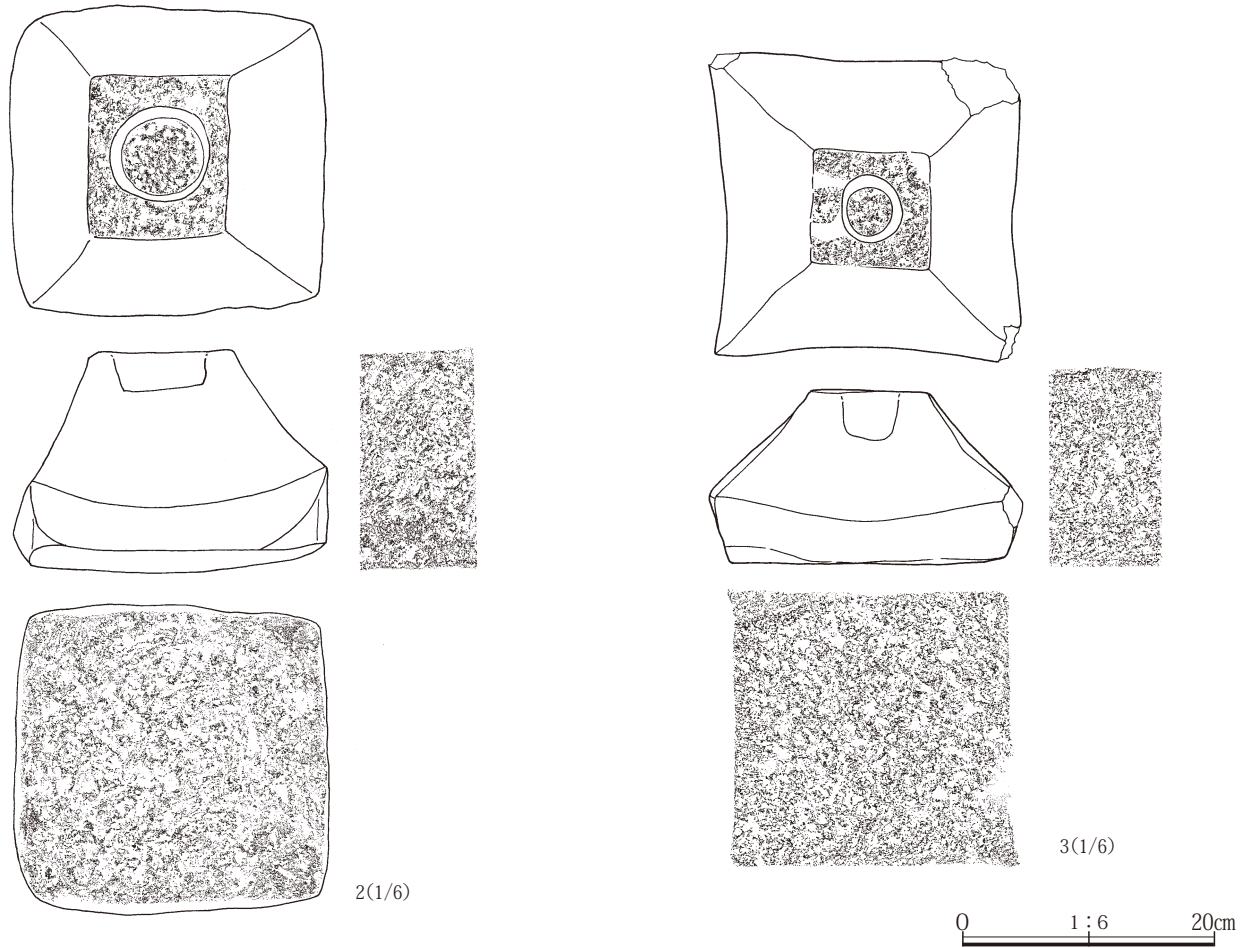


8号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。縮まりあり。
2. 暗褐色土 1層より少し明るい。黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ10mm)を含む。縮まりあり。
3. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を含む。縮まり弱い。



第122図 8号土坑墓平断面図・出土遺物(1)



第123図 8号土坑墓出土遺物(2)

9号土坑墓(第124・125図、第73表、P.L. 56-1・2, 94)

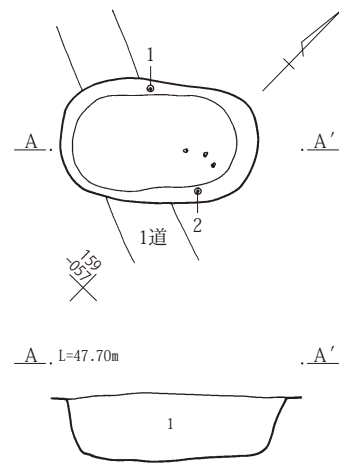
墓集中部の中央やや西寄りにある。1号道路状遺構南側溝と重複し、本土坑墓が新しい。

長さ1.15m、幅0.73mの隅の丸い長方形で、深さは0.37mである。主軸方位はN-48°-Eで、他の土坑墓に比べて東への振れが大きい。

歯のほか、細片となった骨が出土した。歯の特徴から少年期の男性と推定される。

出土遺物は古銭2点で、「熙寧元寶」(北宋、1068年初鑄)、「元豊通寶」(北宋、1078年初鑄)が土坑墓の両脇から出土している。

出土遺物は宋銭が2点あるのみであり、これは墓の年代を直接示すものではない可能性が高い。墓集中部の中にあることから、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものであろう。



9号土坑墓

- 1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。黒色土ブロック(φ10~25mm)、ロームブロック(φ10~30mm)を斑状に含む。縮まりあり。



第124図 9号土坑墓平面断面図



第125図 9号土坑墓出土遺物

10号土坑墓(第126・127図、第73表、P L. 56-3・4, 94)

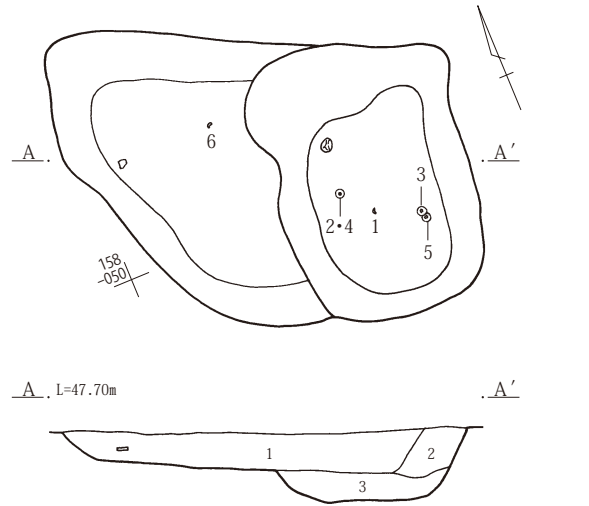
墓集中部のほぼ中央にある。重複する遺構はないが、1号道路状遺構の路面に当たる部分にある。

調査では長さ2.13m、幅1.48mの不整な台形の全体を土坑墓としたが、土層から見て、本来は東側の長さ1.48m、幅1.12mの長方形の部分に土坑墓であり、そこに浅い別の土坑が重複したものと考えられる。深さは0.39mで、本来の土坑墓と考えられる部分の主軸方位はN-10°-Eである。

歯1点と細片となった骨が数点出土するだけである。歯は1本のみなので、推定は困難であるが、その特徴からは壮年期～熟年期の男性の可能性が考えられる。

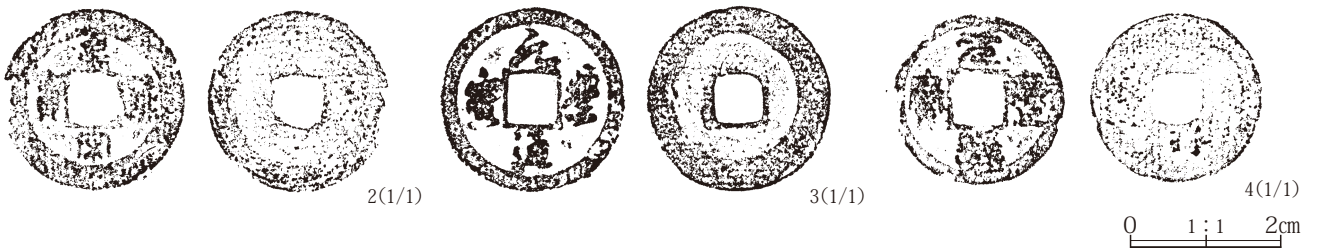
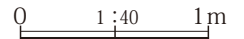
出土遺物は古銭6点で、その内訳は「皇宋通寶」(北宋、1038年初鑄)2点、「元豊通寶」(北宋、1078年初鑄)2点、「元符通寶」(北宋、1098年初鑄)1点、不明1点である。不明の1点は鉄銭で「寛永通寶」と考えられ、とすればこの遺物のみ時期が新しくなるが、これは前述の浅い土坑の部分から出土しており、その点からもやはりこの土坑は別の遺構と考えた方がよいと思われる。

その「寛永通寶」を除けば、出土しているのは宋銭のみであり、これは墓の年代を直接示すものではない可能性が高い。これも墓集中部の中にあるので、周囲の土坑墓同様、15世紀代のものであろう。



10号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。黒色土ブロック(φ10~20mm)を多量に含む。締まりあり。
2. 褐色土 黒色土を含む。ローム粒を多量に含む。締まりやや弱い。
3. 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を少量含む。締まり弱い。古銭、人骨が出土。



第126図 10号土坑墓平面図・出土遺物(1)



第127図 10号土坑墓出土遺物(2)

14号土坑墓(第128・129図、第73・74表、P L. 57-1・2, 94)

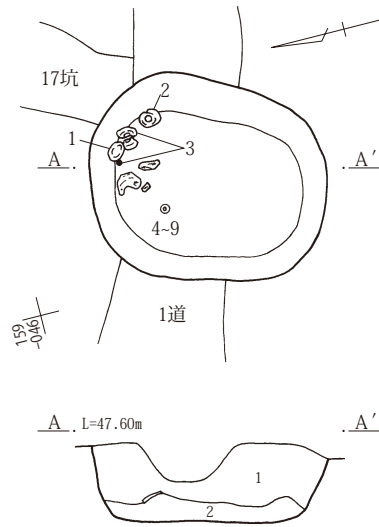
墓集中部の中央やや東寄りにある。1号道路状遺構北側溝、17号土坑と重複し、本土坑墓が最も古い。

長さ1.26m、幅1.07mの隅の丸い長方形で、深さは0.42m、主軸方位はN-18°-Eである。

歯の他に、頭蓋骨・肢骨の細片が多数出土している。歯の残存度は悪く、老年期のものと思われるが、性別は不明である。

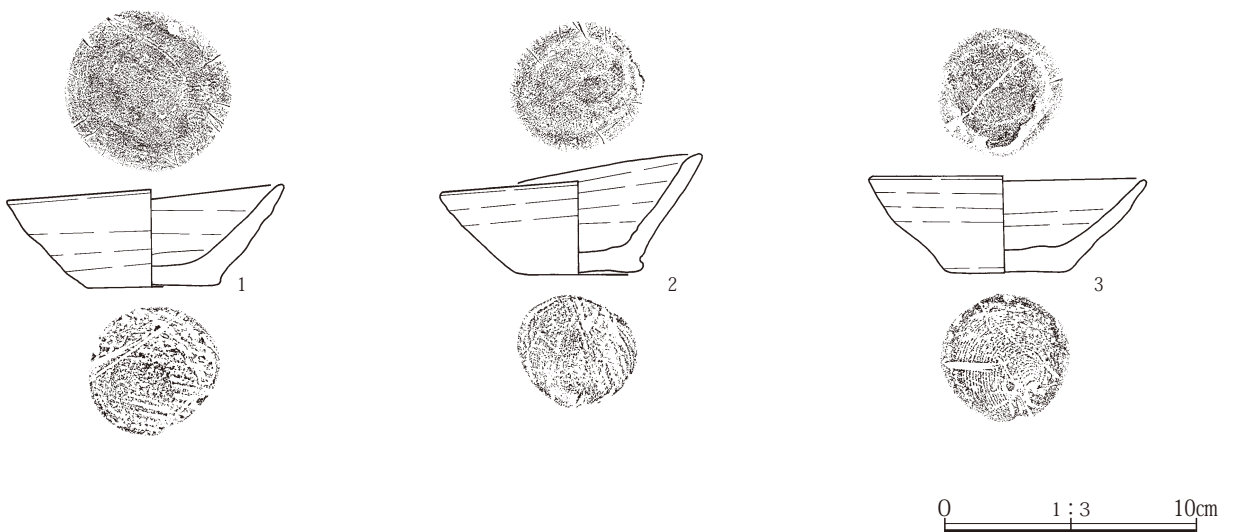
出土遺物は在地系土器皿3点と古銭6点である。古銭は「不明」、「至道元寶」(北宋、995年初鑄)、「咸平元寶」(北宋、998年初鑄)、「皇宋通寶」(北宋、1038年初鑄)、「元豊通寶」(北宋、1078年初鑄)、「政和通寶」(北宋、1111年初鑄)である。

出土した在地系土器皿は、1と2は15世紀前半、3は14世紀後半～末と考えられ、1・2が墓の時期を示す遺物と考えられる。

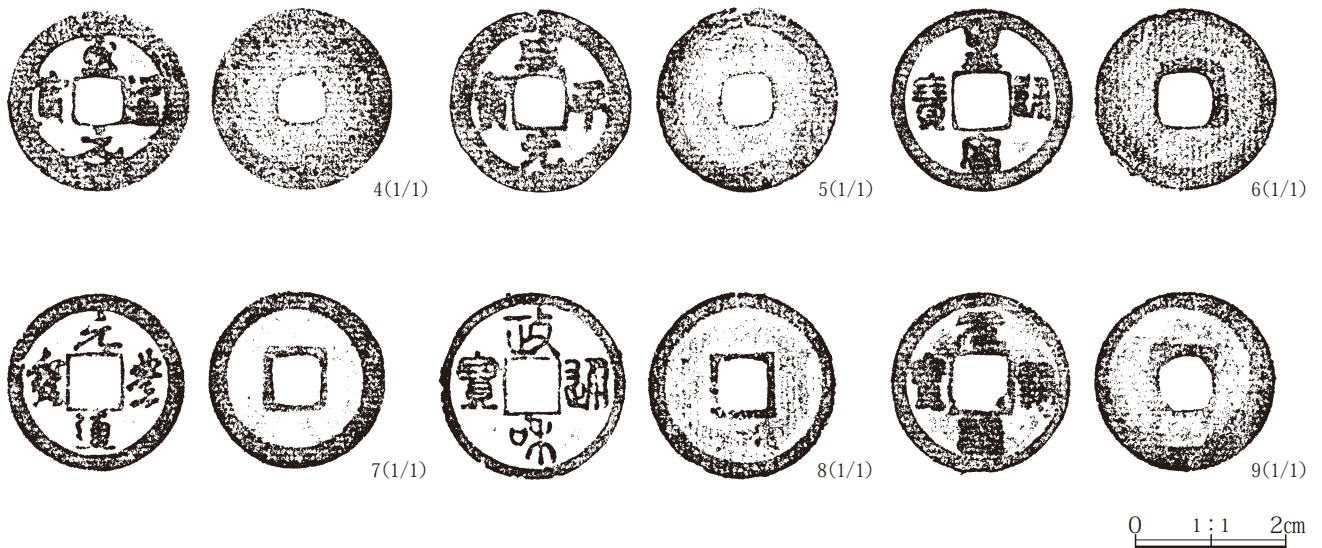


14号土坑墓

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。上部にロームブロック(φ10～15mm)を多量に含む。下部に黒色土を多量に含む。縮まりあり。
2. 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を少量含む。縮まり弱い。



第128図 14号土坑墓平断面図・出土遺物(1)



第129図 14号土坑墓出土遺物(2)

15号土坑墓(第130図、第74表、P L. 57-3・4, 95)

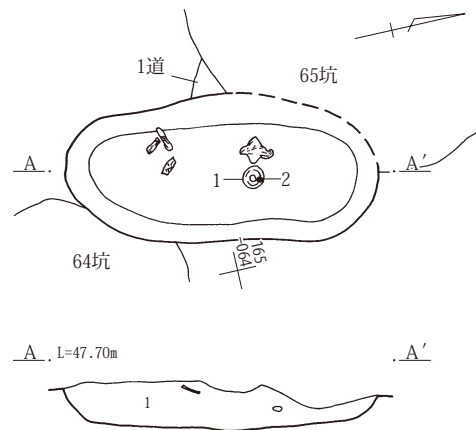
墓集中部の西側にある。1号道路状遺構北側溝、64・65号土坑と重複し、本土坑墓が最も古い。

長さ1.65m、幅0.78mの長楕円形で、深さは0.21m、主軸方位はN-12°-Eである。

細片となった骨多数と、歯が出土している。歯の特徴から被葬者は青年期～壮年期前半の女性と推定される。

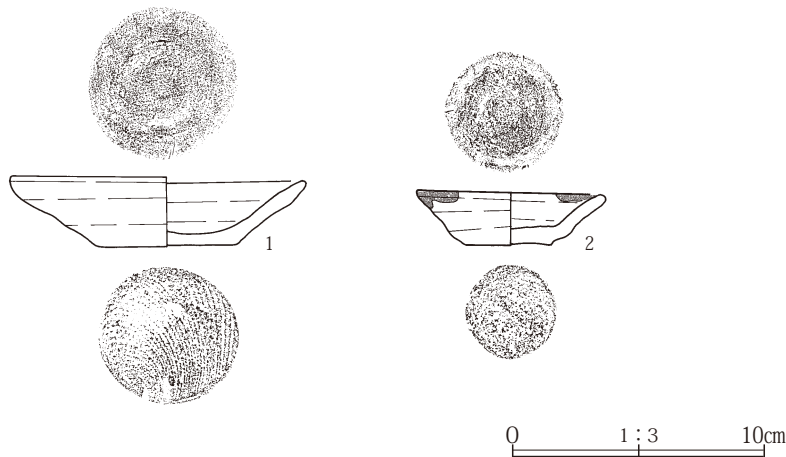
出土遺物は在地系土器皿2点である。

この皿はいずれも15世紀前半と考えられ、これが墓の年代を示すと考えられる。



15号土坑墓

- 1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。
ロームブロック(φ 1mm)を少量含む。
締まり弱い。土層中に人骨が残存する。



第130図 15号土坑墓平断面図・出土遺物

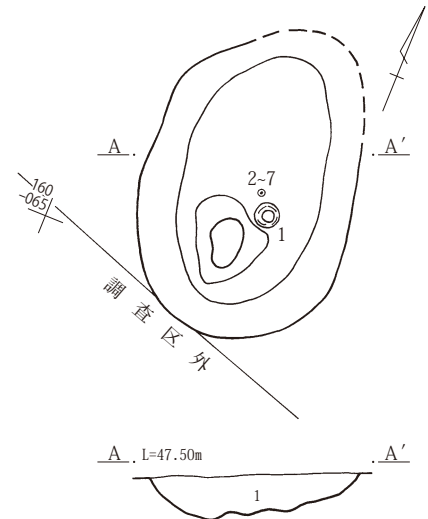
16号土坑墓(第131図、第74表、P L. 57-5・6, 95)

墓集中部の西側にある。人骨は出土していないが、在地系土器皿、古銭の出土から土坑墓と判断したものである。62号土坑の下層にある。

長さ1.61m、幅1.12mの楕円形で、深さは0.24m、主軸方位はN-16°-Wである。

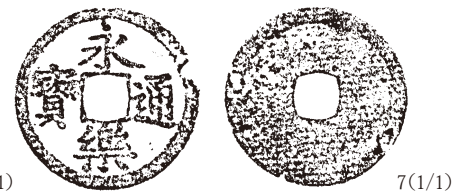
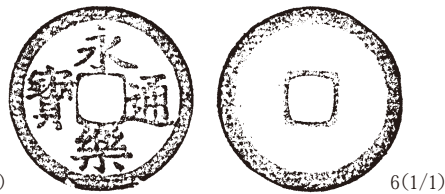
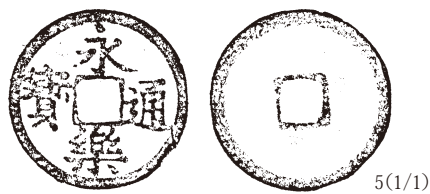
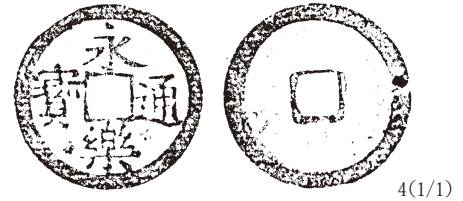
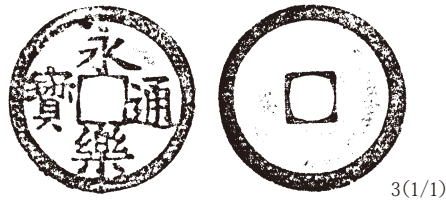
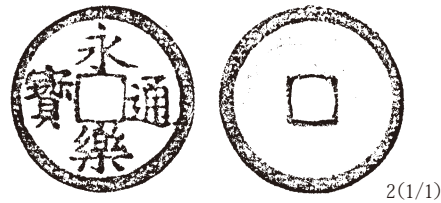
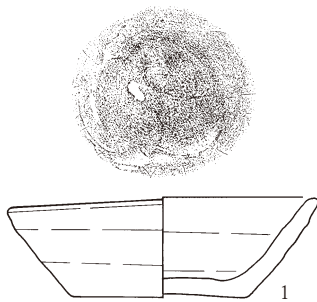
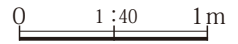
出土遺物は在地系土器皿1点、古銭6点である。古銭はすべて「永楽通寶」(明、1408年初鑄)である。

出土した在地系土器皿は15世紀中頃のものと思われる、「永楽通寶」の時期とも矛盾はなく、これがこの墓の年代と思われる。



16号土坑墓

1. 暗褐色土 ローム、黒色土を含む。縮まり弱い。土器、古銭出土。



第131図 16号土坑墓平面図・出土遺物

1号火葬墓(第132図、P L. 57-7・8)

墓集中部の東側にあり、2号火葬墓と並んでいる。3号周溝墓の周溝とわずかに重複し、本火葬墓が新しい。

長さ1.15m、幅0.85mの楕円形で、深さは0.31m、主軸方位はN-19°-Eである。

焼骨、焼土、炭化物が多く見られ、火葬人骨を埋葬し

ていると思われる。ただし、焼骨の残存度は非常に悪く、平面図に位置は記入できたものの、取り上げることはできなかった。

出土遺物はない。

時期は不明であるが、墓集中部の土坑墓と近い時期、15世紀代のものであるのが妥当であろう。

2号火葬墓(第132図、P L. 58-1・2)

墓集中部の東側にあり、1号火葬墓と並んでいる。3号周溝墓と重複し、本火葬墓が新しい。

長さ1.10m、幅0.73mの丸みを帯びた長方形で、深さは0.29mである。主軸方位はN-13°-Eである。

内部から焼骨のほか焼土、炭化物が出土しており、火葬人骨を埋葬したものと思われる。焼骨の残存度は非常に悪く、平面図に位置は記入できたものの、取り上げることはできなかった。

出土遺物はない。

時期は不明であるが、墓集中部の土坑墓に近い時期、15世紀代のものと考えるのが妥当であろう。

3号火葬墓(第132図、P L. 58-3)

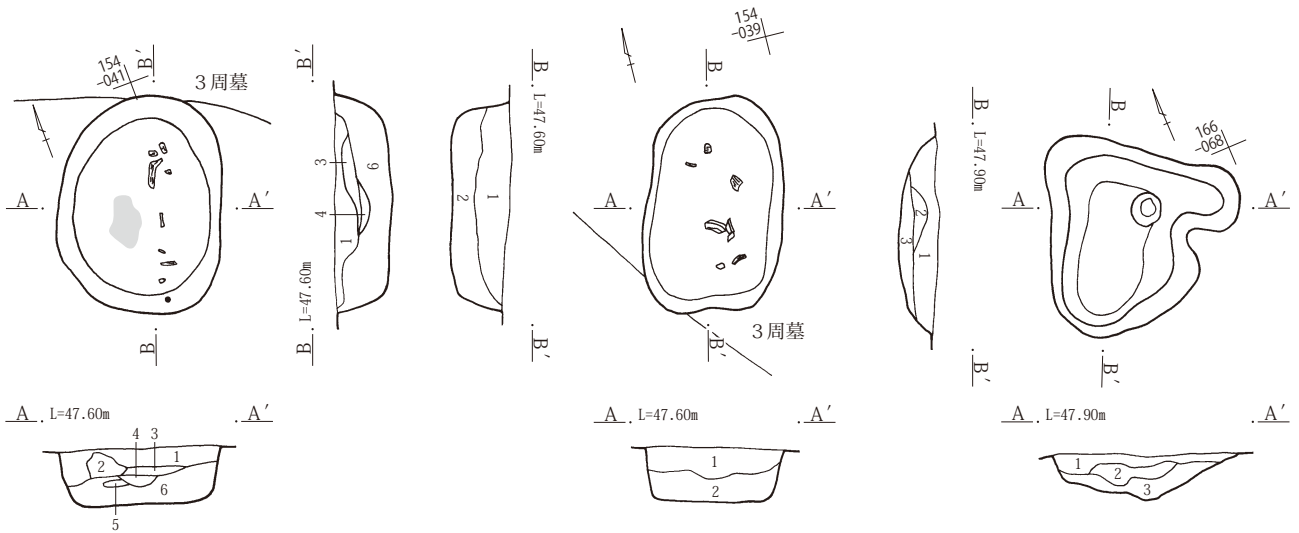
墓集中部の西端にある。4号周溝墓の周溝に重複し、本火葬墓が新しい。1号道路状遺構の硬化面を剥がした

あとにこの火葬墓が見つかったので、この道路状遺構よりも火葬墓が古い。

長さ1.02m、幅1.10mの不整形であるが、東側の部分は非常に浅くなるので、本来は主軸方位N-35°-Eの長方形に近い形を意識したものであろう。深さは0.24mである。

骨片、炭化物は出土するが、焼土はない。骨はごく微細な破片となっており、取り上げることはできなかった。出土遺物はない。

時期は不明である。墓集中部の土坑墓に近い時期、15世紀代のものと考えるのが妥当と思われるが、1号道路状遺構の硬化面下層から見つかったので、そのなかでもやや遡る時期を想定するべきであろう。



1号火葬墓

1. 暗黄褐色土 炭化物をやや多く含む。ローム粒、黒色土を含む。底面から骨、焼土が出土。締まり弱い。
2. 橙色土 焼土主体。ローム粒、炭化物流を多く含む。締まりややあり。
3. 骨片、炭化物集中部 地山ロームを含む。焼骨、炭化物を非常に多く含む。
4. 暗褐色土 ローム、焼土、炭化物を含む。
5. 炭化物集中部
6. 暗黄褐色土 1層に似る。黒色土、ロームを斑状に含む。締まりやや弱い。

2号火葬墓

1. 暗黄褐色土 ローム粒、黒色土、焼土、炭化物を含む。焼骨片を含む。
2. 明暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を斑状に含む。

3号火葬墓

1. にぶい黄褐色土 黒色土、ローム粒を含む。明黄褐色土ブロック(φ10~25mm)を含む。炭化物片、骨片を少量含む。
2. 暗黄褐色土 黒色土を含む。ローム粒を少量含む。明黄褐色土ブロック(φ10mm)を含む。炭化物片を多量に含む。骨片を少量含む。締まりあり。
3. 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を少量含む。炭化物片、骨片を少量含む。締まり弱い。

第132図 1~3号火葬墓平面断面図

3 土坑

本項で土坑として報告するのは93基である。そのうちの6基は南調査区第1・2面、87基は北調査区にある。

土坑からの出土遺物は少なく時期判定が困難なものが多いが、本項ではそのような時期の特定できないものも含めて扱っている。そのため、93基の土坑のすべてが中近世に属すると断定できたわけではない。また、以下に述べるように、骨などが出土することから、「土坑墓」「火葬墓」として扱った方がよいものも含まれているが、これらについては混乱を避ける意味から、調査時と同じ「土坑」という名称のまま報告することにする。

用途を示すような痕跡を残す土坑は少なく、大部分は用途不明である。土層・形態も様々で、一律に分類することは困難であるが、1層で埋まるものが多く、それらは人為的に埋められた可能性が高い。形態には①円形のもの、②長方形かそれに近い楕円形のもの、③不整形のもの3種類がある。①と②はその形態に意図があると思われるが、①は、4号土坑が多くの遺物を出土し廃棄土坑と思われる以外は、遺物も少なく用途は不明である。②は、前述の墓と思われるもののほか、各種の貯蔵用の穴が多数含まれているものと思われ、中にはいわゆる「芋穴」に類するもので近代にまで下るものも含まれている可能性がある。③はその形態に意図があったとは考えがたいものである。そのうち83号土坑は多くの遺物を出土し、廃棄土坑と考えられ、その他の土坑も同様な用途が想定されるが、遺物の出土は少なく確定できない。

各土坑の位置や大きさなどは第34・35表に上げたとおりであり、以下では注目される土坑、あるいは注意が必要な土坑についてのみ解説を加える。

4号土坑(第133～135図、第74・75表、P L. 59-2・3, 95)

北調査区南部中央にある。ほぼ円形で長径1.52m、短径1.42m、深さは0.28mである。浅い土坑であるにもかかわらず、多くの遺物が出土し、陶磁器、在地系土器、釘などの鉄製品、「寛永通寶」などが見られる。陶磁器、在地系土器の時期はほぼ18世紀中頃～後半に収まるものと考えられる。出土状態には特殊な点はなく、各種のゴミを埋めた廃棄土坑であろう。

5・6号土坑(第136図、第75表、P L. 58-5, 59-4)

北調査区東半部の南端近くにある。両者は重複しているが、調査の際に重複部分を掘りすぎてしまい、平面形が不明瞭になってしまった。断面観察から5号土坑が古いことを確認している。5号土坑は長さ2.28m、幅は現存長で1.90mの長方形と推定され、深さは0.40mである。6号土坑はやや不整形で、長さ2.30m、幅2.20m、深さ0.32mである。いずれの土坑からも遺物が出土している。遺物の中には近現代のものも認められたので、近現代の土坑である可能性もあるが、周辺には攪乱が多いため混入の可能性もあり、ここでは江戸時代以降という広い期間を考えておきたい。

15号土坑(第137図、第76表、P L. 59-9・10, 95)

人骨・歯や銅銭が出土したことから、土坑墓の可能性が高いものである。埋土の中層から平たい礫が並べられたように出土したことが注目される。長径1.18m、短径0.78mの楕円形で、深さは0.56m、主軸方位はN-7°-Eである。歯の特徴から被葬者は思春期の女性と考えられる(詳細は226・227ページ参照)。遺物は「祥符通寶」(北宋・1008年)、「紹聖元寶」(北宋、1094年初鑄)、「洪武通寶」(明、1368年初鑄)が出土した。これらの古銭は土坑の年代を直接示さない可能性が強いので、土坑の時期は周辺の土坑墓と同様、15世紀代と考えられる。

47号土坑(第141図、P L. 60-12)

北調査区西部中央やや南にある。長径0.85m、短径0.75mの楕円形で、深さは0.22mである。人骨らしい骨片が見られたことから、墓である可能性が指摘できるものであるが、骨の残存度は悪く、取り上げることはできなかった。埋土には炭化物を多く含むので、墓だとすれば火葬墓であると思われる。ただし、136ページで前述したように、この土坑は墓集中部から外れており、その点を重視すれば、少なくとも中世の墓ではない可能性が強いと思われる。遺物は出土していないので、時期は不明である。

64号土坑(第144図、P L. 61-7)

北調査区西部の南端近くにある。4号周溝墓、1号道路状遺構北側溝よりは新しいが、15号土坑墓、4号井戸との新旧関係は不明確である。長径1.17m、短径0.76mのやや歪んだ楕円形で、深さは0.25mである。焼骨が出土し、焼土・炭化物が見られることから火葬墓である可

能性が高いが、被葬者の性別・年齢等は不明である(詳細は226～228ページ参照)。遺物が出土していないので時期は不明だが、墓集中部にあるので、周囲の土坑墓と同じ15世紀代と考えられる。

81号土坑(第143図、第76表、P L. 62-5・6, 95)

北調査区西部の南端近くにある。5号土坑墓、60号土坑より古く、1号道路状遺構南側溝より新しい。5号土坑墓と重複する部分が広がっているため、長さ1.42m、幅0.86mの不整形だが、5号土坑との重複部分がやや不自然なので、この部分は崩れてしまった可能性が考えられ、本来は長方形だったと思われる。深さは0.26mである。人骨・歯・古銭が出土し、墓集中部にあることから、土坑墓と考えられる。被葬者は青年期の女性と推定されている(詳細は228ページ参照)。出土遺物は在地系土器

の皿1点、「皇宋通寶」(1038年初鑄)1点である。在地系土器皿は15世紀前半のものなので、周囲の土坑墓とほぼ同じ時期の墓であると考えられる。

83号土坑(第147～149図、第76・77表、P L. 62-8・9, 96)

北調査区西部の南端近くにある。4号周溝墓よりも新しい。上に近現代の人家の礎石が3基のっていた。長さ2.56m、幅1.90mの不整形で、深さは0.24mである。遺物が数多く出土しているが、特殊な出土状態ではなく、各種のゴミを埋めた廃棄土坑であろう。遺物の中に明らかな近現代遺物はなく、18世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

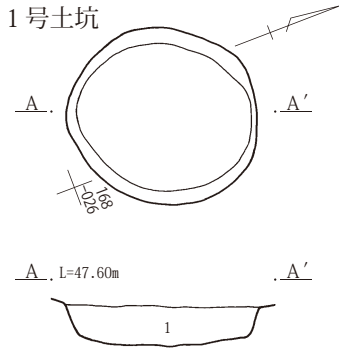
第34表 中・近世土坑一覧表(1)

番号	調査区	所在 グリッド	主軸方位	大きさ	備考
				長辺×短辺×深さ(m)	
1	3区	165-025	N-22°-E	1.00×0.95×0.20	
2	3区	165-020	N-45°-E	1.48×1.38×0.51	3号土坑より新しい。
3	3区	165-020	N-57°-E	(1.28)×1.40×0.78	2号土坑より古い。
4	3区	155-025	N-46°-W	1.52×1.42×0.28	
5	3区	165-995	N-22°-E	2.28×(1.90)×0.40	
6	3区	165-995	N-72°-W	2.30×2.20×0.32	5号土坑より新しい。
7	3区	165-995	N-67°-W	(1.23)×0.80×0.22	
8	3区	165-000	N-76°-W	1.86×0.78×0.54	
9	3区	155-030	N-13°-E	0.78×0.43×0.18	
10	3区	155-030	N-38°-E	0.88×0.69×0.16	11号土坑より新しい。
11	3区	155-030	N-21°-E	0.92×(0.68)×0.10	10号土坑より古い。
12	3区	150-030	N-33°-W	0.88×0.66×0.29	89号土坑、1号道路状遺構北側溝より新しい。
13	3区	150-025	N-70°-W	0.85×0.80×0.28	1号道路状遺構北側溝より新しい。
14	3区	155-035	N-23°-E	1.03×0.76×0.27	
15	3区	155-040	N-7°-E	1.18×0.78×0.56	3号周溝墓より新しい。骨、歯出土。上層から石が並べられたように出土。
16	3区	160-040	N-16°-E	1.68×1.27×0.20	17号土坑より新しい。
17	3区	155-040	N-25°-E	(2.60)×0.46×0.28	16号土坑より古い。14号土坑墓、1号道路状遺構北側溝より新しい。
18	3区	160-045	N-85°-W	0.88×0.77×0.17	
19	3区	160-045	N-80°-E	0.76×0.63×0.22	
20	3区	150-030	N-74°-W	0.58×0.56×0.12	
21	2区	160-050	N-82°-W	1.54×0.60×0.09	
22	2区	160-055	N-72°-W	(0.96)×0.58×0.18	23号土坑より古い。
23	2区	160-050	N-72°-W	(1.17)×0.66×0.14	22・24号土坑より新しい。
24	2区	160-050	N-72°-W	1.46×0.72×0.27	23号土坑より古い。35号土坑とは新旧不明。
25	2区	160-050	N-81°-W	1.32×0.79×0.16	
26	2区	160-045	N-81°-W	1.40×1.02×0.11	2つの土坑の重複か。
27	2区	160-045	N-85°-W	0.88×0.55×0.10	30号土坑より新しい。
28	2区	160-045	N-74°-W	(1.32)×0.57×0.07	31号土坑より新しい。32号土坑とは新旧不明。
29	2区	160-045	N-78°-W	1.60×(0.48)×0.21	30・31号土坑より新しい。32号土坑とは新旧不明。
30	2区	160-045	N-76°-W	1.09×(0.42)×0.13	27・29号土坑より古い。
31	2区	160-045	N-11°-E	0.66×0.65×0.36	28・29号土坑よりも新しい。32号土坑とは新旧不明。
32	2区	160-050	N-74°-W	(0.96)×0.72×0.23	28・29・31号土坑とは新旧不明。
33	2区	160-050	N-68°-W	(0.58)×0.52×0.06	34号土坑よりは新しい。35・37号土坑とは新旧不明。

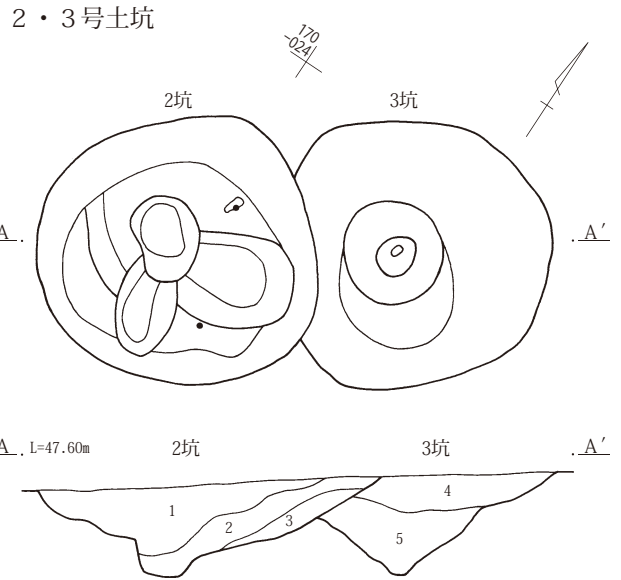
第3章 調査の成果

第35表 中・近世土坑一覧表(2)

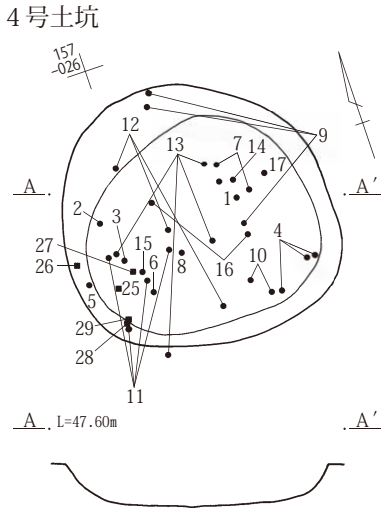
番号	調査区	所在 グリッド	主軸方位	大きさ		備考
				長辺×短辺×深さ(m)		
34	2区	160-050	N-83°-W	0.94×0.62×0.17		33号土坑より古い。
35	2区	160-050	N-81°-W	1.82×0.53×0.20		24・33号土坑とは新旧不明。36・37号土坑より新しい。
36	2区	160-050	N-76°-W	1.30×(0.62)×0.20		35号土坑より古い。
37	2区	160-050	N-81°-W	1.06×(0.35)×0.12		33号土坑とは新旧不明。35号土坑よりも古い。
38	2区	165-070	N-15°-E	1.73×0.85×0.31		5号周溝墓、1号道路状遺構南側溝より新しい。
39	2区	165-070	N-20°-E	(1.82)×1.01×0.37		40号土坑より古い。5号周溝墓より新しい。
40	2区	165-075	N-20°-E	1.63×0.65×0.29		39号土坑、5号周溝墓、1号道路状遺構南側溝より新しい。
41	2区	180-045	N-55°-W	2.85×2.68×0.45		2号周溝墓より新しい。
42	2区	195-005	N-13°-E	1.80×1.30×0.85		5号住居より新しい。
44	2区	170-050	N-57°-E	1.38×0.89×0.34		
45	2区	170-050	N-45°-E	1.42×0.81×0.17		
46	2区	170-050	N-70°-W	1.18×1.02×0.12		
47	2区	170-055	N-49°-E	0.85×0.75×0.22		骨片らしきもの出土。
48	2区	170-055	N-32°-E	0.94×0.89×0.29		50号土坑より新しい。
49	2区	165-040	N-45°-E	1.40×1.20×0.32		
50	2区	170-055	N-60°-W	0.95×0.65×0.27		48号土坑より古い。
51	2区	175-060	N-53°-W	0.88×0.75×0.24		
52	2区	175-055	N-34°-E	1.13×1.03×0.16		
53	2区	175-055		0.84×0.82×0.10		
54	2区	175-055	N-7°-E	1.26×1.12×0.18		
55 欠番(13号土坑墓に変更)						
56	3区	170-030	N-85°-E	0.98×0.66×0.22		
57	3区	150-030	N-26°-E	3.68×3.03×0.69		1号道路状遺構北側溝より新しい。
58	2区	165-055	N-32°-E	(0.77)×0.84×0.13		59号土坑より新しい。
59	2区	165-055	N-60°-W	1.03×0.85×0.19		58号土坑より古い。
60	2区	155-055		1.07×1.04×0.53		81号土坑より新しい。1号道路状遺構南側溝より新しい。
61	2区	160-055	N-80°-W	0.80×0.78×0.16		1号道路状遺構北側溝より新しい。
62	2区	155-060	N-38°-W	(2.70)×1.57×0.61		下層に16号土坑墓がある。
63	2区	165-060		1.56×1.52×0.45		4号周溝墓と重複。
64	2区	160-060	N-34°-E	1.17×0.76×0.25		4号周溝墓、1号道路状遺構北側溝より新しい。4号井戸、15号土坑墓とは新旧不明。炭化物・骨出土。
65	2区	165-065	N-69°-W	2.92×2.04×0.40		4号周溝墓、15号土坑墓、1号道路状遺構北側溝よりも新しい。
66	2区	160-065	N-17°-E	1.28×1.02×0.20		4号周溝墓より新しい。
67	2区	170-070		0.72×(0.50)×0.16		68号土坑より古い。
68	2区	170-070	N-68°-W	1.40×1.09×0.22		67号土坑より新しい。
69	2区	175-045	N-33°-E	1.88×1.26×0.47		3号井戸より新しい。
70 欠番(5号井戸に変更)						
71	2区	165-060	N-29°-E	1.20×(0.65)×0.31		72号土坑、4号周溝墓より新しい。
72	2区	165-060	N-27°-E	2.43×(1.16)×0.48		71号土坑より古い。73号土坑、4号周溝墓より新しい。
73	2区	165-060	N-60°-W	(1.19)×0.82×0.23		71・72号土坑より古い。4号周溝墓より新しい。
74	3区	155-035	N-72°-W	1.95×1.47×0.70		1号溝より古い。
75 欠番						
76	2区	175-060	N-83°-E	1.23×0.75×0.64		
77	2区	175-060	N-32°-W	0.58×0.42×0.35		
78	2区	170-060	N-76°-E	1.08×0.72×0.20		
79	2区	175-060	N-30°-E	1.03×0.93×0.29		
80	2区	160-040	N-11°-E	1.40×0.69×0.18		
81	2区	155-055	N-17°-E	1.42×0.86×0.26		1号道路状遺構南側溝より新しい。5号土坑墓、60号土坑より古い。頭骨、歯出土。
82	2区	160-060	N-68°-E	1.12×0.83×0.26		4号周溝墓、1号道路状遺構北側溝より新しい。
83	2区	165-065	N-14°-W	2.56×1.90×0.24		4号周溝墓より新しい。
84	2区	165-065	N-70°-W	1.59×0.69×0.30		4号周溝墓より新しい。
85	2区	160-060	N-11°-W	1.19×0.96×0.25		1号道路状遺構南側溝より古い。4号周溝墓より新しい。
87	3区	145-025		(1.40)×(1.05)×0.18		11・12土坑墓、88号土坑、16・17号集石より古い
88	3区	145-025		0.65×(0.62)×0.13		87号土坑より新しい。17号集石より古い。
89	3区	150-030	N-88°-W	1.88×0.88×0.31		1号道路状遺構北側溝より古い。上層に12号土坑がある。
100	2区	170-970	N-24°-E	1.97×1.66×0.56		
102	4区	170-975	N-21°-W	(1.15)×1.60×0.31		
106	4区	175-970	N-17°-E	1.63×1.38×0.21		
110	1-1区	150-155	N-8°-E	1.00×0.63×0.07		第1面
111	1-2区	150-155	N-89°-W	1.16×0.86×0.13		第1面
112	1-2区	155-120	N-55°-W	0.55×0.48×0.21		第2面
113	1-2区	160-125	N-47°-E	1.28×1.09×0.18		第2面
114	1-2区	155-130	N-40°-E	5.40×1.02×0.12		第2面
115	1-2区	155-150	N-60°-W	1.88×0.87×0.05		第2面



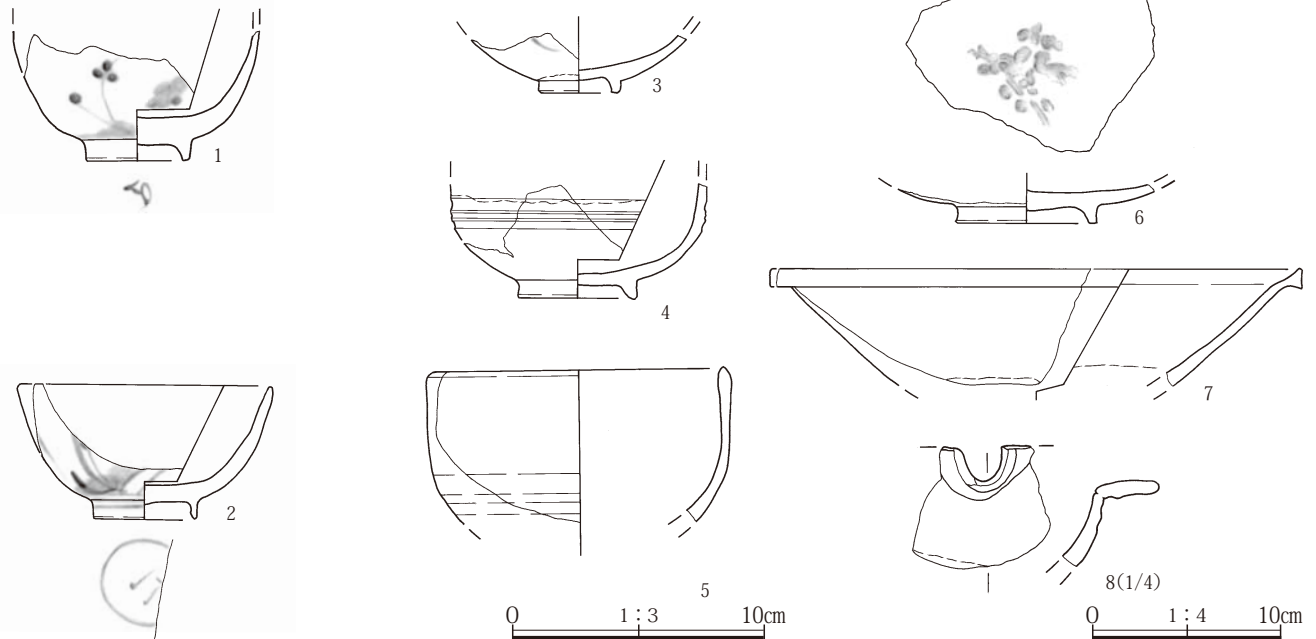
1号土坑
1. 暗黄褐色土 ローム、黒褐色土
ブロックを含む。縮まり弱い。



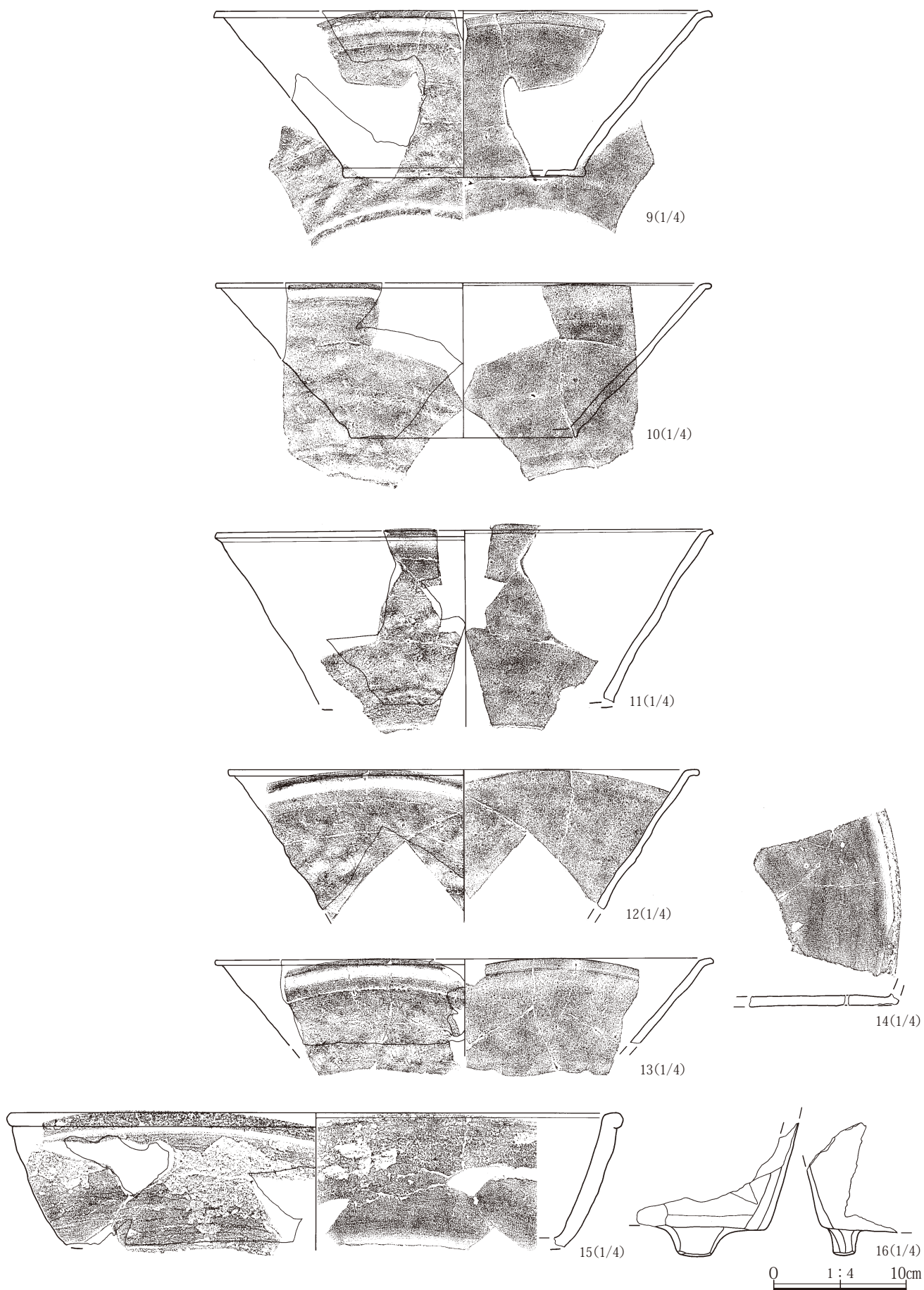
2・3号土坑
1. 暗褐色土 ロームブロック(φ10mm)、黒色土を含む。やや砂質。
縮まり弱い。礫を含む。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を含む。
3. 黄褐色土 2層に似るが、黒色土を多く含む。
4. 暗褐色土 1層に似るが、ロームがやや多い。縮まり弱い。
5. 暗黄褐色土 φ10mm程のロームブロックを多く含む。黒色土を
含む。縮まり弱い。



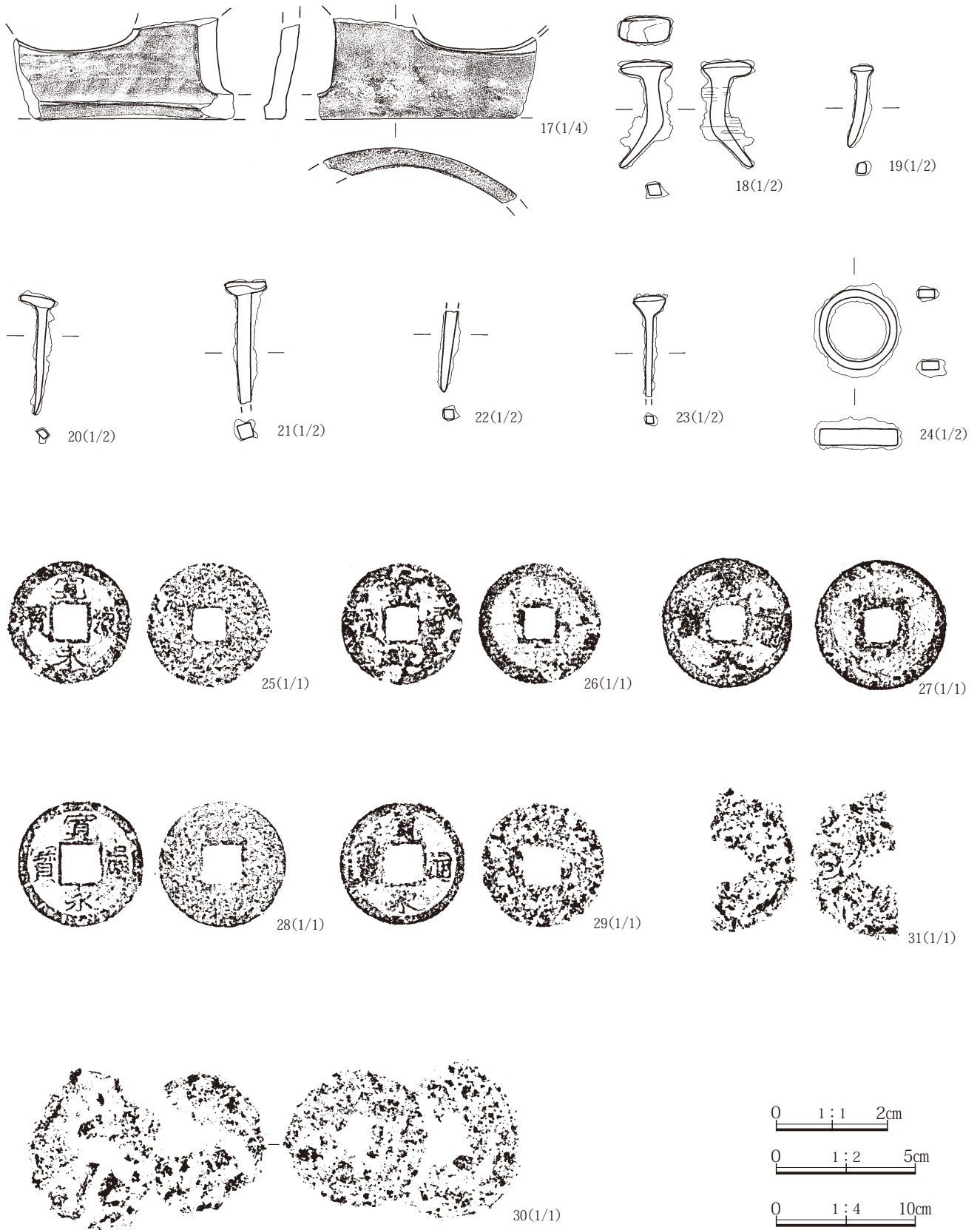
4号土坑出土遺物



第133図 1～4号土坑平断面図、4号土坑出土遺物(1)

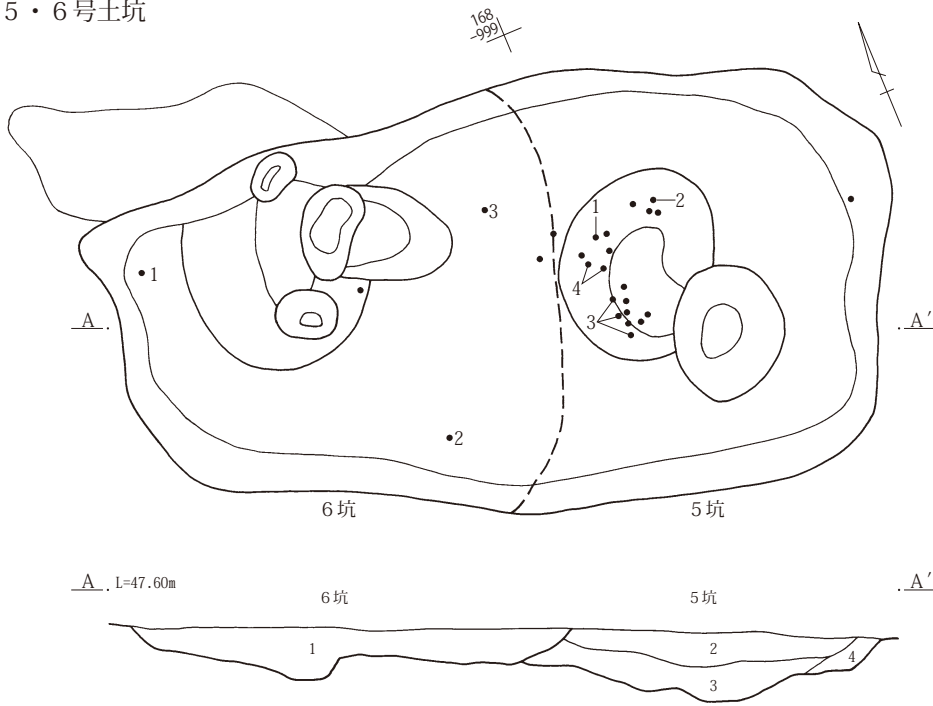


第134図 4号土坑出土遺物(2)



第135図 4号土坑出土遺物(3)

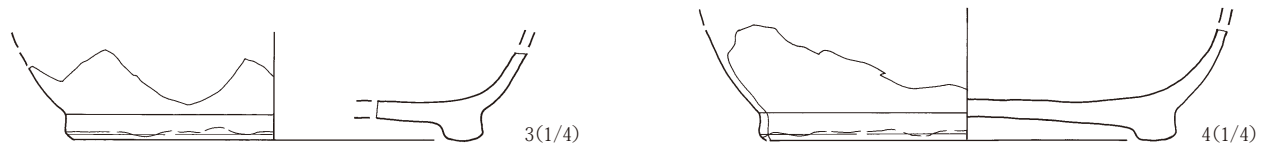
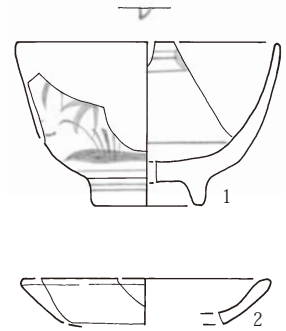
5・6号土坑



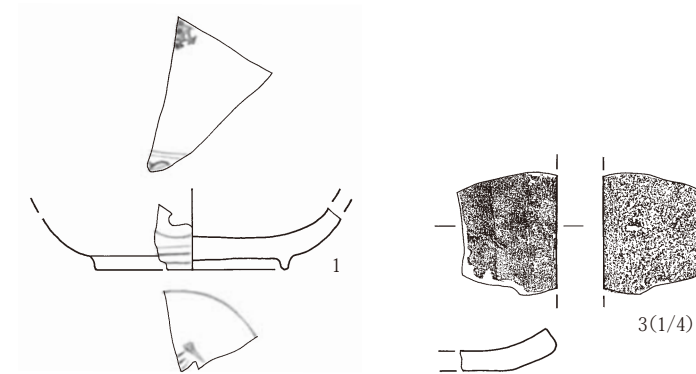
5・6号土坑

1. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック (φ10mm)を層状に含む。締まりやや弱い。遺物(陶磁器片)を含む。6号土坑。
2. 暗褐色土 1層に似るが黒色土がやや多い。礫(φ20~50mm)、炭化物粒を含む。遺物(陶磁器片)を含む。以下5号土坑。
3. 暗黄褐色土 ロームブロック、黒色土を層状に含む。
4. 暗褐色土 3層に似るが黒色土が多い。

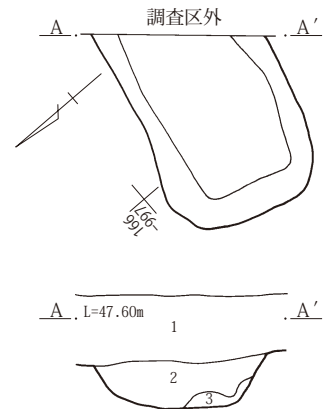
5号土坑出土遺物



6号土坑出土遺物



7号土坑



7号土坑

1. 表土
2. にぶい黄褐色土 ローム粒、炭化物粒を少量含む。締まりやや弱い。
3. 褐色土 ローム粒を多く含む。締まり弱い。

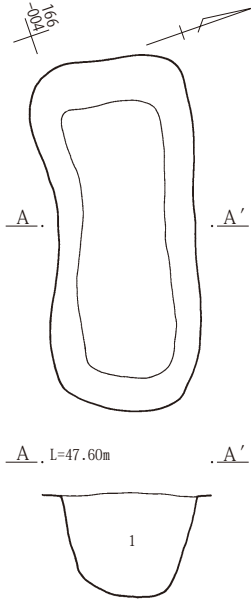
0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

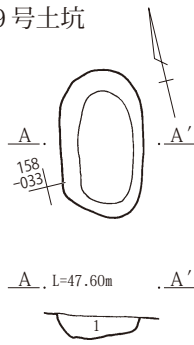
0 1:40 1m

第136図 5~7号土坑平断面図、5・6号土坑出土遺物

8号土坑



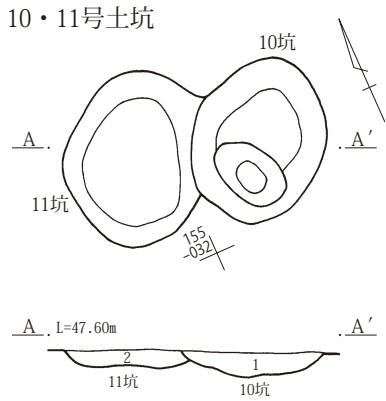
9号土坑



9号土坑

1. にぶい黄褐色土 ロームブロックを中央に含む。白色軽石粒、ローム粒、炭化物粒を含む。締まりあり。

10・11号土坑



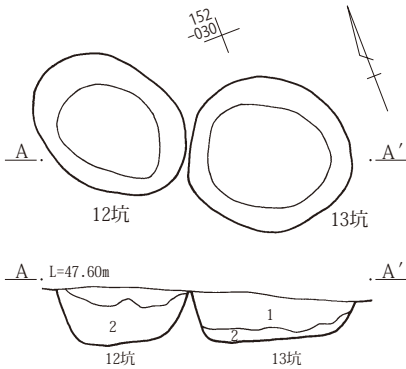
10・11号土坑

1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒、ローム粒、炭化物粒を含む。締まりあり。10号土坑。
2. 暗褐色土 1層に似るが、地山の黒色ブロックを斑状に含む。11号土坑。

8号土坑

1. にぶい黄褐色土 ローム粒(φ5~10mm)、炭化物粒を少量含む。締まり弱い。

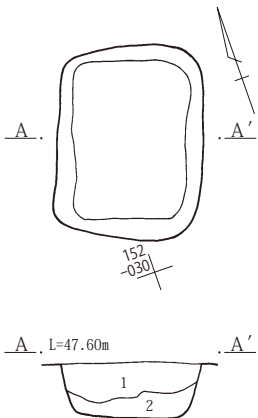
12・13号土坑



12・13号土坑

1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒、ローム粒、炭化物粒を含む。締まりあり。
2. 暗褐色土 1層に似るが、ロームブロックをやや多く含む。

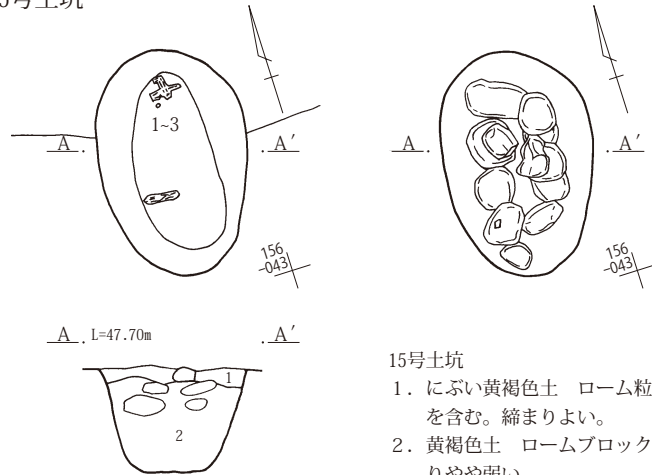
14号土坑



14号土坑

1. にぶい黄褐色土 ローム粒、白色軽石粒、炭化物粒を含む。締まりよい。
2. 黄褐色土 1層に似るがロームブロックを含む。締まりやや弱い。

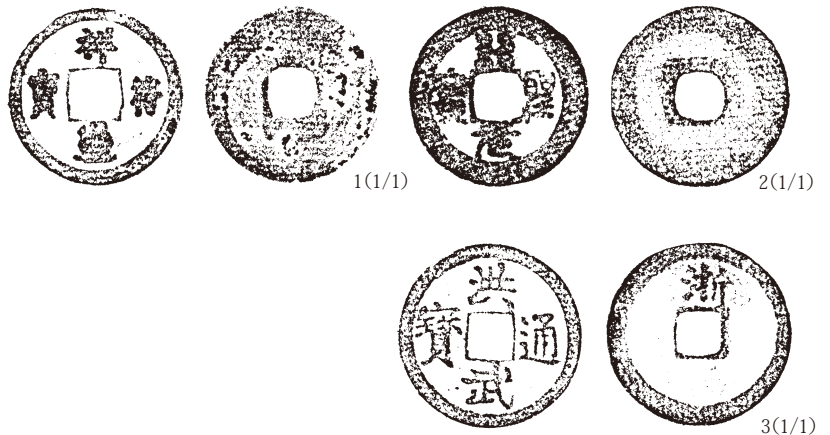
15号土坑



15号土坑

1. にぶい黄褐色土 ローム粒、炭化物粒を含む。締まりよい。
2. 黄褐色土 ロームブロック主体。締まりやや弱い。

15号土坑出土遺物

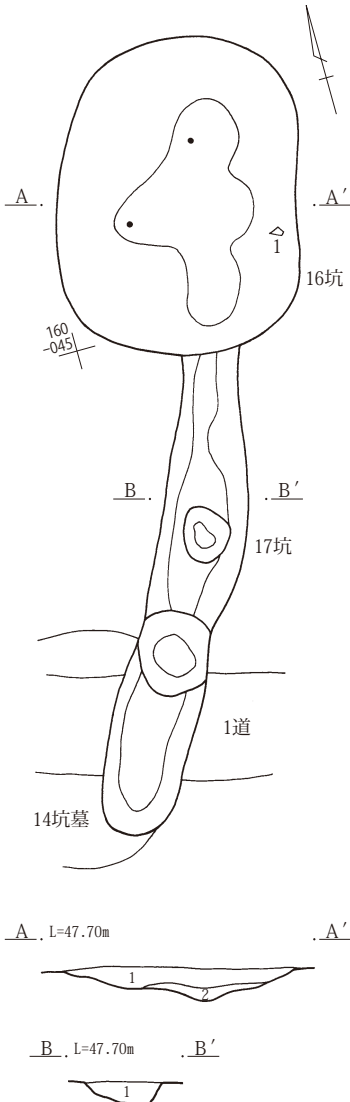


0 1:1 2cm

0 1:40 1m

第137図 8～15号土坑平断面図、15号土坑出土遺物

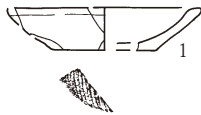
16・17号土坑



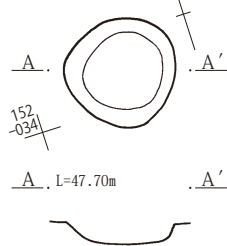
16・17号土坑

1. にぶい黄褐色土 ローム粒、白色軽石粒を含む。縮まりよい。
2. 黄褐色土 ロームブロック主体。縮まりやや弱い。

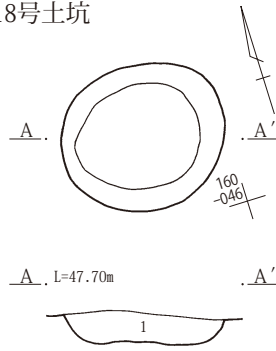
17号土坑出土遺物



20号土坑



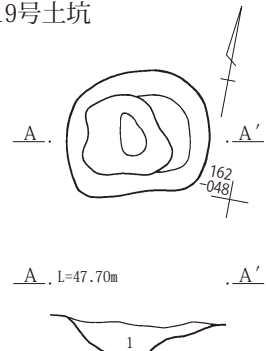
18号土坑



18号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒、白色軽石粒を少量含む。ロームブロックを含む。

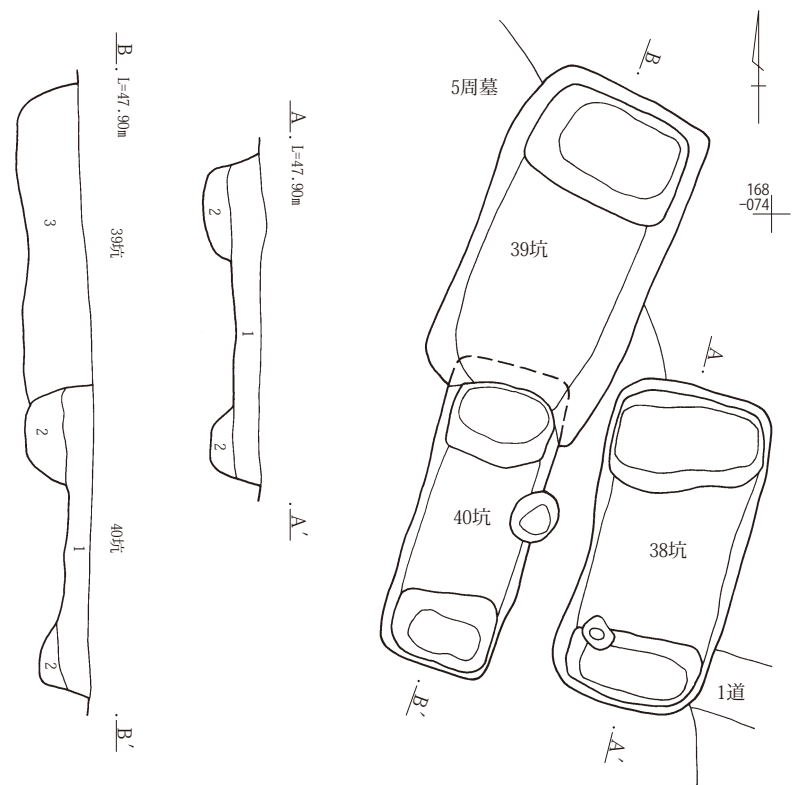
19号土坑



19号土坑

1. 褐色土 ローム粒、黒色土を含む。縮まり弱く、もろい。

38・39・40号土坑

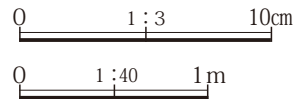


38号土坑

1. 黒褐色土 黒色土を多く含む。ローム粒、ロームブロック(φ10mm)を少し含む。縮まり弱く、やや砂質。底面に灰色土が薄く堆積。底面はよく縮まっている。
2. 暗褐色土 黒色土、ロームブロック(φ10～50mm)を斑状に含む。縮まり弱い。

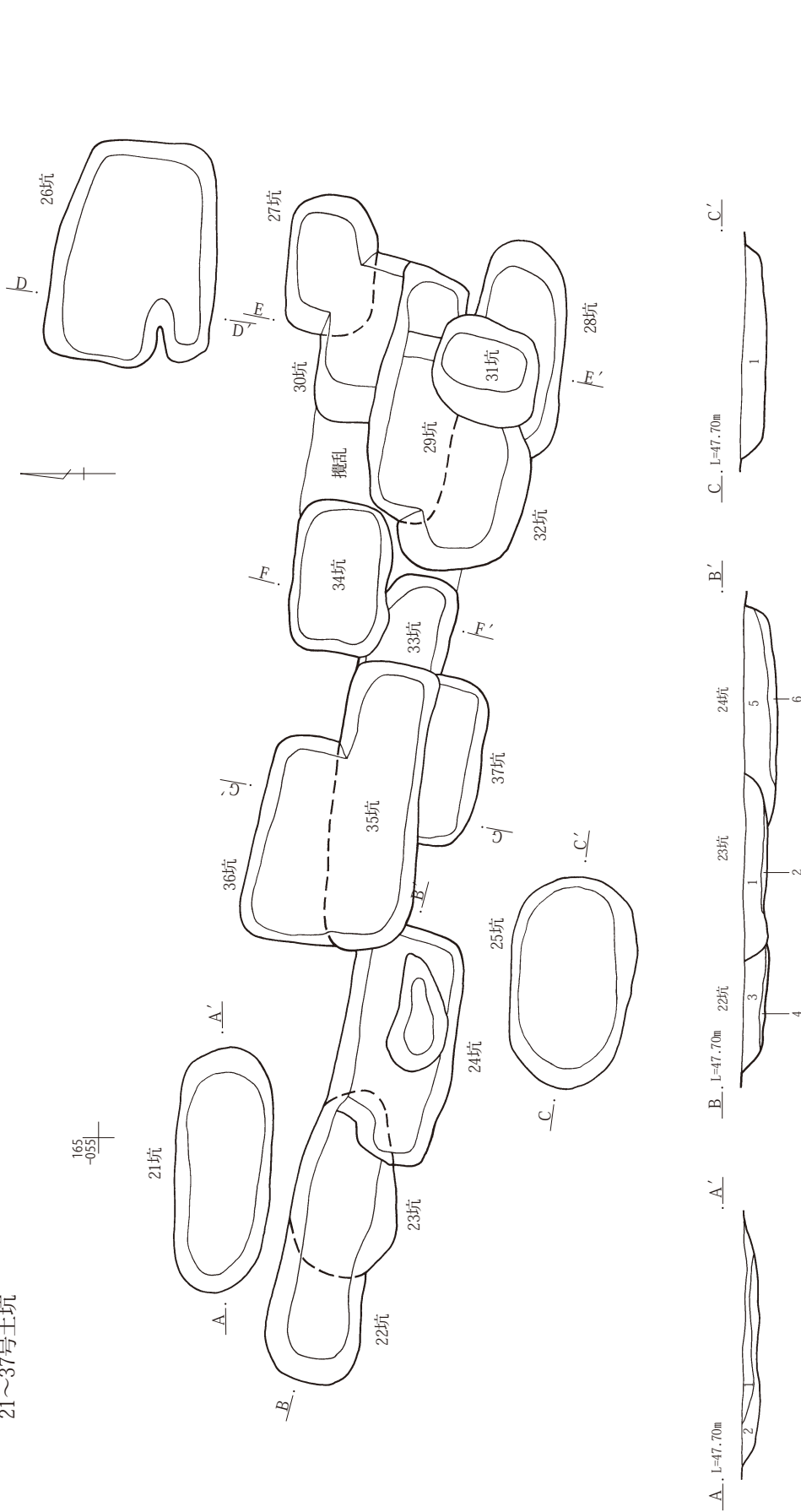
39・40号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多く含む。ローム粒、ロームブロック(φ10mm)、白色軽石を含む。底面付近に灰色土が薄く堆積。縮まりややあり。底面はよく縮まっている。遺物(近世の陶磁器)が出土。
2. 黒褐色土 1層によく似るが、ロームブロック、白色軽石が少ない。縮まりややあり。
3. 暗褐色土 黒色土、ローム粒、ロームブロック(φ10～50mm)、白色軽石粒、灰色土ブロック(φ10mm)を斑状に含む。縮まりややあり。



第138図 16～20・38～40号土坑平衡面図、17号土坑出土遺物

21～37号土坑



21号土坑
 1. 暗灰黄褐色土 ロームブロック、黒色土、灰色土を礫状に含む。炭化物粒、白色軽石粒を少量含む。
 2. 灰色土 灰色シルト主体。

22～24号土坑
 B. L=47.70m
 1. 暗褐色土 ロームブロック、黒色土を礫状に含む。炭化物粒を少し含む。縮まりややあり。23号土坑。
 2. 灰色土 底面に厚さ5～10mm程で堆積。灰層。23号土坑。
 3. 暗褐色土 1層に似る。ロームブロック、黒色土ブロックがやや大きい。縮まり弱い。22号土坑。
 4. 灰色土 2層と同質。22号土坑。
 5. 暗褐色土 1層に似る。縮まりややあり。24号土坑。
 6. 灰色土 2層と同質。24号土坑

25号土坑
 C. L=47.70m
 1. 暗褐色土 ロームブロック、黒色土を礫状に含む。底面に灰層が薄く堆積。縮まり弱い。

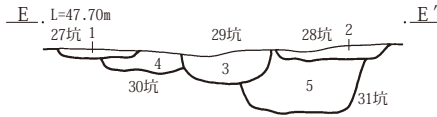
第139図 21～37号土坑平面図、21～25号土坑断面図

第3章 調査の成果



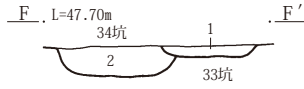
26号土坑

1. 暗褐色土 ロームブロック、黒色土を斑状に含む。底面に灰層が薄く堆積。締まり弱い。



27～31号土坑

1. 暗褐色土 ローム粒、黒色土を含む。底面に灰層が薄く堆積。締まりややあり。27号土坑。
2. 暗褐色土 1層と同質。28号土坑。
3. 暗褐色土 1層と同質。29号土坑。
4. 暗褐色土 1層に似るが、ロームブロックを斑状に含む。灰層なし。30号土坑。
5. 暗褐色土 4層と同質。31号土坑。



33・34号土坑

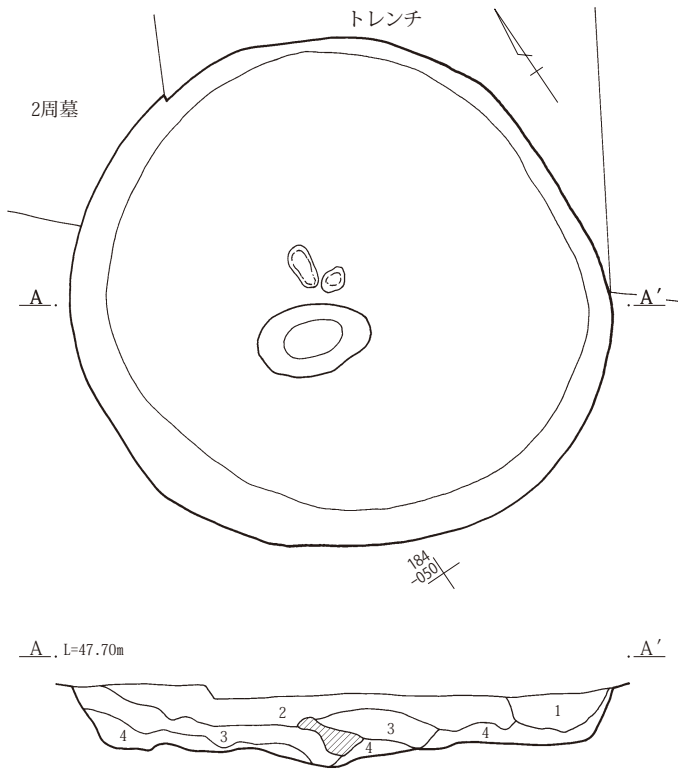
1. 暗褐色土 ロームブロック、黒色土を斑状に含む。底面に灰層が薄く堆積。締まり弱い。33号土坑。
2. 暗褐色土 1層に似るが、ロームブロックが少ない。締まりややあり。灰層なし。34号土坑。



35～37号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、やや大きいロームブロックを斑状に含む。底面に灰層が薄く堆積。35号土坑。
2. 暗褐色土 1層に似る。灰層はない。36号土坑。
3. 暗褐色土 1層に似る。ロームブロックが小さい。灰層はない。37号土坑。

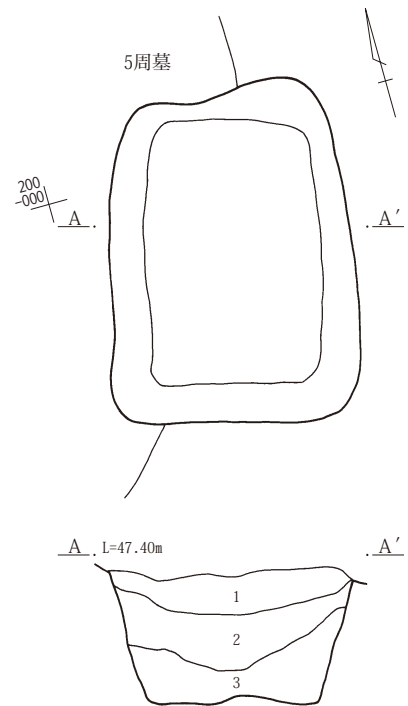
41号土坑



41号土坑

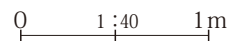
1. 黒褐色土 黒色土、ローム粒、白色軽石粒を互層に含む。締まりよく硬い。他の土坑か。
2. 暗褐色土 黒色土、ローム粒、ロームブロック(φ10～50mm)、黄褐色土ブロック、白色軽石粒を含む。礫を少し含む。砂質。締まりあり。
3. 褐色土 2層に似るが、ローム粒が多い。締まりややあり。
4. 黄褐色土 地山ローム主体。黒色土をわずかに含む。締まり弱い。

42号土坑



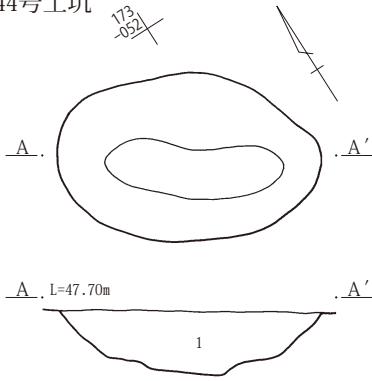
42号土坑

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒(φ1mm)を少し含む。暗褐色土ブロック、黒褐色土ブロック(φ10～30mm)を斑状に含む。締まりややあり。砂質。
2. 暗褐色土 1層主体。ロームブロック(φ10～30mm)を含む。締まりあり。
3. にぶい黄褐色土 2層に似るが、ロームブロック(φ10～30mm)が多い。締まり非常に弱くもろい。



第140図 26～31・33～37号土坑断面図、41・42号土坑平断面図

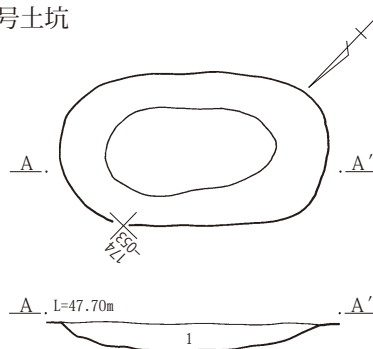
44号土坑



44号土坑

1. 暗褐色土 地山ローム粒、ロームブロック(φ10mm)、黒色土を斑状に含む。白色軽石粒(φ1mm)を少量含む。縮まりあり、密。

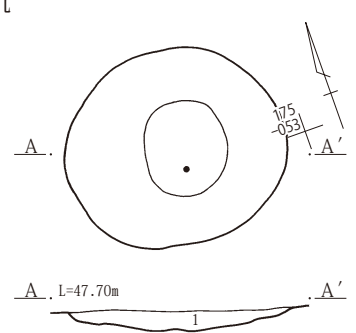
45号土坑



45号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。白色軽石(As-Cか)を少量含む。縮まりあり。

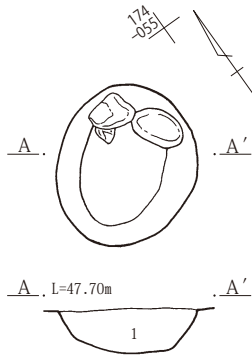
46号土坑



46号土坑

1. 暗褐色土 白色軽石(As-C、FAか)、ローム粒、黒色土を含む。土師器片出土。小礫を含む。縮まりややあり。砂質。

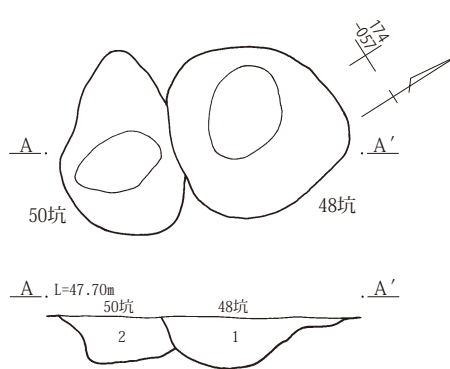
47号土坑



47号土坑

1. 黒褐色土 炭化物を非常に多く含む。ローム、骨片(?)を含む。上部に礫(φ150×250mm)2個出土。縮まり弱く、粗。

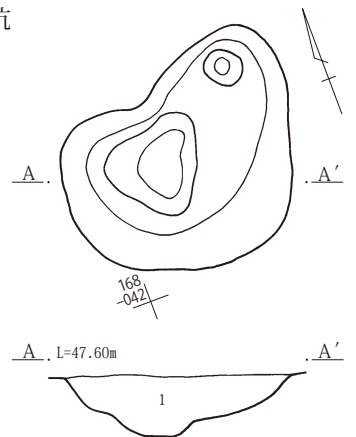
48・50号土坑



48・50号土坑

1. 暗褐色土 ロームブロック、暗褐色土ブロック、黒色土ブロック(φ10mm)を斑状に含む。縮まり硬く、密。48号土坑。
2. 暗褐色土 1層より明るい。地山ロームブロック、暗褐色土ブロックを含む。縮まり弱い。50号土坑。

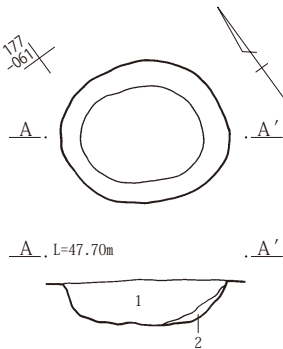
49号土坑



49号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。白色軽石(φ1~3mm、As-C、FAか)を少し含む。縮まりややあり。砂質。

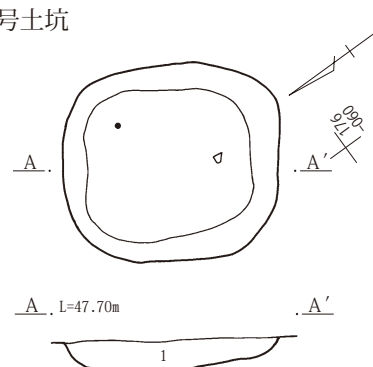
51号土坑



51号土坑

1. 黒褐色土 黒色土ブロック、暗褐色土ブロックを斑状に含む。ローム、礫を含む。縮まりあり。砂質(As-Bか)。
2. 暗褐色土 ロームブロック主体。

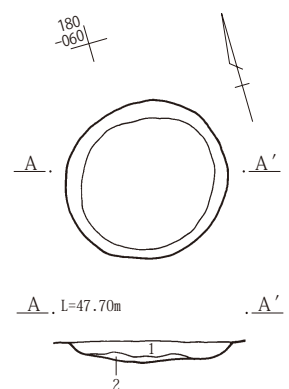
52号土坑



52号土坑

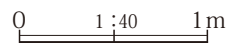
1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。縮まりややあり。

53号土坑



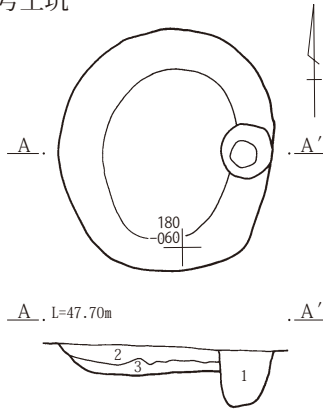
53号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。FAパミス(φ1~3mm)を少し含む。縮まりややあり。
2. 黄褐色土 ローム主体。縮まりややあり。

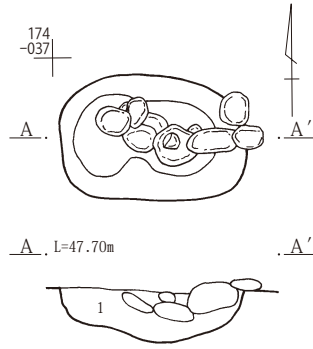


第141図 44～53号土坑平断面図

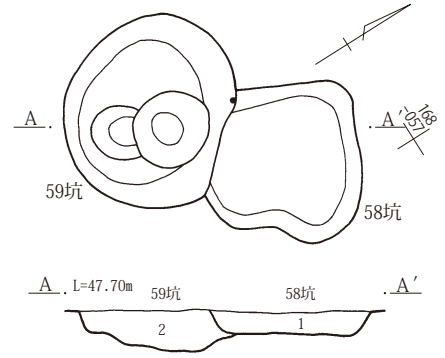
54号土坑



56号土坑



58・59号土坑



54号土坑

1. 暗褐色土 2層に似るが、ロームが少ない。締まり弱い。他のピット。
2. 暗褐色土 黒色土、ロームを含む。FAパミス(φ1~3mm)を少し含む。締まりややあり。
3. 黄褐色土 ローム主体。締まりややあり。

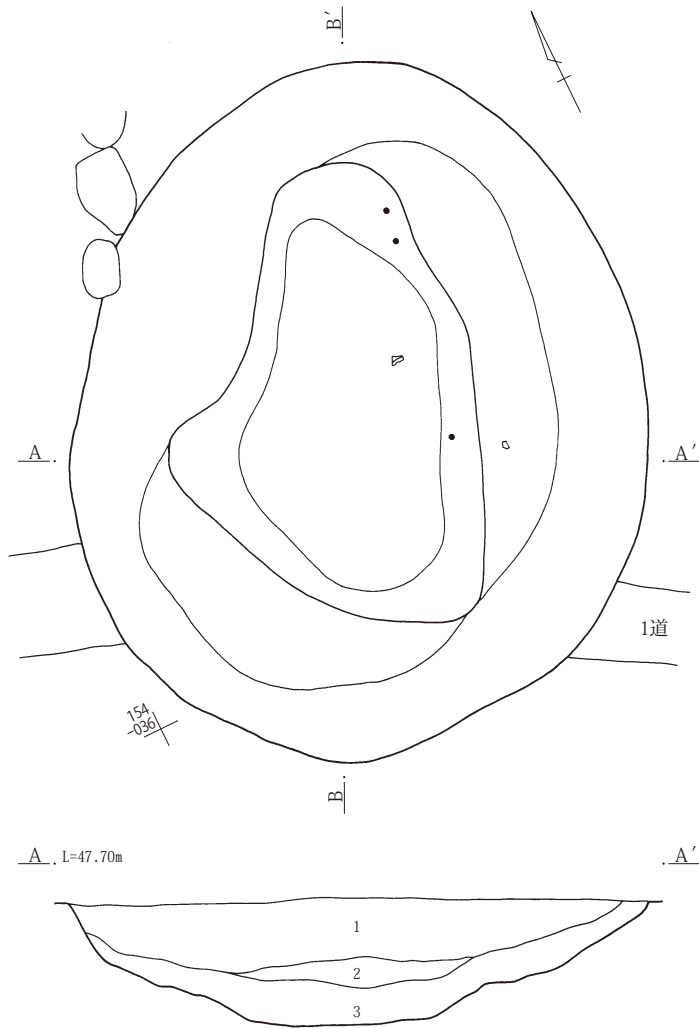
56号土坑

1. 褐色土 ロームブロック、黒色土ブロック(φ10mm)を斑状に含む。小礫(φ30mm程度)を少し含む。締まり弱く、やや粗い。

58・59号土坑

1. オリーブ褐色土 黒色土、ローム粒を含む。締まり弱い。58号土坑。
2. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロックを斑状に含む。締まり弱い。59号土坑。

57号土坑



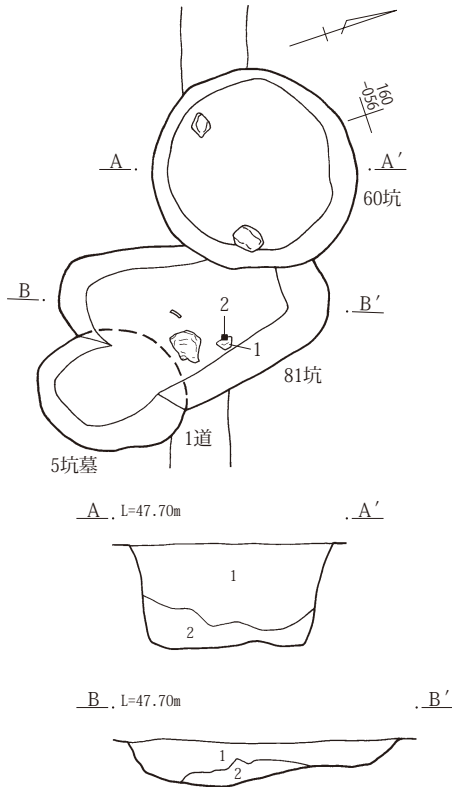
57号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。上部に炭化物を含む。黒色土ブロック、ロームブロックを斑状に含む。締まり弱い。
2. 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土ブロックを含む。締まり弱い。
3. 黄褐色土 2層より明るい。ロームブロック主体。黒色土を少量含む。締まり弱い。



第142図 54・56～59号土坑平断面図

60・81号土坑



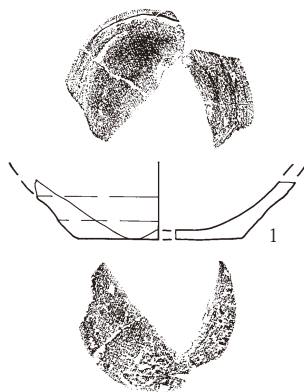
60号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロックを斑状に含む。縮まりあり。
2. 暗褐色土 1層よりも明るい。黒色土を含む。ロームブロックを斑状に含む。縮まり弱い。

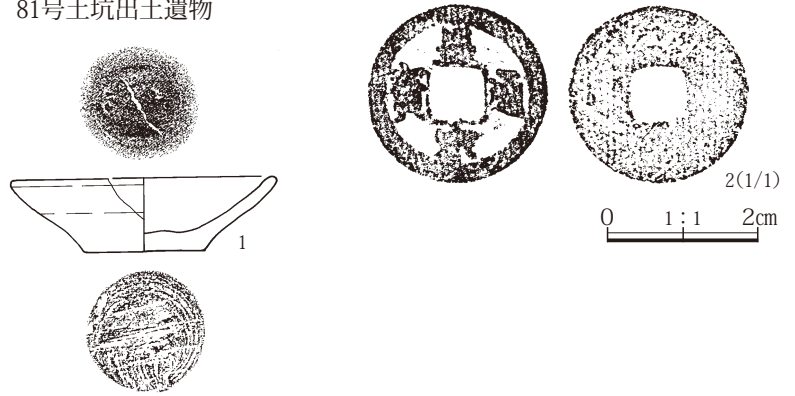
81号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。ロームブロック(φ10~25mm)を少量含む。縮まりあり。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。縮まり弱い

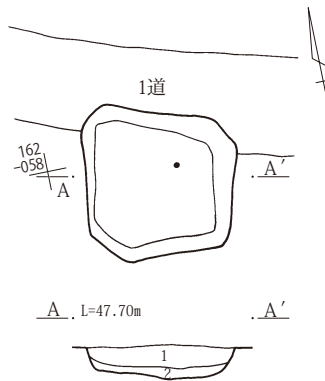
62号土坑出土遺物



81号土坑出土遺物



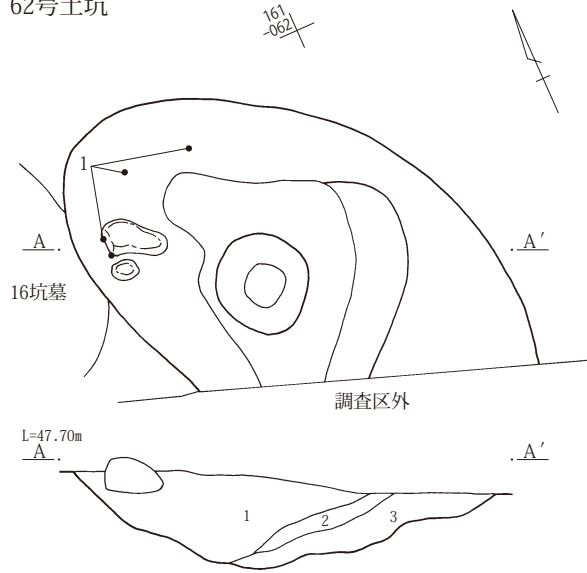
61号土坑



61号土坑

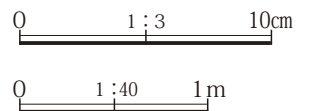
1. オリーブ褐色土 黒色土、ローム粒を含む。縮まり弱い。
2. 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土を含む。縮まり弱い。

62号土坑



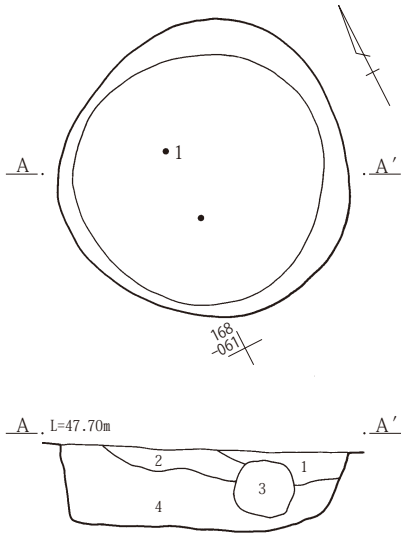
62号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ15~40mm)を斑状に含む。縮まりあり。
2. 暗褐色土 1層より少し明るい。黒色土、ローム粒を含む。縮まり弱い。
3. にぶい黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土を含む。縮まり弱い。



第143図 60～62・81号土坑平断面図、62・81号土坑出土遺物

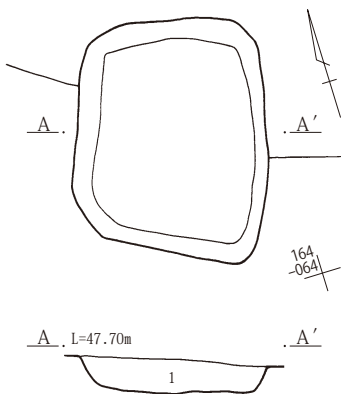
63号土坑



63号土坑

1. 暗褐色土 2層より少し明るい。黒色土ブロック(φ10~15mm)を多量に含む。締まり弱い。
2. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロックを少量含む。締まり弱い。
3. 暗褐色土 2層より少し暗い。黒色土ブロック、ロームブロックを斑状に含む。締まりあり。
4. にぶい黄褐色土 黒色土、ローム粒を多量に含む。締まり弱い。

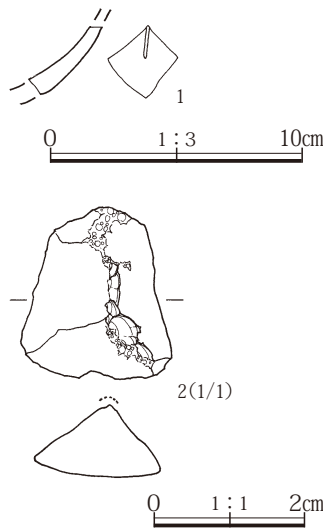
66号土坑



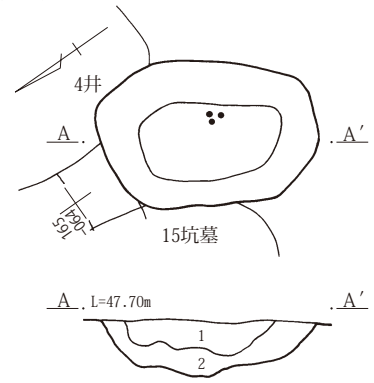
66号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ10~25mm)を斑状に含む。締まりあり

63号土坑出土遺物



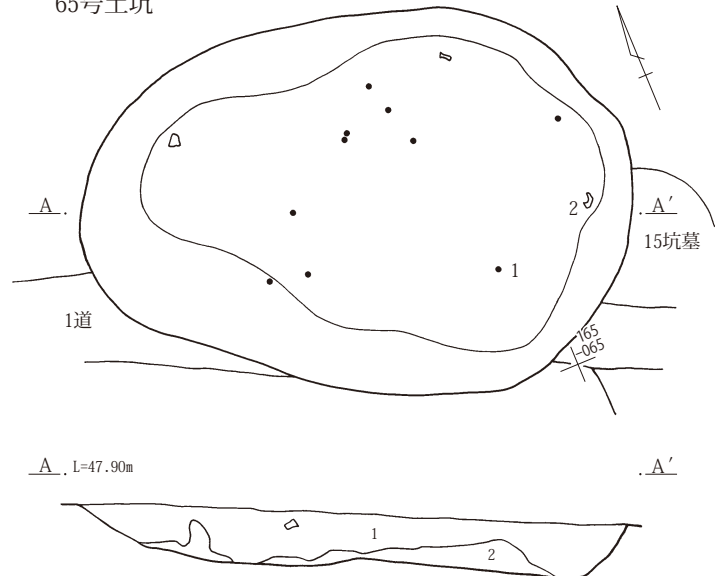
64号土坑



64号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。炭化物を多量に含む。締まり弱い。
2. にぶい黄褐色土 黒色土ブロック、ロームブロックを斑状に含む。締まり弱い。

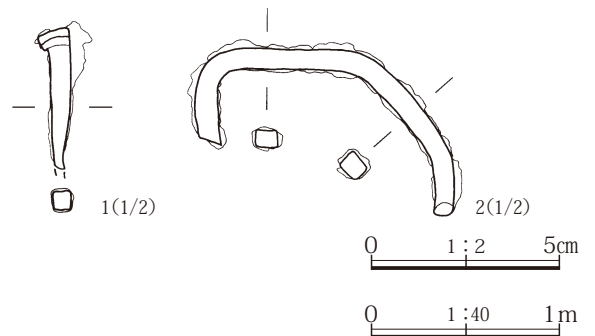
65号土坑



65号土坑

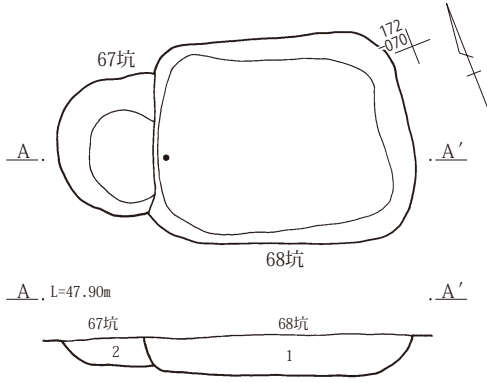
1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ10~25mm)を斑状に含む。締まりあり。
2. 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土を含む。締まり弱い。

65号土坑出土遺物



第144図 63~66号土坑平面図、63・65号土坑出土遺物

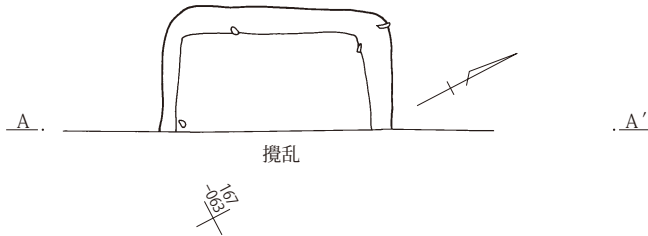
67・68号土坑



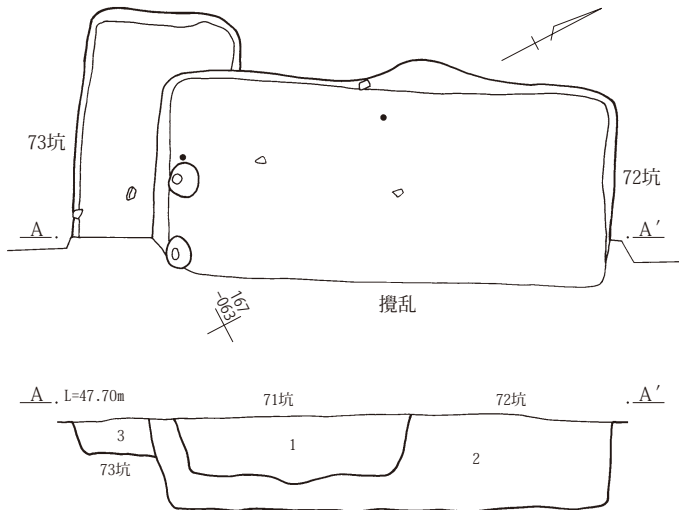
67・68号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。下層に黒色土ブロック、ロームブロックを含む。縮まりあり。68号土坑。
2. 暗褐色土 1層に似るが、少し暗い。67号土坑。

71号土坑



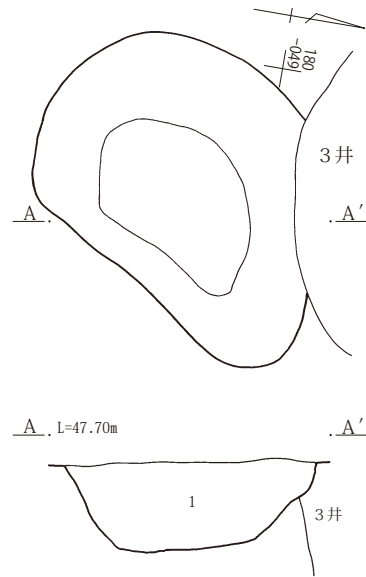
72・73号土坑



71・72・73号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ 5～25mm)を斑状に含む。縮まりあり。71号土坑。
2. 明黄褐色土 黒色土、黒色土ブロック(φ 5～25mm)を含む。ローム粒を多量に含む。ロームブロック(φ 5～40mm)を斑状に含む。縮まり弱い。72号土坑。
3. 暗褐色土 1層より少し明るい。黒色土、ローム粒を含む。縮まりあり。73号土坑。

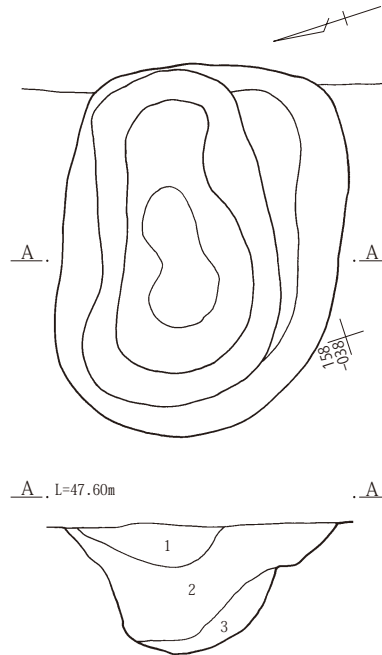
69号土坑



69号土坑

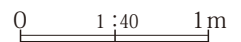
1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。縮まり弱い。

74号土坑



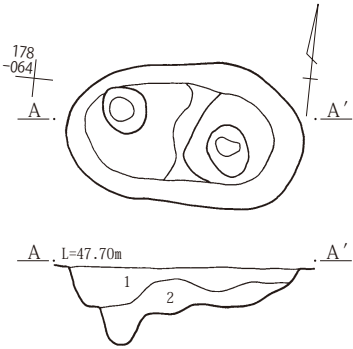
74号土坑

1. にぶい黄褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ 10～20mm)を斑状に含む。縮まり弱い。
2. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ロームブロック(φ 10～30mm)、ローム粒を含む。白色軽石(φ 1mm)を少量含む。縮まりあり。
3. にぶい黄褐色土 1層より少し明るい。1層に似るが、ローム粒を多量に含む。縮まり弱い。



第145図 67～69・71～74号土坑平断面図

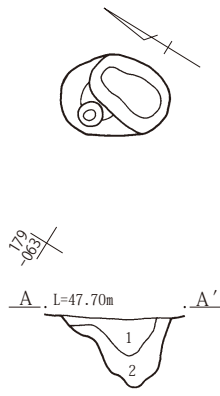
76号土坑



76号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。炭化物粒を少量含む。締まりあり。
2. にぶい黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を含む。締まりやや弱い。

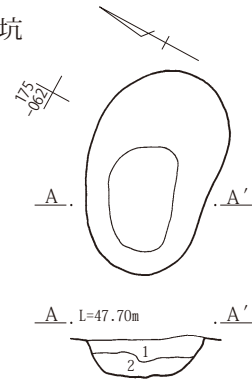
77号土坑



77号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。炭化物粒を少量含む。締まりあり。
2. にぶい黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を含む。締まりやや弱い。

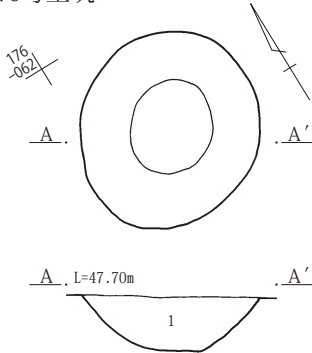
78号土坑



78号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。炭化物を少量含む。締まりあり。
2. にぶい黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を含む。締まりやや弱い。

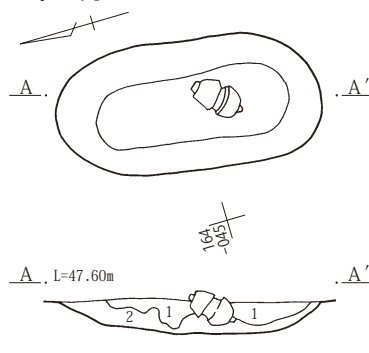
79号土坑



79号土坑

1. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。炭化物を少量含む。締まりあり。

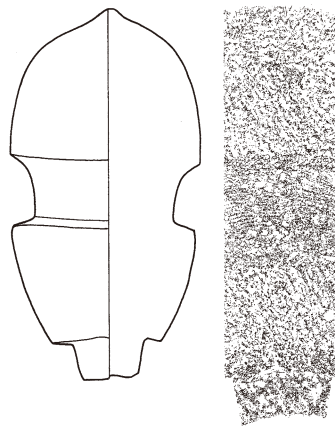
80号土坑



80号土坑

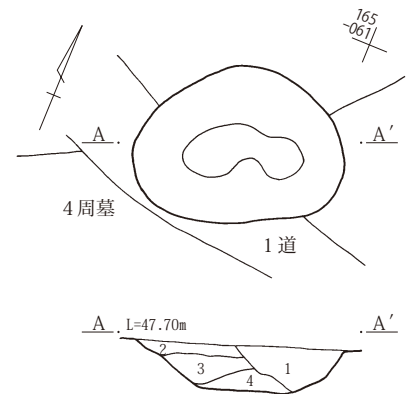
1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。ロームブロック(φ 5~10mm)を含む。締まり弱い。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。締まり弱い。

80号土坑出土遺物



0 1:6 20cm

82号土坑



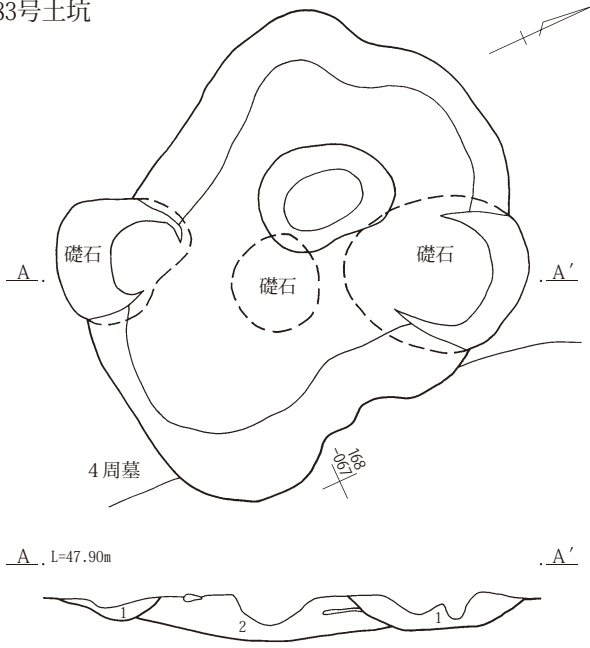
82号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒、白色軽石粒(φ 1~3mm)を少量含む。ロームブロック(φ 10~20mm)を含む。締まりあり。
2. 暗褐色土 1層より少し暗い。ロームブロックを含まない。締まりあり。
3. 暗褐色土 2層に似るが、黒色土が多い。締まりあり。
4. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を含む。締まり弱い。

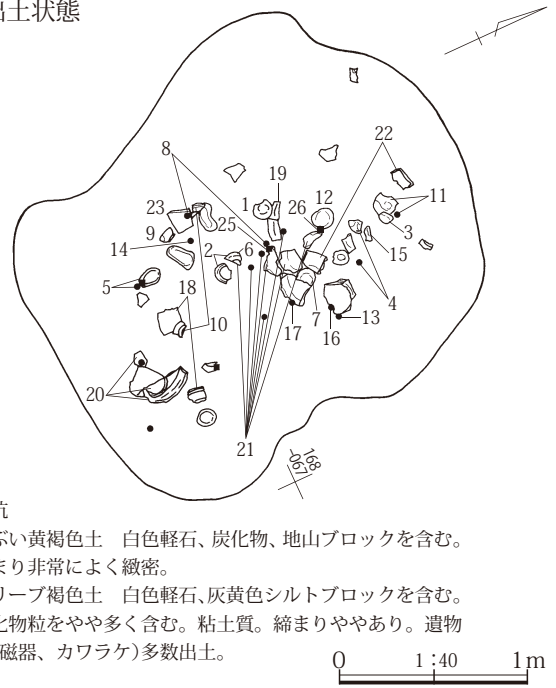
0 1:40 1m

第146図 76~80・82号土坑平断面図、80号土坑出土遺物

83号土坑



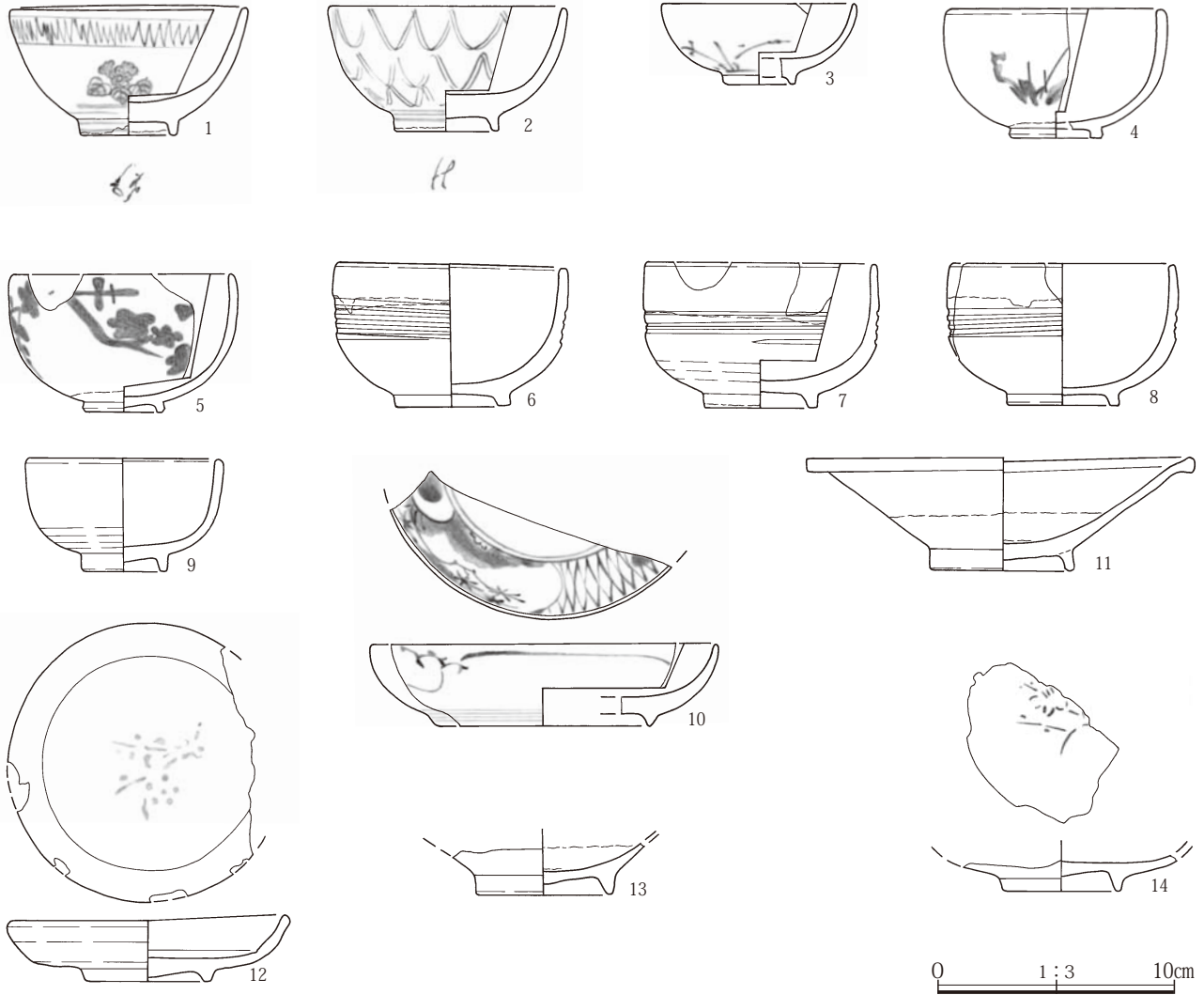
遺物出土状態



83号土坑

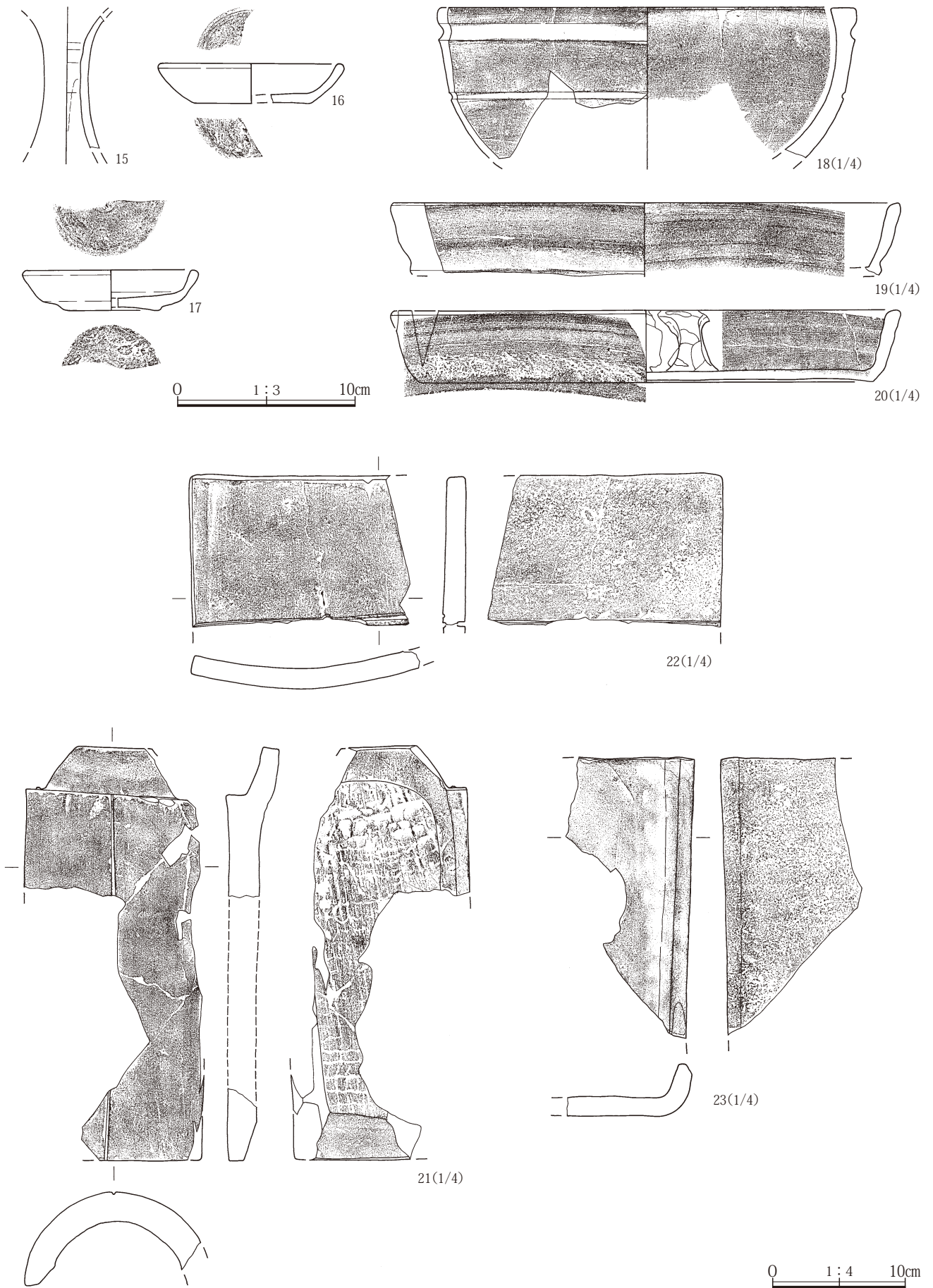
1. にぶい黄褐色土 白色軽石、炭化物、地山ブロックを含む。縮まり非常によく緻密。
2. オリーブ褐色土 白色軽石、灰黄色シルトブロックを含む。炭化物粒をやや多く含む。粘土質。縮まりややあり。遺物(陶磁器、カワラケ)多数出土。

83号土坑出土遺物

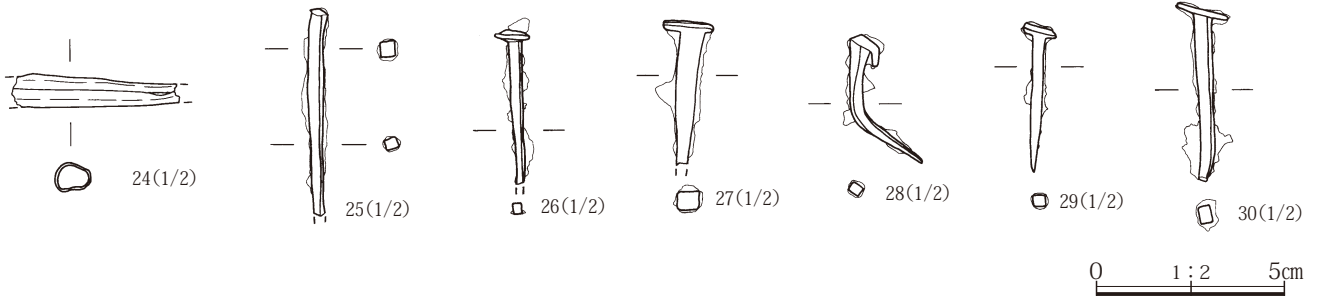


第147図 83号土坑平断面図・遺物出土状態図・出土遺物(1)

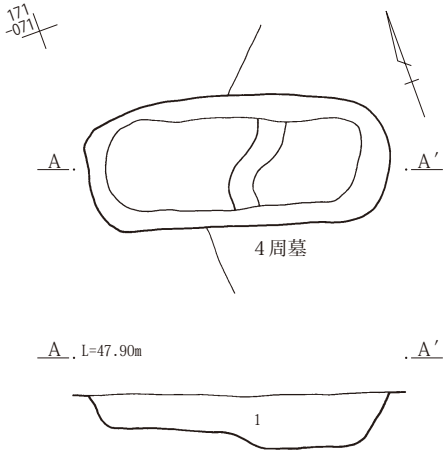
第3章 調査の成果



第148図 83号土坑出土遺物(2)



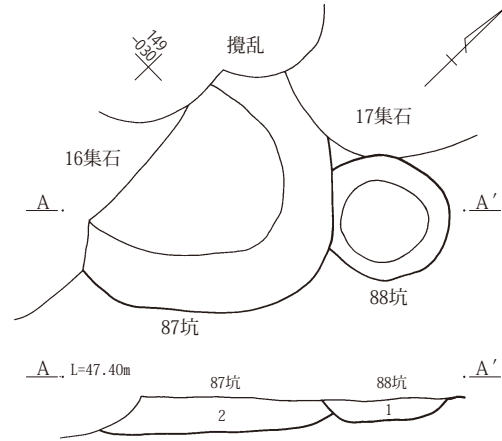
84号土坑



84号土坑

1. にぶい黄褐色土 白色軽石、炭化物、ロームブロックを含む。縮まりやや弱い。灰黄色シルトブロックを含む。

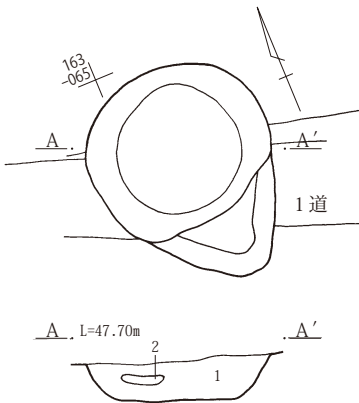
87・88号土坑



87・88号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、ロームブロックを含む。灰白色粘土ブロックを少し含む。木質片少し出土。縮まり弱い。
2. 暗褐色土 黒色土、ロームブロックを含む。縮まりややあり。

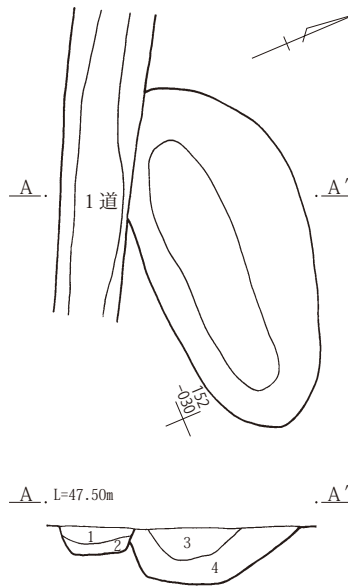
85号土坑



85号土坑

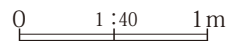
1. 暗褐色土 黒色土ブロック、ロームブロック、小礫を含む。炭化物、焼土粒を少量含む。縮まりやや弱い。
2. 暗灰黄色土ブロック 砂質。小礫を含む。

89号土坑



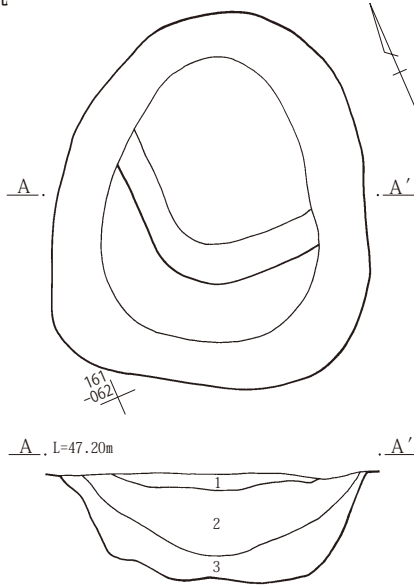
89号土坑

1. 暗褐色土 黒色土、白色軽石を含む。ロームを少し含む。縮まりあり。礫(φ 50~100mm)、遺物(陶器片?)出土。1号道路状遺構北側溝。
2. にぶい黄褐色土 ローム主体。黒色土を少し含む。縮まりやや弱い。1号道路状遺構北側溝。
3. 黒褐色土 黒色土、白色軽石(As-C、FA)を含む。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を少し含む。縮まりややあり。89号土坑。
4. 暗褐色土 3層に似るが、ロームをやや多く含む。白色軽石粒がやや少ない。縮まりやや弱い。89号土坑。



第149図 83号土坑出土遺物(3)、84・85・87~89号土坑平断面図

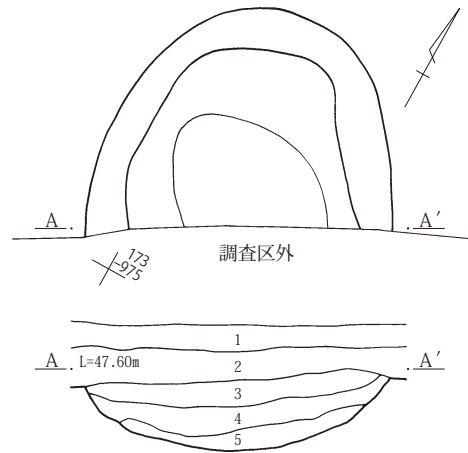
100号土坑



100号土坑

1. 灰白色粘質土 金雲母状のガラス質粒子を多量に含む。鉄分の沈着が認められる。締まり強い。
2. 暗褐色土 黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。炭化物粒(φ 1mm)を少量含む。ロームブロック(φ 10~40mm)を斑状に含む。締まり弱い。
3. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。締まりあり。

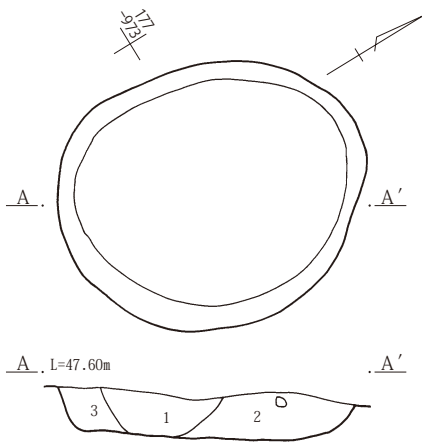
102号土坑



102号土坑

1. 現代の耕作土
2. 暗褐色土 As-C、FAを含む。ロームブロック、黒色土ブロックを含む。締まりやや弱い。砂質。
3. 暗褐色土 As-C、FAを含む。黒色土ブロックをやや多く含む。ローム、焼土粒、炭化物粒を含む。締まりあり。
4. 褐色土 3層ブロックとロームを斑状に含む。締まりややあり。
5. にぶい黄褐色土 ローム主体。締まりややあり。

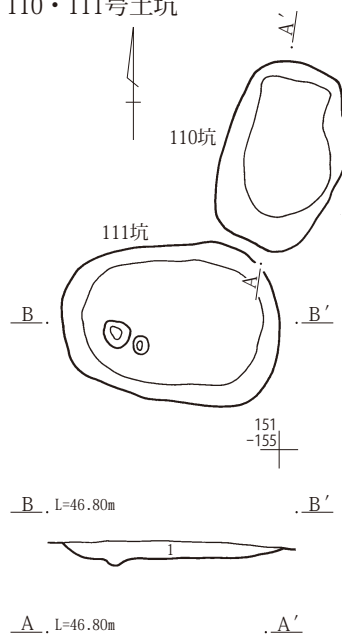
106号土坑



106号土坑

1. 暗褐色土 ローム、黒色土を含む。焼土、炭化物を少し含む。締まりやや弱い。(攪乱か)
2. 黒褐色土 黒色土を多く含む。礫(φ 50~100mm)を含む。締まりあり。
3. 暗褐色土 1層に似る。ロームをやや多く含む。
1・2層中にこぶし大の礫を含む。礫は同一個体が割れているものもあるが、火を受けた跡は見られない。

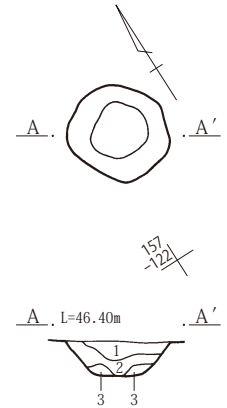
110・111号土坑



110・111号土坑

1. 褐灰色土 暗褐色土を少し含む。締まりあり。

112号土坑



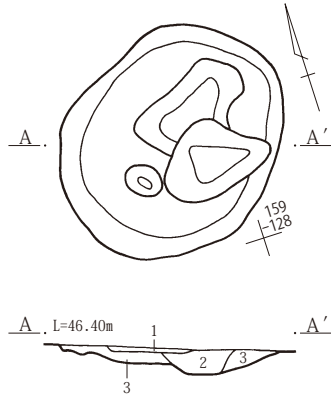
112号土坑

1. 暗褐色土 As-Bを含む。締まっている。
2. 灰白色土 シルト質。
3. 浅黄色土 シルト質。



第150図 100・102・106・110～112号土坑平断面図

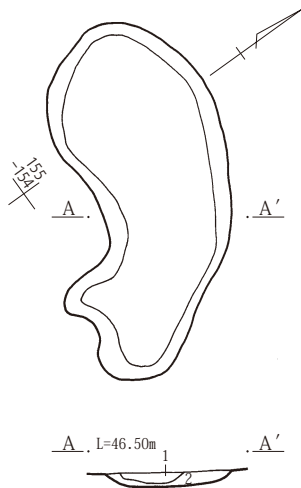
113号土坑



113号土坑

- 1. 灰白色土 シルト質。
- 2. 暗褐色土 締まっている。As-Bを含む
- 3. 浅黄色土 シルト質。

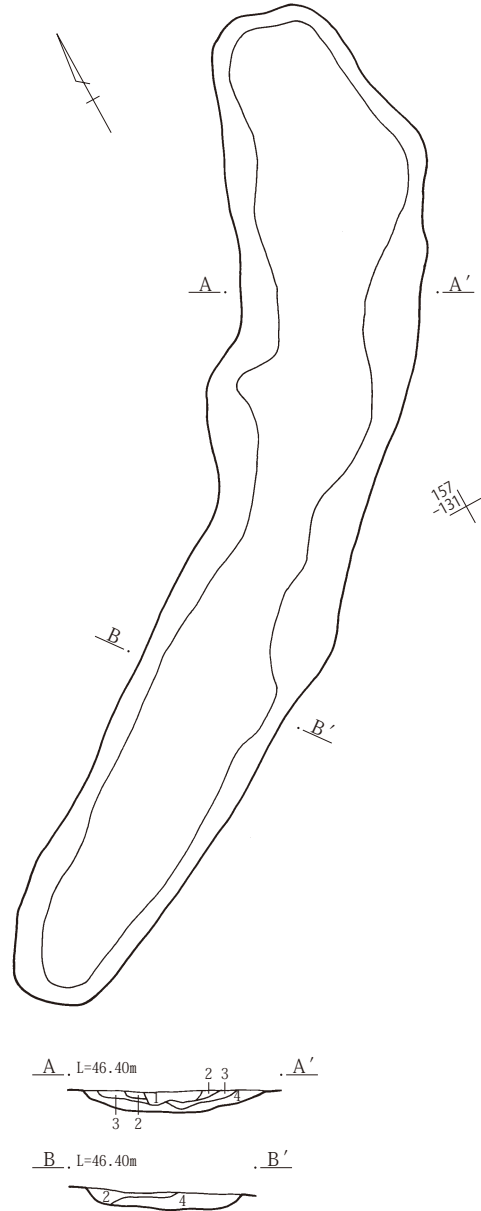
115号土坑



115号土坑

- 1. 暗褐色土 締まっている。As-Bを含む
- 2. 浅黄色土 シルト質。

114号土坑



114号土坑

- 1. 浅黄色土 シルト質。
- 2. 暗褐色土 締まっている。As-B含む。
- 3. 灰白色土 シルト質。
- 4. 浅黄色土 シルト質。



第151図 113～115号土坑平断面図

4 集石

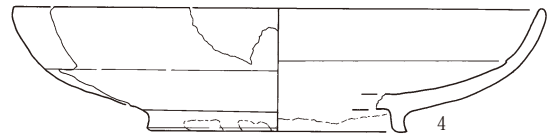
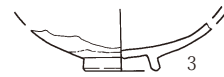
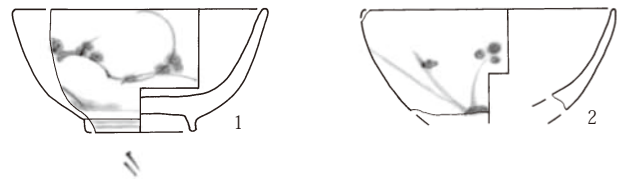
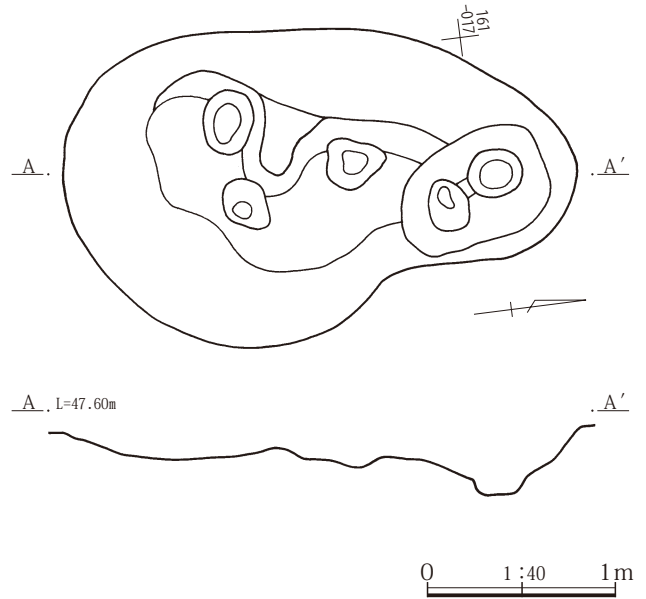
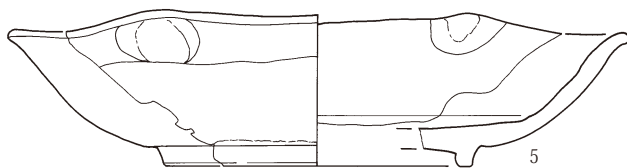
北調査区の遺構確認面において、石が狭い範囲に集まっているところが数カ所見つかったので、そのようなところを「集石」と名付けて調査した。調査したのは18ヶ所(12号集石は調査途中で井戸であることが判明し、1号井戸と名称を変更したので、当初から欠番)になるが、そのうち11ヶ所については、出土遺物から近現代のものであり、耕作などの際に邪魔な石を投げ込んだ穴だと考えられるので欠番とした。本書では近世に遡るものである可能性が強い7ヶ所を以下に報告する。

これら集石の下には必ず土坑が存在するが、その場合、石が確認面にのみある場合と、埋土にも多く含まれている場合があった。石が多く見られることの意味については、特に埋土や遺物などに特徴的なことは見られないので不明である。そのため、その性格としては前項で土坑として報告したものほとんど変わらないものが含まれている可能性が高いが、ここでは混乱を避ける意味から、調査時の名称である「集石」をそのまま使用して報告する。

1号集石(第152図、第77・78表、P.L. 64-1・2, 96)

北調査区の南中央にある。確認面での石の数は少ない。掘方は浅い不整形で、長さ2.70m、幅1.67m、主軸方位はN-9°-E、深さは0.32mである。

出土遺物は比較的少ない。掲載した陶磁器は5点で、波佐見系の磁器碗2点(1・2)が18世紀中頃～後半のものであり、この年代が遺物の下限を示すものと思われる。その他小破片として、近世の磁器1点、施釉陶器6点、在地系土器は焙烙・鍋2点と時期不詳の土器2点が出土している。



第152図 1号集石平断面図・出土遺物

13号集石(第153図、第78表、P L. 64-3・4)

北調査区の南中央にある。確認面では石が多く集まり、埋土にも多く含まれている。平面図に見える石は掘方底面にあったものである。掘方は長さ1.05m、幅0.85mの楕円形で、主軸方位はN-13°-W、深さは0.26mである。

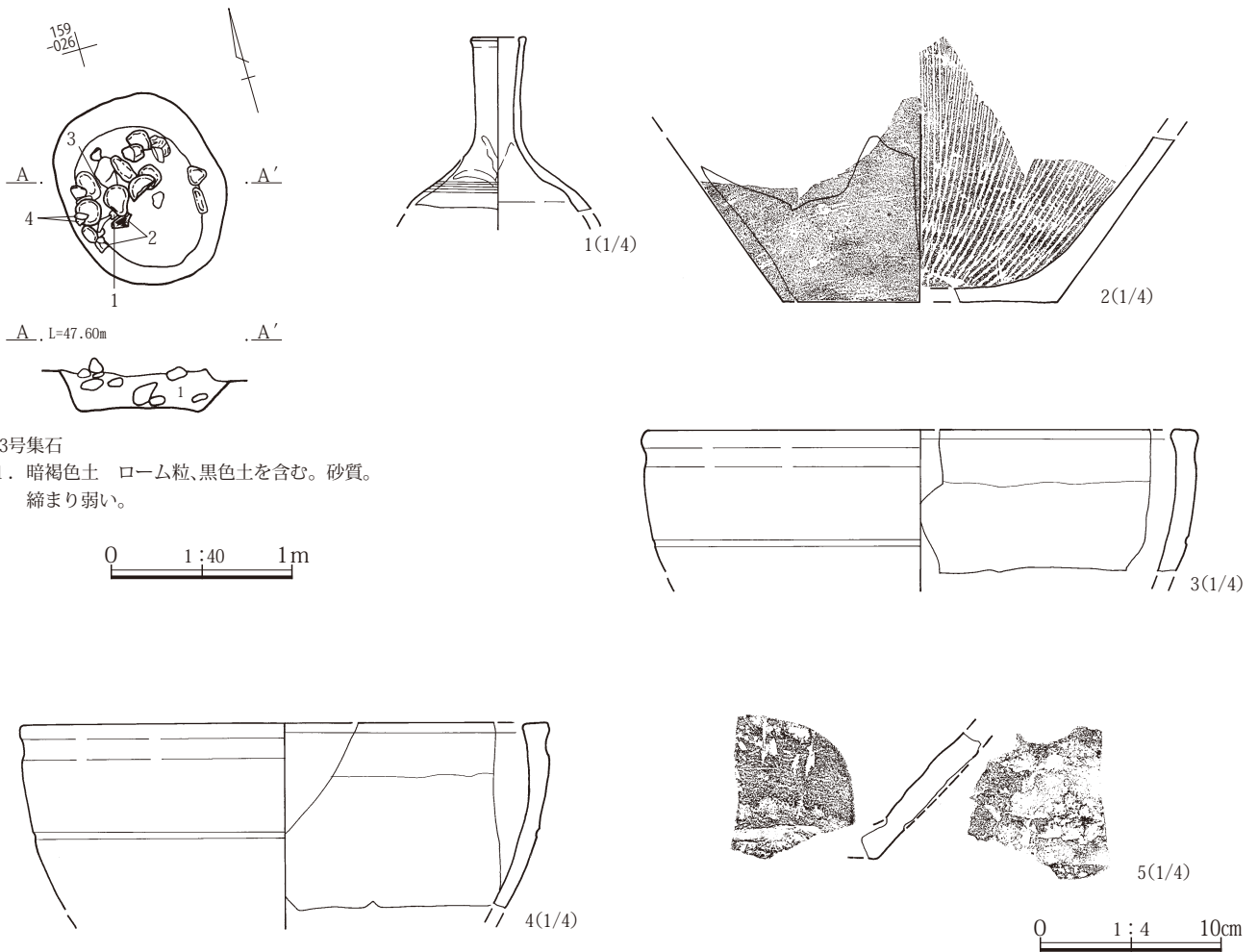
出土遺物は少なく、掲載したのは5点であるが、在地系土器の火鉢(3・4)は同一個体の可能性がある。遺物から見た遺構の年代は不詳で、江戸時代と広くとらえるべきであろう。5の在地系土器の片口鉢は中世のものであり、混入である。その他小破片として近世の施釉陶器2点、在地系土器皿1点が出土している。

15号集石(第154図、第78表、P L. 64-5・6, 96)

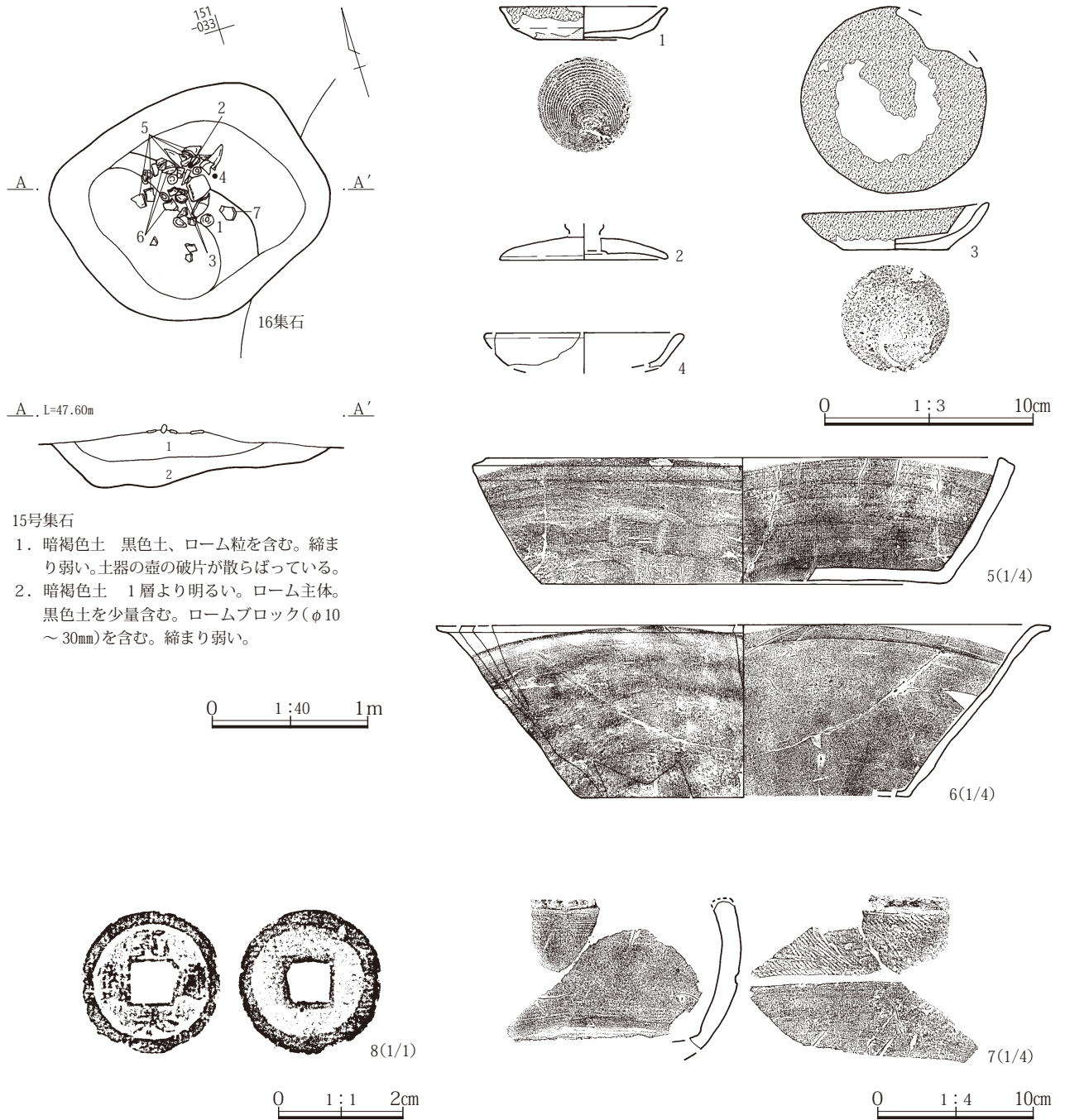
北調査区南端の中央付近にある。16号集石と重複し、本遺構が新しい。確認面では石が狭い範囲に集中していたが、埋土にはほとんど含まれてない。平面図に見える

石は確認面の状態である。掘方は長さ1.61m、幅1.39mの歪んだ長方形で、主軸方位はN-72°-E、深さは0.35mである。

出土遺物には中世遺物を含まない。掲載したのは8点で、施釉陶器2点、在地系土器5点、「寛永通寶」1点である。施釉陶器のうち、灰釉を施した蓋(2)は近世か近代か不明である。一方の灯火皿(1)は志戸呂諸窯の製品であり、県内では18世紀中頃~後半に出土量が増加するものである。在地系土器も江戸時代のものと考えられる。その他小破片として、近世の在地系土器焙烙・鍋が4点、同皿が4点、時期不詳の土器類7点が出土しているほか、近代の陶磁器も3点認められる。これらの遺物は確認面で出土しているので、近代の遺物は混入である可能性も高いが、本遺構の時期が下がることも考えられる。



第153図 13号集石平断面図・出土遺物



第154図 15号集石平断面図・出土遺物

16号集石(第155～157図、第78・79表、P.L. 64-7・8, 97)

北調査区南端中央付近にあり、南側が調査区外となる。11・12号土坑墓、15号集石よりも古く、87号土坑よりも新しい。

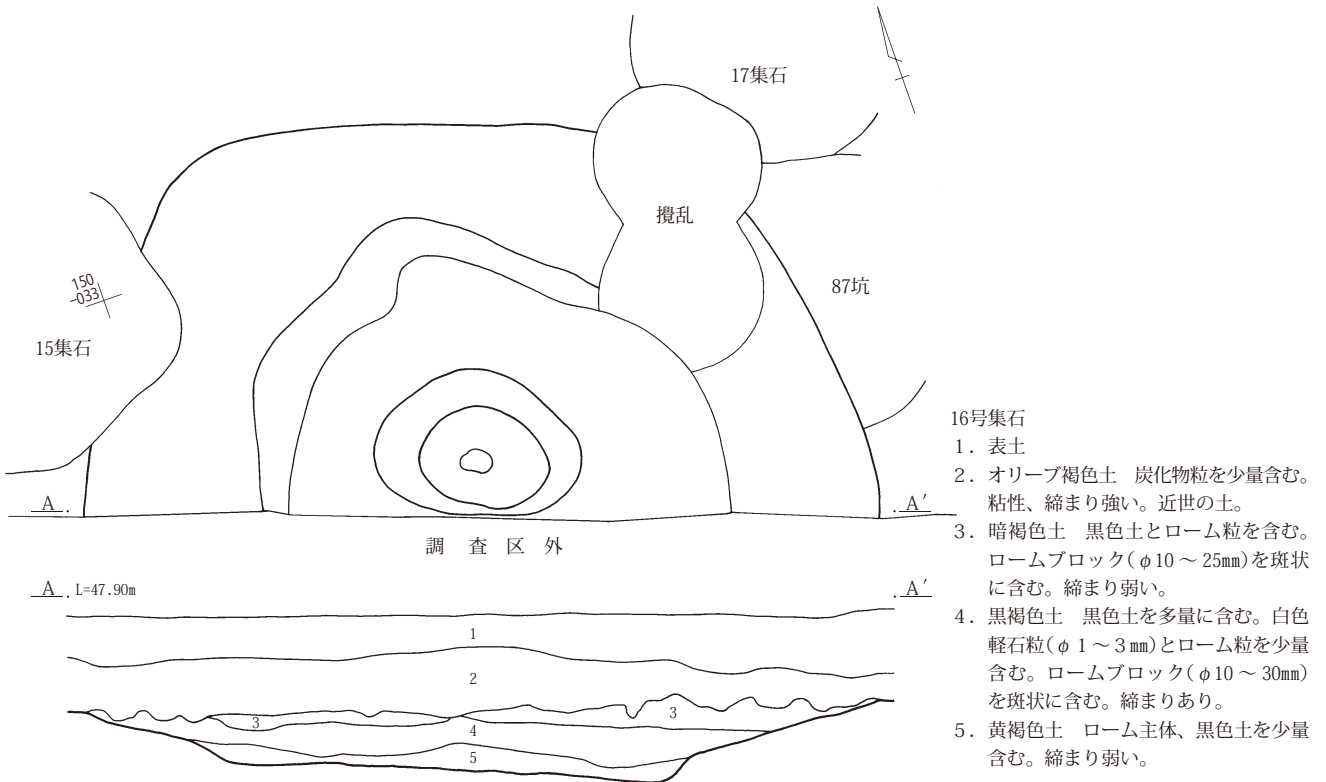
確認面で多くの石が集まっていたため「集石」として調査し、遺物も大部分がその高さから出土したが、セクションに見えるように、旧耕作土底面には凹凸があって集石の掘方埋土との境が明確ではない。そのため、石や遺物

のかかなりの部分が旧耕作土に含まれるものであると思われる、後述の遺物の中に混入のものが含まれている可能性は高い。掘方は調査区の壁で計測して長さ4.20m、幅は2.06mで調査区外となる。深さは0.65mで、底面の中央が一段低くなる。

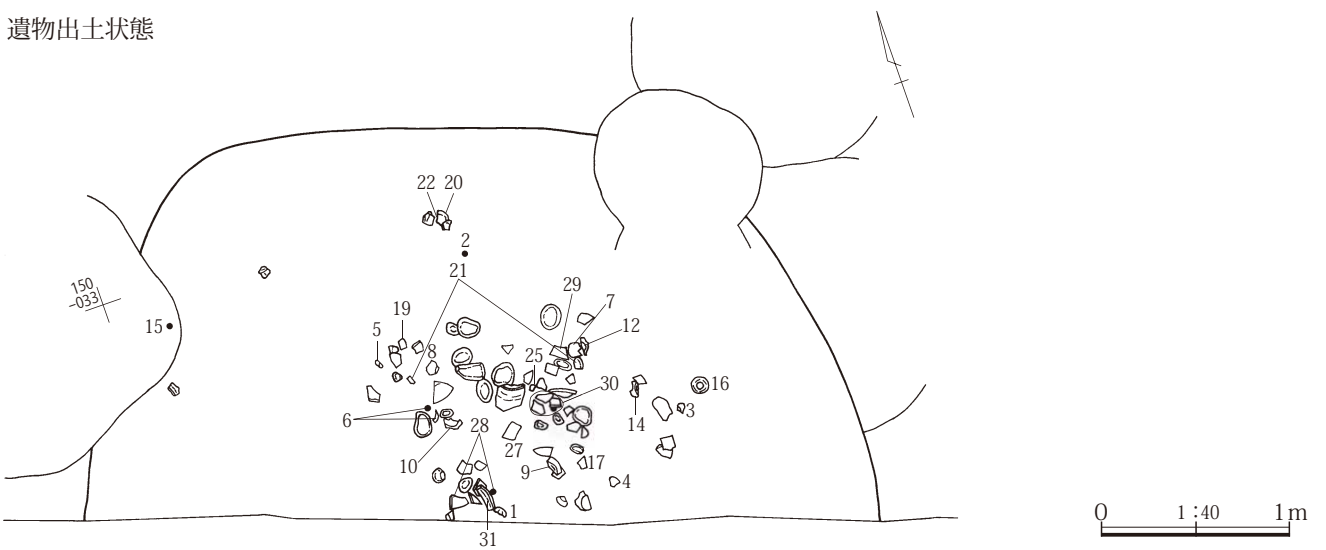
出土遺物は比較的多い。掲載したのは31点で、磁器8点、施釉陶器12点、在地系土器11点である。在地系土器の釜輪(31)は近世か近代か不明であるが、その他は江戸時代のものであると考えられる。陶磁器は概ね18世紀以降の所

産である。小破片のため未掲載の遺物も多く出土しているが、そのうち近世遺物の内訳は磁器10点、施釉陶器15点、在地系土器焙烙・鍋22点、同皿16点であり、時期不詳の遺物は在地系土器類35点、瓦2点、十能瓦3点である。十能瓦の生産は江戸時代にまで遡る可能性があるが、普及するのは近代だと考えられる。その他、近代の陶磁器も10点出土しているが、前述のように混入の可能性もあるので、これらの遺物がそのまま遺構の時期を確定す

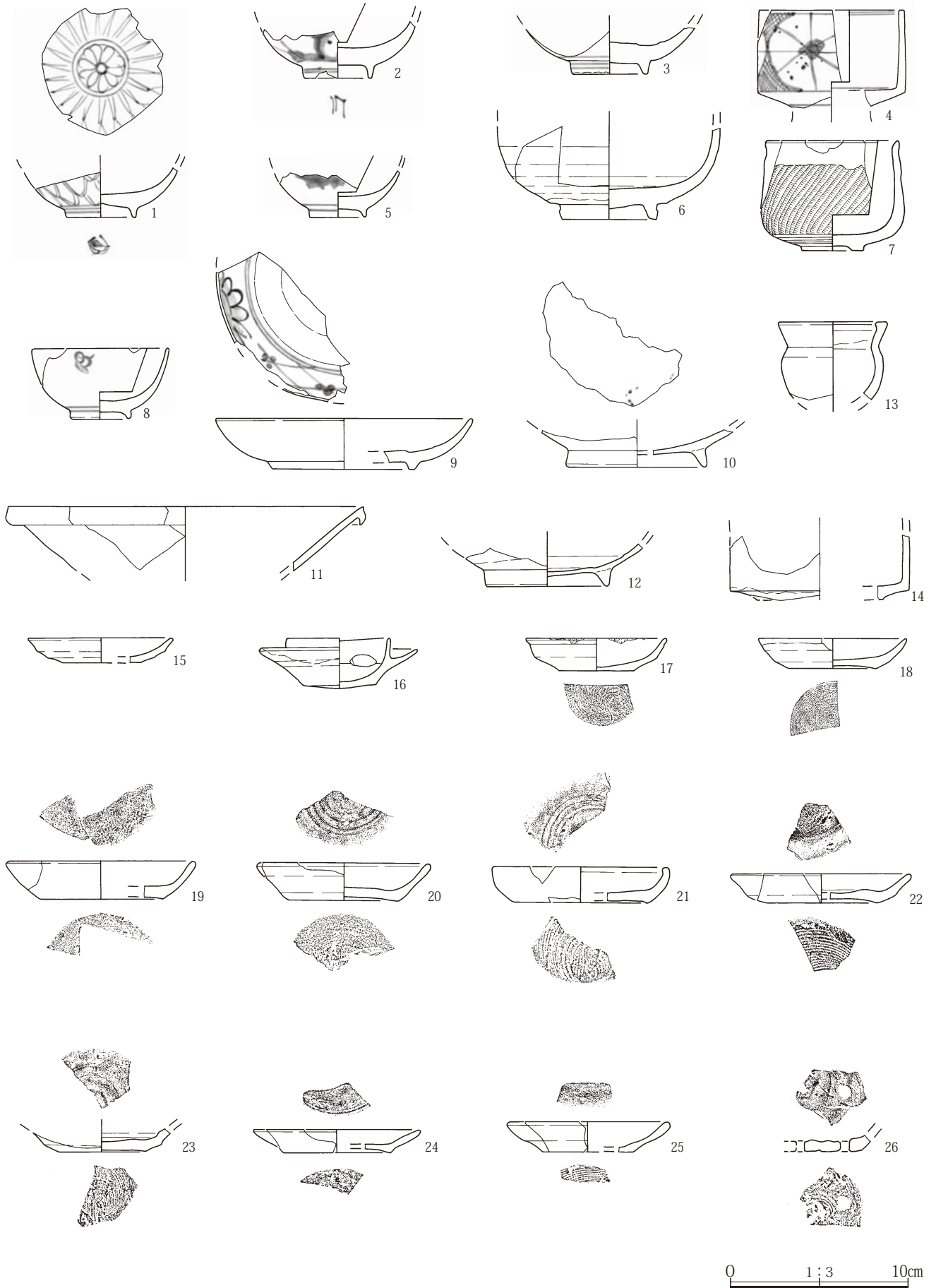
るものではない。そのためこの遺構の時期は、18世紀以降とやや広めに考えておくのが妥当だと思われる。



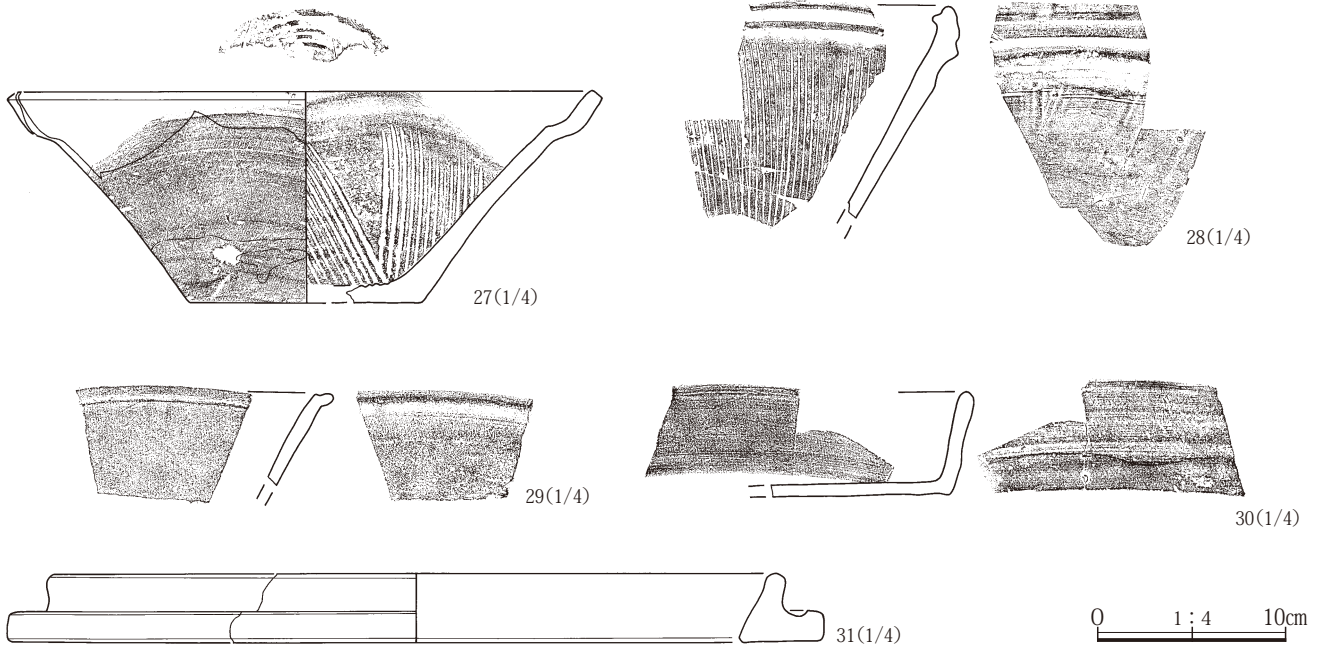
遺物出土状態



第155図 16号集石平断面図・遺物出土状態図



第156図 16号集石出土遺物(1)



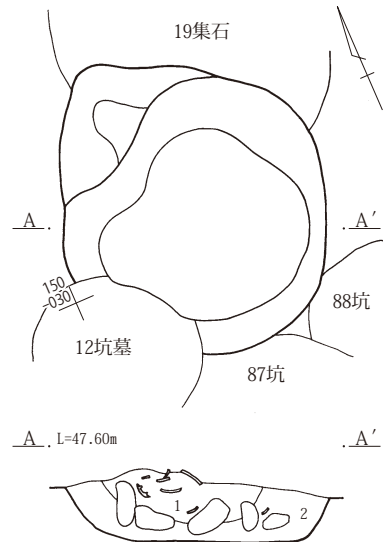
第157図 16号集石出土遺物(2)

17号集石(第158～160図、第79・80表、P L. 65-1・2, 97)

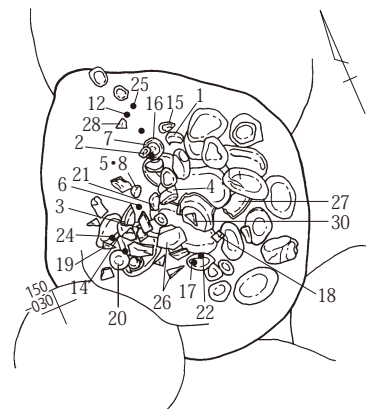
北調査区南端中央付近にある。12号土坑墓よりも古く、19号集石、87・88号土坑より新しい。

確認面で多くの石、遺物が見られ、埋土にも多く含まれている。特に下層の石が大きい。掘方は不整形で、長さ1.70m、幅1.45m、深さ0.30mである。

出土遺物は比較的多いが、中世遺物は出土していない。掲載したのは30点で、陶磁器類は概ね18世紀中頃～後半であり、19世紀にまで下るものはない。灯火具の量が多く、陶器では志戸呂諸窯産が多い。その他小破片のために未掲載の近世遺物には、施釉陶器7点、在地系土器焙烙・鍋9点、同皿3点があり、時期不詳の在地系土器類は7点である。1点のみ近代の陶磁器が出土しているが、混入の可能性も考えられる。



遺物出土状態

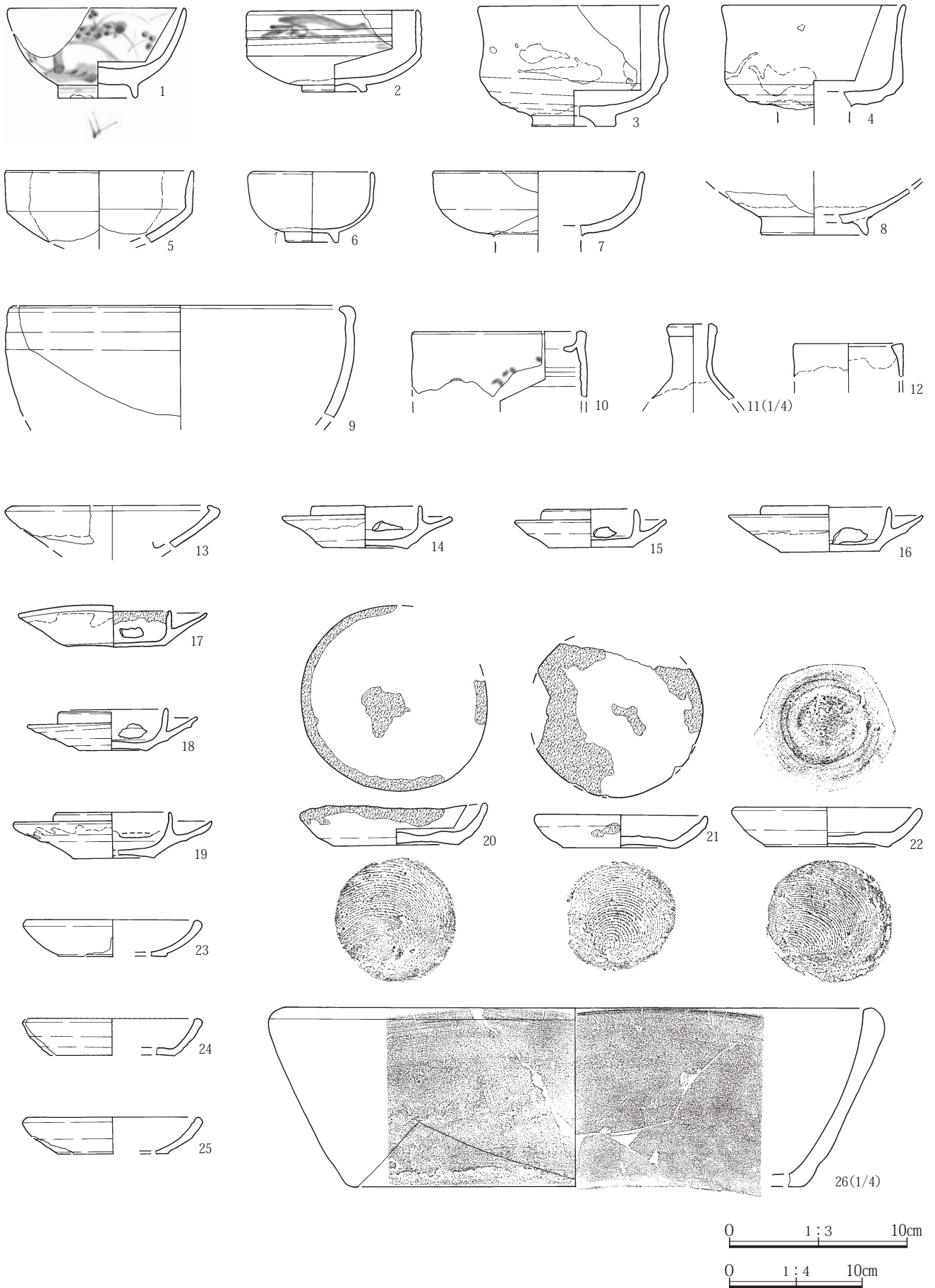


17号集石

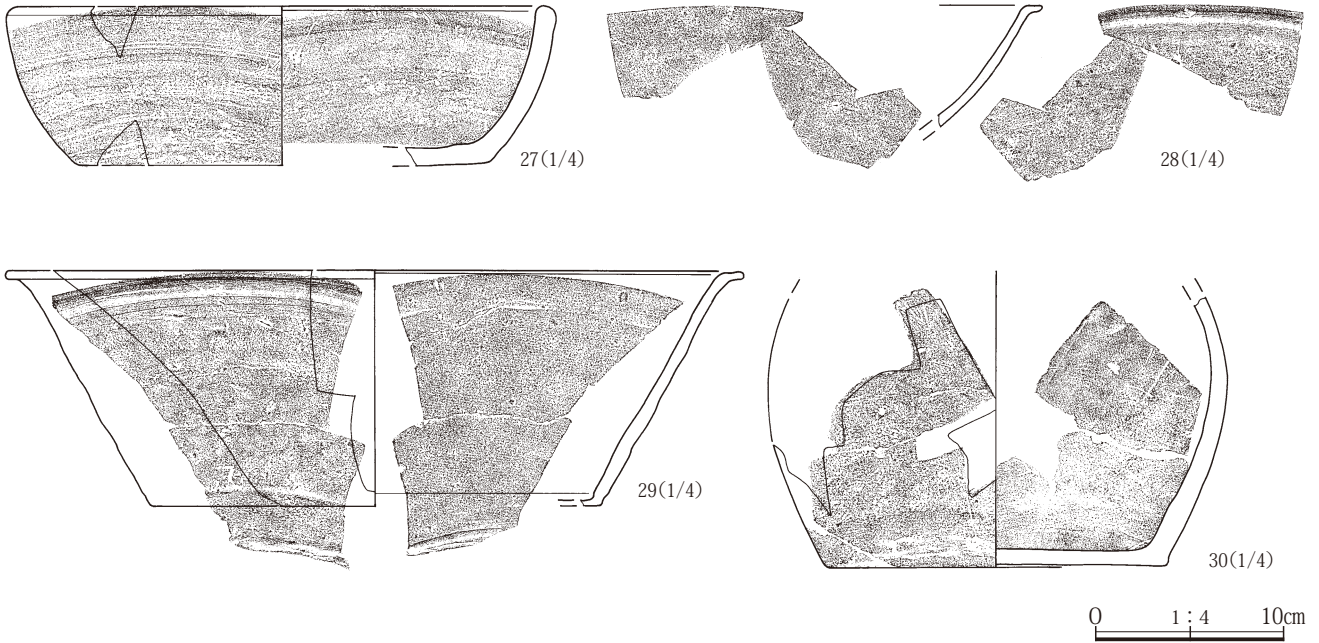
1. 暗褐色土 黒色土とローム粒を含む。締まり弱い。土器、陶磁器の破片を含む。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量含む。木片をわずかに含む。締まり弱い。

第158図 17号集石平断面図・遺物出土状態図

第3章 調査の成果



第159図 17号集石出土遺物(1)



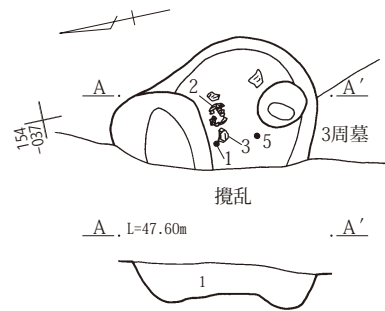
第160図 17号集石出土遺物(2)

18号集石(第161図、第80表、P L. 65-3・4, 97)

北調査区南端付近中央やや西よりにある。西側を1号溝と名付けた現代溝に壊されている。3号周溝墓よりは古い。

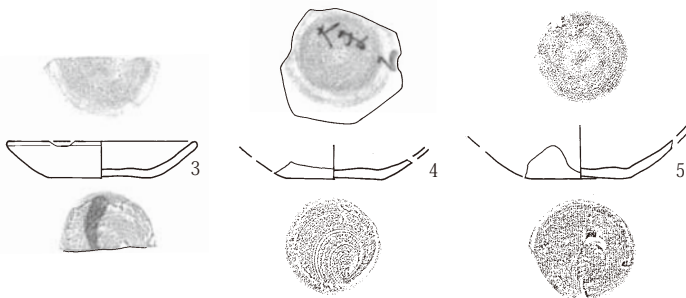
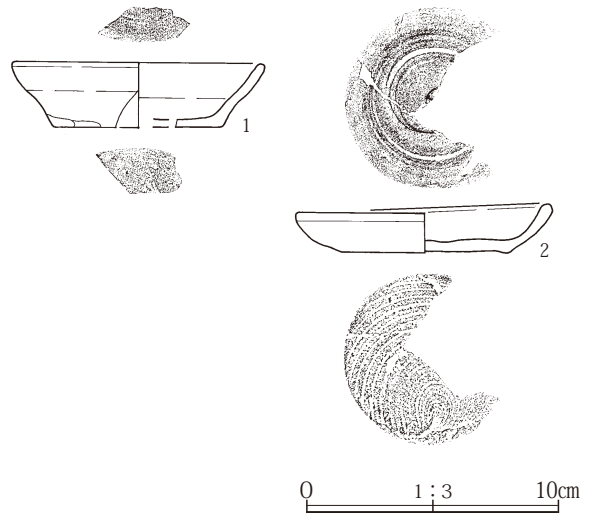
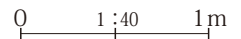
確認面で石・遺物が出土したが、埋土には少ない。掘方は不整形で、長さは最も長いところで計測して1.08m、深さは0.19mである。

出土遺物は少ない。非掲載の遺物も含めて中世に遡る可能性があるのは在地系土器皿(1)1点のみである。他の掲載遺物はすべて江戸時代の在地系土器皿で、3・4には墨書がある。その他小破片のために未掲載の近世遺物には磁器1点、施釉陶器3点、在地系土器焙烙・鍋3点、同皿8点があり、時期不詳の在地系土器類は10点ある。1点のみ近代の陶磁器が出土しているが、混入の可能性も考えられる。



18号集石

- 1. 暗褐色土 ローム粒、黒色土を含む。炭化物を少量含む。鉄さびを含んだ土を少量含む。縮まり弱い



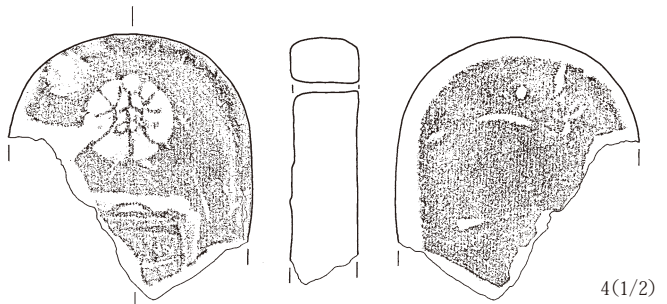
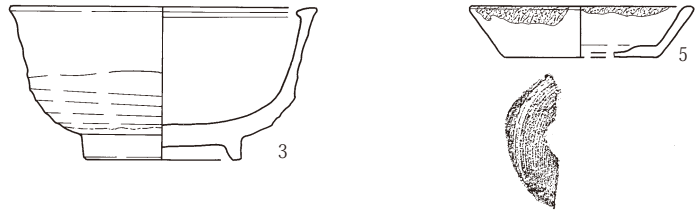
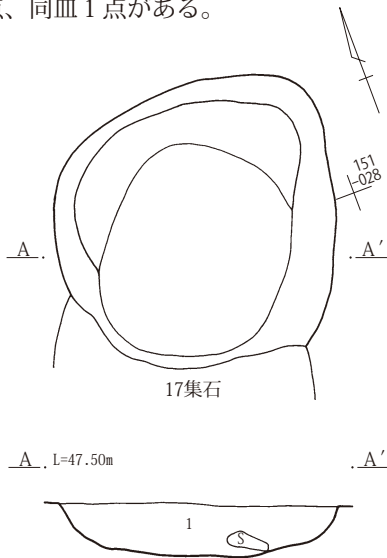
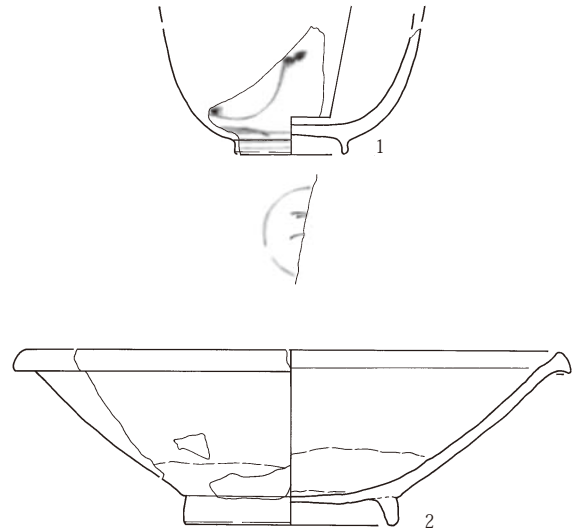
第161図 18号集石平断面図・出土遺物

19号集石(第162図、第81表、P.L. 65-5・6, 97)

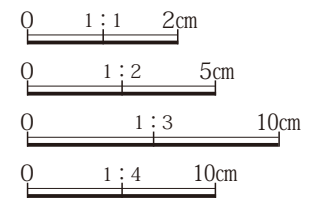
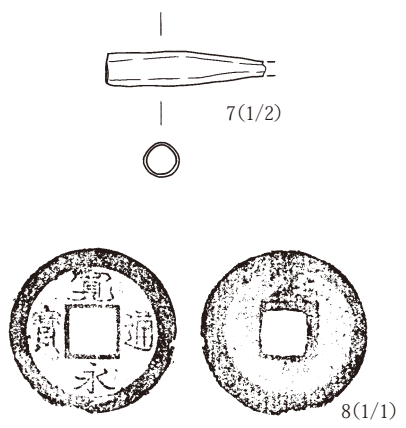
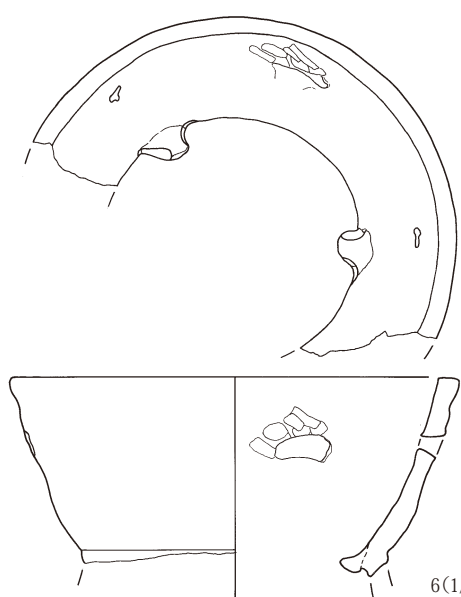
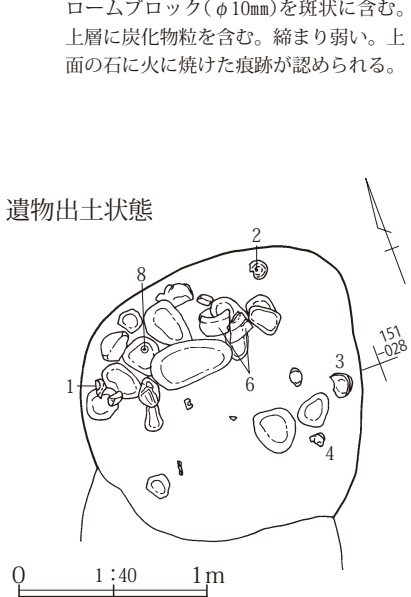
北調査区南端付近ほぼ中央にある。南側に17号集石が重複し、本遺構が古い。

確認面に比較的大きな石が多くあったが、埋土には少ない。上面の石には火を受けた痕跡があり、埋土の上層には炭化物が含まれている。掘方は長径1.60m、短径1.48mのやや不整な円形で、深さは0.28mである。

出土遺物は比較的少ないが、すべて江戸時代の所産であり、近代の遺物はない。陶磁器は17世紀末以降のものである。4は有印土製品と称されるものであるが、搬入系か在地系か不明であり、県内では希少例である。その他小破片の遺物は施釉陶器1点、在地系土器焙烙・鍋2点、同皿1点がある。



19号集石
1. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を含む。
ロームブロック(φ10mm)を斑状に含む。
上層に炭化物粒を含む。締まり弱い。上面の石に火に焼けた痕跡が認められる。



第162図 19号集石平面図・遺物出土状態図・出土遺物

5 井戸

井戸と思われる遺構は、北調査区南西側に散在して6基見つかった。調査にあたっては、壁の崩落の危険性があるため、6号井戸を除いて、途中で掘り下げを取り止めた。

1号井戸(第163～168図、第81～84表、P.L. 63-7・8, 98, 99)

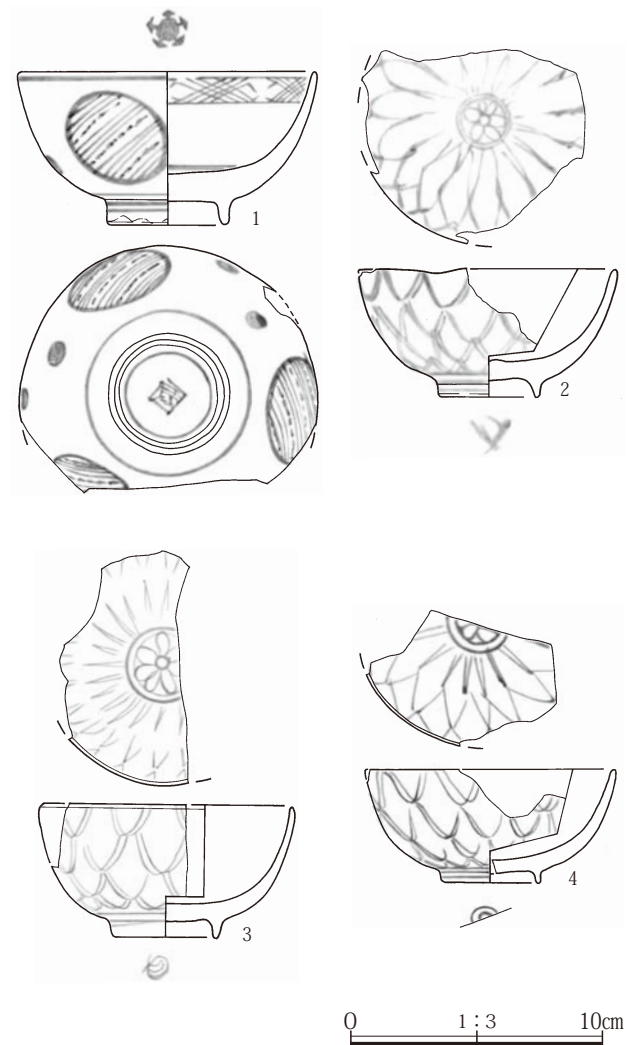
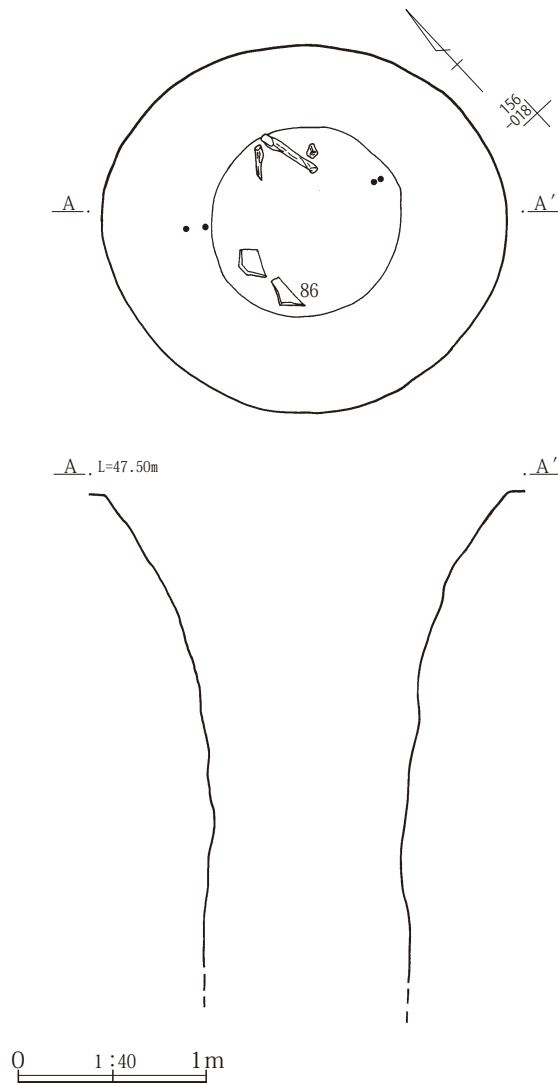
北調査区南端近くのやや東寄りにある。重複遺構はない。確認面で多くの石が出土したので、当初「12号集石」と名付けて調査を開始したが、掘方が深くなり、井戸であることが判明したため、1号井戸と名称を改めた。

確認面では長径2.12m、短径1.92mのほぼ円形で、深さは2.50mまで確認した。断面形は径約1.00mになるまでは徐々に狭くなり、それ以下はそのまま垂直に掘られ

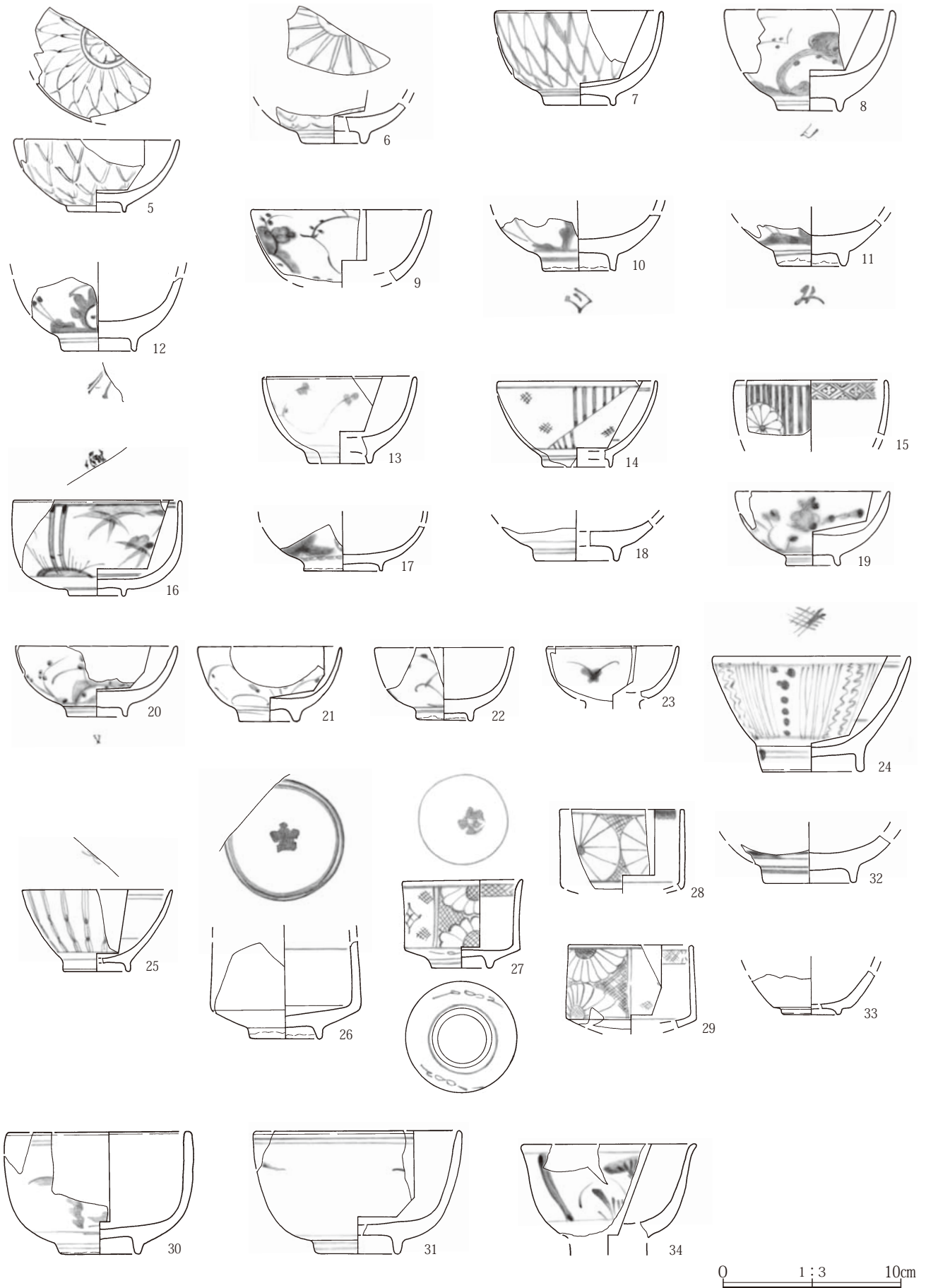
ている。埋土の中から馬の右肢骨が出土している。これについて詳細は229ページを参照していただきたい。

遺物は数多く出土したが、大部分は上部の礫が集中している部分から出土している。17世紀代から近現代の可能性のあるものまで年代幅がある。しかし、小破片のため掲載しなかった遺物を含めても、明らかに近現代とわかる陶磁器類は少ないので、これらは混入の可能性が高い。近世陶磁器は広東碗(24)、小広東碗(25)、筒形碗(27)などの19世紀初頭頃の碗やその後に現れる端反碗(34)や深筒丸碗(35、42)が認められる。また、土器類でも器高が低く平底の焙烙(82)が認められ、19世紀中頃を下限として想定される。井戸が埋没したのはそれ以降であろう。

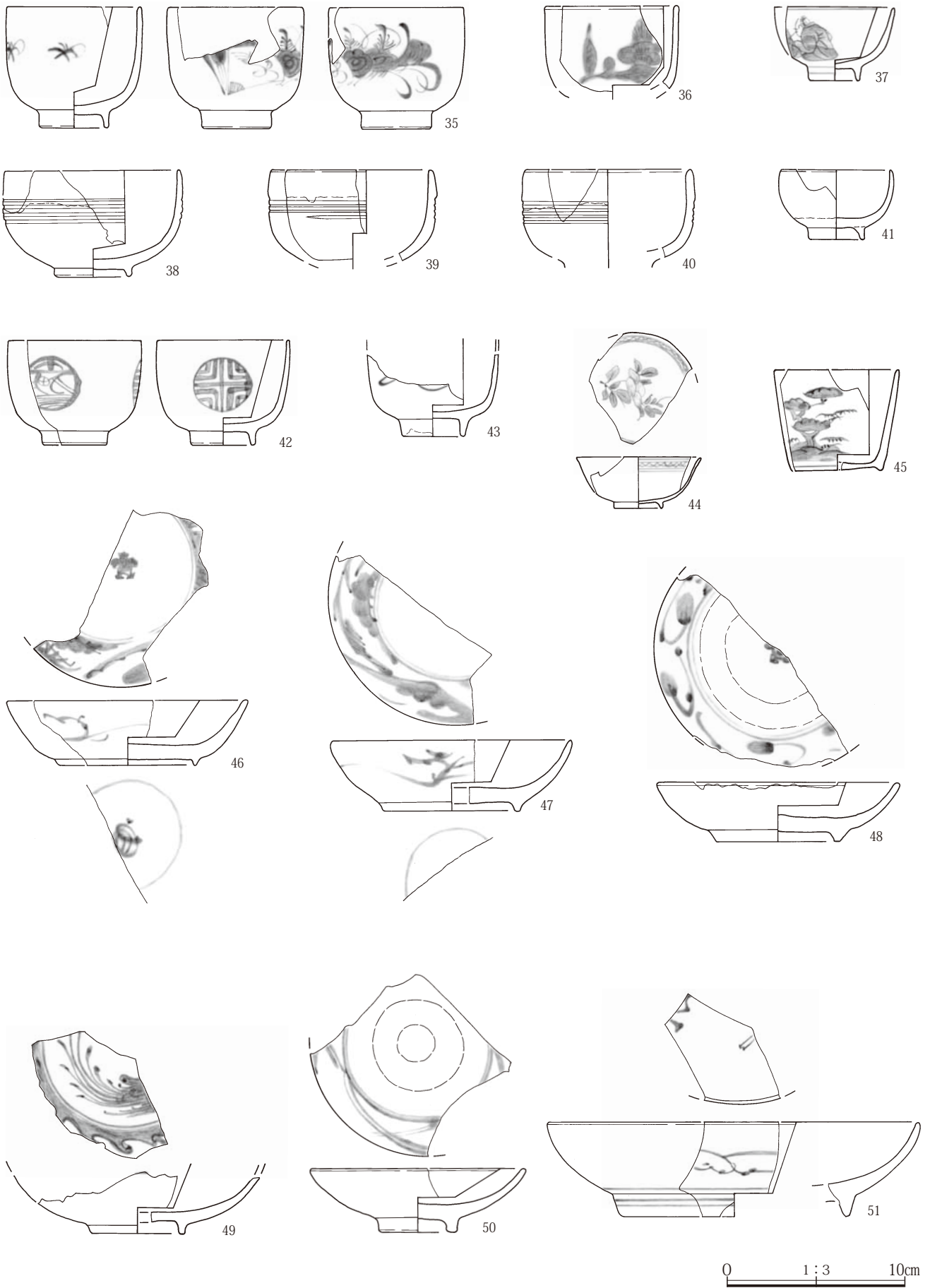
その他小破片で掲載しなかった遺物には、近世の国産磁器24点、施釉陶器20点、在地系土器の焙烙・鍋類36点、同皿6点があり、時期不詳の土器類が112点、同瓦が68点出土している。



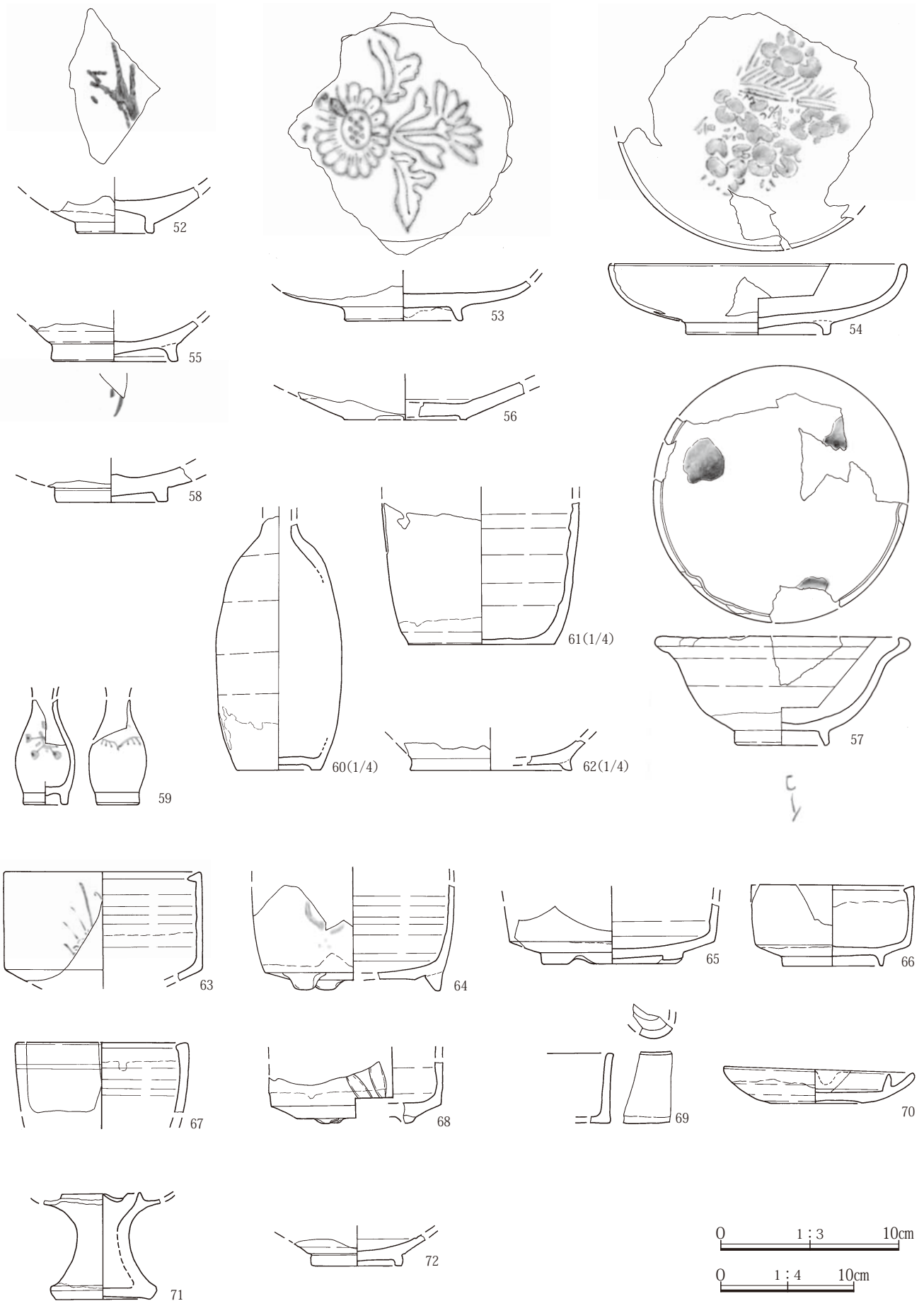
第163図 1号井戸平断面図・出土遺物(1)



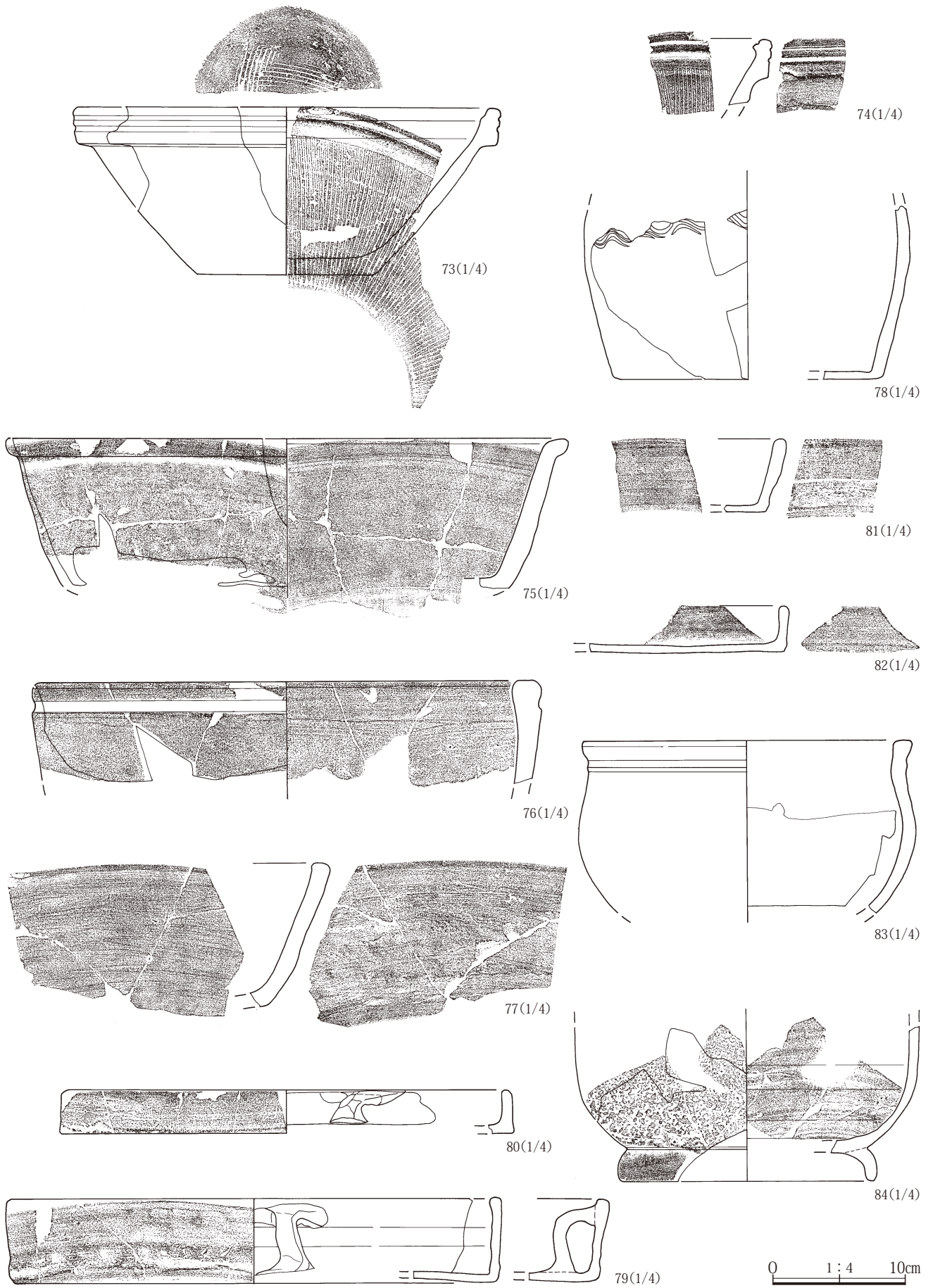
第164図 1号井戸出土遺物(2)



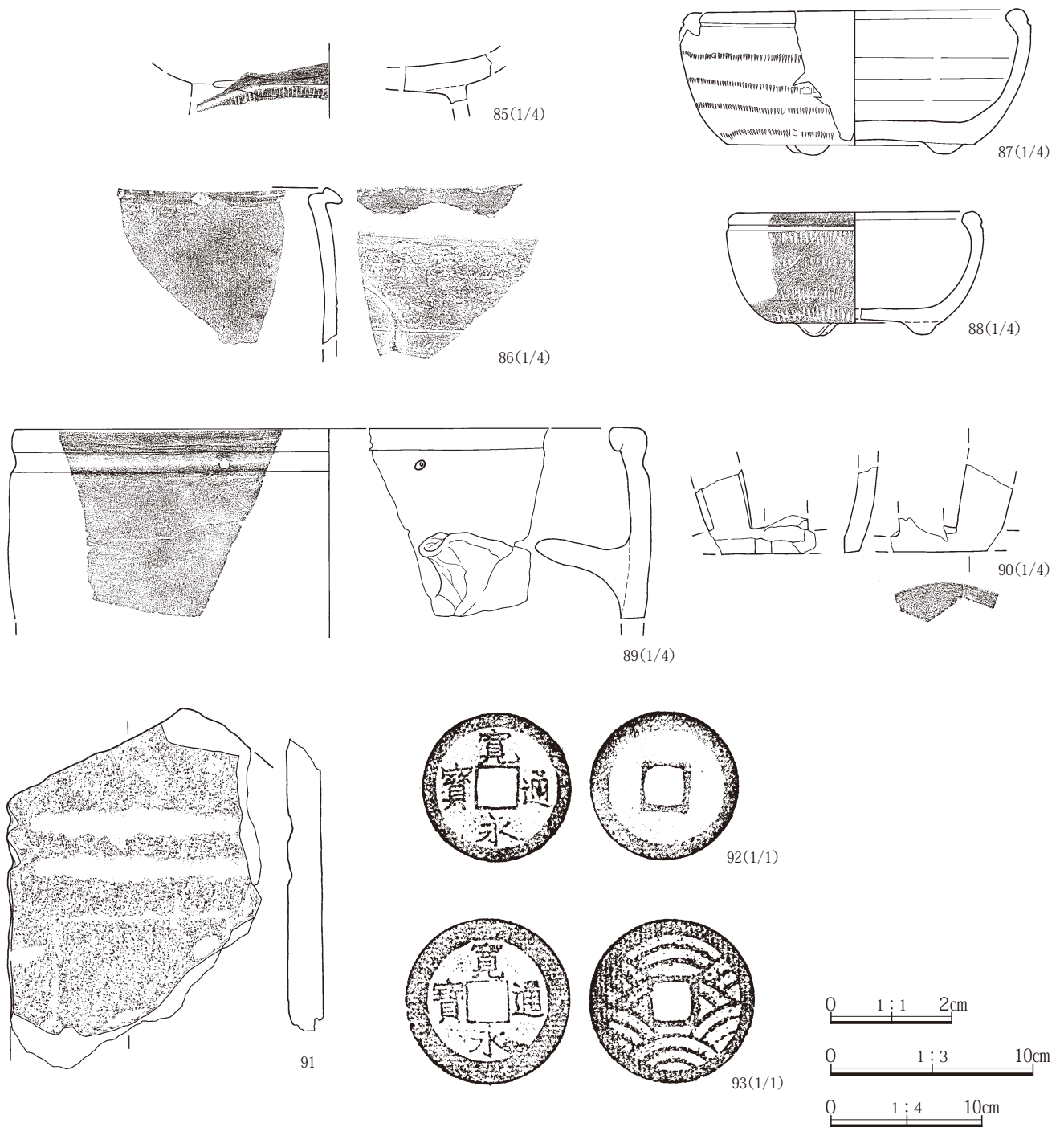
第165図 1号井戸出土遺物(3)



第166図 1号井戸出土遺物(4)



第167図 1号井戸出土遺物(5)



第168図 1号井戸出土遺物(6)

2号井戸(第169図、第84表、P.L. 63-9)

北調査区南部中央付近にある。重複遺構はない。長径1.08m、短径0.95mのほぼ円形で、深さ3.13mまで確認した。上端部分は少し広がるが、ほぼ垂直に掘られている。

出土遺物は少なく、掲載したのは肥前磁器碗1点、在地系土器の鉢1点、焙烙1点のみである。その他小破片として国産磁器1点、在地系土器の焙烙・鍋類2点、同

皿1点である。

時期は出土遺物が少ないので確定できず、埋没したのは近世末以降と考えられる。

3号井戸(第170図、第84表、P L. 63-10, 99)

北調査区西部のほぼ中央にある。69号土坑と重複し、本井戸が古い。長径1.85m、短径1.72mのほぼ円形で、深さは2.21mまで確認した。断面形は徐々に狭くなっている。埋土から石が出土するが、特に意味があるものとは認められない。

出土遺物はごく少なく、掲載できたのは竈か炉の内壁片と思われるものだけである。その他小破片として中世の焼締陶器1点、時期不明の土器類42点が出土している。

時期は遺物が少ないので確定できないが、明らかに近世以降と思われる遺物が出土していないので、中世にまで遡る可能性が高い。

4号井戸(第170図、第84表、P L. 63-11)

北調査区南西部にある。64号土坑より古く、1号道路状遺構北側溝よりも新しい。4号周溝墓の内部にあり、本井戸が新しい。長径1.49m、短径1.32mのほぼ円形で、深さ3.63mまで確認した。断面形は徐々に細くなり、最も下部では径0.54mとなる。

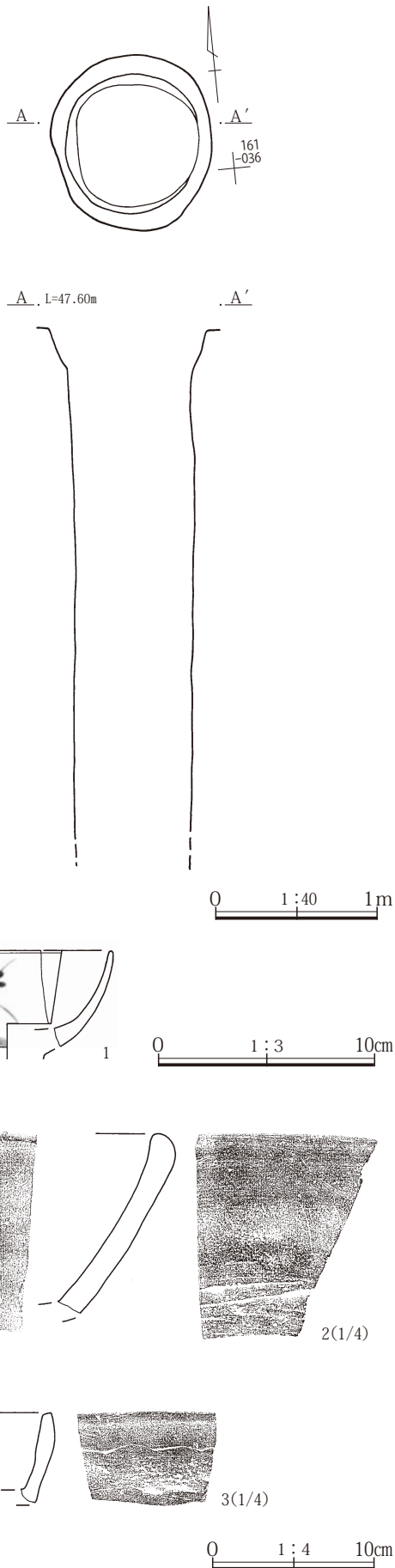
出土遺物は少なく、掲載できたのは瀬戸・美濃陶器の徳利1点、中世の常滑陶器の甕1点、丸瓦片1点である。その他小破片として中世の焼締陶器1点、近世の国産磁器1点、施釉陶器5点、在地系土器の焙烙・鍋類9点、瓦22点、時期不詳の土器1点が出土している。

時期は出土遺物が少ないので明らかではないが、3の丸瓦片は近代にまで下がる可能性があり、また、瓦の中には十能瓦も2点含まれていることから、埋没したのは近代にまで下る可能性が考えられる。

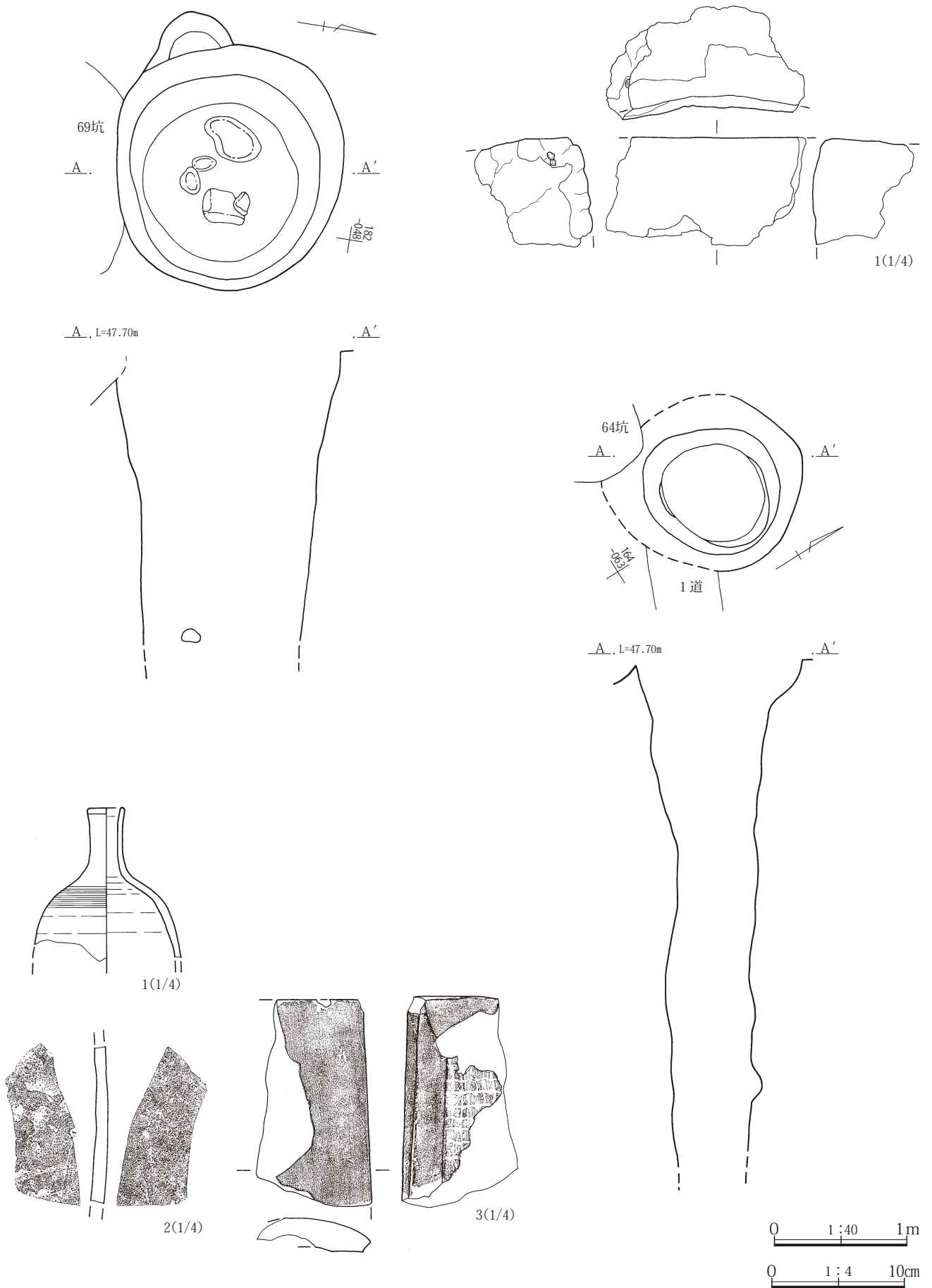
5号井戸(第171・172図、第84・85表、P L. 63-12～14, 99, 100)

北調査区南西部にある。重複遺構はない。長径1.02m、短径0.98mのほぼ円形で、深さは2.53mまで確認した。埋土最上部に石が多く含まれており、埋め戻しの最後に投げ込まれたものと考えられる。

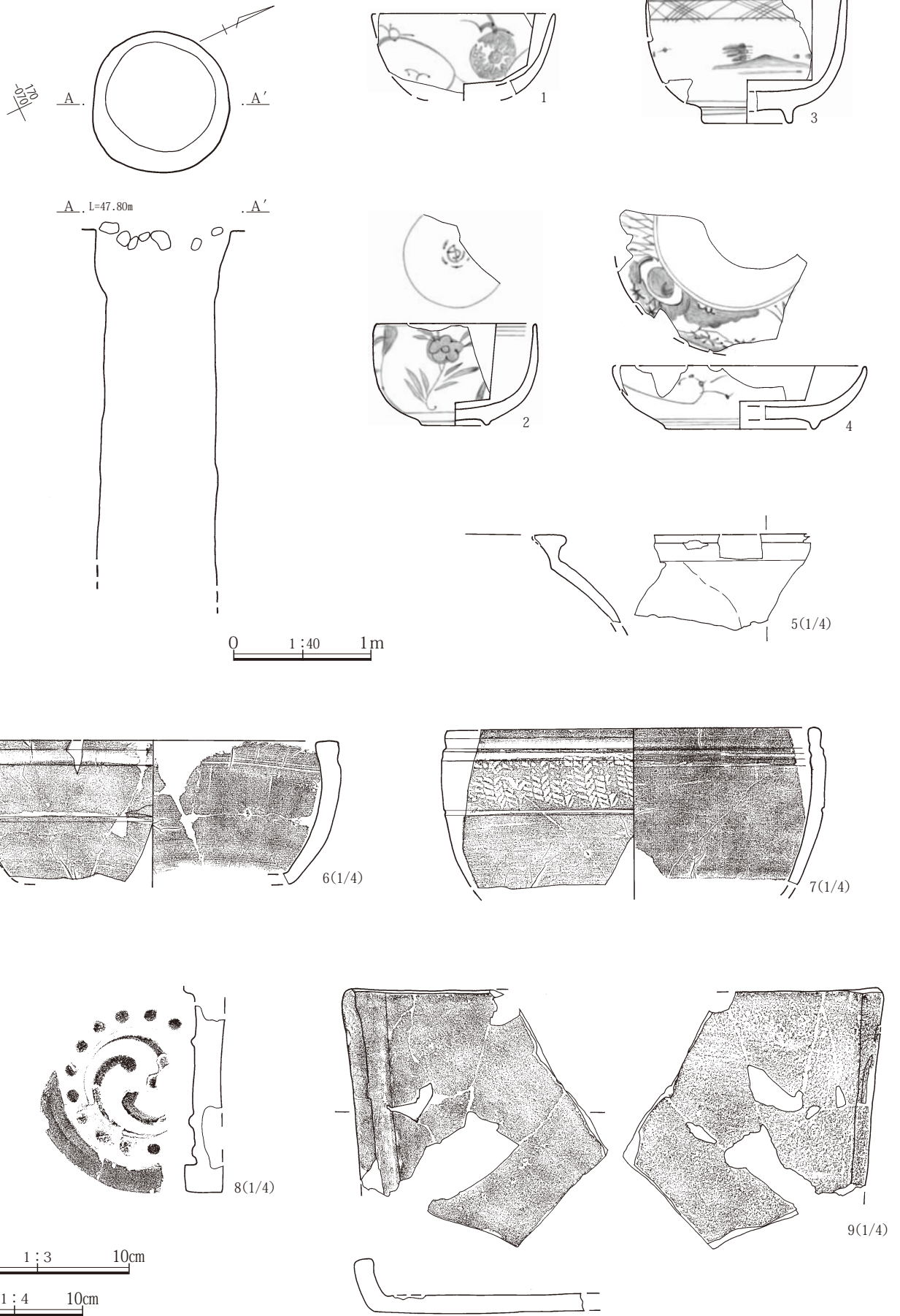
出土遺物は比較的多く、11点を掲載した。その他小破片として近世の国産磁器1点、在地系土器の焙烙・鍋類4点、同皿3点、同その他の器種79点で、十能瓦は3点が出土している。埋没した時期は十能瓦が出土していることから、近世末以降と考えられる。



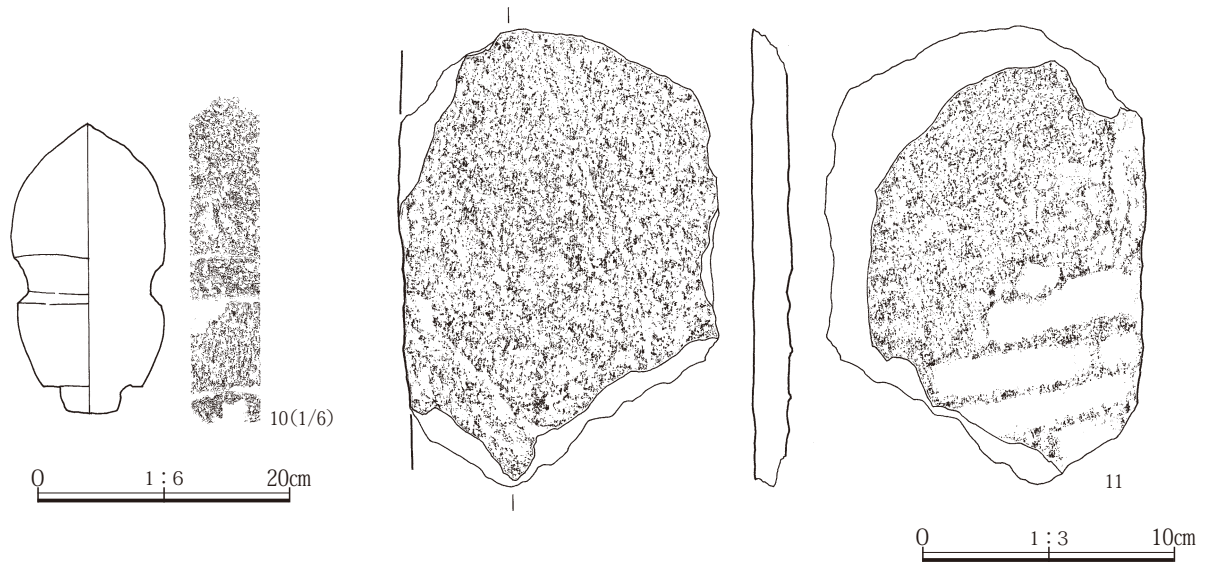
第169図 2号井戸平断面図・出土遺物



第170図 3・4号井戸平面断面図・出土遺物



第171図 5号井戸平断面図・出土遺物(1)



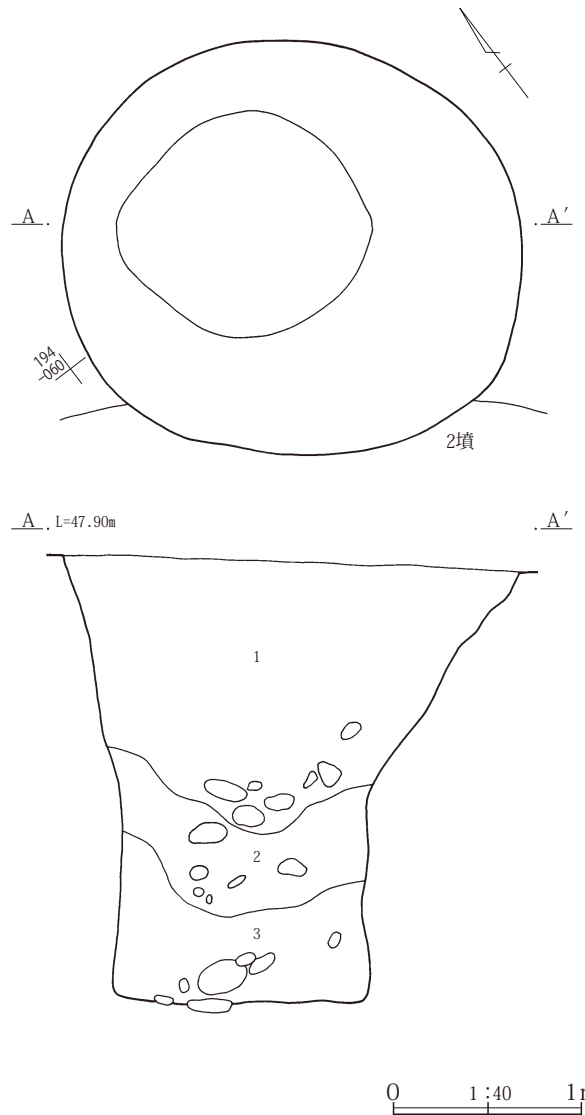
第172図 5号井戸出土遺物(2)

6号井戸(第173・174図、第85表、P L. 63-15, 100)

北調査区西部の中央西寄りにある。2号古墳周堀と重複し、本井戸が新しい。深さ2.32mと浅いが、形状から井戸と考えられる。中央より上は急激に大きくなり、確認面での大きさは長径2.45m、短径2.15mの楕円形である。中央よりも下は径約1.30mのほぼ円形となる。

出土遺物は少なく、掲載したのは4点で、その他小破片として中世の焼締陶器4点、土師器甕類732g、同杯類79gが出土しているのみである。

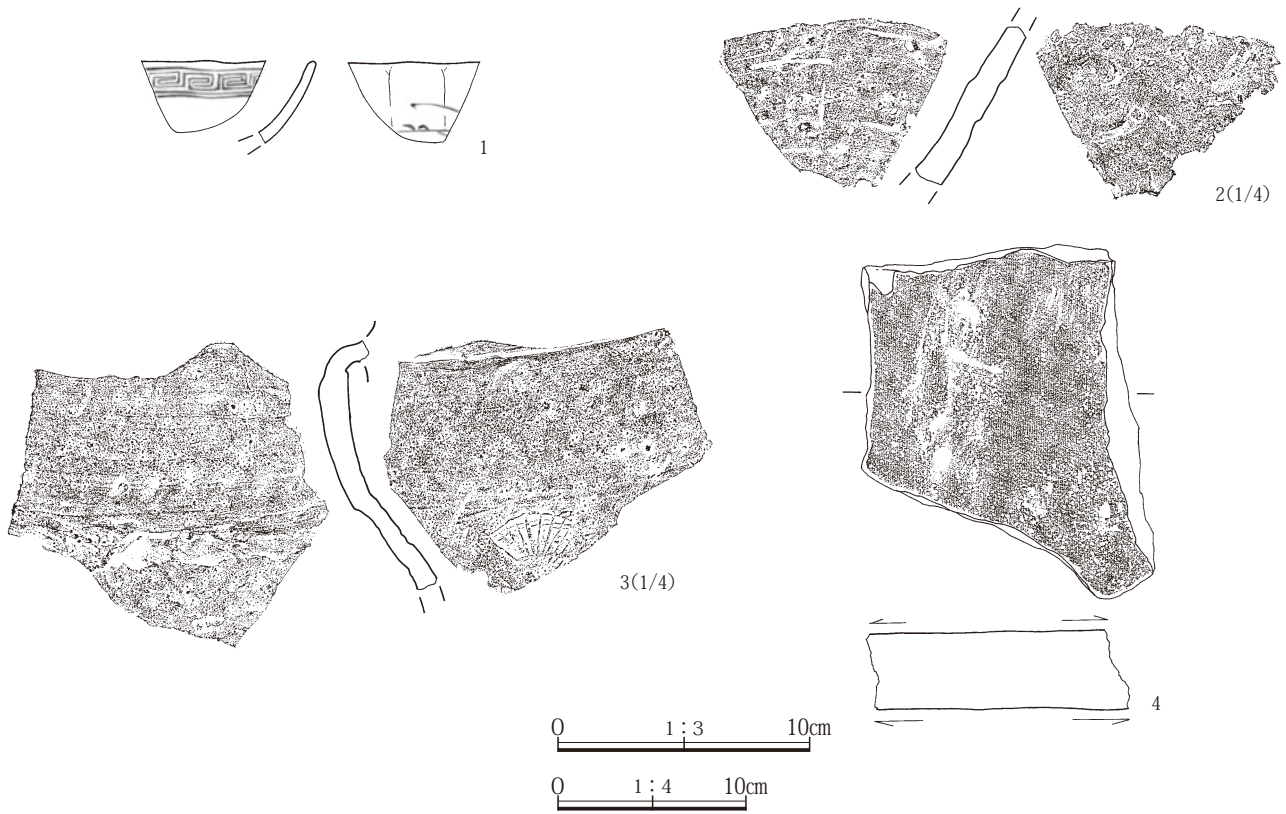
1の肥前磁器以外は中世以前の遺物が目立つ。この1の出土を重視すれば埋没したのは近世以降ということになるが、これは小破片なので混入品である可能性があり、中世の井戸であるとも考えることもできる。



6号井戸

1. 暗褐色土 黒色土、炭化物粒を含む。ローム粒を少量含む。縮まり弱い。
2. 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。黒色土を少量含む。やや砂質。縮まりほとんどない。
3. 褐色土 黒色土、ローム粒を含む。やや砂質。縮まりほとんどない。

第173図 6号井戸平断面図



第174図 6号井戸出土遺物

6 堀

「堀」と名付けた遺構は北調査区東端にあり、これを1号堀とする。南西から北東に向かってほぼ直線的に延び、南側は調査区外となっている。北半部は、非常に大きな現代の溝が入っており、それによって破壊されている。このため、約22.50m分を調査できただけである。また、東側に6号住居が重複していて、堀が新しいことを断面で確認した(第46図A-A'セクション参照)。

1号堀の上面幅は、南側の残りのよいところで計測して5.20～5.30m、底面幅は1.44～2.00m、断面は逆台形で底面は平坦である。深さは南側の最も深いところで1.27mある。走行はN-36°-Eであり、ほぼ直線的に延びている。

断面をみると、4層上面(底面から約45cm)に部分的に硬化面があり、また、中央付近では、その面の上面に礫が敷かれたように分布するところがあった(PL. 67-1・2)。礫が分布する範囲は長さ2m、幅1m程度と狭いので、全体に敷かれていたとは思えないが、堀が埋まっていく過程で、ある一定期間通路などとして使用されてい

た時期があった可能性が高いものと思われる。

また、北半部では、大量の石が堀の東側から堀の中に向かって流れ込んだような状況で出土した。(PL. 66-4・5)石は大きなものが多く、最大のものは長さ50cm、幅30cmある。これも一部分にしかないので、全体の状態を示すものではないが、堀の東側に石を多く使う施設があった可能性も考えられよう。この石は上述の硬化面上にあり、埋没の最終段階に流れ込んだものである。

出土遺物は土師器の小破片が多く、掲載したのは古銭2点のみである。1は「寛永通寶」で、1層から出土した。2は鉄銭で錆のため銭文は判読できないが「寛永通寶」だと思われる、前述の硬化面の下層から出土している。その他小破片として土師器甕類1,439g、須恵器甕類30gが出土している。

この1号堀の年代は、検討に値する遺物が少ないので明確ではないが、2の「寛永通寶」とされる鉄銭は先述の硬化面の下層から出土している。鉄銭の「寛永通寶」は元文4(1739)年以降に鑄造されており、とすれば、この堀が埋没したのは18世紀中頃以降のこととなる。堀の開削年代がいつまで遡るかは不明であるが、江戸時代の中

で考えるのが妥当であろう。なお、中世にも鉄銭は存在するが、实例は非常に僅少であり、この鉄銭がそれである可能性はまずないと思われる。

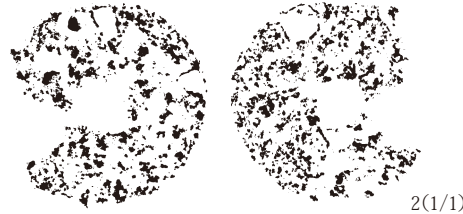
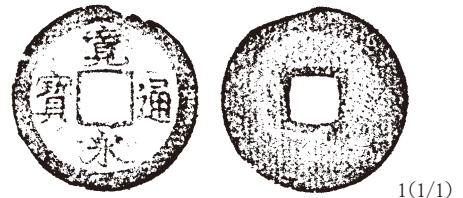
この堀の性格としては、直線的に延びる大規模なものであることから、東側に存在が知られている道原城との関連がまず考えられる。実際調査当時もそのように考え、『年報24』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2006）で調査担当者は、「東に隣接する道原城の未検出の堀切りと考える」と発表した。しかし、前述のように堀の埋没年代が18世紀中頃以降であるとする、16世紀後半とされる道原城とは年代差がありすぎることになる。調査範囲が狭いので断定することはできないが、道原城との関連を考えるのは些か困難であると言えよう。また、埋土に砂層などは見られないので、水流があったことを確認することはできず、そのため用排水路と考えることもできない。以上のようにこの溝の性格を考える根拠は非常に乏しく、現状では何らかの区画の堀であると思われるが、何を区画したものかは不明と言わざるを得ない。

7 溝

中近世の溝はいずれも南調査区第1面で調査したもので、5～16号までの12条である。11号溝と14号溝が接続している以外は、他の遺構との切り合いはない。いずれの溝からも、混入と思われる古代の土器片が出土しているだけで、中近世の遺物は出土していないが、第1面から見つまっていることから、中近世のものとして判断した。ただし、この面ではほかに3・4号溝もあるが、それらの溝は第6節2で述べたように平安時代のものである。

南調査区の東側にある1-1区では、5～8号の4条の溝を調査した。5～7号の3条は近接し、8号のみやや離れている。いずれも等高線に平行する方向、すなわち北西から南東に向かう方向であり、ほぼ並走している。また、埋土も同じ特徴をもっており、いずれも近い時期のものと思われる。

西側に位置する1-2区では9～16号の8条の溝を調査した。この区の第1面は全体に緩やかな凹凸があるだけで、急傾斜の部分はない。これらの溝の性格については本項末にまとめることにする。



第176図 1号堀出土遺物

5号溝(第177図、P L. 67-3～5)

5号溝は1-1区の北部にある。この区は北東から南西に向かって下がる地形なので、この溝が中近世の溝の中では最も高い位置にある。埋土は1層であるが、平面図の北西部を見ると、2条の溝が重複しているように見える部分があり、2時期の重複、ないしは掘り直しがある可能性もある。

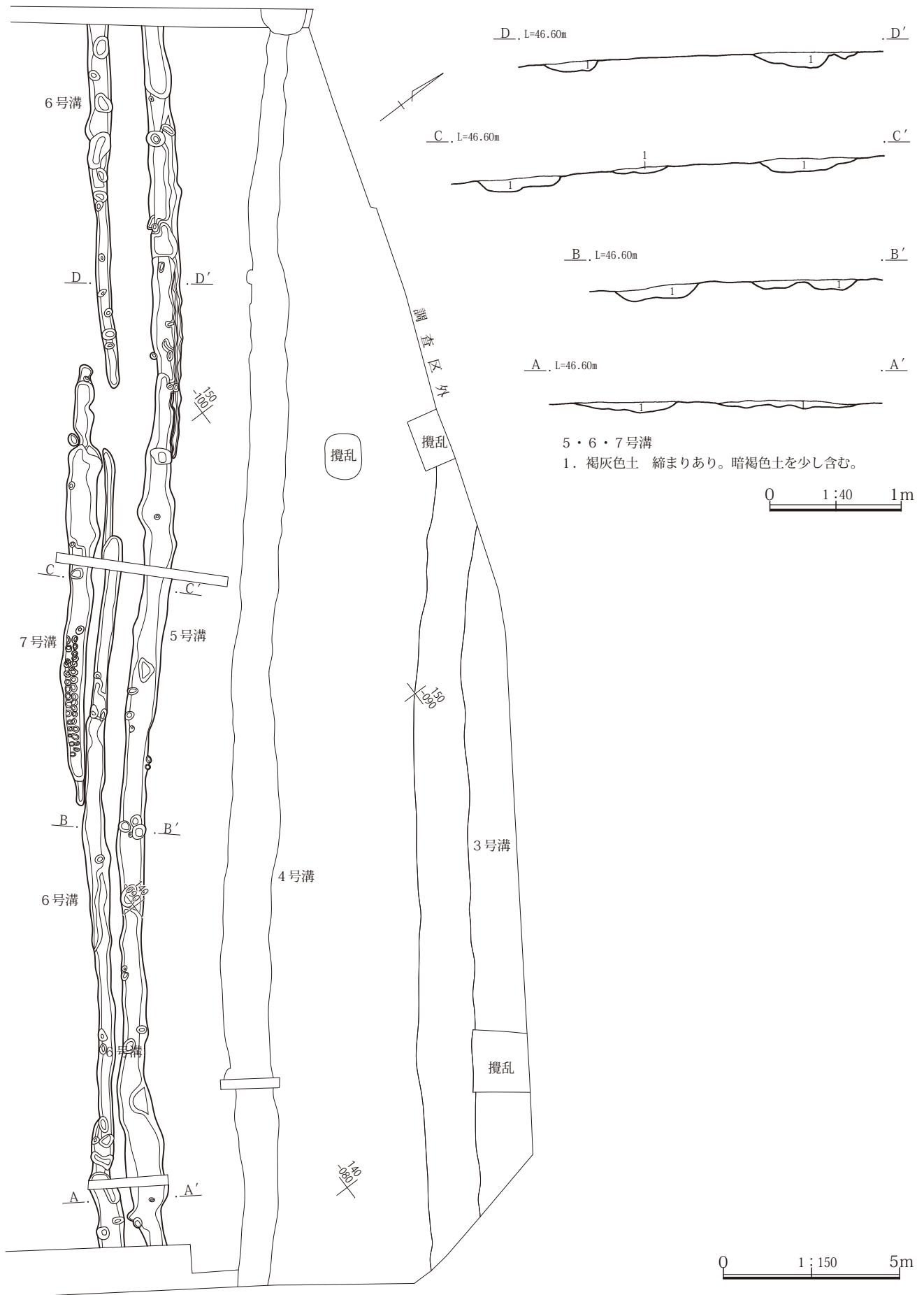
長さ34.60mで両端は調査区外となる。幅0.52～1.12m、深さは最も深いところで0.19m(ピット状の部分を除く)であり、両端の比高差は0.02mである。走行方向はわずかに蛇行するが、両端を結んだ方向は、N-53°-Wである。

埋土は1-1区のほかの溝と同様締まりのある褐灰色土であり、流水の痕跡は認められなかったが、この地区の中では高い位置にあり、給水路的な用途であった可能性はあると思われる。

出土遺物は混入と思われる土師器甕類の小破片が3点あるのみである。

6号溝(第177図、P L. 67-3・4・6)

1-1区北部にあり、5号溝のすぐ南西側に平行している。途中で1.75mほど途切れるが、走行方向から見て同一の溝と思われる、それを含め全長34.70m分を調査した。両端は調査区外へ延びている。ただし、西側はその



第177図 5～7号溝平断面図

まま延長すれば1-2区にわずかにかかるはずであるが、1-2区の調査では見つかっていない。幅は0.20～0.75m、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.19mであり、両端の比高差は0.09mである。走行方向はわずかに蛇行するが、両端を結んだ方向は5号溝とほぼ同じN-54°-Wである。

埋土は1-1区のほかの溝と同様であり、流水の痕跡は認められないが、やはり5号と同様給水路的な役割があった可能性はあると思われる。

出土遺物は混入と思われる土師器甕類の小破片が1点あるのみである。

7号溝(第177図、P L .67-3・4)

1-1区北部にあり、6号溝のすぐ南西側に平行している。長さ12.48mの短い溝であり、幅0.22～0.95m、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.20mであり、両端の比高差は0.02mである。南東部に農具の刃先痕らしい、ごく浅い凹みが2列に並んでいる。この溝の掘削時、あるいは掘り直しなどの時に付いたものと思われる。走行方向はN-52°-Wである。

埋土は1-1区のほかの溝と同様であり、流水の痕跡は認められない。短い溝としてしか把握できておらず、用途は不明である。

出土遺物は混入と思われる土師器甕の小破片が3点あるのみである。

8号溝(第178図、P L .68-1・3)

1-1区の南部にある。1-1区ではこの溝だけが離れて存在する。途切れ途切れに4ヶ所に分かれる溝であるが、位置と方向から同一の溝として扱った。最も南東は調査区外へと延びるが、ここと北西端との距離を計測すると、全長30.4mとなる。なお、1-2区の11号溝は、位置、方向が微妙に異なるので別の溝として扱ったが、もちろん途中で屈曲した同一の溝である可能性もあるので注意が必要である。

幅は0.34～0.82mだが、0.50～0.60mの部分が多い。深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.12mであるが、数cm程度の浅い部分が多い。両端の比高差は0.15mである。全体の走行方向はN-52°-Wであるが、西北端の部分だけやや西に振れている。

埋土は1-1区のほかの溝と同様で流水の痕跡は認められない。また、残っているのは底部近くのごく一部だ

としても、4ヶ所に分かれていることから給排水などの機能の可能性は低く、何らかの区画溝ではないかと考えられる。

出土遺物は混入と思われる土師器甕類と同杯類の小破片が各1点あるのみである。

9号溝(第179図、P L .68-2・4)

1-2区北東側にある東西溝である。東側は調査区外となるが、その延長部は1-1区では見つかっていない。

長さは8.75m、幅は0.25～0.55mでほぼ直線的に延びている。深さはピット状になっているところを除いて最も深いところで0.07mと浅く、両端の比高差は0.03mである。走行方向はN-77°-Wである。

埋土は褐灰色土だが、この溝と次の10号溝だけ他と異なり砂質である。

ごく浅い溝であり、その性格については不明である。

出土遺物はない。

10号溝(第179図、P L .68-5・6)

1-2区東側中央付近にあるごく短い溝である。

長さ3.30m、幅0.30～0.45m、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.06mと浅い。底面はほぼ水平で、高低差はない。走行方向はN-70°-Eである。

埋土は褐灰色土だが、この溝と9号溝だけ他と異なり砂質である。

長さが短く、深さも浅くはっきりしない溝であり、また走行方向も周囲の溝と異なっている。そのため、用途は不明である。

出土遺物はない。

11号溝(第180図、P L .69-1・2)

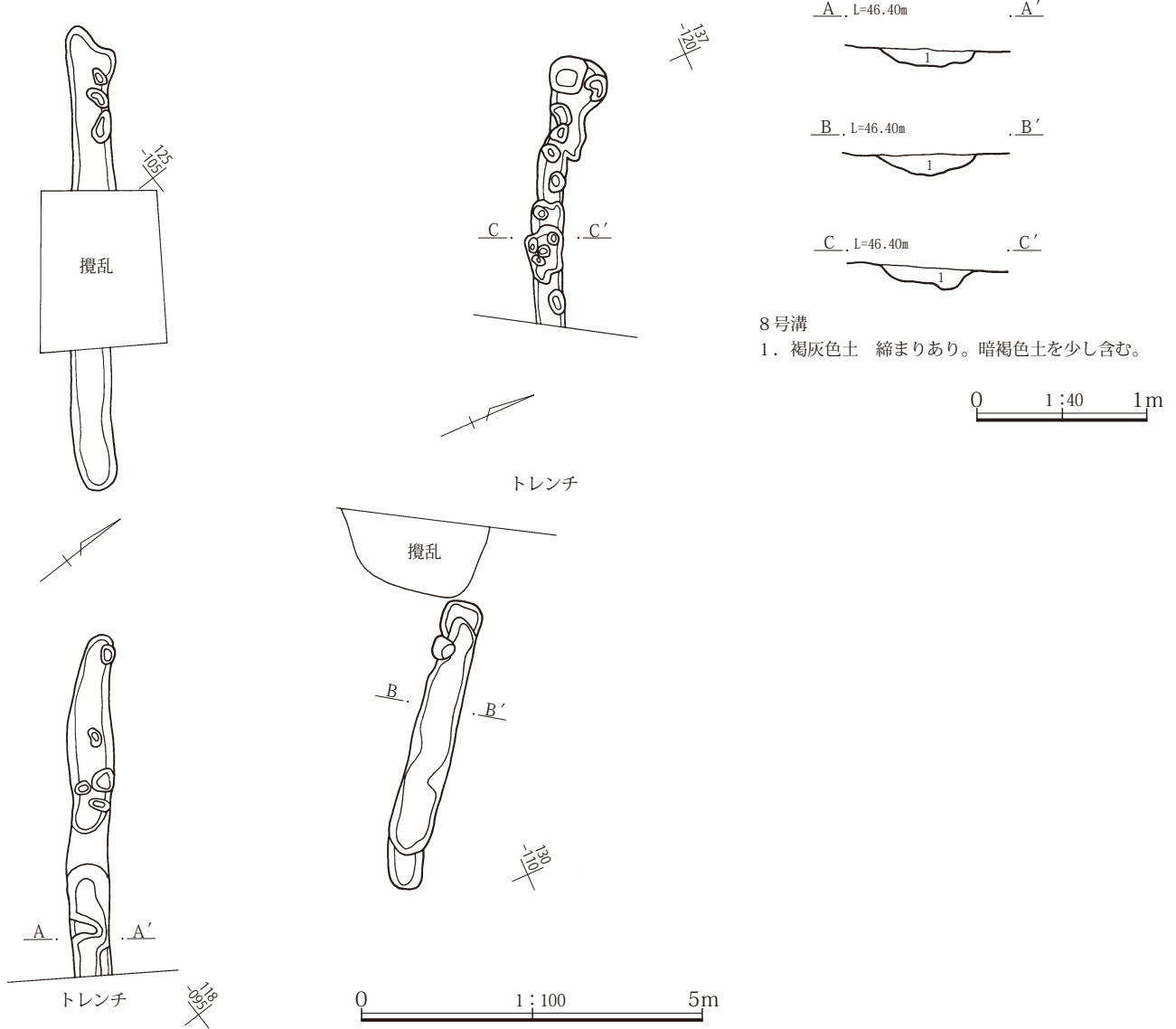
1-2区南東部にある。この溝は大きく離れた2本の溝からなっており、調査時はそのいずれも11号溝として調査したので、ここでは、そのうち南東のものを11号溝東、北西のものを11号溝西と呼び分けて報告する。

11号溝東は1-2区南西部にあり、直線的に調査区外へと延びている。前述したように、そのまま直線的に延びるとすると、延長部分は1-1区に見えず、8号溝とは別の溝と考えられる。長さ5.12m、幅0.32～0.50mで、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.07mと浅く、底面は凹凸が多い。両端の比高差は0.01mである。走行方向はN-59°-Wである。

11号溝西は11号溝東から10.3m離れているので、一連

8号溝東半部

8号溝西半部



8号溝
1. 褐灰色土 縮まりあり。暗褐色土を少し含む。

第178図 8号溝平面断面図

のものであるかは断定できないが、位置と方向は11号溝東の延長部にある。北西端近くに14号溝がほぼ直角に接続している。長さ2.0m、幅0.35～0.50mのごく短い溝で、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.05mと浅く、両端の比高差はない。走行方向はN-58°-Wである。

埋土は他の溝と同様縮まりのある褐灰色土であり、流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物はない。

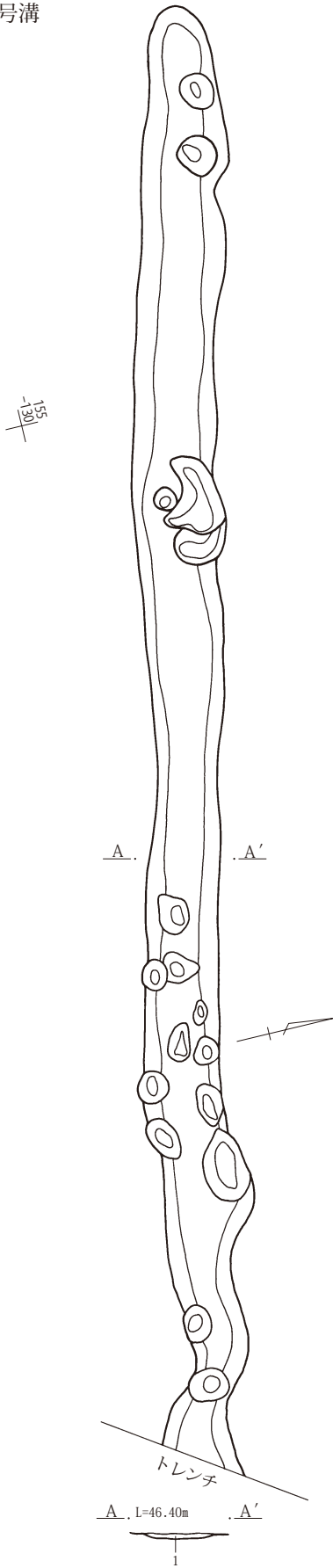
12号溝(第179図、P L .69-3)

1-2区西端部にある。南東端は不明瞭となるが、北西端は調査区外へ延びる。全体的に広く浅い溝であるが、北西部は半分以下の幅となる。

長さは15.40m分を確認した。幅は広い部分で1.56～1.96m、北西部の狭い部分で0.72～0.97mであり、深さは全体に浅く、ピット状の部分を除いて最も深いところで0.09mである。両端の比高差は0.15mである。底面は平坦であり、断面は皿状である。走行方向はN-53°-Wである。

埋土はほかの溝と同様縮まりのある褐灰色土であり、

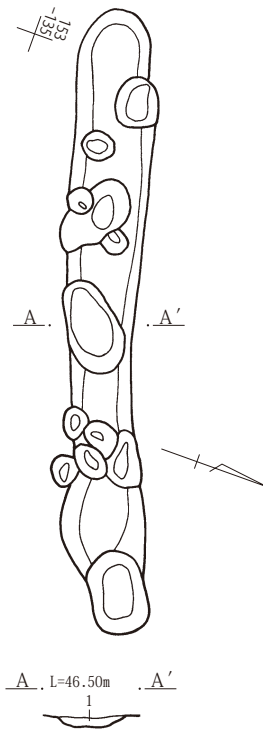
9号溝



9号溝

1. 褐灰色土 砂質。暗褐色土を少し含む。

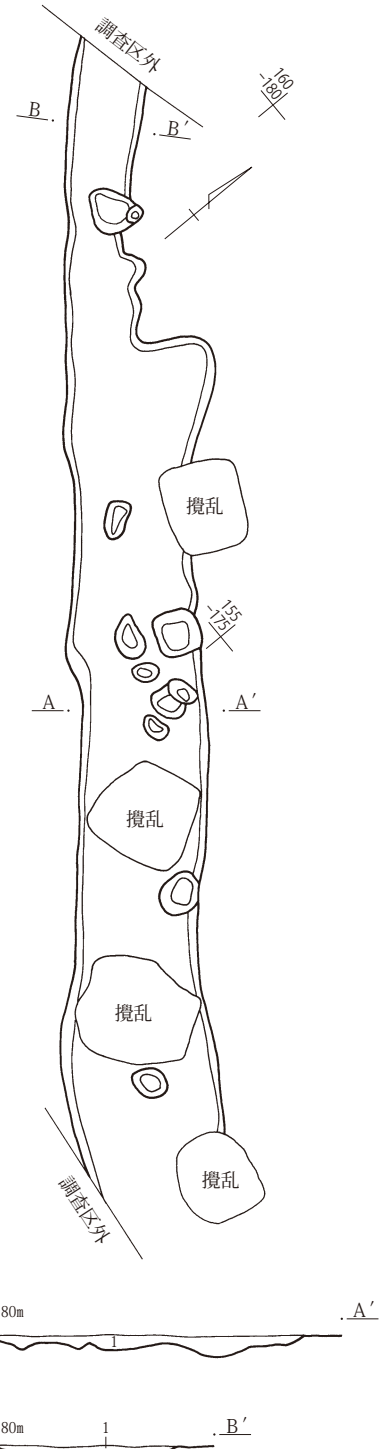
10号溝



10号溝

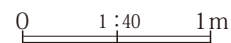
1. 褐灰色土 砂質。暗褐色土を少し含む。

12号溝



12号溝

1. 褐灰色土 締まりあり。暗褐色土を少し含む。



第179図 9・10・12号溝平断面図

流水の痕跡は認められなかった。

1-2区のほかの溝と比べて長く、おそらく両端は調査区外へ延びていくものと思われる。きわめて浅い不明瞭な溝であるが、それは底部の一部のみを調査しているためと思われる。用途としては給排水路などを考えることも可能なのではないだろうか。なお、第4面の古墳時代の水田面でもほぼ同じ位置に19号溝があり、水田に関わる給排水路と考えられる。

出土遺物は混入と思われる土師器甕類の小破片が3点、同杯類が2点あるのみである。

13号溝(第180図、P L. 69-4)

12号溝の北西端付近にある短い溝であり、北東側は調査区外へ延びる。

長さは2.05m分のみを調査し、幅は0.30～0.38m、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.09mであるが、底面の凹凸が目立っている。走行方向はN-35°-Eである。

埋土はほかの溝と同様締めりのある褐灰色土であり、流水の痕跡は認められなかった。あまりに短い部分的な調査なので用途は明らかにしたいが、12号溝とほぼ直交しており、区画溝ではないだろうか。

出土遺物はない。

14号溝(第180図、P L. 69-5, 70-1)

1-2区の中央付近にある。南西側が11号西溝と接合する。

長さ4.66m、幅0.32～0.49m、深さはピット状の部分を除いて最も深いところで0.05mと浅く、両端の比高差は0.01mである。走行方向はN-34°-Eで直線的である。

埋土はほかの溝と同様締めりのある褐灰色土であり、流水の痕跡は認められなかった。

性格等については後述する。

出土遺物はない。

15号溝(第181図、P L. 69-5・6, 70-2)

1-2区中央北側にあり、北東端は調査区外へ延びる。

調査したのは長さ11.00mで、幅0.28～0.62m、深さは最も深いところで0.08mと浅く、両端の比高差は0.02mである。走行方向はN-23°-Eであり、直線的に延びている。

埋土はほかの溝と同様締めりのある褐灰色土であり、

流水の痕跡は認められなかった。

性格などについては後述する。

出土遺物はない。

16号溝(第180図、P L. 69-5)

1-2区中央付近にあり、北東端は次項「畠」で述べる大きな耕作痕跡によって壊されている。

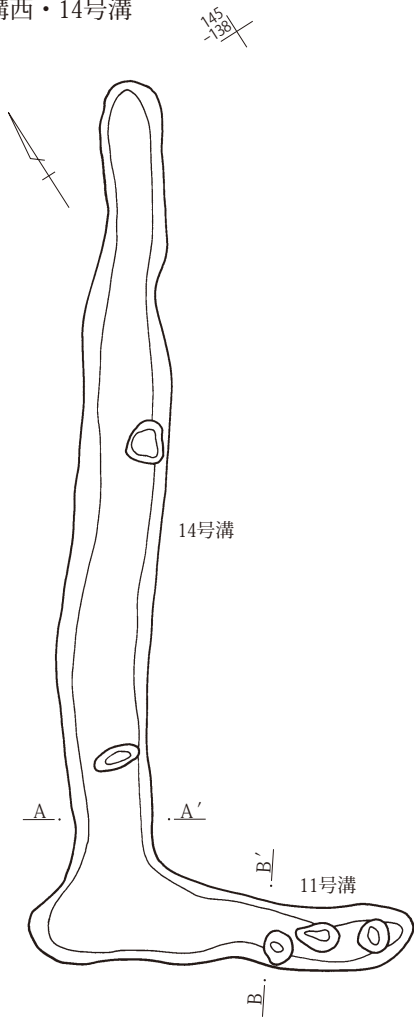
調査したのは長さ3.02mだけであり、幅は0.24～0.59mと、特に北側に凹凸がある。深さはピット状に深いところを除いて0.04mとごく浅く、両端の比高差は0.03mである。走行はN-31°-Eである。

埋土はほかの溝同様、締めりのある褐灰色土であり、流水の痕跡は認められなかった。

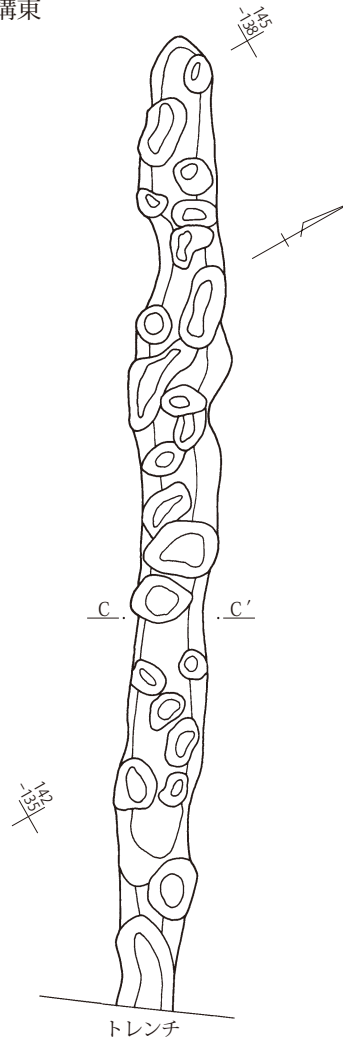
出土遺物はない。

以上、この1-2区には9～16号の8条の溝がある。これらのうち、10号溝は走行方向が他と異なり、その性格は不明である。また、12号溝は前述したように給排水に関わる溝である可能性が考えられるが、その他の6条は、9・10号溝は埋土が砂質で流水の痕跡が認められるものの、長さも短いことから給排水に関わるものではないと思われる。この12号溝を含めた7条の溝は、その走行方向を大まかにみると、互いに近似しているか、あるいは直交する方向になっている。また、第1面には畠の畝間と考えられる耕作の痕跡が全体に見られるが、その方向を見ると、この7条の溝と平行ないし直交しているものが多い。以上のことから、これら7条の溝は畠の区画溝として使用されていた可能性が指摘できる。特に15号溝は、次節で取り上げる広い耕作痕跡に平行しており、この畠区画の南東側を区画する溝だと思われる。12号溝のみは給排水路の役割も兼ねていたのではないだろうか。

11号溝西・14号溝



11号溝東



A, L=46.80m A'



B, L=46.80m B'



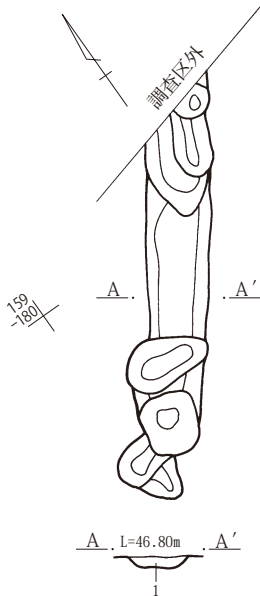
C, L=46.60m C'



11・14号溝

1. 褐灰色土 縮まりあり。暗褐色土を少し含む。

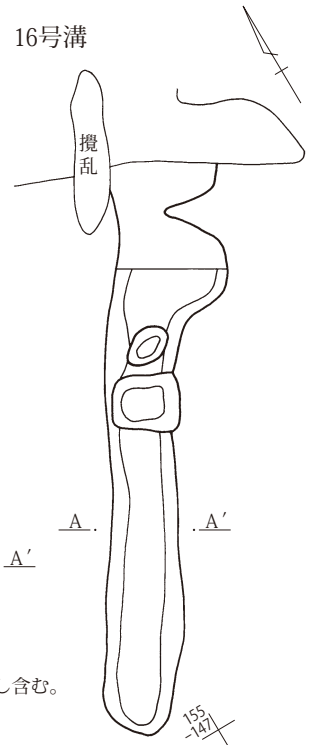
13号溝



13号溝

1. 褐灰色土 縮まりあり。暗褐色土を少し含む。

16号溝



A, L=46.80m A'



16号溝

1. 褐灰色土 縮まりあり。暗褐色土を少し含む。

0 1:40 1m

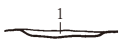
第180図 11・13・14・16号溝平断面図

15号溝



165-140

A-A' L=46.80m



15号溝

- 1. 褐灰色土 締まりあり。暗褐色土を少し含む。

A-A'

160-145

0 1:40 1m

8 道路状遺構

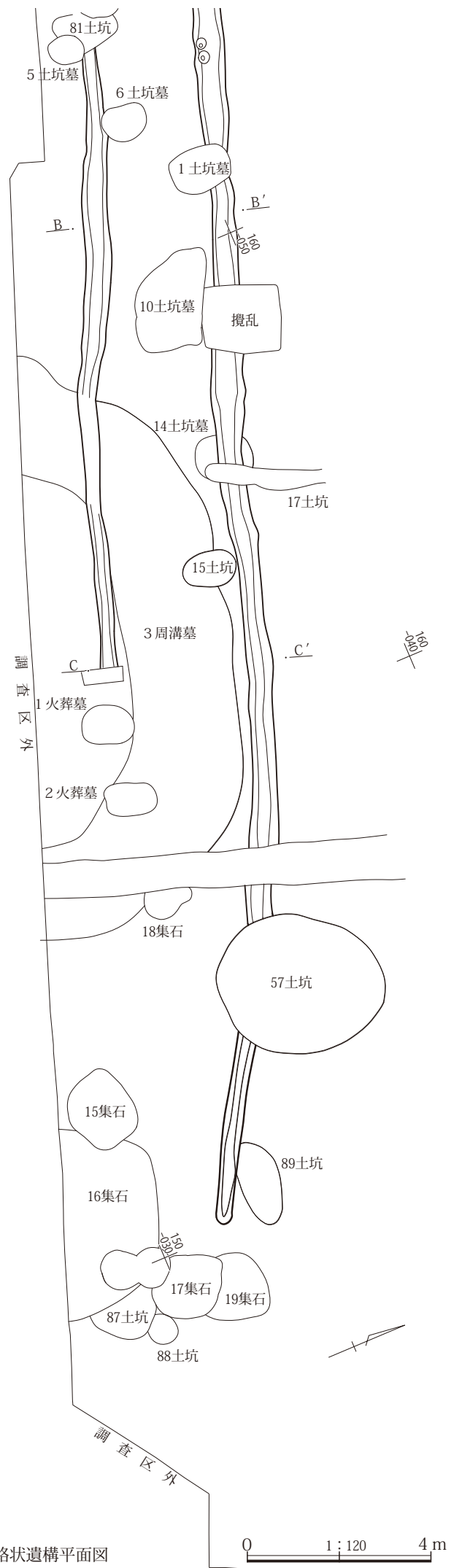
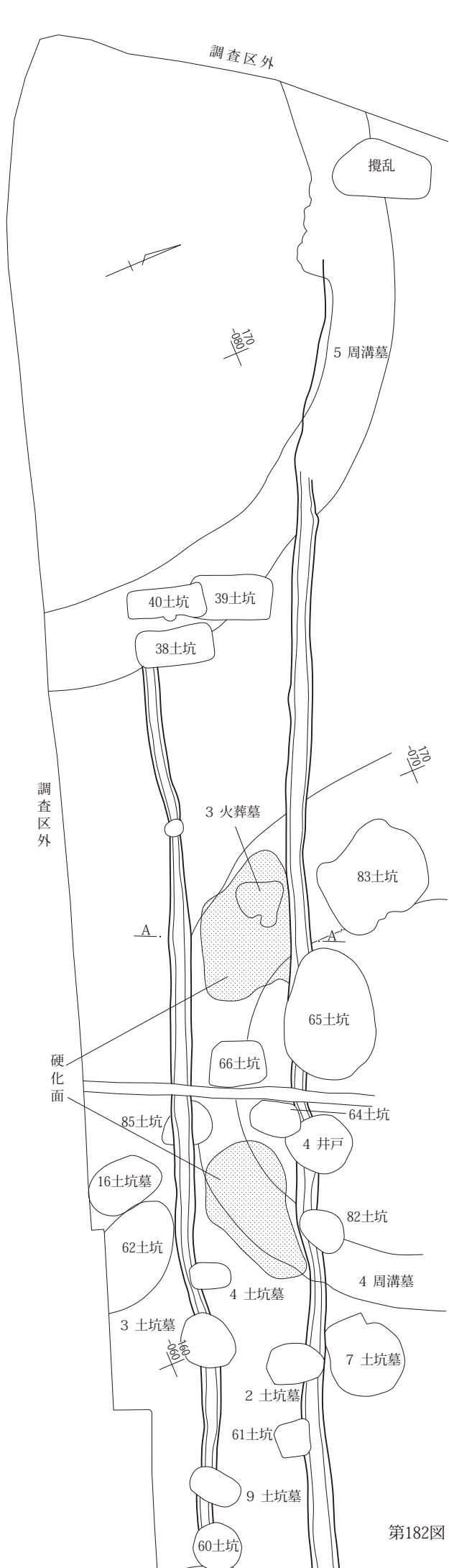
1号道路状遺構(第182・183図、第85表、P.L. 70-3～72-4, 100)

1号道路状遺構としたものは、北調査区の南西境界に沿って見られる2本の平行する溝であり、全長約55m分を調査した。平行する溝が道路側溝と思われることと、路面に当たる部分に2ヶ所の硬化面が見られることから、道路跡の可能性が強いものと思われる。非常に多くの遺構と重複しており、それによってある程度の時期が把握できる。

1号道路状遺構の側溝と重複する遺構を新旧関係で整理すると、道路状遺構よりも新しい遺構としては、12号、13号、17号、38号、40号、57号、60号、61号、64号、65号、81号、82号の12基の土坑、1～3号、5号、6号、9号の6基の土坑墓、4号井戸である。逆に道路状遺構よりも古い遺構はやや少なく、85号、89号土坑、3～5号周溝墓、4号、14号、15号土坑墓、3号火葬墓である。このうち3号火葬墓は路面にある硬化面の下層から見つかったもので、側溝と直接重複しているわけではない。

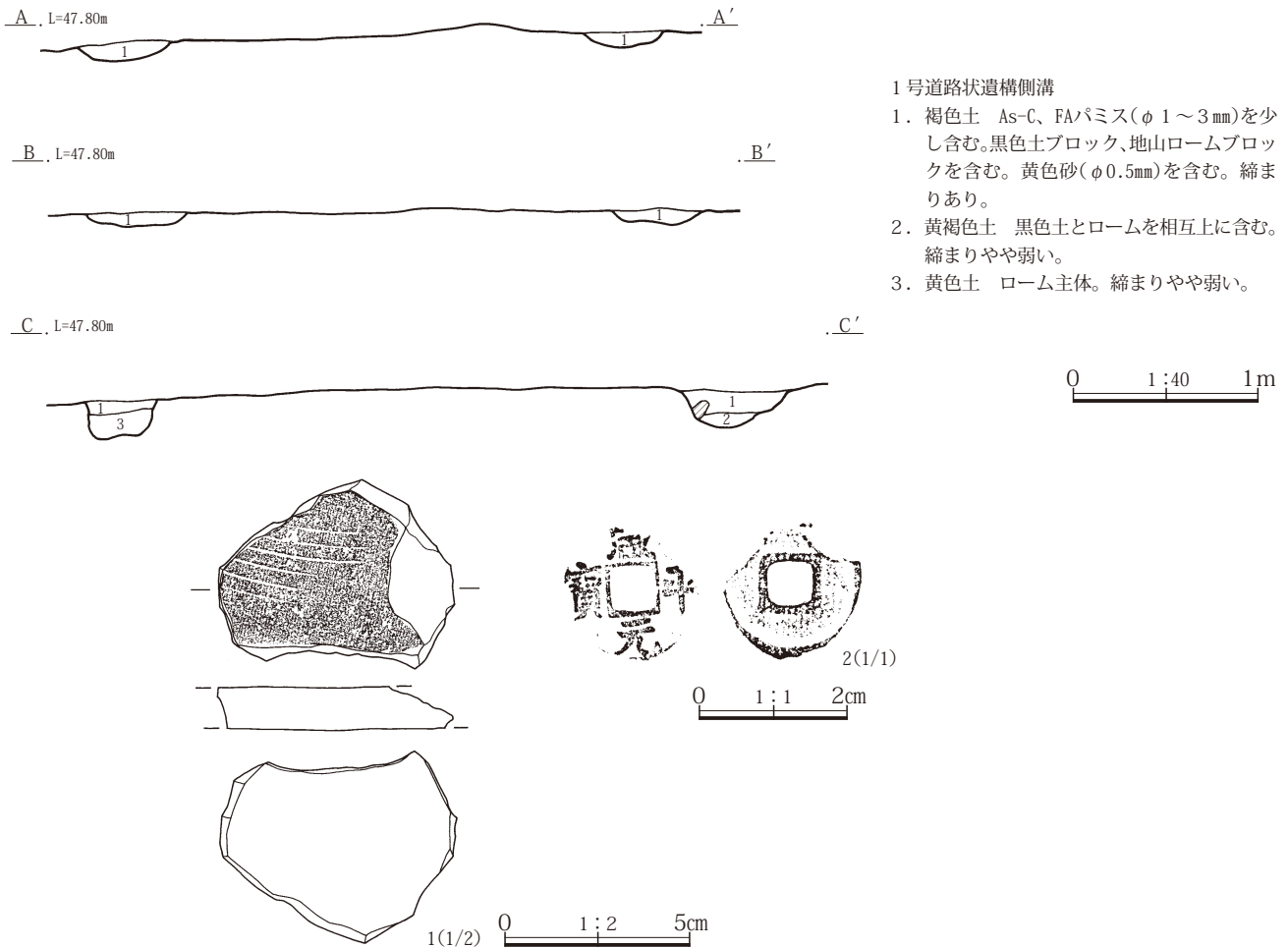
全長は約55m分を確認しているが、その両端は削平されており、把握できなかつた。本来はさらに調査区外へとのびているものと思われる。北側溝は長く、55.0mを調査した。幅は0.32～0.78mと狭く、深さは最も深いところで0.30mあるが、大部分は0.10～0.20m程度と浅い。南側溝は長さ36.0m分を調査し、幅はやはり0.24～0.57mと狭い。深さは最も深いところで0.20mであるが、0.10m程度の浅い部分が多い。この両側溝の走行方向にはかなりブレがありやや蛇行している。道幅はそのために広狭があり、側溝心一線で計測して2.25～3.35mである。道の走行方向は、N-69°-Wである。

路面に当たる部分には2ヶ所で硬化面が見つかっている。第182図でトーンをかけた部分がそれに当たるが、この部分はちょうど下層に4号周溝墓の周溝が重複している部分にあたる。おそらく、そのためにこの部分だけ土質が異なり、土が硬化したのではないだろうか。ただし、周辺の遺構が浅く、かなり削平を受けていることは確かであるため、この硬化面の直上が当時の地表面とは考えられない。おそらく、硬化部がこの部分だけ深くまで及んでいるのであろう。



第182图 1号道路状遺構平面図

第3章 調査の成果



1号道路状遺構側溝

1. 褐色土 As-C、FAパミス(φ 1～3mm)を少し含む。黒色土ブロック、地山ロームブロックを含む。黄色砂(φ 0.5mm)を含む。締まりあり。
2. 黄褐色土 黒色土とロームを相互上を含む。締まりやや弱い。
3. 黄色土 ローム主体。締まりやや弱い。

第183図 1号道路状遺構断面図・出土遺物

この道路状遺構の時期は、重複している土坑墓の年代からある程度絞り込める。在地系土器皿が出土している土坑墓を見ると、側溝よりも古い14・15号土坑墓、側溝より新しい1号土坑墓からいずれも15世紀前半の皿が出土しているので、道の存続年代は15世紀前半の中のごく短い期間であると思われる。

この道の南側には平行して現在の県道足利伊勢崎線が通っている。この県道は明治17年の2万分の1フランス式彩色地図にも描かれており、古くからの道を踏襲したものと思われ、それに平行する1号道路状遺構はその前身であることになる。1号道路状遺構は、中世の墓地の造営期間の中で、その中央を貫くように設けられ、すぐに廃絶していることから、何らかの事情により、一時的に道が付け替えられたものと考えられる。

9 畠・耕作痕

その他、中近世に属すると思われる遺構としては、畠

の耕作痕と思われるものがある。これは特に南調査区(1区)第1面に顕著に見られるもので、付図1にみるように、調査区の各所に見られる、何列も平行する溝状の痕跡である。これらは土色や土質の違いからこのように把握できるものであり、第2・3面の畠と同様に耕作痕であると思われ、溝状に見えているのは畝間の痕跡である。196ページで述べたように、畝間の方向は周囲の溝の方向と平行ないし直交しているものが多く、これらの溝は畠の区画を示すものと思われる。1-2区西半部などでは、耕作痕が重複しているところがあり、複数回の畠耕作がこの面で確認できる。

また、1-1区の南東辺の中央付近と、1-2区の北側中央には土色や土質の違い、方形の区画が見られる。1-1区のもは幅約12.5m、長さ約15m以上で南東側が調査区外となり、1-2区のもは幅約9.4m、長さ約11m以上で北東側は調査区外となる。この区画の中の土は、区画外とは明らかに異なり、何らかの攪拌を受け

ているものと思われ、おそらく畠の区画全体が深く耕作された跡であると考えられる。この区画の方向は、周囲の溝や耕作痕の方向とほぼ同じであり、その推定を裏付けている。

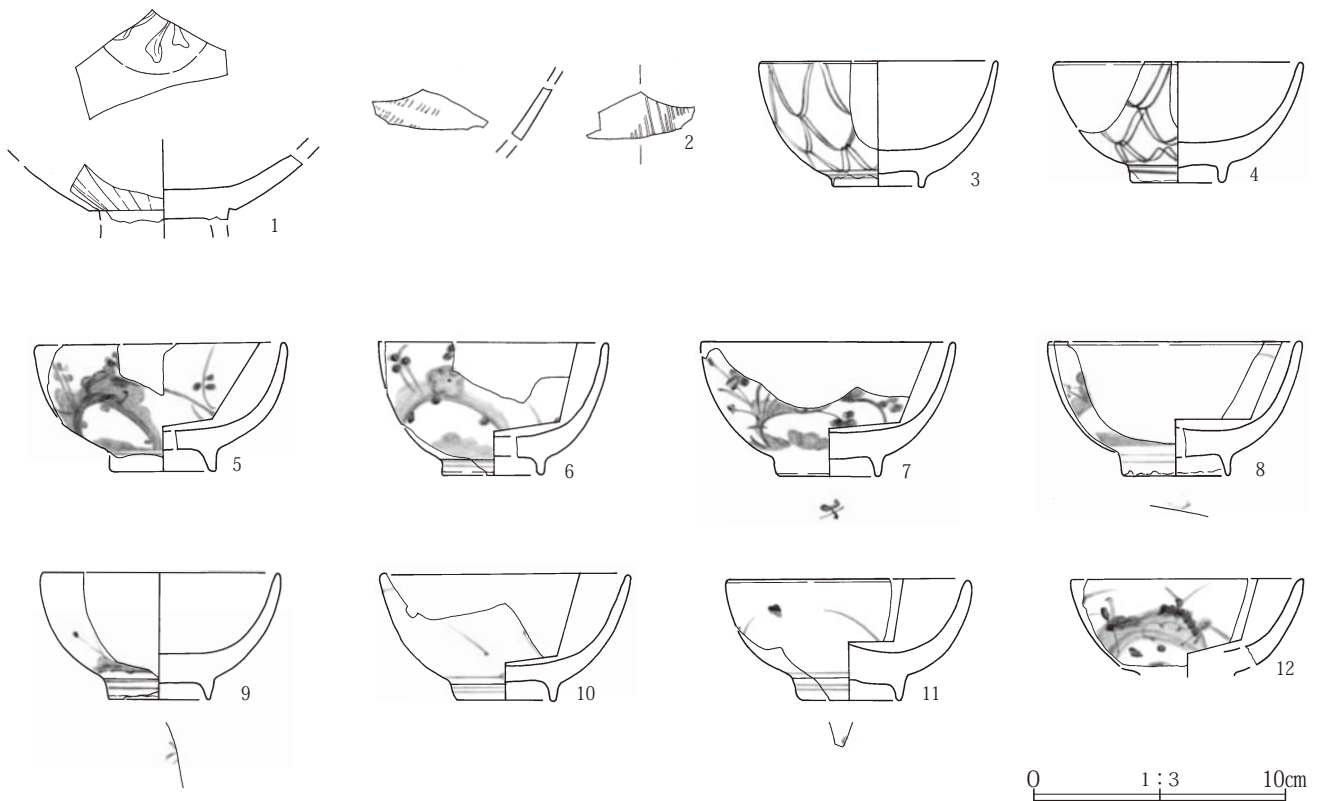
これらの畠の年代は、明確な伴出遺物がないため確定できないが、中近世から近現代までの長期間に形成された痕跡が含まれている可能性が高いものと考えられる。

10 遺構外出土の遺物

中近世の遺物は遺構外からも数多く出土した。これらは近現代の溝、攪乱から出土したものが多い。おそらく今回の調査区内には江戸時代の屋敷があったようで、それが廃絶した後に穴を掘って廃棄したものがこれらの遺物なのだと考えられる。遺物の中には1、2の中国陶磁など、中世のものも少数含まれるが、大部分は近世、17世紀末以降のものである。122のような十能瓦は数多く出土しているが、十能瓦の生産開始時期は近世にまで遡る可能性があるものの、本格的に普及するのは近代になってからと考えられ、本遺跡で出土しているものがいつの時期に属するかは不明である。

ほかに特に注目されるのは132の一分金で、刻印の特徴から元文一分金と確認できるものである。永田久美男編『近世の出土銭Ⅱ』（兵庫埋蔵銭調査会 1998）によれば鑄造期間は元文元(1736)年から文政元(1818)年で、量目は3.28g(0.875匁)、品位は金657.1／銀342.9であるという。本遺跡から出土したものは重さが3.29gでわずかに重い、これは誤差の範囲であろう。調査区中央南側の、近現代と推定されるピットの中から出土しており、おそらく表土の中に入っていたものが混入したものであろう。元文一分金に限らず、一分金は伝世品がほとんどで、発掘調査で出土するのは珍しいが、北関東自動車道建設に伴う発掘調査では、太田市緑町にある萩原遺跡で同じ元文一分金が出土し報告されている(群馬県埋蔵文化財調査事業団『萩原遺跡』 2010)。

小破片のため未掲載の遺物も数多い。中世の焼締陶器は16点、以下は近世の国産品で、磁器119点、施釉陶器163点、在地系土器焙烙・鍋類109点、同皿51点、瓦7点である。

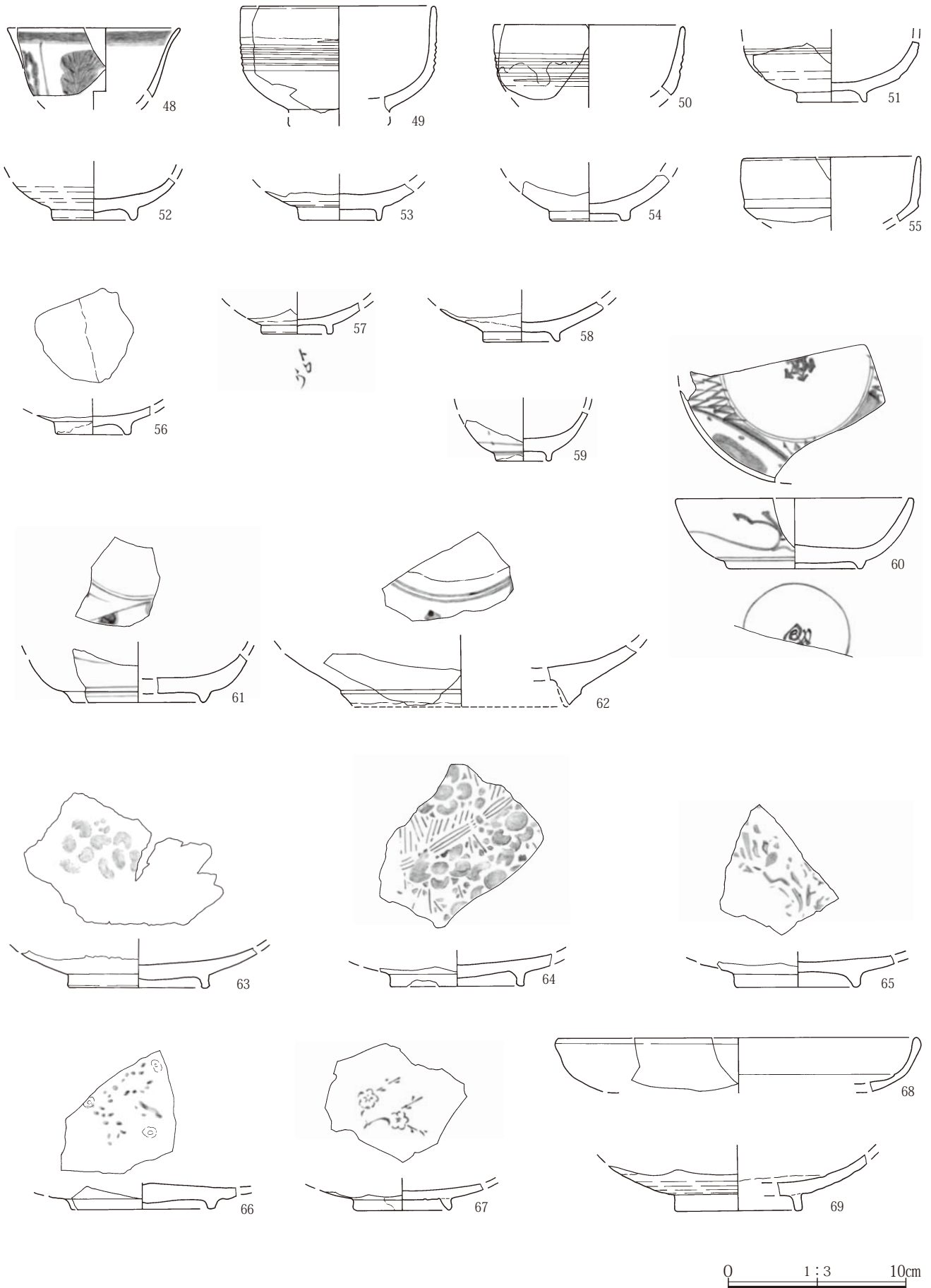


第184図 中・近世・遺構外出土の遺物(1)

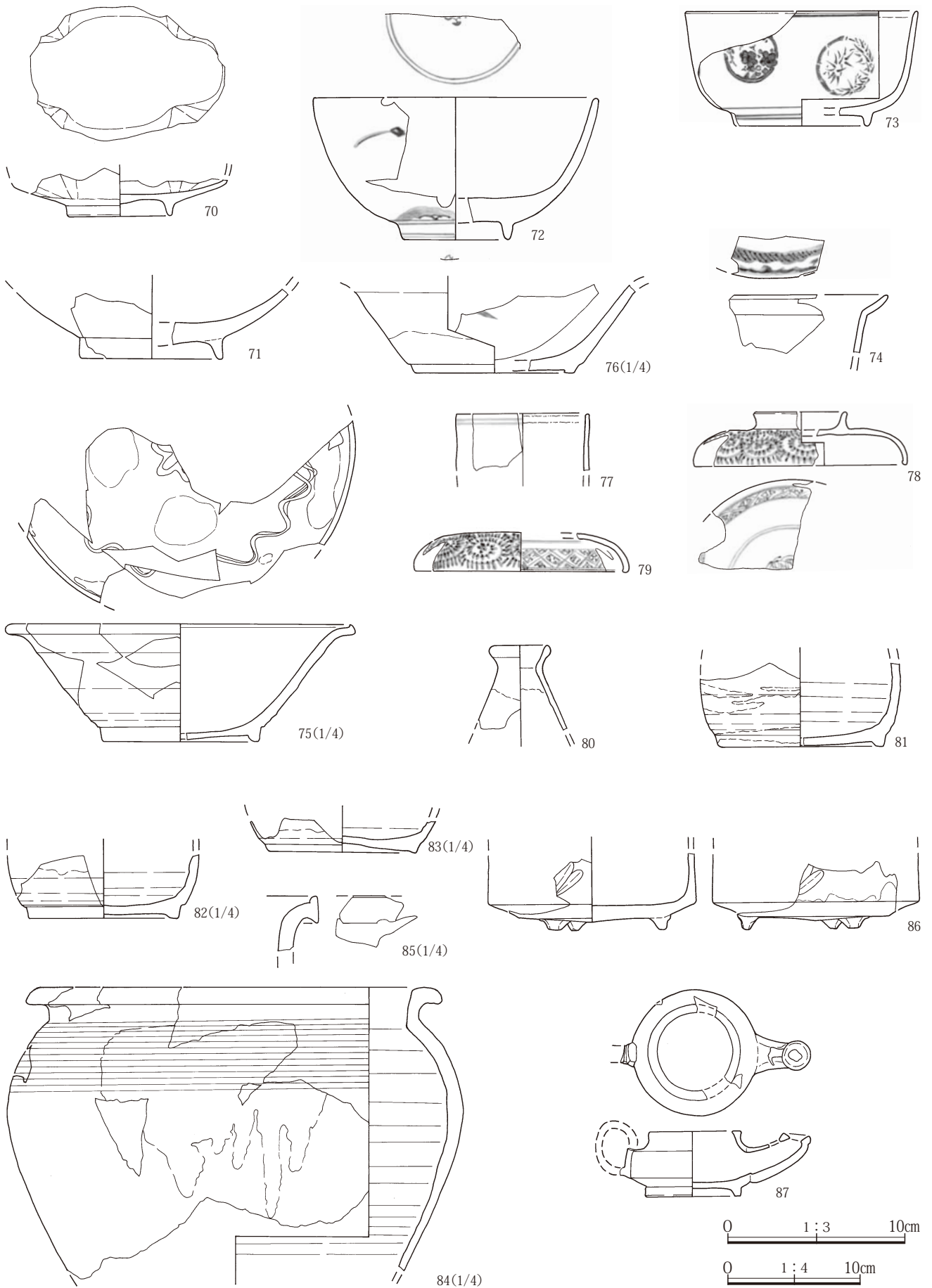
第3章 調査の成果



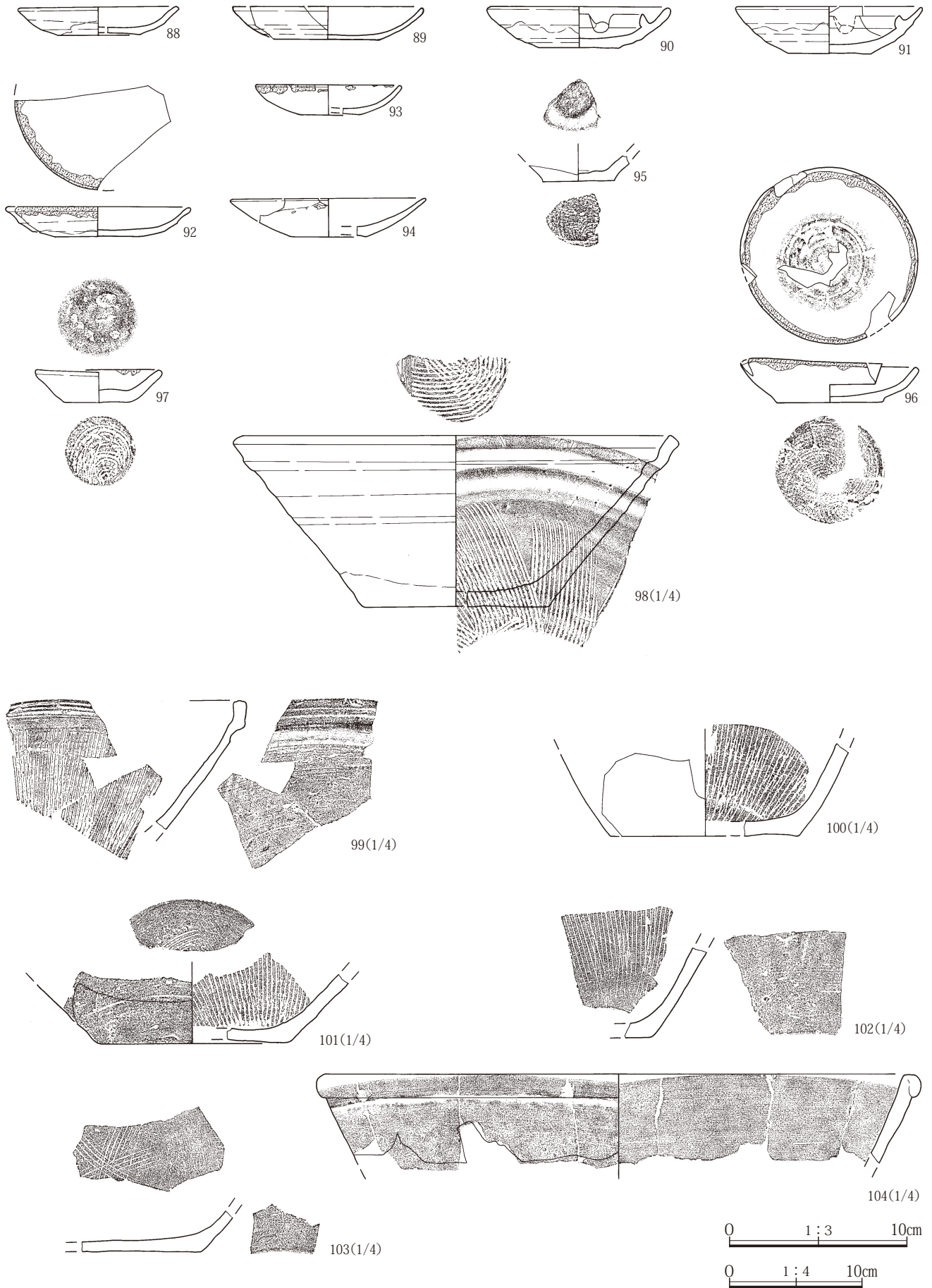
第185図 中・近世・遺構外出土の遺物(2)



第186図 中・近世・遺構外出土の遺物(3)

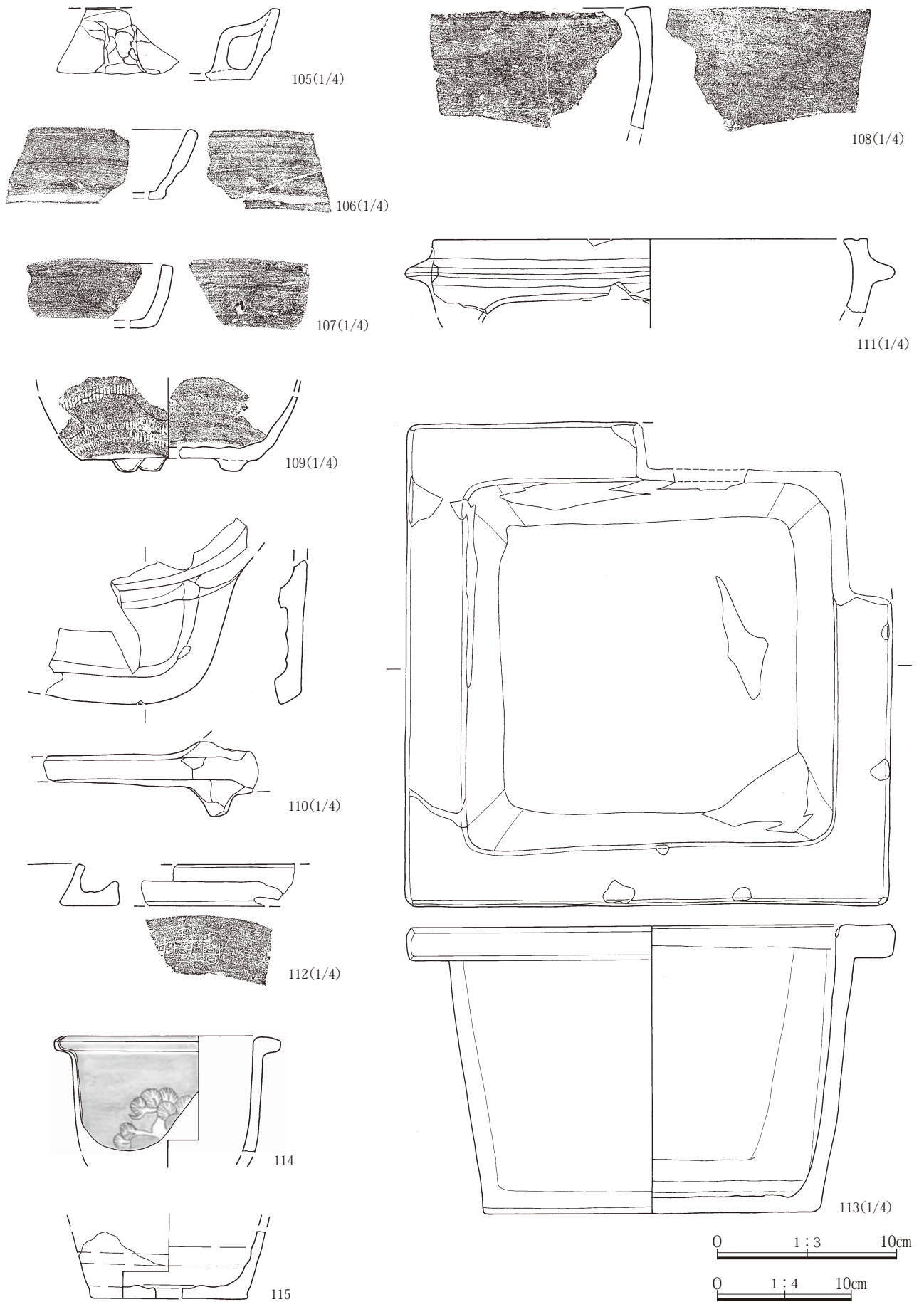


第187図 中・近世・遺構外出土の遺物(4)

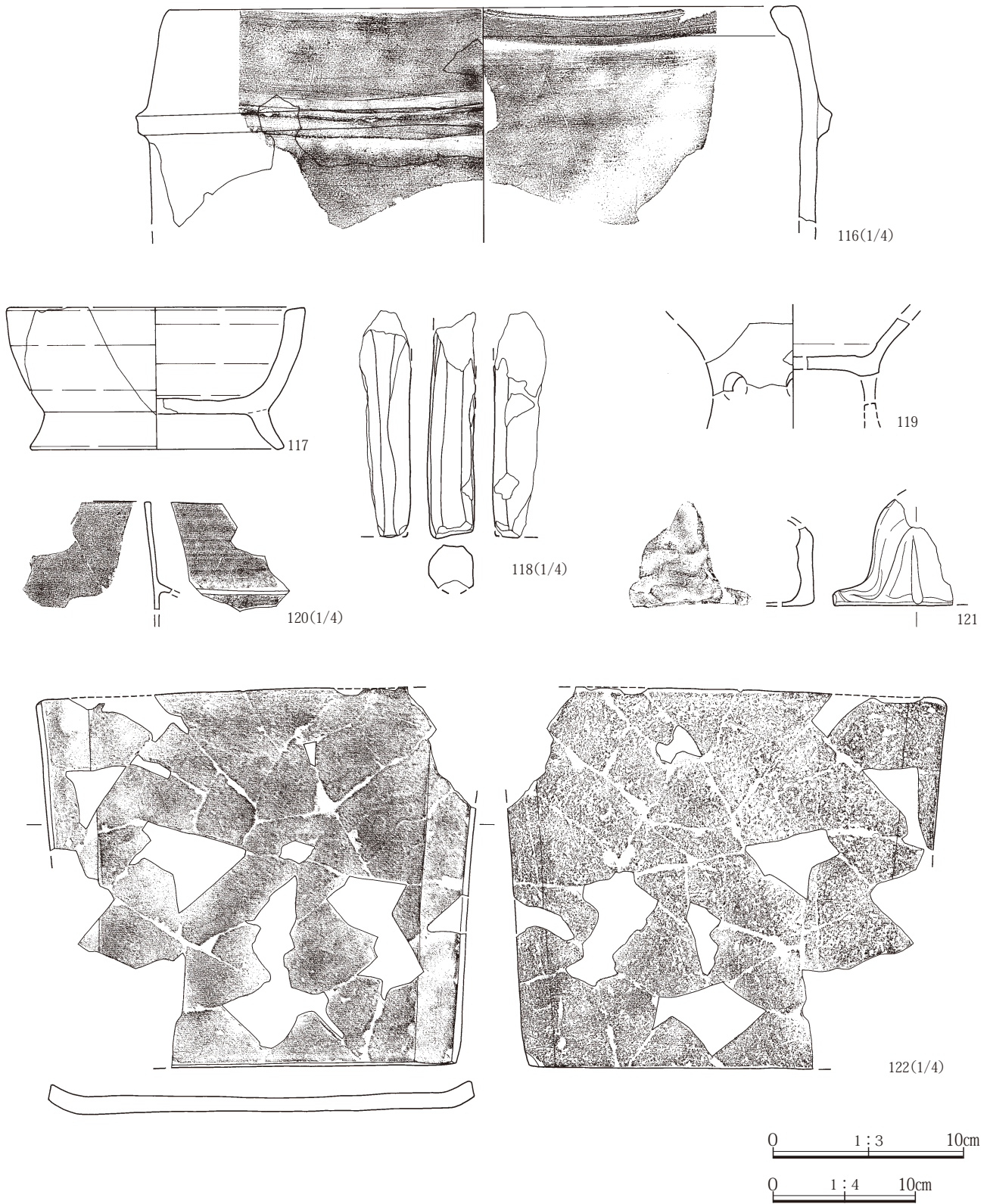


第188図 中・近世・遺構外出土の遺物(5)

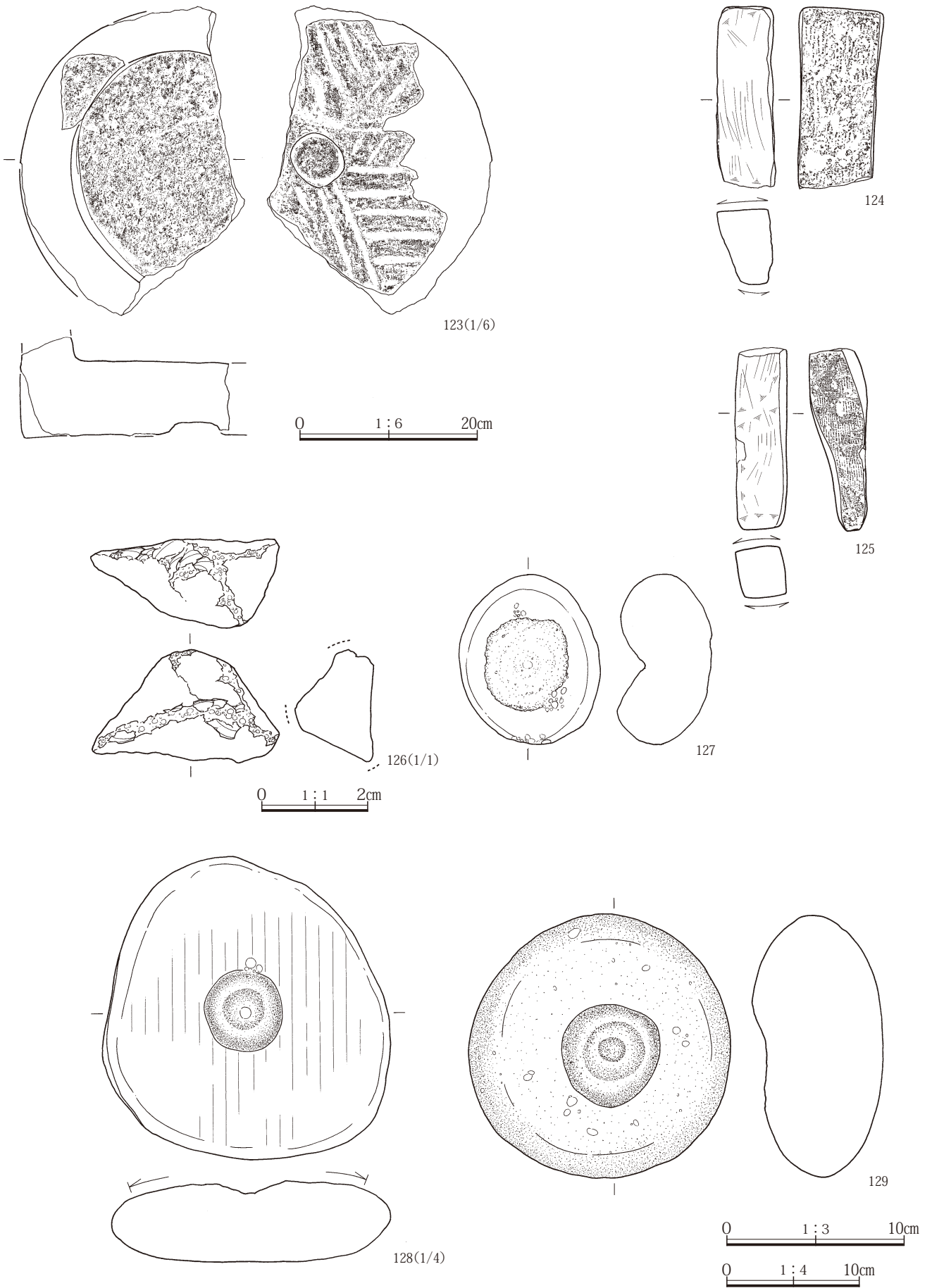
第3章 調査の成果



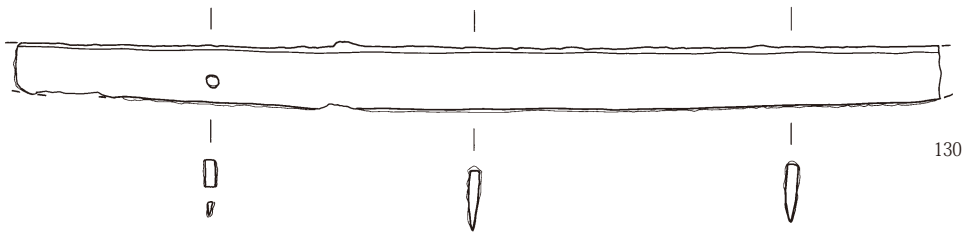
第189図 中・近世・遺構外出土の遺物(6)



第190図 中・近世・遺構外出土の遺物(7)



第191図 中・近世・遺構外出土の遺物(8)



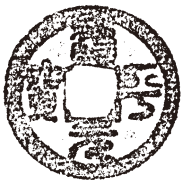
130



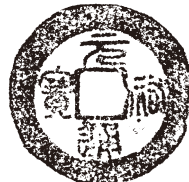
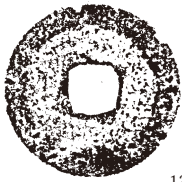
131



132(1/1)



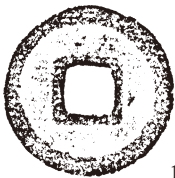
133(1/1)



134(1/1)



135(1/1)



136(1/1)



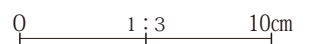
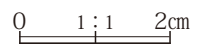
137(1/1)



138(1/1)



139(1/1)



第192図 中・近世・遺構外出土の遺物(9)

第4章 自然科学分析

第1節 道原遺跡北調査区の火山灰分析

火山灰分析は平成16年度に道原遺跡北調査区で実施した。その目的は2点あり、一つは道原遺跡に堆積するロームの中に含まれる火山灰を分析することによって、渡良瀬川の流路変遷史、渡良瀬扇状地の形成過程を考える資料を得ることである。道原遺跡は葦川台地か、あるいは大間々扇状地上にあると推定されるが、それらの形成年代は不明な点が多い。そこで、ロームに含まれる火山灰の分析を行い、それらの年代を把握することにしたものである。渡良瀬川流域では、このような分析例が多くないので、本遺跡の分析資料は非常に重要なものになると考えられる。この分析のための試料は4区の土層断面(第8図・第198図)で採取した。もう一つは、周溝墓の周溝に含まれる火山灰を分析することで、周溝墓の造墓年代を推定することである。その分析試料は2号周溝墓、6号周溝墓の周溝で採取した。分析は株式会社古環境研究所に委託した。以下にその結果を掲載する。

1 はじめに

関東地方北西部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、形成年代が不明な葦川台地上に位置し、層位や年代が不明な遺構が検出された道原遺跡においても、地質調査を行い土層や遺構覆土の層序を記載するとともに、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、4区土層断面、2号周溝墓周溝セクションC-C'、6号周溝墓周溝セクションB-B'の

3地点である。

2 土層の層序

(1) 4区土層断面

4区土層断面では、下位より円磨された軽石を含む層理が発達した灰色砂層(層厚64cm以上)、円磨された黄色軽石混じり褐色土(層厚54cm、軽石の最大径27mm)、暗灰褐色土(層厚18cm)、黄白色細粒軽石混じり褐色土(層厚18cm、軽石の最大径2mm)、黄白色軽石混じり褐色土(層厚17cm、軽石の最大径4mm)、若干黄色がかかった軟らかい灰褐色土(層厚18cm)が認められる(第193図)。これらのうち、最下位の砂層中に含まれる軽石には、黄色と褐色の軽石が認められる。前者が粗粒(最大径54mm)で多いのに対し、後者は比較的細粒(最大径26mm)で量も少ない。

(2) 2号周溝墓周溝セクションC-C'

2号周溝墓周溝セクションC-C'における周溝覆土は、下位より褐色土ブロックを含む灰褐色土(層厚14cm)、褐色土粒子を多く含む灰褐色土(層厚17cm)、灰褐色土(層厚8cm)、暗灰褐色土(層厚12cm)、若干黄色がかかった灰色砂質土(層厚14cm)、灰褐色土(層厚9cm)、暗灰褐色土(層厚10cm)、白色軽石を多く含む暗灰褐色土(層厚8cm、軽石の最大径12mm)、白色軽石を少量含む暗灰褐色土(層厚7cm、軽石の最大径4mm)、灰褐色土(層厚9cm)、灰褐色土(層厚8cm)からなる(第194図)。

(3) 6号周溝墓周溝セクションB-B'

6号周溝墓周溝セクションB-B'における周溝覆土は、下位より褐色土粒子を含む灰褐色土(層厚14cm)、暗灰褐色土(層厚19cm)、灰褐色砂質土(層厚14cm)、灰色砂層(層厚10cm)、褐色砂質土(層厚12cm)からなる(第195図)。

3 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

台地の土層のうち、下部の厚い褐色土の層位や年代に関する資料を得るために、4区土層断面において採取された試料のうち11点について火山ガラス比分析を行い、

火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準を求めることにした。さらに砂層中に含まれる2種類の軽石については、重鉍物組成分析により重鉍物の組み合わせを明らかにした。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料12gを秤量。軽石については適量を乳鉢を用いて粉碎。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。
- 6) 軽石試料については、偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物組成を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第196図に、その内訳を第36表に示す。いずれの試料からも火山ガラスを検出することができた。分析対象試料の中で最下位にある試料22には、量が多い順に分厚い中間型ガラス(4.0%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(1.6%)が含まれている。それより上位では、試料16に無色透明のバブル型ガラスの出現ピーク(16.0%)が認められる。その上位では、試料4や試料2に15%を超える火山ガラスが含まれている。これらの試料では、中間型、繊維束状やスポンジ状に発泡した軽石型の火山ガラスが多い。一方、軽石が認められた試料6には、さほど多くの火山ガラスは認められなかった。

軽石試料に含まれる重鉍物の組成をダイヤグラムにして第197図に、その内訳を第37表に示す。試料23(黄色軽石)に含まれる重鉍物としては、量が多い順に磁鉄鉍、角閃石、斜方輝石、単斜輝石が含まれている。また試料23'(橙色軽石)には、量が多い順に斜方輝石、磁鉄鉍、単斜輝石、角閃石が含まれている。

4 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

2号周溝墓周溝セクションC-C'および6号周溝墓周溝セクションB-B'において採取された試料のうち、19点を対象としてテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第38表に示す。2号周溝墓周溝セクションC-C'では、いずれの試料からも軽石や火山ガラスを検出することができた。試料23から試料9にかけては、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径3.5mm)が含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料23から試料3にかけては、その細粒物である火山ガラスが含まれている。それより上位では、試料7に発泡が良くない白色軽石(最大径4.8mm)が多く含まれている。この軽石は斑晶に角閃石や斜方輝石をもち、試料7より上位の試料でその細粒物である白色の軽石型ガラスとともに認められる。試料1には、淡褐色の軽石(最大径2.4mm)や軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。さらに試料19や試料15には比較的発泡の良い白色軽石(最大径3.0mm)が少量含まれている。

6号周溝墓周溝セクションB-B'では、試料4をのぞく試料からスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径2.8mm)を検出することができた。またいずれの試料からも、その細粒物である灰白色の軽石型ガラスを検出した。さらに試料8では、少量ながら比較的発泡の良い白色軽石(最大径3.0mm)が検出された。

5 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

4区土層断面において特徴的な軽石や火山ガラスが検出された試料23、試料22、試料16、試料6、試料2の5点を対象として、含まれる火山ガラスの屈折率(n)の測定を行った。測定には、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)を利用した。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第39表に示す。試料23の黄色軽石の火山ガラス部の屈折率(n)は、1.503-1.508 (mode :

1.505)である。試料22に含まれる火山ガラスの屈折率(n)はbimodalで、1.499-1.502のほか、1.495±のものが認められる。試料16に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.500-1.501 (mode:1.500)である。試料6と試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.505 (mode:1.503)と1.501-1.504 (1.502)である。

6 考察

4区土層断面最下部の砂層中に含まれる黄色軽石については、岩相、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率などから、赤城鹿沼テフラ(Ag-KP、約4.5万年前以前?、新井、1962、町田・新井、2003)に由来する可能性が高い。また橙色軽石については、岩相と重鉱物の組み合わせから、Ag-KPより下位にある赤城湯の口テフラ(Ag-UP、新井、1962、町田・新井、1992、2003)に由来する可能性が考えられる。また重鉱物の組み合わせだけからは、約5.5万年前以前の赤城水沼テフラ群(Ag-Mz Group、鈴木、1990)や、それより上位でAg-UPより下位にある赤城行川テフラ群(Ag-Nm Group、鈴木、1990)などに由来する可能性もある。

試料22に含まれる火山ガラスのうち、屈折率(n)が1.499-1.502のものは、その形態も合わせると、約3万年前*1に榛名火山から噴出したと推定されている榛名箱田テフラ(Hr-HA、早田、1996など)*2に由来する可能性が考えられる。試料16付近に降灰層準のある無色透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラは、屈折率を合わせると、約2.4~2.5万年前*1に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995)と考えられる。

試料8~11で多く認められた軽石については、その層位やおそらく風化のために火山ガラスがさほど検出されないことから、約2.0~2.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group、新井、1962、町田・新井、1992、早田、未公表資料)の中・上部と考えられる。

試料6付近で認められた軽石については、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約1.6~1.7万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-0k1、中沢ほか、1985、町田・新井、1992、早田、1996)

および浅間大窪沢第2軽石(As-0k2、中沢ほか、1985、町田・新井、1992、早田、1996:合わせて浅間大窪沢軽石群、As-0k Groupと呼ぶ)に由来する可能性が高い。さらに試料4付近に急増するガラス質のテフラについては、火山ガラスの特徴や屈折率などから、約1.3~1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1971、町田・新井、1992)と考えられる。

一方、2号周溝墓および6号周溝墓の覆土から検出された灰白色軽石やその細粒物、発泡がさほど良くない白色軽石やその細粒物、淡褐色軽石やその細粒物は、岩相や重鉱物の組み合わせなどから、順に4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000)、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧、1968、新井、1979)に由来すると考えられる。

2号周溝墓では、覆土最下部の試料からAs-Cに由来する可能性が高い軽石粒子やその細粒物が検出され、Hr-FAまたはHr-FPに由来する可能性のある軽石の降灰層準(試料7付近)も認められた。また6号周溝墓でも、覆土最下部の試料からAs-Cに由来する可能性が高い軽石粒子やその細粒物が検出された。したがって、後者についてはFAまたはHr-FPに由来する軽石の濃集は認められなかったものの、その状況からいずれの遺構も、As-Cより上位で少なくともHr-FPより下位にあると考えられる。

なお2号周溝墓の試料19と試料15、6号周溝墓の試料8から検出された白色軽石については、層位や岩相などから5世紀に榛名火山から噴出したと考えられている榛名有馬テフラ(Hr-AA、町田ほか、1984)に由来する可能性が考えられる。また周辺でまだHr-FAとHr-FPの複数の一次堆積層が検出された例はないことから、可能性は高いとは思えないが、この軽石がHr-FAに由来する可能性もあるのかも知れない。今後さらにこの軽石に関する資料を収集して、その起源について検討を行う必要がある。

道原遺跡は、葦川台地と呼ばれる洪積台地あるいは扇

状地Ⅱ面と分類される地形面(沢口、1977)の上あたりに位置しているように思われる。これらのうち、蕪川台地は渡良瀬川の流路変遷史を検討する上で重要な存在となっている。基本土層断面で認められる砂層と蕪川台地地構成層の層相はよく似ており、しかも蕪川台地を覆うローム層の厚さ(1.2～1.6m)も、基本土層断面で認められた土層の厚さと矛盾しない。このことから、基本土層断面(4区土層断面)の砂層とそれを覆うおもに褐色を呈する土層は、蕪川台地構成層とそれを覆うローム層に各々対比される可能性が高い。ただし、沢口(1977)は、岩相と定性的な重鉱物の組み合わせから、蕪川台地構成層中の黄色軽石をAg-KPに由来すると判断しているものの、定量的な重鉱物組成分析や、すでに報告の段階で新井房夫故群馬大学名誉教授により確立されていた屈折率測定法による特徴記載は行われていない。今回は、重鉱物組成分析および火山ガラスの屈折率測定により、それを裏付けることができた。そして、火山灰土中に多くの指標テフラが存在していることも明らかになった。

7 まとめ

道原遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、とテフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、少なくとも赤城鹿沼テフラ(Ag-KP、約4.5万年前以前?)に由来する軽石を含む砂層の上位の火山灰土中に、下位より榛名箱田テフラ(Hr-HA、約3万年前*1)、始良Tn火山灰(AT、約2.4～2.5万年前*1)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group、約2.0～2.4万年前*1)の中・上部、浅間大窪沢軽石群(As-0k Group、約1.6～1.7万年前*1)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP、約1.3～1.4万年前*1)、浅間C軽石(4世紀初頭)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)または榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、6世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)などを検出することができた。本遺跡の周溝墓のうち2号周溝墓と6号周溝墓については、いずれもAs-Cより上位で、少なくともHr-FPより下位にあると考えられる。

- *1 放射性炭素(14C)年代。ATの暦年は約2.6～2.9万年前と考えられている(町田・新井、2003)。
- *2 1980年代後半には、新井房夫故群馬大学名誉教授により八崎火山灰(HA)と呼ばれていたようであるが(たとえば群馬県北橋村教育委員会ほか、1986、新井、1989)、名称上、八崎軽石(Hr-HP、新井、1962)との識別が難しいことから、早田(1996)は標式地の名称を使って榛名箱田テフラ(Hr-HA)と呼んでいる。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀編年 群馬大学紀要自然科学編10、p.1-79。
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層 考古学ジャーナルno.157、p.41-52。
- 新井房夫(1986)大間々扇状地 日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」、p.180-181。
- 新井房夫(1989)テフラの同定 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団編「勝保沢中ノ山遺跡Ⅱー関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書ー」、p.265-266。
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質 地研専報no.45、65p。
- 群馬県北橋村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団(1986)分郷八崎遺跡ー関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(本文編)、693p。
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代 第四紀研究34、p.377-379。
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰ー始良Tn火山灰の発見とその意義ー 科学46、p.339-347。
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス 東京大学出版会、276p。
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス 東京大学出版会、336p。
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学ー考古学研究と関係するテフラのカタログー 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p.865-928。
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の14C年代 第四紀研究26、p.79-83。
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討ータンデントロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代 地質雑99、p.787-798。
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山、黒斑ー前掛期のテフラ層序 第四紀学会講演要旨集no.14、p.69-70。
- 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」、p.103-119。
- 沢口 宏(1977)渡良瀬川扇状地の地形とその教材化 県立太田女子高等学校研究集録no.6、p1-18。
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害第四紀研究27、p.297-312。
- 早田 勉(1990)群馬県の自然と風土。群馬県編さん委員会編「群馬県史通史編」1、p.37-129。
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち 佐久考古通信no.53、p.2-7。
- 早田 勉(1996)関東地方ー東北地方南部の示標テフラの諸特徴ーとくに御岳第1テフラより上位のテフラについてー 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書7、p.256-267。
- 鈴木毅彦(1990)テフクロノロジーからみた赤城火山最近20万年間の噴火史 地学雑99、p.60-75。
- 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」、p.325-336。
- 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動くー古墳が成立する頃の土器の交流」、p.41-43。

第4章 自然科学分析

第36表 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	その他	合計
4区土層断面	2	3	0	0	29	6	7	205	250
	4	0	0	0	33	3	6	208	250
	6	2	0	0	12	3	2	231	250
	8	1	0	0	7	4	1	237	250
	10	7	0	0	4	4	2	233	250
	12	16	0	0	1	2	0	231	250
	14	17	0	0	2	2	2	227	250
	16	40	0	0	1	3	2	204	250
	18	1	0	0	1	7	2	239	250
	20	1	0	0	3	4	0	242	250
	22	0	0	0	10	4	0	236	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状.

第37表 重鉍物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
4区土層断面	23(黄色軽石)	0	78	7	65	0	97	3	250
	23'(橙色軽石)	0	159	23	4	0	62	2	250

数字は粒子数. ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱.

第38表 周溝墓周溝におけるテフラ検出分析結果

周溝墓	セクション	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
			量	色調	最大径	量	形態	色調
2号	C-C'	1	++	淡褐>白	2.4,4.6	+++	pm	淡褐>白
		3	++	白	2.8	++	pm	白>灰白
		5	++	白	4.9	++	pm	白>灰白
		7	+++	白	4.8	++	pm	白>灰白
		9	+	灰白	3.1	++	pm	灰白>白
		11	+	灰白	2.3	++	pm	灰白
		13	+	灰白	2.4	++	pm	灰白
		15	++	灰白>白	2.8,3.0	++	pm	灰白>白
		17	+	灰白	3.5	+	pm	灰白
		19	++	灰白>白	2.2,2.3	++	pm	灰白>白
		21	+	灰白	3.1	+	pm	灰白
23	+	灰白	2.1	+	pm	灰白		
6号	B-B'	2	+	灰白	2.1	+	pm	灰白
		4	-	-	-	+	pm	灰白
		6	+	灰白	2.3	++	pm	灰白
		8	+	灰白>白	2.8,3.0	++	pm	灰白
		10	+	灰白	2.2	++	pm	灰白
		12	+	灰白	2.1	+	pm	灰白
		14	+	灰白	2.8	+	pm	灰白

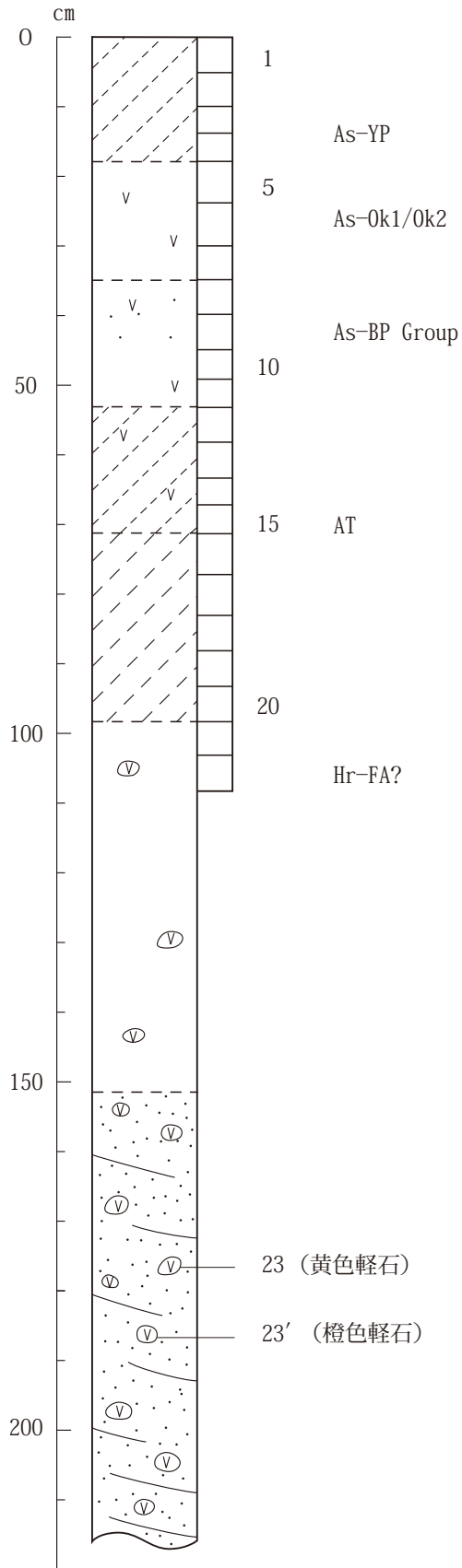
++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない. 最大径の単位は, mm.

bw:バブル型, pm:軽石型.

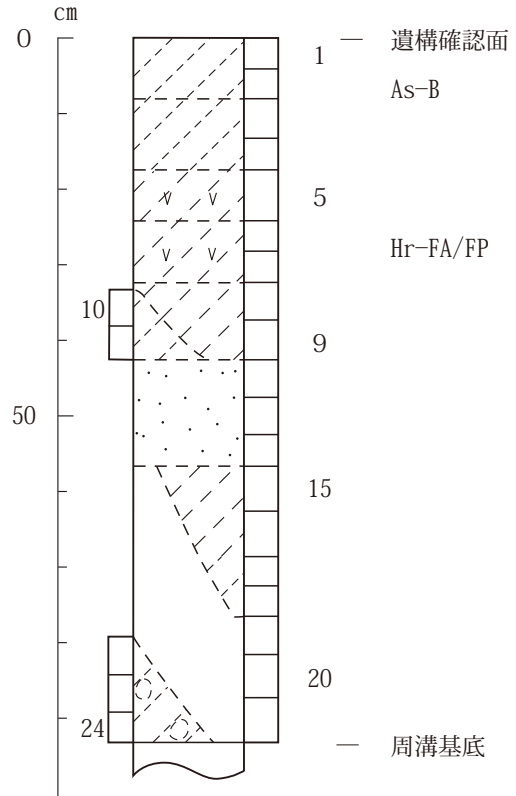
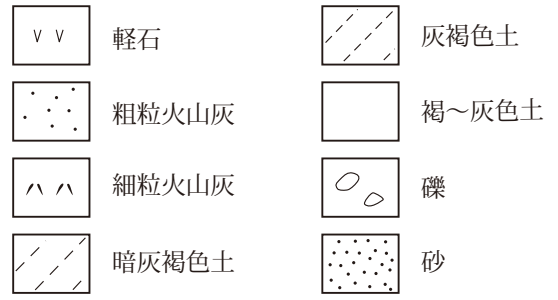
第39表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラスの屈折率 (n)
4区土層断面	2	1.501-1.504 (1.502)
	6	1.501-1.505 (1.503)
	16	1.500-1.501 (1.500)
	22	1.495±, 1.499-1.502
	23	1.503-1.508 (1.505)

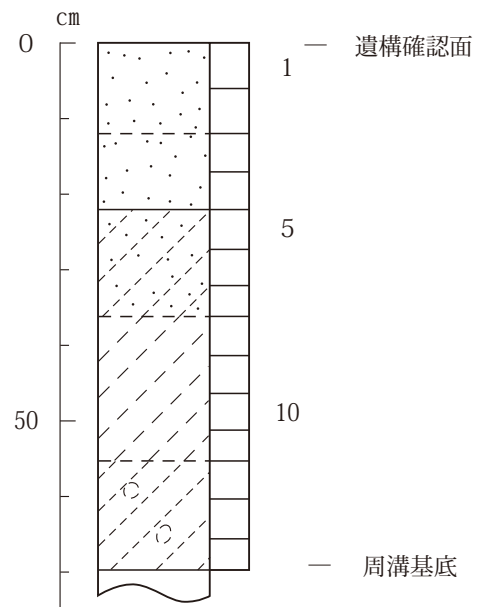
屈折率測定は, MAIOT による. ()はmodeを示す.



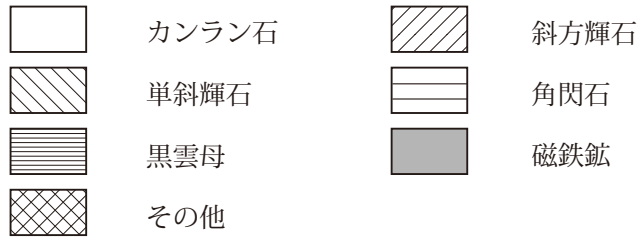
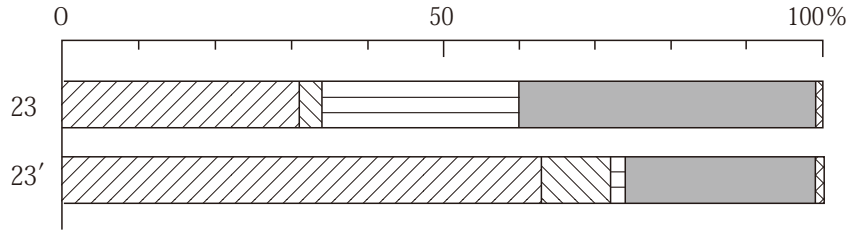
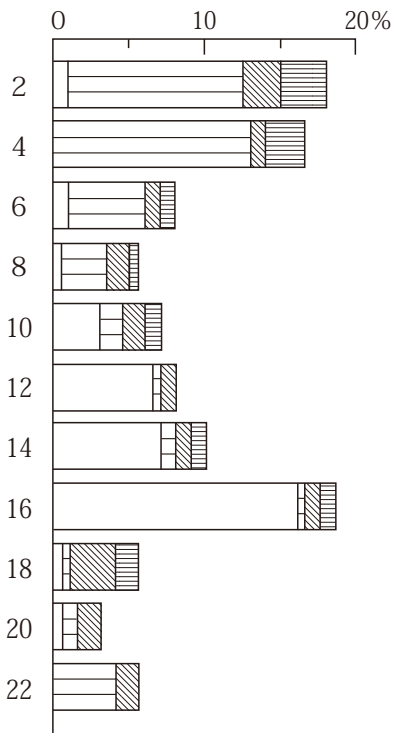
第193図 北調査区(4区)土層断面の柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)



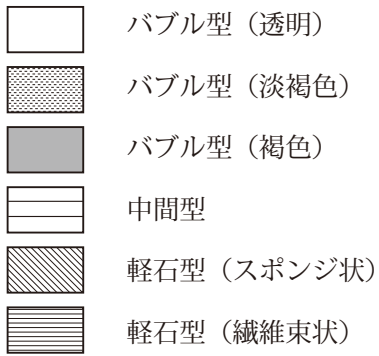
第194図 2号周溝墓セクションC-C'の土層柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)



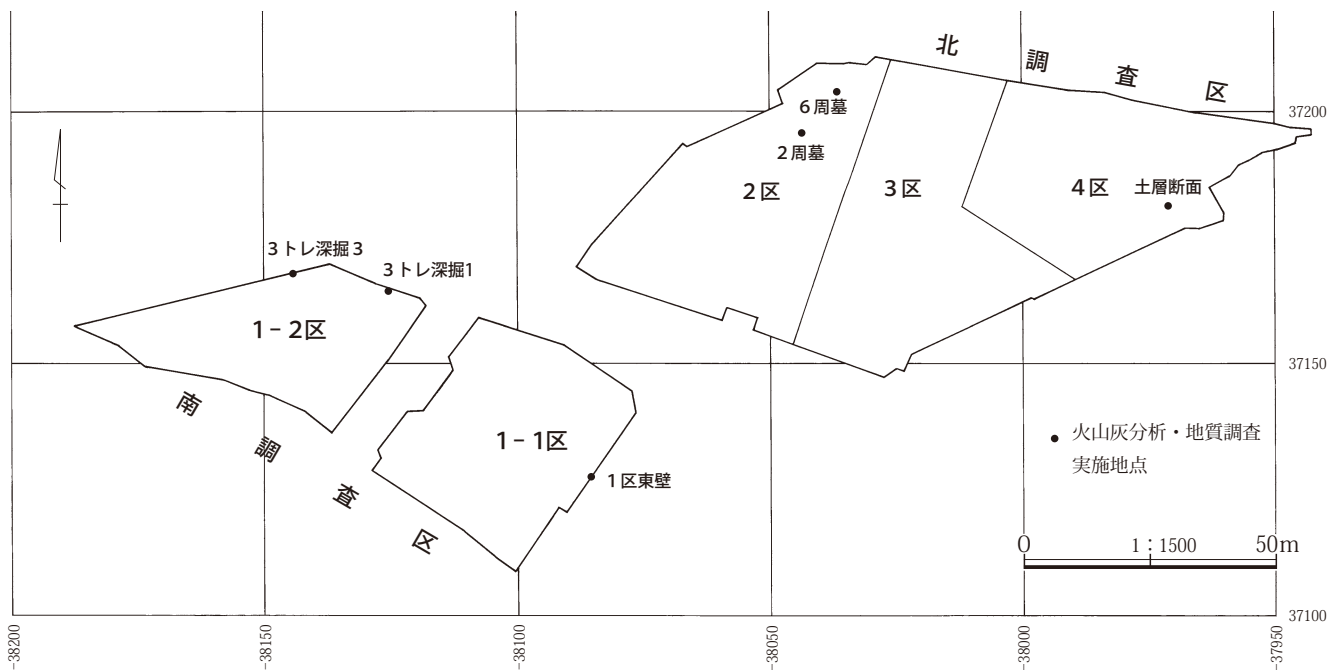
第195図 6号周溝墓セクションB-B'の土層柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)



第197図 北調査区(4区)土層断面採取軽石の重鉱物組成ダイアグラム



第196図 北調査区(4区)土層断面の火山ガラス比ダイアグラム



第198図 火山灰分析・地質調査実施地点

第2節 道原遺跡南調査区の地質調査

地質調査は平成17年度に道原遺跡南調査区で行った。その目的は2点あり、一つは台地斜面に位置する3号トレンチ深掘1の土層を調査し、含まれるテフラを分析することで、本遺跡のある台地(平成16年度の火山灰分析の結果から、葦川台地であると思われる)の形成年代を再確認することである。今一つは、低地部分の土層を調査し、含まれるテフラを分析することによって、5面にわたって調査した南調査区の、各面の年代を推定する根拠を得ることである。低地部は度重なる洪水によって、このような複数の遺構面が形成されたと考えられるが、それぞれを被覆する堆積層に含まれるテフラを分析することによって、その面の年代をある程度絞り込めると考えられる。そのため、1区東壁、3号トレンチ深掘3の2ヶ所で土層を調査し、テフラを分析した。以上の地質調査は株式会社古環境研究所に委託し、その結果を以下に掲載する。なお、この調査は北関東自動車道建設に伴い、群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が行われている道原遺跡、矢島遺跡、新島遺跡、只上深町遺跡において行ったもので、そのため、結果の報告もそれら4遺跡分を併せて行われている。ここではそのうち道原遺跡に関わる部分のみを掲載し、その他は割愛したが、「3 まとめにかえて」と「文献」はすべての遺跡を対象とした記述となっている。

1. はじめに

北関東自動車道建設に伴い、群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が行われている太田市域の遺跡のうち、道原遺跡南調査区(1区)において地質調査を行い、土層の観察記載を行った。

2. 道原遺跡南調査区(1区)の土層の層序

(1) 3号トレンチ深掘1

台地斜面から低地上にかけて位置する道原遺跡1区のうち、台地斜面上にある3号トレンチ深掘1では、最下位に亜円礫や黄色軽石を含む黄灰色砂礫層(層厚38cm、礫の最大径18mm、軽石の最大径18mm)が認められた(第

199図)。その上位には、下位より灰褐色砂質土(層厚15cm以上、13層)、砂混じり暗褐色土(層厚21cm、12層)、黄灰色軽石(最大径3mm)を多く含む白色軽石(最大径7mm)混じり暗灰褐色土(層厚26cm、11層)、白色軽石混じり灰色土(層厚20cm、軽石の最大径4mm、9層)、暗灰褐色土(層厚6cm、7層)、灰褐色土(層厚6cm、6層)、砂混じり灰褐色土(層厚31cm、1層)が認められる。発掘調査では、古墳時代初頭の石田川式土器が検出されているらしい。

土層断面で認められた土層のうち、最下位の黄灰色砂礫層に含まれる黄色軽石は、その色調やシャーベット状に風化していることなどから、約4.5万年前以前に赤城火山から噴出したと推定されている赤城鹿沼軽石(Ag-KP、新井、1962、町田・新井、2003など)に由来すると考えられる。

2004年度に発掘調査や自然科学分野の分析が行われた「葦川台地」と呼ばれる洪積台地あるいは「扇状地Ⅱ面」と分類される地形面(沢口、1977)上に位置する道原遺跡4区の調査では、台地を構成する砂礫層中に、従来記載されていたAg-KPのほかに、新しくAg-KPより下位にある赤城湯の口テフラ(Ag-UP、新井、1962、町田・新井、1992、2003)、約5.5万年前以前の赤城水沼テフラ群(Ag-Mz Group、鈴木、1990)、これらの間に層位がある赤城行川テフラ群(Ag-Nm Group、鈴木、1990)などに由来する可能性のある軽石が検出された。そしてこの砂礫層の上位に、榛名箱田テフラ(Hr-HA、約3.2万年前、早田、1996など)起源のテフラ粒子の混在や、上部に始良Tn火山灰層(AT、約2.6～2.9万年前、町田・新井、1976、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995)の降灰層準を伴う「暗色帯」の存在が認められた(古環境研究所、本章第1節掲載)。このことから、葦川台地については、岩宿面(沢口、1966)に相当する可能性が非常に高いことが明らかになった。道原遺跡1区3号トレンチ深掘1において、最下位に認められる砂礫層についても、層相を合わせると葦川台地構成層と考えられる。

その上位の土層に含まれる比較的細粒の黄灰色軽石と粗粒の白色軽石については、その岩相から、4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000)と、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、

新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)に由来する可能性が考えられる。したがって、最下位の砂礫層とこれらの軽石粒子を含む土層との間には、不整合があると考えられる。

(2) 1区東壁

1区東壁では、下位より白色軽石混じりで若干色調が暗い灰褐色土(層厚10cm以上、軽石の最大径4mm)、灰褐色土(層厚6cm)、灰色砂層(層厚5cm)、灰褐色土(層厚10cm)、粒径が粗く淘汰の良い灰色砂層(層厚14cm)、灰色砂質土(層厚28cm)、暗灰褐色土(層厚10cm)、黄灰色粗粒火山灰に富む黒灰褐色土(層厚5cm)、灰色土(層厚1cm)、砂混じり暗灰褐色土(層厚2cm)、灰色砂層(層厚0.8cm)、砂を多く含む灰褐色土(層厚19cm)、白色軽石や砂を含む灰色土(層厚18cm、軽石の最大径4mm)、道路用砂利層(層厚28cm)が認められる(第200図)。これらのうち、黄灰色粗粒火山灰に富む黒灰褐色土や、その上位の灰白色砂層の基底の凹凸が比較的顕著に認められる。

土層断面で認められた白色軽石については、その岩相からHr-FAまたはHr-FPに由来する可能性が考えられる。また黒灰褐色土中にとくに多く含まれている黄灰色粗粒火山灰については、その層位や岩相からAs-Bに由来する可能性が考えられる。

また土層断面で認められる凹凸については、耕作関係遺構の可能性もある。さらに本地点では、本遺跡の土層の上部の堆積が厚く、指標テフラの降灰層準のほかに、洪水層や洪水起源の粒子を母材とする土層が数多く認められる。

このように遺構の被覆層となりうる堆積層の多いことは本遺跡の特徴で、詳細な調査分析により遺跡が位置する渡良瀬川河岸地域における耕作をはじめとする土地利用形態の変遷、洪水・火山災害への昔の人々や社会の対応の様子、河道変遷史、河川利用史などを詳細に解明できる可能性がある。この研究は、テフラが多く降灰し、しかも洪水堆積物が多く認められる本遺跡周辺の風土を解明する手がかりとなろう。

(3) 3号トレンチ深掘3

調査区東壁と比較して、より下位の土層をよく観察できる3号トレンチ深掘3では、下位より暗灰褐色土(層

厚3cm以上)、黄灰色粗粒火山灰を多く含む灰褐色土(層厚4cm)、砂混じり灰色土(層厚13cm)、白色軽石混じり暗灰褐色土(層厚10cm、軽石の最大径5mm)、黄灰色砂質土(層厚8cm)、灰褐色砂質土(層厚4cm)、粒径が粗い灰色砂層(層厚15cm以上)が認められる(第201図)。

土層断面で認められた比較的細粒の黄灰色軽石と粗粒の白色軽石については、その岩相から各々As-Cと、Hr-FAまたはHr-FPに由来する可能性が考えられる。

3. まとめにかえて

土層の観察の結果をもとに、土層の層序について述べた。本地区では、従来群馬県域で検出されているテフラ(火山灰)のほかに、泥流起源の特徴的な洪水堆積物をはじめとする複数の洪水起源の砂層が認められる。洪水層のうち、泥流起源の特徴的な洪水堆積物については、818(弘仁9)年あるいはそれに近いとして年代指標に使える可能性がある。またそれが検出された矢部遺跡以外にも、古い粗粒の軽石を含んでいたり桃色がかった色調をもつ砂層として、他の遺跡でも追跡できる可能性がある。さらに、その下位の洪水堆積物については、東今泉鹿島遺跡において、上位から8世紀後半以降の住居址が検出されている洪水堆積物に対比される可能性がある。これらの洪水堆積物と、東山道をはじめとする遺構との関係も興味深い。

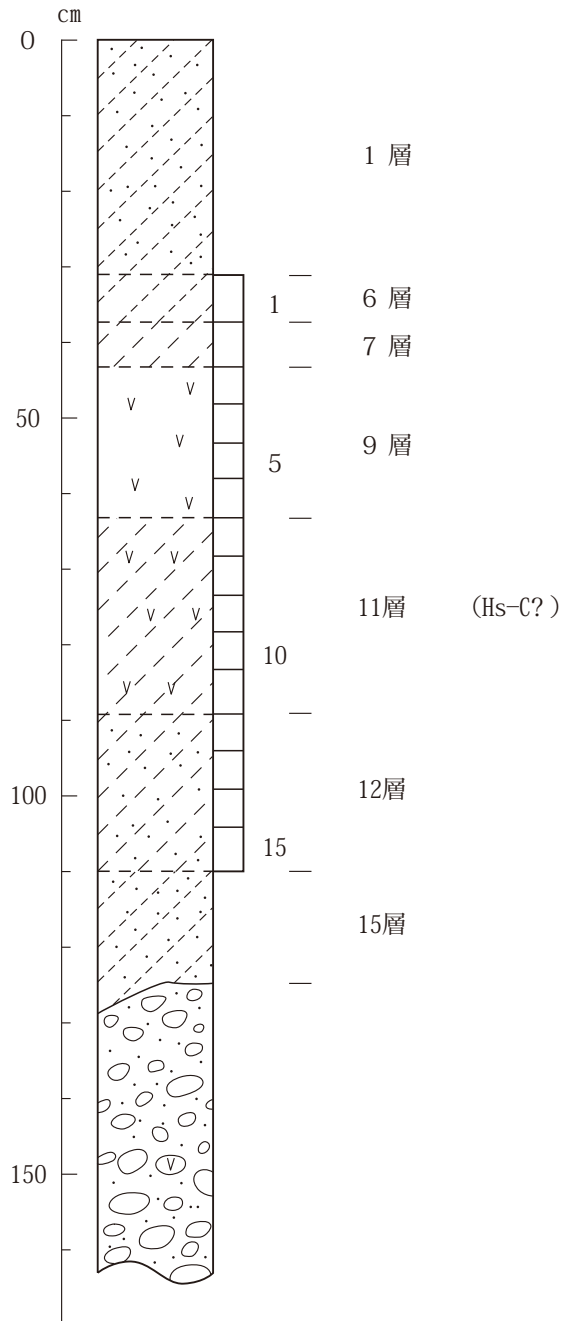
2004年度以降に行われている北関東自動車道建設に伴う発掘調査は、渡良瀬川河岸地域の遺構・遺物の記載、考古学資料の収集のみならず、従来詳細な研究に乏しかった本地域における遺跡の立地や展開に関する地形発達史や、比較的新しい時代の地質構造の解明のまたとない機会となっている。これまでも渡良瀬川河岸地域より西の遺跡で高精度の分析により環境や土地利用の変遷に関する分析データの蓄積が行われてきていることから、引き続き地形地質学研究者による詳細な土層断面観察と、同じ高精度の分析による資料の蓄積が期待される。

なお、当然今後の調査で新たに検出される土層や、考古遺物、さらに材などの自然遺物に関する分析が必要とされる場合がある。とくに近年では、加速器質量分析(AMS)法の開発により、微量の試料でも高精度の放射性炭素(^{14}C)年代測定が可能となっている。信頼度の高い測定機器による年代値は、おおよそ縄文時代以降につい

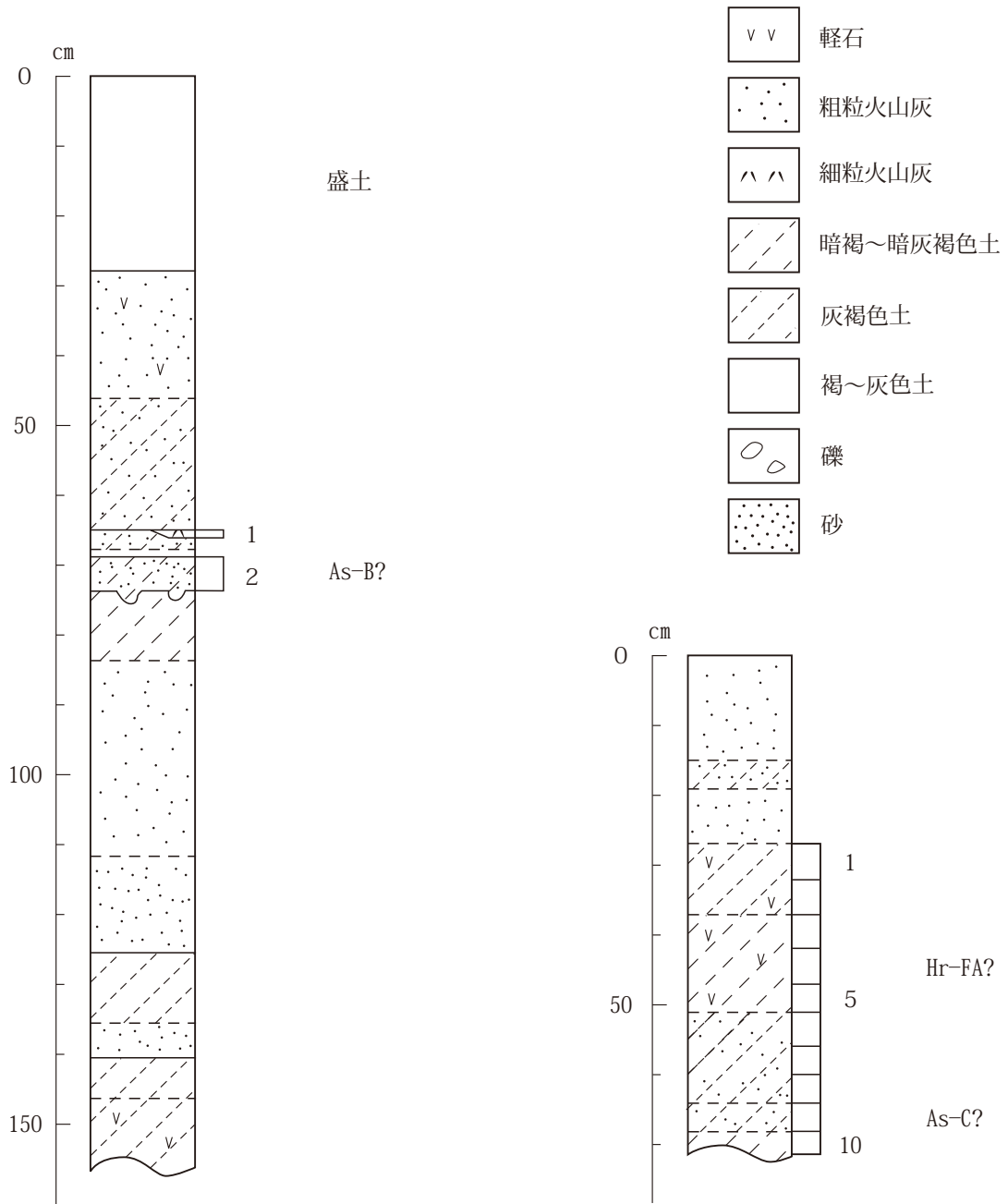
ては年輪年代などを基にした年代較正により、以前より遙かに高い信頼度をもって、暦年に近い年代値を提供できるようになっている。したがって、溝状遺構の基底部や河道跡から材(化石)が検出されたおりに、14C年代測定が実施されると、遺構の年代のみならず河道変遷史などを明らかにする材料ともなる。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀編年 群馬大学紀要自然科学編 10、p.1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層 考古学ジャーナルno.157、p.41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質 地団研専報no.45、65p.
 群馬県埋蔵文化財調査事業団(2004)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報、23.
 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代 第四紀研究34、p.377-379.
 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義- 科学46、p.339- 347.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス 東京大学出版会、276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス 東京大学出版会、336p.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ- 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p.865-928.
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の14C年代 第四紀研究26、p.79-83.
 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代 地質雑99、p.787-798.
 能登 健・内田憲治・早田 勉(1990)赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析- 信濃42、p.755-772.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井 神社古墳群・荒砥青柳遺跡」、p.103-119.
 沢口 宏(1966)大間々扇状地の地形発達史-予報- 群馬県高校社会科研究会会報no.7、p.12-24.
 沢口 宏(1977)渡良瀬川扇状地の地形とその教材化、県立太田女子高等学校研究集録、no.6、p1-18.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害第四紀研究27、p.297-312.
 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち 佐久考古通信no.53、p.2-7.
 早田 勉(1996)関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラ について- 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書7、p.256-267.
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」、p.325-336.
 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成 立する頃の土器の交 流」、p.41-43.



第199図 南調査区3号トレンチ深掘1の土層柱状図 (数字はテフラ分析の試料番号)



第200図 南調査区東壁の土層柱状図
 (数字はテフラ分析の試料番号)

第201図 南調査区3号トレンチ深掘3の土層柱状図
 (数字はテフラ分析の試料番号)

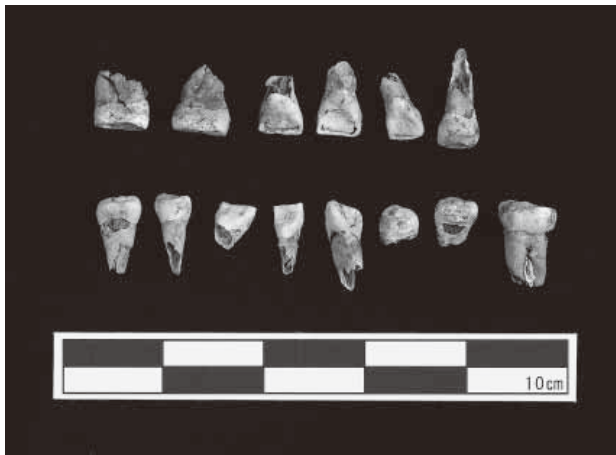
第3節 出土人骨・歯・獣骨

道原遺跡では、13基の土坑墓と3基の火葬墓、4基の土坑から人骨、あるいは歯が出土している。これらの遺構はいずれも中世のもので、比較的狭い範囲に墓地が形成されていたものと考えられる。このうち、ある程度残りがよく、取り上げることが可能だった11基の土坑墓と3基の土坑の人骨・歯について、性別、年齢、古病理などを明らかにするために鑑定分析を実施した。また、近世末以降に埋没したと推定される1号井戸の埋土からは獣骨が出土しており、これについても動物種、年齢、大きさなどを明らかにするため、鑑定分析を行った。以上の鑑定分析は宮崎重雄氏(古生物学会会員)に委託した。以下にその報告を掲載する。

1 道原遺跡出土の人歯・人骨

今回鑑定分析の対象となったのは11基の土坑墓、3基の土坑である。そのうち9基の土坑墓と2基の土坑からそれぞれ1個体分すなわち11個体分のヒトの歯が出土している。土坑によっては若干の人骨が伴っているものもある。歯はすべて遊離歯で、まずは歯種判定を行う作業をおこなった。

歯は人体のなかで最も風化浸食に強く、土中にあっても最後まで残存する。本遺跡では歯以外の部位も出土はあったが、ごく少量で保存状態も悪く、2例を除いて有意義な情報が得られる状態ではない。したがって、年齢推定も、性別推定も情報のほとんどを歯に頼らざるを得ない。ところがヒトの歯の性差はわずかで、歯だけに頼っ



第202図 1号土坑墓出土歯

て性別推定を行った場合、かなりのリスクを伴う。

本稿ではそれを念頭に置きつつ、性別判定では青山他(1957)、権田(1959)、上条(1980)、Matsumura (1995)などの歯の計測値に照らして推定を試みた。年齢推定は、歯の咬耗度による推定では栃原(1957)を参考にし、他の方法による推定では瀬田・吉野(1990)に示されたデータを参考にした。1、5号土坑墓では、さらに、Nakahashi and Nagai (1986)、中橋(1988)の年齢推定法も併用した。

1号土坑墓(第202図、第40表)

歯以外には、小片化した脳頭蓋・椎体・右上腕骨・右大腿骨などの肢骨片が検出される。このうち有意義な計測値が得られるのは右大腿骨のみで、骨体中央矢状径21.2mm、骨体中央横径27.6mm、骨体中央周78.0mmを計測する。

推定性別：大腿骨の骨体中央周が78.0mmと小さく、Nakahashi and Nagai (1986)、中橋(1988)の性別判定法に照合すれば女性相当である。歯の大きさは切歯、犬歯がやや大きめである他は、女性としても特に矛盾はない。

推定年齢：歯の咬耗度から壮年期後半から熟年期前半の年齢が推定される。**古病理：**9本の歯に齲蝕があり、どれも齲蝕部位は歯頸部である。とりわけ下顎第2小白歯では左右いずれの歯にも歯髓に達する径6mm前後の齲蝕窩が開いている。歯頸部に沈着した歯垢・歯石が齲蝕を誘発したものと思われる。**特記：**切歯の咬耗状態から鉗状咬合であったようである。

2号土坑墓(第203図、第41表)



第203図 2号土坑墓出土歯

第4章 自然科学分析

歯の他に、わずかに骨片が出土している。

推定性別：全体的に歯が小さめで、女性の可能性の方が高い。**推定年齢：**歯の咬耗度から壮年期後半から熟年期前半の年齢が推定される。**古病理：**現存する9本の歯のうち約半分の5本に齲蝕がある。そのうち大白歯4本の齲窩は特に大きい。

3号土坑墓(第204図、第42表)

歯の他に、圧碎された下顎骨・脳頭蓋片と大腿骨骨幹部などの肢骨片及び細骨片が出土している。

推定性別：咬耗が進んでいて、歯の計測値が本来より小さめになっていると思われるが、それを考慮しても小さめの歯で女性と推定した。**推定年齢：**咬耗が激しく進ん

第40表 1号土坑墓出土歯計測表

切歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
上顎	右中切歯	8.8	7.2	10.8	遠心歯頸部	切縁舌側面に帯状象牙質	
	左中切歯	8.8	7.2	10.2	遠心歯頸部に大きな齲窩	切縁舌側面に帯状象牙質	
下顎	右中切歯	6.0	6.3	8.2	近心・遠心歯頸部	切縁に細い帯状の象牙質	
犬歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
上顎	右犬歯	8.3	9.2	9.1	近心・遠心・唇側歯頸部	尖頭部に長菱形の象牙質露出	
下顎	右犬歯	7.0	7.8	9.9	近心・遠心歯頸部	尖頭部に菱形の象牙質露出。咬耗面遠心へ傾斜	
	左犬歯	7.0	7.9	9.2	近心・遠心歯頸部	尖頭部に菱形の象牙質露出。咬耗面遠心へ傾斜	
下顎小白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	Black分類	齲蝕	咬耗部位・咬耗度	
右第2小白歯	7.0	8.8	5.7	U	遠心歯頸部に歯髄に至る径6・の齲窩、近心歯頸部にも帯状の浅い齲蝕	頬側咬頭にごくわずか象牙質露出	
右第1小白歯	7.2	7.9	6.3	/	/	頬側咬頭に帯状の象牙質露出	
左第1小白歯	7.4	7.7	7.6	/	/	頬側咬頭に三角形の象牙質露出	
左第2小白歯	6.5	8.4	4.9	U	近心・遠心歯頸部に齲蝕。遠心部のは歯髄に至る径5.9・の齲窩	頬側咬頭に帯状の象牙質露出	
上顎大白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
左第2大白歯	8.7	11.3	5.8	遠心歯頸部	咬耗は全面に及び近心咬頭で半円状に大きく象牙質露出		
左第1大白歯	9.3	11.4	5.9	/	咬合面全面に咬耗が及ぶが、象牙質はわずかに露出		
下顎大白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右第1大白歯	11.0	10.4	5.9	/	咬耗は全面に及ぶが、頬側の近心咬頭、遠心咬頭に点状の象牙質		

第41表 2号土坑墓出土歯計測表

犬歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
上顎	右犬歯	7.4	8.0	9.5	/	尖頭部に小さな象牙質露出、2×1mm	
下顎	右犬歯	6.3	7.1	9.0	/	尖頭部に菱形の象牙質露出、最大2mm	
上顎小白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右	第1小白歯	7.0	9.9	7.0	/	ほぼ全面に咬耗が及んでいるが、象牙質は舌側咬頭のみ、最大2mm	
下顎小白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右	第2小白歯	7.6	8.7	6.0	/	頬側咬頭にごくわずか象牙質露出	
	第1小白歯	7.0	8.0	7.9	近心歯頸部に齲蝕	頬側咬頭にごくわずか象牙質露出	
上顎大白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右	第3大白歯?	7.5	6.9	6.5	近心歯頸部・歯頸部に最大径10mmの歯髄に達する齲蝕	舌側咬頭にエナメル質のみの咬耗あり	
	第2大白歯	8.9	11.4	6.4	近心・遠心歯頸部に歯髄に達しない大きな齲蝕あり	歯冠部には全面象牙質露出	
下顎大白歯						単位：mm	
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右	第2大白歯	11.2	10.4	5.5	遠心歯冠部には径4.5mmの大きな齲蝕	頬側3咬頭には最大径3mmの象牙質露出	
	第1大白歯	10.0+	10.5	5.0	遠心歯冠部には歯髄に達しない大きな齲蝕	頬側2咬頭には最大径4.5mmの象牙質露出	

でいて、老年期と推定される。**古病理**：現存する4本の歯のうち2本に齲窩がある。いずれも歯頸部に発症している。**特記**：切歯の咬耗状態から鉗状咬合であったことがわかる。

5号土坑墓

歯の出土はない。最大保存長15.3cmの右(?)大腿骨骨幹部、緻密質の剥離した大腿骨骨頭およびいくつかの骨片が残存する。

年令：成人。**性別**：男性。大腿骨中央周が84.0mmあり、Nakahashi & Nagai(1986)、中橋(1988)の提唱した古人骨



第204図 3号土坑墓出土歯

性別判定法を参考にすれば、男性の可能性の方が高い。

6号土坑墓

微細骨片が出土しているのみであり、部位等の推定はできない。

7号土坑墓(第205図、第43表)

歯の他に、頭蓋骨の微細骨片が数100片残存する。

性別：犬歯をはじめ歯の計測値が小さいことから、どちらかといえば女性の可能性の方が高い。**年令**：歯の咬耗度から、青年期～壮年期と推定される。**古病理**：残存す



第205図 7号土坑墓出土歯

第42表 3号土坑墓出土歯計測表

切歯							単位：mm
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕		咬耗部位・咬耗度	
上顎 右中切歯	8.1	6.5	8.6	なし		舌側面に大きく象牙質露出	
上下不明 側切歯?	5.8	6.1	6.5	遠心側に歯髄に達する齲蝕		舌側面全面に象牙質露出	
犬歯							
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕		咬耗部位・咬耗度	
上下不明 左右不明	6.0	7.1	6.9+	近心・遠心歯頸部に形4.3mmの齲窩あり		咬耗激しく進む。尖頭部径3mmの半円形の象牙質	
上顎小白歯							
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕		咬耗部位・咬耗度	
左右不明 第1小白歯?	7.4	8.4	8.4	なし		咬合面は全面象牙質露出	
右 第2小白歯	6.7	9.0	7.0	なし		咬合面はほとんど象牙質露出	

第43表 7号土坑墓出土歯計測表

犬歯							単位：mm
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕		咬耗部位・咬耗度	
上顎 右犬歯	6.6	7.9	7.3	遠心歯冠部にわずかに齲蝕あり		尖頭部に象牙質大きく露出。径5.5mm	
上下不明 ?犬歯	6.5	7.8	8.7	尖頭部に径4.4mmの齲蝕、遠心歯頸部と歯冠部にそれぞれ小さな浅い齲蝕		尖頭部に象牙質大きく露出	
上顎小白歯							
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕		咬耗部位・咬耗度	
右第1小白歯	7.1	9.4	7.1	遠心側に歯髄にいたらない大きな齲蝕径5.3mm		舌側咬頭に半円形の象牙質露出頬側咬頭はエナメル質全面咬耗	
上顎大白歯							
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕		咬耗部位・咬耗度	
右 第2又は3大白歯	8.9	10.7	6.1	遠心側に歯髄にいたらない径4.7mmの齲蝕		咬耗僅かにあり	
左 第2大白歯	9.5	11.2	6.3	歯頸部にわずかに齲蝕		咬合面エナメルにわずかに咬耗	

第4章 自然科学分析

る5本の歯のすべてに齲蝕がある。そのうち上顎第1臼歯には径5.3mmの齲蝕が、その他の2本には径4mmを越える齲蝕がある。**特記**：犬歯の咬耗度が大きく、大白歯の咬耗度は比較的小さい。本個体には犬歯を頻繁に使用する生活習慣があったようである。

8号土坑墓(第206図、第44表)

歯の他に、頭蓋骨の微細骨片が数10片残存する。

性別：犬歯をはじめ全体的に歯が小さめなので、女性の可能性がある。**年齢**：歯の咬耗度から、壮年期～熟年期と推定した。**古病理**：齲蝕の数はわりと少ない。左第3大白歯で齲蝕が歯髄に達している以外は齲蝕の程度は全体的に軽度である。**特記**：右第1大白歯では咬合面の遠心側3/2に、左上顎第2大白歯では咬合面の4/3に象牙質

が露出している。歯のこの部分を多用する生活習慣があったことがうかがえる。

9号土坑墓(第207図、第45表)

歯の他に、微細骨片が少量残存する。



第206図 8号土坑墓出土歯

第44表 8号土坑墓出土歯計測表

切歯							単位：mm	
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
上顎	右側切歯	6.9	5.5	9.0	なし	切縁にわずかな象牙質露出		
	右中切歯	8.7	6.3	9.7	なし	切縁に線状の象牙質露出		
	左中切歯	8.3	6.1	9.5	遠心歯頸部	切縁に線状の象牙質露出		
下顎	左右不明側切歯	5.7	5.8	5.7	なし	切縁に带状の象牙質露出		
	左右不明中切歯	4.6	3.8	3.8	なし	切縁に長方形に象牙質露出		
左	第?小白歯	6.4	8.0	4.6	/	頬側咬頭に大きく象牙露出		
犬歯								
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
上顎	右犬歯	7.5	8.0	7.0	/	尖頭部に大きく象牙質露出		
	左犬歯	7.4	8.8	8.2	近心歯頸部に軽度の齲蝕	舌側面が咬耗、尖頭部舌側歯頸部に象牙質露出する		
下顎	右犬歯	6.4	7.4	6.2	/	尖頭部に大きく象牙質露出		
	左犬歯	6.4	7.5	8.6	/	尖頭部に象牙質露出、咬耗面は頬側に傾く		
上顎小白歯								
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
左	第?小白歯	7.8	5.2	9.2	遠心歯頸部	頬側咬頭ではわずかに象牙、舌側咬頭では遠心側に大きく象牙		
	第?小白歯	6.5	9.8	6.4	/	頬側咬頭ではわずかに象牙、舌側咬頭では遠心側に大きく象牙		
下顎小白歯								
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右	第?小白歯	6.7	7.7	6.2	遠心歯頸部と咬合面遠心部のエナメル質に軽度の齲蝕	頬側咬頭に象牙質露出		
	第?小白歯	6.5	7.6	7.1	/	頬側咬頭にわずかに象牙質露出、頬側面に大きな咬耗痕		
左	第?小白歯	6.4	8.0	4.6	/	頬側咬頭に大きく象牙露出		
上顎大白歯								
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心舌側咬頭の退化	外形の諸型	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
左	第1大白歯	9.6	11.4	4.0	4	B1	/	近心両咬頭に大きな象牙質、遠心2咬頭にもわずかに象牙質露出
	第2大白歯	8.9	10.9	5.5	3+ ?	/	近遠心歯頸部	咬合面の3/4に象牙質露出
	第3大白歯	7.7	10.3	6.0	/	/	近心歯頸部に歯髄に達する齲蝕	エナメル質のみ咬耗
下顎大白歯								
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度		
右	第1大白歯	11.5	11.2	4.1	/	遠心2/3に大きく象牙質		
左	第2又は3大白歯	4.3	9.2	6.0	/	遠心咬頭に小さく象牙質		

性別：犬歯を欠くが、切歯以外は歯が大きいことなどで、男性の可能性を考えたい。年令：大白歯が未咬耗又は咬耗されていてもきわめて軽微なことから、少年期が推定される。古病理：所見なし。

10号土坑墓(第208図、第46表)

歯1本その他、微細骨片が少量残存する。

性別：現存しているのは上顎第1小白歯1本だけで、推定は困難であるが、計測値によれば男性に近い。年令：咬耗度は壮年期～熟年期を思わせる。古病理：所見なし。

14号土坑墓(第209図、第47表)

歯の他に、頭蓋骨・肢骨の微細骨片が多数出土している。

性別：咬耗がはげしく進んでいて、計測値が本来の大き

さを正しく反映してないと思われ、計測値を根拠とした年齢推定は困難である。年令：咬耗度が高く、老年期の個体である。古病理：歯冠部を欠き、歯髓腔の露出している歯が1本あるが、咬耗しつくされた結果なのか、齶蝕によるものかはっきりしない。



第207図 9号土坑墓出土歯



第208図 10号土坑墓出土歯



第209図 14号土坑墓出土歯

第45表 9号土坑墓出土歯計測表

切歯		単位：mm					
歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度			
上顎 右側切歯	6.6	5.6+	8.4	切縁にわずかに咬耗?			
上顎小白歯		近遠心径	頬舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度		
左第2小白歯		7.1	9.0	6.2	咬耗状況不明		
上顎大白歯		近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心舌側咬頭の退化	外形の諸型	咬耗部位・咬耗度
左	第1大白歯	10.8	10.9	6.4	4	1	咬耗エナメル質のみ
	第1大白歯	10.5	11.0	6.5	4	1	?
右	第2大白歯	9.5	11.1	6.1	3+	1	未咬耗
	第3大白歯	8.7	10.5	5.6	3+?	?	未咬耗
下顎大白歯		近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心咬頭の退化	裂溝型	咬耗部位・咬耗度
右	第1大白歯	11.7	11.0	5.6	?	?	未咬耗
左	第1大白歯	10.3+	9.6+	5.5	5	5+	咬耗ごくわずか

第46表 10号土坑墓出土歯計測表

上顎小白歯		単位：mm				
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度		
右第1小白歯	7.8	10.2	8.9	頬側咬頭に小さな、舌側咬頭には舌側半に象牙質露出		

第4章 自然科学分析

第47表 14号土坑墓出土歯計測表

下顎切歯
保存不良の切歯があるが、破損・磨耗はなはだしく歯種・左右の判定困難

犬歯 単位：mm

	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度
下顎	右犬歯	6.0	7.1	6.0	咬耗激しく尖頭部では象牙質が全面大きく露出している
	左犬歯	5.9	7.1	4.5	咬耗激しく尖頭部では象牙質が全面大きく露出している

上顎小白歯

	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度
右	第2?小白歯	6.1+	8.3+	5.2	舌側咬頭に大きく象牙質露出
	第1小白歯	6.5	8.7	5.9	咬耗激しく咬合面全面に象牙質露出
左	第1?小白歯	?	?	?	
	第2?小白歯	6.0+	8.2+	6.2	咬耗は進んでいるが象牙質の露出はわずかである。

下顎小白歯
下顎小白歯の可能性のある歯が3本あるが、保存きわめて不良で歯種判定困難。
他に歯冠部は完全に咬耗(或いは齶蝕)しつつされ、歯髓腔が露出している小白歯と思われる歯が存在する。

上顎大白歯

	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度
右	第1又は2大白歯	?	?	?	咬合面の全面象牙質露出
左	第2又は3大白歯	8.6	9.9	5.6	咬合面の全面象牙質露出

下顎大白歯

	歯種	咬耗部位・咬耗度
右	第2又は3大白歯	咬合面の約80%に象牙質露出
	第1又は2大白歯	咬合面の約半分に象牙質露出
左	第2又は3大白歯	近心舌側咬頭に大きく象牙質露出

15号土坑墓(第210図、第48表)

歯のほか、細片となった骨が数100片残存する。
性別：犬歯をはじめ歯が全体的に小さく、女性の可能性がある。**年令**：歯の咬耗度から青年期～壮年期前半と推定される。**古病理**：3本の歯に齶蝕が認められる。右第2大白歯では歯髓腔に達する径4.2mmの齶窩がある。**特記**：犬歯の咬耗が特に激しく、近心側の歯の咬耗が進んでいる。それに比べ大白歯の咬耗は少ない。犬歯付近を頻繁に使う生活習慣があったようである。

15号土坑(第211図、第49表)

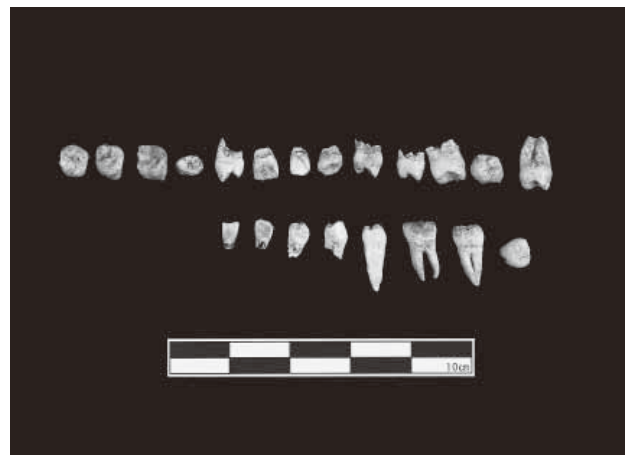
歯の他に、頭蓋骨・肢骨・肋骨片などの微細骨片が多数出土している。
性別：犬歯・下顎切歯はやや大きめであるが、小白歯・大白歯はことごとく小さめで、女性の可能性の方が高いとみる。**年令**：下顎の第3大白歯は未咬耗で、歯根が未完成で、歯髓腔が6.6×6.0mmと大きく開いていることなどから思春期と推定した。**古病理**：所見なし。

64号土坑

ヒトのものと思われる焼骨2片で、最大保存長は



第210図 15号土坑墓出土歯



第211図 15号土坑出土歯

第48表 15号土坑墓出土歯計測表

切歯							単位：mm
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌面窩の分類	齧蝕	咬耗部位・咬耗度
上顎	右中切歯	8.2	6.8	9.7	2	/	?
	左中切歯	8.2	6.6	9.0	2	/	切縁の舌側に太めの線状の象牙質露出
	左側切歯	6.8	5.9	8.9	/	/	近心切縁舌側に带状の象牙質露出
下顎	右中切歯	5.5	5.1	6.6	/	/	切縁に带状の象牙質露出
	左中切歯	5.3	5.2	6.1	/	/	切縁に带状の象牙質露出
	左側切歯	5.6	6.0	7.6	/	/	切縁に带状の象牙質露出

犬歯						
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齧蝕	咬耗部位・咬耗度
上顎	右犬歯	7.3	7.6	6.8	/	尖頭部近唇側に大きく象牙質露出，咬耗面近心に傾斜
	左犬歯	7.3	7.4	8.1	/	尖頭部近唇側に大きく象牙質露出，咬耗面近心に傾斜
下顎	右犬歯	6.4	7.0	7.5	/	尖頭部に5.0*0.8mmの象牙質露出
	左犬歯	6.5	7.1	8.1	/	尖頭部に4.5*0.5mmの象牙質露出，咬耗面遠心側に傾斜

下顎小白歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	Blackの分類	齧蝕	咬耗部位・咬耗度
右	第2小白歯	6.4	7.6	4.1	Y	/	頬側咬頭にイチョウの波状に象牙質露出
	第1小白歯	6.7	6.8	6.7	/	/	頬側咬頭に太い線状に象牙質露出
左	第1小白歯	6.7	7.0	6.8	/	/	頬側咬頭に太い線状に象牙質露出

上顎大白歯								
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心舌側咬頭の退化	外形の諸型	齧蝕	咬耗部位・咬耗度
右	第2大白歯	8.2	9.5	5.7	4	2	近心歯冠部に径4.2mmの歯髄に達する齧蝕	咬耗僅か
	第1大白歯	9.4	10.2	4.7	4	2	咬合面近心辺に小さな齧蝕	遠心頬側咬頭を除き咬頭に象牙質点状に露出
左	第1大白歯	9.7	10.2	5.1	4	2	/	遠心頬側咬頭を除き咬頭に象牙質点状に露出

下顎大白歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心咬頭の退化	齧蝕	咬耗部位・咬耗度
右	第1大白歯	9.6	9.0	5.0	5	遠心歯頸部に歯髄に達しない齧蝕あり	頬側2咬頭に点状の象牙質露出
左	第2大白歯	9.3	8.5	5.5	4+	/	咬耗僅か

第49表 15号土坑出土歯計測表

切歯							単位：mm
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌面窩の分類	咬耗部位・咬耗度	
上顎	右側切歯	6.7	6.5	9		咬耗僅か	
	右中切歯	8.3	7.1	10.7	2	咬耗僅か	
下顎	右?中切歯	5.4	5.8	8.9		切縁に線状に象牙質露出	
	右?側切歯	6.2	6.2	9.4		切縁部にごく僅かエナメル質の咬耗	

犬歯						
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
上顎	右犬歯	7.8	8.0	10.3	尖頭部に微小な点状象牙質露出	
下顎	右犬歯	7.0	8.1	9.0	尖頭部にごく僅か咬耗	

上顎小白歯						
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
右	第2小白歯	6.4	9.2	6.2	咬耗ごく僅か?	
	第1小白歯	7.1	9.8	8.4	頬側咬頭に微少の象牙質露出	
左	第1小白歯	7.1	9.7	8.0	両側咬頭のエナメル質に咬耗	
	第2小白歯	6.6	9.3	6.3	両側咬頭のエナメル質に咬耗	

下顎小白歯						
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	Blackの分類	咬耗部位・咬耗度
右	第2小白歯	6.5	7.9	6.8	Y	ごく僅か?
	第1小白歯	6.7	7.5	7.5	/	ごく僅か?

上顎大白歯								
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心舌側咬頭の退化	カラベリー結節	外形の諸型	咬耗部位・咬耗度
右	第3大白歯	9.0	10.8	6.7	3+	/	/	歯根は完成し，咬耗はごく僅か?
	第2大白歯	9.4	10.9	6.8	3+	/	/	咬耗はごく僅か
	第1大白歯	10.1	11.5	6.7	4	痕跡	B2	各咬頭にごく僅か
左	第1大白歯	9.9	11.5	5.7	4	/	B2	各咬頭にごく僅か
	第2大白歯	9.1	10.7	6.2	3+	/	/	咬耗はごく僅か
	第3大白歯	9.2	10.7	7.8	3+	/	/	未咬耗

下顎大白歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心咬頭の退化	裂溝型	咬耗部位・咬耗度
右	第3大白歯	9.8	9.1	5.8		/	未咬耗，歯髄腔は大きく開き径6.6×6.0mm
	第2大白歯	10.2	9.7	6.8	4+	/	咬耗はごく僅か
	第1大白歯	10.6	10.7	6.3	5	Y5	咬耗はごく僅か

第4章 自然科学分析

42.0mmである。亀裂が目立ち、灰白色化している。脛骨の可能性はある。

性別：不明。**年齢**：不明。**特記**：焼骨となっていないウマの基節骨近位端片が出土している。後からの混入と思われる。

81号土坑(第212図、第50表)

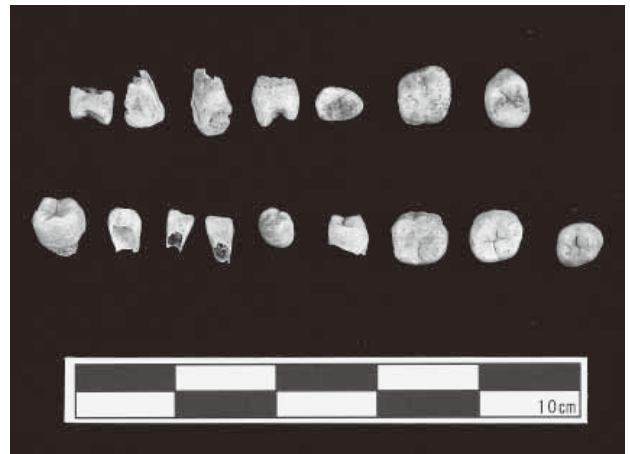
歯の他に、脳頭蓋骨片など数10片の細骨片が出土している。

性別：歯の計測値が小さく、女性を思わせる。**年齢**：下顎の第3大臼歯と思われる歯に咬耗の痕跡が僅かしかなく、青年期と推定される。他の歯の咬耗度もこの推定年齢に矛盾するものではない。**古病理**：所見なし。

参考・引用文献

青山敏男・松本 靖・小林徳之助・松田隆雄(1957) 日本人個体歯の大きさの性的差異について 歯科医学、20、 344-353。
 柄原 博(1957)、日本人歯牙の咬耗に関する研究 熊本医学会雑誌、31,607-656。
 権田和良(1959)、歯の大きさの性差について 人類学雑誌、67,151-163。
 Nakahashi, T. and Nagai, M. (1986) Sex Assessment of Fragmentary

Skeletal Remains. 人類学雑誌、94 (3) 289-305。
 中橋孝博(1988)古人骨の性判定法「日本民族・文化の生成1 - 永井昌文教授退官記念論文集」、217-233。
 瀬田季茂・吉野峰生(1990)「白骨死体の鑑定」 令文社。
 Matsumura.H (1995) A Microevolutional History of the Japanese People as Viewed from Dental Morphology. National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum, Tokyo.
 上條雅彦(2000)「日本人永久歯解剖学」 アナトーム社



第212図 81号土坑出土歯

第50表 81号土坑出土歯計測表

切歯							単位：mm
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌面窩の分類	咬耗部位・咬耗度	
上顎	左右不明中切歯	8.0+	6.7	11.2	3	遠心切縁に点状の象牙質露出	
下顎	右側切歯	5.6	6.1	9.1	/	切縁の半分に象牙質露出	
	右中切歯	5.3	4.7+	6.0+	/	切縁に線状の象牙質露出	
犬歯							
	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高		咬耗部位・咬耗度	
上顎	右犬歯	7.3+	8.7	10.1		尖頭部に点状の象牙質露出	
下顎	右犬歯	6.6	6.0+	8.6+		尖頭部に点状の象牙質露出	
上顎小白歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高		咬耗部位・咬耗度	
右	第2小白歯	6.8	8.6	6.4		象牙質の露出なし	
	第1小白歯	7.0	9.4	8.8		象牙質の露出なし	
左	第2小白歯	6.8	9.8	6.6		象牙質の露出なし	
下顎小白歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	Blackの分類	咬耗部位・咬耗度	
右	第2小白歯	7.0	8.3	7.8	U	象牙質の露出なし	
	第1小白歯	6.7	7.6	8.2	/	頬側咬頭に象牙質露出	
上顎大臼歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	外形の諸型	咬耗部位・咬耗度	
右	第2又は3大臼歯	8.8	11.8	6.5	C3	象牙質の露出なし	
	第1大臼歯	10.4	11.4	6.9	A1	近心舌側咬頭に点状の象牙質露出	
下顎大臼歯							
	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心咬頭の退化	裂溝型	咬耗部位・咬耗度
右	第3大臼歯?	8.1	9.4	5.2		/	咬耗の痕跡わずかにあり
	第2大臼歯	10.7	9.7	7.1	4+	Y4	象牙質の露出なし
	第1大臼歯	11.1	10.2	6.7	5	Y5	頬側2咬頭と遠心咬頭に象牙質の露出
左	第2大臼歯	10.4	10.1	7.3	4+	/	象牙質の露出なし

2 道原遺跡 1号井戸出土の馬骨

出土したのはウマの右肢骨である。上腕骨は骨体部のみの残存で、保存きわめて不良である。橈骨も保存きわめて不良であるが、骨体中央部の中央幅および中央径が30.3mm、19.6mmを計測し、近位端幅および中央径が63.0(+) mm、40.2mm (+)を計測できる。また、中手骨の中

央幅は28.0mmである。

これら計測値から推定すると、体高115cm～125cm程の日本在来馬の小型馬相当の個体であると思われる。

参考文献

西中川 駿編(1991)「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書。

第5章 総括

道原遺跡では、ここまで述べてきたように、各時代にわたって多種多様な遺構が調査されている。ここではそれらの成果と歴史的意義を時代ごとにまとめ、調査の総括としたい。

1 遺跡の立地

道原遺跡の立地する地点は、7ページの第4図に見られるように、扇状地、砂礫台地、旧河道、谷底平野などが複雑に入り組んだ場所である。今回の調査区は、概ね渡良瀬扇状地か、あるいは葦川台地と呼ばれる台地(本遺跡周辺の台地は市場台地とも呼ばれる)の上にあると考えられていたが、北調査区の4区で行った地層観察によって、葦川台地上にあることが確実にとなった。渡良瀬扇状地は『太田市史 通史編 自然』(1996 太田市)の澤口宏「第6節平野の地形・地質」によればⅠ～Ⅲ面に分類されているが、そのうち最も古いⅠ面では扇状地堆積層の上に上部ロームが堆積し、その下部にAs-BPが見られるという。これに対して、本遺跡の北調査区では堆積しているロームが厚く、As-BPのさらに下位に暗色帯が認められることから、渡良瀬扇状地Ⅰ面よりも古く遡り、葦川台地に相当することが判明したのである。

この葦川台地は、渡良瀬川の流路変遷、扇状地の形成過程などを考える上で重要な存在であるが、詳細な火山灰分析などはこれまでほとんど行われておらず、形成年代が不明確であった。そのため、本遺跡で火山灰分析、地質調査を行うこととした。それらの分析結果については第4章第1・2節に掲載したとおりである。それによれば、本遺跡では約4.5万年前よりも遡ると推定されている赤城鹿沼テフラ(Ag-KP)を含む砂層(扇状地堆積層)

の上にロームが堆積し、その最も下位には榛名箱田テフラ(Hr-HA：約3万年前)が含まれていることが判明したことから、本台地の形成は約4.5万年前以降、約3万年前以前に始まったことが分かり、形成年代の一端を把握することができた。

なお、本遺跡において台地のロームが良好に残っているのは、北調査区と、南調査区の北端部分であり、それより南側は、現矢場川に向かって傾斜を下げる斜面となり、ロームは削られて何層もの洪水堆積層が厚く堆積しているという状況になる。それらの土層は、縄文時代以降の数多くの洪水によってもたらされたものと考えられるが、その間には水田・畠として利用されていた面や土坑などが掘られた面があり、複雑な変遷を示している。発掘調査ではそれらの面を順に掘り下げて調査し、本書ではそれらを整理して5面に分けて報告した。堆積している土層については、南調査区の2ヶ所(1区東壁と3号トレンチ深掘3と呼ばれる地点。第198図参照)で地質調査を行い、As-C、Hr-FAあるいはFP、As-Bなどを確認し、それらを各調査面の年代を決める根拠の一つとした。地質調査の結果は、第4章第2節に掲載した。

2 縄文時代

太田市北東部の渡良瀬川流域の地域では、縄文時代の遺跡は金山山麓の渡良瀬扇状地Ⅰ面に多く、より東側の地域には少ない傾向が指摘されている。これは東に行くに従って、渡良瀬川の氾濫層が厚く堆積しているためと考えられ、実際本遺跡周辺では、縄文時代の遺跡はこれまでほとんど知られていなかった。ただし、本遺跡が立地する葦川台地のような古い地形が残っていれば、縄文

時代の遺跡が見つかっていても不思議ではないのであるが、この台地はごく狭いということもあり、これまで調査されたことがなかったのである。

そのような状況の中、今回本遺跡が調査され、渡良瀬川にごく近い地域としては希少な縄文時代の集落が発見されたのである。本遺跡では縄文時代中期の竪穴住居4軒のほか、前期から晩期の遺物が出土している。これによって渡良瀬川にごく近い地域においても、縄文時代から集落が形成されていたことが明らかとなったが、本遺跡は台地の北西端に近い部分にあると考えられるので、南東方向に続く台地中央部分にかけては、さらに縄文時代の集落が存在する可能性がある。本遺跡の調査結果はこの地域における縄文時代集落調査の一つの指標になるものであると言える。

3 弥生時代

弥生時代は遺構・遺物とも少ないが、これは周辺の遺跡でも同様であり、北関東自動車道建設の関連で調査された矢部遺跡、向矢部遺跡などでも、遺物の散布は見られるものの、明確な遺構は見られない。本遺跡では南調査区の低地部分を中心として800点近い土器片が出土しており、それらの遺跡に比べて数量的に多く出土していると言える。しかし、同時代の遺構として報告した4基の土坑にしても、出土した弥生土器は小破片であり、確実にこの時代のものと断定することはできない。したがって、本遺跡においても、弥生時代の遺跡内容は不明確であると言わざるを得ない。おそらく、この地域の弥生時代の集落は、ごく限られた範囲に分布するのだと思われる。ただし、本遺跡から一定量の土器が出土することは、近傍に集落の存在を予想させ、台地上あるいはその周辺に今後竪穴住居が発見される可能性は高いものと思われる。今後周辺地域を調査する場合は、弥生時代の集落の存在にも留意する必要がある。

4 古墳時代前期

古墳時代前期には、竪穴住居2軒、周溝墓6基のほか、水田などの遺構が見られ、残存状態は良好とは言えないが、住居、墓、水田といった、当時の集落を構成する主要な要素が揃っている。

竪穴住居は北調査区の東端にあることから、より東側

に集落が広がっている可能性があり、こちらが当時の集落の居住域となっていたと考えられる。それに対して北調査区の西半部には周溝墓が分布し、こちらは墓域として利用されていたらしい。ただし、周溝墓として調査したのは6基であるが、そのうち2基は後期の古墳である可能性があり、ほぼ確実に前期まで遡るのは4基だと思われる。その他、86号土坑としたものは、遺物は出土していないものの、礫が集中するその形態から、礫床墓である可能性が強いと考えられ、それが正しければ調査例の少ない遺構なので注目すべきものである。南調査区の西側、すなわち1-2区では第4面として水田を調査したが、これはその層位、形状から古墳時代前期に遡る可能性が高く、ここが当時の生産域の一部であった。

太田市北東部のこの地域では、古墳時代前期の遺跡は少なく、その大部分は金山丘陵に近い地域に分布し、渡良瀬川に近い本遺跡周辺ではほとんど見られない。周溝墓は南東に2.5km離れた南大町遺跡や南西に3.5km離れた細田遺跡で見ついている他はほとんど調査されておらず、本遺跡は貴重な調査例である。また、この周辺では前期に遡る水田は調査例がないと思われ、これも希少な調査例であるといえる。水田面を覆う土の中からは、遺物片が集中していた場所が3ヶ所見つかり、完形に近い壺など、大型の土器が出土した。同形同大の2個体の壺など、特別な用途をもつと推定されるものがあり、この低地で何らかの祭祀行為が行われていた可能性が考えられる。

以上のように、本地域では調査例の少ない時期の遺構であるとともに、特に居住、埋葬、食料生産に関わる各遺構が揃っている点が特筆すべきところであると思われる。

5 古墳時代後期

古墳時代後期は、古墳2基、水田などがある。前期とは異なり、竪穴住居は見つからなかった。

古墳は終末期の7世紀のもので、やや不整形の円墳である。2基とも横穴式石室だと思われるが、1基は完全に破壊され、石室の底面がわずかに残るだけであった。もう1基は石室の下部が残り、ある程度の様相が把握できたが、残念ながら石室内に顕著な副葬品は残されていなかった。また、前述のように、周溝墓として調査され

たものうち、2基がこの時期の古墳である可能性がある。

本遺跡の南東の台地上には、市場古墳群の存在が知られ、さらにその南東には後期の円墳である市場稲荷山古墳(径32m)がある。本遺跡と市場古墳群との間には道原城が存在するため、間が途切れているようにみえるが、本遺跡の古墳は市場古墳群の続きと考えるとよいと思われる。おそらくその北西端をなしているものと考えられる。市場古墳群自体は調査されておらず、実態が不明なので、本遺跡の古墳はその内容を窺う貴重な調査例となる。

水田は時期を特定できないが、いわゆる小區画水田で、覆土にFAを含むことから5世紀～6世紀初頭ごろのものであり、中期に遡る可能性もある。この時期の水田も周囲ではほとんど調査例がなく、貴重である。

この時期の居住域は今回の調査区内では見つからなかったが、同時期の土器は遺構外からもほとんど出土していないことから、住居はやや離れた位置にあるものと推定される。

6 平安時代

平安時代の遺構・遺物は少なく、この時代の遺跡の様相ははっきりしないが、注目すべき調査成果があった。

遺構としては竪穴住居1軒と道路状遺構1条があるが、そのうち特に注目されるのは南調査区の1-1区の第1面と第3面とで調査した、2号道路状遺構である。

この道路状遺構は3本の溝が平行していることから、それを側溝とする道路跡と判断したものである。ほぼ同様な場所には、中近世以降の溝(5～7号溝)も平行して存在するが、道路状遺構の溝の埋土はそれとは異なる土層で共通し、さらに、平安時代の遺物が出土したことから、埋没年代は平安時代と考えられる。また、北側の2本の溝(3・4号溝)は第1面で見つかり、最も南にある1本の溝(17号溝)は第3面で見つかったので、調査した面が異なることになるが、本来同一の面にあったと思われることは127ページで述べたとおりである。これら3本の溝は、その配置から見て3号溝が北側溝であり、4・17号溝は南側溝であると思われる。道路の存続期間中に道幅の変更が行われたものと考えられる。道路幅は側溝心-心で計測して、3号溝と4号溝との組み合わせで5.30～5.45m、3号溝と17号溝との組み合わせで7.00

～7.50mである。路面は完全に削平され、道路跡特有の、硬化面や波板状圧痕のような痕跡は全く残されていなかった。その点から考えれば、道路跡と断定することには、少し疑問の余地もあるといえ、今後さらに検証する必要がある。

これらの溝から出土した土器は、北側溝の3号溝のものが9世紀前半、南側溝の4号溝のものが9世紀後半のものである。出土遺物が少ないので断定はできないが、これが側溝の埋没年代の一端を示すものであり、道路が機能していたのは平安時代前期と考えることができる。ただし、機能していた期間の上限がいつまで遡るかは明らかではない。

2時期の道路の変遷については、ある時期に縮小されたという見解を、調査直後に公表した(『年報25』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006)。しかし、整理作業の結果、南側溝である4号溝と17号溝は層位的に新旧関係にあるわけではなく、直接重複してもいないので、新旧を確定することはできないことが明らかとなった。そのため、道路幅がどのように変更されたのかは確定できないので、ここで訂正したい。

道路の走行方向はN-52°-Wである。道路がそのままの方向で南東方向に延びるのだとすると、北西から南東の方向に細長いこの台地の、南西端にほぼ沿っていることになる。この方向は渡良瀬川の流れる方向にも近いので、この道は渡良瀬川沿いの台地や微高地をつなぐように延びていた可能性があるが、調査できた長さは約35m分と短いので、両端の延長部が直線的に延びているとは断定できない。

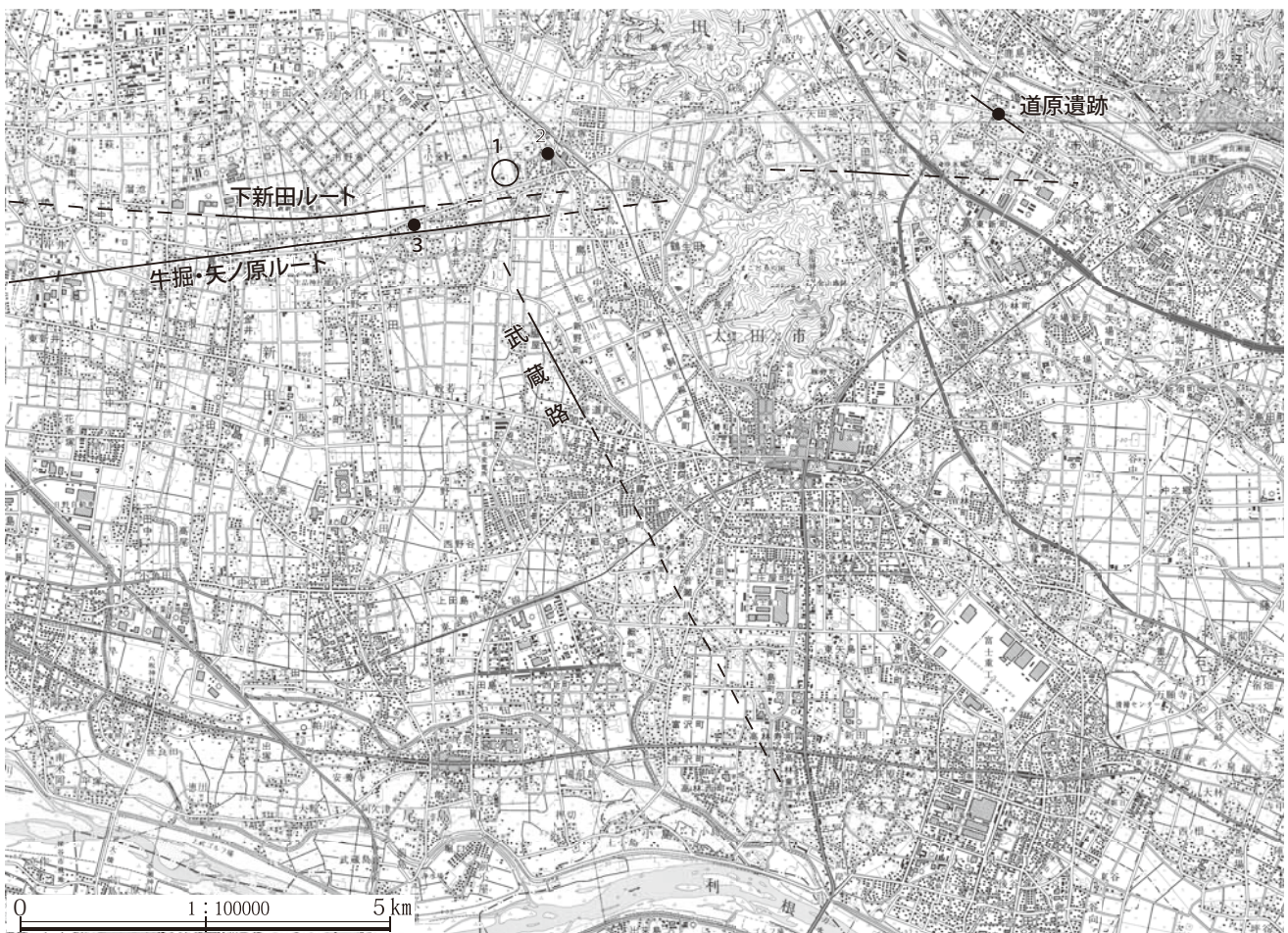
この溝が平安時代に機能した道路跡だとすると、幅が5～7.5mと広く、直線的なので、官道である可能性がまず考えられ、県内で調査例の多い東山道駅路との関連が注目される。特に、その道路幅と、9世紀に機能していたと考えられることから、県内で「国府ルート」といわれている道路跡との関係をまず考えなければならないであろう。「国府ルート」とは、高崎市から旧群馬町(現高崎市)にかけて見ついている直線的な道路跡で、9世紀後半以降に整備されたと考えられ、幅は約4.5～7m前後で、本遺跡の道路跡に近いからである。しかし、「国府ルート」が見ついているのは利根川以西の一部地域に限られ、利根川以東では不明確なままで、本遺跡と

は遠く隔たっている。そのため、時期・幅などに共通性は認められるものの、相互の関係は不明と言わざるを得ない。

その他に本遺跡周辺では古代道路跡が多くの遺跡で調査されている。そこで、この道路の意義を考えるために、周辺における東山道駅路の調査状況を概観すると以下のようになる。

高崎市東部から太田市北部にかけての地域は、古代道路跡の調査が数多く行われているが、太田市北西部(金山以西)についてみると、ここでは東西に延びる2本の道路跡が確認されている(第213図)。南側のもは「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれ、側溝心一線で測って約13mの規模をもっている。北側のもはそれよりもやや狭く、側溝心一線で測って約12mあり、「下新田ルート」と呼ばれている。どちらも遺物がほとんど出土しないので、使用年代の確定は困難であるが、7世紀後半から8世紀代

のものと考えられてきた。しかし、「下新田ルート」は近年の調査で新田郡家である天良七堂遺跡の郡庁院の南辺を通過していることが確定したので、少なくとも郡家付近の部分は9世紀以降も機能していたものと思われる。「牛堀・矢ノ原ルート」は、さらに西側は高崎市や玉村町で見つっている古代道路につながるものと思われ、上野国の平野部を東西に横断しているのが、これが古代東山道駅路であると推定される。「下新田ルート」は、東は前述のように新田郡家である天良七堂遺跡の郡庁の南を通り、逆の西に延長すると佐位郡家である伊勢崎市三軒屋遺跡の南を通過することになる。このため、郡家同士をつなぐ道である伝路ではないかという説や、「牛堀・矢ノ原ルート」が廃された後の東山道駅路ではないかという説がある。このほか、新田駅家から武蔵国へ向かう東山道武蔵路といわれるルートが太田市域を通過するはずであるが、近年新野脇屋遺跡群でその一部と思われる



第213図 太田市周辺の推定東山道駅路の位置 1：天良七堂遺跡 2：寺井廃寺 3：入谷遺跡
(1:100,000 国土地理院5万分の1地形図「桐生及足利」(平成11年6月1日発行)、「深谷」(平成10年9月1日発行)を縮小)

道路跡が見つかり、この地域でのルートが判明しつつある。

これに対して金山以東の地域では、北関東自動車道の建設に伴う調査により、八ヶ入遺跡、大道西遺跡、大道東遺跡、鹿島浦遺跡で側溝心一心幅13mの道路跡が見つかっている。この道路跡は幅から見て牛堀・矢ノ原ルートの延長である可能性が高いが、走行方向が金山以西のものとは異なり、確実とは言えないのが現状である。この道路跡は、従来想定されていたルートと大きく異なり、また、大道西遺跡と大道東遺跡の調査成果によって、7世紀第3四半期から8世紀第1四半期の間に機能していたことが判明しており、かなり早い時期に廃絶していることが注目されている。(以上、東山道駅路にかかわる文献については、本章末の注を参照のこと)

この付近の東山道駅路の調査状況は以上のようなものであるが、これらはいずれも8世紀までのもので、本遺跡の2号道路状遺構とは時期が異なる。9世紀代に入る可能性があるのは、新田郡家周辺の「下新田ルート」であるが、方向と幅が大きく異なり、これも直接つながるものではないことは明らかである。各遺跡の位置関係は第213図のとおりで、これから見ても本遺跡のルートはそれらと別ものと考えられる。しかし、延長部分が不明な現状では、その性格を決めることは困難であろう。もちろん、「国府ルート」と道路幅が近いので、平安時代の東山道駅路である可能性は残るが、とすれば、北西側で大きく屈曲しなければ新田郡家、山田郡家を通らないことになるし、南東方向にまっすぐ延長すると足利市方面に向かわないので、これもどこかで方向を変えなければならないことになり、それらが大きな問題となるだろう。やはり道路の延長部分がまだ見つかっておらず、どこに向かうかが分からない現状では、性格は不明と言わざるを得ない。本遺跡では短い長さしか調査できていないので、2号道路状遺構が本当に道路跡でよいのかという根本的な問題の解明も含めて、今後の周辺部での発掘調査が期待される。

7 中・近世

中・近世の遺構・遺物は数多く、遺物の数量だけから見ればこの時代が本遺跡の中心といっても過言ではない状況である。

それらのうち特に注目されるものには、中世の土坑墓・火葬墓群、東端部にある1号堀、多くの近世遺物を出土する土坑・集石・井戸などがある。

土坑墓は、土坑墓として調査したものは16基であるが、そのうち3基は近代のものと思われ、中世に属するのは13基である。そのほか、土坑として調査したもののうち、3基は人骨の出土から墓である可能性が高い。火葬墓は、火葬墓として調査したものが3基(15・64・81号土坑)あるほか、土坑として調査した1基(47号)も火葬墓の可能性はある。ただし、この1基は後述する墓集中部から外れているので、墓だと断定することは躊躇され、注意が必要である。

これら土坑墓や火葬墓は北調査区の南西辺に沿った、幅8m、長さ30mほどの細長い範囲に集中している。これを本書では「墓集中部」と呼んで報告したが、ここから外れるのは前述の近代の土坑墓3基と47号土坑のみであり、その他の土坑墓13基、土坑3基、火葬墓3基はすべてこの範囲に入る。

以上の墓からは、銅銭、在地系土器皿、五輪塔が出土する。五輪塔は墓そのものの年代を示すものではないが、銅銭は北宋銭から「永楽通寶」までが見られ、在地系土器皿は14世紀後半から15世紀前半にかけてのものが見られる。そのほかに遺物を出土しない墓もあるが、これらの墓の年代は、以上の出土遺物から14世紀後半から15世紀であると思われ、比較的短い範囲に限定できるものである。すなわち、墓集中部は、中世後期の14世紀後半から15世紀にかけての墓地であったと考えられるのである。

これら中世墓の主軸方位をみると、やや東に傾くものが多い傾向が見て取れる。これはすぐ南側を通る県道の方位とほぼ直角になる向きである。この県道は古くから存在する道であり、墓地の存続期間に短期間用いられたと考えられる1号道路状遺構もほぼ同じ向きであることから、墓が作られた時も同様な方向の道が存在していた可能性が高いと思われる。墓はその方向にある程度揃えて掘られたのであろう。

今回の調査区内からは、明らかな中世の遺構は、他に1号竪穴状遺構があるだけである。中世の遺物も特に多く出土しているわけではない。そのため、これらの墓を作った人々の居住域がどこなのかは不明である。

次に注目される遺構として、1号堀がある。この堀は

北調査区東端付近で見つかったもので、残りのよいところで計測して、上面幅5.20～5.30m、底面幅1.44～2.00m、深さ1.27mの規模があり、断面逆台形の非常にしっかりとした堀である。直線的に伸びる大規模なものであることから、東側に存在が知られている道原城との関連がまず思いつくが、189ページで述べたように、鉄銭の出土から堀の埋没年代は18世紀中頃以降である可能性がきわめて強く、16世紀後半とされる道原城とは年代差がありすぎることになり、直接の関連を想定するのは困難である。埋土に砂層などは見られないので、水流があったことを確認することはできず、そのため用排水路と考えることもできない。以上のようにこの溝の性格を考える根拠は非常に乏しく、現状では何らかの区画の堀であるとは思われるが、調査範囲が限定されていたこともあり、何を区画したものかは不明と言わざるを得ない。直線的で規模の大きな堀であるので、区画されている施設はある程度重要な役割を果たしていたものと推定される。今後周辺地域でこの堀の延長部分が調査されることが期待される。

その他の近世の遺構は、土坑、井戸などが見られるにすぎないが、遺物は数多く出土する。遺物の年代は17世紀末以降のものが見られ、特に18世紀中頃以降のものが多い。これらの遺物は土坑、井戸や、近代の攪乱から出土するが、出土数量が多いことから、この地は江戸時代に畠として利用されていたのではなく、屋敷地として利用されていたものと考えられる。これら多くの出土遺物は、その屋敷で使用されていたものが廃棄され、土坑や井戸、あるいは近代になって掘られた穴の中に投げ込まれたのであろう。本遺跡は太田市只上町にあるが、『太田市史 通史編 近世』（1992 太田市）によれば、江戸時代の只上村は北から原新田、清水、畦地、八幡、下屋敷上(下只上)の5つの集落に分かれていたという。そのうち、下屋敷上にあったという心王寺と神明宮は本遺跡の約200m西にある(第2図中央付近)ので、本遺跡のあった場所は下屋敷上(下只上)に当たることになろう。本遺跡はその集落の中の屋敷地として利用されていたのであり、出土した遺物は当時の生活内容を示すものとして貴重である。

注

上野国の東山道駅路の研究の現状については、高島英之「上野国」(古代交通研究会『日本古代道路辞典』八木書店 2004)にまとめられている。武蔵路については、太田市教育委員会『新野脇屋遺跡群発掘調査報告書』(2010)、金山以東の推定東山道駅路については、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『鹿島浦遺跡』(2010)、同『八ヶ入遺跡Ⅱ』(2010)、同『大道東遺跡(3)』(2010)に報告されている。

第51表 遺物観察表(1)

3号住居出土土器

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第11図 PL.74	1	深鉢	口縁～ 胴中位2/3	南部+1～ +13、覆土	粗砂、細礫、白色粒/良 好/明赤褐	推定口径18.2cm。波状口縁。口縁部はワラビ手状文、楕円状区画を 施し、RLを充填施文。胴部は2段構成で連続するU字状、逆U字 状モチーフを周回させるが端部は連続せず、ワラビ手状文を対向さ せている。間隙に円形刺突を施す。	加曽利E3式
第11図 PL.74	2	深鉢	口縁部破片	北東部+15 129号土坑	粗砂、白色粒/普通/にぶ い橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	3	深鉢	口縁部破片	129号土坑	粗砂、細礫、白色粒/普 通/にぶい黄橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	4	深鉢	口縁部破片	南東部+10	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/灰黄褐	口縁下に沈線をめぐらす。	加曽利E3式
第11図 PL.74	5	深鉢	口縁部破片	129号土坑	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/普通/にぶい黄橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	6	深鉢	口縁部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	7	深鉢	口縁部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	8	深鉢	口縁部破片	129号土坑	細砂、白色粒/普通/にぶ い橙	口縁下に沈線をめぐらす。	加曽利E3式
第11図 PL.74	9	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、白色粒/良好/明赤 褐	RLを地文とし、沈線によるワラビ手状懸垂文を施す。	加曽利E3式
第11図 PL.74	10	深鉢	口縁部破片	中央+9～11	細砂、白色粒/良好/にぶ い橙	沈線による口縁部区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	11	深鉢	胴部破片	中央+7 129号土坑		No.10と同一個体。沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文 する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	12	深鉢	胴部破片	中央+5	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	13	深鉢	胴部破片	中央+7	粗砂、石英/良好/にぶい 橙	有孔鏝付き。胴部が膨らみ、鏝の部分ですばまって口縁が開く器形。 鏝の下に1条の弧状沈線がめぐる。	加曽利E3式
第11図 PL.74	14	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒/普通/にぶ い黄橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	15	深鉢	胴部破片	129号土坑	細砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	胴部隆帯文。隆帯による弧状モチーフを施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	16	深鉢	胴部破片	中央西 +1+6	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐	沈線による懸垂文、楕円文をを施し、RLを充填施文、ワラビ手状 懸垂文を施す。	加曽利E3式
第11図 PL.74	17	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/灰黄褐	RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	18	深鉢	胴部破片	南部+8+11 129号土坑	粗砂、細礫/普通/にぶい 黄橙	沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを縦位充填施文する。モ チーフ間にワラビ手状懸垂文を施す。	加曽利E3式
第11図 PL.74	19	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、RLを縦位充填施文 する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	20	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂/普通/にぶい黄橙	隆帯による楕円状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	21	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、細礫、黒色粒/普 通/にぶい黄橙	口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第11図 PL.74	22	深鉢	胴部破片	南東部+10	粗砂、細礫/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	23	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/灰黄褐	隆帯による口縁部区画、沈線による懸垂文を施し、無節LRを充填 施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	24	深鉢	胴部破片	東部床直、 東外	細砂、黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	25	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを充填施文、ワラビ手状懸垂文を施 す。	加曽利E3式
第12図 PL.74	26	深鉢	胴部破片	南東部+11	粗砂、細礫/普通/橙	無節LRを縦位施文し、蛇行懸垂文を施す。	加曽利E3式
第12図 PL.74	27	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒/普通/にぶ い橙	沈線による懸垂文を施し、前々段反摺RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	28	深鉢	胴部破片	南西部+22	粗砂、白色粒/普通/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	29	深鉢	胴部破片	中央東+11	粗砂、細礫/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、条線を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	30	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/灰黄褐	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	31	深鉢	胴部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/灰黄褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	32	深鉢	胴部破片	129号土坑、 覆土		No.31と同一個体。	加曽利E3式
第12図 PL.74	33	深鉢	底部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	底径6.2cm。沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第12図 PL.74	34	深鉢	底部破片	129号土坑	粗砂、細礫/普通/にぶい 黄橙	推定底径6.5cm。沈線による懸垂文を施し、条線を縦位充填施文する。	加曽利E3式

遺物観察表

第52表 遺物観察表(2)

3号住居出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第12図 PL.74	35	深鉢	底部破片	129号土坑	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/暗灰黄	推定底径5.8cm。沈線による懸垂文を施す。	加曾利E3式

3号住居出土石器

挿図番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第12図 PL.75	36	打製石斧 不明	129号土坑	[4.9]	[5.0]	5.2	完成状態。上端側側縁を抉り、装着部を作出する。側縁は摩耗、捲縛痕。頭部側破片。	ホルンフェルス
第12図 PL.75	37	磨製石斧 定角式	南壁際+6	[3.6]	4.8	51.1	刃部表裏面に線条痕。破損部の凹部にも摩耗が及ぶ。	凝灰質泥岩
第12図 PL.75	38	石鏃 凹基無茎鏃	北西部+1	2.1	1.9	1.4	未製品。背面側加工は周縁に限られ、装着部も窪んだ素材の形状を活かしたもので、エッジを整える程度。裏面側は未加工。	チャート
第12図 PL.75	39	石錐	北東部+3	[3.6]	2.1	3.9	未製品。剥離面を構成する稜およびエッジがシャープで、新鮮。製作途上に先端部を破損した可能性が高い。	チャート
第12図 PL.75	40	石核 分割礫?	129号土坑	5.0	5.6	124.8	裏面側に礫面の残る略柱状石核で、小型幅広剥片を剥離、最終的に残核として放棄されたものであろうが、打点の移動は非縄文的で、旧石器としての可能性を指摘しておきたい。	チャート
第12図 PL.75	41	磨石 偏平楕円礫	129号土坑	9.1	6.3	316.0	表裏面の摩耗が著しい他、側縁も弱く摩耗する。被熱。	粗粒輝石安山岩
第13図 PL.75	42	石皿 有縁	129号土坑	[19.8]	[19.6]	3925.9	使用面には打痕が残り、使用頻度は低い。裏面側に孔を穿つ。破損理由は不明。	粗粒輝石安山岩

4号住居出土土器

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第15図 PL.75	1	深鉢	口縁～ 胴中位1/5	炉周辺+8～ 37、覆土、 180-010	粗砂、細礫/良好/にぶい 橙	推定口径41.7cm。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、異条LRを充填施文する。	加曾利E3式
第15図 PL.75	2	深鉢	口縁～ 胴中位1/4	炉北東側 +12～+26	粗砂、細礫/良好/橙	推定口径20.5cm。山形状の小突起を付す波状口縁。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文。懸垂文間にワラビ手状懸垂文を施す。	加曾利E3式
第15図 PL.75	3	浅鉢	口縁部破片	炉北側+1、 190-020	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁がくの字状に外屈。沈線による楕円状モチーフを描く。	加曾利E3式
第16図 PL.75	4	深鉢	口縁部破片	北壁際+24 ～+28	粗砂、細礫、白色粒/良 好/暗赤褐	波状口縁。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.75	5	深鉢	口縁部破片	北西壁際 +14・+19	粗砂、黒色粒/普通/にぶ い赤褐	隆帯による口縁部楕円状区画、沈線による胴部懸垂文を施し、複節RLRを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.75	6	両耳壺	口縁部破片	炉北東側 +18、覆土	細砂、白色粒/普通/明赤 褐	口縁の無文部。	加曾利E3式
第16図 PL.75	7	深鉢	口縁部破片	炉南西側 +27	細砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	口縁下に沈線をめぐらす。	加曾利E3式
第16図 PL.75	8	深鉢	口縁部破片	炉東側 +14・+15	粗砂、黒色粒/良好/黒褐	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、上部に円形刺突を施す。胴部懸垂文を施し、無節LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.75	9	深鉢	口縁部破片	北壁際+31	細砂、黒色粒/普通/にぶ い褐	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.75	10	深鉢	口縁部破片	炉南側+27	粗砂、細礫/普通/にぶ い黄橙	口縁内傾。口縁部に段帯部を作出。	加曾利E3式
第16図 PL.75	11	深鉢	口縁部破片	炉南側+29	細砂、白色粒/良好/橙	隆帯による口縁部区画を施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.75	12	深鉢	口縁部破片	北西部 +21・+22	細砂、黒色粒/良好/橙	RLを地文とし、沈線によるワラビ手状懸垂文を施す。	加曾利E3式
第16図 PL.75	13	深鉢	口縁部破片	覆土	粗砂、白色粒/普通/橙	沈線による口縁部区画を施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.75	14	深鉢	口縁部破片	炉北西側 +32	粗砂、黒色粒/良好/橙	口縁部楕円状区画、ワラビ手状懸垂文を施し、RLを充填施文する。口縁内面に1条の沈線をめぐらす。	加曾利E3式
第16図 PL.75	15	深鉢	口縁部破片	北西壁際 +27	細砂/良好/にぶい赤褐	口縁の波頂部。内面に沈線によるワラビ手文を施す。	加曾利E3式
第16図 PL.75	16	深鉢	口縁部破片	炉北東側 +20	細砂、黒色粒/良好/にぶ い橙	波状口縁。沈線による楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.76	17	深鉢	口縁部破片	炉北東側 +13	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/灰黄	波状口縁で口縁がくの字状に外反する器形。沈線により口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。一部隆帯を沿わせる。	加曾利E3式
第16図 PL.76	18	深鉢	口縁部破片	炉北側床直	細砂/良好/暗赤褐	捻転状の突起を付す。隆帯、沈線による口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.76	19	深鉢	口縁部破片	炉北側床直	細砂、白色粒/良好/橙	片流れの突起を付す波状口縁で、頂部に両端ワラビ手状の沈線を施す。隆帯、沈線による口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.76	20	深鉢	胴部破片	北西部 +5・+9	細砂、黒色粒/良好/明赤 褐	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.76	21	深鉢	胴部破片	炉南東側 +28、覆土	粗砂、細礫/良好/にぶ い黄橙	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
第16図 PL.76	22	深鉢	胴部破片	炉北側+4	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第16図 PL.76	23	深鉢	胴部破片	炉北東側 +16	粗砂、白色粒/普通/にぶ い橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式

第53表 遺物観察表(3)

4号住居出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第16図 PL.76	24	深鉢	胴部破片	北部+5・+13	細砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第17図 PL.76	25	深鉢	胴部破片	炉南東側 +32、西部+15	粗砂/良好/黒褐	隆帯を垂下させる。	加曾利E3式
第17図 PL.76	26	深鉢	胴部破片	炉北東側 +14～+24	粗砂、細礫/普通/黒褐	沈線による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
第17図 PL.76	27	深鉢	胴部破片	炉東側+24	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、隆帯上に円形刺突を施す。複節L R Lを充填施文。	加曾利E3式
第17図 PL.76	28	深鉢	胴部破片	炉南側+30	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
第17図 PL.76	29	深鉢	胴部破片	炉北東側 +6・+18	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	30	深鉢	胴部破片	覆土	細砂、白色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、条線を縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	31	深鉢	胴部破片	炉北西側 +14	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	横位沈線をめぐらし、沈線下に条線を縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	32	深鉢	胴部破片	炉内	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	33	深鉢	胴部破片	炉北東側 +17		No.32と同一個体。	加曾利E3式
第17図 PL.76	34	深鉢	胴部破片	北西部+14	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	沈線による懸垂文を施し、複節L R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	35	深鉢	胴部破片	炉南東側 +29	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	36	深鉢	胴部破片	炉北側+9	細砂、黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	37	深鉢	胴部破片	炉南側周辺 床直～+10	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、複節R L Rを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	38	深鉢	胴部破片	北部+25	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	横位沈線をめぐらし、沈線下に条線を縦位、斜位に施す。	加曾利E3式
第17図 PL.76	39	深鉢	胴部破片	覆土	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	沈線による懸垂文を施し、複節L R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	40	深鉢	胴部破片	炉南西側床 直	粗砂、白色粒/良好/明赤 褐	沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、R L、複節L R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	41	深鉢	胴部破片	炉北西側 +16	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	沈線による懸垂文を施し、複節R L Rを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	42	深鉢	胴部破片	炉北西側+3	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	条線を縦位施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	43	深鉢	胴部破片	覆土	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/良好/橙	沈線、円形刺突を横位にめぐらし、逆U字状沈線を施す。	加曾利E3式
第17図 PL.76	44	深鉢	胴部破片	炉北東側 床直	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	45	深鉢	胴部破片	炉北東側 床直・+22	細砂、黒色粒/良好/明赤 褐	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第17図 PL.76	46	深鉢	底部破片	炉東側 +8～26	粗砂、細礫、白色粒/普 通/橙	底径6.3cm。沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第18図 PL.76	47	深鉢	底部破片	炉南東側 +26	粗砂、細礫/普通/にぶい 赤褐	底径7.0cm。沈線による懸垂文を施し、条線を縦位弧状に充填施文する。	加曾利E3式
第18図 PL.76	48	深鉢	底部破片	炉北側+19	粗砂、細礫、黒色粒/良 好/赤褐	推定底径6.5cm。無文。底面に網代痕。	後期前葉
第18図 PL.76	49	深鉢	底部破片	炉南東側 +24、炉内	細砂/良好/にぶい黄橙	推定底径5.7cm。沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第18図 PL.77	50	深鉢	底部破片	炉南東側 +29	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/普通/にぶい黄橙	底径6.0cm。無文。	加曾利E3式
第18図 PL.77	51	深鉢	底部破片	炉南側 床直、炉内、 覆土	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/普通/明赤褐	底径6.2cm。沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第18図 PL.77	52	深鉢	底部破片	覆土	粗砂、黒色粒/良好/橙	底径3.8cm。沈線による懸垂文を施す。	加曾利E3式

4号住居出土石器

挿図番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第18図 PL.77	53	打製石斧 分銅型	北西壁際 +12	10.6	6.1	100.8	完成状態。刃部摩耗痕および装着痕が明らかである。上端側刃部は再生され、変形している。	ホルンフェルス
第18図 PL.77	54	石鏃 凹基無茎鏃	炉南東側 +17	2.7	1.8	1.3	完成状態。加工は粗く雑だが、薄身に作出されている。	チャート
第18図 PL.77	55	石鏃 凹基無茎鏃	北西部+15	2.1	1.5	1.3	未製品。周辺加工により形状作出。表裏面に素材剥離面を大きく残す。	チャート
第18図 PL.77	56	石鏃 不明	炉北東側 +39	[2.8]	[2.1]	3.4	未製品。左辺側にフラット面があり、石匙としての可能性が否定できないが、積極的に摘み部を作出する加工状態になく、消極的理由から石鏃と器種認定した。	チャート

遺物観察表

第54表 遺物観察表(4)

4号住居出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第18図 PL.77	57	石鏃 凹基無茎鏃	東部床直	[1.6]	[1.1]	0.4	未製品?裏面側に素材面を大きく残す。左右両側の返し部を欠損する。	チャート
第18図 PL.77	58	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	[2.8]	[1.7]	1.4	完成状態?右辺側の返し部を欠損。概して加工は雑で、未製品としての可能性も残る。	チャート
第18図 PL.77	59	石鏃 凹基無茎鏃	炉南東側 +42	2.0	1.5	1.0	完成状態?幅広剥片を用い、粗く周辺加工する。平基鏃を両側から抉り、茎を作出している。	珩質頁岩
第18図 PL.77	60	石鏃 凹基無茎鏃	北部+34	[2.0]	1.3	0.7	完成状態。裏面側・背面側の順で体部を加工したのち、装着部を加工。裏面側は比較的平坦で、断面D字状。	珩質頁岩
第18図 PL.77	61	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	[5.0]	4.7	3.4	未製品。加工は形状修正段階まで及ばず、先端部を欠損した段階で製作を放棄している。	チャート
第18図 PL.77	62	石鏃 不明	覆土	3.0	2.7	7.1	未製品。加工が粗く、断面は厚い。	チャート
第18図 PL.77	63	石鏃 不明	覆土	2.7	2.1	2.2	小型幅広剥片の両側縁を粗く加工。製作初期段階の石器だが、形態的に石鏃の製作を意図していると思われる。	チャート
第18図 PL.77	64	石錐	南東部+23	[2.1]	0.4	0.6	未製品?エッジは新鮮で、加工は雑。断面三角形を呈する。摘み部を欠損。	チャート
第18図 PL.77	65	石錐	炉南西側 +25	3.0	0.8	1.7	剥離面を構成する稜は新鮮で、加工途上破損した可能性が高い。	チャート
第18図 PL.77	66	削器 横長剥片	南東部+33	4.5	6.8	42.4	打面側を粗く加工、対辺の剥片端部を刃部とする。打面側エッジは激しく摩耗している。	ホルンフェルス
第18図 PL.77	67	凹石 楕円礫	炉南東側 +34	10.0	6.0	305.1	表裏面とも中央付近・小口部に打痕。	粗粒輝石安山岩
第19図 PL.77	68	凹石 偏平楕円礫	炉南東側 +10	11.6	10.1	579.2	表裏面とも摩耗するほか、礫面の集合打痕・側縁の打痕が著しい。	粗粒輝石安山岩
第19図 PL.77	69	磨石 楕円礫	炉北東側 床直	17.1	13.2	2236.1	背面側平坦面が摩耗するほか、小口部上端に敲打痕がある。このほか、小口部上端左辺が著しい摩耗。	粗粒輝石安山岩
第19図 PL.77	70	敲石 楕円礫	炉石上+9	9.8	6.2	357.9	小口部両端に敲打痕。裏面側には平坦面があり、摩耗しているようにも見えるが不明瞭。	粗粒輝石安山岩

5号住居出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第21図 PL.77	1	深鉢	口縁部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	沈線による口縁部区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第21図 PL.77	2	深鉢	口縁~ 胴中位1/3	南西壁際+8	粗砂、白色粒/普通/橙	推定口径26.8cm。波状口縁。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。胴部懸垂文は一部逆U字状に閉じ、また無文部にワラビ手状などの懸垂文を施す。	加曽利E3式
第22図 PL.77	3	深鉢	口縁~ 胴中位1/5	炉南西側 +4+6	細砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	口径23.8cm。口縁が強く内湾。横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、沈線下に縦位条線を施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.77	4	深鉢	口縁~ 胴中位1/2	炉内、覆土	粗砂、白色粒/普通/にぶい黄橙	推定口径40.5cm。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.77	5	深鉢	口縁~ 胴中位1/3	南部+4+6	粗砂、細礫、白色粒/普通/ にぶい黄橙	推定口径27.4cm。波状口縁。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.78	6	深鉢	口縁部破片	南部+14~ +45、覆土	細砂、黒色粒/良好/赤褐	波状口縁。沈線による口縁部楕円状区画、胴部逆U字状モチーフを施し、異条RLを充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.78	7	深鉢	口縁部破片	南部+8~ +32、覆土		No.6と同一個体。	加曽利E3式
第22図 PL.78	8	深鉢	口縁部破片	北西部+4	細砂、黒色粒/普通/にぶい黄橙	横位沈線をめぐらし、沈線下にRLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.78	9	深鉢	口縁部破片	南西部+9	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	波状口縁。沈線によるワラビ手状モチーフを描き、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.78	10	深鉢	口縁部破片	南部+11	粗砂、白色粒/良好/明赤褐	波状口縁。沈線による楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.78	11	深鉢	口縁部破片	炉北側+6、 炉内	粗砂、黒色粒/普通/にぶい黄橙	横位沈線、2条の沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第22図 PL.78	12	深鉢	胴部破片	南西壁際 +4、炉内	粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曽利E3式
第22図 PL.78	13	深鉢	胴部破片	南部6~+11、 北東部+8	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第23図 PL.78	14	深鉢	胴部破片	北部+4	粗砂、白色粒/普通/にぶい黄	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第23図 PL.78	15	深鉢	胴部破片	北部+10		No.14と同一個体。	加曽利E3式
第23図 PL.78	16	深鉢	胴部破片	南西壁際+5	粗砂、白色粒/普通/にぶい黄	隆帯による口縁部区画、沈線による懸垂文、逆U字状モチーフ、ワラビ手状懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第23図 PL.78	17	深鉢	胴部破片	炉内+2	粗砂、白色粒/良好/にぶい黄褐	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第23図 PL.78	18	深鉢	胴部破片	南西部+7	粗砂、細礫/良好/にぶい黄橙	沈線による口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第23図 PL.78	19	深鉢	胴部破片	南西部+5、 覆土	粗砂、細礫、白色粒/良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第23図 PL.78	20	深鉢	胴部破片	炉北側+2	粗砂、細礫/普通/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式

第55表 遺物観察表(5)

5号住居出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第23図 PL.78	21	深鉢	胴部破片	炉内	粗砂/普通/にぶい黄橙	円形刺突を伴う沈線をめぐらして区画、沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを縦位充填施文、ワラビ手状懸垂文を施す。	加曾利E3式

5号住居出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第23図 PL.78	22	打製石斧 分銅型	南部+15	10.4	6.6	98.6	完成状態。側縁のみ加工して石器を作出。装着部は両辺とも著しく摩耗する。	ホルンフェルス
第23図 PL.78	23	石鏃 不明	南部+6	2.4	2.1	3.1	未製品。加工は粗く、エッジの剥離には明らかなバルブが複数みられる。	チャート
第23図 PL.78	24	凹石 楕円礫	南部+6	12.3	8.1	779.3	表裏面が摩耗するほか、礫面中央付近・小口部に打痕。	粗粒輝石安山岩
第23図 PL.78	25	磨石 偏平円礫	炉南西側 +3	7.4	7.1	299.6	表裏面とも摩耗するほか、小口部に打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第23図 PL.78	26	敲石 偏平礫	西壁際床 直	13.2	8.7	746.9	小口部上端側に敲打・衝撃剥離痕。上端のエッジは激しく摩耗している。石材感は粗く、小型剥片系石器より石斧等に用いる石材である。	砂岩

7号住居出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第25図 PL.78	1	深鉢	口縁～ 胴中位破片	炉南西側周 辺+1～+8、 180-030	粗砂、細礫/良好/赤褐	推定口径32.2cm。口縁下に2条の沈線をめぐらし、沈線間に円形刺突を充填施文。胴部には沈線による逆U字状モチーフ、ワラビ手状懸垂文を交互に配し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.78	2	深鉢	胴～ 底部1/2	炉東側周辺+3 ～+13、180- 030、190-020、 190-030	粗砂、白色粒/良好/にぶ い黄橙	底径6.7cm。沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.	3	深鉢	口縁部破片	南部+5～ +7、180-030	粗砂、白色粒/良好/明赤 褐	ワラビ手状沈線による口縁部楕円状区画を施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.78	4	深鉢	口縁部破片	住居外北側	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/褐灰	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、沈線下に条線を縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.78	5	深鉢	口縁部破片	炉内	粗砂、白色粒/良好/にぶ い褐	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、異段R(LR・L)を充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	6	両耳壺	口縁部破片	南西部+9	粗砂、白色粒/良好/にぶ い橙	口縁の無文部。	加曾利E3式
第26図 PL.79	7	深鉢	口縁部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄褐	横位沈線をめぐらし、以下、前々段反撚RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	8	深鉢	口縁部破片	南西部床直	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	口縁下に円形刺突を充填した帯状沈線をめぐらし、逆U字状沈線を施す。	加曾利E3式
第26図 PL.79	9	深鉢	口縁部破片	覆土	細砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	波頂部の突起。	称名寺式
第26図 PL.79	10	深鉢	胴部破片	南西部 +4～+6	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/普通/橙	沈線による懸垂文を施し、蛇行する条線を縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	11	深鉢	胴部破片	住居外北側	粗砂、白色粒、石英/良 好/明赤褐	沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	12	深鉢	胴部破片	P9内	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	13	深鉢	胴部破片	東部10・+34		No.12と同一個体。	加曾利E3式
第26図 PL.79	14	深鉢	胴部破片	炉南西側+2	細砂、白色粒、黒色粒/ 普通/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	15	深鉢	胴部破片	炉南側周辺 +5～+7	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
第26図 PL.79	16	深鉢	胴部破片	北壁際+8	細砂、白色粒/普通/にぶ い黄褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	17	深鉢	胴部破片	炉西側+3		No.16と同一個体。	加曾利E3式
第26図 PL.79	18	深鉢	胴部破片	東部+2	粗砂、黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	19	深鉢	胴部破片	東部+2	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	20	深鉢	胴部破片	南部+7	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	横位沈線をめぐらし、沈線下に縦位条線を充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	21	深鉢	胴部破片	南西部+7	粗砂、黒色粒/普通/暗灰 黄	隆帯による楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	22	深鉢	胴部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
第26図 PL.79	23	深鉢	胴部破片	住居外北側	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	隆帯による楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	24	深鉢	胴部破片	炉内	粗砂、黒色粒/普通/褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第26図 PL.79	25	深鉢	胴部破片	炉内	粗砂/普通/明赤褐	沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式

遺物観察表

第56表 遺物観察表(6)

7号住居出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第26図 PL.79	26	打製石斧 分銅型	北東部+1	4.5	2.8	8.1	完成状態。両側縁に挟り部を作出しただけの小型品。実用具としての石斧ではなく石斧のミニチュア品というべきものだろう。	ホルンフェルス
第26図 PL.79	27	石鏃 凹基無茎鏃	北部+23	2.4	1.8	1.3	完成状態。やや甲高で加工は粗い。左右の返し部は非対称。	黒色安山岩
第27図 PL.79	28	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	1.5	1.3	0.5	未製品?返し部が膨らみ、先端部は尖る。石鏃としての可能性については表裏面とも素材面を大きく残し、加工量が少ないことから、否定的である。	チャート
第27図 PL.79	29	凹石 円礫	南西部 床直	9.4	9.6	769.1	表裏面とも摩耗する。礫面中央・側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩
第27図 PL.79	30	凹石 楕円礫	北西部+21	11.6	8.2	882.2	表裏面とも摩耗する。礫面中央付近・小口部に打痕。	粗粒輝石安山岩
第27図 PL.79	31	磨石 楕円礫	南西部床 直	11.6	8.5	872.3	表裏面が摩耗するほか、小口部に打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第27図 PL.79	32	敲石 扁平礫	南東部+8	23.4	11.8	2010.4	やや膨らむ礫端部に打撃に伴う剥離痕があるほか、礫上端部に打撃痕がある。	溶結凝灰岩
第27図 PL.79	33	敲石 棒状礫	炉東側+6	13.7	5.8	500.0	小口部・側縁に打撃に伴う大きな剥離痕が生じている。	ホルンフェルス
第27図 PL.79	34	石皿? 扁平楕円礫	炉石	[28.5]	[18.6]	4670.0	中央部から下が石皿様に浅く窪む。摩耗は、この礫稜部にある。裏面側平坦面の摩耗は使用時のスレか。	粗粒輝石安山岩
第27図 PL.79	35	台石 扁平楕円礫	南部+5	28.6	23.5	10000.0	礫面中央が弱く摩耗、浅く窪む。	溶結凝灰岩
第27図 PL.79	36	多孔石 扁平楕円礫	炉石	34.5	25.5	16100.0	背面側に孔3を穿つ。裏面側には打痕が特徴的。礫形状は薄型で、石皿の素材としても使用可能。	粗粒輝石安山岩
第27図 PL.79	37	多孔石 楕円礫	炉石	26.7	23.1	6350.0	やや厚い礫形状を呈する。背面側に孔3・裏面側に孔4(径1.2~1.8ミリ)を穿つ。	粗粒輝石安山岩

92号土坑出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種 部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第28図 PL.80	1	深鉢 胴部破片	覆土	粗砂、細礫/普通/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文、楕円状の沈線を施す。	加曾利E 3式
第28図 PL.80	2	深鉢 胴部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/普通/暗灰黄	隆帯による口縁部区画、沈線による胴部懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第28図 PL.80	3	深鉢 胴部破片	覆土	粗砂、白色粒/普通/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、複節L R Lを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第28図 PL.80	4	深鉢 胴部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/普通/灰黄褐	隆帯による楕円状区画を施し、無節L rを充填施文する。	加曾利E 3式

92号土坑出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第28図 PL.80	5	石製品 有孔	覆土	[5.3]	[5.1]	16.7	石材の制約から整形痕は不明だが、軽石を研磨して板状に加工、上端側に径6ミリの孔を穿つ。下半部欠損。	軽石

97号土坑出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種 部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第29図 PL.80	1	深鉢 口縁~胴中 位1/5	覆土、 4住覆土	粗砂、白色粒/普通/にぶい橙	推定口径31.8cm。開きながら立ち上がり、口縁が緩く内湾する器形。隆帯による口縁部楕円状区画、沈線による胴部懸垂文を施し、複節R L R、前々段反摺R L Lを充填施文する。	加曾利E 3式
第29図 PL.80	2	深鉢 口縁部破片	覆土	粗砂、細礫、白色粒/普通/にぶい橙	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、R Lを充填施文する。口縁部は横位、胴部は斜位に充填施文する。	加曾利E 3式
第29図 PL.80	3	深鉢 胴部破片	覆土	粗砂、細礫、白色粒/普通/黒褐	隆帯による口縁部区画、沈線による胴部懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第30図 PL.80	4	深鉢 胴部破片	覆土	粗砂、細礫、白色粒/普通/にぶい黄褐	沈線による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第30図 PL.80	5	深鉢 底部破片	覆土	粗砂、細礫、白色粒/普通/橙	沈線による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文する。	加曾利E 3式

97号土坑出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第30図 PL.80	6	磨石	覆土	14.8	12.6	1464.5	表裏面とも磨耗する。側縁の打痕は見られない。	粗粒輝石安山岩

98号土坑出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種 部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第28図 PL.80	1	深鉢 胴部破片	覆土	細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、複節R L Rを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第28図 PL.80	2	深鉢 胴部破片	覆土	細砂、黒色粒/良好/にぶい黄褐	縦位帯状沈線を施す。	称名寺式

第57表 遺物観察表(7)

99号土坑出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第30図 PL.80	1	深鉢	口縁部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部の突起。逆U字状の沈線を施す。	加曾利E3式

101号土坑出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第30図 PL.80	1	深鉢	口縁～胴中 位1/2	覆土、8住覆 土、190-020	粗砂、白色粒/良好/明赤 褐	口径49.0cm。口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第31図 PL.81	2	深鉢	口縁部破片	覆土、 7住覆土	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/良好/黒褐	隆帯をめぐらして区画、隆帯による口縁部楕円状区画、沈線による 胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第31図 PL.81	3	深鉢	口縁部破片	覆土、 4住覆土	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒、雲母/普通/にぶい橙	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
第31図 PL.81	4	深鉢	胴部破片	覆土	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/普通/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式
第31図 PL.81	5	深鉢	胴部破片	覆土	細砂、白色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式

101号土坑出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第31図 PL.81	6	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	[2.3]	2.3	2.6	未製品。加工が粗く、形状修正は不十分。先端欠損。	チャート
第31図 PL.81	7	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	3.9	[2.0]	2.8	未製品。薄身で完成状態直近で右辺「返し部」を欠損。	チャート
第31図 PL.81	8	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	2.5	[1.2]	1.0	未製品。薄身だが、加工は粗く形状修正段階まで加工は進んでいない。左辺「返し部」を欠損する。	チャート
第31図 PL.81	9	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	2.8	[1.5]	0.9	未製品。薄身だが、加工は粗く形状作出は不十分。左辺「返し部」を欠損する。	チャート
第31図 PL.81	10	石鏃 凹基無茎鏃	覆土	3.5	[1.8]	1.5	未製品。薄身だが、最終的な形状修正を前に、左辺側の「返し部」を欠損。	チャート
第31図 PL.81	11	楔形石器？ 小型縦長剥片	覆土	2.3	3.3	8.8	剥片裏面両端から薄い小剥離痕が対抗する。同種剥離が背面側にはなく、属性的には不十分だが、石鏃製作に多用される両極剥離の変異と捉えた。	チャート
第31図 PL.81	12	加工痕ある剥片 幅広剥片	覆土	2.5	1.5	3.1	裏面側を粗く、削り的に加工する。	チャート
第32図 PL.81	13	加工痕ある剥片 幅広剥片	覆土	3.4	3.4	12.1	表裏面を粗く求心的に剥離、形状は石鏃様を呈す。	チャート
第32図 PL.81	14	加工痕ある剥片 幅広剥片	覆土	1.6	1.5	10.9	表裏面に対向する剥離面があり、両極剥離が適応されている。楔型石器か石鏃の作出を意図したもののだろう。	チャート
第32図 PL.81	15	石核 剥片	覆土	3.2	4.2	18.3	小型剥片剥離。弥生期の可能性も。	チャート
第32図 PL.81	16	石核 板状剥片	覆土	3.6	4.1	30.5	節理面で割れた平坦面から小型幅広剥片を剥離する。	チャート
第32図 PL.81	17	石製研磨具 棒状礫	覆土	10.2	4.2	270.9	断面三角形形状を呈す稜部に線条痕を伴う稜形成。被熱礫を用いる。	粗粒輝石安山岩

103号土坑出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第32図 PL.81	1	深鉢	胴部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	沈線による懸垂文を施し、複節LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式

25号ピット出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第33図 PL.81	1	深鉢	口縁部破片	覆土	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/暗褐	刻みを伴う隆線をめぐらし、8の字貼付文を付す。横位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	堀之内2式

縄文時代・遺構外出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第34図 PL.81	1	深鉢	口縁部破片	1-1区	細砂、繊維/普通/にぶい 橙	RLを地文とし、横位、弧状の平行沈線を施す。	黒浜式
第34図 PL.81	2	深鉢	胴部破片	1-1区	細砂、石英、繊維/普通/ にぶい黄橙	LR、RLを羽状施文する。	黒浜式
第34図 PL.81	3	深鉢	口縁部破片	1-1区	細砂、黒色粒/普通/明赤 褐	口縁が緩く外反。LRを横位施文する。	諸磯a式
第34図 PL.81	4	深鉢	口縁部破片	1-1区	細砂/普通/にぶい橙	山形状の波状口縁。口縁に沿って連続爪形文を2条施し、波頂部から 円形刺突を垂下させる。	諸磯a式
第34図 PL.81	5	深鉢	口縁部破片	1-1区	粗砂、白色粒、黒色粒/ 普通/橙	胴部隆帯文。1条の隆帯による横位、逆U字状モチーフを施し、LR を充填施文する。	加曾利E3式
第34図 PL.81	6	深鉢	口縁部破片	1-1区1 号トレンチ	粗砂、黒色粒/普通/橙	口縁に突起を付し、両側面に沈線を施す。口縁に沿った2条の沈線、 逆U字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	加曾利E3式
第34図 PL.81	7	深鉢	胴部破片	1-1区	細砂、石英/良好/にぶい 橙	沈線による懸垂文を施し、複節LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式

遺物観察表

第58表 遺物観察表(8)
縄文時代・遺構外出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第34図 PL.81	8	深鉢	胴部破片	1-1区	粗砂、細礫、黒色粒/普通/橙	隆帯による逆U字状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曽利E3式
第34図 PL.81	9	深鉢	胴部破片	1区 130-110	細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい黄橙	横位沈線をめぐらし、沈線下に縦位条線を施す。	加曽利E3式
第34図 PL.81	10	深鉢	口縁部破片	1-1区	細砂、黒色粒/良好/にぶい橙	口縁外面肥厚。肥厚部に刺突を充填した帯状沈線をめぐらす。	堀之内1式
第34図 PL.81	11	深鉢	胴部破片	1-2区	粗砂、細礫、黒色粒/普通/橙	鎖状隆帯を垂下。LRを地文とし、集合沈線による懸垂文を施す。	堀之内1式
第34図 PL.81	12	深鉢	胴部破片	1区		No.11と同一個体。	堀之内1式
第34図 PL.81	13	深鉢	胴部破片	160-030		No.11と同一個体。横位隆帯をめぐらして文様帯を区画する。	堀之内1式
第34図 PL.81	14	深鉢	胴部破片	1区	細砂、黒色粒/普通/にぶい橙	横位沈線をめぐらして文様帯を区画、RLを地文とし、沈線による幾何学モチーフを描く。	堀之内1式
第34図 PL.81	15	深鉢	底部破片	150-170	粗砂、白色粒/普通/橙	残存部は無文。	堀之内2式
第34図 PL.82	16	深鉢	口縁部破片	120-100	粗砂、黒色粒、石英/普通/にぶい黄橙	口縁が緩く外反。無文だが、口唇部に斜位の刻みを付す。	後期
第35図 PL.82	17	深鉢	口縁部破片	4号周溝墓 周溝	粗砂、細礫、繊維/普通/赤褐	口縁が緩く外反。斜行する2条巻の擦糸文R・R、L・Lを羽状施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	18	深鉢	口縁部破片	10号土坑墓	細砂、繊維/普通/にぶい黄橙	無節LRを横位施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	19	深鉢	胴部破片	1号竪穴状 遺構	細砂、繊維/普通/にぶい黄橙	LR、RLを菱形施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	20	深鉢	胴部破片	2区	細砂、黒色粒、石英、繊維/普通/にぶい黄橙	LR、RLを菱形施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	21	深鉢	胴部破片	4号住居 覆土	細砂、細礫、白色粒、黒色粒、繊維/普通/にぶい黄橙	RL、LRを羽状施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	22	深鉢	胴部破片	160-020	細砂、繊維/普通/にぶい橙	斜行する2条巻の擦糸文R・R、L・Lを羽状施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	23	深鉢	胴部破片	180-030	粗砂、黒色粒、繊維/普通/明赤褐	斜行する2条巻の擦糸文R・R、L・Lを菱形施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	24	深鉢	胴部破片	3区		No.23と同一個体。	黒浜式
第35図 PL.82	25	深鉢	胴部破片	3区	細砂、白色粒、繊維/普通/にぶい橙	RLを横位施文する。	黒浜式
第35図 PL.82	26	深鉢	口縁部破片	170-055	細砂、黒色粒/良好/橙	RLを横位施文、円孔を穿つ。口唇部に刻みを付す。	諸磯a式
第35図 PL.82	27	深鉢	口縁部破片	160-010	粗砂、細礫、石英、雲母/良好/にぶい褐	波状口縁でくの字状に外屈する器形。断面三角形の隆帯による三角形の杵状文を左右に配すことにより波頂部下に楕円状区画を作出、隆帯に単列の角押文を沿わせるとともに波頂部下に円文を施す。屈曲部に幅広工具による押引きを施す。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	28	深鉢	口縁部破片	160-010		No.28と同一個体。波頂部が逆台形状を呈し、肥厚させた口唇部に刻み状の沈線を施す。波頂部下に突起の剥落痕あり。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	29	深鉢	口縁部破片	160-010		No.28と同一個体。杵状文間に十字の押引きを施した楕円板状粘土を付す。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	30	深鉢	口縁部破片	160-010		No.28と同一個体。屈曲部下に角押文による横位に連続する楕円モチーフを描く。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	31	深鉢	胴部破片	2区	粗砂、細礫、雲母/良好/にぶい褐	断面三角形の隆帯を2条横位にめぐらし、さらに波状隆帯を貼付。ヒダ状圧痕を施す。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	32	深鉢	胴部破片	160-010		No.28と同一個体。隆帯による蛇行懸垂文、ヒダ状圧痕を施す。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	33	深鉢	胴部破片	3区		No.28と同一個体。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	34	深鉢	胴部破片	160-010		No.28と同一個体。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	35	深鉢	胴部破片	160-010		No.28と同一個体。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	36	深鉢	胴部破片	3区		No.28と同一個体。逆C字状の突起を付す。	阿玉台1b式
第35図 PL.82	37	深鉢	底部破片	160-010		No.28と同一個体。	阿玉台1b式
第36図 PL.82	38	深鉢	口縁部破片	190-030	粗砂、細礫、黒色粒/良好/赤褐	口縁下に円形刺突を充填した帯状沈線をめぐらし、以下、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式
第36図 PL.82	39	深鉢	口縁部破片	190-040	粗砂、黒色粒、雲母/良好/橙	沈線によるU字状モチーフ、ワラビ手状懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第36図 PL.82	40	深鉢	口縁部破片	2号周溝墓 周溝	粗砂、黒色粒/普通/にぶい黄橙	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曽利E3式
第36図 PL.82	41	深鉢	口縁部破片	190-020、 190-030	粗砂、黒色粒/普通/橙	片流れの波状口縁で、口縁に沿って沈線を施す。隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RLを縦位充填施文する。	加曽利E3式

第59表 遺物観察表(9)
縄文時代・遺構外出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第36図 PL.82	42	深鉢	口縁部破片	160-010	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/普通/にぶい橙	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、縦位条線を充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.82	43	深鉢	口縁部破片	3区	粗砂、細礫、白色粒/良好/にぶい黄橙	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.82	44	深鉢	口縁部破片	1号古墳 墳丘	粗砂、細礫、黒色粒/普通/橙	波状口縁。口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	45	深鉢	口縁部破片	180-020	細砂/良好/灰褐	無文。赤色塗彩の痕跡あり。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	46	深鉢	口縁部破片	4区	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい黄橙	隆帯による口縁部区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	47	深鉢	胴部破片	190-030	粗砂、細礫/良好/にぶい赤褐	沈線によるU字状モチーフを横位に配し、RLを縦位充填施文。それに沿うように連弧状沈線を2条施し、以下、縦位条線を充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	48	深鉢	胴部破片	7号住居掘 方、180-030	粗砂、黒色粒/良好/にぶい橙	隆帯による口縁部区画、沈線による胴部懸垂文、U字状モチーフを施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	49	浅鉢	胴部破片	160-050	粗砂、黒色粒/良好/にぶい黄橙	沈線による渦巻状モチーフを描く。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	50	深鉢	胴部破片	170-050	細砂、白色粒、黒色粒/普通/にぶい橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文、ワラビ手状懸垂文を施す。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	51	深鉢	胴部破片	180-020	細砂、白色粒/普通/にぶい橙	横位沈線をめぐらし、沈線下に縦位条線を充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	52	深鉢	胴部破片	2号周溝墓 周溝	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	53	浅鉢	胴部破片	8号土坑墓		No.49と同一個体。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	54	深鉢	胴部破片	190-020	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、異条RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	55	深鉢	胴部破片	3区攪乱	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/普通/橙	円形刺突を充填した帯状沈線をめぐらし、以下、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	56	深鉢	胴部破片	180-010	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/灰黄褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	57	深鉢	胴部破片	1号墳周堀	粗砂、細礫、白色粒/良好/にぶい橙	沈線による懸垂文を施し、複節RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	58	深鉢	胴部破片	180-030	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい橙	沈線による懸垂文を施し、蛇行する条線を縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第36図 PL.83	59	深鉢	胴部破片	3区	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/良好/にぶい褐	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	60	深鉢	胴部破片	190-020	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	61	深鉢	胴部破片	9号住居 覆土	粗砂/良好/橙	複節RL、縦位条線を充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	62	深鉢	胴部破片	4区	粗砂、白色粒/良好/橙	円形刺突をめぐらして上下文様帯を区画、沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、前々段反撚RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	63	深鉢	胴部破片	4区	粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、複節RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	64	深鉢	胴部破片	4区	粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	RLを縦位充填施文し、沈線による蛇行懸垂文を施す。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	65	深鉢	胴部破片	1号堀	細砂、白色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	66	深鉢	胴部破片	190-990	細砂/普通/にぶい橙	横位沈線をめぐらし、沈線下に縦位条線を充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	67	深鉢	胴部破片	170-970、 180-970	粗砂、白色粒/普通/にぶい褐	沈線による口縁部区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	68	深鉢	底部破片	1号古墳 周堀	粗砂、細礫、白色粒/良好/赤褐	底径5.5cm。沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	69	深鉢	底部破片	170-010	粗砂、細礫/普通/橙	底径5.6cm。沈線による懸垂文を施す。	加曾利E 3式
第37図 PL.83	70	深鉢	口縁部破片	190-050	細砂、白色粒、黒色粒/普通/にぶい橙	波頂部の突起。沈線を伴うU字状隆帯を貼付する。	称名寺式
第37図 PL.83	71	深鉢	口縁部破片	160-020	細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい橙	口縁に環状の小突起を付す。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LR、列点を充填施文する。	称名寺式
第37図 PL.83	72	深鉢	口縁部破片	1号古墳 墳丘	粗砂/浅黄橙/普通	横位帯状沈線を施す。	称名寺式
第37図 PL.83	73	深鉢	胴部破片	2号周溝墓 周溝	粗砂、白色粒、黒色粒/普通/明赤褐	沈線により幾何学モチーフを描く。	称名寺式
第37図 PL.83	74	深鉢	胴部破片	160-020	細砂、白色粒、黒色粒/良好/橙	帯状沈線によるJ字状モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第37図 PL.83	75	深鉢	胴部破片	4区	粗砂、白色粒、黒色粒/普通/浅黄橙	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第37図 PL.83	76	深鉢	胴部破片	170-970	粗砂/普通/橙	沈線による逆U字状モチーフを描く。	堀之内1式
第37図 PL.83	77	深鉢	口縁部破片	1号土坑墓	粗砂、黒色粒、石英/普通/橙	口縁に小突起を付す。押捺を伴う隆線をめぐらし、以下、LRを充填施文する。	堀之内2式

遺物観察表

第60表 遺物観察表(10)
縄文時代・遺構外出土器(続き)

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第37図 PL.83	78	深鉢	口縁部破片	170-050	粗砂、細礫、黒色粒/良好/にぶい橙	無文。口縁内面を肥厚させ、肥厚部、肥厚部下に沈線を施す。	堀之内2式
第37図 PL.83	79	注口土器	胴部破片	160-050	粗砂/良好/にぶい橙	低隆帯により渦巻文など幾何学モチーフを施し、沈線で縁取る。隆帯上の交点に円形刺突、余白に櫛歯状工具による連点状刺突を施す。	堀之内2式
第37図 PL.83	80	深鉢	胴部破片	180-060	細砂、黒色粒、石英/良好/にぶい赤褐	横位沈線、RLを施す。	堀之内2式
第37図 PL.83	81	深鉢	底部破片	2区	細砂、白色粒/普通/にぶい橙	推定底径9.0cm。底面に網代痕。	堀之内2式
第37図 PL.83	82	深鉢	底部破片	150-020	粗砂、白色粒、黒色粒/普通/橙	底径12.0cm。底面に網代痕。	堀之内2式
第37図 PL.83	83	有孔鉢	口縁部破片	160-020	細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい黄橙	口縁が短く内折。小波状を連ねた突起を付し、内面に円形刺突をめぐらす。斜位の刻みを充填した帯状沈線を内面多段に施文。円孔をめぐらす。	加曾利B1式
第37図 PL.83	84	深鉢	口縁部破片	190-050	細砂、細礫/良好/にぶい橙	折り返し状の肥厚口縁。肥厚部および肥厚部下に撚糸文Rを横位施文する。	晩期中葉
第37図 PL.83	85	深鉢	胴部破片	2号周溝墓	細砂、黒色粒/普通/にぶい黄橙	撚糸文Rを横位施文する。	晩期中葉

縄文時代・遺構外出土器

挿図番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第38図 PL.84	86	打製石斧 短冊型?	110-100	12.3	6.9	154.5	完成状態。上半部をノッチ状に小さく抉り、装着部を作出。刃部中央は抉れ、摩耗を伴う。頭部欠損。	ホルンフェルス
第38図 PL.84	87	打製石斧 短冊型?	1-1区	13.3	5.8	164.4	完成状態。上半部をノッチ状に小さく抉り、装着部を作出。刃部は未加工だが、エッジは摩耗している。	ホルンフェルス
第38図 PL.84	88	打製石斧 分銅型	1-1区1号トレンチ	13.7	9.8	478.8	完成状態?側縁中央を弧状に大きく抉り、左辺側は潰れる。刃部裏面側は大割され変形。剥離前の刃部角は厚く、未製品として可能性も否定できない。	ホルンフェルス
第38図 PL.84	89	打製石斧 分銅型	130-120	12.4	7.9	191.9	完成状態。両端の刃部は素材剥片のエッジを利用。	ホルンフェルス
第38図 PL.84	90	打製石斧 短冊型	130-090	12.9	5.9	140.0	完成状態?風化して摩耗痕等は不明だが、刃部が変形しており、刃部再生は確実。	ホルンフェルス
第38図 PL.84	91	打製石斧 短冊型?	1-2区	11.1	6.4	117.5	完成状態。両側縁を弧状に抉り、装着部を作出する。刃部は剥片のエッジを用い、摩耗が著しい。	ホルンフェルス
第38図 PL.84	92	石鏃 凹基無茎鏃	1-1区	3.3	2.1	2.0	完成状態。薄身・大型の優品。	チャート
第38図 PL.84	93	石鏃 凸基有茎鏃	20号溝	[2.6]	1.5	1.4	完成状態。比較的加工は丁寧。先端部を欠く。	チャート
第38図 PL.84	94	石錐	4号溝	[3.3]	2.1	4.8	機能部先端は破損して欠けているが、部分的に稜が摩耗する。機能部に比べ、握み部が大きい。	珪質頁岩
第38図 PL.84	95	石核 幅広剥片	1-2区	5.0	5.5	45.0	擾乱側の表裏面に小型剥片を剥離する。石核端部に小剥離痕・刃こぼれがあり、削器とすべきかもしれない。	チャート
第38図 PL.84	96	凹石 楕円礫	1-1区	11.0	7.8	643.2	背面側平坦面に集合打痕・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩
第38図 PL.84	97	凹石 偏平楕円礫	1-1区	13.1	7.4	471.5	表裏面にロート状の孔2があり、両面とも摩耗。両側縁・小口部に打痕。	粗粒輝石安山岩
第38図 PL.84	98	凹石 偏平楕円礫	120-100	12.7	11.5	853.6	背面側中央付近にロート状の孔1、裏面側に集合打痕がある。背面側の摩耗は明瞭。	粗粒輝石安山岩
第38図 PL.84	99	凹石 楕円礫	160-140	9.2	6.9	381.3	背面側中央の稜上に打痕があるほか、表裏両面が摩耗する。	粗粒輝石安山岩
第38図 PL.84	100	凹石 偏平楕円礫	122号土坑	12.6	[9.0]	391.2	表裏面とも摩耗するほか、側縁に打痕あり。破損理由については不明。	粗粒輝石安山岩
第38図 PL.84	101	磨石 偏平楕円礫	1-2区	13.8	9.9	1226.8	表裏面とも摩耗するほか、側縁に敲打・弱い摩耗痕。	粗粒輝石安山岩
第39図 PL.84	102	敲石 偏平楕円礫	160-120	11.7	6.8	346.6	小口部両端に敲打痕。背面側の礫面は摩耗する。	粗粒輝石安山岩
第39図 PL.84	103	敲石 棒状礫	1-2区 第4面	11.6	5.7	404.5	上下両端の小口部に打痕がある。全体的に礫面は弱く摩耗しており、磨石としての機能を有する。	粗粒輝石安山岩
第39図 PL.84	104	三角錐形石器 棒状礫	1-1区	9.6	5.4	297.1	左右両面に礫面を残し、両側縁は潰れる。本来的機能部(底面部)は再加工により失われ、石器形状は大きく変形している。	黒色頁岩
第39図 PL.84	105	多孔石 楕円礫	130-100	12.8	10.5	1489.8	背面側平坦面に長軸2.1cm・短軸1.2cmの孔1を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第39図 PL.84	106	多孔石 楕円礫	1-1区	21.0	19.8	8070	背面側・側縁に近い両端に径2cm弱の孔2を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第39図 PL.84	107	多孔石 楕円礫	1-2区	15.3	13.0	2620	背面側平坦面の中央付近に径8ミリの孔を穿つ。1穴の多孔石とされるものには細粒緻密質石材が使われるが、やや多孔質で石材感は異なる。	粗粒輝石安山岩
第39図 PL.84	108	石製研磨具 偏平棒状礫	1-2区 第4面	[7.4]	1.2	16.4	左側縁に打痕があるほか、表裏面・右側縁に線条痕を伴う研磨面がある。右辺側研磨面は明瞭な稜を持つ。	頁岩
第39図 PL.84	109	打製石斧 分銅型?	4号井戸	31.2	13.2	2500	未製品。右辺側に比べ左辺側を大きく抉り、加工も左辺側が主体で、右辺側加工は裏面側装着部に限られる。	ホルンフェルス
第39図 PL.85	110	石鏃 不明	190-020	3.2	2.5	5.5	未製品。加工初期の資料であり、石鏃先端部加工が先行している。基部作出前に製作を放棄している。	チャート

第61表 遺物観察表(11)
縄文時代・遺構外出土石器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第39図 PL.85	111	石鏃 凹基無茎鏃	表土	[1.6]	1.3	0.6	完成状態。基部は弱く抉れ、先端は五角形状を呈す。	チャート
第39図 PL.85	112	石鏃 平基有茎鏃	6号住居	3.1	1.9	1.7	完成状態。側縁が基部側で大きく開く。茎端部を欠損。	チャート
第39図 PL.85	113	凹石 偏平楕円礫	2号周溝 墓周溝	8.4	6.7	251.8	背面側中央付近に集合打痕、側縁は敲打・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩
第40図 PL.85	114	磨石 偏平楕円礫	190-030	11.0	7.4	464.8	表裏両面とも摩耗、背面側中央・左側の摩耗が著しい。礫長軸を横に使用したことが分かる。	粗粒輝石安山岩
第40図 PL.85	115	磨石 楕円礫	190-030	9.7	7.8	587.2	表裏面が摩耗、礫面は黒色を帯びる。側縁敲打痕。	粗粒輝石安山岩
第40図 PL.85	116	磨石 偏平楕円礫	2号周溝 墓周溝	9.9	8.6	391.0	表裏面とも摩耗するほか、側縁に敲打痕。	粗粒輝石安山岩
第40図 PL.85	117	磨石 偏平楕円礫	190-020	15.3	9.4	1158.6	表裏面が摩耗するほか、小口部に弱い打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第40図 PL.85	118	磨石 楕円礫	200-020	9.1	8.3	633.2	礫面全体が摩耗するほか、小口部に打痕ある。	溶結凝灰岩
第40図 PL.85	119	台石 偏平楕円礫	3区	30.3	23.1	7500.0	礫面を敲打して使用。礫形状は薄く、石皿の素材として充分使用することができる。	粗粒輝石安山岩
第40図 PL.85	120	石製研磨具 棒状礫	13号集石	12.0	1.9	25.1	表裏面とも研磨面に線条痕を伴う。通常、石製研磨具とされるものより薄く、別器種(石剣等)の製作を目指したとする見方も可能かもしれない。	頁岩

109号土坑出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第41図 PL.85	1	小型壺	頸部～ 体部片	覆土	チャート、岩片の細礫/ 普通/にぶい黄橙	縄文(L R)を地文に1条沈線で口縁と頸部に横線、胴部に波状文を廻らす。内面は雑なナデ。	
第41図 PL.85	2	甕か 深鉢	体部上半	覆土	石英、チャート、白岩片 多い/良好、硬質/橙	縄文(L R)を横位押捺施文。内面は丁寧なナデ。	
第41図 PL.85	3	甕か	体部片	覆土	チャートの細礫多い/普通/ 黒褐	縄文(L Rか不明瞭)を地文に、2条沈線で横線か弧線、下位にヒトデ形文か入り組み文と思われる。内面研磨。	
第41図 PL.85	4	甕か 深鉢	体部片	覆土	石英、チャート、白岩片 多い/普通/にぶい黄褐	粗密のある繊維質茎状具束による斜位条痕。内面ナデ。	二次的被熱

116号土坑出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第42図 PL.85	1	甕	口縁～ 体上半	覆土	チャートの細礫多い/良 好、均質/黒褐	口径推定22.5cm。口縁と頸部を1条の横沈線で区画し、肩から体上半にかけて2条横沈線と1条斜位沈線、接点部を縦短沈線で区切って、上下二段の三角連繫文を描く。縄文(L)を地文とし無文部と内面を丁寧な研磨。	
第42図 PL.85	2	深鉢	口縁～ 体上半	覆土	赤色粒、チャート、白岩片/ 良好、硬質/黒褐	口径推定30.0cm。口唇部は平坦面をもつ平縁。外面は細い繊維質の工具端による斜位条痕。内面はナデ。	
第42図 PL.85	3	鉢		覆土	チャート細礫多い/普通/ 黒灰	口径推定17.5cm。口唇から体部全体に縄文(L)を施文。内面は縦横の細かいナデ。	
第42図 PL.85	4	甕か	体下半部片	覆土	チャート、石英の細礫多 い/良好/にぶい橙	粗密のある繊維状の束による斜位条痕を施す。内面は丁寧なナデで、わずかに焦げ付き痕を残す。	二次的被熱
第42図 PL.85	5	壺か 深鉢	体部片	覆土	安山岩粗砂、赤色粒/良 好、硬質/暗灰褐	太沈線と磨り消し縄文によるヒトデ形文を描く。内面は繊維質の道具による横～斜位のナデ。	
第42図 PL.85	6	甕か	底部片	覆土	細砂粒/良好/灰黄褐	底径5.5cm。底部はヘラ削り後ナデか、胴部は縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	

116号土坑出土石器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第42図 PL.85	7	磨石 円礫	覆土	9.4	8.9	747.0	表裏面とも摩耗、側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩
第42図 PL.85	8	磨石 楕円礫	覆土	8.4	7.5	501.6	表裏面とも摩耗、特に裏面側平坦面は摩耗が著しい。	粗粒輝石安山岩
第42図 PL.85	9	敲石 棒状礫	覆土	10.2	3.8	157.2	小口部先端に打痕。	変玄武岩
第42図 PL.85	10	敲石 楕円礫	覆土	9.1	5.4	336.6	小口部両端に打痕を有する。	粗粒輝石安山岩

121号土坑出土石器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第41図 PL.85	1	台付鉢 か	脚部片	覆土	輝石、石英、チャート多 い/普通/にぶい橙	縦位に小孔を並べる。1列の孔数と列間隔は不明。	

遺物観察表

第62表 遺物観察表(12)

124号土坑出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第41図 PL.85	1	壺	頸部片	覆土	石英、チャート、白岩片 多い/普通/橙	器面をハケ目整形後、横位沈線を廻らし、上位に縄文(L R)、下位に櫛描波状文(3歯)を右回りに描く。内面は剥離。	中期後半
第41図 PL.85	2	壺か	頸部片	覆土	石英、チャート、赤色粒 多い/むら有/暗褐	細い沈線による2条の横線と大振りな波状文を廻らす。横線以下に縄文(L R)かを地文とする。内面に植物茎状具の擦痕を残す。	中期後半

弥生時代・遺構外出土土器

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第43図 PL.85	1	甕	口縁片	1-1区	白岩片、チャートの細礫 ~粗砂/やや硬調/灰褐	不揃いで浅く細かい条痕を横位に施文。内面はナデ。	
第43図 PL.85	2	壺	口縁片	1-1区	チャート、白岩片の細礫 /硬調/にぶい黄橙	口縁下半を肥厚させ段状に整形し外面に縄文(L R)施文。口縁下端に条痕と同一の棒状施文具で刻む。頸部上位には縦位条痕を施す。内面ナデ。	平沢型壺
第43図 PL.85	3	壺	口縁片	160-130	チャート、石英の粗砂/ やや硬調/にぶい橙	口唇部を平坦とし、口縁外面に縄文(L R)施文後、斜位の押捺を加える。内面ナデ。	
第43図 PL.85	4	壺	口縁片	1-1区	白岩片、石英、輝石の粗 砂/硬調/黒褐	肥厚口縁に縄文(L R)を施し、条痕施文具による縦位の短線刻みを加える。内面ナデ。	平沢型壺
第43図 PL.85	5	壺	口縁	5号周溝墓 周溝	石英、白岩片、チャート、 輝石/やや軟質/橙	口径推定8.0cm。頸部との境に横沈線を廻らし、口縁部全体に太い条による縄文(L R)を施文。内面ナデ。	平沢型壺
第43図 PL.85	6	甕	口縁片	1-1区	赤色粒、チャートの細礫 /やや硬調/暗赤褐	粘土帯付加により折り返し状口縁とし、外面に縄文(L R)施文。頸部上位に横位条痕が見える。内面ナデ。	
第43図 PL.85	7	壺か	口縁片	3号溝	石英、赤色粒、白岩片の 粗砂/やや硬調/浅黄橙	粘土帯付加による肥厚口縁で、外面に縄文(R L)を施す。内面ナデ。	
第43図 PL.85	8	壺	頸部片	1-1区	チャート等の細礫、石英 /普通/にぶい黄~黄灰	太沈線状の粗い条痕による横線文、上位に斜位ないしは縦位羽状条痕帯がみえる。	
第43図 PL.85	9	壺	口縁片	1-2区	白岩片、石英の粗砂、輝 石/普通/明赤褐	口唇部上面を平坦とし、口唇から口縁外面に縄文(L R)を施す。頸部上位には横位条痕らしき痕跡が見える。内面磨き。	平沢型壺
第43図 PL.85	10	壺	胴部片	1-1区	チャート細礫目立つ/普 通/にぶい褐	太沈線状の粗い条痕による縦位と横線文帯を廻らす。内面ナデ。	
第43図 PL.85	11	深鉢か	口縁付近	1-1区	赤色粒の細礫と石英細砂 /やや硬調/にぶい赤褐	複数条の平行沈線を横位に廻らす。内面ナデ。	晩期末の可能性
第43図 PL.85	12	壺	頸部片	1-1区	チャート、石英、輝石/ 硬調、ややむら/にぶい 橙	幅広い頸部を無文とし、横沈線で画して以下の肩部に縄文(R L)を充填し、また内区無文の楕円形状沈線文を描く。内面は丁寧な横位磨き。	
第43図 PL.85	13	深鉢	口縁片	1-1区	白岩片、石英、チャート 粗砂/普通/明赤褐	不揃いで鋭く細かい条痕を横位に施文。内面はナデ。	
第43図 PL.86	14	深鉢	口縁~ 体部片	1-1区、 120-100	白岩片、石英の粗砂、輝 石/普通/浅黄橙・にぶい 黄橙	口径推定16.0cm。粘土帯1条を付して口縁を肥厚させ、外面に縄文(R L)を施す。体部内外面はケズリ、口縁付近の内外面はナデ。口縁には粘土帯付加成形時の指圧痕の凹凸を残す。	
第43図 PL.86	15	深鉢か	口縁片	1-1区	チャート、白岩片の細礫 /やや軟調/橙	口唇を平坦とし、口唇から口縁外面に縄文(L R)を施文。内面横位ナデ。	
第43図 PL.86	16	深鉢	口縁片	1-1区	白岩片、石英、輝石の粗 砂/普通/にぶい黄橙	口縁をわずかに外反させ、外面に縄文(L R)施文。体部には不揃いで浅い条痕を横位に施す。内面はケズリ。	
第43図 PL.86	17	甕か鉢	口縁片	1-1区	チャートの細礫多い/や や軟調/にぶい黄橙	外面に横位縄文(L R)を施文。内面ナデ。	
第43図 PL.86	18	深鉢	口縁片	1-1区	チャート、輝石、石英、 白粘土/普通/橙	縄文(L R、一部R L)かを地文に、口縁に平行する1条の横位沈線を廻らし、その下位に2条沈線による菱形ないしは三角連繫文を描く。交点部には縦位短沈線を加える。内面ナデ。	外面煤け
第43図 PL.86	19	鉢か	口縁片	1-1区	チャート、白岩片の細礫 /普通/にぶい赤褐	口縁部以下に縄文(L R)施文、その下位に2条平行沈線を廻らす。内面ナデ。	
第43図 PL.86	20	鉢か 筒型	口縁片	4号溝	石英、輝石の粗砂/やや 硬調/灰白	口縁下に2条沈線で区画した磨り消し縄文帯(L R)を廻らす。さらに下位には沈線による斜線が見られる。内面ナデ。	
第43図 PL.86	21	筒型 土器	口縁片	1-1区	白岩片、チャート、石英 /普通、むら有/暗赤褐~ 黒褐	磨り消し縄文(L R)と細めの沈線で三角文や縦位短冊状の文様を配す。	
第43図 PL.86	22	壺か	体部片	1-1区	チャート、黒岩片の細礫 多い/普通、むら有/灰褐 ~橙	縄文(L R)を地文に、2条沈線で菱形連繫文を描く。交点部分は縦位短沈線で切る。内面ナデ。	
第43図 PL.86	23	壺か	体部片	1-2区	白岩片、チャート、石英 /普通/灰黄褐~にぶい黄 橙	細めの沈線による連弧状の区画文を境に、上位に方画モチーフの沈線文、下位には縄文(L R、複節の可能性あり)を施文。内面は丁寧なナデ。	
第43図 PL.86	24	深鉢か 壺	体部上位	1-1区 第4面	チャート、輝石、石英、 白粘土/やや軟調/にぶい 赤褐	上端に横位沈線を廻らし、縄文(L R)地文の後、2条単位と思われる沈線で菱形ないし三角連繫文を描く。交点部は縦位短沈線で切る。	
第43図 PL.86	25	甕	体部片	20号溝	チャート細礫、石英/硬 調/にぶい黄橙	2条単位と思われる沈線と磨り消し縄文による菱形ないし三角連繫文状のモチーフを描く。交点部には縦位短沈線を加える。	
第43図 PL.86	26	壺か	体部片	1-1区	白岩片、チャート、石英 /普通/にぶい黄橙	縄文(L R)を地文に2条平行沈線で斜行線文(連繫文の一部)を描く。内面ナデ。	
第43図 PL.86	27	鉢	体部片	1-1区	石英、白岩片、チャート の細礫/普通/褐灰	磨り消し縄文(L R)による方画モチーフの文様を描く。無文部は磨き。内面ケズリ。	
第43図 PL.86	28	筒型 土器	体部片	1-1区	白岩片、チャート、石英 /普通/灰白~褐灰	細い沈線と磨り消し縄文(L R)による入り組み文と思われる。内面ナデ。	

第63表 遺物観察表(13)
弥生時代・遺構外出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第43図 PL.86	29	壺か	体部片	1-1区	白岩片、チャート、石英/普通/褐	磨り消し縄文(LR)とやや太めの沈線により、横線文と弧線状のモチーフを描く。なお、左上部の縄文帯内に1条の細い沈線を縦位に施す。内面ヘラナデ。	
第43図 PL.86	30	壺か 筒型	体部片	1-1区	チャート、黒岩片の細礫多い/普通/にぶい赤褐	磨り消し縄文(LR)と細めの沈線で方角文か入り組み文を描く。内面ナデ。	
第43図 PL.86	31	鉢か	体部片	1-1区 第4面	片岩細礫を多く含む/やや軟調/橙	縄文(LR)を地文にやや太めの沈線で縦位の直線文と方角文を描く。内面ナデと粗雑な磨き。	
第43図 PL.86	32	鉢か	体部片	1-1区	白岩片、石英、輝石の粗砂/普通/にぶい黄橙~灰	細かい燃糸文と沈線による単位文を描く。	
第43図 PL.86	33	壺	体部片	4号溝	白岩片、チャート、石英の細礫/普通/にぶい橙	細い沈線区画による縄文(LR)帯。内面ナデ。	中期中葉か
第43図 PL.86	34	壺	体部片	4号溝	白岩片、チャート、石英の細礫/やや軟調/にぶい橙	2条の沈線による無文帯の上下に縄文(LR)帯を廻らす。内面ナデ。	中期中葉か
第43図 PL.86	35	壺	体部片	5号溝	チャート、石英の細礫、輝石粗砂/普通/明褐	沈線区画により縄文(LR)帯を廻らし、下位に不揃いで細く鋭い条痕を横位に施す。内面ヘラナデ、先端擦痕を遺す。	中期前半
第44図 PL.86	36	壺	頸部片	1-1区	白岩片、チャート、石英の細礫/普通、むら/褐灰~にぶい黄橙	縄文(LR)を地文に、太く浅い複数条の沈線で横線文帯と肩部に三角か台形モチーフの文様を描いたと思われる。内面は丁寧なナデ。	中期前~中葉
第44図 PL.86	37	壺	体部片	1-1区	白岩片、チャート、石英の細礫/やや硬調、むら/にぶい黄橙	縄文(LR)を地文に、太く浅い複数条の沈線で重三角文を描いたと思われる。内面は丁寧なナデ。	中期前~中葉
第44図 PL.86	38	壺	体部片	1-1区	片岩、チャート、石英の細礫/普通、むら/にぶい黄橙	縄文(LR)を地文に、太く浅い複数条の沈線による区画文と大きめの刺突充填。内面は丁寧なナデ。	中期前~中葉
第44図 PL.86	39	壺	体部片	1-1区	チャート、石英の細礫/普通、むら/にぶい黄褐	縄文(LR)を地文に、太く浅い複数条の沈線による連弧文と大きめの刺突充填。内面は丁寧なナデ。	中期前~中葉
第44図 PL.86	40	壺	体部片	1-1区	白岩片、チャート、石英の細礫/普通/明赤褐	細い3条の沈線で交互三角文を横位に展開し、内区を径3mmの管状具先端による刺突充填。沈線施文具は刺突文と同一と思われる。	中期前~中葉
第44図 PL.86	41	壺	体部片	120-110	白岩片、チャート、石英の細礫/普通/にぶい褐	細い3条の沈線で交互三角文を横位に展開し、内区を径3mmの管状具先端による刺突充填。沈線施文具は刺突文と同一と思われる。	40と同一個体と思われる
第44図 PL.86	42	壺か鉢	体部片	1-1区	輝石、石英の粗砂多い/軟調/にぶい黄橙	細い沈線による横位区画文の上位に縄文(LR)か、下位に直線と雷文を垂下させ、右側を刺突文で埋め、左側に横線を引く。	中期前半か
第44図 PL.86	43	壺	頸部片	1-1区	白岩片、石英、赤粒の粗砂/普通、均質/にぶい橙	細い2条沈線による斜行区画文と径2mmの管状具先端による刺突充填。内面ナデ。	中期前~中葉
第44図 PL.86	44	壺か甕	体部片	1-1区	白岩片、石英の細砂/普通/黒褐	浅い条痕様の整形後、太い4条単位の櫛歯具で大振りな波状文か弧線状の文様を描く。内面ナデと粗い磨き。	
第44図 PL.86	45	鉢か	口縁片	4号周溝墓 周溝	石英、チャートの細礫/硬調/にぶい橙	口縁部は沈線で画された縄文(L)帯を廻らし、体部には沈線による単位文を描くようである。内面磨き。	中期前半
第44図 PL.86	46	壺か甕	体下半片	1-1区	輝石、石英、チャート多い/やや硬調/明褐	不揃いで浅く細かい条痕を斜位ないし横位に交差させて施文。内面はナデ。	
第44図 PL.86	47	壺か甕	底部片	1-1区	石英、白岩片、輝石の粗砂多い/普通/にぶい黄橙	底径9.0cm。細く整った条痕を横位に施す。内面は条痕様の粗いナデ。底面に1葉の木葉痕。	中期前半
第44図 PL.86	48	壺か甕	底部片	1-1区	チャート、石英の細礫/普通/にぶい黄褐	底径6.0cm。斜位のまばらな条痕を施す。内面ナデ。底面に木葉痕。	中期前半
第44図 PL.86	49	甕か	底部片	1-1区	白岩片と石英の細礫多い/普通/灰黄褐	底径9.0cm。底面に複数枚を重ねた木葉痕。	中期前~中葉
第44図 PL.86	50	甕か	底部片	1-1区	白岩片と輝石の粗砂/硬調/にぶい褐	底径推定6.2cm。外面ケズリ、底面に網代痕。底面に灰付着。	中期前~中葉
第44図 PL.86	51	壺か甕	底部片	3区攪乱	白岩片、石英、輝石の細礫/やや硬調/にぶい黄橙	底径8.7cm。内外面に斜位のまばらな条痕を施す。底面に木葉痕。	中期前半
第44図 PL.86	52	筒型か	底部片	1-1区	白岩片、チャート、石英の細礫/硬調、均質/明褐	底径6.1cm。内外面はナデ。底面に木葉痕。	中期前半
第44図 PL.86	53	壺か	底部片	150-100	チャート、石英の細礫/やや硬調/にぶい褐	底径6.2cm。外面に縄文(L)、内面ナデ。底面に木葉痕のち磨き。	中期前半
第44図 PL.86	54	小型壺 か	底部片	1-1区 第4面	白岩片、チャート、石英の細礫/普通/暗褐	底径4.5cm。外面にまばらな条痕。底面に木葉痕のち磨き。	中期前半か
第44図 PL.86	55	壺	口縁片	1-1区	白岩片、石英の粗砂、輝石/やや軟調/赤褐	口径推定14.2cm。粘土帯付加による肥厚口縁で、外面に縄文(LR)を施す。頸部上位は無文。内面ナデ。	
第44図 PL.86	56	壺	口縁片	1-1区	白岩片、石英、チャート粗砂/やや軟調/灰黄~にぶい黄	口径推定9.0cm。口縁下端を沈線状の段で画し、口縁帯に縄文(LR)を施す。内面はナデ。	
第44図 PL.86	57	壺	口縁片	150-030	白岩片、石英、輝石の粗砂/やや軟調/橙	口唇内面に弱い平坦面、口縁は折り返して下端が肥厚する。縄文(LR)を全体に横位施文。内面ナデ。	中期後半か
第44図 PL.86	58	甕	口縁片	3号溝	白岩片と石英の粗砂多い/普通/にぶい黄~黄灰	口縁は下位を肥厚させ、外面に縄文(RL)を施す。頸部は無文。内面は丁寧なナデ。	中期前~中葉
第44図 PL.86	59	壺	肩片か	120-110	白岩片、石英の細砂/やや軟調、むら/褐	縄文(RR)かを地文に植物茎状のものを2条束ねた工具で刺突列点文を複数条廻らす。内面剥離。	
第44図 PL.86	60	壺	体部片	150-020	白岩片、チャート、石英の細礫多い/普通、ややむら/橙	頸部に2条沈線を廻らし、上位に複数条沈線による山形ないし三角形のモチーフを描く。肩部は大振りな波形の櫛描波状文を4帯廻らす(櫛描文はスパンの広い4歯施文具を使用)。胴部は目の整った細目の条痕を横位に施文。内面はハケ目とナデ。	中期中葉か
第44図 PL.86	61	壺か	体部片	2号住居	赤色粒、輝石、石英の粗砂/普通、均質/橙	縄文(L)かを地文に4条の平行沈線を廻らし上位に沈線による波状モチーフか単位文を描く。内面ナデ。	中期後半か

遺物観察表

第64表 遺物観察表(14)
弥生時代・遺構外出土土器(続き)

挿図番号 写真図版	No.	器種	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第44図 PL.86	62	壺か	体部片	160-030	石英、輝石の粗砂多い/ やや硬調/にぶい黄橙	縄文(L R)を地文に、細めの3条沈線を廻らす。内面は丁寧なナデ。	中期後半か
第44図 PL.86	63	壺	体部片	5号溝	白岩片、石英、輝石の粗 砂/普通/にぶい赤褐	3条以上の単位による沈線を廻らし、沈線文間を縄文(L R)で充填する。内面ナデ。	中期後半か
第44図 PL.86	64	壺	体部片	4号溝	赤色粒、輝石、白岩片の 粗砂/普通/にぶい黄橙	横位沈線で区画し、無文帯と縄文(L R)帯を交互に廻らすと思われる。内面ナデ。	中期後半か
第44図 PL.86	65	壺	頸部片	5号溝	白岩片、石英、輝石の粗 砂/やや軟調、むら有/橙	縄文(L R)を地文に複数沈線で横線文を廻らす。内面ナデ。	中期後半
第44図 PL.86	66	壺	体部片	1-1区 第4面	チャート、白岩片、石英 の粗砂/やや軟調/橙	鋭く細い沈線で重三角文と思われる単位文を描く。描出は1条描き。	東北南部系、 中期後半
第44図 PL.86	67	甕	口縁片	1-1区 第4面	白岩片細礫、石英、輝石 の粗砂/硬調、むら有/灰褐	口唇上面を平坦とし、弱く内屈させて口縁部とする。口縁下位から頸部上位にかけて縄文(L R)を施す。頸屈曲部に等間隔止めと思われる簾状文(右回り)を廻らせる。内面ヘラナデ。	中期後半
第44図 PL.86	68	甕	頸部片	1-1区	白岩片の粗砂多い/灰褐/ 普通/灰褐	頸部に簾状文(右回り)、体部は横位ハケ目後櫛描斜格子文を描く。櫛描施文具は5~6歯か。内面横位ハケ目。	中期後半
第44図 PL.86	69	甕	体部片	3号溝	チャート細礫、石英、輝 石/普通/にぶい黄橙	縦位の櫛描羽状文を描く。施文具は先端の鋭い約2mmスパンの櫛状具(歯数6~7)。内面ナデ。	中期後半
第44図 PL.86	70	甕か	体部片	1-1区	白岩片、石英の粗砂/普 通/にぶい褐	細い沈線による重四角文か「コ」の字重ね文を描き、中央に径2mmの管状具先端による刺突を施した円形貼付文を付す。内面ナデ。	中期後半

弥生時代・遺構外出土土器

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第45図 PL.87	71	石鎌 大型剥片	1-1区	18.8	9.9	525.4	完成状態。両側縁は潰れ、右辺・刃部側側縁は摩耗。左辺側裏面は刃部再生され、側縁摩耗は見られない。	ホルンフェルス
第45図 PL.87	72	石鎌 大型剥片	122号土坑	15.2	10.1	460.6	完成状態。装着部の「潰れ」が残る左辺側以外、器体・刃部再生加工が及ぶ。	ホルンフェルス
第45図 PL.87	73	石鎌 大型剥片	1-1区	19.9	9.7	653.6	完成状態。風化して摩耗痕・捲縛痕は不明。刃部は礫面の形状を利用、裏面側を加工して作出。	ホルンフェルス

6号住居出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第48図 PL.87	1	土師器 有孔鉢	+9、覆土 口縁部1/3欠損	口 18.3 底 3.2	高 9.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部は上位・中位がナデ、下位から底部はヘラ削り。内面は底部から体部下位にヘラナデ、単位不鮮明。	底部孔径 0.9cm。
第48図 PL.87	2	土師器 高杯	+13 杯身部1/3	口 10.8		細砂粒/良好/明赤 褐	脚部は貼付、杯身口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ磨き、脚部付近はヘラ削り。内面は杯身底部から体部がヘラナデ後放射状ヘラ磨き。	
第48図 PL.87	3	土師器 高杯	+23~+39、 覆土杯身部1/3	口 13.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身口縁部は横ナデ、体部から底部はハケ目(6本)後部分的にナデ。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第48図 PL.87	4	土師器 高杯	+9~+13 杯身部1/3	口 19.6		細・粗・角閃・褐 粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、口縁部から体部、底部はヘラ磨き、脚部付近はヘラ削り。内面は上半にハケ目が残り、下半はヘラナデ。	外面は焼成時の 炭素吸着あり。
第48図 PL.87	5	土師器 高杯	+12~+15 杯身部~ 脚部上半	口 21.0		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は赤色塗彩。口縁部から脚部上半はヘラ磨き、脚部下位はハケ目(7本)。内面杯身部は器面剥落のため不明。脚部はハケ目。脚部に透孔が3カ所。	
第48図 PL.87	6	土師器 器台	+3~+8 杯身部・ 脚部一部欠	口 7.4 脚 13.4	高 9.2	細砂粒・角閃/良 好/にぶい黄橙	脚部は貼付、受け部口縁部は横ナデ、底部と脚部はヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不鮮明。裾部は横位のヘラ磨き。内面は受け部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ、裾部がハケ目(8本)。	
第48図 PL.87	7	土師器 器台	+4 ほぼ完形	口 8.0 脚 14.2	高 9.8	細砂粒・角閃/良 好/にぶい黄橙	脚部は貼付、受け部口縁部は横ナデ、底部はヘラ磨きか、脚部は縦位のヘラ磨き、裾部端部は横ナデ。内面は受け部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ、裾部がハケ目(6本)。	脚部に透孔が 2段、各3カ 所。
第48図	8	土師器 器台	+33 受け部	口 8.0 稜 6.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、内面も横ナデか、器面の大半が剥落のため不鮮明。	受け部底面孔 径1.0cm。
第48図	9	土師器 器台	+4 受け部底部 ~脚部片			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は外面が縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	脚部に透孔が 3カ所。
第48図 PL.87	10	土師器 埴	+30 口縁部欠損	底 3.5 胴 9.3		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部横ナデ、胴部から底部はヘラ削り後上位はナデ。内面は底部から胴部下位にヘラ磨き、その上位は器面剥落のため不明。	
第48図 PL.87	11	土師器 埴	+6、覆土 3/4	口 8.4 底 3.0	高 16.5 胴 12.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部上位はナデ、中位から底部はヘラ削り。	
第48図	12	土師器 壺	+8~+22 頸部 ~胴部上半片	頸 5.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部下位と胴部は横位、頸部は縦位のヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	
第48図 PL.87	13	土師器 壺	+3~+35、覆土 底部~頸部	底 4.5 胴 18.2		細砂粒/良好/明赤 褐	底部はヘラ削り、胴部はハケ目後ヘラ磨き、口縁部もヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、底部から胴部はヘラナデか。	
第49図 PL.87	14	土師器 直口壺	+3、+35、覆土 底部~ 口縁部下半	底 5.6 胴 18.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	底部はヘラ削り、口縁部から胴部は縦位のヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、底部から胴部はヘラナデか。	外面頸部から 胴部の一部に 器面磨滅あり。
第49図 PL.88	15	土師器 甕	+9、覆土 底部~胴部	底 5.0 胴 17.2		細砂粒/良好/橙	底部はヘラ削り、胴部は下位がヘラ磨き、その上位はヘラ削り後ナデか。内面はヘラナデ、器面磨滅のため単位不鮮明。	胴部中位に厚 く煤が付着。
第49図 PL.88	16	土師器 台付甕	+13~+36、覆土 口縁部~胴部下位	口 11.3 胴 16.3		細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(5本)、内面胴部はヘラナデ。	外面は胴部下 半に煤が付着。
第49図 PL.88	17	土師器 台付甕	+2~+11、覆土 口縁部~胴部上半	口 14.2 胴 21.8		細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(5本)、内面胴部はヘラナデ。	

第65表 遺物観察表(15)

6号住居出土土器(続き)

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第49図 PL.88	18	土師器 台付甕	+15~+29、覆土 口縁部~胴部下 位	口 17.0 胴 25.0	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面胴部はヘラナデか、 単位不鮮明。	外面は一部を 除き全体的に 焼けている。
第49図 PL.88	19	土師器 台付甕	+11~+12、覆土 口縁部~ 胴部上半	口 17.0	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面胴部はヘラナデか、 単位不鮮明。	外面は一部を 除き全体的に 焼けている。
第49図 PL.88	20	土師器 台付甕	+7~+30、覆土 胴部下半~ 脚部片	底 5.6 胴 24.0	細砂粒・褐粒/良 好/にぶい黄橙	胴部から脚部はハケ目(6本)。内面は胴部がヘラナデ。	外面胴部の中 位は全体的に 焼けている。
第50図	21	土師器 台付甕	覆土 胴部下半~ 脚部片	脚 7.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部は貼付、胴部から脚部上半はハケ目(8本)、内面は脚 部上半にナデ。	底部胴部 脚部 の両面に砂粒の 多い粘土が貼付。
第50図	22	土師器 台付甕	+11~+15、 覆土 脚部	脚 8.0	細砂粒/良好/浅黄 橙	脚部は貼付、胴部から脚部上半はハケ目(8本)、内面は脚 部上半にナデ。	底部は脚部側 面に砂粒の多い 粘土が貼付。
第50図	23	土師器 台付甕	+11 脚部	底 5.0 脚 8.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部はハケ目、脚部はハケ目後ナデ。内面は端部折り返し、 脚部はヘラナデ。	内面脚部の底 面に砂粒の多い 粘土が貼付。
第50図	24	土師器 台付甕	+23、+39 脚部片		細砂粒/良好/橙	胴部から脚部はヘラ削りか。内面は脚部にハケ目(10本)。	
第50図 PL.88	25	土師器 台付甕	+6、+40 口縁部~頸部片	口 29.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部はハケ目(7本)。内面は口 縁部から頸部が横位のヘラ磨き。	外面は部分的 に煤が付着。
第50図	26	土師器 甕	+6 口縁部~胴 部上位片	口 13.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はハケ目(8)。内面胴部は ハケ目。	
第50図	27	土師器 甕	+3 口縁部~胴 部上位片	口 13.8	細砂粒・粗・角閃 /良好/橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目後ナデ。内面は胴部ヘラナデ。	
第50図 PL.88	28	土師器 甕	+3、+4 口縁部 ~胴部上位片	口 15.7	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は上半がハケ目、下半はハケ目、胴部もハケ目。内 面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。	
第50図 PL.88	29	土師器 甕	+15~+16、覆土 口縁部~胴部上 半片	口 17.0	細・粗・角閃・ガ /良好/橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、胴部ヘラナ デ。内面は頸部から胴部がヘラナデ。	胴部上位~口 縁部は焼けて いる。

9号住居出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第51図	1	土師器 高杯	南部+6 杯身底 部~脚部片		細砂粒/良好/橙	杯身底部から脚部はヘラ削り。	
第51図 PL.88	2	土師器 台付甕	南西部+5~+11 口縁部~胴部上 位片	口 14.0	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(7本)。内面胴部はヘラナデ。	

1号古墳出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第63図 PL.89	1	須恵器 甕	周堀2層 口縁 部~胴部上半片	口 15.8	細砂粒/還元焰/暗 灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部上位はカキ目。外面の胴部 には降灰が付着。	
第63図	2	須恵器 甕	周堀2層 底部~胴部下半		細砂粒/還元焰/灰	底部から胴部下半は格子目状叩き痕が残る、中位はカキ目。 内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第63図	3	土師器 壺	周堀2層 口縁部~頸部片		細砂粒/良好/橙	外面は器面が荒れており不明。内面は口縁部下半から頸部 にヘラ磨き。	

1号古墳出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第63図 PL.89	4	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[1.7]	0.3	0.3	0.5	頭部0.9×0.6cm、錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	5	鉄器	釘	石室内	完形	7.0	0.5	0.5	4.8	頭部0.9×0.9cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	6	鉄器	釘	石室内	完形	3.8	0.3	0.3	1.8	頭部0.9×0.9cm、錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	7	鉄器	釘	石室内	先端部片	[1.4]	0.3	0.2	[0.3]	錆化が激しい。
第63図 PL.89	8	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[3.0]	0.3	0.3	[1.1]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	9	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[3.9]	0.3	0.3	[2.3]	頭部0.7×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	10	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[3.4]	0.3	0.3	[2.4]	頭部0.8×0.8cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	11	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[2.4]	0.3	0.3	[1.4]	頭部0.8×0.8cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	12	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.1]	0.3	0.2	[0.4]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	13	鉄器	釘	石室内	完形	5.5	0.4	0.3	3.8	頭部1.0×1.0cm、錆化が激しい。

遺物観察表

第66表 遺物観察表(16)

1号古墳出土金属製品(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第63図 PL.89	14	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[3.3]	0.3	0.3	[1.8]	頭部0.8×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	15	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.3]	0.5	0.3	[1.1]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	16	鉄器	釘	石室内	完形	5.4	0.5	0.4	3.5	頭部1.0×0.9cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	17	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[3.7]	0.4	0.3	[2.6]	頭部0.9×0.8cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	18	鉄器	釘	石室内	完形	6.6	0.2	0.2	2.4	頭部0.7×0.5cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	19	鉄器	釘	石室内	完形	6.7	0.2	0.2	3.1	頭部0.9×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	20	鉄器	釘	石室内	完形	6.7	0.4	0.3	4.5	頭部0.9×0.9cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	21	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[3.5]	0.3	0.2	[2.6]	頭部0.9×0.9cm、別個体片付着。
第63図 PL.89	22	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[2.7]	0.3	0.2	[1.5]	頭部0.8×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	23	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[2.0]	0.4	0.3	[1.4]	頭部0.8×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	24	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.8]	0.3	0.3	[1.4]	先端部の錆化が激しい。
第63図 PL.89	25	鉄器	釘	石室内	頭部片	[1.2]	0.4	0.4	[0.9]	頭部0.9×0.8cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	26	鉄器	釘	石室内	両端部欠損	[2.5]	0.3	0.3	[2.1]	途中で折れている、錆化が激しい。
第63図 PL.89	27	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[3.2]	0.3	0.3	[1.4]	錆化が激しい。
第63図 PL.89	28	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[3.1]	0.3	0.2	[0.8]	錆化が激しい。
第63図 PL.89	29	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.8]	0.3	0.3	[1.3]	やや扁平、錆化が激しい。
第63図 PL.89	30	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.7]	0.4	0.3	[0.8]	錆化が進んでいるが、比較的良好な残存状態。
第63図 PL.89	31	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[1.6]	0.2	0.2	[0.6]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	32	鉄器	釘	石室内	一部片	[1.6]	0.3	0.3	[0.7]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	33	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[1.7]	0.3	0.3	[0.8]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	34	鉄器	釘	石室内	一部片	[2.0]	0.3	0.3	[0.8]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	35	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[1.9]	0.4	0.4	[1.4]	頭部0.8×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	36	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.3]	0.2	0.2	[0.7]	錆化が進んでいる。
第63図 PL.89	37	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[2.1]	0.3	0.3	[1.3]	頭部0.9×0.7cm、錆化が激しい。
第63図 PL.89	38	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[1.7]	0.3	0.2	[0.7]	頭部0.7×0.6cm、頭部空洞化。
第63図 PL.89	39	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.5]	0.3	0.3		錆化が進んでいる。
第64図 PL.89	40	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[2.3]	0.3	0.3	[2.2]	頭部1.0×0.9cm、錆化が激しい。
第64図 PL.89	41	鉄器	釘	石室内	一部片	[2.2]	0.3	0.3	[1.3]	別個体片が付着、錆化が進んでいる。
第64図 PL.89	42	鉄器	釘	石室内	先端部側欠損	[3.5]	0.3	0.3	[2.8]	頭部0.9×0.8cm、錆化が激しい。
第64図 PL.89	43	鉄器	釘	石室内	先端部側片	[2.5]	0.3	0.3	[0.7]	錆化が進んでいる。
第64図 PL.89	44	鉄器	釘	周堀	先端部側欠損	[1.9]	0.2	0.2	[0.8]	頭部0.7×0.7cm、錆化が激しい。
第64図 PL.89	45	鉄器	釘	周堀	一部片	[2.1]	0.4	0.3	[1.0]	錆化が激しい。
第64図 PL.89	46	鉄器	釘	周堀	先端部側片	[3.1]	0.2	0.2	[0.5]	錆化が進んでいる。
第64図 PL.89	47	金属器	不明	石室内	一部片	[4.0]	0.3	0.2	[1.5]	銅製品、線状品、錆化が進んでいる。
第64図 PL.89	48	鉄器	不明	石室内	一部片	[1.7]	[1.2]	0.2	[0.7]	錆化が進んでいる。

第67表 遺物観察表(17)

2号古墳出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第67図 PL.89	1	土師器 杯	周堀西部2層 1/3	口 14.8 稜 14.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	外面口縁部に 段を有す。
第67図	2	土師器 高杯	周堀南西部2層 口縁部片	口 21.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	外面は縦位、内面は横位のヘラ磨き。	
第67図 PL.89	3	土師器 埴	周堀西部2層 底部～胴部片	底 3.0 胴 15.8	細砂粒/良好/橙	底部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面はヘラ ナデ。	
第67図	4	土師器 甕	周堀覆土 口縁部片	口 26.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部はヘラナデ、頸部は横ナデ。内面は横位のヘラ磨き。	
第67図	5	土師器 台付甕	周堀覆土 脚部片	脚 9.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ、内面は端部が折り返し、脚部はヘラナデ。	

2号古墳出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種 類	器 種	出土位置	残 存 率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第67図 PL.89	6	鉄器	釘	石室部 覆土	一部片	[2.9]	0.2	0.2	[1.0]	錆化が進んでいる。

2号周溝墓出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第72図	1	土師器 小型鉢	周溝西隅上層 口縁部～体部片	口 8.8	細砂粒/良好/にぶ い橙	内外面とも横位のヘラ磨き。	
第72図	2	土師器 高杯	周溝南西部中層 脚部片		細砂粒/良好/褐灰	脚部は貼付か。外面は縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第72図	3	土師器 器台	周溝覆土 脚部片	脚 11.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はヘラ削りか、器面磨滅のため不鮮明。内面は脚部ヘ ラナデ、端部横ナデ。	脚部に透孔が 3カ所。
第72図	4	土師器 高杯	周溝北東部中層 杯身底部～ 脚部上位		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は縦位のヘラ磨き。内面は杯身底面、脚部ともヘラナ デ。	杯身底部と脚 部の境に小穿 孔が10カ所。
第72図 PL.89	5	土師器 埴	周溝北東部中層 1/3	口 10.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内外とも器面磨滅のため不鮮明。口縁部から胴部はヘラ磨 きか、内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデか。	
第73図	6	土師器 埴	周溝南西部中層 底部～ 胴部頸部片	底 4.3	細砂粒/角閃/良 好/にぶい黄橙	頸部は横ナデ、胴部はヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は 底部から胴部にヘラナデ。	
第73図	7	土師器 小型壺	周溝北東部中～ 上層 底部～胴部片	底 3.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部から胴部はヘラ磨き。内面もヘラ磨き。	
第73図 PL.89	8	土師器 壺	周溝南隅中～ 上層 頸部～ 胴部上半片	頸 5.1 胴 21.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ 削り。内面は口縁部ヘラ磨き、胴部はヘラナデ後、上位下 半から中位にヘラ磨き。	
第73図	9	土師器 壺	周溝北西・南西 部上層 口縁部～胴部片	頸 13.6 胴 19.0	細砂粒多/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(9本)、器面磨滅のため不 鮮明。内面胴部はヘラナデ。	
第73図	10	土師器 台付甕	周溝北東部上層 口縁部～ 胴部上位片	口 15.4	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部はハケ目(7本)、内面胴部 はヘラナデ。	
第73図	11	土師器 台付甕	周溝南東部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 16.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(5本)、内面は頸部がヘラ 削り、胴部はヘラナデ。	口縁部一部が 煤けている。
第73図	12	土師器 台付甕	周溝南西部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 17.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(8本)、内面は頸部がヘラ 削り、胴部はヘラナデ。	口縁部一部が 煤けている。
第73図 PL.89	13	土師器 台付甕	周溝南西部下層 脚部	底 5.6 脚 8.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部はハケ目後ナデ。内面は端部折り返し、脚部はヘラナ デ。	内面脚部底面 に砂粒の多い 粘土が貼付。
第73図	14	土師器 台付甕	周溝北東部中層 脚部片	底 6.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部はハケ目後ナデ。内面はヘラナデ。	内面脚部底面 に砂粒の多い 粘土が貼付。
第73図 PL.90	15	土師器 台付甕	周溝北東部中～ 下層 口縁部～ 胴部下位	口 29.6 胴 29.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面は口縁部がヘ ラ磨き、胴部はヘラナデ、上位は器面磨滅のため単位不鮮 明。	胴部上半～口 縁部全体的に 煤けている。
第73図	16	土師器 小型甕	周溝西隅中層 口縁部～胴部上 位片	口 7.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.89	17	土師器 甕	周溝南西部底面 +5 3/5	口 14.6 高 20.3 底 4.8 胴 18.3	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から胴部上半はハケ目後口縁部が横ナデ、頸部にナ デ、胴部下半から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部が ヘラナデ。	胴部上半～口 縁部は頸部を除き 煤けている。
第74図	18	土師器 甕	周溝西隅上～中 層 口縁部～胴 部上位片	口 27.6	細砂粒/角閃/良 好/明黄褐	口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はヘラナデ、一部にハ ケ目が残る。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第74図	19	土師器 甕	周溝西隅上層 底部片	底 6.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部はヘラ削り、胴部はナデ、一部にハケ目。内面はヘラ ナデ。	

遺物観察表

第68表 遺物観察表(18)

2号周溝墓出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第74図 PL.89	20	鉄器	不明	墳丘部	ほぼ完形か	7.6	0.4	0.3	5.0	錆化が進んでいる。

3号周溝墓出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第76図	1	須恵器 甕	周溝上層 胴部片			細砂粒/還元焰/灰	外面は格子目状叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第76図 PL.90	2	須恵器 甕	周溝上層 胴部片			細・粗・角閃/還元焰/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

4号周溝墓出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第78図 PL.90	1	土師器 壺	周溝南部+23 口縁部～ 胴部下位片	口 8.2 胴 13.8		細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、最下位にハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
第78図	2	土師器 壺	周溝北西部5層 口縁部片	口 18.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は口唇部横ナデ、口縁部は斜めのヘラ磨き、内面は口縁部に横位のヘラ磨き。	
第78図	3	土師器 甕	周溝北西部5層 底部～胴部下位片	底 4.6		細砂粒/良好/明黄 褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

4号周溝墓出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第78図 PL.90	4	鉄器	鎌	周溝東南 部	基部側片	[7.3]	3.4	0.2	[25.9]	裏面に別個体片が付着、錆化が激しい。

5号周溝墓出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第79図	1	土師器 台付甕	周溝北部上層 胴部下位～ 脚部片			細砂粒・褐粒/良 好/浅黄橙	胴部から脚部はハケ目(6本)、脚部は一部ナデ。内面は胴部・脚部ともヘラナデ。	内外面の底面に砂粒の多い粘土が貼付。

6号周溝墓出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第82図	1	土師器 高杯	周溝南東部上層 杯身部片	口 13.0		細砂粒/やや軟質/ 橙	外面はヘラ削り後ナデ、器面磨滅のため詳細不鮮明。内面はヘラナデ。	
第82図	2	土師器 高杯か器 台	周溝南東部上層 脚部片	脚 12.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はヘラ磨き、内面は脚部上半ハケ目(9本)、裾部は横ナデ。	
第82図	3	土師器 壺	周溝南東部中層 底部～胴部下位	底 約2.0		細砂粒・角閃/良 好/橙	外面はヘラ削り後、ヘラ磨き。内面はヘラナデ後胴部にヘラ磨き。	
第82図 PL.90	4	土師器 台付甕	周溝南東部上～ 中層 口縁部～ 胴部下位	口 13.0 胴 17.5		細砂粒・褐粒/良 好/浅黄橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(9本)、内面は頸部から胴部がヘラナデ。	
第82図	5	土師器 台付甕	周溝南東部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 15.8		細砂粒/良好/灰黄	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面は頸部から胴部がヘラナデ。	外面は一部が焼けている。
第82図	6	土師器 台付甕	周溝南東部上層 口縁部～ 胴部上位片	口 16.0		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(5本)、内面は頸部から胴部がヘラナデ。	外面は一部が焼けている。
第82図 PL.91	7	土師器 台付甕	周溝南東部上～ 中層 口縁部～ 胴部下位片	口 17.7 胴 26.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面は頸部から胴部がヘラナデ。	外面胴部上半焼けている。
第82図	8	土師器 台付甕	周溝南東部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 18.8		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面は頸部から胴部がヘラナデ。	外面は焼けている。
第82図	9	土師器 台付甕	周溝南東部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 19.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)、内面は頸部から胴部がヘラナデ。	外面の口縁部に煤が付着。
第82図	10	土師器 台付甕	周溝南東部上～ 中層 胴部下位 ～脚部片			細砂粒・ガ/良好/ 赤	脚部は貼付、胴部から脚部はヘラ削り。内面は胴部・底部ともヘラナデ。	
第82図 PL.90	11	土師器 甕	周溝南東部中～ 下層 口縁部～ 胴部下位片	口 15.6 胴 17.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第83図	12	土師器 甕	周溝南東部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 16.2		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第83図 PL.91	13	土師器 甕	周溝南東部 上～中層 1/3	口 19.0 高 25.4 底 約6.0 胴 24.8		細砂粒・角閃/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	

第69表 遺物観察表(19)

6号周溝墓出土土器(続き)

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第83図	14	土師器 甗	周溝南東部中層 口縁部～ 胴部上位片	口 18.6	細砂粒・褐粒/良 好/にぶい橙	外面はハケ目(7本)後口縁部が横ナデ。内面は口縁部上半 が横ナデ、下半がハケ目、胴部はヘラナデ。	
第83図 PL.91	15	土師器 甗	周溝南東部上～ 中層 口縁部～ 胴部下位片	口 19.6 胴 23.2	細砂粒多/良好/赤 褐	口縁部横ナデ、胴部上半はナデ、下半はヘラ削り。内面は 頸部から胴部がヘラナデ。	全体的に器形 の歪みがみら れる。
第83図	16	土師器 甗	周溝南東部上～ 中層 口縁部～ 胴部上半片	口 20.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はハケ目後口縁部が横ナデ、胴部はナデ。内面胴部は ヘラナデ。	
第83図	17	土師器 甗	周溝南部上～中 層 底部 ～胴部下半片	底 5.6 胴 20.0	細砂粒・白粒/良 好/にぶい橙	底部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後底部周囲より上にヘラ 磨き。内面はヘラナデ。	
第83図 PL.91	18	土師器 甗	周溝南東部上～ 下層 底部～ 胴部下半片	底 7.8 胴 25.8	細砂粒/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	内面底部から 胴部下位に煤 が付着。
第83図	19	土師器 甗	周溝南東部上層 底部～胴部下位	底 7.6	細・褐粒・1cm大 角閃/良好/橙	外面はヘラ削りか、器面剥離のため不鮮明。内面はヘラナ デ。	
第83図	20	土師器 高杯	周溝南東部上層 脚部	脚 5.6	細砂粒/良好/橙	杯身は脚部に貼付。脚部・杯身ともナデ。内面は脚部がヘ ラナデ。	ミニチュア品 か。

43号土坑出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第84図	1	土師器 台付甗	覆土 口縁部～頸部片	口 17.6	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第84図	2	土師器 台付甗	覆土 口縁部～頸部片	口 17.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はハケ目。	

122号土坑出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第85図 PL.91	1	土師器 小型甗	覆土 1/3	口 8.6 高 6.8 底 1.8	細・粗・角閃/良 好/にぶい黄橙	口唇部横ナデ、口縁部ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内 面は底部から胴部がヘラナデ。	

1-1区水田出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第88図	1	土師器 小型鉢	水田面 口縁部片	口 7.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口唇部下に径3mmほどの穿孔あり。	
第88図	2	土師器 甗	水田面 胴部片		細砂粒/良好/明赤 褐	残存部上位に径4mmほどの穿孔あり。	

1号遺物集中部出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第101図	1	土師器 甗	頸部～胴部片		細砂粒/良好/橙	胴部上位はヘラナデ、中位から下位はヘラ削り。内面はヘ ラナデ。	

2号遺物集中部出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第101図 PL.91	1	土師器 甗	5/6	口 16.0 高 24.3 底 6.2 胴 22.0	細砂粒/良好/赤褐 ～灰褐	口縁部横ナデ、胴部はヘラ削り後上半にナデ、底部ヘラ削 り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	

3号遺物集中部出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第101図 PL.92	1	土師器 壺	2/3	口 16.1 高 26.1 底 7.2 胴 25.2	細砂粒・褐粒/良 好/明黄褐	口縁部は折り返し、口縁部から頸部は縦位のヘラ磨き、一 部にハケ目が残る、胴部は全面ヘラ磨き、底部はヘラ削り。 内面は口縁部から頸部が横位のヘラ磨き、底部から胴部は ヘラナデ。	
第101図 PL.92	2	土師器 壺	ほぼ完形	口 13.2 高 25.6 底 7.0 胴 25.6	細砂粒・ガ/良好/ 橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口唇部横ナデ、口縁部から胴 部はヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は口縁部がヘラ磨き、 底部から胴部がヘラナデ。	
第101図 PL.92	3	土師器 壺	ほぼ完形	口 13.5 高 26.8 底 8.0 胴 25.4	細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から胴部はヘラ磨き、 底部はヘラ削り。内面は口縁部がハケ目後ヘラ磨き、頸部 はナデ、底部から胴部はヘラナデ。	
第102図 PL.92	4	土師器 台付甗	底部～ 胴部下半片	底 6.5	細砂粒・褐粒/良 好/浅黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。脚部は胴部に貼付。胴部はハ ケ目(6～7本)、内面は胴部がヘラナデ、底部に指頭痕が 残る。	底部に貼付さ れた砂粒の多 い粘土が剥落。
第102図	5	手捏土器 碗形	2/3	口 4.4 高 3.0 底 4.6	細砂粒/良好/灰褐	口縁部はナデ、底部はヘラ削り。内面はナデ。	

遺物観察表

第70表 遺物観察表(20)

古墳時代・遺構外出土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第103図	1	土師器 器台	2区 脚部片	底 17.9	細砂粒/良好/赤褐	内外面ともヘラ磨き、口縁部中位に円形の透孔あり。	
第103図	2	土師器 器台	2区 受け部1/4	口 9.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は貼付、外面は底部から口縁部に放射状ヘラ磨き、内面も底面中央から口縁部に放射状ヘラ磨き。	
第103図	3	土師器 器台	2区 脚部上半片		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	外面は縦位のヘラ磨き、内面は横位のハケ目(8本)。脚部中位に透孔が3カ所。	
第103図	4	土師器 杯	1-1区 口縁部~底部片	口 12.0	細砂粒/良好/明黄 褐	口縁部横ナデ、体部ナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	内斜口縁杯
第103図 PL.92	5	土師器 埴	5号溝 口唇部の一部欠	口 8.9 高 5.9	細砂粒・角閃/良 好/にぶい橙	口唇部は横ナデ、口縁部から胴部はヘラ磨き、底部は器面磨滅。内面は口縁部から底部までヘラ磨き。	
第103図	6	土師器 小型甕	1号竪穴状遺構 口縁部~ 胴部上位片	口 9.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデか、器面磨滅のため不鮮明。内面はヘラナデ。	
第103図	7	土師器 小型甕	150-100 口縁 部~胴部上半片	口 7.4 胴 11.0	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第103図	8	土師器 壺	1号堀 口縁部~頸部片	口 10.4	細砂粒・長石/良 好/にぶい橙	口縁部は斜放射状ヘラ磨き、頸部は横ナデ、内面は斜放射状ヘラ磨き。	
第103図	9	土師器 直口壺	150-140 口縁部~ 胴部上半片	口 7.8 胴 12.6	細砂粒・褐粒/良 好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ、口縁部から頸部、胴部はヘラナデ。内面は口縁部横ナデ、胴部はヘラナデ。	
第103図	10	土師器 壺	150-140 底部~胴部下半片		細砂粒/良好/橙	底部から体部はヘラ削り。内面はヘラナデ、器面の大半は剥落のため不鮮明。	
第103図	11	土師器 壺	4区攪乱 口縁部~頸部片	口 14.0	細砂粒/良好/橙	内面頸部下に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ、口縁部から胴部はハケ目(7本)、内面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。	
第104図	12	土師器 壺	130-110 口縁部~ 胴部上位片	口 13.7	細砂粒/良好/浅黄 橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ、口縁部は縦位のヘラ磨き、胴部はハケ目(6本)、内面は口縁部が横位のヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第104図 PL.92	13	土師器 壺	2区 頸部~胴部中位		細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上半はナデ。内面はヘラナデ。	
第104図	14	土師器 甕	4区攪乱 口縁部~頸部片	口 15.0	細砂粒/良好/明赤 褐	口唇部は横ナデ、口縁部は縦位のハケ目(5本)、内面は横位のハケ目。	
第104図	15	土師器 甕	1号竪穴状遺構 口縁部~ 胴部上位片	口 14.0	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第104図	16	土師器 甕	1号竪穴状遺構 口縁部~頸部片	口 16.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は内外とも横ナデ。	
第104図	17	土師器 台付甕	1号竪穴状遺構 口縁部片	口 20.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
第104図	18	土師器 台付甕	4区攪乱 口縁 部~胴部上位片	口 10.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(5本)、内面は胴部がヘラナデ。	
第104図	19	土師器 台付甕	110-130 口縁 部~胴部上位片	口 15.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(5本)。内面胴部はナデ	
第104図	20	土師器 台付甕	1号堀 口縁部 ~頸部上位片	口 16.0	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部はハケ目(6本)。内面胴部はナデ。	
第104図	21	土師器 台付甕	1号竪穴状遺構 頸部~胴部上位片		細砂粒・褐粒/良 好/にぶい黄橙	頸部は横ナデ、胴部はハケ目、器面やや磨滅。内面胴部はヘラナデ。	
第104図	22	土師器 甕	1号堀 底部~胴部下位	底 9.2	細砂粒・褐粒/良 好/橙	底部と胴部はヘラ磨き。内面は器面剥落のため不明。	
第104図	23	土師器 甕	1区表土 底部片	底 8.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部に木葉痕が残る。内面は器面剥落のため不明。	
第104図	24	土師器 甕	1-1区 底部 ~胴部下位片	底 7.0	細砂粒/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第104図	25	土師器 脚付鉢	1区 底部~脚部片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	体部~脚部にかけては縦位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	脚部上位に透孔をもつ9カ所あり。
第104図 PL.92	26	須恵器 杯蓋	1区 天井部~ 口縁部片		細・粗・角閃/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第104図	27	埴輪 形象	1-1区表土 一部片	残存部長5.6、径 2.6	細砂粒/良好/橙	図上面に貼付痕あり、下面は端部で周囲に器面磨滅がみられる。表面はナデ。	
第104図 PL.92	28	埴輪 円筒	3号溝 基部片	底 26.0	細砂粒・褐粒/良 好/橙	外面はハケ目(2cm 5本)、底面はヘラナデ。内面はナデ。	

1号住居出土土器

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第106図 PL.93	1	須恵器 杯	西壁際+30、 掘方 3/4	口 13.3 高 4.2 底 7.0	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第106図 PL.93	2	須恵器 杯	掘方西壁際 3/4	口 13.7 高 3.9 底 6.8	細砂粒/還元焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第106図	3	須恵器 杯	掘方北部 口縁部片	口 14.1	細砂粒/還元焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。	
第106図	4	須恵器 杯	掘方西部 底部 ~体部下半片	底 7.0	細砂粒/還元焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

第71表 遺物観察表(21)

1号住居出土土器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第106図	5	土師器 甕	西壁際+22・+29 口縁部～ 胴部上位片	口 18.7	細砂粒/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第106図	6	土師器 甕	西部+10～+40 口縁部～ 胴部上位片	口 19.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第106図	7	土師器 甕	東壁際+17 口縁部～頸部片	口 20.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

2号道路状遺構側溝3号溝出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第109図	1	須恵器 杯	覆土 底部片	底 8.0	細砂粒/酸化焰き み/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。	
第109図	2	須恵器 杯	覆土 底部片	底 8.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付、底部はナデ。	
第109図	3	須恵器 甕	覆土 口縁部片		粗砂粒・角閃/還 元焰/灰	口縁部はロクロ整形、外面は波状文が2段以上巡る。内面は中位以下がヘラナデ。	
第109図	4	土製品 土錘	覆土 完形	長さ 5.0 孔 0.6 径 2.4 重 22.5	微砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。器面磨滅。	

2号道路状遺構側溝3号溝出土土器製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第109図	5	砥石 切り砥石	覆土	[4.6]	2.8	11.4	背面側に横位の刃ならし傷がある。	珪質粘板岩

2号道路状遺構側溝4号溝出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第109図	1	須恵器 杯	1/2	口 12.6 高 4.0 底 5.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。器形の歪みが見られる。	内面口唇部に煤が付着、灯明皿に使用。

平安時代・遺構外出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第110図	1	土師器 杯	1号古墳 1/3	口 13.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第110図 PL.93	2	土師器 杯	130-90 2/5	口 12.8 底 7.8	細砂粒・角閃/良 好/にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部ナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	整形技法は土師器による。
第110図	3	黒色土器 椀	1号古墳 1/5	口 15.3 底 7.8	細砂粒・長石/酸 化焰/にぶい橙	内面黒色処理。高台は貼付(剥落痕あり)、口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半はヘラ削り、底部ナデ。内面はヘラ磨き。	
第110図 PL.93	4	須恵器 杯	1号古墳 1/2	口 12.2 高 3.6 底 6.0	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第112図 PL.93	5	須恵器 杯	120-110 口縁部片	口 12.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。	
第112図	6	須恵器 杯	120-110 底部 ～体部下位片	底 7.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第112図	7	須恵器 杯	1区 底部片	底 7.0	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第112図	8	須恵器 杯	1号竪穴状遺構 底部～体部下位片	底 7.2	細砂粒・白粒/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第112図	9	須恵器 杯	130-110 底部片	底 8.0 台 7.8	細砂粒/酸化焰硬 質/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第112図	10	須恵器 杯	1号古墳 底部	底 7.0 台 6.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部はナデ。	
第112図	11	須恵器 瓶	1区 底部～胴部下位	底 7.8 台 7.0	細砂粒・黒斑/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、胴部は回転ヘラ削り。内面底部に降灰が付着。	
第112図	12	須恵器 香炉	3区攪乱 底部片	底 10.6	細砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形、回転方向不明。底部はナデ、体部は回転ヘラ削り、底部に足が貼付。	
第112図 PL.93	13	須恵器 甕	1号古墳 底部～ 口縁部下半	底 13.4	細・粗・角閃長石 /還元焰/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は手持ちヘラ削り、胴部下位に回転ヘラ削り。	外面胴部上位と内面底部に降灰が付着。
第112図	14	瓦 丸瓦	1区 一部片		細砂粒/還元焰/灰	表面はヘラ削り、裏面は布目痕が残る。	

1号竪穴状遺構出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第113図	1	丹波陶器? すり鉢	中央部+49 底部片	-	-	-	にぶい 黄	内面は使用によりすり目の一部まで磨滅。	

遺物観察表

第72表 遺物観察表(22)

1号竪穴状遺構出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第113図 PL.93	2	鉄器	鍬	北西部+37	頸部~茎部片	[6.5]	0.9	0.3	[12.1]	錆化が激しい。
第113図 PL.93	3	鉄器	刀子	北西部+37	関付近片	[3.7]	1.4	0.3	[5.5]	錆化が激しい。

1号竪穴状遺構出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第113図 PL.93	4	銅銭	熙寧元寶	北部+7	完形	25.15、25.41	1.60 ~ 1.75	4.26	北宋、熙寧元年(1068)初鑄。篆書。
第113図 PL.93	5	銅銭	聖宋元寶	北部+35	完形	23.73、24.61	1.21 ~ 1.30	2.74	北宋、建中靖国元年(1101)初鑄。行書。

1号土坑墓出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第115図 PL.93	1	在地系土器 Ⅲ	覆土 完形	11.2	5.6	3.4 ~ 3.8	橙	右回転轆轤調整か。底部内面と体部との境は不明瞭。体部外面は直線的に延びる。底部内面は指撫で。底部外面回転糸切後、指撫で時の押圧により糸切痕不明瞭となる。	
第115図 PL.93	2	在地系土器 Ⅲ	覆土 完形	10.8	5.2	3.5	浅黄橙	左回転轆轤調整。体部は直線的に延びる。底部内面強い指撫で。底部左回転糸切後、指撫で時の押圧により糸切痕が潰れる。	

1号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第115図 PL.93	3	銅銭	唐國通寶	覆土	完形	24.52、24.63	1.17 ~ 1.22	3.50	南唐、中興2年(959)初鑄。篆書。
第115図 PL.93	4	銅銭	宋通元寶	覆土	完形	24.82、24.66	1.22 ~ 1.29	3.59	北宋、建隆元年(960)初鑄。
第115図 PL.93	5	銅銭	祥符元寶	覆土	完形	25.20、25.40	1.12 ~ 1.16	3.51	北宋、大中祥符元年(1008)初鑄。
第115図 PL.93	6	銅銭	元祐通寶	覆土	完形	24.08、24.17	1.20 ~ 1.25	3.50	北宋、元祐元年(1086)初鑄。行書。
第115図 PL.93	7	銅銭	淳祐元寶	覆土	完形	23.97、24.12	1.24 ~ 1.52	3.82	南宋、淳祐元年(1241)初鑄。背「元」。

2号土坑墓出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第117図 PL.93	1	五輪塔 空風輪	覆土	30.9	15.9	8400	風輪部最大径は上端側にあり、下端側に向い徐々に径を狭める。空輪部正面は粗く磨き整形、風輪部には細い斜位工具痕が全面に残る。粗粒輝石安山岩偏平化が著しい。	粗粒輝石安山岩
第117図 PL.93	2	五輪塔 空風輪	覆土	28.8	15.9	8000	風輪部最大径は上端側にあり、下端側に向い徐々に径を狭める。空・風輪部には細い斜位工具痕、拵れ部には横位工具痕が残る。側面形状は若干偏平化の兆し。	粗粒輝石安山岩

4号土坑墓出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第119図 PL.93	1	在地系土器 Ⅲ	覆土 ほぼ完形	10.0 ~ 10.5	5.8	2.8	浅黄橙	体部下位は外反し、上半はやや内湾。口縁部は歪む。内面は底部と体部との境は不明瞭。底部内面に指撫で。底部左回転糸切無調整。	

4号土坑墓出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第119図 PL.93	2	五輪塔 火輪	覆土	12.6	18.3	4650	隅棟部は直線的。多孔質石材を使用するため、概して整形は粗く感じる。	粗粒輝石安山岩

5号土坑墓出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第120図 PL.94	1	五輪塔 水輪	覆土	15.0	24.0	10400	最大径は上端側にあり、やや肩が張る。底面部周辺は若干突出気味。正面・上下両端のみ丁寧な磨き整形。	粗粒輝石安山岩

5号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第120図 PL.94	2	銅銭	治平元寶	覆土	完形	24.20、24.26	1.40 ~ 1.52	3.39	北宋、治平元年(1064)初鑄。真書。
第120図 PL.94	3	銅銭	紹聖元寶	覆土	完形	24.42、24.46	1.17 ~ 1.25	3.02	北宋、紹聖元年(1094)初鑄。行書。
第120図 PL.94	4	銅銭	永樂通寶	覆土	完形	25.47、25.69	1.02 ~ 1.18	2.41	明、永樂6年(1408)初鑄。

第73表 遺物観察表(23)

6号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第120図 PL.94	1	銅銭	宋通元寶	覆土	完形	25.00、24.69	1.01 ~ 1.10	2.84	北宋、建隆元年(960)初鑄。
第120図 PL.94	2	銅銭	祥符元寶	覆土	完形	24.82、24.97	1.18 ~ 1.22	3.60	北宋、大中祥符元年(1008)初鑄。
第120図 PL.94	3	銅銭	大觀通寶	覆土	完形	24.28、24.48	1.20 ~ 1.27	3.67	北宋、大觀元年(1107)初鑄。
第120図 PL.94	4	銅銭	洪武通寶	覆土	完形	23.33、23.43	1.33 ~ 1.78	3.05	明、洪武元年(1368)初鑄。無背。単点通。
第120図 PL.94	5	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	24.98、24.95	1.07 ~ 1.22	3.48	明、永楽6年(1408)初鑄。
第120図 PL.94	6	銅銭	不詳	覆土	完形	24.60、24.61	1.19 ~ 1.28	3.43	鑄がひどく銭文判読不可能。

7号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第121図 PL.94	1	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	25.18、25.12	1.05 ~ 1.33	3.19	明、永楽6年(1408)初鑄。

8号土坑墓出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第122図 PL.94	1	五輪塔 空風輪	覆土	24.9	14.7	5500	風輪部最大径は上端側にあり、下端側に向い徐々に径を狭める。空輪部・風輪部とも粗い斜位工具痕が全面に残る。扁平化が著しい。	粗粒輝石安山岩
第123図 PL.94	2	五輪塔 火輪	覆土	24.6	24.9	14400	隅棟部は概ね直線的で、軒反りは強い。軒部は丁寧な磨き整形。裏面側周部は磨き整形、中央付近には粗い工具痕が残る。	粗粒輝石安山岩
第123図 PL.94	3	五輪塔 火輪	覆土	13.8	24.6	10800	隅棟部は概ね直線的で、軒反りは強い。軒部は丁寧な磨き整形。裏面には粗い工具痕が残る。	粗粒輝石安山岩

9号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第125図 PL.94	1	銅銭	熙寧元寶	覆土	完形	23.90、23.89	1.34 ~ 1.50	3.69	北宋、熙寧元年(1068)初鑄。真書。
第125図 PL.94	2	銅銭	元豊通寶	覆土	完形	23.85、23.63	0.95 ~ 1.09	2.33	北宋、元豊元年(1078)初鑄。行書。

10号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第126図 PL.94	1	銅銭	皇宋通寶	覆土	7/8	24.61、24.60	0.89 ~ 1.07	-	北宋、寶元元年(1038)初鑄。真書。
第126図 PL.94	2	銅銭	皇宋通寶	覆土	完形	24.37、23.84	1.00 ~ 1.14	1.61	北宋、寶元元年(1038)初鑄。篆書。
第126図 PL.94	3	銅銭	元豊通寶	覆土	完形	24.88、24.70	1.33 ~ 1.36	3.06	北宋、元豊元年(1078)初鑄。行書。
第126図 PL.94	4	銅銭	元豊通寶	覆土	完形	22.81、22.86	1.10 ~ 1.17	1.79	北宋、元豊元年(1078)初鑄。篆書。
第127図 PL.94	5	銅銭	元符通寶	覆土	周縁一部 欠	23.72、22.74	1.04 ~ 1.10	1.73	北宋、元符元年(1098)初鑄。篆書。
第127図 PL.94	6	鉄銭	不詳	覆土	1/2	-	2.57 ~ 2.58	-	鉄銭。寛永通寶であろう。割れ口新しい。

14号土坑墓出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第128図 PL.94	1	在地系土器 皿	覆土 完形	10.7	5.2	4.0	浅黄橙	右回転轆轤調整。体部から口縁部は直線的に延びる。口縁部の器壁は内面側から器厚を減じ、一見外反するように見える。底部内面に強い指撫で。底部右回転糸切後、指撫で時の押圧により不明瞭。	諸特徴が2と近似する。
第128図 PL.94	2	在地系土器 皿	覆土 完形	10.4	4.9	3.2 ~ 4.7	浅黄橙	右回転轆轤調整。体部から口縁部は直線的に延びる。口縁部の器壁は内面側から器厚を減じ、端部に平坦面を有するように見える。底部内面に強い指撫で。底部右回転糸切後、指撫で時の押圧により不明瞭。底部外面はかなり斜め。	諸特徴が1と近似する。
第128図 PL.94	3	在地系土器 皿	覆土 完形	11.0	4.9	3.5 ~ 3.9	にぶい 黄橙	底部内面と体部との境は明瞭。体部外面下位は外反し、中位以上は若干内湾。底部左回転糸切無調整であるが、細い棒状圧痕残る。底部内面に粘土を貼り付けたような盛り上がりが見られる。	内面下半の器表黒変。

14号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第129図 PL.94	4	銅銭	至道元寶	覆土	完形	24.53、24.38	0.87 ~ 0.91	2.77	北宋、至道元年(995)初鑄。行書。
第129図 PL.94	5	銅銭	咸平元寶	覆土	完形	24.73、24.68	1.09 ~ 1.16	2.92	北宋、咸平元年(998)初鑄。

遺物観察表

第74表 遺物観察表(24)

14号土坑墓出土銭貨(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第129図 PL.94	6	銅銭	皇宋通寶	覆土	完形	24.45、24.48	1.10 ~ 1.11	2.79	北宋、寶元元年(1038)初鑄。篆書。
第129図 PL.94	7	銅銭	元豊通寶	覆土	完形	24.00、23.95	1.23 ~ 1.37	3.71	北宋、元豊元年(1078)初鑄。行書。
第129図 PL.94	8	銅銭	政和通寶	覆土	完形	24.95、24.96	1.29 ~ 1.36	3.81	北宋、政和元年(1111)初鑄。篆書。
第129図 PL.94	9	銅銭	元○通寶	覆土	完形	24.12、24.18	1.15 ~ 1.21	3.59	元豊通寶、元祐通寶、元符通寶のいずれか。北宋期初鑄。篆書。

15号土坑墓出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第130図 PL.95	1	在地系土器 皿	覆土 完形	11.4	5.5	2.9	赤橙	左回転轆轤調整。体部は外反し、口縁部内湾気味となる。底部糸切無調整。底部は口縁部の中心とかなりずれる。胎土中に金雲母含む。	
第130図 PL.95	2	在地系土器 皿	覆土 ほぼ完形	7.0	3.3	2.0	赤橙	小皿。右回転轆轤調整。体部外面の中位が括れ、直下の轆轤目が緩い稜をなす。底部外面は回転糸切であるが、平らな場所においた際の圧痕で不鮮明。底部内面指撫で。口縁部の1/4ほどに油煙が付着。	灯火皿として使用。

16号土坑墓出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第131図 PL.95	1	在地系土器 皿	覆土 完形	11.9	7.0	3.8	浅黄橙	左回転轆轤調整。体部は外反気味に開き、口縁部は回転横撫でにより内面を窪ませ、若干内湾気味とする。底部外面は回転糸切であるが、平らな場所においた際の厚痕で不鮮明。底部内面指撫で。	

16号土坑墓出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第131図 PL.95	2	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	25.25、24.78	0.95 ~ 1.01	2.78	明、永楽6年(1408)初鑄。
第131図 PL.95	3	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	25.12、25.00	1.00 ~ 1.17	3.31	明、永楽6年(1408)初鑄。
第131図 PL.95	4	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	25.25、25.25	0.98 ~ 1.21	2.84	明、永楽6年(1408)初鑄。
第131図 PL.95	5	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	24.25、24.16	0.92 ~ 0.99	2.83	明、永楽6年(1408)初鑄。
第131図 PL.95	6	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	24.74、24.74	1.11 ~ 1.22	3.67	明、永楽6年(1408)初鑄。
第131図 PL.95	7	銅銭	永楽通寶	覆土	完形	24.61、24.77	1.06 ~ 1.13	2.70	明、永楽6年(1408)初鑄。

4号土坑出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第133図 PL.95	1	肥前磁器 碗	覆土 底部~体部	-	3.9	-	白	雪輪梅樹文。高台内不明銘。釉が白濁し、やや文様のみえにくい。高台径は小さく、底部器壁が厚い。	やや焼成不良。波佐見系。
第133図	2	肥前磁器 碗	覆土 1/2	(9.6)	4.0	5.3	白	雪輪梅樹文。高台内1重圏線内に不明銘。	波佐見系。
第133図	3	京・信楽系陶器 上絵碗	覆土 底部	-	3.0	-	灰白	内面から高台脇に灰釉。貫入がはいる。高台の削り出しはシャープ。体部外面に青灰色の上絵が一部残る。	
第133図	4	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	覆土 底部	-	4.6	-	灰白	口縁部外面に凹線。内面から口縁部外面に灰釉、外面口縁部以下に鉄釉に近い錆釉。高台端部のみ無釉。	
第133図	5	瀬戸・美濃陶器 丸碗	覆土 1/4	11.4	-	-	灰白	口縁部はやや肥厚。体部外面回転篋削り。内外面に灰釉。	
第133図	6	美濃陶器 摺絵皿	覆土 底部	-	5.4	-	灰白	いわゆる御深井。底部内面に呉須を用いた型紙摺りにより施文。文様は薄く不鮮明。高台端部を除き灰釉。貫入がはいる。	
第133図	7	瀬戸・美濃陶器 折縁輪禿皿	覆土 1/4	(20.8)	-	-	灰白	口縁部外面は轆轤目顕著。外面口縁部以下は回転篋削り。体部から口縁部内外面に灰釉。粗い貫入がはいる。	
第133図	8	瀬戸・美濃陶器 片口鉢	覆土 片口鉢	-	-	-	灰白	内面から口縁部に外面灰釉。外面の轆轤目顕著。貫入がはいる。	
第134図 PL.95	9	在地系土器 鍋	覆土 1/8	(36.7)	(17.8)	12.4	黄灰	断面黄灰色、器表付近から器表灰黄色。外面器表は、体部外面下端から底部外面周縁を除き煤付着。口縁部外反し、内面は明瞭な稜をなす。底部と体部境は屈曲。	
第134図	10	在地系土器 鍋	覆土 1/10	(36.8)	-	11.5	灰	断面灰色、器表付近灰白色、内面器表暗灰色。外面器表煤付着し黒色。	
第134図	11	在地系土器 鍋	覆土 口縁部~ 体部片	36.6	-	-	灰	断面灰色、器表付近から内面下半浅黄色、口縁部内面器表暗灰色。体部下端を除く外面器表は煤付着し黒色。口縁部外反し、内面は明瞭な稜をなす。底部と体部の境は屈曲。	
第134図	12	在地系土器 鍋	覆土 1/5	35.0	-	-	灰黄	厚い部分の断面中央暗灰色、器表付近から器表灰黄色。口縁部から体部内面の1/2暗灰色。外面の器表煤付着し黒色。口縁部外反し、内面は明瞭な稜をなす。外面接合痕残る。	

第75表 遺物観察表(25)

4号土坑出土陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第134図	13	在地系土器 鍋	覆土 1/8	(36.8)	-	-	淡黄	断面中央灰色、器表付近から内面下半器表淡黄色。外面器表煤付着し黒色。口縁部内面暗灰色。口縁部外反し、内面は明瞭な稜をなす。	
第134図	14	在地系土器 焙烙	覆土 底部片	-	-	0.8	灰	断面灰色、器表付近浅黄橙色、器表灰白色。厚さと底部と体部境の形状から焙烙と考えられる。底部に補修孔が1カ所残る。	
第134図	15	在地系土器 火鉢	覆土 1/5	(45.4)	-	-	褐灰	断面褐灰色、器表付近黄灰色、器表黒色。口縁部横撫で、体部内面丁寧な撫で。体部外面磨き調整。体部外面下端篋削り。口縁部内外面の器表剥離箇所多い。	
第134図	16	在地系土器 火鉢	覆土 破片	-	-	-	灰	断面灰色、器表付近灰白色、器表暗灰色。脚付き角形火鉢で、粘土板を貼り付けて成形。底部外面は焙烙などと同様の型作り痕残る。	江戸時代か。
第135図	17	在地系土器 調整台か	覆土 破片	-	-	1.6~ 1.1	にぶい 橙	竈の高さ調整台であろう。焙烙と同様に型作りで底部付近を成形し、轆轤調整を行う。その後、底部と体部を削り抜く。	

4号土坑出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第135図 PL.95	18	鉄器	釘	覆土	先端部側欠損	[4.1]	0.6	0.4	[4.3]	頭部1.8×0.9cm、錆化が激しい。
第135図 PL.95	19	鉄器	釘	覆土	先端部側欠損	[2.7]	0.4	0.4	[1.8]	頭部0.8×0.3cm、錆化が激しい。
第135図 PL.95	20	鉄器	釘	覆土	ほぼ完形	[4.1]	0.3	0.3	[1.9]	頭部1.3×0.8cm、錆化が激しい。
第135図 PL.95	21	鉄器	釘	覆土	先端部欠損	[4.2]	0.5	0.5	[5.6]	頭部1.2×0.7cm、錆化が激しい。
第135図 PL.95	22	鉄器	釘	覆土	先端部側片	[2.9]	0.4	0.3	[1.3]	錆化が進んでいるが、比較的良好な残存状態。
第135図 PL.95	23	鉄器	釘	覆土	先端部欠損	[3.4]	0.4	0.3	[1.5]	頭部1.1×0.5cm、錆化が激しい。
第135図 PL.95	24	鉄製品	環状製品	覆土	完形	径2.9	0.6	0.4	8.6	錆化が激しい。

4号土坑出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第135図 PL.95	25	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	22.47、22.79	1.17~1.26	2.38	新寛永。
第135図 PL.95	26	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	22.15、22.42	1.00~1.03	1.67	新寛永。背「足」。錆が進行する。
第135図 PL.95	27	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	23.60、23.77	0.99~1.08	2.32	古寛永。錆が進行する。
第135図 PL.95	28	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	22.97、22.98	1.10~1.18	2.39	新寛永。
第135図 PL.95	29	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	22.23、22.48	1.15~1.31	1.72	新寛永。
第135図 PL.95	30	鉄銭	寛永通寶か	覆土	1/2	26.34	2.72~3.63	-	寛永鉄銭であろう。
第135図 PL.95	31	銅銭・ 鉄銭	寛永通寶か	覆土	完形				2枚付着し、左が鉄銭、右が銅銭。寛永通寶であろう。

5号土坑出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第136図	1	肥前磁器 碗	覆土 口縁部一部、 底部1/2	(10.3)	(4.0)	6.4	灰白	外面染付。口縁部内面は不明文様帯。底部内面は1重圏線内に不明銘。透明釉はやや白濁。	やや焼成不良。
第136図	2	在地系土器 皿	覆土 1/8	(9.6)	-	-	橙	口縁部は肥厚。内面の器表は黒変。黒変は油煙によるものか。	
第136図	3	陶器 甗	覆土 1/2	-	(21.2)	-	灰白	全面に柿釉施釉後に高台端部から高台内中央付近の釉を拭う。底部内面に目痕? 2カ所残る。	4、遺構外84と同一個体か。
第136図	4	陶器 甗	覆土 1/4	-	(21.1)	-	灰白	全面に柿釉施釉後に高台端部から高台内中央付近の釉を拭う。底部内面に目痕? 2カ所残る。	3、遺構外84と同一個体か。

6号土坑出土陶磁器・瓦

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第136図	1	肥前磁器 皿	覆土 1/6	-	(7.6)	-	灰白	底部内面の五弁花はコンニャク印判。高台内は1重圏線内に不明銘。	波佐見系。
第136図	2	肥前磁器 端反碗	覆土 破片	-	-	-	白	外面は素描による染付。口縁部内面は簡略化した雷文帯。底部周縁は1重圏線。	
第136図	3	瓦 十能瓦	覆土 破片	縦-	横-	-	オリ ブ黒・ 灰白	断面黒色、器表付近灰白、器表オリーブ黒色。下面は型肌痕残る。	

遺物観察表

第76表 遺物観察表(26)

15号土坑出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第137図 PL.95	1	銅銭	祥符通寶	覆土	完形	23.9、23.56	1.30 ~ 1.56	2.94	北宋、大中祥符元年(1008)初鑄。
第137図 PL.95	2	銅銭	紹聖元寶	覆土	完形	24.05、24.06	1.07 ~ 1.12	3.06	北宋、紹聖元年(1094)初鑄。篆書。
第137図 PL.95	3	銅銭	洪武通寶	覆土	完形	24.62、24.65	0.97 ~ 1.22	3.51	背「浙」、鑄造地浙江省杭州。明、洪武元年(1368)初鑄。

17号土坑出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第138図	1	在地系土器 Ⅲ	覆土 1/7	(7.5)	(4.0)	1.6	浅黄橙	口縁部は内湾して肥厚。轆轤整形。底部回転糸切無調整。	

62号土坑出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第143図	1	在地系土器 Ⅲ	覆土 2/3	-	(6.4)	-	橙	轆轤整形。底部外面回転糸切痕不明瞭。	中世か。

63号土坑出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第144図	1	龍泉窯系青磁 碗	覆土 体部片	-	-	-	灰オ リーブ	外面に篋による縦線。残存部に鑄は認められない。	中世。

63号土坑出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第144図 PL.95	2	火打石 剥片	覆土	2.3	2.0	4.2	背面側の稜の敲打痕が著しい。	石英

65号土坑出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第144図 PL.95	1	鉄器	釘	覆土	頭部側片	[3.7]	0.8	0.5	[4.7]	頭部0.8×0.7cm、錆化が激しい。
第144図 PL.95	2	鉄器	鋸?	覆土	一部片	[10.5]	0.6	0.6	[21.3]	錆化が進んでいる。

80号土坑出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第146図 PL.95	1	五輪塔 空風輪	覆土	29.1	15.6	8750	空輪部下端・風輪部上端に最大径を有する。括れ部は丁寧に磨き整形、空・風輪部は細かな斜位工具痕が全面に残る。側面形状は、若干扁平化の兆し。	粗粒輝石安山岩

81号土坑出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第143図 PL.95	1	在地系土器 Ⅲ	覆土 口縁部 1/6、底部完	(10.3)	4.7	2.9	にぶい 橙	体部下位は外湾し、口縁部はやや内湾。底部左回転糸切無調整。底部内面は指撫で。底部外面に厚痕による段差。	中世。

81号土坑出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第143図 PL.95	2	銅銭	皇宋通寶	覆土	完形	24.14、23.97	1.03 ~ 1.19	2.11	北宋、寶元元年(1038)初鑄。真書。

83号土坑出土土器・陶磁器・瓦

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第147図 PL.96	1	肥前磁器 碗	覆土 口縁部1/3欠	9.9	4.1	5.2~ 5.5	灰白	外面の3方にコンニャク印判による花卉文。地面の表現は手描き。口縁部外面は1重圏線間に鋸歯状文。高台内に不明銘(大明年製崩れ銘か)。高台外面のほとんど高台端部は無釉。	波佐見系。
第147図 PL.96	2	肥前磁器 碗	覆土 口縁部1/4欠	9.2	4.3	5.2	灰白	外面は簡略化した2重網目文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第147図	3	肥前磁器 小碗	覆土 1/3	(8.0)	(3.0)	3.3	灰白	外面に簡略化した植物文。	波佐見系。
第147図 PL.96	4	京・信楽系陶器 丸碗	覆土 1/2	(8.8)	(3.8)	5.4	灰白	底部の器壁は薄く、口縁部に向かうに従い肥厚。内面から高台外面付近まで灰釉。細かい貫入が入る。残存部の1方に鉄絵具で簡略化した文様を手描き。削り出し高台。	
第147図 PL.96	5	瀬戸・美濃陶器? 上絵碗	覆土 口縁部1/2欠	(9.1)	3.3	5.7	淡黄	内面から高台脇に灰釉。細かい貫入が入る。外面に大きく枝を描き、花とつぼみ状の絵を描く。花のみ濃い赤が残るが、他は剥がれており、色調不明。削り出し高台。	
第147図 PL.96	6	瀬戸・美濃陶器 腰鑄碗	覆土 ほぼ完形	9.3	4.9	5.7~ 6.0	灰白	外面の口縁部下に螺旋状の凹線。内面から凹線上に灰釉、凹線から高台内に錆色の鉄釉。高台端部は無釉。高台はやや幅広。灰釉に貫入が入る。	

第77表 遺物観察表(27)

83号土坑出土土器・陶磁器・瓦(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第147図 PL.96	7	瀬戸・美濃陶器 腰鍔碗	覆土 口縁部1/2、 底部3/4	(9.5)	4.7	6.0	灰白	口縁部外面下に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉、 外面口縁部以下に鉄釉。高台端部のみ無釉。灰釉に貫入が 入る。	
第147図 PL.96	8	瀬戸・美濃陶器 腰鍔碗	覆土 口縁部1/8、 底部3/4	(9.2)	4.6	5.9	灰白	高台径やや大きい。腰は張り、体部の湾曲がきつい。外面口 縁部下に螺旋状押線。内面から凹線直上に灰釉、凹線直上以 下から高台内に鍔釉。高台端部のみ無釉。灰釉に貫入が入る。	
第147図	9	瀬戸・美濃陶器 小碗	覆土 口縁部1/3欠	(8.0)	3.6	4.7	淡黄	器高はやや高い。内面から高台脇に灰釉。貫入が入る。	
第147図	10	肥前磁器 皿	覆土 1/3	(14.3)	(9.0)	3.4	灰	内面は網目状文と植物文。外面は唐草文。高台内は1重圈 線。胎土は十分に磁化しておらず焼成不良。	波佐見系。焼成 不良。5号井戸 4と同一個体か。
第147図 PL.96	11	美濃陶器 折縁輪壳皿	覆土 口縁部1/4欠	16.0	6.0	4.5～ 4.8	浅黄	口縁部は外反し、端部は肥厚する。口縁部内面は稜をなす。 内面から体部外面下位に灰釉を施釉後に、底部内面の釉を 輪状に掻き取る。釉に貫入が入る。貼り付け高台。	
第147図 PL.96	12	美濃陶器 摺絵皿	覆土 口縁部1/4欠	11.4	5.3	2.5～ 2.8	淡黄	底部内面に呉須を用いた摺り絵で花卉文。底部内面周縁に 浅い凹線。高台端部を除き灰釉。貫入が入る。いわゆる御 深井。	
第147図	13	美濃陶器 折縁輪壳皿	覆土 底部	-	5.7	-	淡黄	内面から体部外面に灰釉を施釉後に底部の釉を輪状に掻き 取る。	
第147図	14	美濃陶器 摺絵皿	覆土 1/2	-	4.9	-	淡黄	底部内面に呉須を用いた摺り絵で花卉文。文様はシャープ で明瞭。底部内面周縁は低い段を有する。高台端部を除き 灰釉。貫入が入る。いわゆる御深井。	
第148図	15	志戸呂陶器? 德利	覆土 頸部	-	-	-	褐灰	頸部内面から外面に黒色の鉄釉。	
第148図	16	在地系土器 皿	覆土 1/5	10.2	(6.4)	2.2	にぶい 橙	底部右回転糸切無調整か。	
第148図 PL.96	17	在地系土器 皿	覆土 口縁部1/4、 底部1/2	(9.0)	(5.4)	2.2	橙	底部回転糸切無調整。轆轤回転方向不明。	
第148図 PL.96	18	在地系土器 火鉢	覆土 1/4	(31.0)	-	-	橙	口縁部外面から内面は回転横撫で。口縁部外面は凹線上に 窪み、下部は明瞭な稜をなす。体部外面に1条の断面「V」 字状の凹線。	
第148図	19	在地系土器 焙烙	覆土 1/4	(38.0)	-	-	浅黄橙	器表は黒色。外面の体部下端は篋削り。外面の体部下位は 窪む。	
第148図 PL.96	20	在地系土器 焙烙	覆土 1/4	(38.0)	(34.0)	5.3	淡黄	断面から器表付近浅黄色、器表灰色から黒色。底部外面か ら体部外面下位に型肌痕残る。体部外面下端は篋削り。口 縁部は回転横撫で。内面に幅広の耳を貼り付け。耳の下部 は底部内面に貼り付け。	
第148図 PL.96	21	瓦 丸瓦	覆土 2/3	縦31.0	横-	2.2	暗灰	断面は暗灰色、器表付近から器表は灰白色。内面に粗い布 痕。外面中央に焼成後の直線状切り目入る。	
第148図	22	瓦 平瓦	覆土 破片	縦-	横-	1.6	灰白	断面中央は黒色、断面中央以外は灰白色。外面から側面に 砂状痕残る。側縁に湾曲は認められない。横方向の欠損部 表裏面に直線状の切り目が認められ、切り目に沿って折り 取っている。	
第148図	23	瓦 十能瓦	覆土 破片	縦-	横-	1.4	暗灰	断面は暗灰色、器表付近から器表は灰白色。側縁の湾曲が きつい。欠損部付近の側縁端部は篋削りにより平坦となる。	

83号土坑出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第149図 PL.96	24	銅製品	煙管吸口	覆土	両端欠損					
第149図 PL.96	25	鉄器	釘	覆土	先端部欠損	[5.4]	0.3	0.3	[3.6]	頭部0.7×0.4cm、錆化が進んでいる。
第149図 PL.96	26	鉄器	釘	覆土	先端部欠損	[3.0]	0.3	0.3	(1.9)	頭部0.9×0.5cm、錆化が進んでいる。
第149図 PL.96	27	鉄器	釘	覆土	先端部側欠損	[3.7]	0.6	0.5	(3.5)	頭部1.3×0.4cm、錆化が激しい。
第149図 PL.96	28	鉄器	釘	覆土	完形	4.2	0.5	0.3	1.7	頭部0.9×0.9cm、錆化が激しい。
第149図 PL.96	29	鉄器	釘	覆土	完形	3.8	0.3	0.3	1.5	頭部0.9×0.4cm、錆化が進んでいる。
第149図 PL.96	30	鉄器	釘	覆土	先端部欠損	[4.7]	0.5	0.4	[3.6]	頭部1.3×0.5cm、錆化が激しい。

1号集石出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第152図 PL.96	1	肥前磁器 碗	覆土 1/3	(10.0)	4.2	4.8	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。呉須の発色は比較的 良好。	波佐見系。
第152図	2	肥前磁器 碗	覆土 1/6	(10.0)	-	-	灰白	外面は雪輪梅樹文か。	波佐見系。
第152図	3	京・信楽系陶器 碗	覆土 底部	-	2.9	-	灰白	高台はシャープな削り出し。内面から高台脇に灰釉。細かい 貫入がはいる。	

遺物観察表

第78表 遺物観察表(28)

1号集石出土陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第152図	4	美濃陶器 皿	覆土 1/8	(20.8)	(10.0)	4.8	灰白	いわゆる御深井の皿。底部内面は鉄絵具による型紙摺り。文様はやや薄い。高台を除き灰釉。粗い貫入がはいる。内面の底部周縁に低い段差。	
第152図	5	瀬戸・美濃陶器 皿	覆土 1/6	24.2	12.0	5.3	灰	口縁部を輪花に作るか数は不明。口縁部内面に細い12条の横線。全面鉄釉施釉後に高台脇以下を拭う。釉厚は薄めで錆釉状。	

13号集石出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第153図	1	瀬戸・美濃陶器 徳利	覆土 口縁部	3.0	-	-	灰白	肩部外面に横線。頸部内面から外面に鉛釉。頸部から肩部外面に灰釉少しかかる。	
第153図	2	堺・明石陶器 すり鉢	覆土 1/5	-	(15.0)	-	橙	体部外面は回転篋削り。体部内面のすり目は底部周縁に及ぶ。内面は使用により摩滅。無釉。	
第153図	3	在地系土器 火鉢	覆土 1/8	(30.0)	-	-	浅黄橙	口縁端部は内側に小さく突き出る。口縁端部外面は凹線状に窪み、肥厚するように見える。外面口縁部下に凹線。口縁部内面から口縁端部上面の内側半分ほどまで煤が付着したように器表が黒変する。	4と同一個体の可能性高い。口縁部内面の器表黒変。
第153図	4	在地系土器 火鉢	覆土 1/10	(28.9)	-	-	浅黄橙	口縁端部は内側に小さく突き出る。口縁端部外面は凹線状に窪み、肥厚するように見える。外面口縁部下に凹線。口縁部内面から口縁端部上面の内側半分ほどまで煤が付着したように器表が黒変する。	3と同一個体の可能性高い。口縁部内面の器表黒変。
第153図	5	在地系土器 片口鉢	覆土 体部片	-	-	-	灰・にぶ い黄橙	外面の器表灰色。内面の器表は使用により摩滅。	中世。

15号集石出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第154図 PL.96	1	志戸呂陶器 灯火皿	覆土 口縁部 1/2欠	(7.9)	4.5	1.5	赤灰・に ぶい黄褐	断面にぶい黄褐色、無釉部の器表赤灰色。口縁部は小さく外反。底部右回転糸切無調整。内面から底部付近に錆釉。	口縁部に油煙厚く付着。
第154図	2	製作地不詳陶器 蓋	覆土 1/4	-	(8.0)	-	灰	天井部外面に灰釉。細かい貫入が入る。つまみは付け根から欠損。天井部内面中央は窪む。	
第154図 PL.96	3	在地系土器 皿	覆土 口縁部 1/6欠	8.8	5.0	2.2	浅黄橙	体部は緩く内湾。底部右回転糸切無調整。体部内面から体部外面と底部内外面の一部に油煙付着。	油煙明瞭に付着。
第154図	4	在地系土器 皿	覆土 1/7	(9.4)	-	-	にぶい 黄橙	口縁部は肥厚。	
第154図 PL.96	5	在地系土器 鉢	覆土 1/2	(32.8)	(25.9)	7.9	黒・ 灰白	断面中央黒色、器表付近灰白色、器表黒色。底部外面に型肌痕残る。体部外面中位以下は篋削り。口縁部外面は回転横撫で。口縁端部上面から内面は磨き状の丁寧な撫で調整。	
第154図 PL.96	6	在地系土器 鍋	覆土 1/4	(39.1)	(21.1)	10.8	黒・灰 白・灰	断面灰色、器表付近灰白色、内面器表灰色。外面の器表は煤付着し黒色。口縁部は小さく外反。口縁端部上面は平坦。	
第154図	7	在地系土器 火鉢	覆土 体部片	-	-	-	にぶい 橙	口縁部付近は肥厚。口縁部外面の凹線間は型か回転施文具による地文施文後に篋により再度施文。	

15号集石出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第154図 PL.96	8	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	23.51、23.08	1.06 ~ 1.16	2.12	新寛永。

16号集石出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第156図	1	肥前磁器 碗	覆土 底部	-	3.7	-	灰白	体部外面に2重網目文、体部内面に1重網目文。高台外面2重圈線。見込みは2重圈線内に花文。高台内簡略化した濁福字銘。	波佐見系。
第156図	2	肥前磁器 碗	覆土 底部	-	3.8	-	灰白	体部外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。高台外面に2重圈線。	波佐見系。
第156図	3	肥前磁器 碗	覆土 1/2	-	4.2	-	灰白	高台脇に1重圈線。高台外面に2重圈線。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	波佐見系。
第156図	4	肥前磁器 筒形碗	覆土 1/4	(8.0)	-	-	灰白	体部外面、格子状の地文に菊花文。高台脇に1重圈線。口縁部内面に2重圈線。内面の底部と体部境に1重圈線。	
第156図	5	肥前磁器? 小碗	覆土 1/2	-	(3.2)	-	灰白	胎土は磁化不十分で釉は白濁。体部外面はコンニャク印判。高台脇から高台外面に2条の圈線。高台の胎土は浅黄橙色に発色。	焼成不良。
第156図	6	瀬戸・美濃陶器 丸碗	覆土 底部	-	5.3	-	灰	体部径が大きい。残存部の外面は回転篋削り。内面から高台脇に灰釉。	
第156図 PL.97	7	美濃陶器 鎧茶碗	覆土 1/5	(7.0)	(3.4)	6.1	灰白	口縁部は小さく外反。高台は低く、やや幅広。高台脇の外面に5条の浅い凹線。体部外面に回転施文具により施文。内面から口縁部外面に鉄釉。口縁部外面から高台内に灰釉。高台端部のみ無釉。	
第156図 PL.97	8	製作地不詳磁器 小碗	覆土 口縁部1/4、 底部完	(7.5)	3.3	3.9	灰白	胎土は磁化不十分で釉は白濁が著しい。体部外面中位の文様はほとんど見えない。口縁部外面に文様が一部見える。高台脇から高台外面に2条の圈線。	
第156図	9	肥前磁器 皿	覆土 1/3	(14.2)	(8.0)	2.8	灰白	残存部の外面は無文。内面の2重圈線上に花と格子状文。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	

第79表 遺物観察表(29)
16号集石出土土器・陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第156図	10	美濃陶器 摺絵皿	覆土 1/2	-	(7.7)	-	灰白	いわゆる御深井。内面に鉄絵具による紙摺りで施文。内面から高台内に灰釉。高台端部のみ無釉。貫入がはいる。見込みに製作時のヒビが2本認められるが釉によって塞がる。	
第156図	11	美濃陶器 折縁輪秀皿	覆土 口縁部片	(19.8)	-	-	灰白	口縁端部は下方に折り返す。外面口縁部以下は回転篋削り。内外面に灰釉。貫入がはいる。	
第156図	12	美濃陶器 折縁輪秀皿	覆土 底部	-	6.7	-	浅黄橙	内面から高台脇に灰釉施釉後、見込みの釉を輪状に掻き取る。見込みに焼成時にできた貫通するヒビが1本認められる。	不良品。
第156図	13	肥前磁器 青磁香炉	覆土 1/4	(6.0)	-	-	灰白	口縁端部が内面小さく突き出る。肩部はあまり張らない。口縁部内面から外面に青磁釉。体部内面下端付近に釉が斑状に付着。	
第156図	14	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	覆土 体部片	-	(10.0)	-	灰白	体部外面に鉛釉、上部から失透性の釉がかかる。内面と底部外面は無釉。	
第156図	15	瀬戸・美濃陶器 灯火皿	覆土 1/2	(8.0)	(4.4)	-	浅黄橙	口縁部外面の轆轤目により、口縁部が外反するように見える。外面の口縁部以下は回転篋削り。錆釉施釉後、体部外面以下の釉を拭う。	
第156図 PL.97	16	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 完形	8.7	4.0	2.8	にぶい 橙	外面口縁部以下は回転篋削り。底部内外面は丸みを帯び、安定が悪い。受け部の1カ所をアーチ状に扶る。内面から口縁部外面に錆釉。	
第156図 PL.97	17	志戸呂陶器 灯火皿	覆土 1/4	(7.7)	(4.2)	1.8	橙	体部内湾し、外面は緩い稜をなす。内面から底部外面周縁に錆釉。底部右回転糸切無調整。口縁端部の一部に油煙付着。	
第156図	18	志戸呂陶器 灯火皿	覆土 1/4	(8.2)	(4.8)	1.7	灰	内面から口縁端部外面に錆釉。底部回転糸切無調整。	
第156図	19	在地系土器 皿	覆土 口縁部1/8、 底部1/4	(10.4)	(6.8)	2.1	にぶい 橙	底部左回転糸切無調整。口縁部丸みを帯びて内湾。	
第156図	20	在地系土器 皿	覆土 1/4	(9.4)	(6.0)	2.1	にぶい 橙	右回転轆轤調整か。底部内面の轆轤目は顕著。底部外面は回転糸切無調整。	
第156図 PL.97	21	在地系土器 皿	覆土 1/3	(9.8)	(7.4)	2.0	橙	体部内湾し、口縁端部は僅かに肥厚して丸みを帯びる。底部左回転糸切無調整。	
第156図	22	在地系土器 皿	覆土 1/9	(9.8)	(6.0)	1.6	にぶい 黄橙	轆轤調整。回転方向は不明。底部回転糸切無調整。	
第156図	23	在地系土器 皿	覆土 1/4	-	(4.8)	-	にぶい 橙	底部左回転糸切無調整。	
第156図	24	在地系土器 皿	覆土 1/8	(9.2)	(6.0)	1.3	橙	体部開く。轆轤調整で回転方向不明。底部回転糸切無調整。	
第156図	25	在地系土器 皿	覆土 1/8	(9.0)	(5.0)	1.7	橙	口縁端部は肥厚して内湾。轆轤調整で回転方向不明。底部回転糸切無調整。	
第156図 PL.97	26	在地系土器 皿	覆土 底部片	-	-	-	灰白	断面から内面器表灰白色、外面器表から器表付近橙色。底部回転糸切無調整。底部2カ所に焼成後の穿孔残る。	
第157図	27	瀬戸陶器 すり鉢	覆土 1/4	(32.0)	(12.0)	11.1	灰白	錆釉施釉後に体部外面下位以下の釉を拭う。底部回転糸切り無調整。底部内面から体部内面下位は使用により釉が摩滅。	
第157図	28	堺・明石陶器 すり鉢	覆土 口縁部片	-	-	-	橙	断面橙色、器表付近から器表にぶい赤褐色。口縁部は縁帯をなし、内面は突出する。外面口縁部以下は回転篋削り。内外面無釉。	
第157図	29	在地系土器 鍋	覆土 口縁部片	-	-	-	灰白	器表は暗灰色。外面の器表の一部に煤付着。口縁端部は外反し、内面に明瞭な稜をなす。内面の稜内には小さい段差。口縁端部外面はやや丸みを帯びる。	江戸時代。
第157図	30	在地系土器 焙烙	覆土 1/10	(37.0)	(35.0)	5.4	灰白	断面灰白色、器表付近から器表黒色。底部外面に皺状の型肌。体部外面下位は篋削り。	
第157図	31	在地系土器 釜輪	覆土 1/8	(38.0)	(42.4)	3.5	黒	断面黒色、器表付近浅黄橙色、器表暗灰色から黒色。底面は平坦。	

17号集石出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第159図 PL.97	1	肥前磁器 碗	覆土 口縁部一部欠	9.7	4.3	5.0	白	雪輪梅樹文。高台内不明銘。高台径やや大きい。	波佐見系。
第159図 PL.97	2	京・信楽系陶器 碗	覆土 1/3	(9.8)	3.6	4.5	浅黄橙	体部は開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面に凹線3条。口縁部外面に鉄絵具と呉須による樹木状の文様。内面から高台脇に透明釉。細かい貫入が入る。削り出し高台。底部内面に目痕2カ所。	
第159図 PL.97	3	瀬戸・美濃陶器 拳骨茶碗	覆土 1/4	(10.4)	(4.6)	6.7	灰白	蛇の目高台。体部下位は広がり、外面回転篋削り。体部上位から口縁部は外湾。体部上位を部分的に窪ませる。内面から高台脇と高台内は鉄釉。体部外面部分的に長石釉を装飾的に施釉。	
第159図	4	瀬戸・美濃陶器 拳骨茶碗	覆土 1/3	10.2	-	-	灰白	蛇の目高台。体部下位は広がり、外面回転篋削り。体部上位から口縁部は外湾。内面から高台脇は鉄釉。体部外面部分的に長石釉を装飾的に施釉。	
第159図	5	瀬戸・美濃陶器 せんじ碗	覆土 1/3	10.4	-	-	灰白	灰釉と鉄釉の左右掛け分け。灰釉部分に粗い貫入がはいる。	
第159図 PL.97	6	瀬戸・美濃陶器 小碗	覆土 2/3	6.8	7.8	3.9	灰白	口縁部肥厚。外面口縁部下やや窪む。内面から高台脇に灰釉。貫入がはいる。	
第159図	7	瀬戸・美濃陶器 皿	覆土 1/4	11.6	-	-	灰白	内面から高台脇に灰釉。細かい貫入がはいる。高台付近以下欠損。	

遺物観察表

第80表 遺物観察表(30)
17号集石出土土器・陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第159図	8	瀬戸・美濃陶器 折縁輪充皿	覆土 1/3	-	5.8	-	灰白	体部内面から体部外面に灰釉。貫入がはいる。高台やや高い。	
第159図	9	瀬戸・美濃陶器? 練り鉢	覆土 1/6	25.0	-	-	褐灰	口縁端部内湾し、端部内面は尖る。外面口縁部以下回転篋削り。内外面灰釉。	
第159図	10	瀬戸・美濃陶器 汁次か	覆土 1/3	9.4	-	-	灰白	口縁端部上面から外面灰釉。貫入がはいる。体部外面鉄絵具による型紙摺り。体部外面に取っ手と考えられる貼り付け部が僅かに残る。	
第159図	11	美濃陶器 徳利	覆土 口縁部片	2.7	-	-	浅黄橙	口縁部外面低い段を有する。口縁部内面から外面灰釉。	
第159図	12	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	覆土 1/3	6.0	-	-	灰白	口縁部肥厚して上面内傾し、端部内面やや突き出す。口縁部内面から外面灰釉。貫入がはいる。	
第159図	13	美濃陶器 灯火具	覆土 1/7	(10.8)	-	-	灰白	口縁部上方につまみ上げる。内面から体部外面灰釉。受け台部分欠損。	
第159図 PL.97	14	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 完形	9.5	4.8	2.3	橙	受け部の1カ所をアーチ状に削り抜く。内面から体部外面に錆釉。体部外面下端から底部外面右回転篋削り。	
第159図 PL.97	15	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 完形	9.2	4.6	2.1	不明	受け部の1カ所をアーチ状に削り抜く。全面に油煙付着し、施釉範囲不明。	
第159図 PL.97	16	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 完形	10.3	5.5	2.5	浅黄橙	受け部の1カ所をアーチ状に削り抜く。内面から体部外面に錆釉。体部外縁下半から底部外面右回転篋削り。	
第159図 PL.97	17	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 口縁部一部欠	10.7	5.7	2.3	橙	受け部の相対する2カ所をアーチ状に削り抜く。外面口縁部以下回転篋削り。内面から体部外面に錆釉。受け部上半に油煙厚く付着。	
第159図 PL.97	18	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 口縁部 1/2欠	9.4	3.8	2.3	灰褐	受け部の1カ所をアーチ状に削り抜く。外面講演部以下回転篋削り。内面から口縁部外面に錆釉。	
第159図 PL.97	19	志戸呂陶器 灯火受皿	覆土 1/2	10.9	4.5	2.5	褐灰	受け部のアーチ状削り抜きが1カ所残存するが、2カ所か否かは欠損のため不明。外面体部下端以下回転篋削り。内面から口縁部外面に錆釉。	
第159図 PL.97	20	在地系土器 皿	覆土 口縁部 一部欠	10.4	6.8	2.2	浅黄橙	体部内湾。底部左回転糸切無調整。口縁部全面と底部内面の一部に油煙厚く付着。	
第159図 PL.97	21	在地系土器 皿	覆土 口縁部 1/2欠	9.4	6.2	1.8	橙	体部内湾。底部内面螺旋状の轆轤目顕著。底部左回転糸切無調整。口縁部から底部内面に油煙薄く付着。	
第159図 PL.97	22	在地系土器 皿	覆土 口縁部 1/2欠	10.2	7.0	2.2	明褐灰	口縁部内湾。底部内面螺旋状の轆轤目。左回転轆轤調整。	
第159図	23	在地系土器 皿	覆土 1/4	(9.6)	(6.0)	2.0	浅黄橙	左回転轆轤調整。回転糸切無調整。	江戸時代。
第159図	24	在地系土器 皿	覆土 1/4	(9.6)	(6.1)	2.0	黒～に ぶい橙	左回転轆轤調整。回転糸切無調整。口縁端部上面の一部に油煙付着。	江戸時代。
第159図	25	在地系土器 皿	覆土 1/4	(9.4)	(6.8)	2.0	灰白	口縁部内湾。左回転轆轤調整。回転糸切無調整。	江戸時代。
第159図 PL.97	26	在地系土器 鉢	覆土 1/2	(43.9)	(34.0)	13.3	暗灰	断面暗灰色、器表付近灰白色、器表黒色。底部外面から体部外面下位に型肌痕残る。体部外面下端は篋削り。体部外面は撫で。口縁部外面は回転横撫で。内面から口縁端部上面は磨きか丁寧な撫で、やや光沢を有する。	
第160図 PL.97	27	在地系土器 鉢か	覆土 1/2	(28.6)	(21.8)	8.3	褐灰・ にぶい 橙	断面褐灰色、器表付近にぶい橙色、器表黒色。器表は部分的に摩滅。底部外面に型肌痕残る。体部外面下半は篋削りの後、粗い磨き。体部外面上位は粗い磨き。口縁部外面は回転横撫で。内面は磨きで光沢を有する。残存部に脚は認められない。	
第160図	28	在地系土器 鉢	覆土 口縁部片	-	-	-	にぶい 黄橙・ 黒	断面から内面器表にぶい黄橙色、外面器表は煤付着し黒色。口縁部は屈曲して外反。口縁端部上面は平坦。	
第160図	29	在地系土器 鍋	覆土 1/7	(39.0)	(23.8)	12.3	灰・ 灰黄	断面灰色、器表付近から内面器表灰黄色。外面の器表は煤付着。口縁部は丁寧な回転横撫で。口縁部は外反し、内面には明瞭な稜をなす。	
第160図	30	在地系土器 火消壺か	覆土 下半部	-	18.0	-	浅黄	断面暗灰色、器表付近浅黄色、器表灰黄色から黒色。底部外面から体部外面下位に型肌痕残る。体部外面下端は篋削り。肩部外面に波状文。底部に脚は付かない。	

18号集石出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第161図	1	在地系土器 皿	覆土 1/4	(9.7)	(6.6)	2.5	明黄褐	体部下位は外反し、口縁部は直線的に延びる。体部外面下端は篋削り。底部外面は篋削りか。轆轤整形で回転方向不明。	
第161図 PL.97	2	在地系土器 皿	覆土 一部欠	9.8	6.6	1.6～ 1.9	橙・に ぶい 黄橙	内面は底部と体部の境不明瞭。底部左回転糸切無調整。	
第161図 PL.97	3	在地系土器 皿	覆土 1/2	(7.3)	4.0	1.4	にぶい 橙	小型で器壁やや薄い。底部左回転糸切無調整。口縁端部から口縁部内面に油煙付着。	油煙付着。
第161図 PL.97	4	在地系土器 皿	覆土 底部	-	3.8	-	橙	器壁薄く小型。底部左回転糸切無調整。体部外面と底部内面に墨書。	墨書。
第161図	5	在地系土器 皿	覆土 底部	-	4.0	-	橙	器壁薄く小型。底部左回転糸切無調整。	

第81表 遺物観察表(31)

19号集石出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第162図	1	肥前磁器 碗	覆土 体部一 部、底部1/2	-	4.2	-	灰白	雪輪梅樹文。高台内1重圏線内に不明銘。	
第162図 PL.97	2	瀬戸・美濃陶器 折縁輪奘皿	覆土 口縁部 1/8、底部3/4	(21.0)	8.2	(6.8)	灰白	内面から高台脇に灰釉施釉後、底部内面の釉を輪状に掻き取る。貫入がはいる。貼付高台。外面の口縁部以下回転鋭削り。	
第162図 PL.97	3	瀬戸・美濃陶器 香炉か	覆土 口縁部1/3 欠	12.0	6.0	6.0	黄橙	口縁部外反し、端部は肥厚。端部は内傾し、上面はやや窪む。端部内外面は丸みを帯びて小さく突出。底部内面に目痕2カ所。内面から高台脇に鉛釉。外面の口縁部以下は回転鋭削り。	
第162図	4	搬入系土器？ 有印土製円盤	覆土 1/2	縦(6.9)	横(6.4)	1.9	黄橙～ 橙	胎土は夾雑物少なく緻密。表裏の器表には「キラ」が付着しており、型作りの後に側面の調整を行っていると考えられる。穿孔は押印のある側から行う。押印は円形と角形の2種で判読不可能。	江戸時代か。
第162図	5	在地系土器 皿	覆土 1/3	(8.6)	(6.0)	2.0	橙	体部から口縁部直線的に開く。底部左回転糸切無調整。口縁部に油煙付着。	中世以降。
第162図 PL.97	6	在地系土器 七輪	覆土 1/2	(23.6)	-	(10.5)	灰	断面灰色、器表付近から器表浅黄橙色。外面は横位磨き。内面上位に鍋受け突起の貼付痕1カ所残る。括れ部内面には「さな」受け突起が2カ所残る。上位には円孔が2カ所残る。円孔や突起は3カ所と考えられる。	

19号集石出土金属製品

挿図番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第162図 PL.97	7	銅製品	煙管吸口	覆土	口付欠損					羅字挿入部と口付き境はゆるい稜をなす。

19号集石出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第162図 PL.97	8	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	22.40、22.28	0.88～1.05	1.91	新寛永。背「足」カ。

1号井戸出土土器・陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第163図 PL.98	1	肥前磁器 碗	覆土 2/3	(11.7)	4.7	6.0	白	大振りの碗。外面に大小の丸文。見込みの五弁花はコンニャク印判。高台内は1重圏線内に不明銘。呉須の発色は薄い。	波佐見系。
第163図 PL.98	2	肥前磁器 碗	覆土 口縁部 1/4、底部完	10.0	3.8	5.0	白	外面は2重網目文、内面は1重網目文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第163図 PL.98	3	肥前磁器 碗	覆土 口縁部 1/6、底部1/2	(9.8)	4.0	5.2	灰白	外面は2重網目文、内面は1重簡略化した1重網目文。見込みに花状文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第163図	4	肥前磁器 碗	覆土 1/4	(9.8)	(3.8)	4.4	白	外面は二重網目文、内面は1重網目文。底部内面は2重圏線内に花状文。高台内に不明銘。器高は低く、器壁はやや薄い。	
第164図	5	肥前磁器 碗	覆土 口縁部 一部、底部1/2	(9.1)	(3.2)	4.0	灰白	外面は2重網目文、内面は1重網目文。底部内面は2重圏線内に花状文。	
第164図	6	肥前磁器 碗	覆土 1/4	-	(3.6)	-	灰白	外面は2重網目文、内面は1重網目文。	波佐見系。
第164図 PL.98	7	肥前磁器 碗	覆土 口縁部 3/4欠	(9.3)	3.8	5.2	白	外面に1重網目文。高台は低い。	
第164図 PL.98	8	肥前磁器 碗	覆土 口縁部 1/2欠	(9.5)	3.5	5.6	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第164図	9	肥前磁器 碗	覆土 1/4	(9.8)	-	-	灰白	外面に雪輪梅樹文。	波佐見系。
第164図	10	肥前磁器 碗	覆土 底部	-	4.0	-	灰白	外面は雪輪梅樹文か。高台内不明銘。	波佐見系。
第164図	11	肥前磁器 碗	覆土 底部	-	3.8	-	灰白	外面は雪輪梅樹文か。高台内不明銘。	波佐見系。
第164図	12	肥前磁器 碗	覆土 1/2	-	4.0	-	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。高台内周縁から高台内面は焼成不良によりやや明赤灰色を呈する。	焼成不良。
第164図	13	肥前磁器 碗	覆土 1/4	(8.6)	(3.6)	4.7	灰白	残存部外面は唐草文。	波佐見系。
第164図	14	肥前磁器 碗	覆土 1/3	(9.0)	(3.8)	4.7	白	外面は幅広の直線文と細線の井桁状の文様。口縁部内面に2重圏線。底部内面周縁に1重圏線。	
第164図	15	肥前磁器 碗	覆土 1/4	(8.4)	-	-	白	外面は縦線の地文内に菊花文。口縁部内面は四方禪文。	
第164図 PL.98	16	肥前磁器 丸碗	覆土 1/4	(9.3)	(3.0)	5.3	灰白	外面残存部は雪持ち竹文。孟宗譚か。口縁部内面と底部内面周縁に2重圏線。見込みに簡略化した五弁花。	
第164図	17	肥前磁器 碗	覆土 底部	-	4.4	-	白	外面染付。透明釉はやや青みがかかる。	
第164図	18	肥前磁器 碗	覆土 1/3	-	(4.5)	-	白	底部内面を蛇ノ目釉剥ぎ。高台外面は2重圏線、高台脇は1重圏線。	
第164図 PL.98	19	肥前磁器 小碗	覆土 口縁部 1/2欠	8.4	2.8	4.1	白	雪輪梅樹文。高台径小さい。釉はやや白濁。	焼成不良。
第164図 PL.98	20	肥前磁器 小碗	覆土 口縁部1/4、 底部完	(9.0)	3.4	3.9	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に小さい不明銘。	波佐見系。

遺物観察表

第82表 遺物観察表(32)
1号井戸出土土器・陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第164図 PL.98	21	肥前磁器 小碗	覆土 口縁2/3欠	(8.0)	3.3	4.2	灰白	外面の一方に花卉文。	波佐見系。
第164図	22	肥前磁器 小碗	覆土 口縁部 一部、底部完	(7.6)	3.2	4.0	灰白	外面染付。胎土は灰色に近く、やや焼成不良。	
第164図	23	肥前磁器 小碗	覆土 1/4	(7.3)	-	-	灰白	口縁部外面に簡略化した文様。	波佐見系。
第164図 PL.98	24	肥前磁器 広東碗	覆土 口縁部一部 欠	10.8	5.4	6.4	白	体部外面に波状文と直線文、列点文。高台外面に2重圏線。口縁部内面に2重圏線。底部周縁に1重圏線。底部内面に格子状文。	波佐見系か。
第164図 PL.98	25	肥前磁器 小広東碗	覆土 1/3	(8.4)	(3.7)	4.5	白	不規則な貫入がはいる。外面に梵字状文。口縁部内面に2重圏線。底部内面は1重圏線内に昆虫状文。	
第164図	26	肥前磁器 筒形碗	覆土 底部	-	4.0	-	灰白	青磁染付。外面は青磁釉。口縁部内面は圏線か。底部内面は2重圏線内に五弁花。五弁花はコンニャク印判。貫入がはいる。	
第164図 PL.98	27	肥前磁器 筒形碗	覆土 ほぼ完形	6.3	3.3	4.9	白	小型の筒形碗。体部外面に染付。高台脇に圏線と簡略化した龍文。口縁部内面に簡略化した四方禪文。底部内面は1重圏線内に簡略化した五弁花。	
第164図	28	肥前磁器 筒形碗	覆土 1/4	(7.0)	-	-	灰白	残存部外面は菊花文。口縁部内面と底部内面周縁は1重圏線。	
第164図	29	肥前磁器か 筒形碗	覆土 1/3	(7.0)	-	-	白	外面に菊花文と格子状文。口縁部内面に四方禪文。底部内面周縁に1重圏線。透明釉の白濁が著しい。	焼成不良。
第164図	30	肥前陶器 碗	覆土 口縁部 一部、底部1/2	(10.0)	(4.4)	6.7	灰	陶胎染付。外面に簡略化した東屋山水文か。貫入がはいる。	
第164図	31	肥前陶器 碗	覆土 1/3	(11.2)	(4.6)	5.8	黄灰	陶胎染付。高台の挟り込みは深い。残存部に染付が一部残る。	
第164図	32	肥前陶器 碗	覆土 底部	-	5.2	-	灰白	陶胎染付。高台径大きい。高台内から高台端部の器表付近は橙色に発色。やや焼成不良。貫入が入る。	やや焼成不良。
第164図	33	京・信楽系陶器 碗	覆土 破片	-	(3.1)	-	灰白	高台脇を水平に削り込む。内面から高台脇の削り部まで透明釉。細かい貫入が入る。残存部は無文。	
第164図	34	瀬戸・美濃磁器 端反碗	覆土 1/4	10.8	-	-	白色	外面は区画線内に植物文。口縁部内面は幅広と細線の1重圏線。体部下位の内面に1重圏線。	
第165図 PL.98	35	瀬戸・美濃磁器? 碗	覆土 口縁部 1/4欠	7.6	3.8	6.7	白	側面図は主文様。裏文様は、二つの蝶状の植物文を小さく描く。	
第165図	36	瀬戸・美濃磁器 碗	覆土 1/4	(7.4)	-	-	白	外面の文様部を細線で描き、後に濃みを入れる。	
第165図 PL.98	37	瀬戸・美濃磁器? 小碗	覆土 口縁部 1/2欠	(6.6)	2.8	4.1	白	外面の2方に人物文、人物文間に不明銘。	
第165図 PL.98	38	瀬戸・美濃陶器 腰鍔碗	覆土 口縁部一部、 底部完	(9.8)	4.0	5.9	灰白	外面の口縁部下に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉、外面の口縁部以下から高台内に鉄釉。高台端部のみ無釉。灰釉に粗い貫入がはいる。	
第165図	39	瀬戸・美濃陶器 腰鍔碗	覆土 1/5	(8.8)	-	-	灰黄	外面の口縁部下に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉、外面体部以下に鉄釉。灰釉に貫入が入る。	
第165図	40	瀬戸・美濃陶器 腰鍔碗	覆土 1/3	(9.0)	-	-	灰白	外面の口縁下に螺旋状の凹線。内面から口縁部に灰釉、体部外面以下に鉄釉。灰釉に貫入がはいる。	
第165図	41	瀬戸・美濃陶器 小碗	覆土 口縁部 一部、底部完	(6.0)	3.1	3.8	灰白	高台やや高い。内面から高台脇に灰釉。	
第165図 PL.98	42	製作地不詳磁器 碗	覆土 1/2	(7.3)	(3.4)	5.8	灰白	外面に丸文。やや焼成不良で器表がオリブ灰色がかかる。	
第165図	43	製作地不詳陶器 湯飲み	覆土 体部1/3、 底部完	-	3.5	-	灰白	灰白色の胎土中に黒色の斑点が多く入り、灰釉が施された器表にも暗赤褐色の斑点として現れる。体部外面は白土筒描きにより施文。	
第165図 PL.98	44	製作地不詳磁器 盃	覆土 口縁部 3/4欠	(6.0)	2.7	2.8	白	器壁薄い。いわゆる卵殻手。底部内面に花卉文、口縁部内面は2重圏線間に凹弧文の染付。残存部外面は無文。	
第165図 PL.98	45	肥前磁器 猪口	覆土 口縁部1/8、 底部1/3	(6.9)	(5.0)	5.6	白	残存部に松と竹文。	
第165図 PL.98	46	肥前磁器 皿	覆土 口縁部一部、 底部1/2	(13.2)	7.6	3.6	灰白	体部外面は1重圏線上に唐草文。高台外面2重圏線。体部内面に植物文。見込みの五弁花はコンニャク印判。高台内の1重圏線内に簡略化した渦福字銘。	波佐見系。
第165図 PL.98	47	肥前磁器 皿	覆土 1/3	13.3	7.5	3.9	灰白	体部外面に唐草文と1重圏線。高台外面に2重圏線。底部内面周縁に2重圏線。口縁部内面に簡略化した文様。高台内に1重圏線。	波佐見系。
第165図 PL.98	48	肥前磁器 皿	覆土 1/2	13.2	6.8	3.3	灰白	外面は無文。内面に簡略化した唐草文。見込みの五弁花はコンニャク印判か。見込みに蛇の目釉剥ぎ。	波佐見系。
第165図 PL.98	49	肥前磁器 皿	覆土 1/4	-	(5.2)	-	白	底部内面に鳳凰文。底部内面に波濤文。体部外面の一部に文様残る。	
第165図 PL.98	50	肥前磁器 皿	覆土 口縁部 1/4、底部完	(11.8)	4.2	3.5	白	外面は無文。口縁部内面2本一単位の曲線文。底部周縁2重圏線。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。	波佐見系。
第165図	51	肥前磁器 皿	覆土 破片	(20.7)	(12.4)	5.2	灰白	内面に染付。外面は唐草文。	
第166図 PL.98	52	肥前陶器 皿	覆土 3/4	-	4.4	-	灰黄	底部内面に鉄絵具による簡略化した山水文。内面から高台脇透明釉。高台内の挟りは深い。	京焼風陶器。

第83表 遺物観察表(33)
1号井戸出土土器・陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第166図	53	美濃陶器 摺絵皿	覆土 底部	-	6.2	-	褐灰	いわゆる御深井。底部内面に鉄絵具による型紙摺り。高台 端部付近を除き灰釉。貫入がはいる。	
第166図 PL.98	54	美濃陶器 摺絵皿	覆土 口縁部 1/3、底部完	16.4	7.8	3.9	灰白	いわゆる御深井。底部内面に鉄絵具による型紙摺り。文様 は薄い。高台端部を除き灰釉。粗い貫入がはいる。	
第166図	55	美濃陶器 折縁輪壳皿	覆土 底部	-	6.8	-	灰白	底部内面灰釉。残存部の内面底部周縁から外面無釉。高台 内に不明墨書。	
第166図	56	瀬戸・美濃陶器 皿	覆土 底部片	-	(9.0)	-	淡黄	高台は基筈底状。内面から体部外面下位に灰釉。細かい貫 入がはいる。底部内面周縁は浅い凹線状に窪む。	
第166図 PL.99	57	瀬戸・美濃陶器 鉢	覆土 口縁部1/2 欠	18.0	6.4	8.1	灰白	口縁部外反し、端部を上方につまみ上げる。口縁部の輪花 は3カ所か。体部内面に銅緑釉2カ所流す。底部内面に目 痕3カ所。外面の体部以下は回転篋削り。内面から高台脇 に黄瀬戸釉。貫入がはいる。高台内に符丁と推定される墨書。	高台内に墨書。
第166図	58	瀬戸・美濃陶器 片口鉢か	覆土 底部	-	6.2	-	淡黄	内面に灰釉。底部内面に1カ所目痕。	
第166図 PL.99	59	肥前磁器 御神酒徳利	覆土 下半部	-	2.4	-	白	外面に簡略化した竹と梅文。	
第166図 PL.99	60	瀬戸・美濃陶器 徳利	覆土 口縁部欠	-	6.2	-	灰白	肩は張らずなで肩。頸部内面から外面に灰釉施釉後、外面 下位以下の釉を拭う。	
第166図 PL.99	61	瀬戸・美濃陶器 徳利	覆土 1/2	-	10.8	-	灰白	内面は轆轤目顕著。体部外面下位は回転篋削り。外面は鉛 釉で体部下端以下は無釉。底部糸切り後、周縁を回転篋削り。	
第166図	62	瀬戸・美濃陶器 甕	覆土 1/4	-	(12.0)	-	橙	高台は「ハ」の字状に広がる。内面に柿釉。	
第166図	63	美濃陶器 筒形香炉	覆土 1/4	(11.0)	-	-	灰白	口縁部を内側に折り曲げる。口縁端部内面は尖る。口縁端部 上面は内傾。体部内面から体部外面下端に灰釉。細かい貫入 がはいる。外面に鉄絵具による型紙摺。いわゆる御深井。	
第166図	64	美濃陶器 筒形香炉	覆土 1/3	-	(9.8)	-	淡黄	外面に鉄絵具による摺り絵。文様は薄く不鮮明。体部外面 に灰釉。細かい貫入がはいる。残存部に1カ所脚を貼り付け。	
第166図	65	美濃陶器 筒形香炉	覆土 1/2	-	(7.8)	-	淡黄	体部外面に灰釉。残存部の高台2カ所を窪ませる。御深井 製品の可能性あり。	
第166図 PL.99	66	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	覆土 口縁部 一部、底部完	(9.0)	5.5	4.4	浅黄	口縁端部は内側に突きだし、端部上面は内傾。口縁部内面 から体部外面に灰釉。輪高台。	
第166図	67	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	覆土 口縁部片	(9.6)	-	-	灰白	口縁端部は内側に肥厚。口縁端部は平坦で内傾。口縁部内 面から外面に灰釉。	
第166図	68	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	覆土 1/3	-	(6.5)	-	淡黄	体部外面に丸鑿状工具による施文。体部外面に灰釉。貫入 がはいる。残存部に1カ所脚を貼り付け。	
第166図	69	瀬戸・美濃陶器 鬚水入れ	覆土 破片	-	-	3.9	灰白	口縁端部は肥厚し僅かに外反。内面から体部外面下位に灰 釉。体部外面下位から底部外面は無釉。鬚水入れ湾曲部片 であろう。	
第166図	70	瀬戸・美濃陶器 灯火受皿	覆土 1/3	(10.4)	(5.0)	1.6~ 2.0	灰黄	受け部残存部に切り込みはない。底径がやや大きい。口縁 部外面以下は回転篋削り。全面錆釉施釉後、外面口縁部以 下を拭う。	
第166図 PL.99	71	製作地不詳陶器 灯火受台	覆土 口縁部欠	-	5.3	-	浅黄橙	受け部に浅い「U」字形の抉り。脚柱部内面から脚部外面下 端に透明釉か灰釉。貫入がはいる。	焼成不良。
第166図	72	瀬戸・美濃陶器 不詳	覆土 底部	-	5.0	-	灰白	内外面無釉。底部内面は湾曲し、香炉ほど平坦ではない。	
第167図 PL.99	73	堺・明石陶器 すり鉢	覆土 口縁部1/8、 底部1/2	(31.5)	(13.3)	12.5	赤褐	口縁部内面の凸帯は退化し、轆轤目状の高まりとなる。外面口 縁部下以下は回転篋削り。体部内面のすり目は底部周縁で止ま る。底部内面のすり目はウールマーク状。底部外面は砂付着。	
第167図	74	堺・明石陶器 すり鉢	覆土 口縁部片	-	-	-	にぶい 赤褐・赤褐	口縁部内面の凸帯は厚く丸みをおびる。	
第167図	75	在地系土器 鉢	覆土 1/4	(41.3)	-	-	にぶい 橙・褐灰	製作法は焙烙と同様であるが、底部内面から口縁端部上面 は磨き調整。	
第167図	76	在地系土器 鉢か火鉢	鉢か火鉢 口縁部片	(37.0)	-	-	黄灰・に ぶい 黄橙・ 黄灰	断面中央黒色、断面から器表付近にぶい黄橙色、外面器表 灰黄から黒色、内面器表灰黄色。外面の器表粗い磨き調整。	
第167図	77	在地系土器 鉢か火鉢	覆土 1/8	-	-	-	にぶい 橙	断面中央黒色、断面から器表付近にぶい橙色、器表にぶい 橙から黒色。内外面磨き調整。口縁端部は内側に肥厚。	
第167図 PL.99	78	在地系土器 壺	覆土 1/3	(22.0)	-	-	にぶい 橙	体部外面下端から底部外面に型肌痕。体部外面は小口状工 具による縦位撫で。肩部外面に波状文。内面は回転横撫で。 肩部内面の器表は若干黒変しており、火消壺か。	
第167図 PL.99	79	在地系土器 焙烙	覆土 1/5	(36.6)	(36.0)	6.1	黄灰	断面から器表付近黄灰色、器表黒色、底部外面の器表のみ 灰白色。体部外面下半から底部外面は型肌痕。体部外面下 端は撫撫で。体部内面下端から体部外面上半は回転横撫で。 内面に耳1カ所残存。耳下部は底部に貼り付ける。耳貼り 付け時に口縁部歪む。	
第167図	80	在地系土器 焙烙	覆土 1/6	(32.8)	(33.6)	3.2	淡黄・ 橙	断面淡黄色、器表橙色。体部は直線的に立ち上がる。平底。	
第167図	81	在地系土器 焙烙	覆土 破片	-	-	-	灰・ にぶい 褐・黒	断面中央の一部は黒色、断面から器表付近にぶい橙色。底 部外面器表のみ褐灰色で他の器表は黒色。体部外面下位か ら底部外面は型肌痕。体部外面下端は篋削り。体部外面中 位に接合痕残る。口縁端部は丸い。	
第167図	82	在地系土器 焙烙	覆土 口縁部 一部、底部1/4	-	-	-	灰白・ 橙	断面中央の一部灰白色。平底で体部は直線的に立ち上がる。 体部外面下位から底部外面周縁の器表は黒変。	

遺物観察表

第84表 遺物観察表(34)

1号井戸出土土器・陶磁器(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第167図 PL.99	83	在地系土器 火鉢	覆土 1/4	(24.5)	-	-	橙	体部は丸みを帯び、口縁部は外方に肥厚。口縁部内面の器表は煤が付着したように黒変。口縁端部の器表は剥離が著しい。口縁部外面は赤味を帯びたものを塗布か。	口縁部内面の器表黒変。
第167図	84	在地系土器 火鉢	覆土 1/2	-	(19.0)	-	暗灰色	断面暗灰色、器表付近黄灰色、器表黒から暗灰色。体部外面は外型による施文。高台貼り付け。高台外面は黒色物塗布。高台外面のみ光沢を有する。	
第168図	85	在地系土器 火鉢か火舎	覆土 底部片	-	-	-	灰・橙・ にぶい 黄橙	断面灰色、内面器表付近から器表橙色、外面器表付近から器表灰黄色。高台欠損。高台外面櫛状文。	中世。
第168図	86	在地系土器 火鉢か	覆土 口縁部片	-	-	-	黒色	断面は黒色、器表付近は浅黄橙色、器表黒色から暗灰色。外面に取っ手貼り付け痕残る。口縁端部のみ磨き調整。	
第168図 PL.99	87	在地系土器 手焙りか	覆土 口縁部1/3 欠	22.0	16.2	9.3	灰	断面暗灰色、器表付近から器表灰色、口縁部器表のみ黒色。体部外面に回転施文具による施文。口縁部のみ磨き調整により光沢をもつ。底部外面に半球状の脚を貼り付け。	
第168図	88	在地系土器 手焙りか	覆土 口縁部 1/8、底部1/3	(15.7)	(11.0)	8.0	灰黄・ 灰	口縁部は肥圧して内湾。外面は回転施文具による直線文。底部外面に半球状の脚貼り付け。脚は1カ所のみ残存。	
第168図 PL.99	89	在地系土器 風炉か	覆土 1/8	(42.0)	-	-	浅黄橙	口縁部の断面中央黒色、断面浅黄橙色、外面から口縁部内面の器表黒色。口縁部内面は煤により黒色となる。内面受け部以下の器表は明黄橙色。燻し焼成。内面は被熱により燻しが戻った可能性が高い。残存部の口縁部に焼成前の小円孔が1カ所。	
第168図	90	在地系土器 五徳か	覆土 破片	-	-	-	灰・橙・ にぶい 黄橙	断面灰色、器表付近橙色、器表にぶい黄橙色。裁頭円錐形の側面を方形透かし状に切り抜く。残存する端部は、製作時に下部であったよう形で型肌が残る。この端部は底部状に作った後、一部を三角形に残して削り抜く。	

1号井戸出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第168図 PL.99	91	板碑	覆土	[17.7]	[12.4]	682.2	二条線および左辺側の「切り込み」、痕跡程度の粹線が残る先端破片。右辺端部に主尊種子の一部が残る。	雲母石英片岩

1号井戸出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第168図 PL.99	92	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	24.66、26.68	0.88 ~ 0.96	2.33	新寛永。
第168図 PL.99	93	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	27.54、27.57	1.21 ~ 1.24	4.14	4文銭。21波。

2号井戸出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第169図	1	肥前磁器 碗	覆土 口縁部片	(9.4)	-	-	灰白	外面に雪輪梅樹文。	波佐見系。
第169図	2	在地系土器 鉢	覆土 破片	-	-	-	灰・ 浅黄	断面暗灰色、器表付近浅黄色、器表黒色。体部外面下位に型肌痕残る。体部外面下端は篋削り。体部外面は撫で。口縁部外面は回転横撫で。内面から口縁端部上面は磨きか丁寧な撫で、やや光沢を有する。	
第169図	3	在地系土器 焙烙	覆土 破片	-	-	-	黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表黒色。体部外面下位と底部内面の器表は灰白色。口縁部は歪む。	

3号井戸出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第170図 PL.99	1	竈か炉の内壁片	覆土 破片	[8.1]	[14.7]	[8.8]	黒褐・橙・ にぶい 黄橙	少量のスサ入り粘土で作り、内壁付近の上部に針金を入れる。内壁は高温により発泡して還元状態となる。	

4号井戸出土陶磁器・瓦

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第170図	1	瀬戸・美濃陶器 徳利	覆土 肩部1/2欠	2.8	-	-	オリーブ 褐・浅黄	口縁部内面から外面に錆軸。肩部外面上位に1条の凹線、凹線下に8条ほどの不明瞭な横線。	
第170図	2	常滑陶器 甕	覆土 体部下位片	-	-	-	褐・ 灰黄	内外面撫で。	中世。
第170図	3	瓦 丸瓦	覆土 破片	縦-	横-	-	黄灰色	断面黒色、器表付近灰白色、器表黄灰色。内面布痕。	

5号井戸出土土器・陶磁器・瓦

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第171図	1	肥前磁器 碗	覆土 1/3	(9.8)	-	-	灰白	外面は唐草文内にコンニャク印判による丸文を配す。	波佐見系。
第171図 PL.99	2	肥前磁器 丸碗	覆土 口縁部 1/4、底部1/2	(8.5)	3.5	5.5	白	外面は曲線で区切った中に花卉文。口縁部内面に3重圏線。底部内面は1重圏線内に簡略化した五弁花。	
第171図	3	肥前陶器 碗	覆土 1/3	(10.6)	(4.8)	7.0	明オリー ブ灰	陶胎染付。口縁部外面に四方禪文。体部外面に山水文。	

第85表 遺物観察表(35)

5号井戸出土土器・陶磁器・瓦(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第171図	4	肥前磁器 皿	覆土 1/3	(13.6)	(8.2)	3.4	灰	内面は網目状文と植物文。外面は唐草文。高台内は1重圈線。胎土は十分に磁化しておらず焼成不良。	波佐見系。焼成不良。83号土坑10と同一個体か。
第171図	5	常滑陶器? 甗	覆土 破片	-	-	-	灰白	頸部は短く、口縁部は内外に広がる。頸部外面から体部外面に鉄泥、口縁端部上面から内面に灰釉。体部外面に灰釉を流す。	時期不詳。
第171図	6	在地系土器 火鉢	覆土 1/4	(26.5)	-	-	にぶい 黄橙	断面中央のみ黄灰色。体部内湾し、口縁部は肥厚。口縁部外面強い回転横撫でにより窪み、下部は段差状をなす。体部中位外面に明瞭な1条の凹線。	
第171図	7	在地系土器 火鉢	覆土 1/7	(26.9)	-	-	灰黄	体部から口縁部ゆるく内湾。口縁部外面は段差を有し、内面は轆轤目が浅い凹線状をなす。体部外面上位は回転施文具による文様か。文様帯下には明瞭な1条の凹線。	
第171図 PL.99	8	瓦 巴瓦	覆土 瓦当部	縦-	横-	-	浅黄	断面黒色、器表付近から器表浅黄色。瓦頭文様は左三巴の周囲に珠文。	
第171図 PL.100	9	瓦 十能瓦	覆土 1/4	縦-	横-	-	にぶい 黄	にぶい黄色、器表の一部は灰色～灰白色。下面は型肌痕残る。側面の湾曲が強く、直角に近く立ち上がる。他は一般的な十能瓦と同様な特徴。	

5号井戸出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第172図 PL.100	10	五輪塔 空風輪	覆土	高 22.5	幅 12.0	3800.0	風輪部最大径は上端側にあり、下端側に向い徐々に径を狭める。形状は砲弾状を呈し、先端突出部と一体化。空輪部・風輪部とも粗い斜位工具痕が全面に残る。	粗礫輝石安山岩
第172図 PL.100	11	板碑	覆土	[18.0]	[12.5]	615.0	裏面側に幅1.3cmの横位工具痕。背面側は剥落して種子等は不明。	雲母石英片岩

6号井戸出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第174図	1	肥前磁器 皿	覆土 口縁部片	-	-	-	白	口縁部から体部波状にする。外面唐草文。口縁部内面雷文帯。	
第174図	2	常滑陶器 甗	覆土 体部下位片	-	-	-	灰	器表灰褐色。内面は自然釉が斑状にかかる。内面接合痕残る。内面寛撫で。外面に焼成時の細かいヒビが多く入る。	中世。3と同一個体か。
第174図 PL.100	3	常滑陶器 甗	覆土 頸部 ～肩部片	-	-	-	灰	器表灰褐色。頸部外面に焼成時の細かいヒビが多く入る。肩部外面は自然釉が斑状にかかる。肩部外面に扇状の押印。	中世。2と同一個体か。

6号井戸出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第174図 PL.100	4	砥石 礫砥石	覆土	[13.9]	[11.6]	830.5	厚さ3cmの板状礫の表裏面に光沢を帯びた摩耗痕。	粗礫輝石安山岩

1号掘出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第176図 PL.100	1	銅銭	寛永通寶	覆土	完形	25.12、25.34	1.23～1.33	3.57	新寛永。
第176図 PL.100	2	鉄銭	寛永通寶	覆土	3/4	27.34	2.73～3.83		寛永通寶であろう。

1号道路状遺構北側溝出土陶磁器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第183図	1	堺・明石陶器 円盤状製品	覆土 2/3	6.4(長)	-	1.3(厚)	赤褐	すり鉢底部片の周囲を細かく敲打し、円盤状に整形。1/3ほど欠損。	二次加工品。

1号道路状遺構北側溝出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第183図 PL.100	2	銅銭	咸平元寶	覆土	3/4	-、18.82	1.25～1.28	1.12	北宋、咸平元年(998)初鑄。縁を削り、表面左上を弧状に抉る。上部と右上は欠損。

中・近世・遺構外出土土器・陶磁器・瓦

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第184図	1	龍泉窯系青磁 碗	2号古墳周堀 体部～底部片	-	-	-	灰白	外面は鑄蓮弁文。底部内面に不明押印文。内面から高台外面に青磁釉。	中世。
第184図	2	同安窯系青磁 碗	160-140 体部片	-	-	-	灰	内面は櫛状工具による鋸歯状文。外面は櫛目文。内外面に青磁釉。	中世。
第184図 PL.100	3	肥前磁器 碗	3区 口縁部 1/3、底部完	(9.4)	3.6	4.9	灰白	外面は2重網目文。高台外面下半から高台端部は無釉。	波佐見系。
第184図	4	肥前磁器 碗	3区 口縁部 一部、底部完	(9.8)	3.5	4.7	灰白	外面は2重網目文。高台外面は部分的に無釉。	波佐見系。
第184図 PL.100	5	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/2	(9.8)	(4.2)	5.0	白灰	外面に雪輪梅樹文。	波佐見系。
第184図	6	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/4	(9.0)	(3.8)	5.2	灰白	外面に雪輪梅樹文。	波佐見系。

遺物観察表

第86表 遺物観察表(36)

中・近世・遺構外出土土器・陶磁器・瓦(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第184図 PL.100	7	肥前磁器 碗	3区攪乱 体部以下完、 口縁部一部	(10.0)	4.1	5.2	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。外面は部分的に釉が白濁。焼成不良。	波佐見系。
第184図	8	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/2	(9.8)	(4.2)	5.2	灰	体部外面に雪輪梅樹文。高台外面に2重圏線。高台内に不明銘。	波佐見系。
第184図	9	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/7	(9.3)	(4.0)	5.5	灰白	体部外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第184図	10	肥前磁器 碗	3区攪乱 口縁部1/8、 底部1/4	(9.8)	(3.9)	4.9	灰白	外面は雪輪梅樹文か。	波佐見系。
第184図	11	肥前磁器 碗	3区攪乱 口縁部1/4、 底部一部	(9.3)	(4.0)	4.7	灰白	底部の器壁厚い。外面は雪輪梅樹文か。高台内に小さい不明銘。	波佐見系。
第184図	12	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/4	(9.2)	-	-	灰白	雪輪梅樹文。呉須は黒みを帯びた発色。	波佐見系。
第185図	13	肥前磁器 碗	3区攪乱 底部	-	4.0	-	白色	外面は雪輪梅樹文。高台内に不明銘。呉須の発色は比較的良好で胎土も白色。	波佐見系。
第185図	14	肥前磁器 碗	3区攪乱 底部	-	4.0	-	白	体部外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第185図	15	肥前磁器 碗	3区攪乱 2/3	-	4.2	-	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第185図	16	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/2	-	(4.2)	-	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系。
第185図	17	肥前磁器 碗	3区攪乱 底部	-	3.8	-	灰白	雪輪梅樹文か。高台内不明銘。	波佐見系。
第185図	18	肥前磁器 碗	3区攪乱 底部	-	3.4	-	灰白	外面は雪輪梅樹文か。	波佐見系。
第185図	19	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/2	(8.6)	(3.8)	4.0	灰白	外面に簡略化した梅樹文か。	波佐見系。
第185図 PL.100	20	肥前磁器 碗	3区攪乱 口縁部一部、 底部3/4	(9.8)	4.0	5.2	灰白	口鏽。口縁部外面に鋸歯状文、体部外面に花卉文。高台内に渦福字崩れ銘。	波佐見系。
第185図	21	肥前磁器 碗	3区攪乱 1/2	9.8	-	-	灰白	コンニャク印判による桐文と手描きによる垣根状文を三方に配する。	波佐見系。
第185図	22	肥前磁器 丸碗	3区攪乱 3/4	-	3.2	-	白	外面は曲線で区切った中に花卉文。底部内面は2重圏線内に簡略化した五弁花。	
第185図	23	肥前磁器 丸碗	3区攪乱 2/3	-	(3.2)	-	白	体部の残存が悪く、外面の文様は不明。底部内面は2重圏線内に簡略化した五弁花状の文様。	
第185図	24	肥前磁器 小碗	3区攪乱 1/5	(9.2)	(4.2)	4.2	灰白	外面に雪輪梅樹文。	波佐見系。
第185図 PL.100	25	肥前磁器 小碗	3区攪乱 1/2	(8.4)	(3.0)	4.2	灰	外面下位から高台外面に圏線。残存部の文様は裏文様。胎土が灰色で焼成不良。	
第185図 PL.100	26	肥前磁器 小碗	3区攪乱 口縁部1/2、 底部完	(8.2)	3.2	4.3.	灰白	外面に植物文を主文様として描く。裏文様は不明。	波佐見系。
第185図 PL.100	27	肥前磁器 小碗	3区攪乱 1/3	(8.3)	3.2	3.8	灰白	体部外面に笹文。体部外面下位から高台境に2重圏線。	
第185図	28	肥前磁器 小碗	3区攪乱 1/6	(8.0)	(3.0)	3.6	白	外面に染付。	
第185図	29	肥前磁器 小碗	3区 口縁部 1/3、底部1/2	(8.0)	3.2	4.2	灰白	残存部外面は高台脇と高台外面の圏線のみ。胎土の磁化は不十分。	焼成不良。
第185図	30	肥前磁器 小碗	3区攪乱 1/7	(9.0)	-	-	灰	外面に雪輪梅樹文。	波佐見系。
第185図	31	肥前磁器 小碗	3区攪乱 底部	-	3.2	-	灰白	体部外面はコンニャク印判と手描きによる染付。	波佐見系。
第185図	32	肥前磁器 小碗	3区攪乱 底部	-	3.4	-	灰白	体部外面の下位と高台境に圏線。体部外面に染付。底部内面と高台内の一部に釉切れがある。	
第185図 PL.100	33	肥前磁器 小碗	3区攪乱 口縁部1/4、 底部完	(7.2)	3.4	5.6		やや小振りの湯飲み形を呈する。体部外面の3方に花卉文?	
第185図	34	肥前磁器 小碗	3区攪乱 1/8	(6.4)	-	-	白	外面に植物文。	
第185図	35	肥前磁器 仏飯器か	3区攪乱 1/6	(7.0)	-	-	灰白	口縁部外面に型紙摺りによる雨降り文。	
第185図	36	肥前磁器 仏飯器	3区攪乱 1/2	(6.2)	-	-	白	残存部無文。	
第185図 PL.100	37	肥前磁器 杯	2区 口縁部 1/3、底部完	(6.4)	2.7	4.2	白	外面の3方に草文。高台外面から高台内無釉。	
第185図	38	肥前磁器 広東碗	3区攪乱 1/2	-	(6.4)	-	白	体部外面に植物文。高台外面に2重圏線。底部内面に不明文様。底部周縁に1重圏線。	
第185図	39	肥前磁器 小広東碗	3区攪乱 底部	-	2.9	-	白	外面に梵字状文。口縁部内面に2重圏線。底部内面は1重圏線内に変形字銘。	

第87表 遺物観察表(37)

中・近世・遺構外出土器・陶磁器・瓦(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第185図	40	肥前磁器 筒形碗	3区攪乱 1/4	(8.0)	-	-	白	外面染付。口縁部内面2重圏線。	
第185図	41	肥前磁器 筒形碗	3区攪乱 1/4	-	(4.4)	-	灰白	青磁染付の筒形碗。外面から高台内は青磁釉。内面は染付。底部内面の周縁に2重圏線。	
第185図	42	肥前磁器 筒形碗	3区攪乱 1/4	-	(3.6)	-	灰	青磁染付。外面は高台端部を除き青磁釉。内面は染付に透明釉。底部内面は2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。	
第185図	43	肥前磁器 青磁染付碗	3区攪乱 1/5	(14.0)	-	-	白	外面に青磁釉。口縁部内面に幅広の1重圏線。底部内面周縁は細線による2重圏線。	
第185図	44	肥前陶器 碗	3区攪乱 1/3	-	(4.7)	-	灰白	陶胎染付。残存部は体部下位と高台外面の圏線のみ。	
第185図	45	肥前陶器 碗	3区攪乱 底部	-	4.6	-	灰	陶胎染付。外面に東屋山水文。貫入がはいる。	
第185図	46	京・信楽系陶器 小杉碗	3区攪乱 底部	-	3.6	-	灰白	高台脇を挟み気味に削り込む。内面から高台脇の削り部まで透明釉。細かい貫入が入る。外面に鉄絵具による若松文?高台内に墨書。小杉茶碗。	高台内に墨書。
第185図	47	京・信楽系陶器か 筒形碗	3区攪乱 1/6	(8.4)	(4.8)	4.3.	灰	器壁薄く、高台はシャープな削り出し。外面鉄絵具による文字。口縁。内面から高台脇に灰釉。細かい貫入がはいる。	
第186図	48	瀬戸・美濃磁器 端反碗	3区攪乱 1/7	(9.5)	-	-	白	外面に染付。染付はにじむ。口縁部内面は幅広の圏線。	
第186図	49	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	3区 1/6	(10.6)	-	-	灰白	外面口縁部下に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉、外面の口縁部以下に鎗釉。灰釉に貫入がはいる。	
第186図	50	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	3区攪乱 1/6	(10.5)	-	-	灰黄	外面の口縁部下に螺旋状の凹線。内面から口縁部外面に灰釉。凹線部以下は鉄釉。灰釉に貫入がはいる。	
第186図	51	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	3区攪乱 底部	-	3.9	-	灰白	外面の口縁部下に凹線。内面は灰釉、残存部外面は高台端部を除き鉄釉。灰釉には貫入がはいる。	
第186図	52	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	3区攪乱 底部	-	4.5	-	灰白	内面に灰釉、高台端部を除く外面に鉄釉。灰釉に貫入が入る。	
第186図	53	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	3区攪乱 1/2	-	(4.6)	-	淡黄	内面に灰釉、外面に鎗釉、高台端部のみ無釉。灰釉に貫入が入る。	
第186図	54	瀬戸・美濃陶器 腰鎗碗	3区攪乱 底部	-	4.5	-	白	内面は灰釉で貫入がはいる。体部外面から高台内に鉄釉。高台端部は摩滅。	
第186図	55	瀬戸・美濃陶器 せんじ碗	3区 1/4	(9.8)	-	-	淡黄	下半は開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面下端に凹線。内外面に灰釉。貫入が入る。	
第186図	56	瀬戸・美濃陶器 せんじ碗か	3区攪乱 底部	-	4.3	-	淡黄	高台端部は無釉。灰釉と鎗色の鉄釉を左右に掛け分ける。	
第186図	57	瀬戸・美濃陶器? 碗か	3区攪乱 2/3	-	3.8	-	灰白	削り出し高台。内面から高台脇に灰釉。細かい貫入がはいる。高台内に符丁らしき墨書。	高台内に墨書。
第186図	58	瀬戸・美濃陶器 碗か	3区攪乱 底部	-	4.2	-	灰白	貼付高台。内面から高台脇灰釉。貫入がはいる。	
第186図	59	製作地不詳磁器 碗	3区攪乱 底部	-	(3.0)	-	灰白	体部外面染付。体部下位に1重圏線。高台外面に2重圏線。	
第186図 PL.100	60	肥前磁器 皿	3区攪乱 口縁部1/4、 底部1/2	(12.2)	(7.4)	3.9	灰白	体部内面に不明文様。体部外面に唐草文。底部内面は2重圏線内に五弁花。五弁花はコンニャク印判。高台内は1重圏線内に渦福字銘。	波佐見系。
第186図	61	肥前磁器 皿	3区攪乱 1/6	-	(7.3)	-	灰白	内外面に染付。高台内に1重圏線。	波佐見系。
第186図	62	肥前陶器 皿	3区攪乱 破片	-	-	-	灰	陶胎染付。内面に染付。残存部外面は無文。底部内面の釉を輪状に掻き取る。	
第186図	63	美濃陶器 摺絵皿	3区攪乱 1/3	-	7.8	-	灰白	いわゆる御深井の皿。底部内面は鉄絵具による型紙摺り。文様は非常に薄い。高台端部を除き灰釉。粗い貫入がはいる。	17世紀後半~ 18世紀前半
第186図 PL.100	64	美濃陶器 摺絵皿	3区攪乱 底部	-	(7.4)	-	灰白	いわゆる御深井。底部内面鉄絵具による型紙摺り。高台端部を除き灰釉。貫入がはいる。	
第186図 PL.100	65	美濃陶器 摺絵皿	3区攪乱 1/2	-	(6.7)	-	灰黄	底部内面に鉄絵具による型紙摺り。高台端部を除き灰釉。貫入が入る。いわゆる御深井。	
第186図	66	美濃陶器 摺絵皿	3区攪乱 1/6	-	(8.0)	-	灰白	内面は鉄絵具による型紙摺り。内面に灰釉。内面に目痕3カ所残る。いわゆる御深井。	
第186図 PL.100	67	美濃陶器 摺絵皿	3区攪乱 底部	-	5.2	-	灰白	底部内面に呉須を用いた型紙摺りによる梅文。高台端部を除き灰釉。細かい貫入がはいる。いわゆる御深井。	
第186図	68	美濃陶器 摺絵皿か	3区攪乱 1/10	(20.0)	-	-	灰	口縁部下の湾曲部は器壁薄い。口縁部は肥厚。底部内面の周縁に低い段差。内外面に灰釉。灰釉に貫入が入る。残存部に摺り絵は認められない。いわゆる御深井。	
第186図	69	美濃陶器 折縁輪壳皿	3区攪乱 1/3	-	(7.0)	-	灰白	体部外面は回転摺り。底部内面から体部外面に灰釉施釉後、底部内面の釉を輪状に掻き取る。釉はやや厚く、貫入が入る。	
第187図 PL.100	70	美濃陶器 皿	3区 口縁部欠	-	5.7	-	灰	木瓜形の皿。底部内面に布痕がわずかに認められる。内面から高台脇に灰釉。貫入が入る。いわゆる御深井。	
第187図	71	美濃陶器 皿か鉢	3区攪乱 1/8	-	(8.0)	-	灰白	高台端部を除き灰釉。貫入がはいる。体部外面は回転摺り。釉調と施釉範囲から御深井製品と考えられるが、残存部は無文。	
第187図	72	肥前磁器 鉢	3区攪乱 1/7	(15.9)	(5.8)	7.9	灰白	外面に雪輪梅樹文。底部内面、2重圏線内に五弁花。五弁花はコンニャク印判か。高台内に不明銘。	
第187図 PL.100	73	肥前磁器 蓋付鉢	3区 口縁部 1/4、底部1/3	(13.0)	(7.3)	6.4	白	外面に型紙摺りによる松竹梅文。口縁部内面の釉を削り取る。不規則な貫入が入り、釉もやや白濁。	やや焼成不良。

遺物観察表

第88表 遺物観察表(38)

中・近世・遺構外出土器・陶磁器・瓦(続き)

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第187図	74	肥前磁器 青磁染付鉢	3区攪乱 口縁部片	-	-	-	白	外面に青磁釉。口縁部内面に染付。	
第187図 PL.101	75	瀬戸・美濃陶器 鉢	3区攪乱 1/3	(26.0)	(11.5)	8.8	灰黄	口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げる。体部内面と底部内面に棒状工具による波状文。全面に灰釉施釉後に体部外面下端以下を拭う。口縁部内面、部分的に鉄緑釉を流す。底部内面に大型の目痕2カ所。体部内面に鉄絵。全面灰釉施釉後に体部外面下位以下の釉を拭う。	
第187図	76	瀬戸・美濃陶器 鉄絵鉢	3区攪乱 破片	-	(12.0)	-	明褐灰	口縁部内面は鉄絵。全面灰釉施釉後に体部外面下位以下の釉を拭う。	
第187図	77	肥前磁器 蓋物(身)	3区攪乱 1/8	(10.0)	-	-	白	口縁部外面2重圏線。口縁部内面の釉削り取る。	
第187図	78	肥前磁器 蓋	3区攪乱 1/7	(11.8)	摘径 (5.2)	3.0	白	口縁部内湾し僅かに内傾気味。外面にいわゆる蛸唐草文。つまみ外面に2重圏線、つまみ内に1重圏線。天井部内面は松竹梅文か。	79と同一個体の可能性あり。19世紀前半から中葉
第187図	79	肥前磁器 蓋	3区攪乱 1/3	(11.8)	摘径	-	白	口縁部は内湾し僅かに内傾気味。外面にいわゆる蛸唐草文。天井部内面2重圏線。	78と同一個体の可能性高い。
第187図	80	製作地不詳陶器 燗德利	3区攪乱 口縁部	3.2	-	-	灰白	口縁部内面から外面に灰釉。口縁部のみ青釉を流す。	
第187図	81	瀬戸・美濃陶器 德利	3区攪乱 3/4	-	12.4	-	灰白	外面に鉛釉施釉後、体部外面下位以下の釉を拭う。	
第187図	82	瀬戸・美濃陶器 德利	3区 1/4	-	(11.2)	-	灰黄	外面に鉛釉施釉後、体部外面下位以下の釉を拭う。	
第187図	83	瀬戸・美濃陶器 德利	3区攪乱 1/2	-	11.0	-	灰白	外面に鉛釉施釉後、体部外面下端以下の釉を拭う。	
第187図 PL.101	84	瀬戸・美濃陶器か 甕	3区攪乱 1/6	(30.0)	-	-	灰白	頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反。内外面に柿釉施釉後、肩部に灰釉?を流しかける。流しかけた場所は鉛釉状に発色。流しかけは4カ所か。	5号土坑3・4と同一個体か。
第187図	85	常滑陶器 甕	2区 口縁部片	-	-	-	黄灰	口縁部「N」字状。器表にぶい赤褐色。	中世。
第187図	86	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	150-020 底部片	-	8.1	-	淡黄	体部外面の相対する2方に丸鑿状工具による若松状文。内面から体部外面下位に鉛釉。底部に低い脚を3カ所貼り付け。底部内面に目痕3カ所。	
第187図 PL.101	87	製作地不詳陶器 カンテラ	3区攪乱 取っ手欠損	5.2	5.3	-	灰白	内外面に灰釉。口縁部と体部外面下位以下は無釉。注ぎ口状の芯口端部は煙管の雁首状に開く。突き出た部分の上は長方形の小窓を開ける。	
第188図 PL.101	88	瀬戸・美濃陶器 灯火皿	3区攪乱 1/2	(8.8)	(5.0)	1.5	灰白	外面口縁部以下は回転鑿削り。全面錆釉施釉後に体部外面下位以下の釉を拭う。	
第188図	89	瀬戸・美濃陶器 灯火皿	3区攪乱 口縁部1/8、 底部2/3	(10.5)	(5.9)	-	褐・ 黄灰	器壁薄く底径大きい。口縁部外面以下は回転鑿削り。全面錆釉施釉後、口縁部外面以下を拭う。	
第188図 PL.101	90	瀬戸・美濃陶器 灯火受皿	3区攪乱 1/2	(10.3)	4.5	2.2	灰白	受け部の1カ所を「U」字状に抉る。口縁部外面以下羽回転鑿削り。全面錆釉施釉後に口縁部以下の釉を拭う。	
第188図 PL.101	91	瀬戸・美濃陶器 灯火受皿	3区攪乱 1/6	(10.2)	(4.6)	2.6	明褐灰	口縁部外面以下は回転鑿削り。全面錆釉施釉後に体部外面以下の釉を拭う。	
第188図	92	志戸呂陶器 灯火皿	2区 1/4	(10.2)	(4.9)	1.7	灰	体部外面の下位以下は回転鑿削り。内面から体部外面に錆釉。口縁部に油煙厚く付着。	油煙付着。
第188図	93	製作地不詳陶器 灯火皿	3区攪乱 1/2	(8.0)	(3.4)	1.6	灰白	体部外面中位以下回転鑿削り。内面から口縁部外面に透明釉。細かい貫入がはいる。口縁部内外面に油煙付着。	
第188図	94	製作地不詳陶器 灯火皿	3区攪乱 1/4	(10.8)	(4.0)	2.0	灰白	口縁部外面以下は回転鑿削り。口縁部外面から内面に透明釉。細かい貫入がはいる。内面に目痕残る。口縁部外面に油煙付着。	
第188図	95	在地系土器 皿か	1区 1/4	-	(4.0)	-	橙	底部左回転糸切後、条線状の厚痕。底部内面指撫で。	中世か。
第188図 PL.101	96	在地系土器 皿	3区攪乱 ほぼ完形	9.9	6.0	2.5	にぶい 橙	底部左回転糸切無調整。口縁部から口縁部内面上部全体に油煙付着。	灯火皿。
第188図 PL.101	97	在地系土器 皿	2区攪乱 口縁部1/4欠	6.8	4.0	1.8	にぶい 黄橙	小皿。口縁部1/3欠。体部は直線的に開く。底部左回転糸切無調整。口縁部と口縁部の小さい欠け口に油煙付着。	灯火皿として使用。
第188図 PL.101	98	瀬戸陶器 すり鉢	150-020 1/4	(32.0)	(13.8)	12.8	浅黄	底部右回転糸切無調整。全面に錆釉施釉後、体部外面下位以下の釉を拭う。体部内面中位以下は使用により、高い部分が摩滅。	
第188図	99	堺・明石陶器 すり鉢	3区攪乱 口縁部片	-	-	-	明赤褐	口縁部の縁帯は小さい。内面の凸帯は低く明瞭。外面口縁部以下は回転鑿削り。	
第188図	100	堺・明石陶器 すり鉢	3区攪乱 1/4	-	(14.0)	-	赤橙	体部外面は回転横撫で。体部内面のすり目は底部周縁付近まで及ぶ。内面は使用により摩滅。	
第188図	101	堺・明石陶器 すり鉢	3区攪乱 すり鉢	-	(14.0)	-	橙	体部外面回転鑿削り。底部外面は砂底。体部内面のすり目は底部周縁で止まる。内面使用により平滑。	
第188図	102	堺・明石陶器 すり鉢	3区攪乱 体部片	-	-	-	明赤褐	体部外面回転鑿削り。体部内面下位のすり目使用により摩滅。無釉。	
第188図	103	堺・明石陶器 すり鉢	3区攪乱 底部片	-	-	-	明赤褐	内面のすり目は摩滅。底部内面のすり目は中央でクロスする。無釉。	
第188図	104	在地系土器 鉢か	3区攪乱 1/4	44.0	-	-	灰白・ 黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表黒色。外面の口縁部下は型肌痕を雑に撫でる。口縁部回転横撫で。内面丁寧な撫で?でやや光沢を持つ。	
第189図	105	在地系土器 焙烙	3区攪乱 破片	-	-	5.2	橙	内面に耳貼り付け。平底。底部外面から体部外面中位に皺状型肌痕。体部外面下端は鑿削り。口縁部外面に煤付着し、体部外面器表は暗灰色。	

第89表 遺物観察表(39)

中・近世・遺構外出土土器・陶磁器・瓦(続き)

挿図番号 図版番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第189図	106	在地系土器 焙烙	3区攪乱 1/10	-	-	5.0	にぶい 橙	器表黒色。底部外面浅黄橙色。体部外面の下端は篋削り。	
第189図	107	在地系土器 焙烙	3区攪乱 破片	-	-	-	黒褐・ 灰黄・ 黒	断面中央黒褐色、器表付近灰黄色、器表黒色。底部外面に型肌痕残る。体部外面下端は篋削り。口縁端部上面は平坦で外面側は稜をなす。	
第189図	108	在地系土器 火鉢	3区攪乱 破片	-	-	-	暗灰	断面暗灰色、器表付近灰白色、器表暗灰から黒色。口縁部内面の器表に黒色物付着か。外面は横位磨き調整。	
第189図	109	在地系土器 手焙りか	3区攪乱 1/4	-	(12.6)	-	黒	断面黒色、器表付近浅黄橙色、内面器表暗灰色、外面器表灰色。外面器表回転横撫で。外面下端篋削りの後回転施文具により施文。底部外面低い脚を貼り付け。	
第189図	110	在地系土器？ 風炉か七輪	3区攪乱 破片	-	-	-	浅黄橙	断面中央は灰白色、断面中央以外は浅黄橙色。底部外面は焙烙と同様の砂底状。低い脚を貼り付ける。通風口の前面に張り出しを貼り付ける。	
第189図	111	在地系土器 竈	3区攪乱 1/5	(32.0)	-	-	黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表黒色。外面の口縁部下に鏝を貼り付け。口縁端部の上面から外面は磨きにより光沢を持つ。残存部の鏝下に焼き口と考えられる抉り。	
第189図	112	在地系土器 釜輪	3区攪乱 破片	-	-	-	黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表暗灰色～浅黄橙色。底面下部と体部下端のみ橙色に変色。下面に小判形押印を3個連続で施す。小判形上部は○内に「一」、下部に「岩崎」銘。	
第189図 PL.101	113	在地系土器？ 炉形	3区攪乱 一部欠	35.7	35.7	20.9	灰白～ 浅黄橙	断面暗灰色、器表付近から器表灰白色から浅黄橙色。粘土板を貼り合わせるタタラ作りにより成形。貼り合わせ部内外面は直線的な撫で。鏝状の口縁部は丁寧な撫で。外面の器表に変色部はないが、体部から口縁部内面の器表は煤が付着したような黒変部が多い。	
第189図	114	製作地不詳磁器 植木鉢	3区攪乱 1/4	(12.4)	-	-	白	内面下位から外面に瑠璃釉。浮き出させた松文部分のみ透明釉。	焼継ぎ。
第189図	115	在地系土器 植木鉢	3区攪乱 1/2	-	(8.6)	-	にぶい 黄橙・黒	断面にぶい黄橙色、器表黒色。底部内面から外面は轆轤目残る。底部中央に焼成前の円孔。	
第190図 PL.102	116	在地系土器 不詳	3区攪乱 1/4	(43.6)	-	-	黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表黒色。口縁部はゆるく内湾し、内面に折り返して肥厚。外面口縁部下に凸帯を貼り付け。口縁端部上面から外面は粗い横位磨きでやや光沢をもつ。甕か竈の可能性ある。	
第190図	117	在地系土器 不詳	3区攪乱 1/4	15.5	(13.2)	7.3	灰白	断面中央暗灰色、器表付近灰白色、器表灰白色から灰色。底部外面は砂底状。高台は貼り付け。	
第190図 PL.102	118	在地系土器？ 不詳	3区攪乱 脚部か	-	3.1	(3.0)	浅黄橙	鍋か釜の脚部か。脚端部を水平とすると脚は斜めに立ち上がる。上部は接合痕で剥かれる。脚外面は篋削りで多角形に仕上げられる。	時期不詳。
第190図	119	在地系土器 不詳	1区 体部一 部、底部1/4	-	-	-	にぶい 赤橙	高台端部欠損。残存部の3箇所にて2.3cmほどの間隔で円孔か抉りが入る。内面の底部周縁は凹線状に窪む。	
第190図	120	在地系土器 不詳	3区攪乱 破片	-	-	-	灰黄	断面灰黄色、器表黒色。器壁薄く、外面の口縁部下に鏝。燻し焼成。	
第190図	121	土製品 人形	3区 1/3	-	-	-	橙	座った女性の半身。外面の器表にはキラが残る。中央の貼り付け部で剥かれる。内面には指押さえ痕と指紋が残る。着色は残存していない。	
第190図 PL.102	122	瓦 十能瓦	3区攪乱 3/4	縦26.3	横29.7	1.3	黒・にぶ い黄橙・ 黄灰	断面黒色、器表付近灰白色、器表暗灰色から黄灰色。下面に型肌痕残る。上面周囲は強い直線的な撫で。	

中・近世・遺構外出土土器

挿図番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第191図 PL.102	123	石白 上白	3区攪乱	径 39.6	高 10.8	13400	6分割。各々の区画に副溝6本を刻む。軸棒受け周辺を除いて被熱剥落が激しい。供給孔・挽き手孔は不明。	花崗岩
第191図 PL.102	124	砥石 切り砥石	3区攪乱	[10.1]	[3.3]	241.4	表裏面を使用面とする。両側面・上面はノミ状工具による整形痕が残る。	変質デイスait
第191図 PL.102	125	砥石 切り砥石	3区攪乱	10.2	2.9	132.1	表裏面を使用面とする。両側面はノミ状工具による整形後、刀子等による面整形を施す。下面にはノミ状工具痕。	砥沢石
第191図 PL.102	126	火打石 剥片	2区表土	2.1	3.5	10.4	背面側剥離面の稜・剥片のエッジに著しい敲打痕。	石英
第191図 PL.102	127	石製品 楕円礫	3区攪乱	9.5	8.0	456.2	背面側に径5cmの孔を穿つ。孔内面は平滑化している。背面側の孔と礫面は風化の差が明らかで、裏面側・礫面中央にはこれと同じ風化状態の異なる打痕が重複する。	粗粒輝石安山岩
第191図 PL.102	128	石製品 偏平礫	2区周溝墓	22.7	20.9	3900.0	礫中央に径6cm弱の浅い孔を穿つ。孔内面は平滑化している。表裏面とも礫面は摩耗しているが、それが使用によるものか不明。	粗粒輝石安山岩
第191図 PL.102	129	石製品 偏平礫	150-170	14.6	14.7	199.2	背面側の径4.8cmの浅い孔を穿つ。孔内面は平滑化している。	粗粒輝石安山岩

中・近世・遺構外出土金属製品

挿図番号 図版番号	No	種類	器種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第192図 PL.102	130	鉄器	刀	2区	柄端部、 刃部1/2欠	[36.4]	2.5	0.5	[250.0]	目釘穴径0.6、残存状態は比較的良好。
第192図 PL.102	131	鉄器	鎌	4区	両端部欠損	[15.5]	3.0	0.3	[50.0]	錆化が進んでいる。

遺物観察表

第90表 遺物観察表(40)

中・近世・遺構外出土銭貨

挿図番号 図版番号	No.	種類	銭貨名	出土位置	残存率	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第192図 PL.102	132	金銭	元文一分金	3区攪乱	完形	16.10、9.88	1.65	3.29	裏面右肩に「文」の文字。
第192図 PL.102	133	銅銭	治平元寶	3区	完形	23.44、23.69	0.95～1.10	2.24	北宋、治平元年(1064)初鑄。篆書。
第192図 PL.102	134	銅銭	元祐通寶	3区	完形	24.78、24.43	1.17～1.21	3.32	北宋、元祐元年(1086)初鑄。篆書。
第192図 PL.102	135	銅銭	寛永通寶	1区表採	完形	22.86、22.69	0.94～1.00	2.01	やや曲がる。新寛永。
第192図 PL.102	136	銅銭	寛永通寶	3区攪乱	完形	24.08、24.10	1.00～1.05	2.62	新寛永。
第192図 PL.102	137	銅銭	寛永通寶	3区	完形	23.24、23.27	1.11～1.21	2.50	新寛永。
第192図 PL.102	138	銅銭	不詳	3区攪乱	1/3				銭文判読不能。
第192図 PL.102	139	鉄銭	寛永通寶	2号古墳	3/4	-、25.87	2.39～2.92	-	表面下部に「永」字。寛永鉄銭。

写真図版



1 遺跡遠景（北東から）



2 調査区全景（南調査区調査中、南西から）



1 調査区全景（南調査区調査中、西から）



2 南調査区全景（第3面調査中、東から）



1 南調査区全景（第3面調査中、上が北東）



2 北調査区全景（東から）



1 北調査区 (2・3区) 全景 (東から)



2 北調査区 (2・3区) 全景 (上が北西)



1 南調査区(1-1区)旧石器調査状況(南東から)



2 北調査区旧石器調査状況(東から)



3 北調査区旧石器調査状況(南東から)



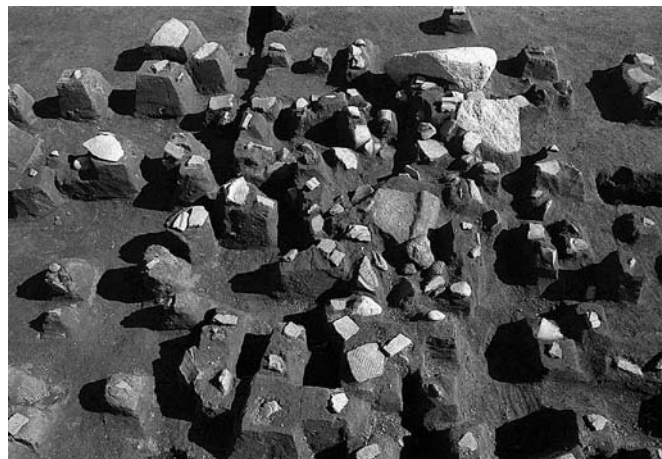
4 基本土層B(2号トレンチ北壁、南から)



5 3号住居全景(西から)



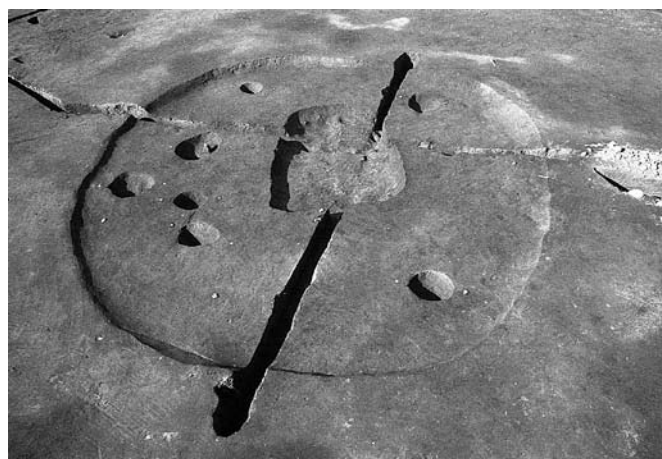
1 3号住居遺物出土状態（西から）



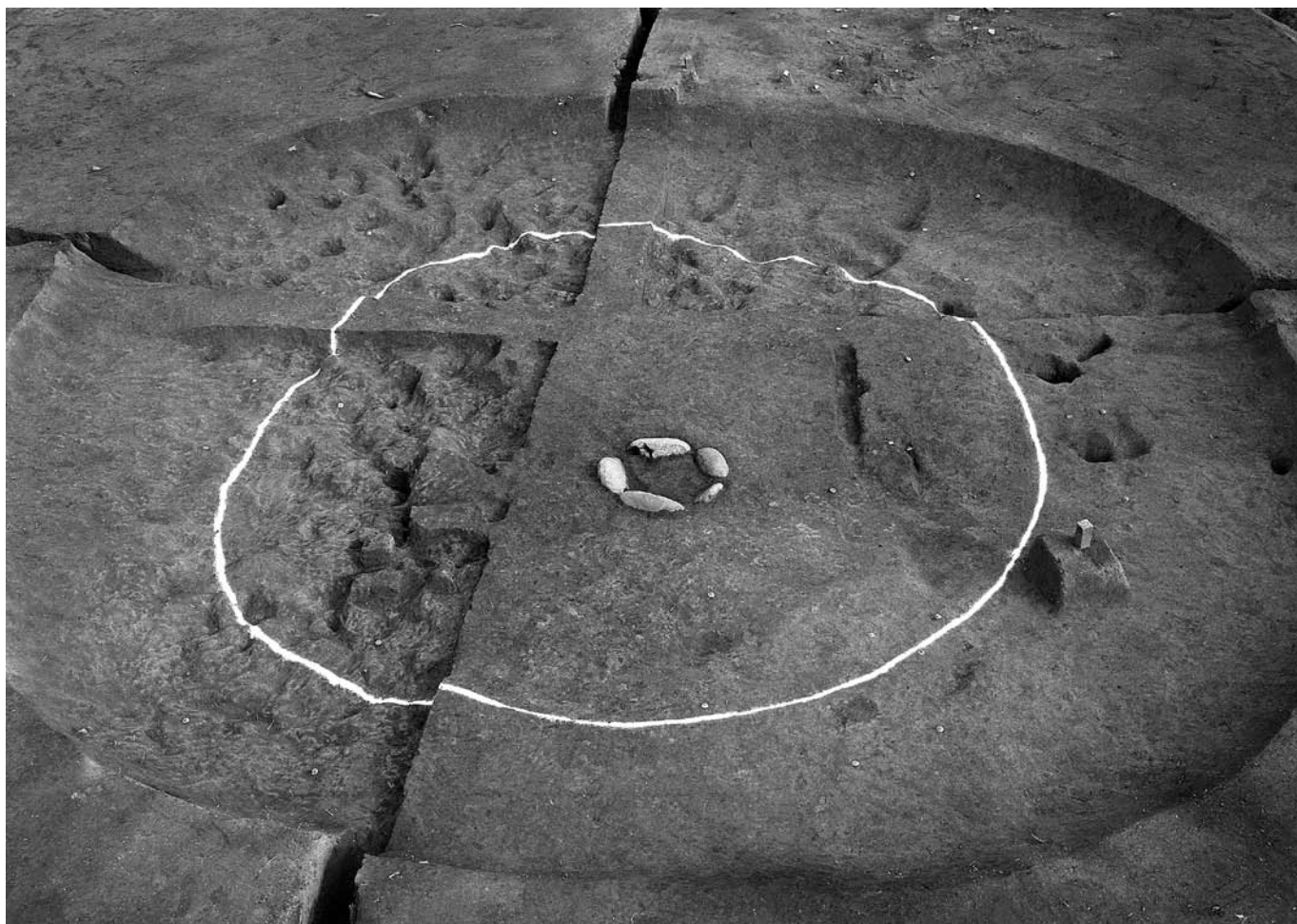
2 3号住居遺物出土状態（西から）



3 3号住居遺物出土状態（西から）



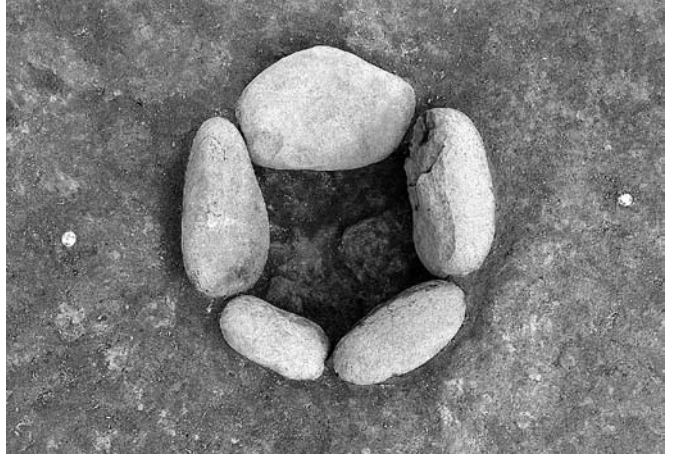
4 3号住居全景（南から）



5 4号住居全景（西から）



1 129号土坑 (北東から)



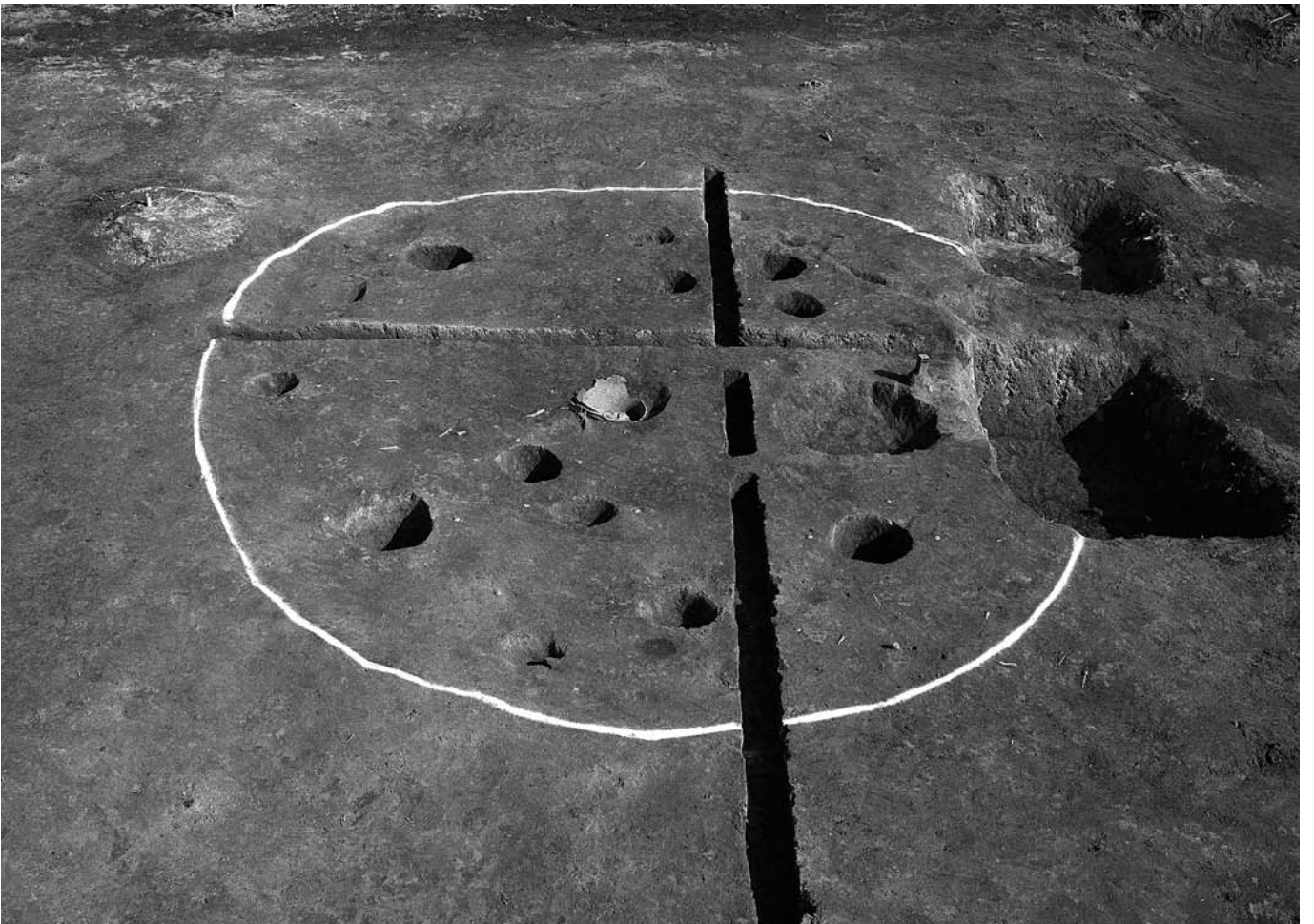
2 4号住居炉 (南西から)



3 4号住居炉掘方 (南西から)



4 5号住居遺物出土状態 (南から)



5 5号住居全景 (南西から)



1 5号住居遺物No.2出土状態(西から)



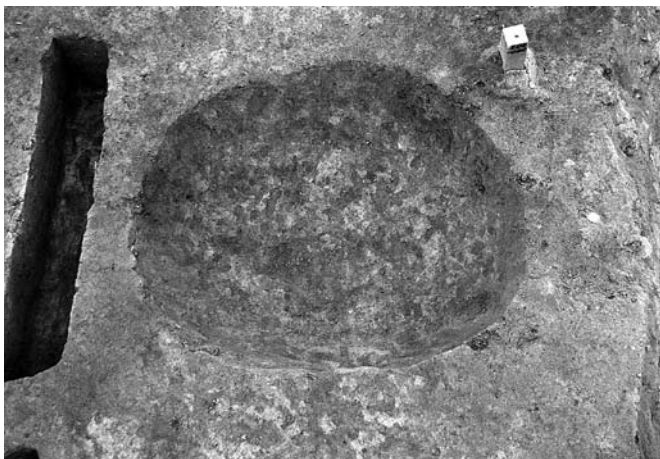
2 5号住居遺物No.5~7出土状態(東から)



3 5号住居埋葬炉(東から)



4 5号住居埋葬炉掘方(南東から)



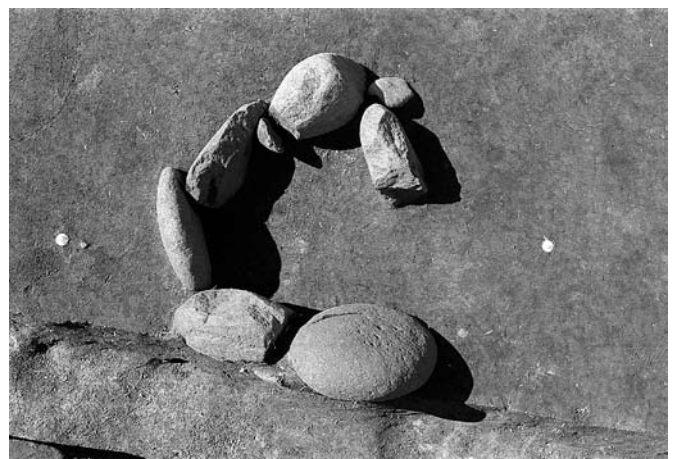
5 5号住居1号土坑(南西から)



6 7号住居全景(東から)



7 7号住居遺物出土状態(東から)



8 7号住居炉(東から)



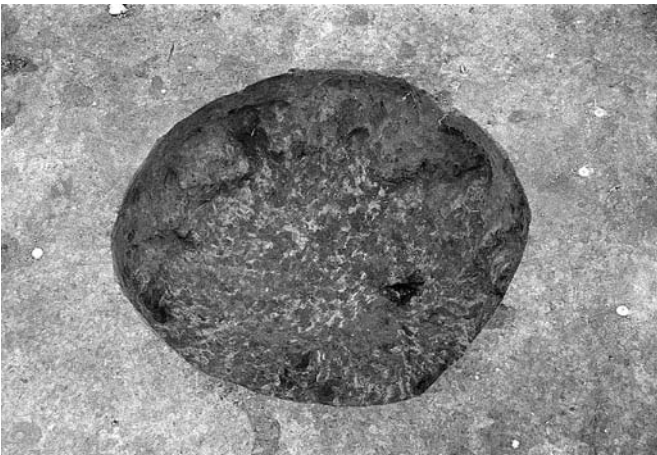
1 7号住居全景（南西から）



2 7号住居炉掘方（東から）



3 90号土坑全景（北東から）



4 91号土坑全景（南西から）



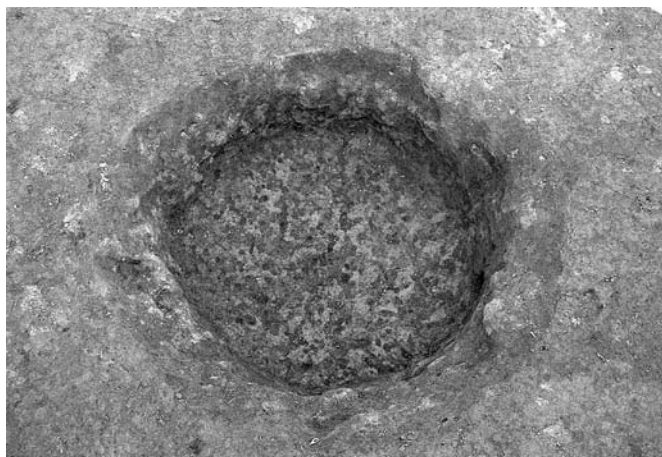
5 92号土坑全景（南東から）



1 93号土坑全景（南東から）



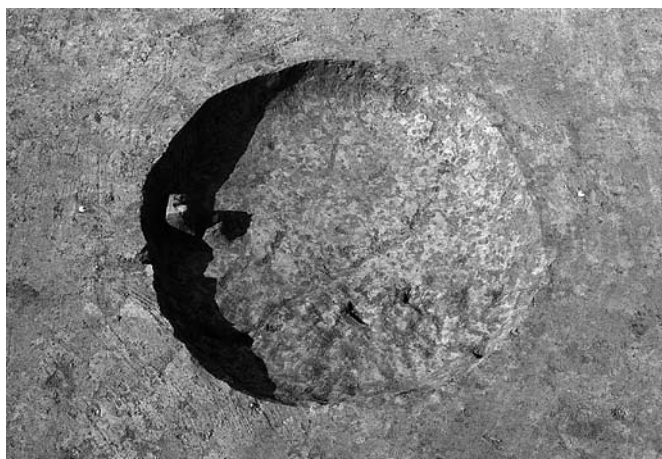
2 97号土坑遺物出土状態（南西から）



3 97号土坑全景（南西から）



4 98号土坑全景（東から）



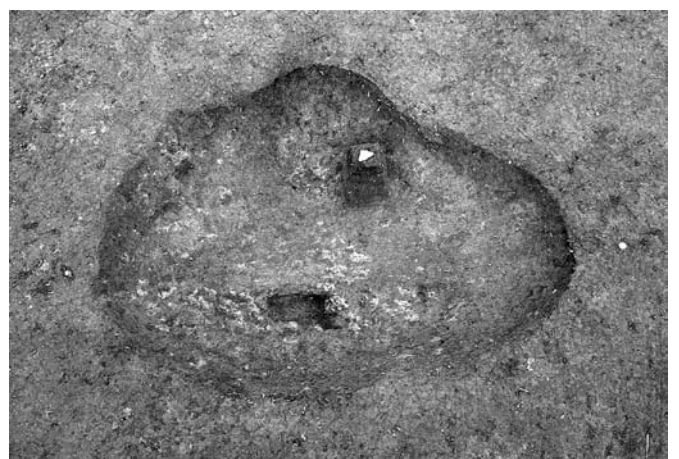
5 99号土坑全景（南東から）



6 101号土坑遺物出土状態（南から）



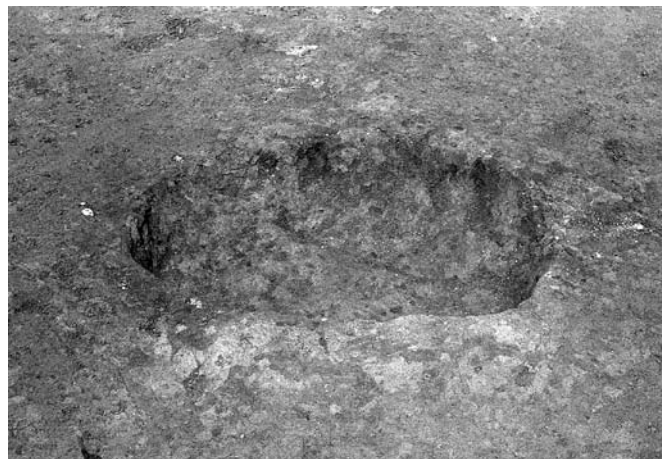
7 101号土坑全景（南から）



8 103号土坑全景（南西から）



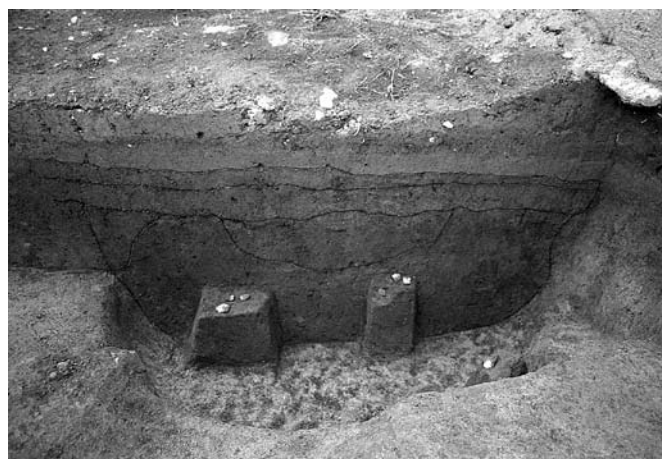
1 104・105号土坑全景（南西から）



2 107号土坑全景（南から）



3 108号土坑全景（南西から）



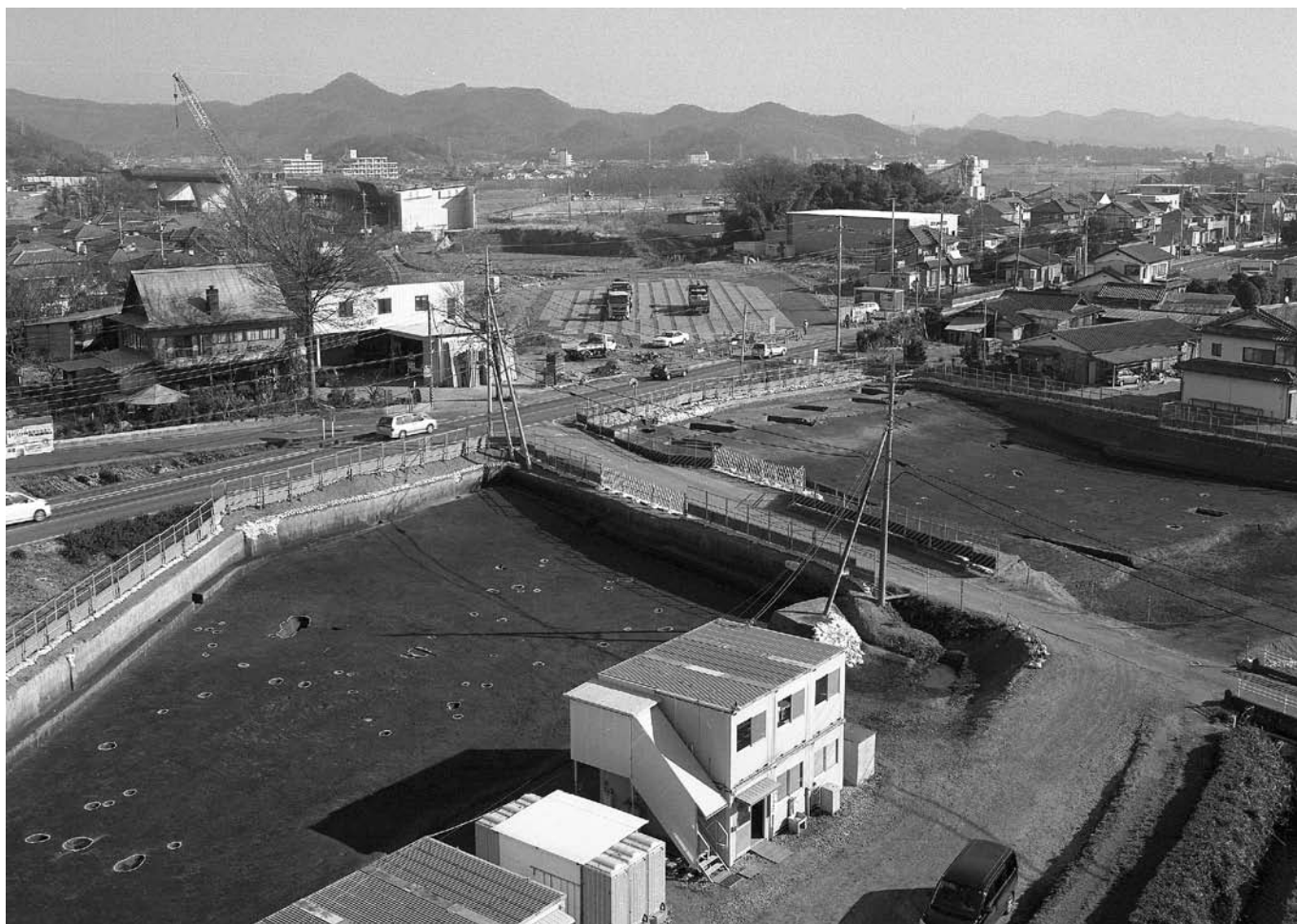
4 109号土坑全景（南東から）



5 1-1区第5面全景（南西から）



1 1-2区第5面全景（北西から）



2 南調査区（1区）第5面全景（南西から）



1 116号土坑遺物出土状態（南東から）



2 116号土坑全景（南東から）



3 121号土坑全景（南から）



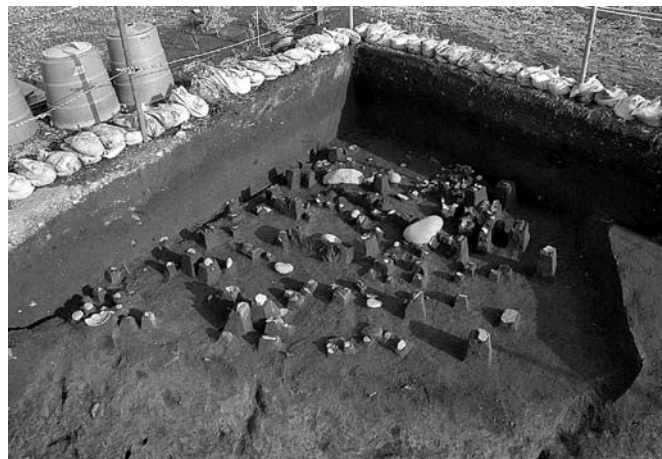
4 124号土坑全景（東から）



5 6号住居全景（北西から）



1 6号住居全景（南西から）



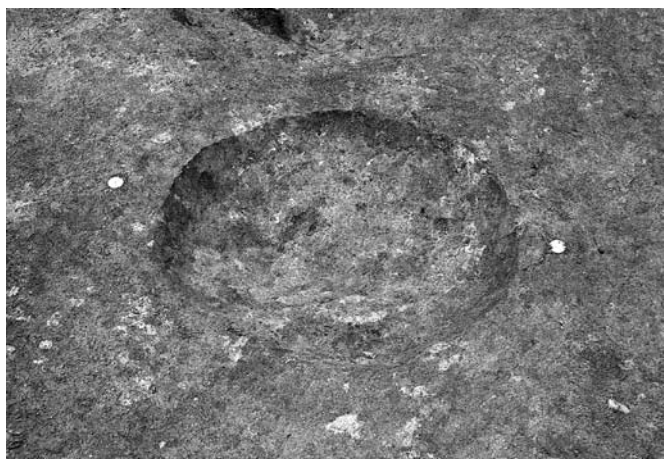
2 6号住居遺物出土状態（北西から）



3 6号住居遺物出土状態（北西から）



4 6号住居遺物No.5出土状態（北東から）



5 6号住居炉全景（南西から）



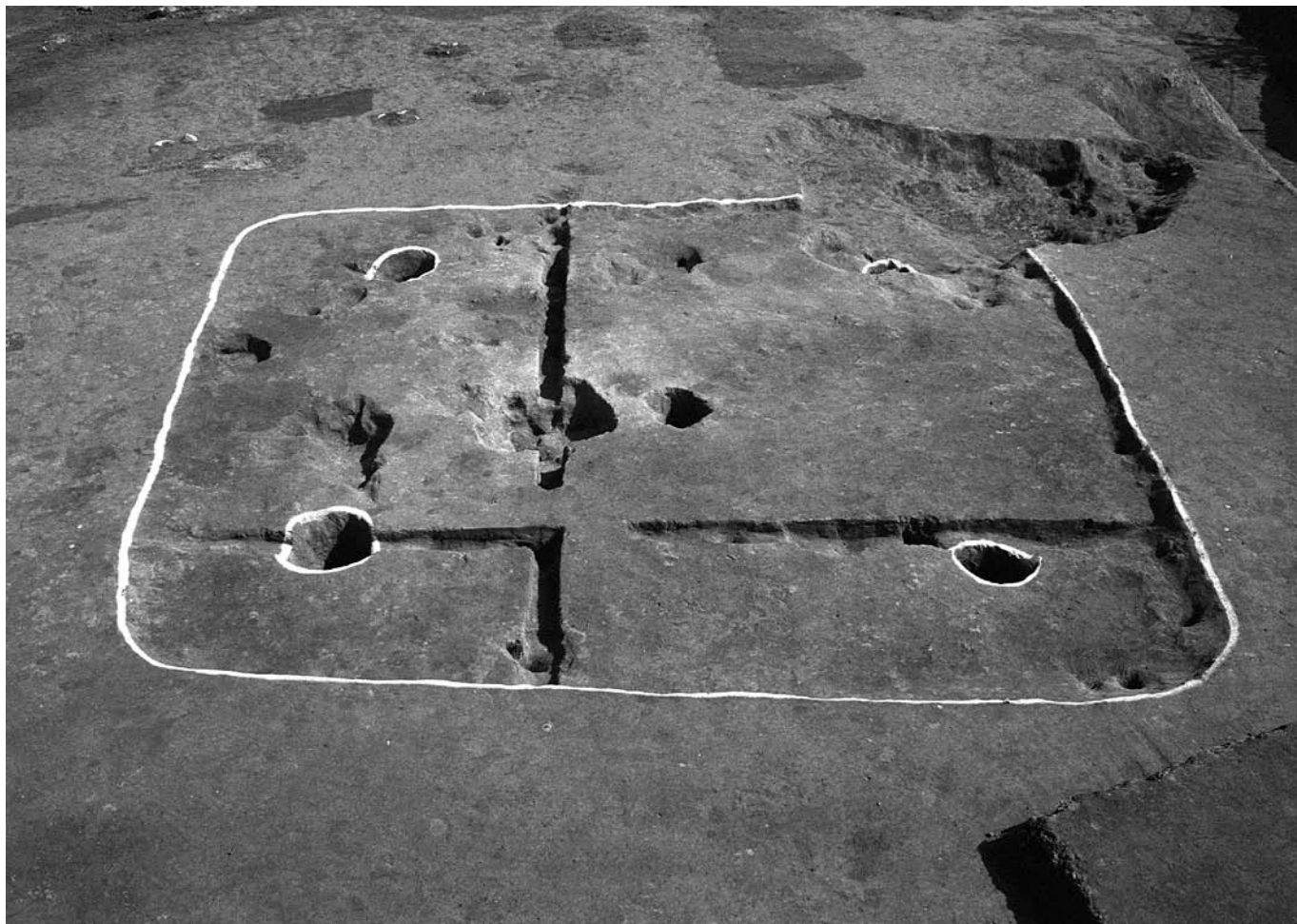
6 6号住居P1断面（南西から）



7 6号住居P1全景（南西から）



8 6号住居P2全景（南西から）



1 9号住居全景（南西から）



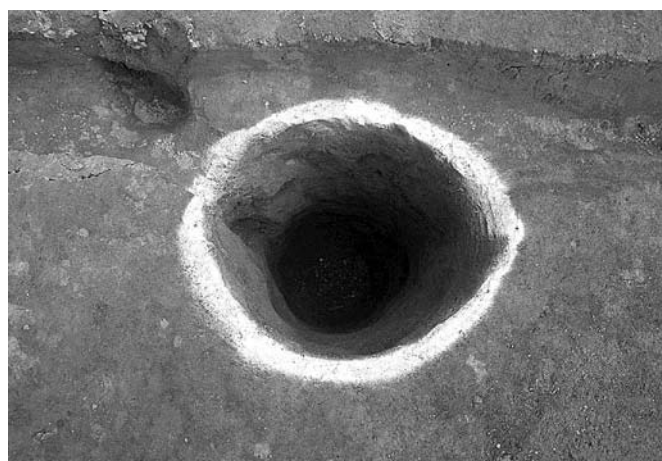
2 9号住居遺物出土状態（南西から）



3 9号住居P 1（南西から）



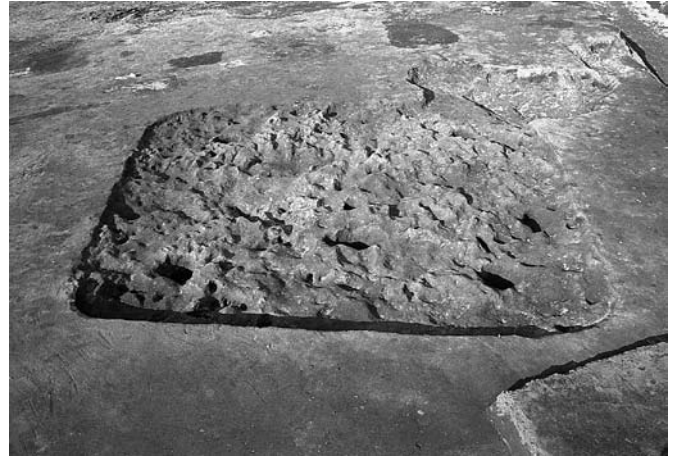
4 9号住居P 2（南西から）



5 9号住居P 3（南西から）



1 9号住居P4 (南西から)



2 9号住居掘方全景 (南西から)



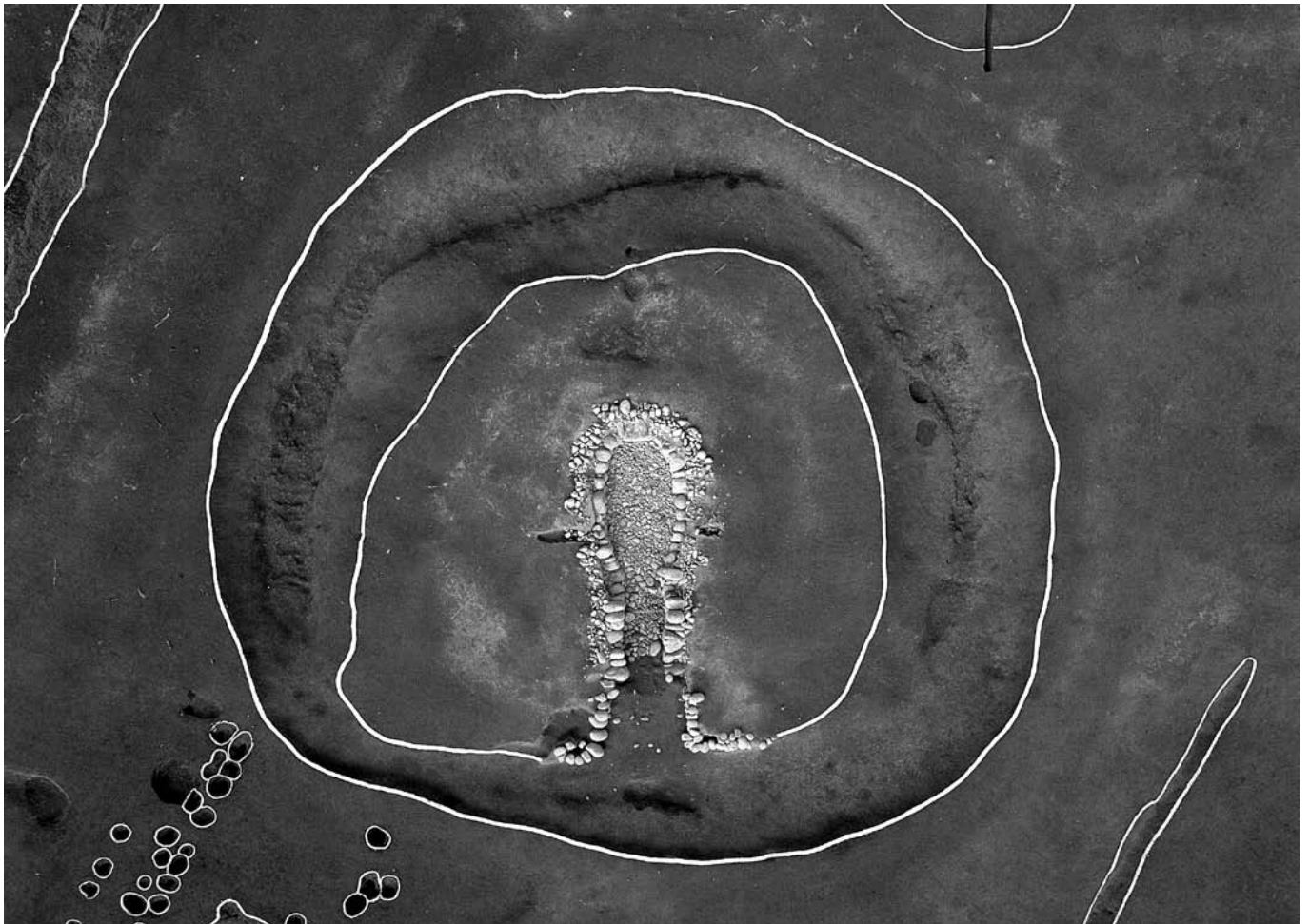
3 1号古墳全景 (南から)



4 1号古墳全景 (東から)



5 1号古墳全景 (南から)



1 1号古墳全景（上が北）



2 1号古墳周堀内礫出土状態（南から）



3 1号古墳南部周堀内礫出土状態（東から）



4 1号古墳周堀断面C-C'（南から）



5 1号古墳周堀断面C-C'（南から）



1 1号古墳周堀北辺（東から）



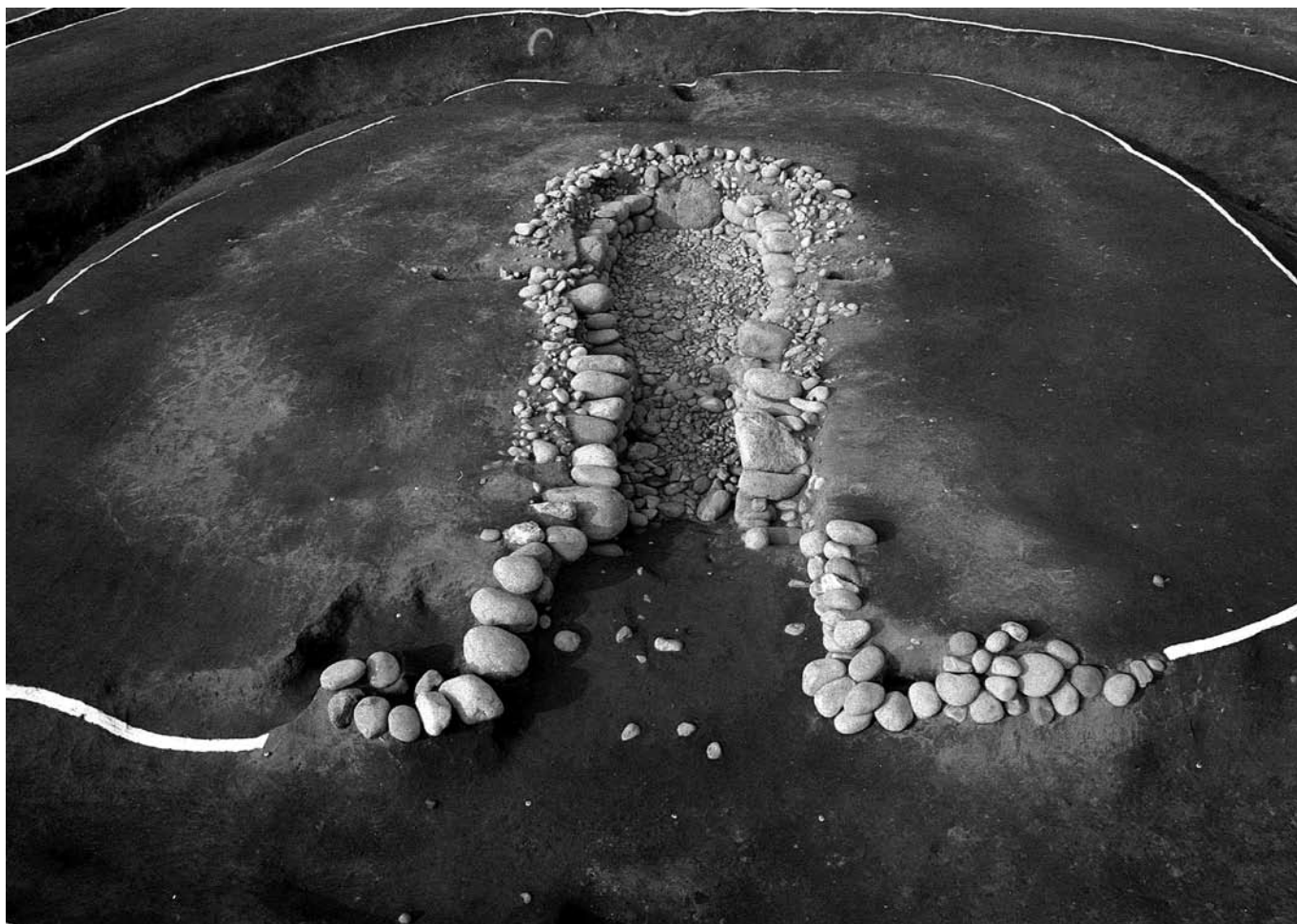
2 1号古墳周堀東辺（北から）



3 1号古墳周堀北辺掘方（東から）



4 1号古墳周堀東辺掘方（北から）



5 1号古墳石室全景（南から）



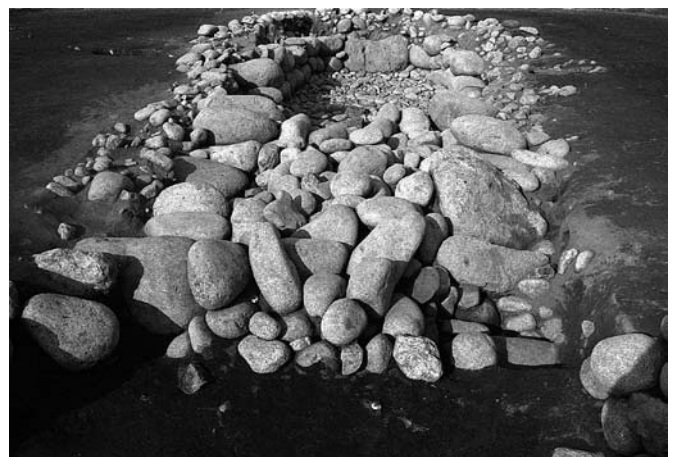
1 1号古墳石室全景（北から）



2 1号古墳石室全景（上が北）



3 1号古墳石室全景閉塞石除去前（南から）



4 1号古墳石室閉塞状態（南から・羨門から内側を見る）



1 1号古墳石室閉塞状態（北から・玄室から外側を見る）



2 1号古墳石室閉塞状態（北東から・玄室から外側を見る）



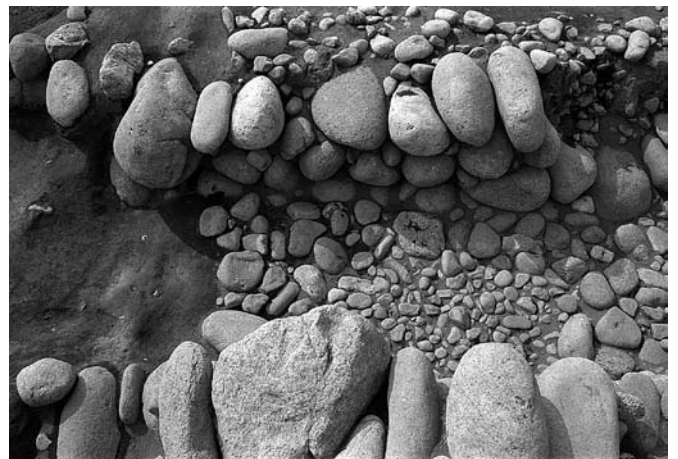
3 1号古墳東翼垣（南西から）



4 1号古墳西翼垣（南東から）



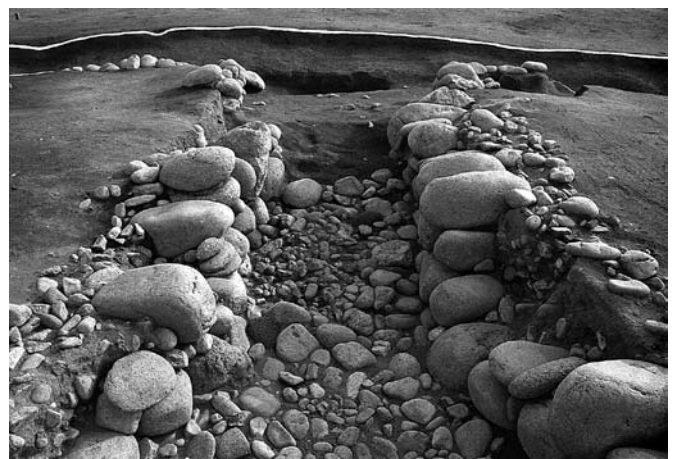
5 1号古墳羨道東壁（西から）



6 1号古墳羨道西壁（東から）



7 1号古墳羨門部（南から）



8 1号古墳玄門から羨道（北から）



1 1号古墳玄室（南東から）



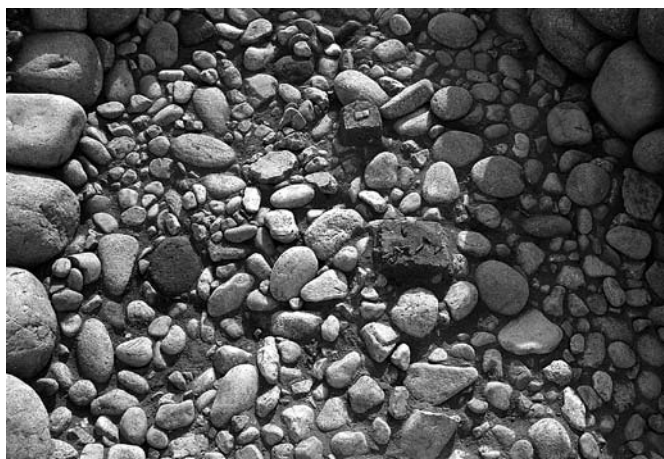
2 1号古墳奥壁（南から）



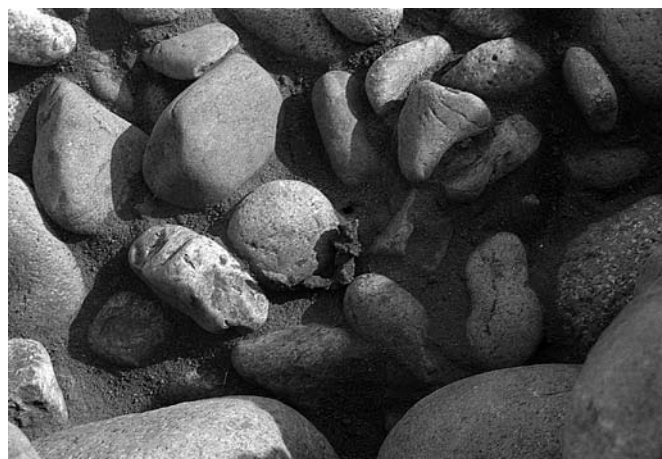
3 1号古墳玄室西壁（東から）



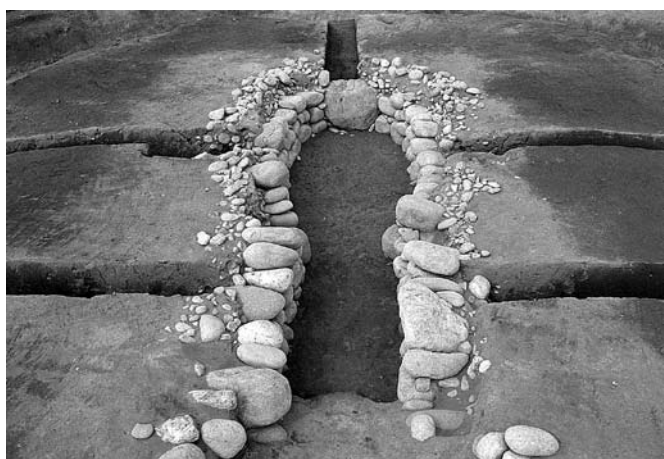
4 1号古墳玄室東壁（西から）



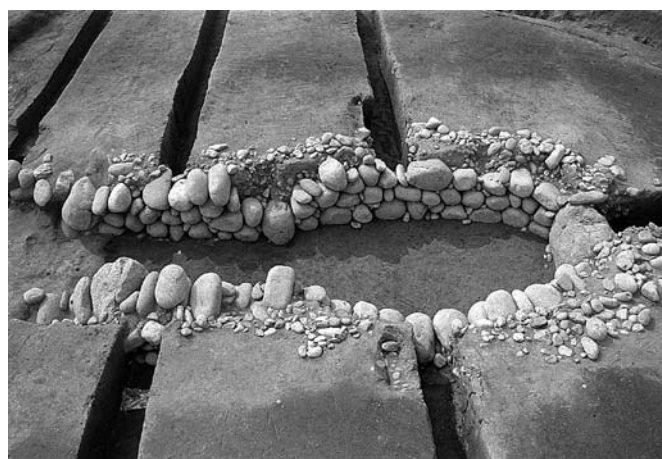
5 1号古墳石室遺物出土状態（北から）



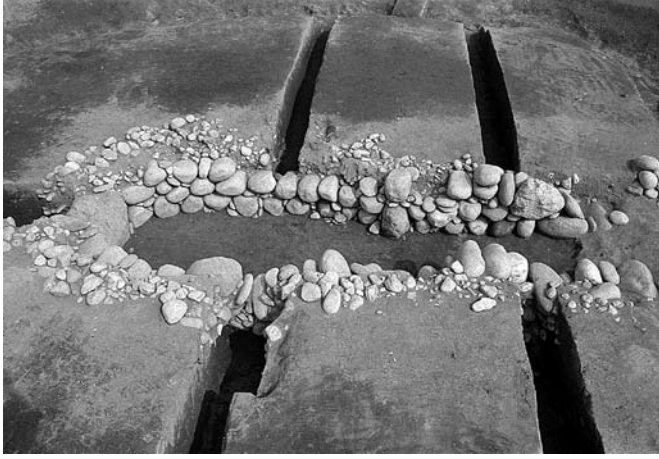
6 1号古墳石室遺物出土状態（北から）



7 1号古墳石室床石除去後（南から）



8 1号古墳石室床石除去後（東から）



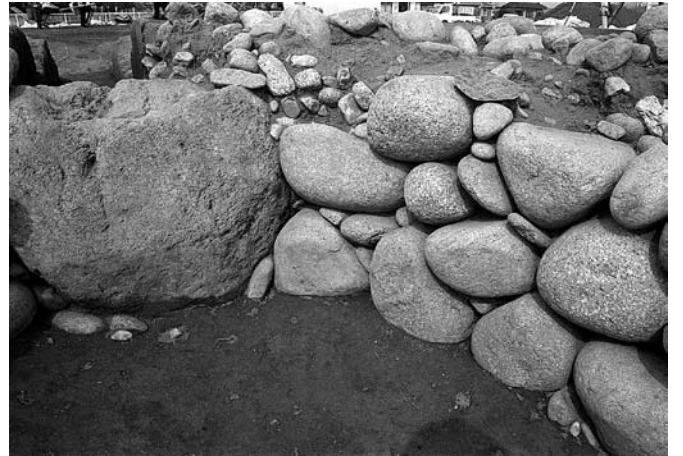
1 1号古墳石室床石除去後（西から）



2 1号古墳石室床石除去後奥壁（南から）



3 1号古墳石室床石除去後奥壁と西壁（南東から）



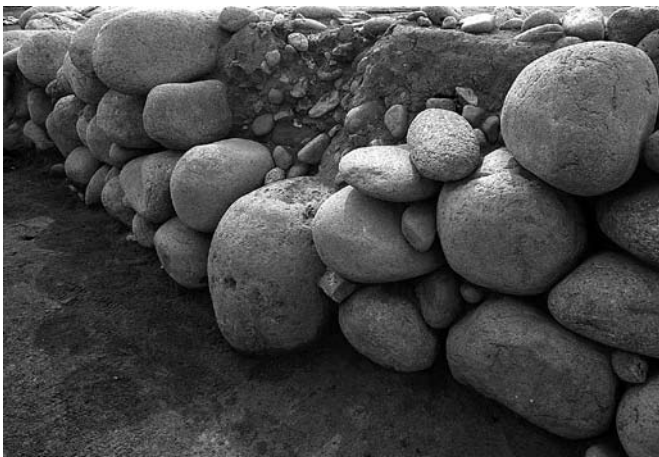
4 1号古墳石室床石除去後奥壁と東壁（南西から）



5 1号古墳石室床石除去後玄室西壁（東から）



6 1号古墳石室床石除去後玄室東壁（西から）



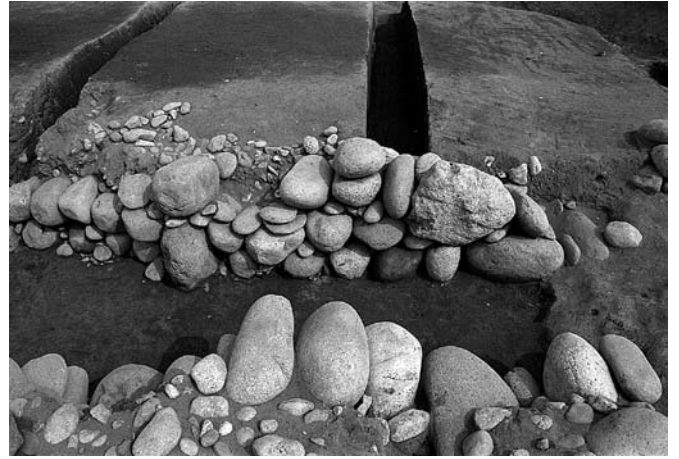
7 1号古墳石室床石除去後西側玄門部（北東から）



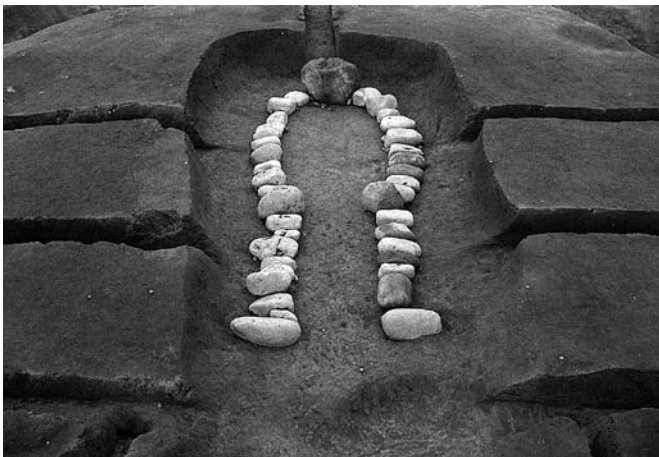
8 1号古墳石室床石除去後東側玄門部（北西から）



1 1号古墳石室床石除去後羨道西壁（東から）



2 1号古墳石室床石除去後羨道東壁（西から）



3 1号古墳石室根石（南から）



4 1号古墳石室根石（東から）



5 1号古墳石室根石除去後（南から）



6 1号古墳石室根石除去後（南東から）



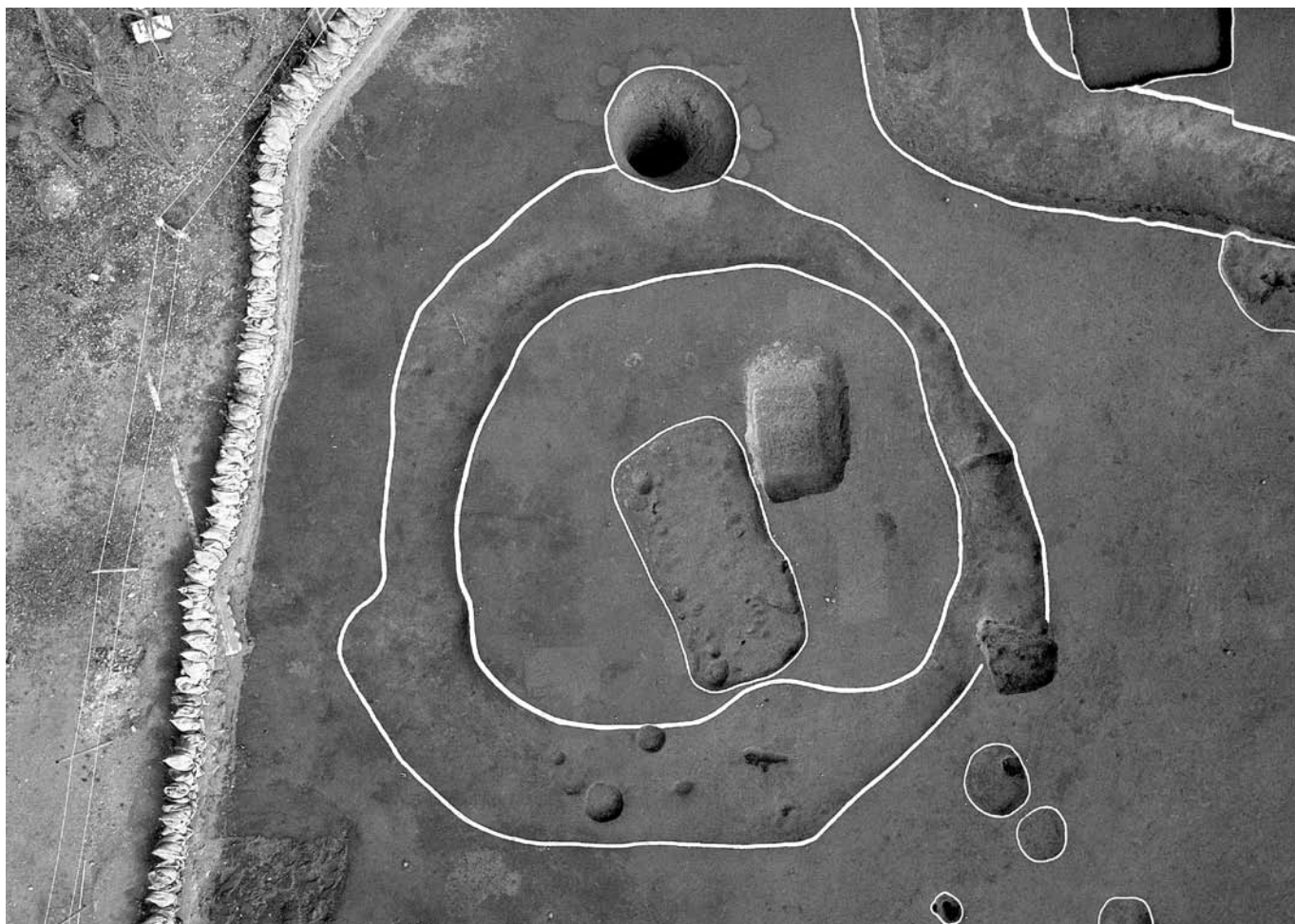
7 1号古墳石室掘方全景（南から）



8 1号古墳石室掘方（南西から）



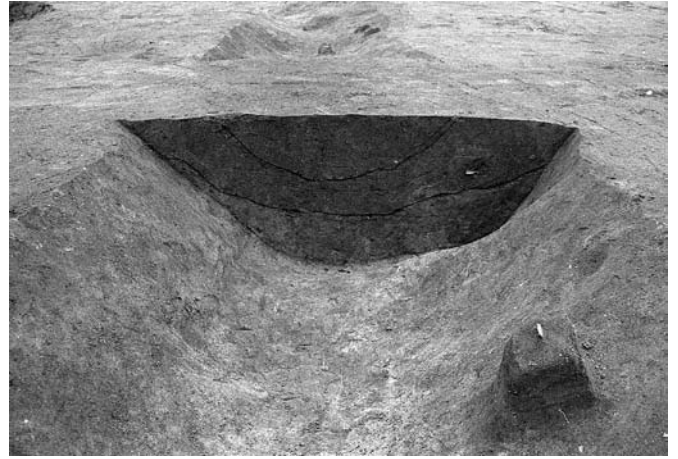
1 2号古墳全景（南から）



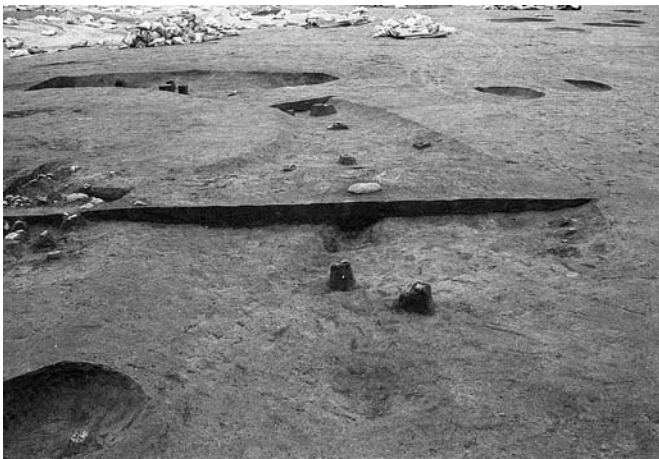
2 2号古墳全景（石室掘方、上が北東）



1 2号古墳周堀断面A-A' (西から)



2 2号古墳周堀断面B-B' (南から)



3 2号古墳周堀断面C-C' (西から)



4 2号古墳周堀断面D-D' (南から)



5 2号古墳周堀遺物出土状態南西部 (南西から)



6 2号古墳周堀遺物出土状態北西部 (南西から)



7 2号古墳周堀遺物出土状態北部 (東から)



8 2号古墳周堀遺物出土状態南部 (東から)



1 2号古墳石室全景（南西から）



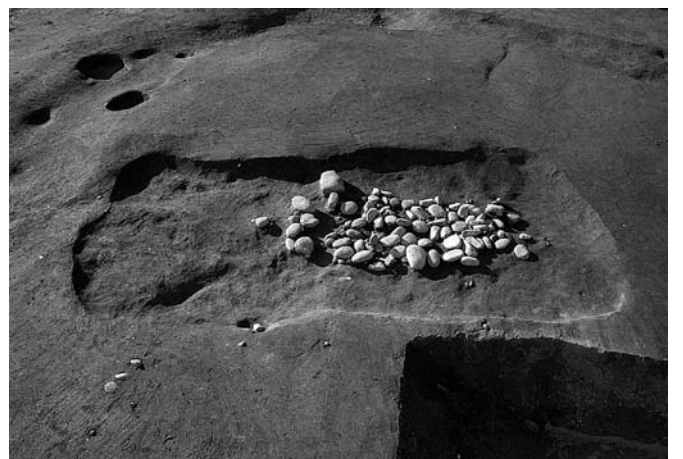
2 2号古墳石室全景（南から）



3 2号古墳石室全景（西から）



4 2号古墳石室中央部（西から）



5 2号古墳石室舗石面全景（東から）



1 2号古墳石室鋪石面全景（南から）



2 2号古墳石室鋪石（南から）



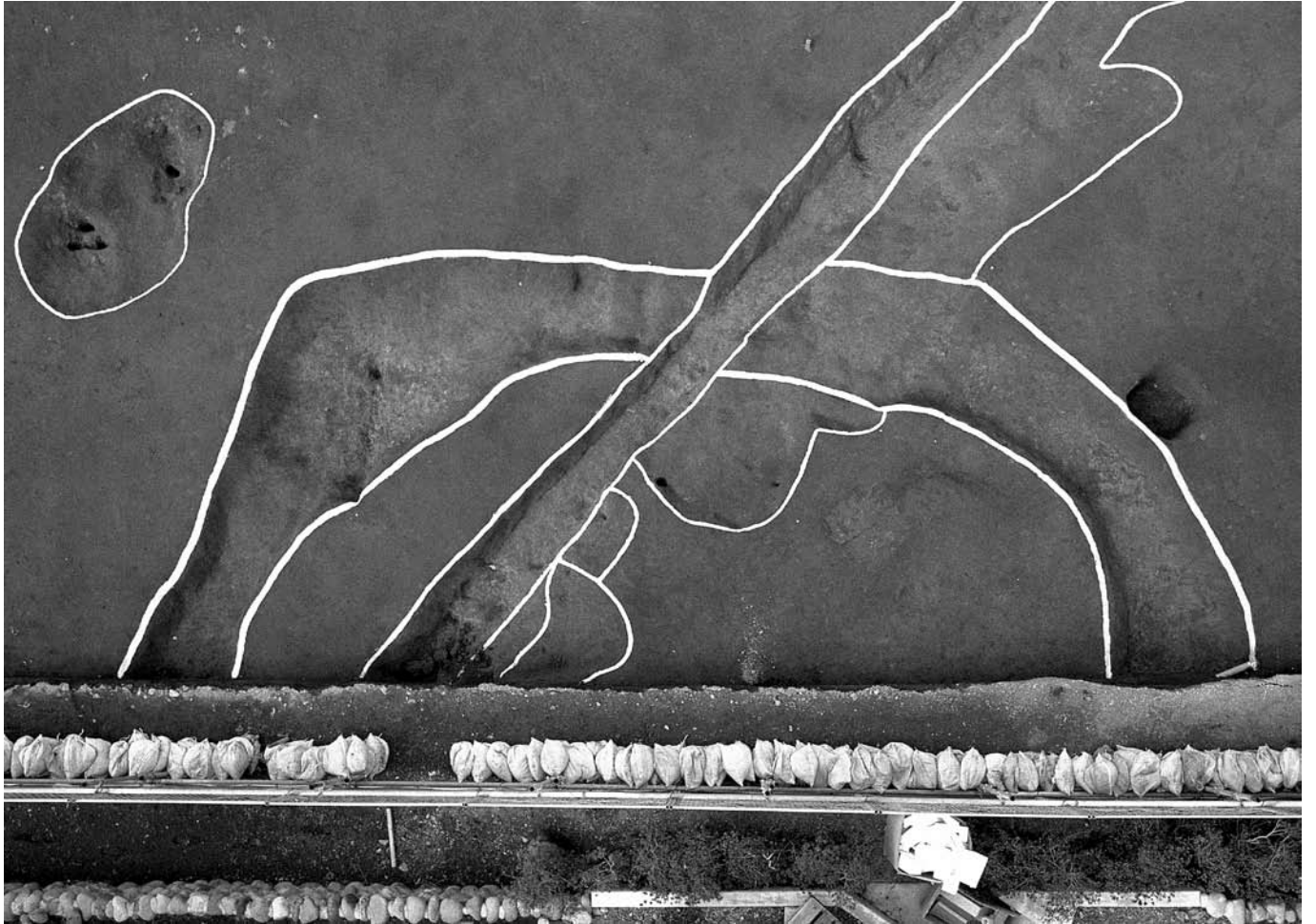
3 2号古墳石室鋪石（西から）



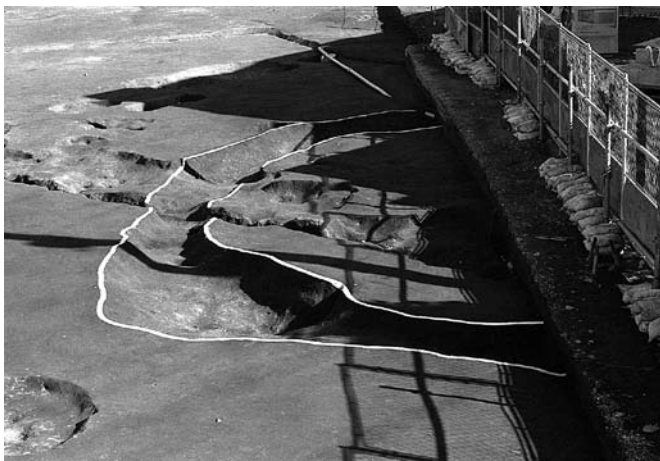
4 2号古墳石室掘方（南から）



5 2号古墳石室掘方（東から）



1 1号周溝墓全景（上が北西）



2 1号周溝墓全景（南西から）



3 1号周溝墓全景（北西から）



4 2号周溝墓周溝断面C-C'（南東から）



5 2号周溝墓周溝断面D-D'（南西から）



1 2号周溝墓全景（上が北東）



2 2号周溝墓全景（南西から）



1 2号周溝墓周溝断面E-E'(北西から)



2 2号周溝墓周溝断面F-F'(南西から)



3 2号周溝墓周溝北東辺遺物出土状態(西から)



4 2号周溝墓周溝北西辺遺物出土状態(南西から)



5 2号周溝墓周溝南西辺遺物出土状態(南から)



6 2号周溝墓周溝南西辺遺物No.17出土状態(南東から)



7 2号周溝墓周溝北東辺(南東から)



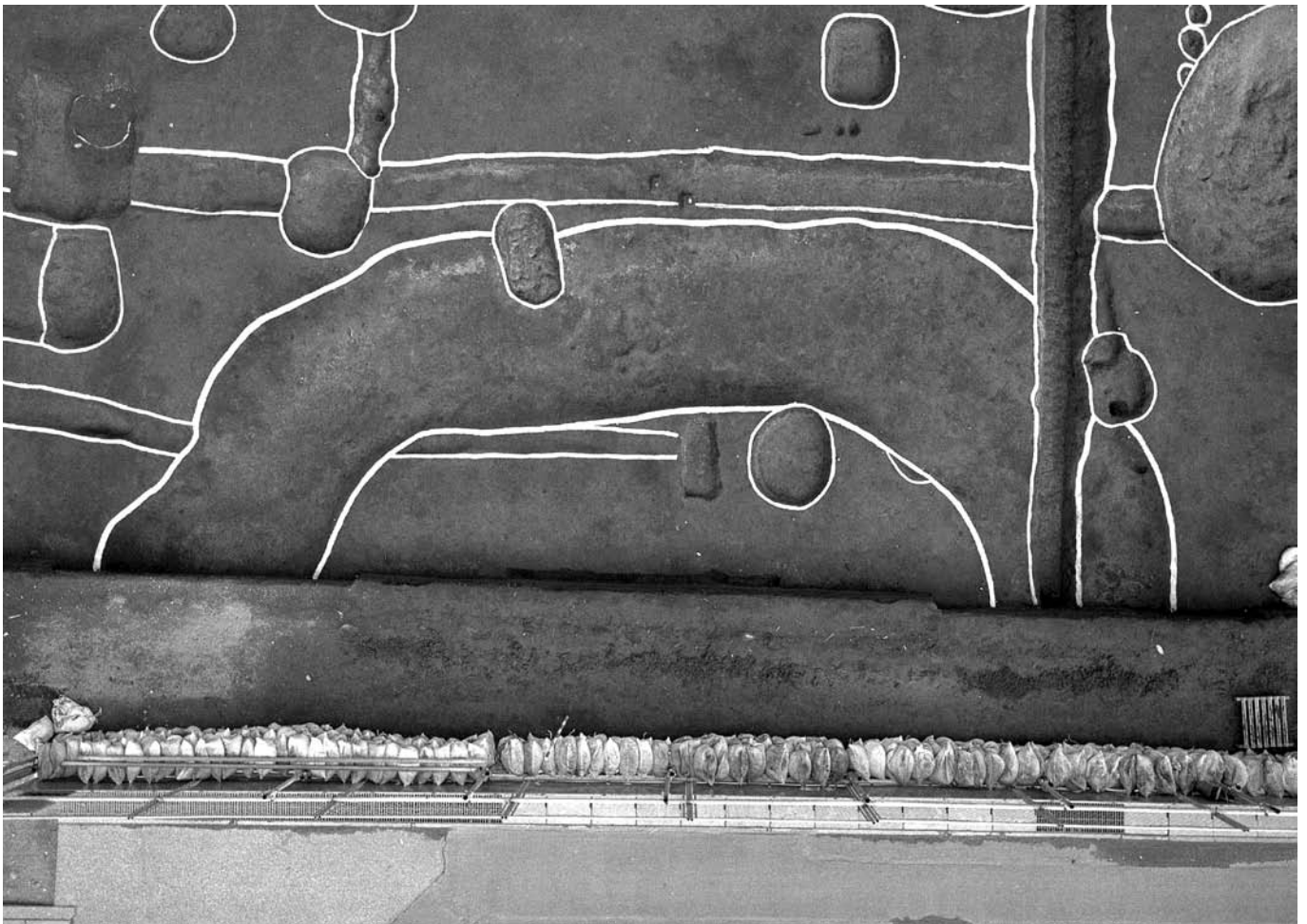
8 2号周溝墓周溝南東辺(北東から)



1 2号周溝墓周溝南西辺（北西から）



2 2号周溝墓周溝北西辺（南西から）



3 3号周溝墓全景（上が北東）



4 3号周溝墓全景（南東から）



5 3号周溝墓全景（北東から）



1 3号周溝墓周溝遺物出土状態（東から）



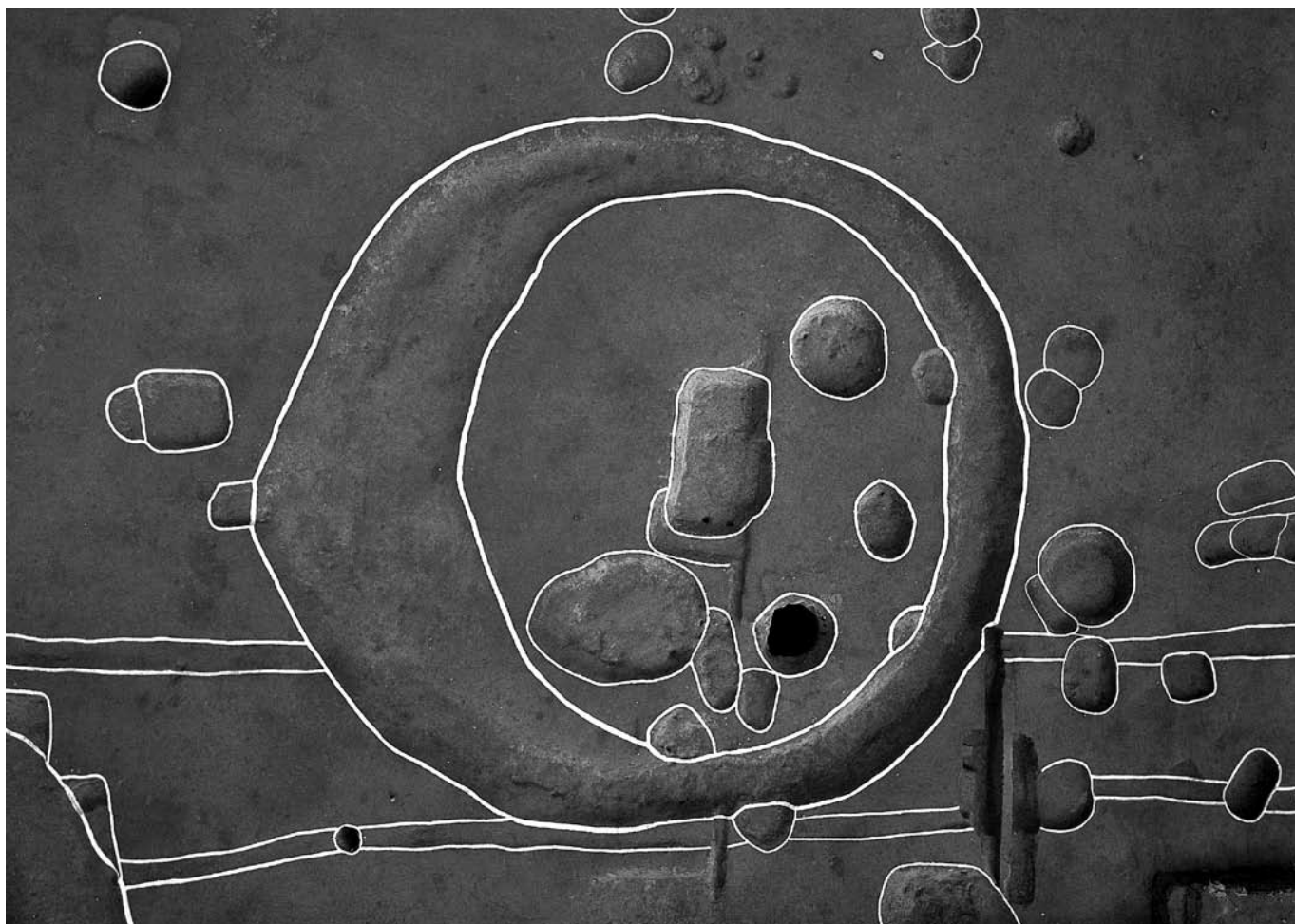
2 3号周溝墓周溝西半部（北東から）



3 3号周溝墓周溝北辺（北西から）



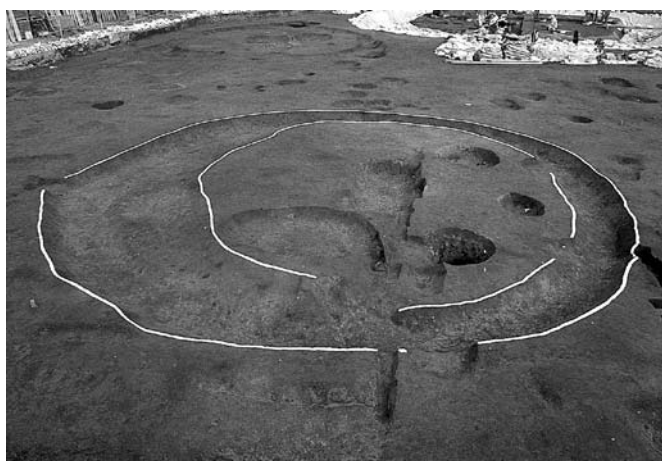
4 3号周溝墓周溝北辺（南東から）



5 4号周溝墓全景（上が北東）



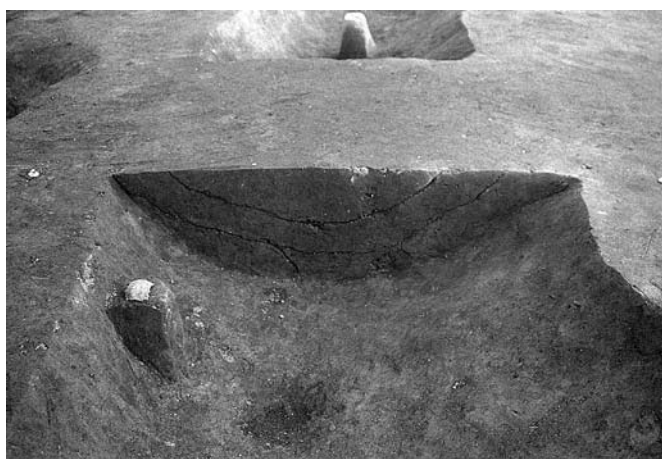
1 4号周溝墓全景（南東から）



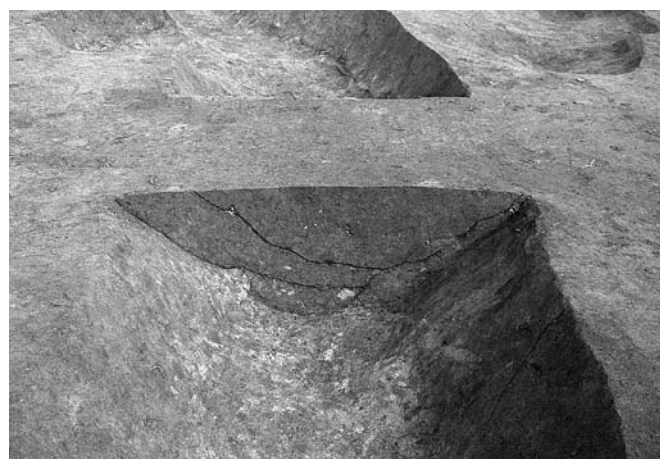
2 4号周溝墓全景（南西から）



3 4号周溝墓全景（北東から）



4 4号周溝墓周溝断面A-A'（北西から）



5 4号周溝墓周溝断面B-B'（南西から）



1 4号周溝墓周溝断面C-C' (北西から)



2 4号周溝墓周溝断面D-D' (南西から)



3 5号周溝墓全景 (上が北東)



4 5号周溝墓周溝断面A-A' (東から)



5 5号周溝墓周溝断面C-C' (北東から)



1 5号周溝墓全景（南東から）



2 6号周溝墓全景（上が北）



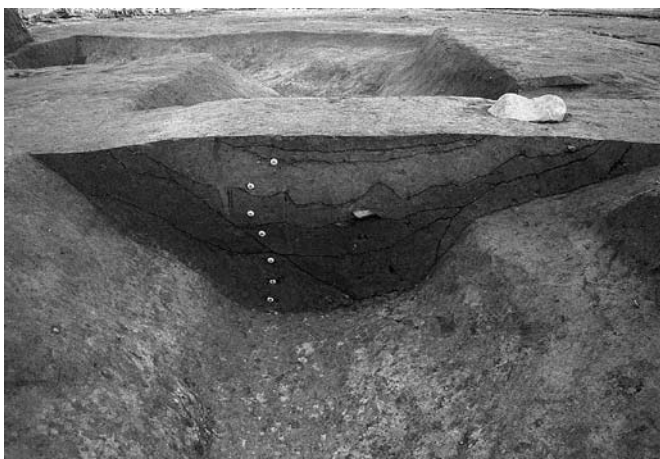
1 6号周溝墓全景（東から）



2 6号周溝墓全景（西から）



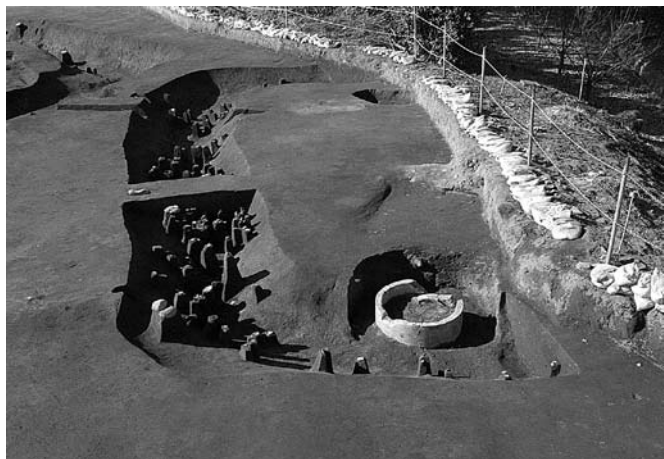
3 6号周溝墓周溝断面A-A'（南東から）



4 6号周溝墓周溝断面B-B'（西から）



5 6号周溝墓周溝断面C-C'（南から）



1 6号周溝墓周溝遺物出土状態（東から）



2 6号周溝墓周溝南辺西半分遺物出土状態（北から）



3 6号周溝墓周溝南辺東半部遺物出土状態（北から）



4 6号周溝墓周溝東端部（南から）



5 6号周溝墓周溝南辺（西から）



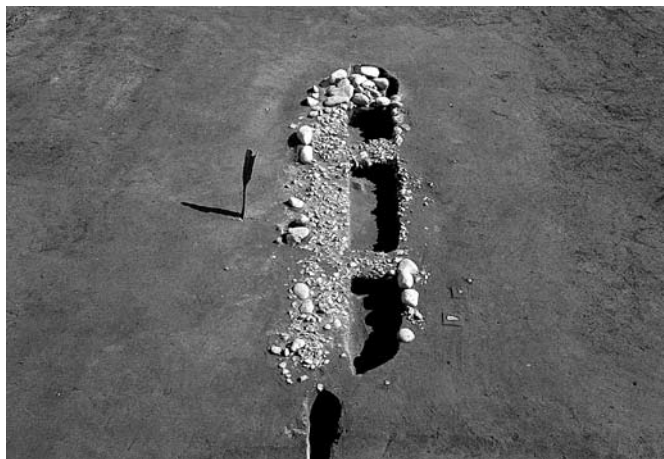
6 6号周溝墓周溝西端部（南東から）



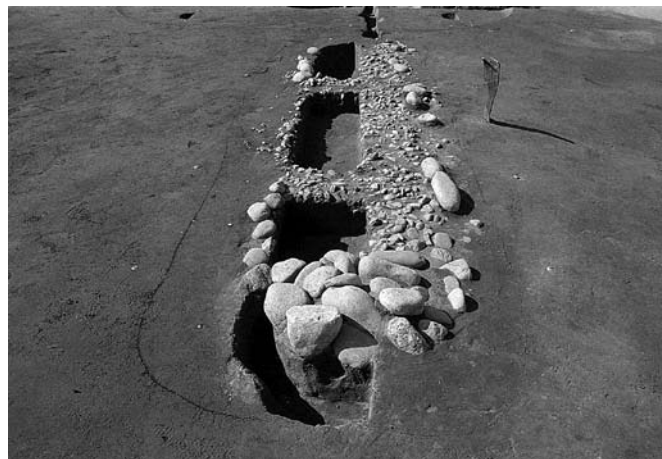
7 43号土坑遺物出土状態（南東から）



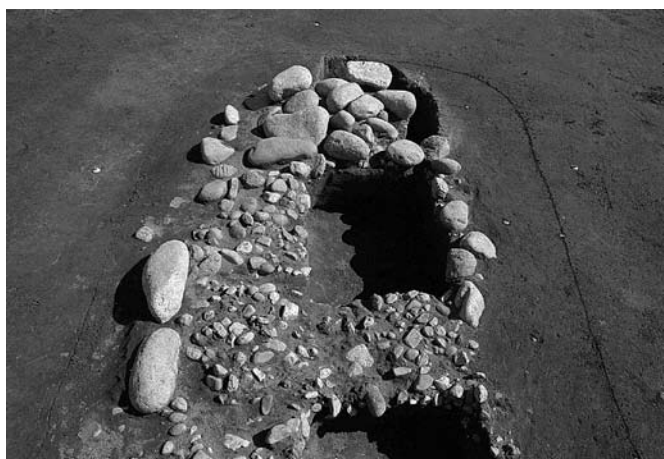
8 43号土坑全景（北西から）



1 86号土坑全景（西から）



2 86号土坑全景（東から）



3 86号土坑東半部（西から）



4 86号土坑断面（西から）



5 86号土坑掘方全景（西から）



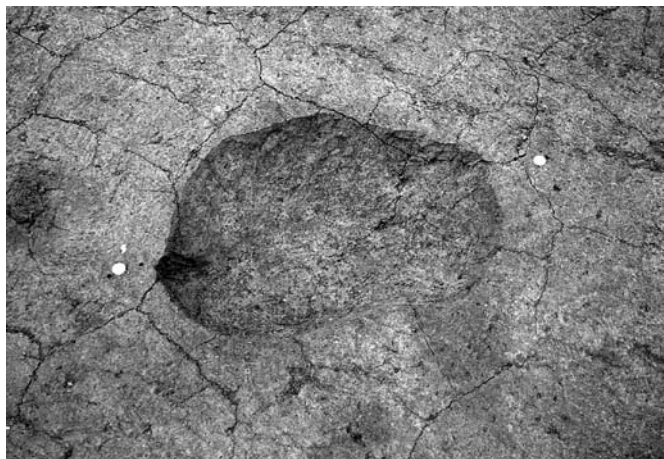
6 86号土坑掘方全景（南から）



7 117号土坑全景（南西から）



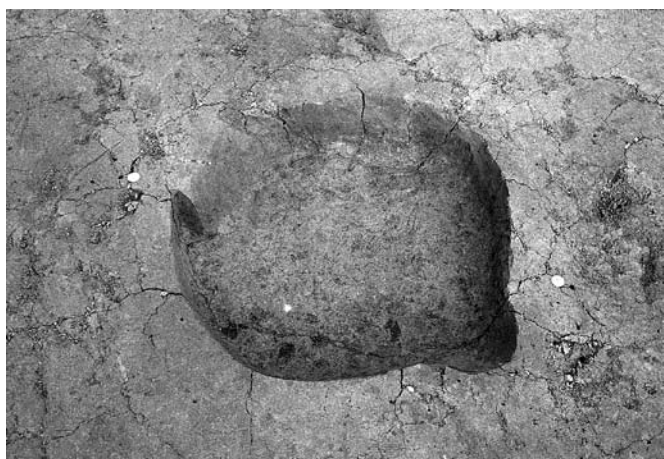
8 118号土坑全景（南から）



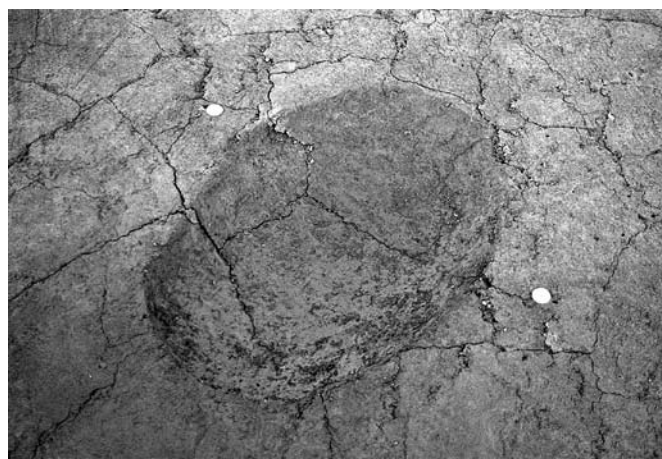
1 120号土坑全景（南西から）



2 122号土坑遺物出土状態（南西から）



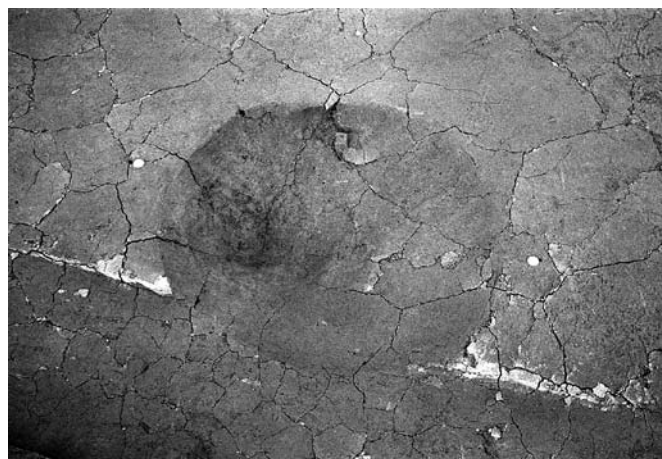
3 122号土坑全景（南西から）



4 123号土坑全景（南から）



5 125号土坑全景（南から）



6 126号土坑全景（南から）



7 127号土坑全景（南西から）



8 128号土坑全景（南から）



1 南調査区（1区）第4面水田全景（上が北東）



2 1-1区第4面水田全景（上が北東）



1 1-2区第4面水田全景（上が北東）



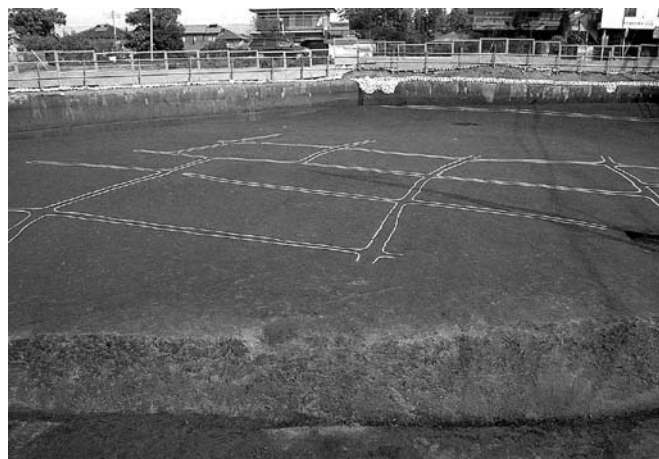
2 1-1区第4面水田西半部（南から）



3 1-1区第4面水田中央部（南西から）



4 1-1区第4面水田東半部（南西から）



5 1-2区第4面水田東半部（南西から）



1 1-1区第3面畠 (南西から)



2 1-2区第3面畠 (南西から)



1 1-1区第3面島 (北東から)



2 1-1区第3面島 (南西から)



3 1-1区第3面島 (畝間完掘後、南から)



4 1-1区第3面島断面A-A'西半部 (南西から)



5 1-1区第3面島断面B-B'東半部 (南西から)



6 1-2区第3面島 (北西から)



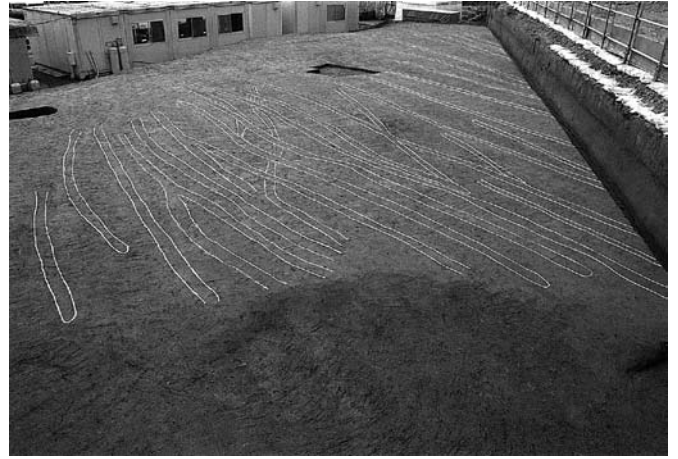
7 1-2区第3面島 (南東から)



8 1-2区第3面島断面E-E'東半部 (南西から)



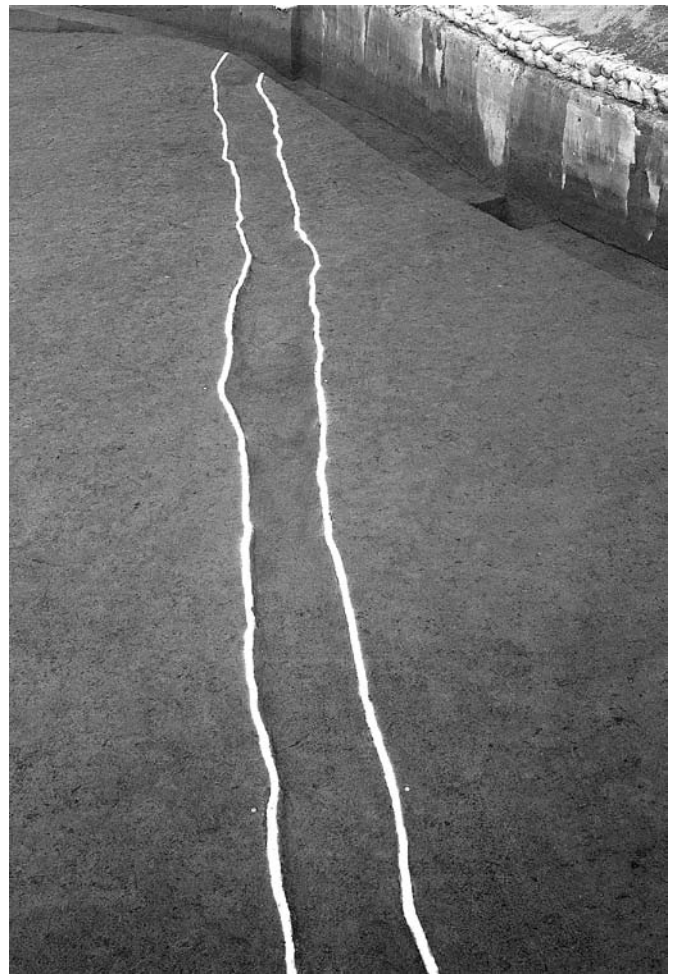
1 1-2区第3面直上島 (西から)



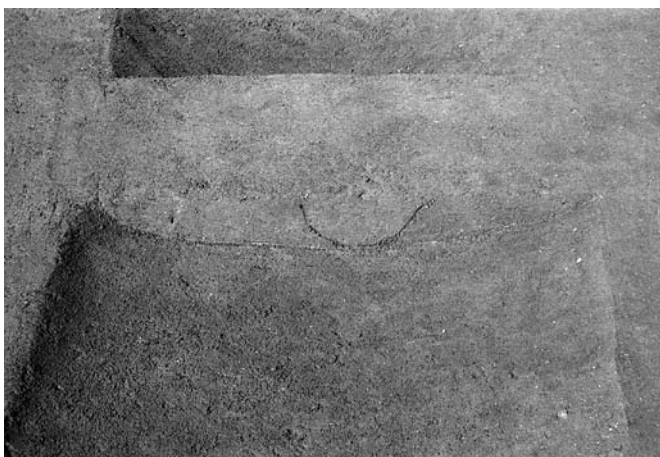
2 1-2区第3面直上島 (北東から)



3 18号溝 (1-1区部分) 全景 (南東から)



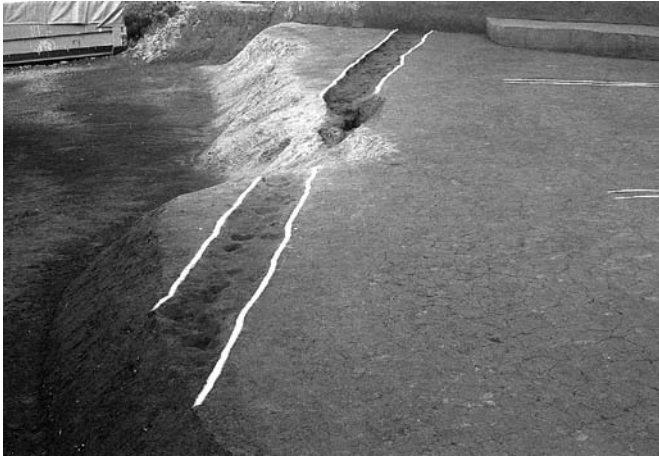
4 18号溝 (1-2区部分) 全景 (南東から)



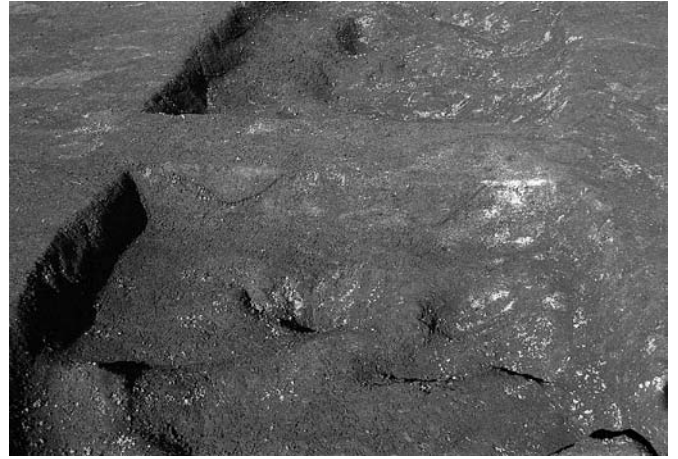
5 18号溝断面A-A' (南東から)



6 18号溝断面C-C' (南東から)



1 19号溝全景 (東から)



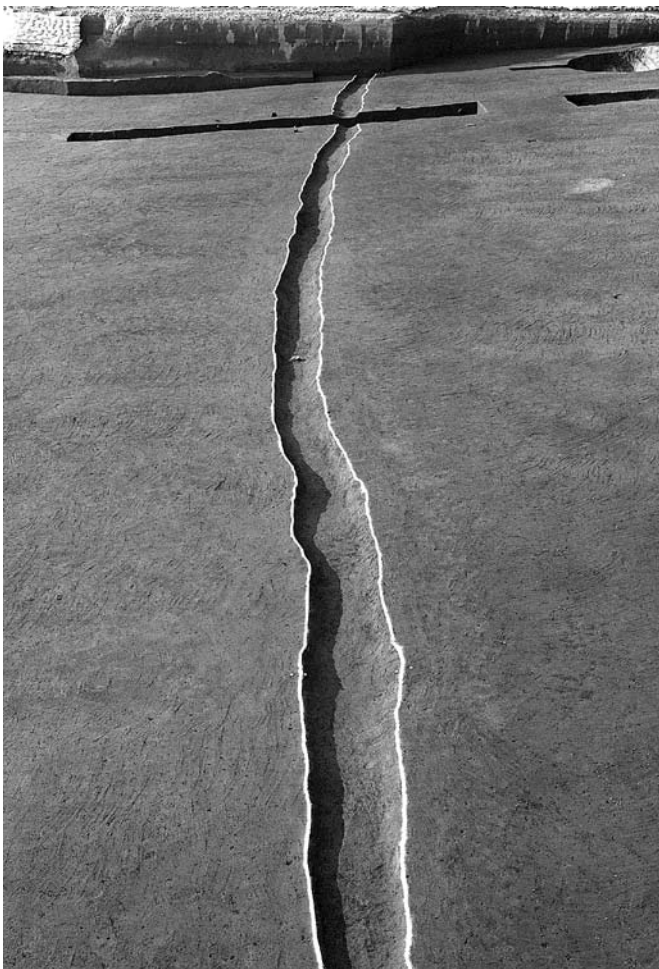
2 19号溝断面 A-A' (南東から)



3 21号溝全景 (南から)



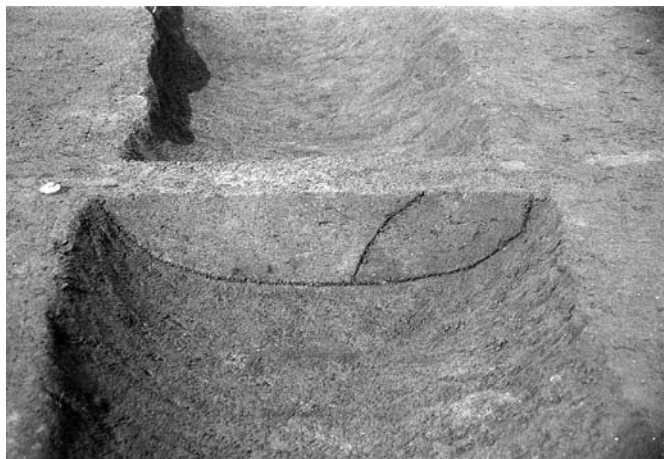
4 21号溝断面 A-A' (南西から)



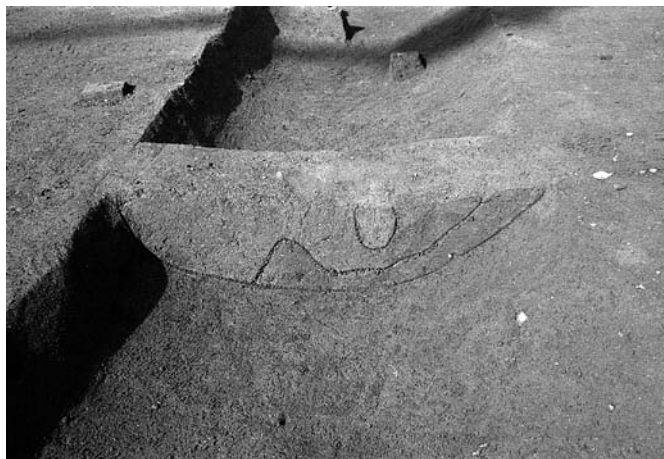
5 20号溝 (1-1区部分) 全景 (南東から)



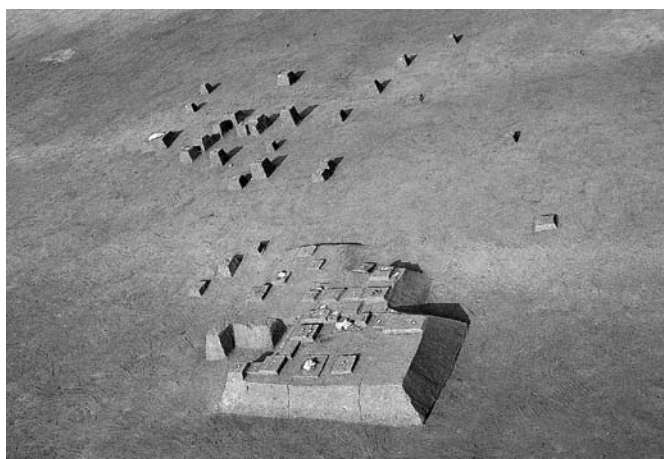
6 20号溝 (1-2区部分) 全景 (南東から)



1 20号溝断面A-A' (南東から)



2 20号溝断面C-C' (南東から)



3 1-1区第4面遺物集中部 (1号が手前、2号は奥、南から)



4 1-2区第4面3号遺物集中部 (南から)



5 1号住居全景 (北から)



1 1号住居全景（東から）



2 1号住居遺物出土状態（北から）



3 1号住居掘方全景（北から）



4 1号住居掘方遺物No.2出土状態（南から）



5 2号道路状遺構全景（上が北）



1 2号道路状遺構全景（北西から）



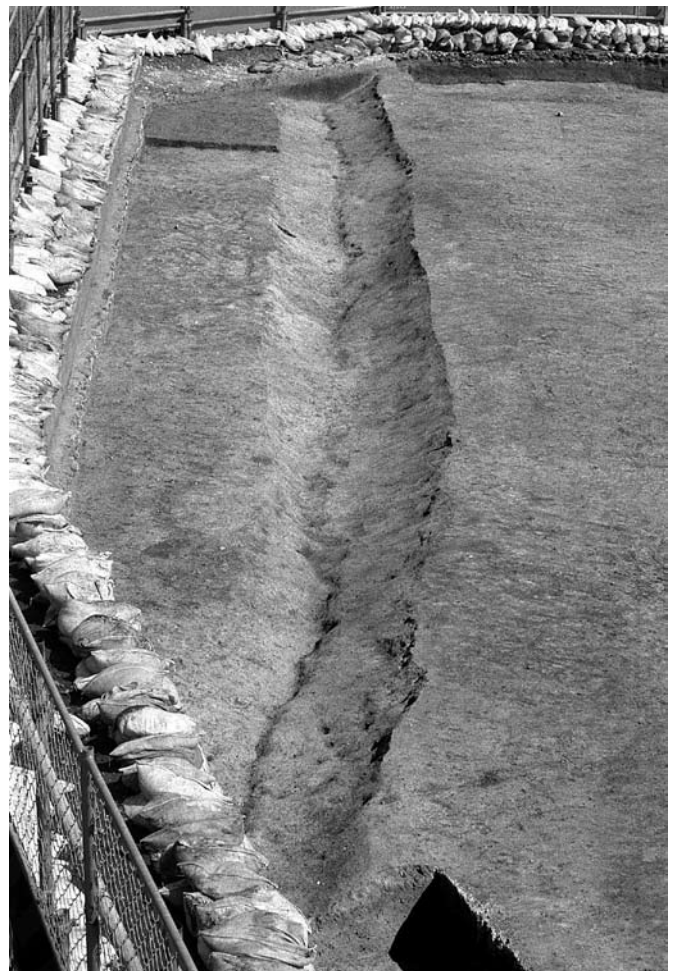
2 2号道路状遺構全景（北西から）



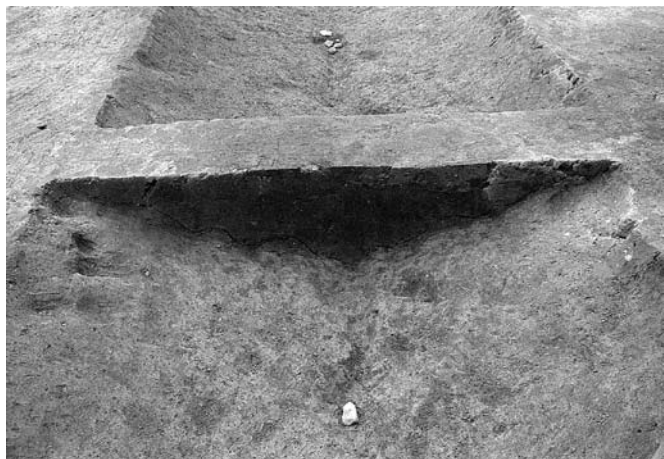
1 2号道路状遺構全景（南東から）



2 3号溝全景（南東から）



3 3号溝全景（北西から）



1 3号溝断面D-D' (南東から)



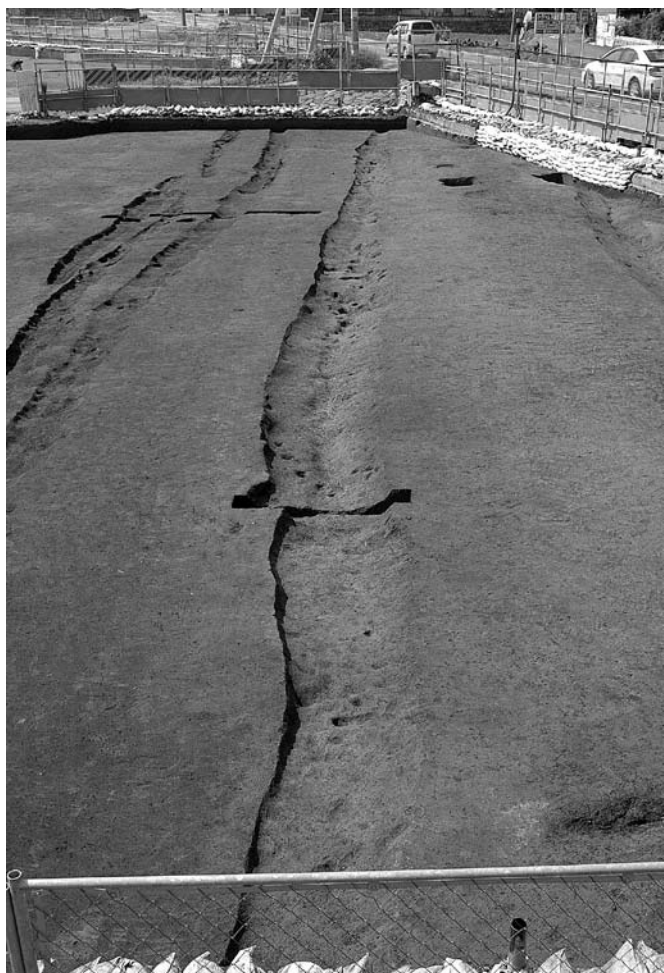
2 3号溝断面E-E' (南東から)



3 3号溝断面F-F' (南東から)



4 3号溝遺物出土状態 (南東から)



5 4号溝全景 (南東から)



6 4号溝全景 (北西から)



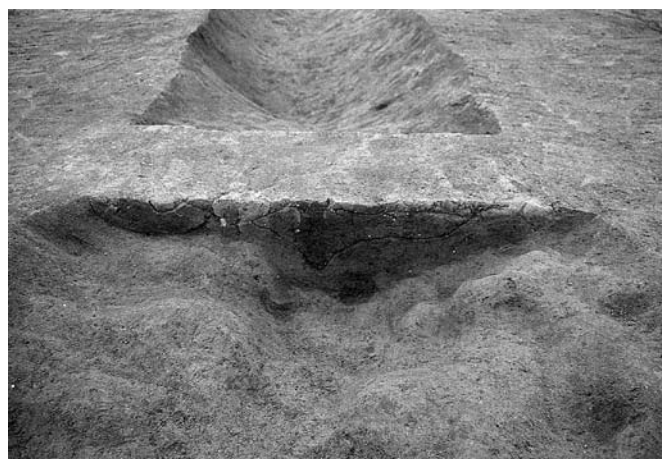
1 4号溝断面G-G' (南東から)



2 4号溝断面H-H' (南東から)



3 4号溝断面I-I' (南東から)



4 4号溝断面J-J' (南東から)



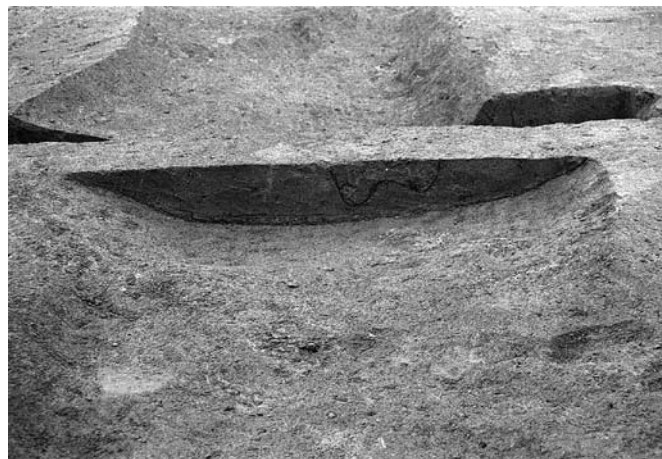
5 17号溝全景 (北西から)



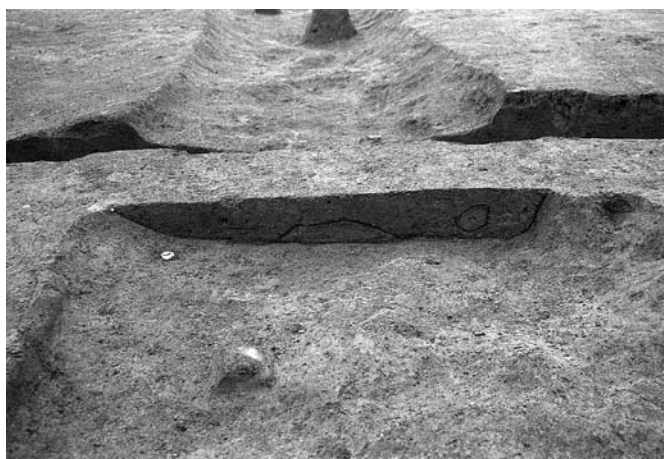
6 17号溝全景 (南東から)



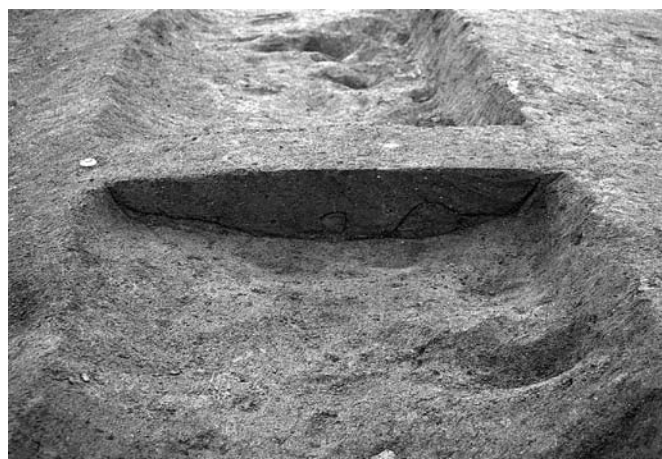
1 17号溝断面K-K' (南東から)



2 17号溝断面L-L' (南東から)



3 17号溝断面M-M' (南東から)



4 17号溝断面N-N' (南東から)



5 1-1区第2面畠全景 (北西から)



1 1号竖穴状遺構全景（南東から）



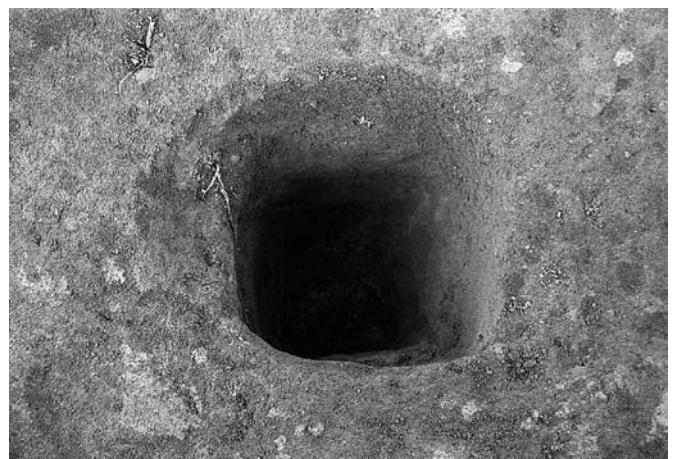
2 1号竖穴状遺構掘方全景（南西から）



3 1号竖穴状遺構掘方全景（南東から）



4 1号竖穴状遺構P 1（南東から）



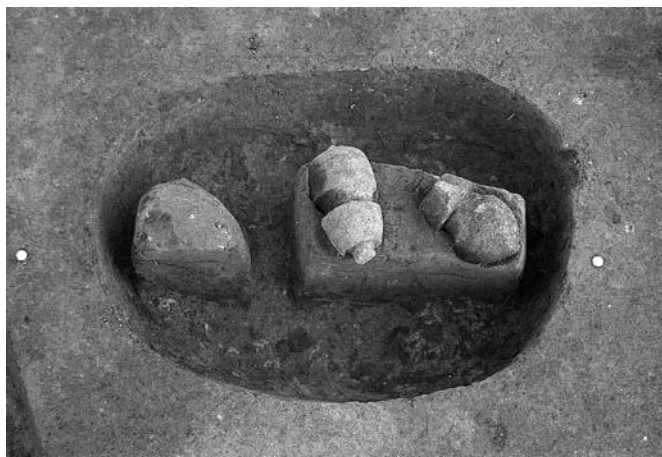
5 1号竖穴状遺構P 8（南東から）



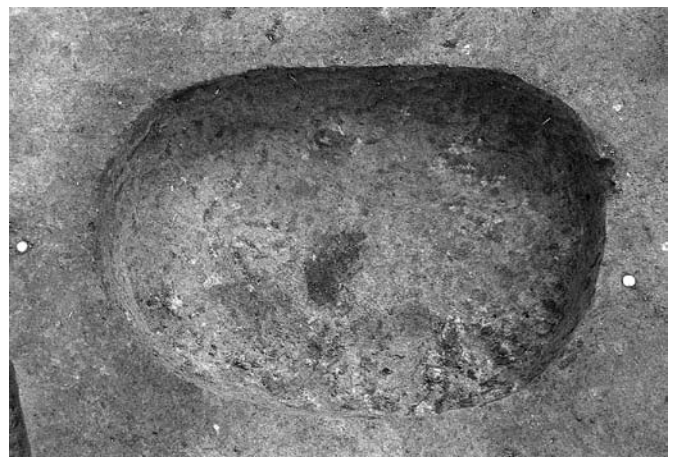
1 1号土坑墓遺物出土状態（東から）



2 1号土坑墓全景（南から）



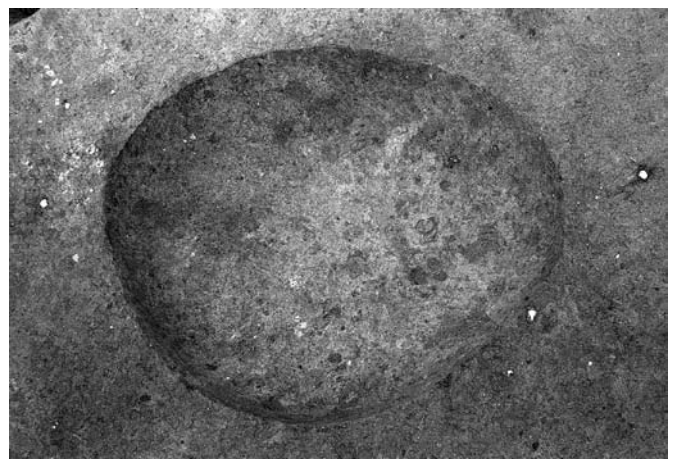
3 2号土坑墓遺物出土状態（北西から）



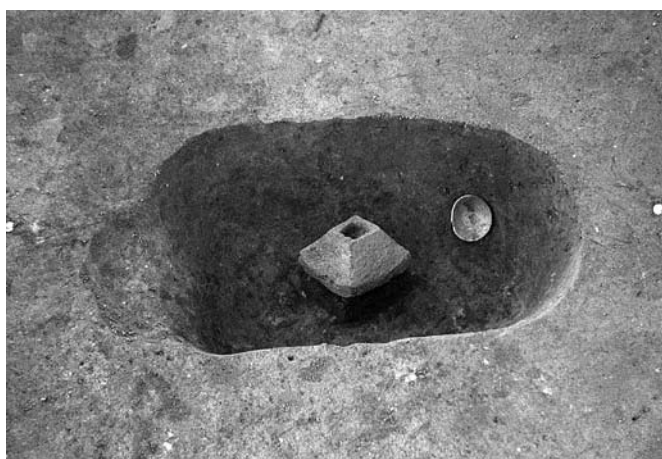
4 2号土坑墓全景（北西から）



5 3号土坑墓人骨出土状態（南東から）



6 3号土坑墓全景（南東から）



7 4号土坑墓遺物出土状態（南東から）



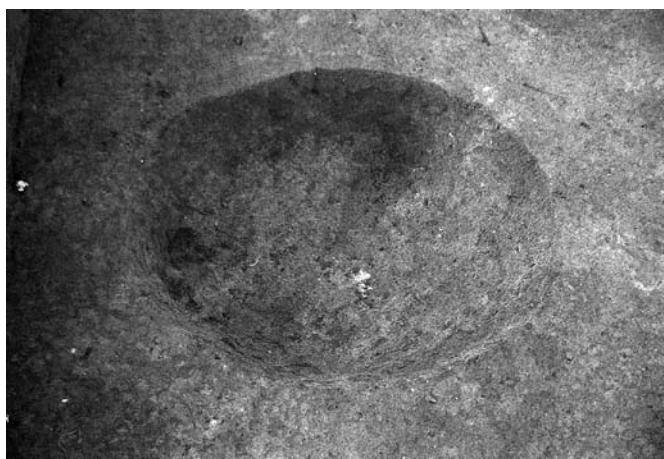
8 4号土坑墓全景（南東から）



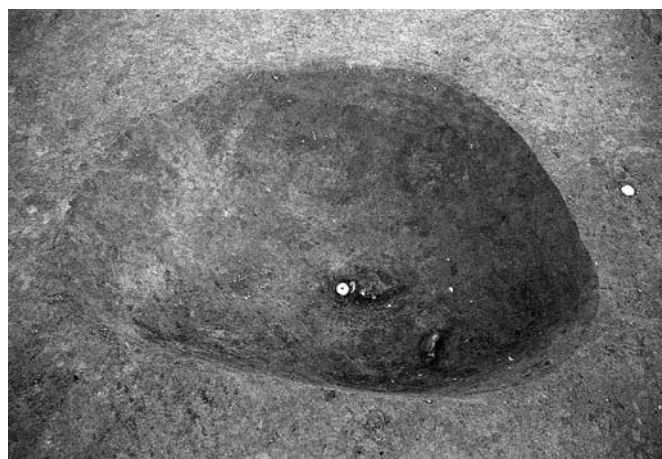
1 5号土坑墓遺物出土状態（東から）



2 5号土坑墓人骨・古銭出土状態（東から）



3 5号土坑墓全景（東から）



4 6号土坑墓全景（西から）



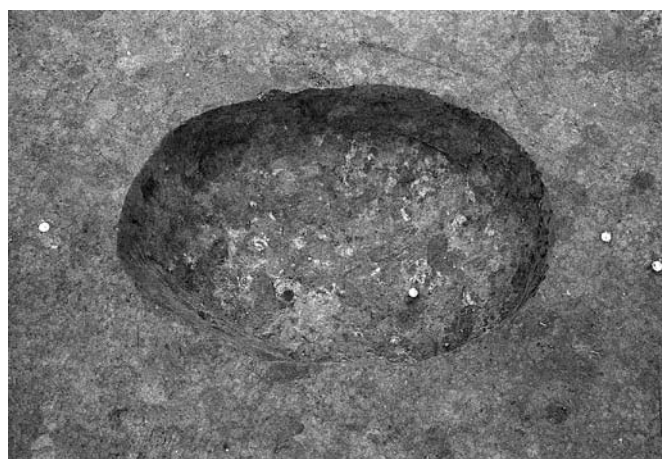
5 7号土坑墓全景（南から）



6 8号土坑墓確認面の遺物出土状態（東から）



7 8号土坑墓遺物出土状態（西から）



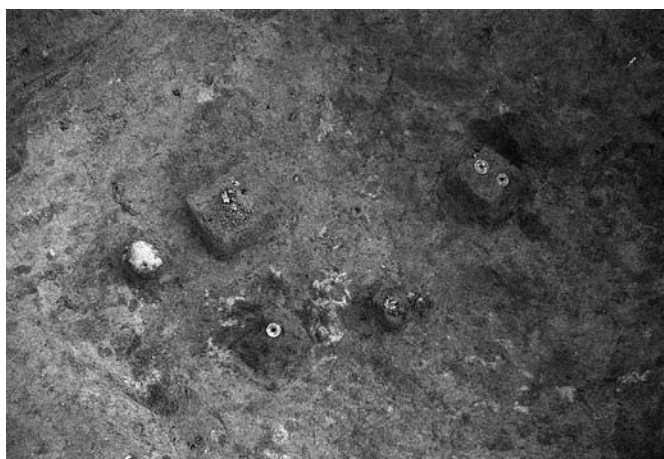
8 8号土坑墓全景（東から）



1 9号土坑墓遺物出土状態（西から）



2 9号土坑墓全景（南東から）



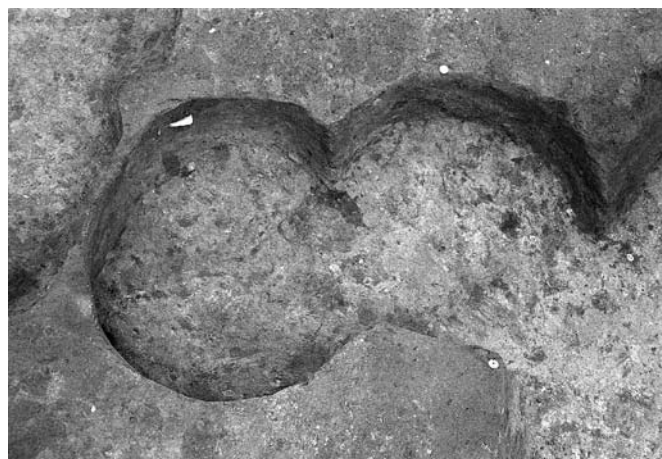
3 10号土坑墓遺物出土状態（南西から）



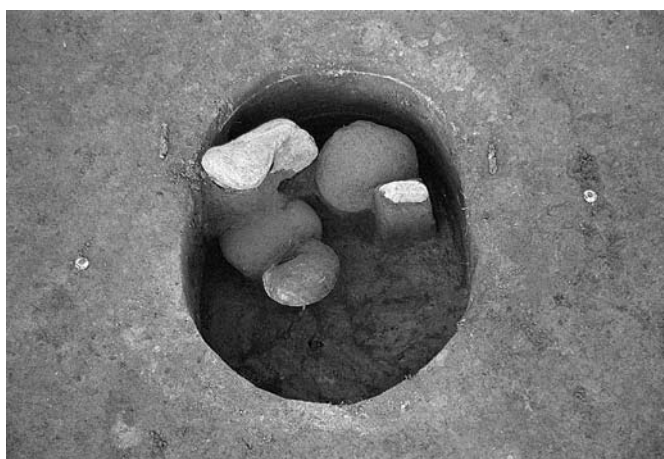
4 10号土坑墓全景（南から）



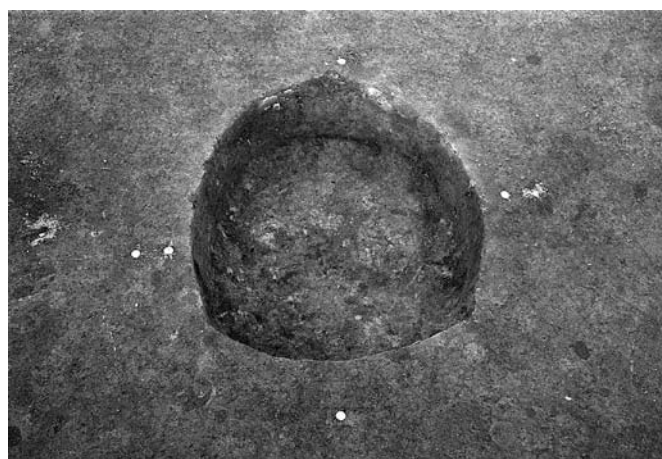
5 11・12号土坑墓遺物出土状態（西から）



6 11・12号土坑墓全景（西から）



7 13号土坑墓遺物出土状態（南から）



8 13号土坑墓全景（南から）



1 14号土坑墓遺物出土状態（西から）



2 14号土坑墓全景（西から）



3 15号土坑墓遺物出土状態（北西から）



4 15号土坑墓全景（北西から）



5 16号土坑墓遺物出土状態（北東から）



6 16号土坑墓全景（南から）



7 1号火葬墓人骨出土状態（南西から）



8 1号火葬墓全景（南西から）



1 2号火葬墓人骨出土状態（南西から）



2 2号火葬墓全景（南西から）



3 3号火葬墓全景（南西から）



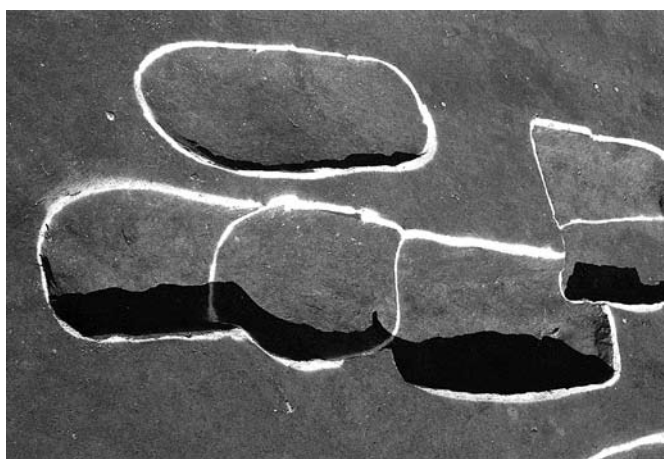
4 2・3号土坑全景（南東から）



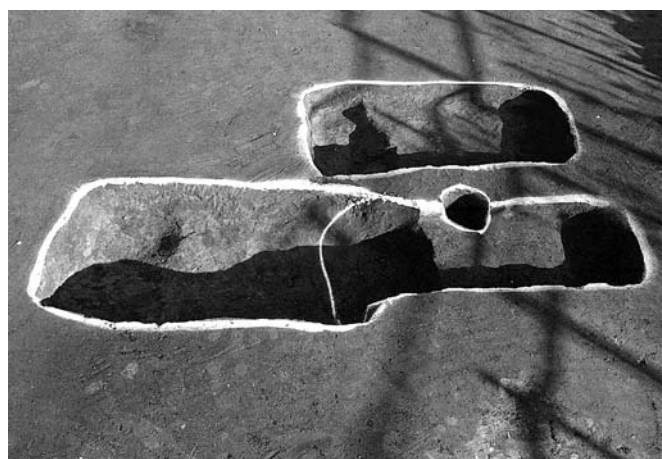
5 5・6号土坑全景（南西から）



6 12・13号土坑全景（南西から）



7 21～24号土坑全景（南から）



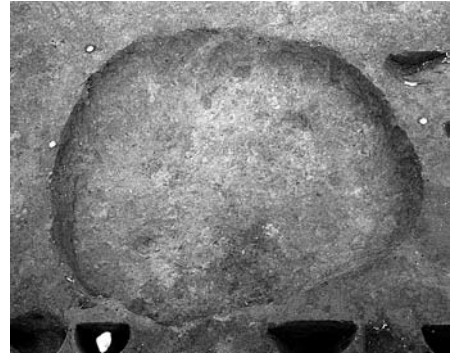
8 38～40号土坑全景（北西から）



1 1号土坑全景 (南西から)



2 4号土坑遺物出土状態 (南西から)



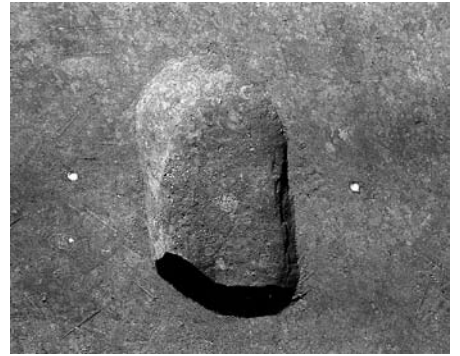
3 4号土坑全景 (南西から)



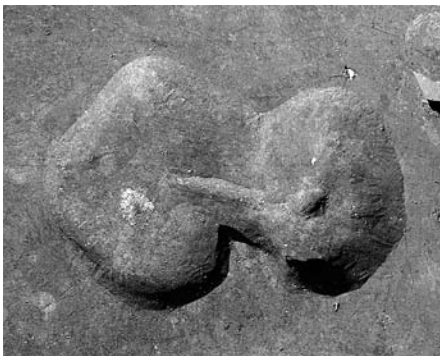
4 5号土坑遺物出土状態 (南西から)



5 7号土坑全景 (西から)



6 9号土坑全景 (南から)



7 10・11号土坑全景 (南西から)



8 14号土坑全景 (南西から)



9 15号土坑礫出土状態 (南から)



10 15号土坑全景 (南から)



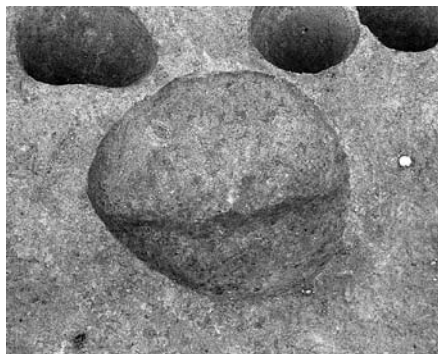
11 16・17号土坑全景 (南西から)



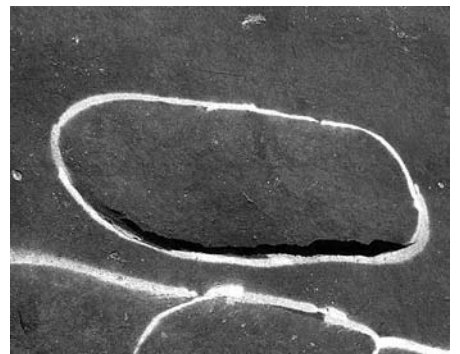
12 18号土坑全景 (南西から)



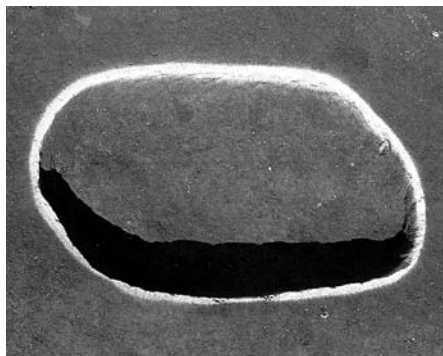
13 19号土坑全景 (南東から)



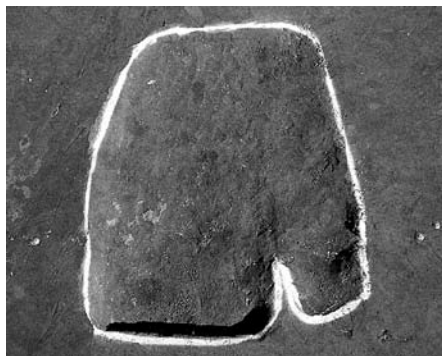
14 20号土坑全景 (南西から)



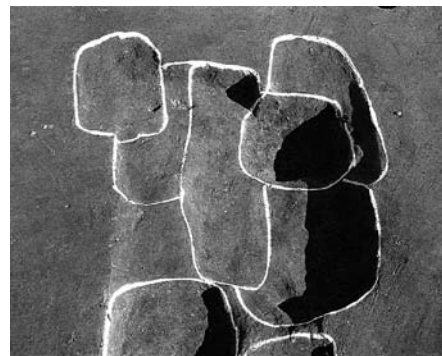
15 21号土坑全景 (南から)



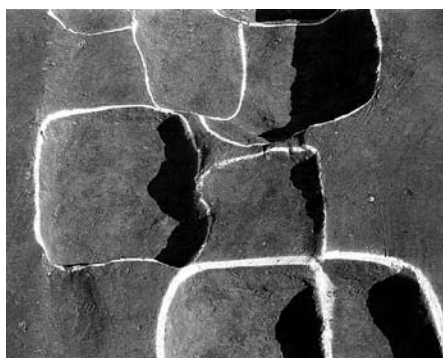
1 25号土坑全景 (南から)



2 26号土坑全景 (西から)



3 27～32号土坑全景 (西から)



4 33・34号土坑全景 (西から)



5 35～37号土坑全景 (西から)



6 21～37号土坑全景 (西から)



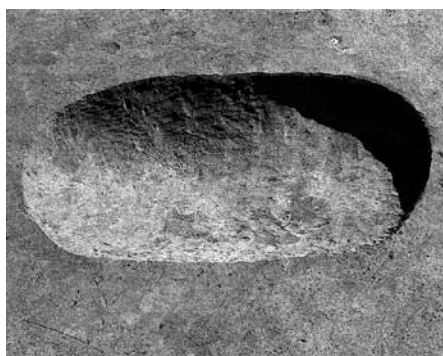
7 41号土坑全景 (南西から)



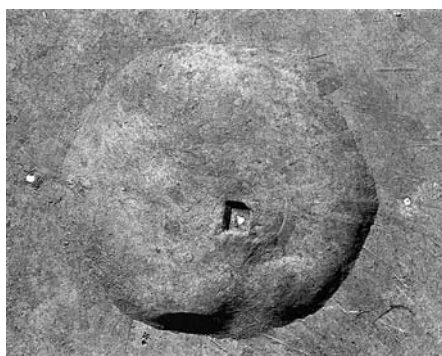
8 42号土坑全景 (南から)



9 44号土坑全景 (南西から)



10 45号土坑全景 (北西から)



11 46号土坑全景 (南西から)



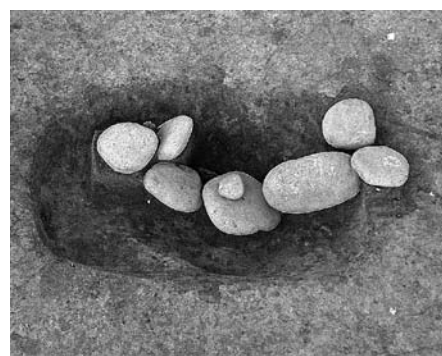
12 47号土坑全景 (南西から)



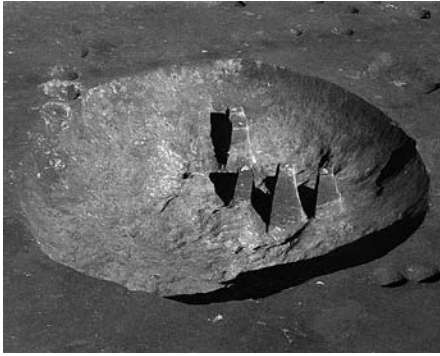
13 49号土坑全景 (南西から)



14 52号土坑全景 (北西から)



15 56号土坑磔出土状態 (南から)



1 57号土坑全景 (南西から)



2 58・59号土坑全景 (南東から)



3 60号土坑全景 (南東から)



4 61号土坑全景 (南から)



5 62号土坑全景 (北東から)



6 63号土坑全景 (南西から)



7 64号土坑全景 (北西から)



8 65号土坑全景 (南西から)



9 66号土坑全景 (南西から)



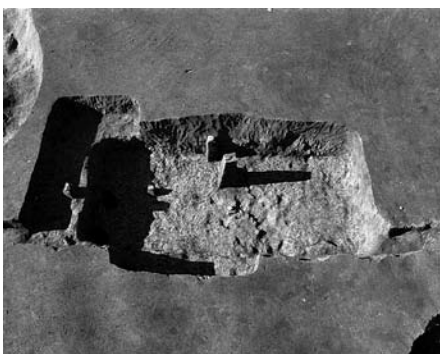
10 67・68号土坑全景 (南西から)



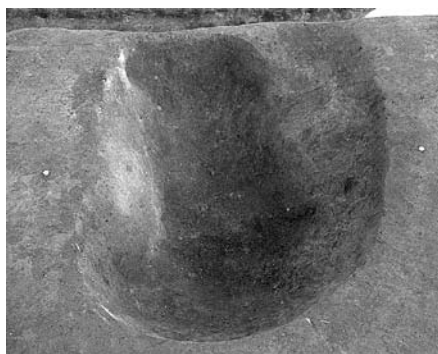
11 69号土坑全景 (東から)



12 71号土坑全景 (南東から)



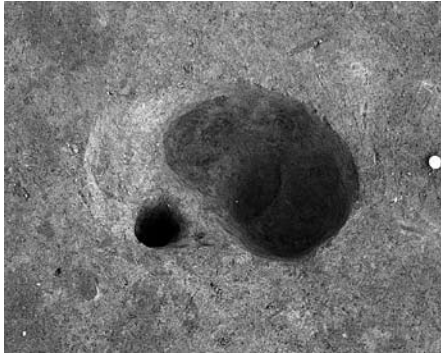
13 72・73号土坑全景 (南東から)



14 74号土坑全景 (北西から)



15 76号土坑全景 (南から)



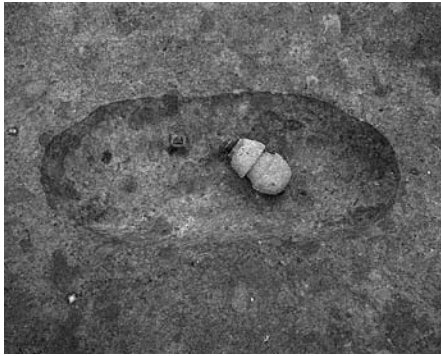
1 77号土坑全景（南西から）



2 78号土坑全景（南西から）



3 79号土坑全景（南西から）



4 80号土坑全景（西から）



5 81号土坑遺物出土状態（西から）



6 81号土坑全景（東から）



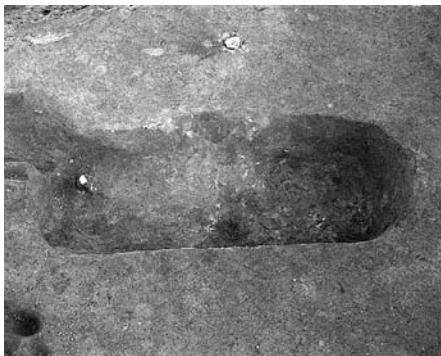
7 82号土坑全景（南東から）



8 83号土坑遺物出土状態（南西から）



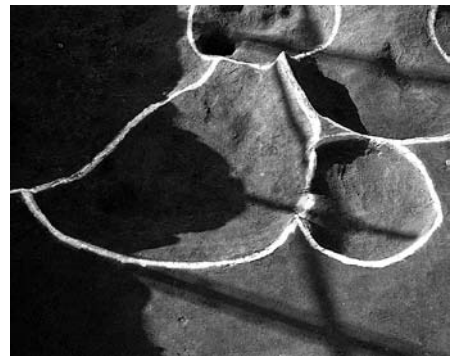
9 83号土坑全景（南西から）



10 84号土坑全景（南西から）



11 85号土坑全景（南西から）



12 87・88号土坑全景（南東から）



13 89号土坑全景（東から）



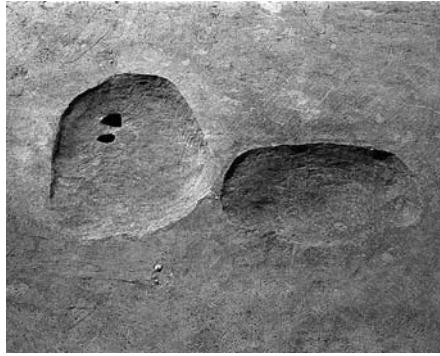
14 100号土坑全景（南西から）



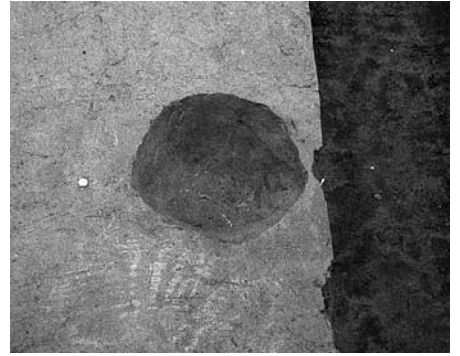
15 102号土坑全景（北西から）



1 106号土坑全景 (南西から)



2 110・111号土坑全景 (東から)



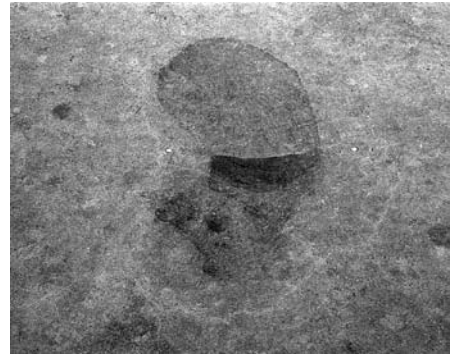
3 112号土坑全景 (南西から)



4 113号土坑全景 (南西から)



5 114号土坑全景 (南西から)



6 115号土坑全景 (南東から)



7 1号井戸獣骨出土状態 (南東から)



8 1号井戸全景 (北東から)



9 2号井戸全景 (南西から)



10 3号井戸全景 (東から)



11 4号井戸全景 (南西から)



12 5号井戸礫出土状態 (南東から)



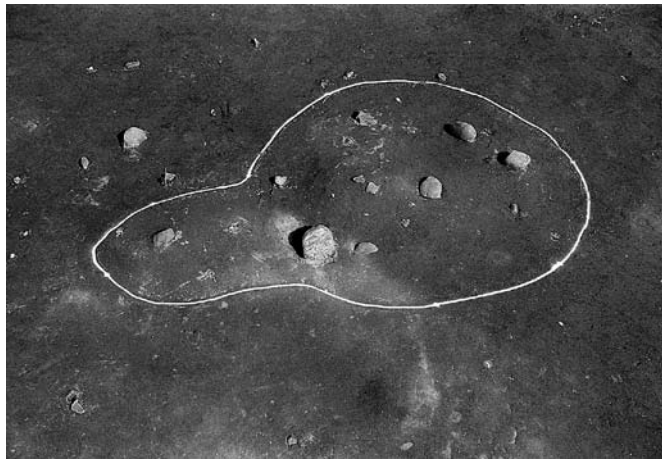
13 5号井戸断面 (南東から)



14 5号井戸全景 (南東から)



15 6号井戸全景 (南西から)



1 1号集石確認状態（西から）



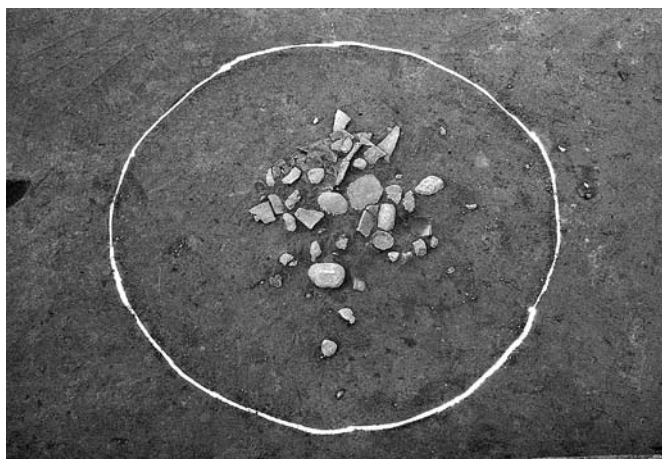
2 1号集石完掘（東から）



3 13号集石確認状態（北東から）



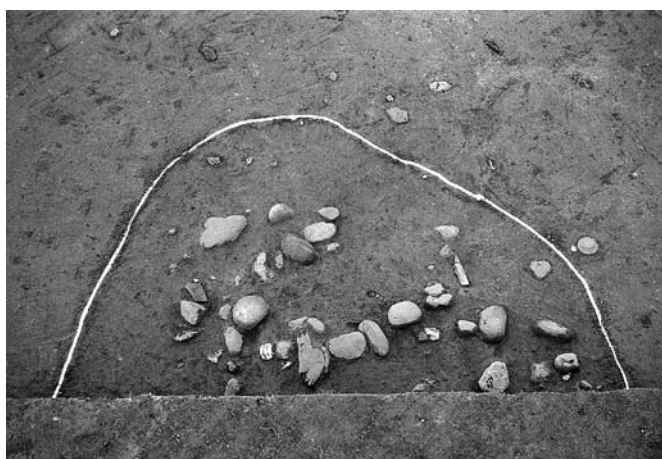
4 13号集石完掘（南西から）



5 15号集石確認状態（南から）



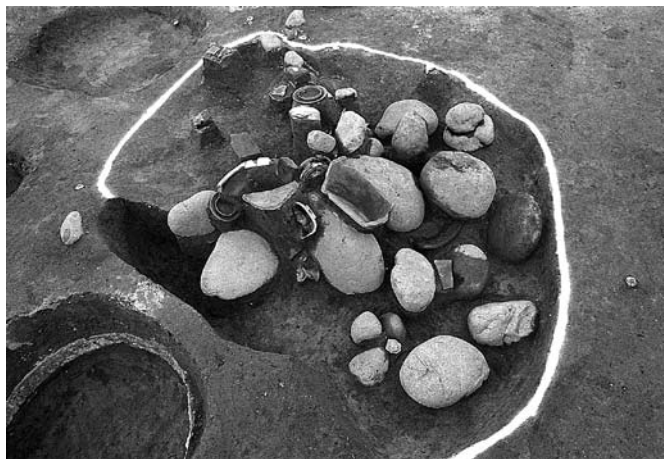
6 15号集石完掘（南東から）



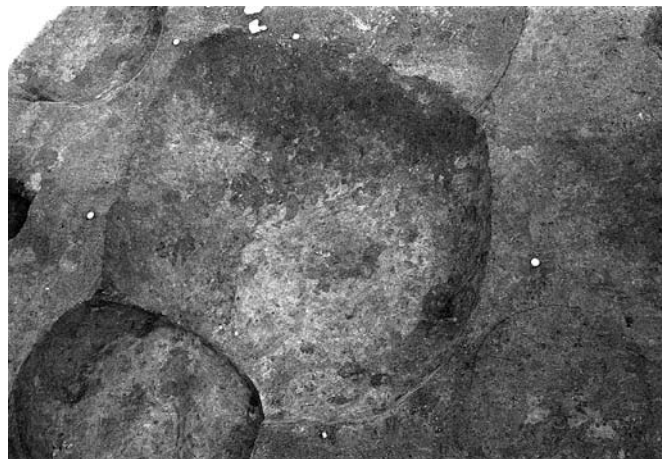
7 16号集石確認状態（南西から）



8 16号集石完掘（南西から）



1 17号集石遺物出土状態（南から）



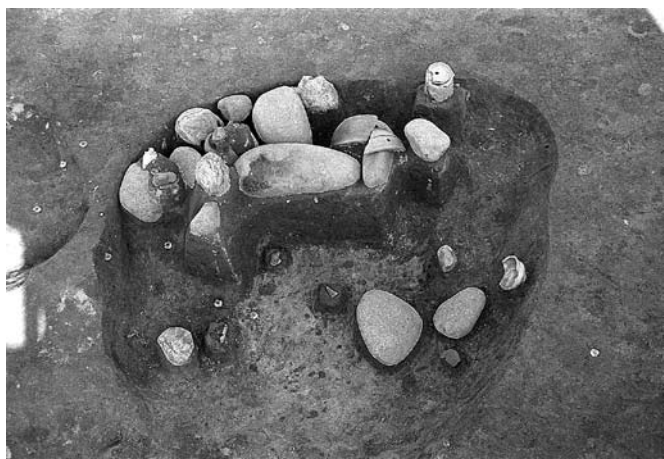
2 17号集石完掘（南から）



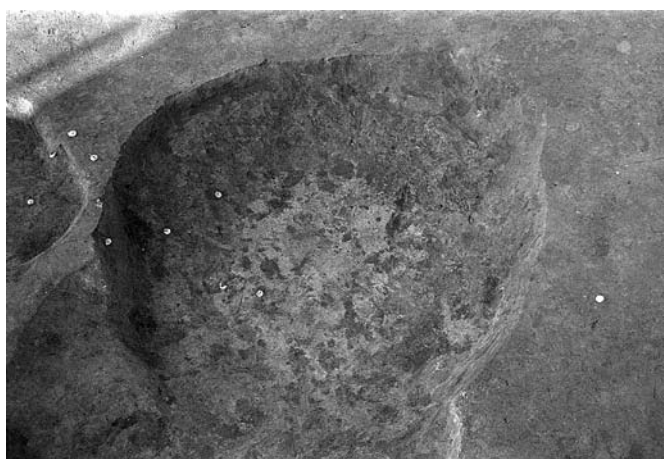
3 18号集石遺物出土状態（南から）



4 18号集石完掘（西から）



5 19号集石遺物出土状態（南から）



6 19号集石完掘（南から）



7 1号堀全景（上が北東）



1 1号堀（北東から）



2 1号堀（南西から）



3 1号堀断面の形状（北東から）



4 1号堀礫出土状態（北西から）



5 1号堀礫出土状態（北東から）



1 1号堀硬化面上の石敷（北西から）



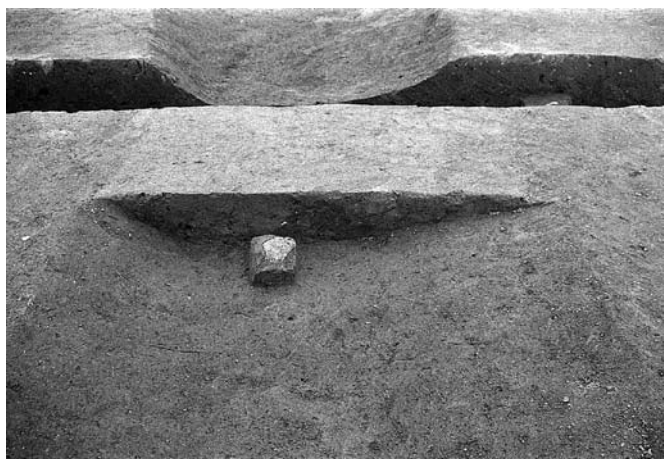
2 1号堀硬化面上の石敷（北東から）



3 5～7号溝全景（北西から）



4 5～7号溝全景（南東から）



5 5号溝断面C-C'（南東から）



6 6号溝断面B-B'（南東から）



1 8号溝全景(北西から)



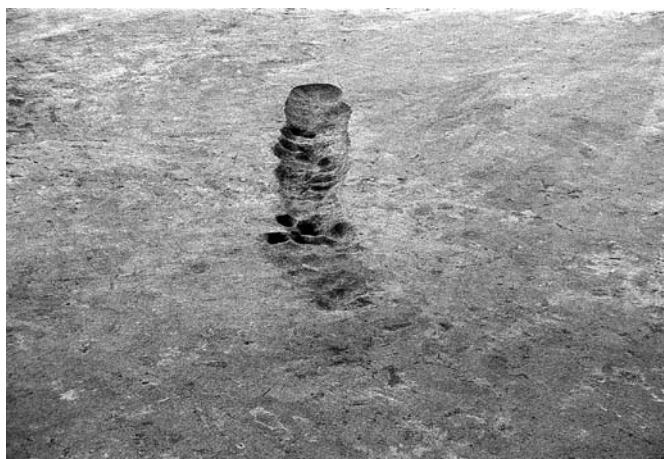
2 9号溝全景(東から)



3 8号溝断面A-A'(南東から)



4 9号溝断面A-A'(東から)



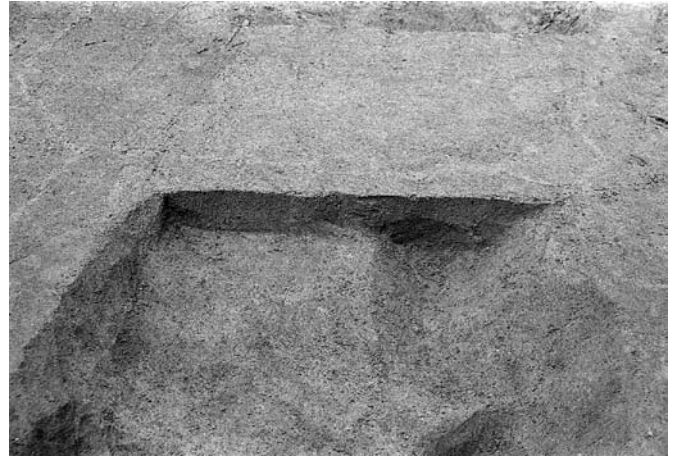
5 10号溝全景(北東から)



6 10号溝断面A-A'(北東から)



1 11号溝東全景（北西から）



2 11号溝断面C-C'（南東から）



3 12号溝全景（南東から）



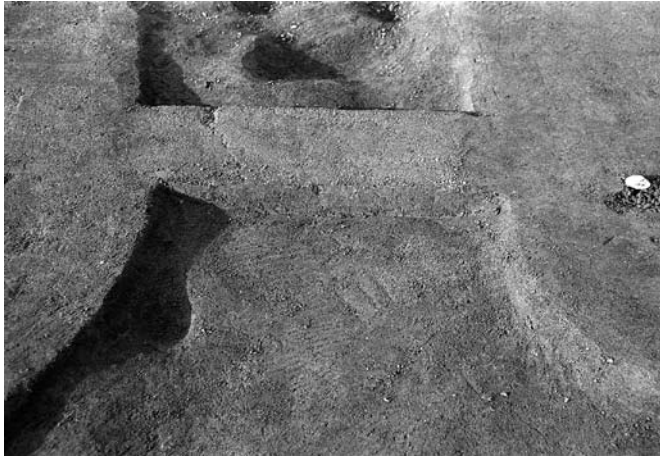
4 13号溝全景（南西から）



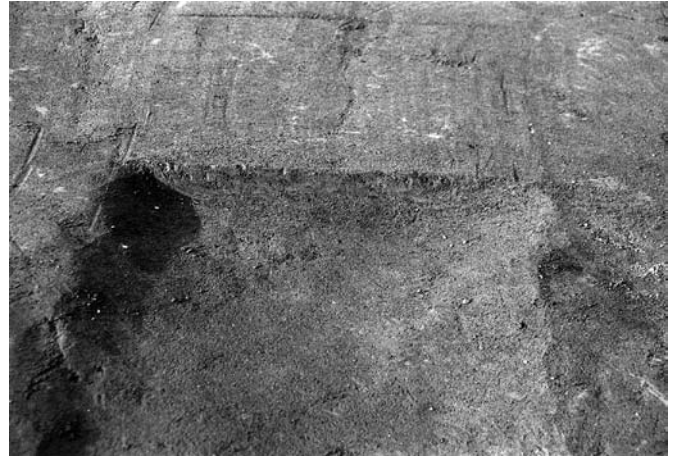
5 14～16号溝全景（南西から）



6 15号溝全景（南西から）



1 14号溝断面A-A' (南西から)



2 15号溝断面A-A' (南西から)



3 1号道路状遺構全景 (南東から)



4 1号道路状遺構東側硬化面 (南東から)



5 1号道路状遺構西側硬化面 (南東から)



1 1号道路状遺構全景（北西から）



2 1号道路状遺構断面A-A'（南東から）



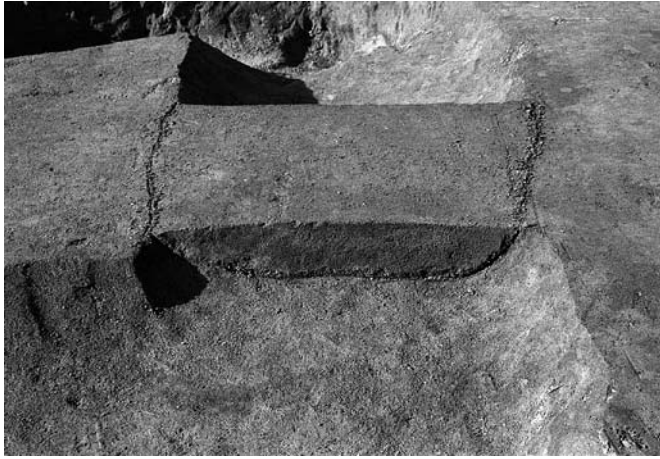
3 1号道路状遺構断面A-A'北側溝（南東から）



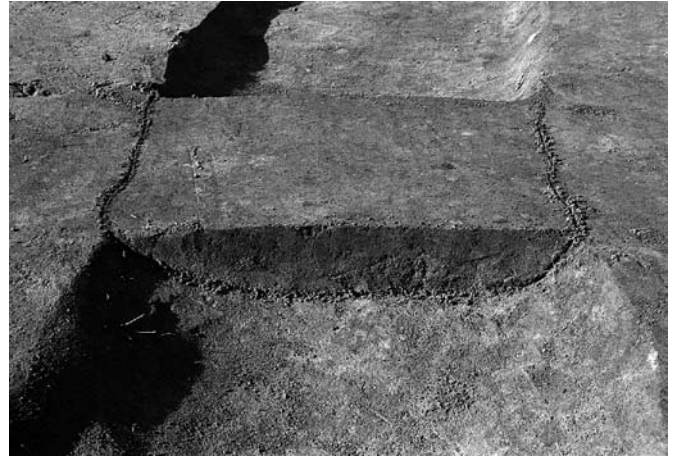
4 1号道路状遺構断面A-A'南側溝（南東から）



5 1号道路状遺構断面B-B'（南東から）



1 1号道路状遺構断面B-B'北側溝(南東から)



2 1号道路状遺構断面B-B'南側溝(南東から)



3 1号道路状遺構断面C-C'(南東から)



4 1号道路状遺構断面C-C'北側溝(南東から)



5 1-1区第1面全景(南西から)



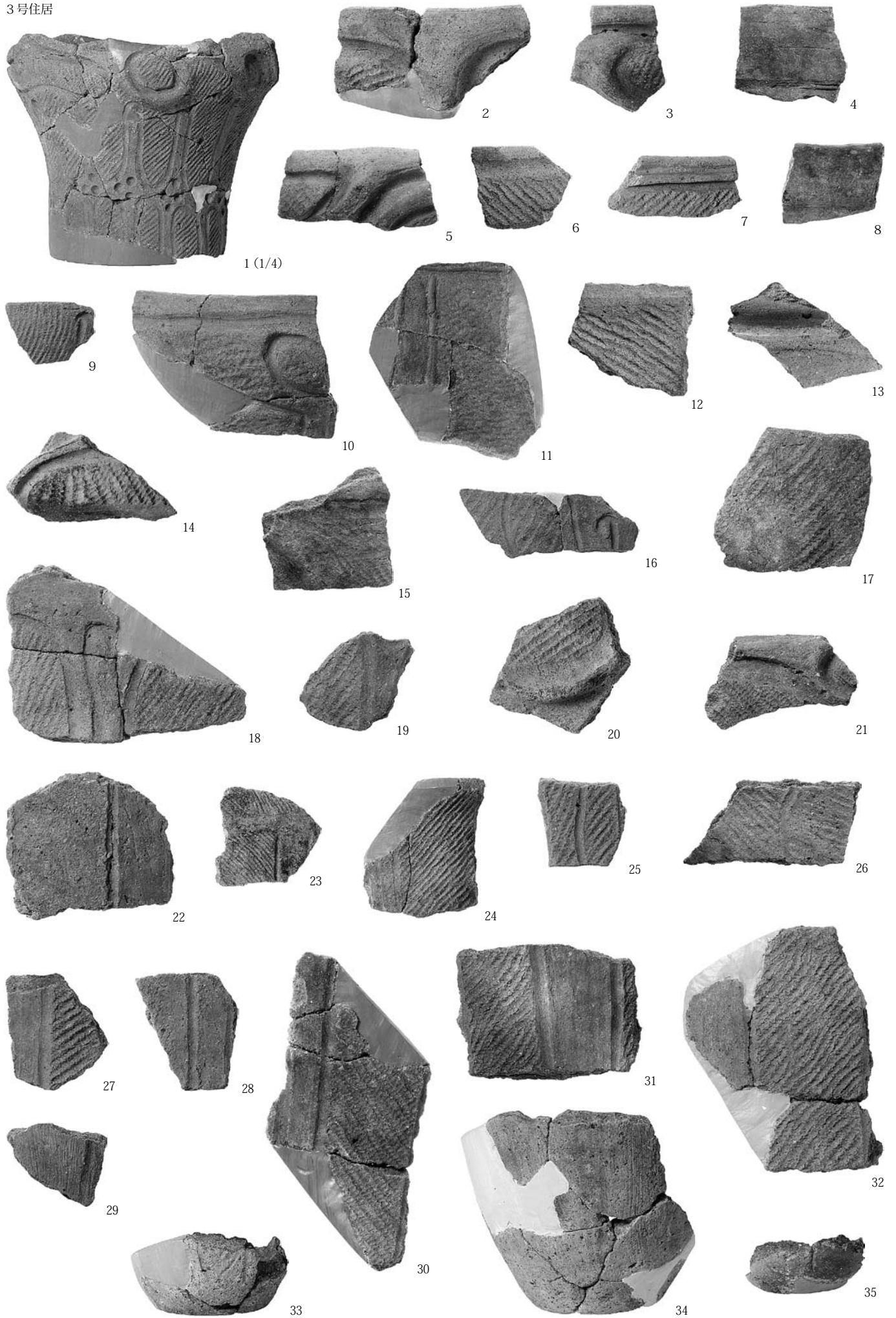
1 1-2区第1面畝間痕跡確認状態（北西から）



2 1-2区第1面下層の島の畝間痕跡（西から）

PL.74

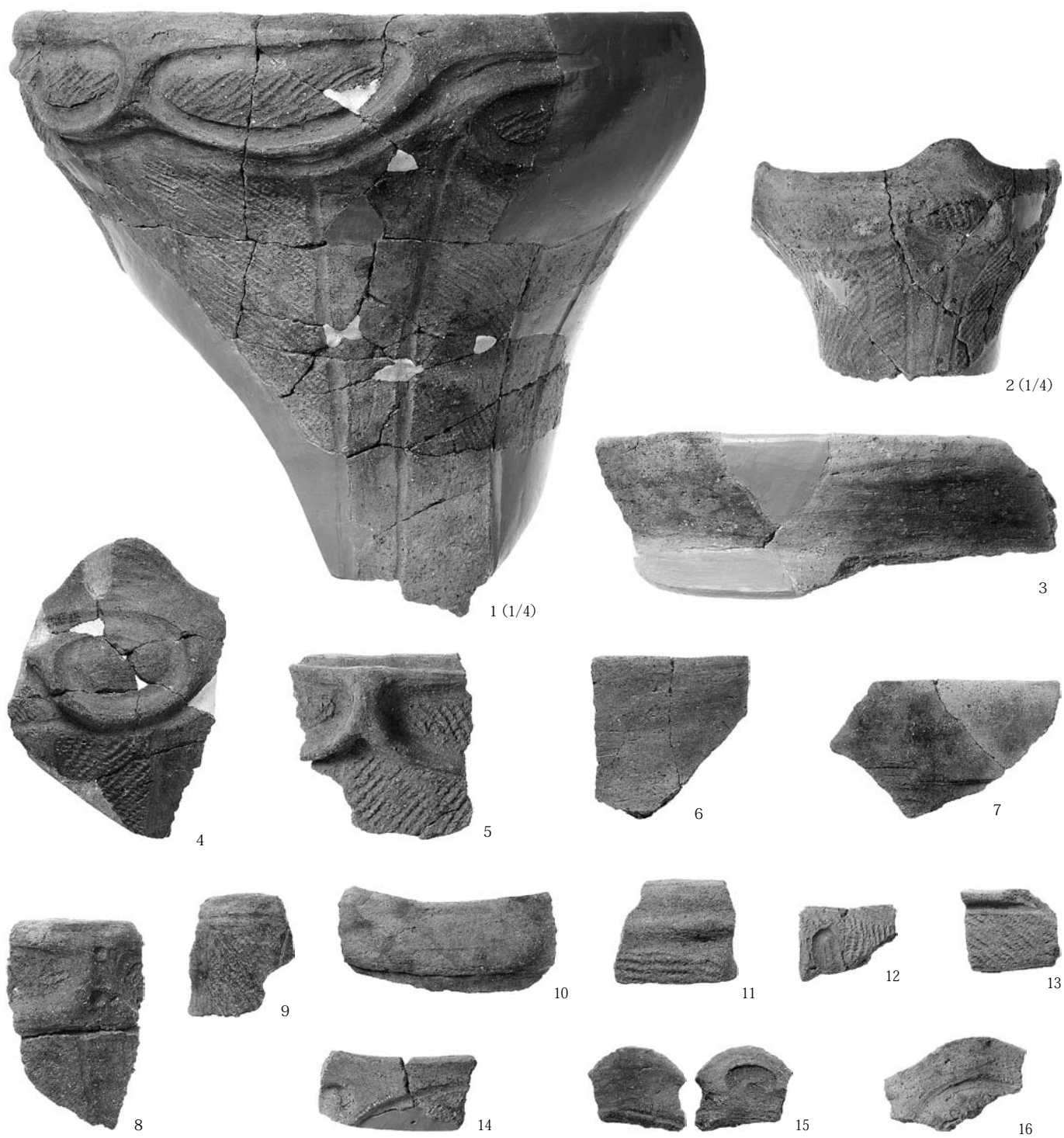
3号住居



3号住居

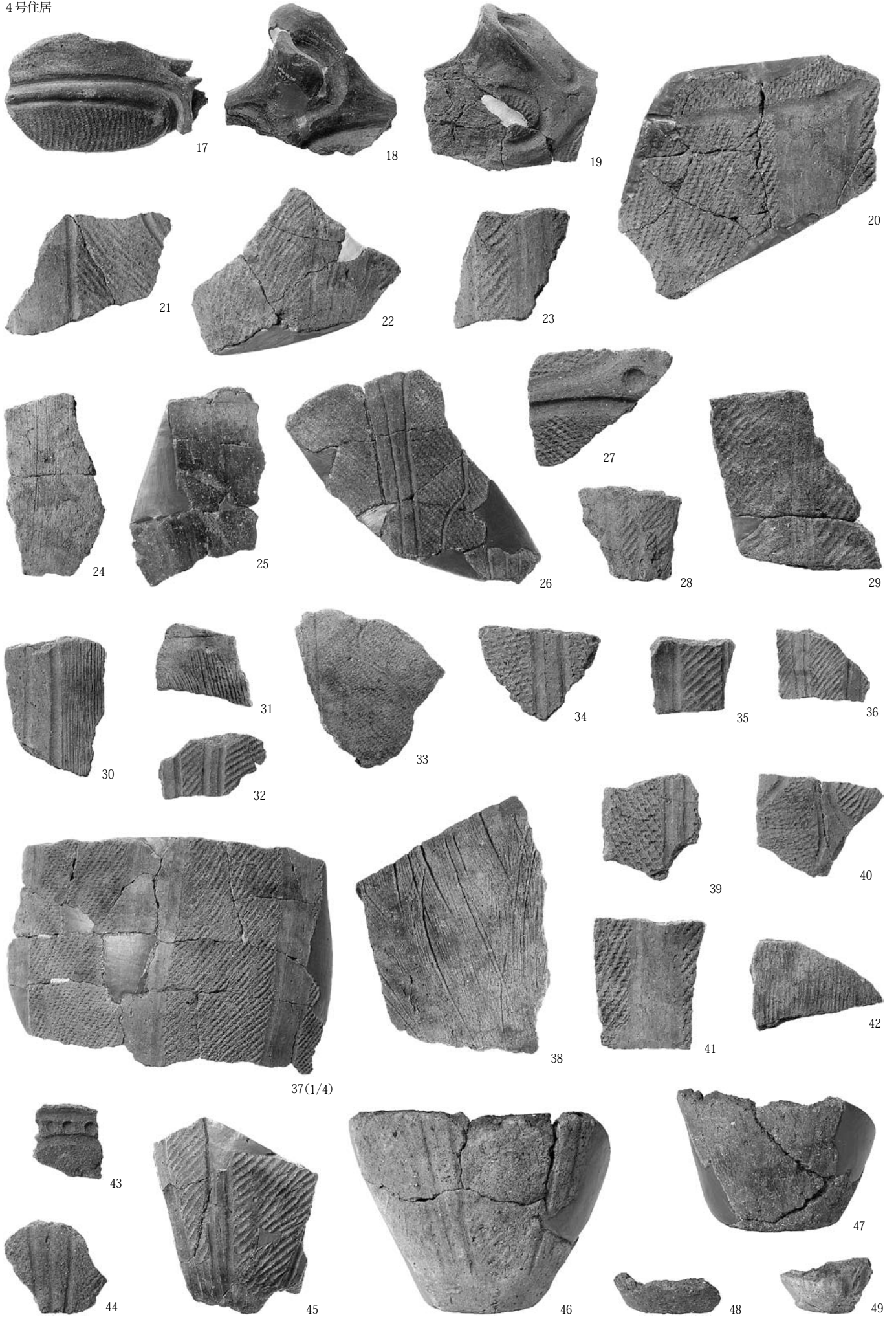


4号住居

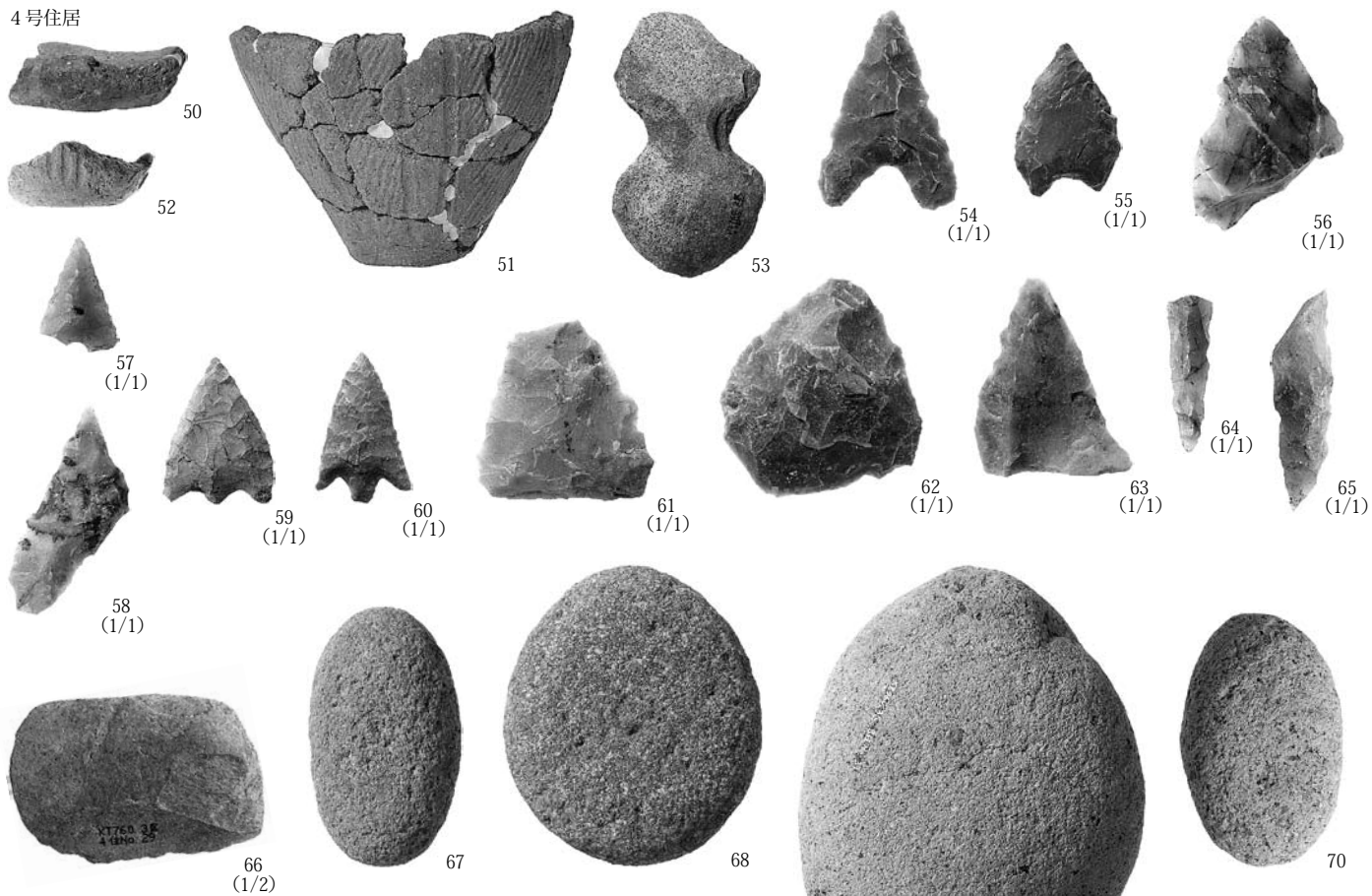


PL.76

4号住居



4号住居

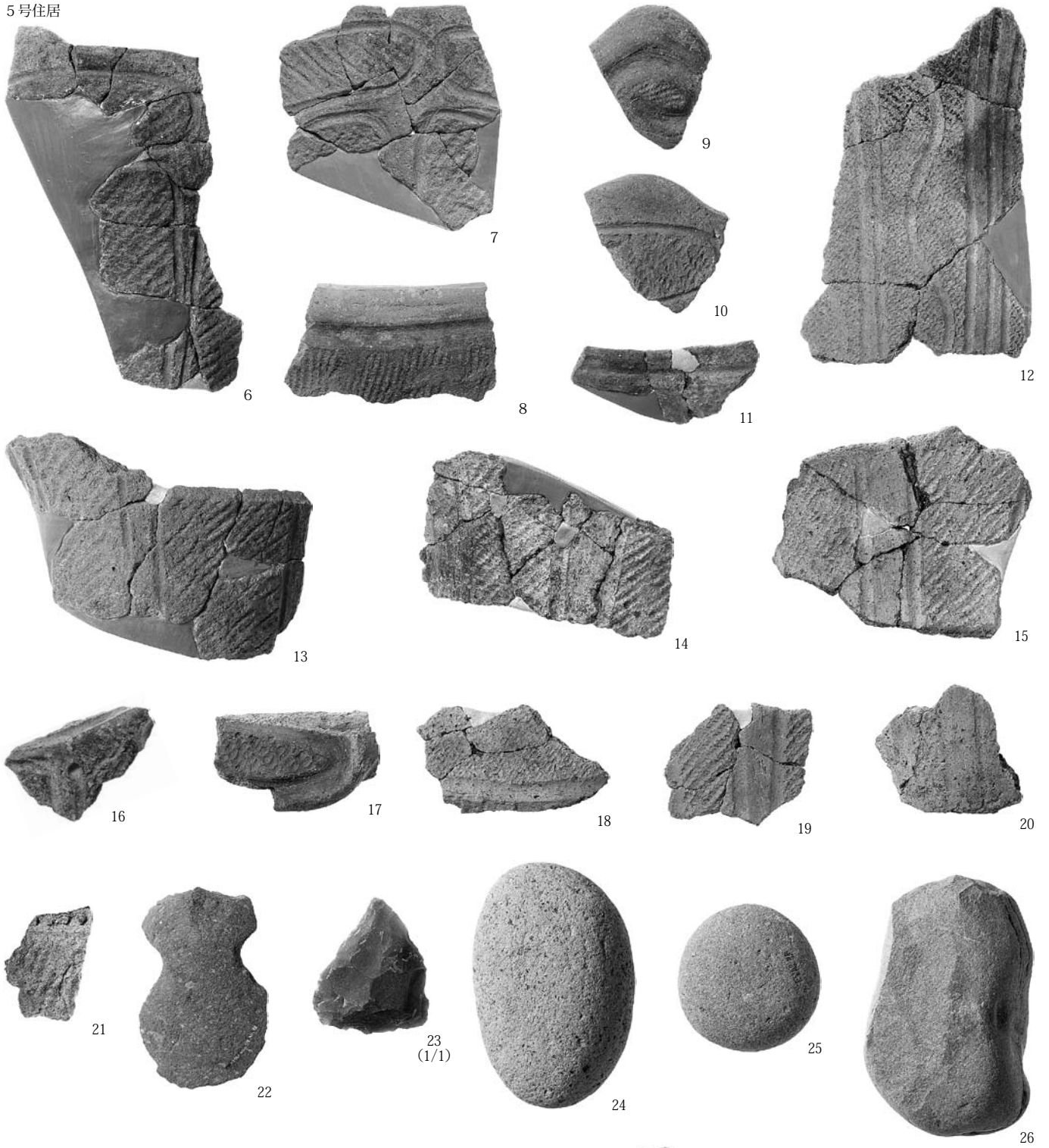


5号住居



PL.78

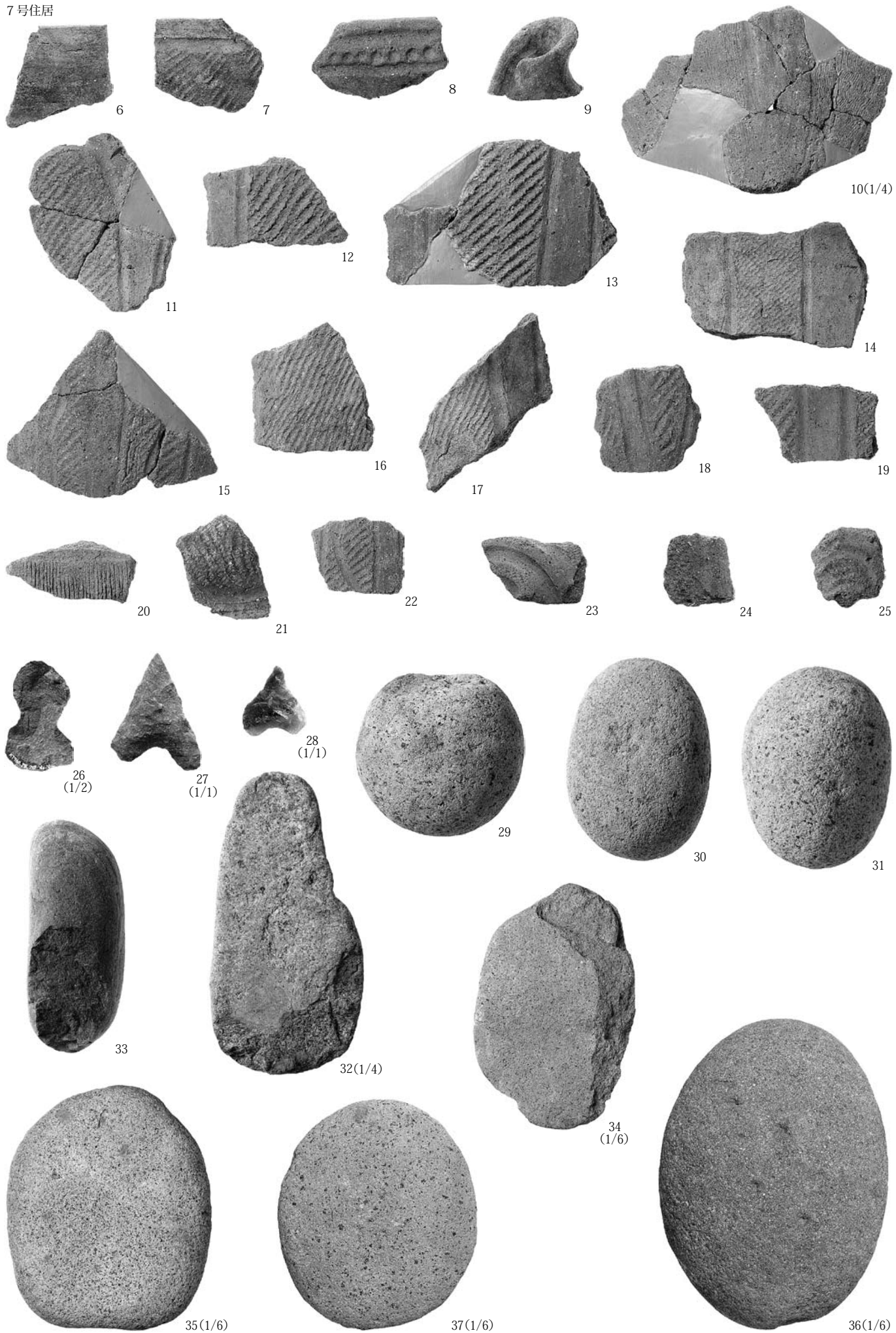
5号住居



7号住居

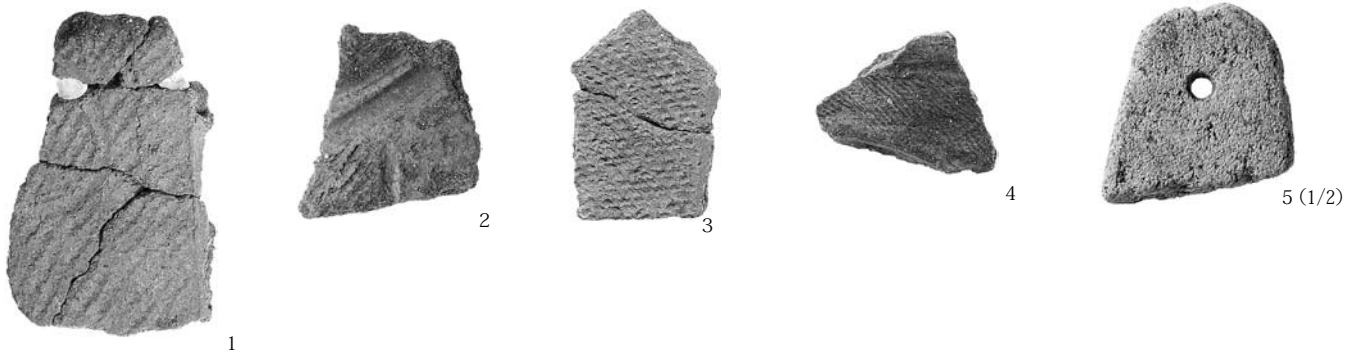


7号住居

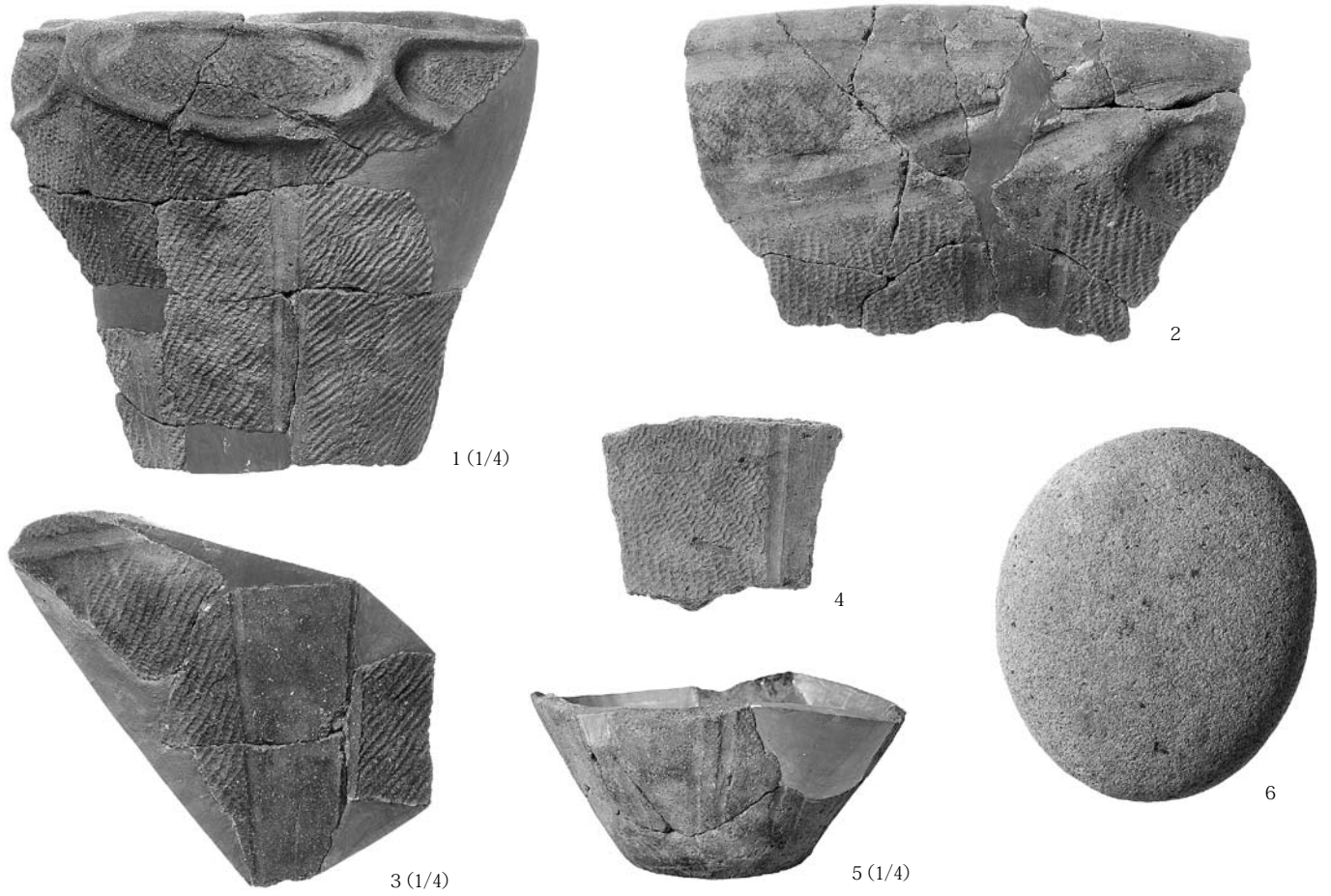


PL.80

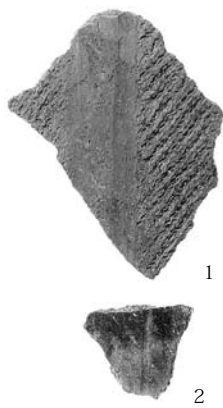
92号土坑



97号土坑



98号土坑



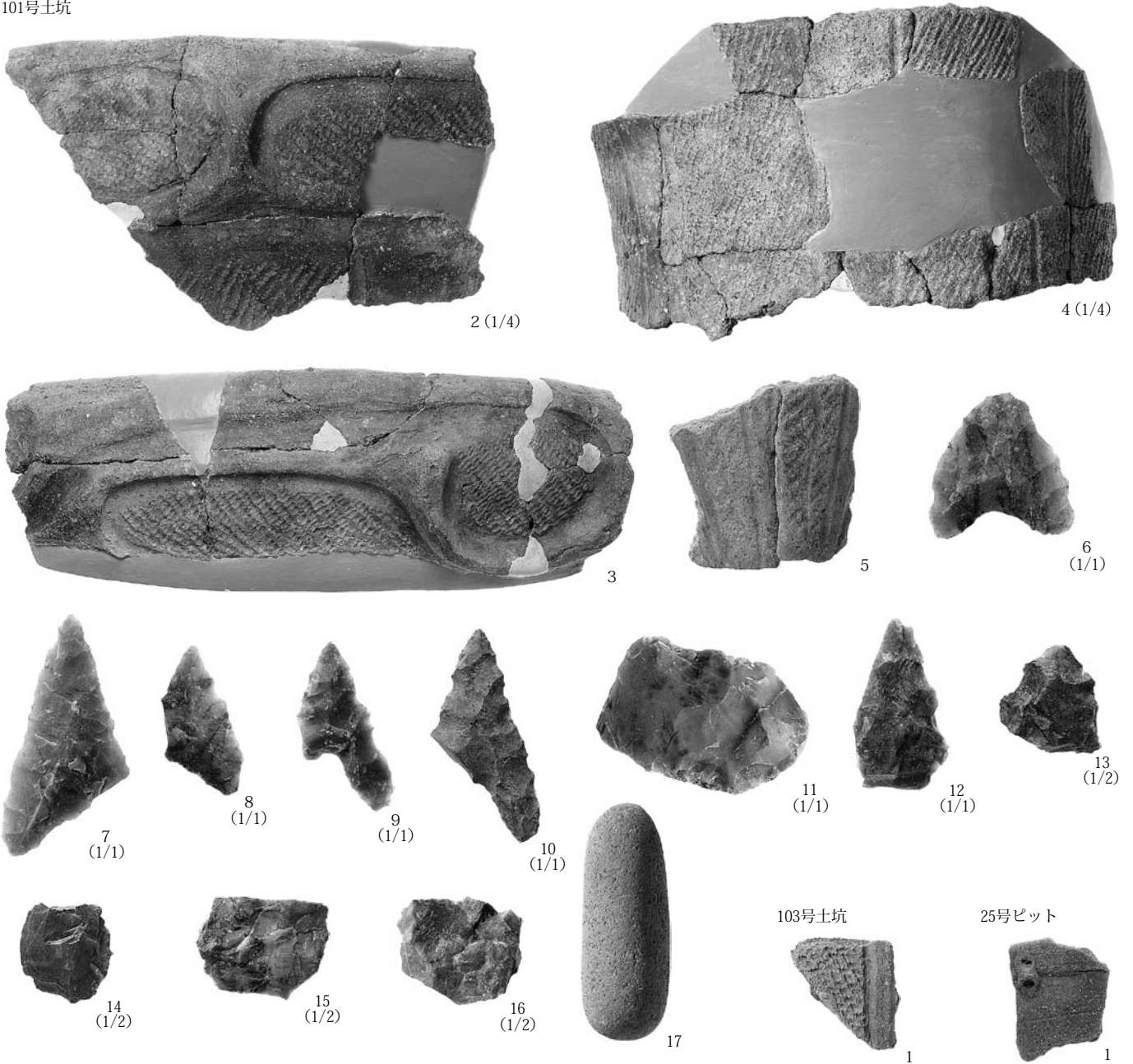
101号土坑



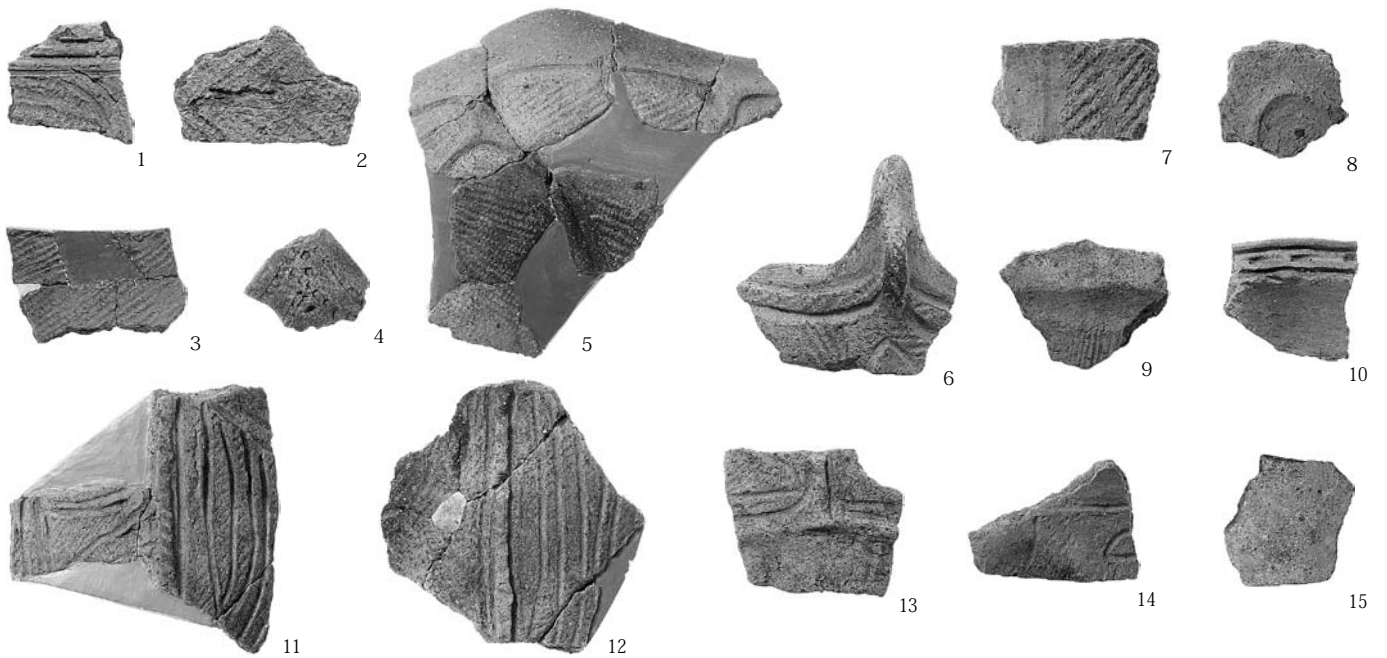
99号土坑



101号土坑



縄文時代・遺構外

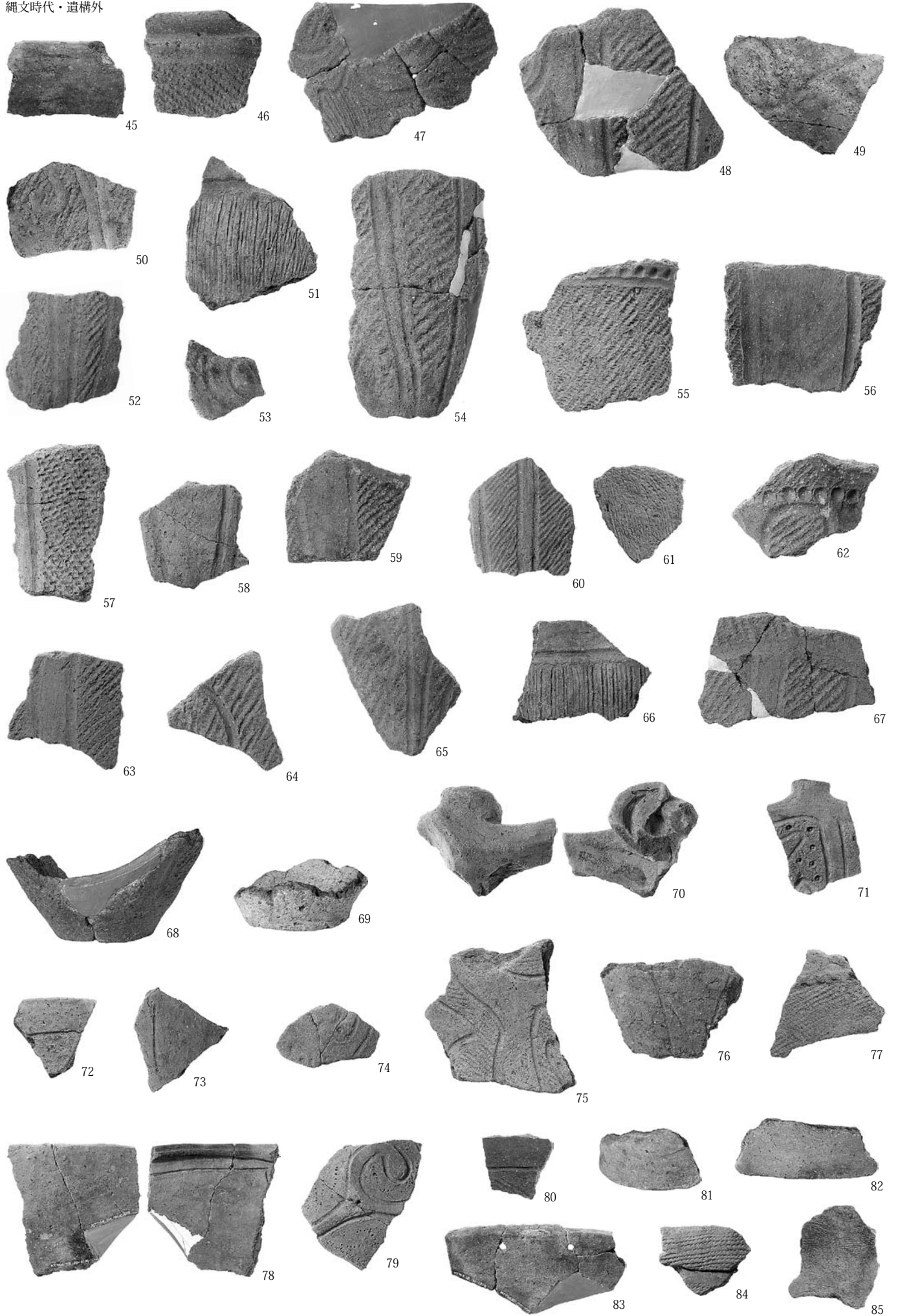


PL.82

縄文時代・遺構外



縄文時代・遺構外

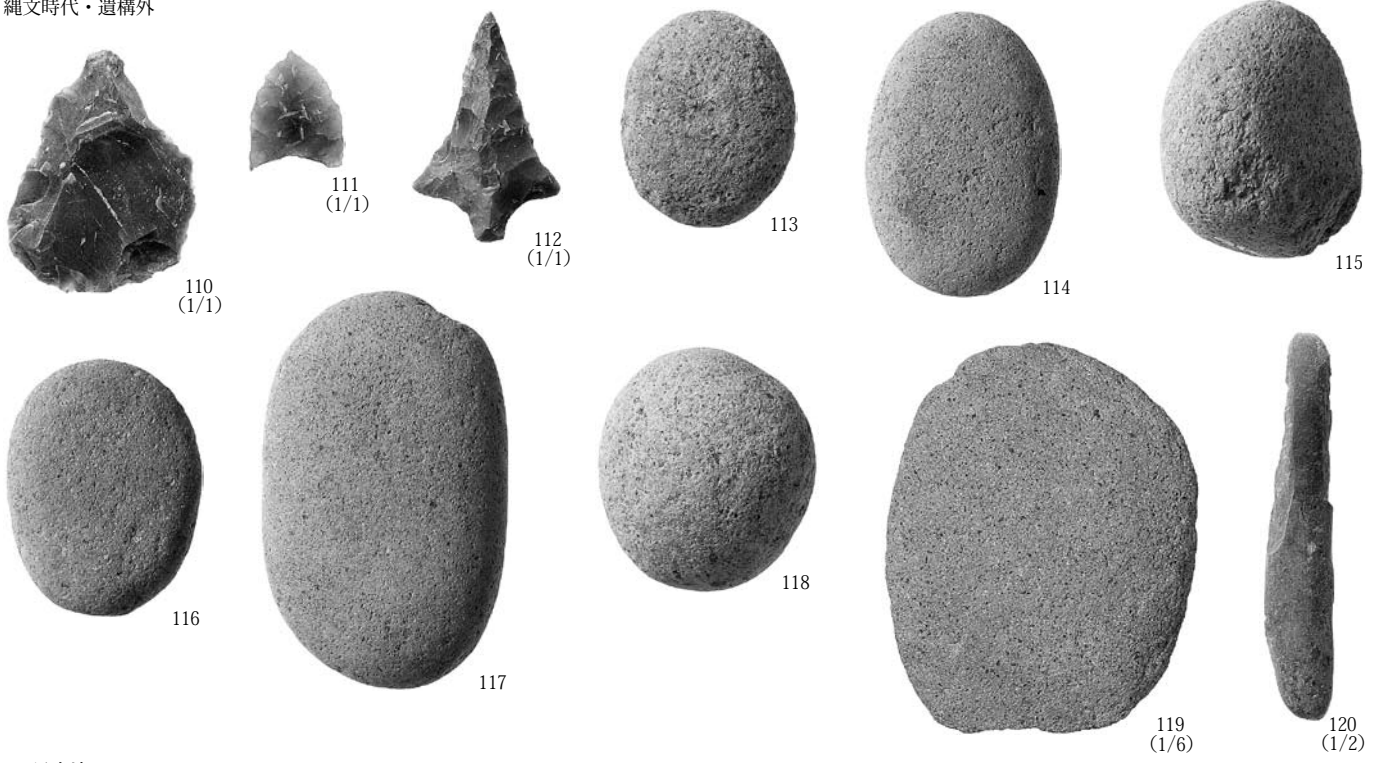


PL.84

縄文時代・遺構外



縄文時代・遺構外



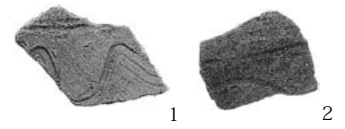
109号土坑



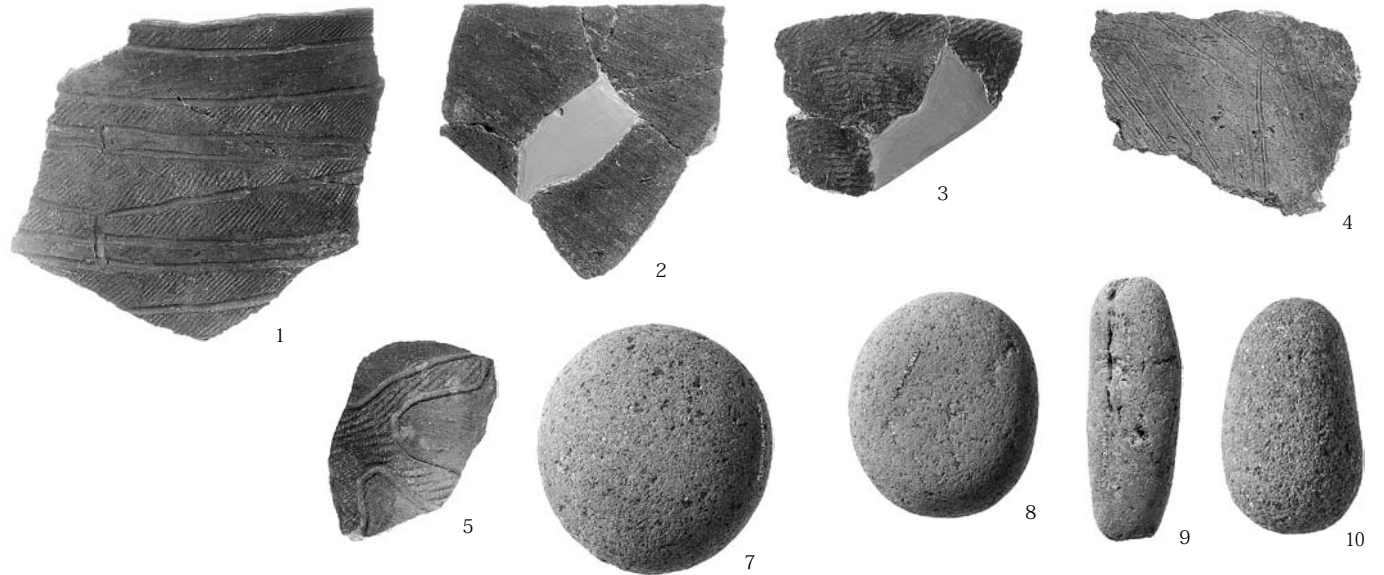
121号土坑



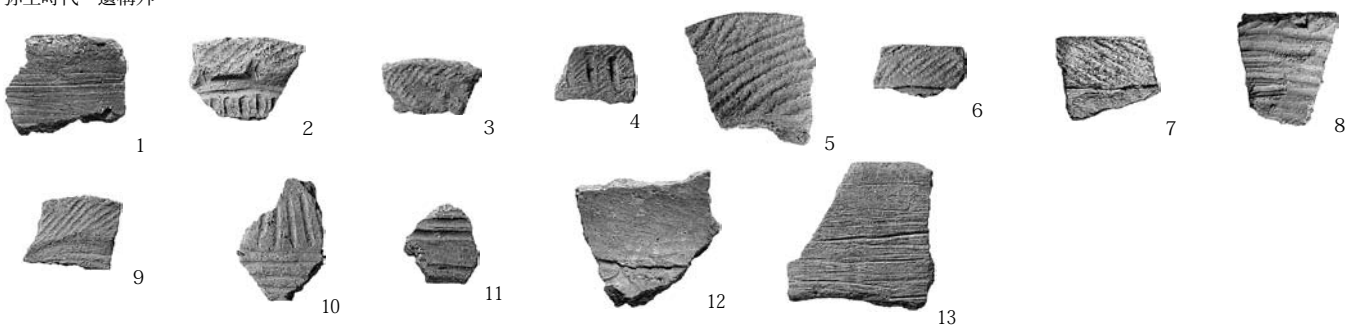
124号土坑



116号土坑

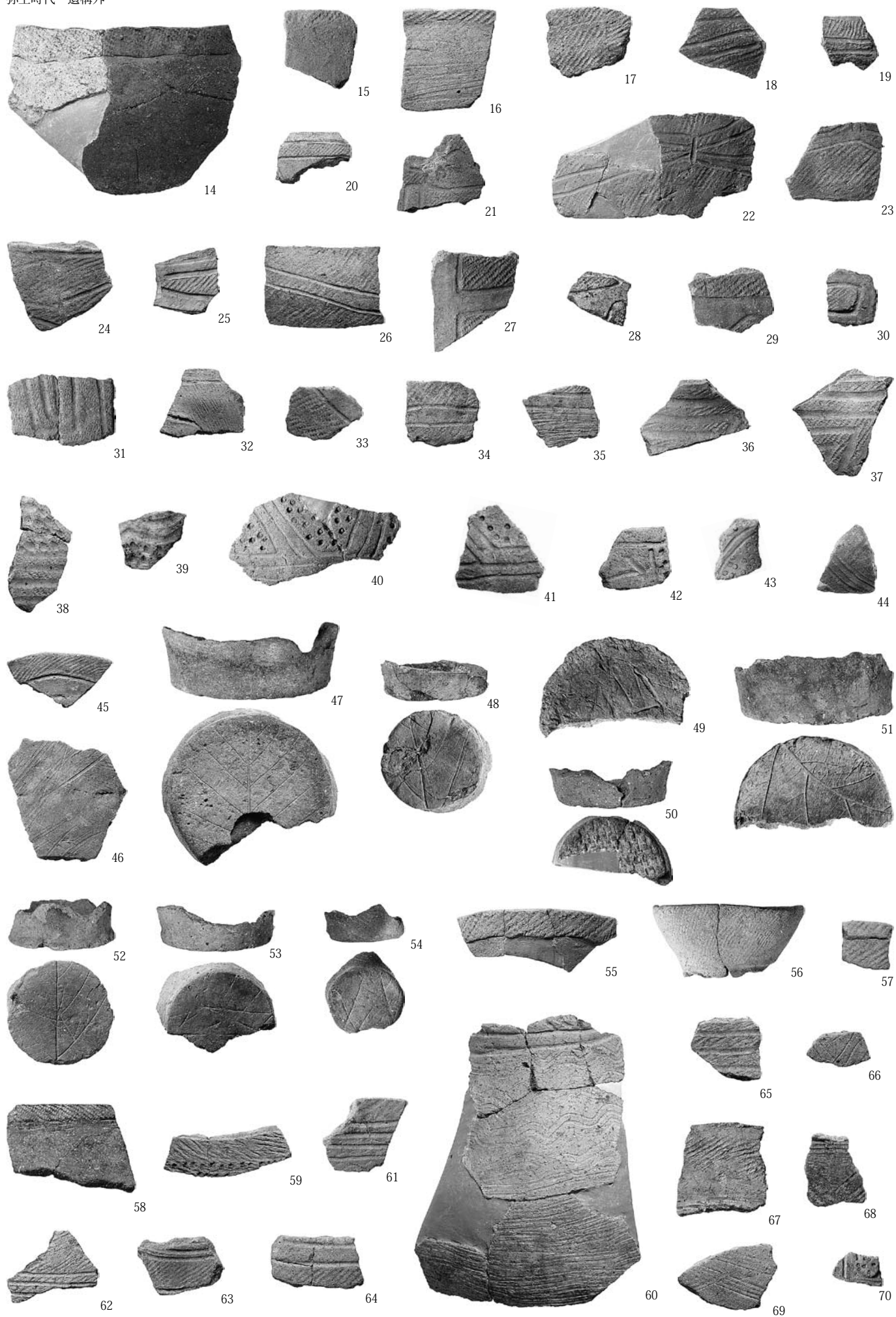


弥生時代・遺構外

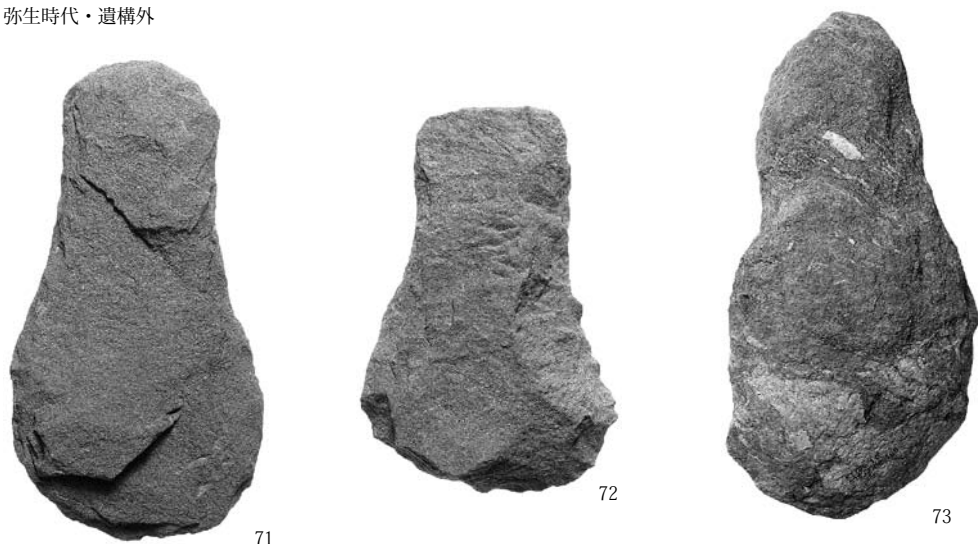


PL.86

弥生時代・遺構外



弥生時代・遺構外



6号住居



6号住居



15



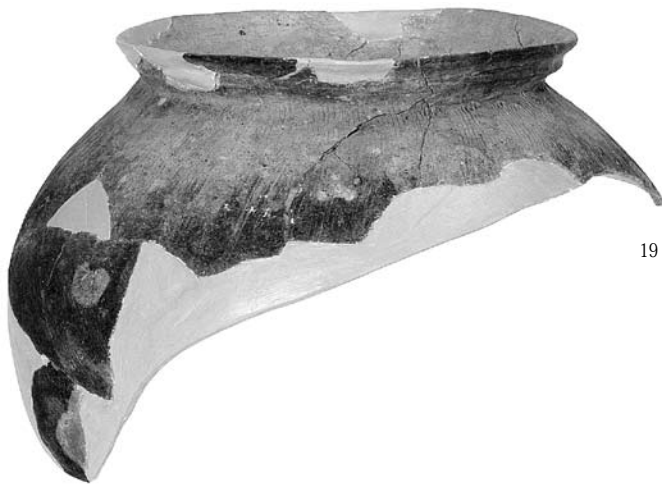
16



17



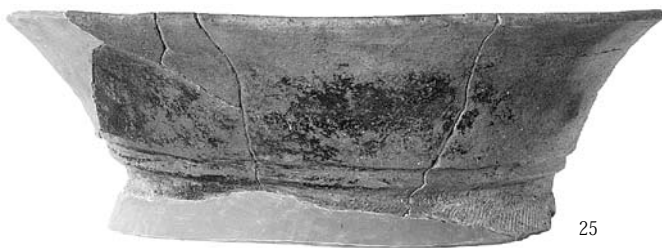
18



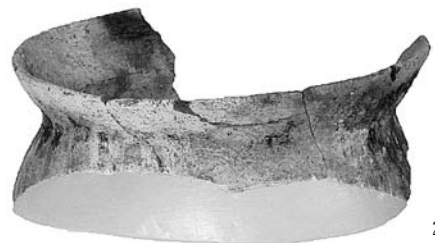
19



20



25

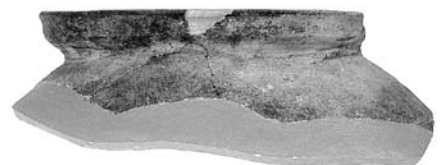


28



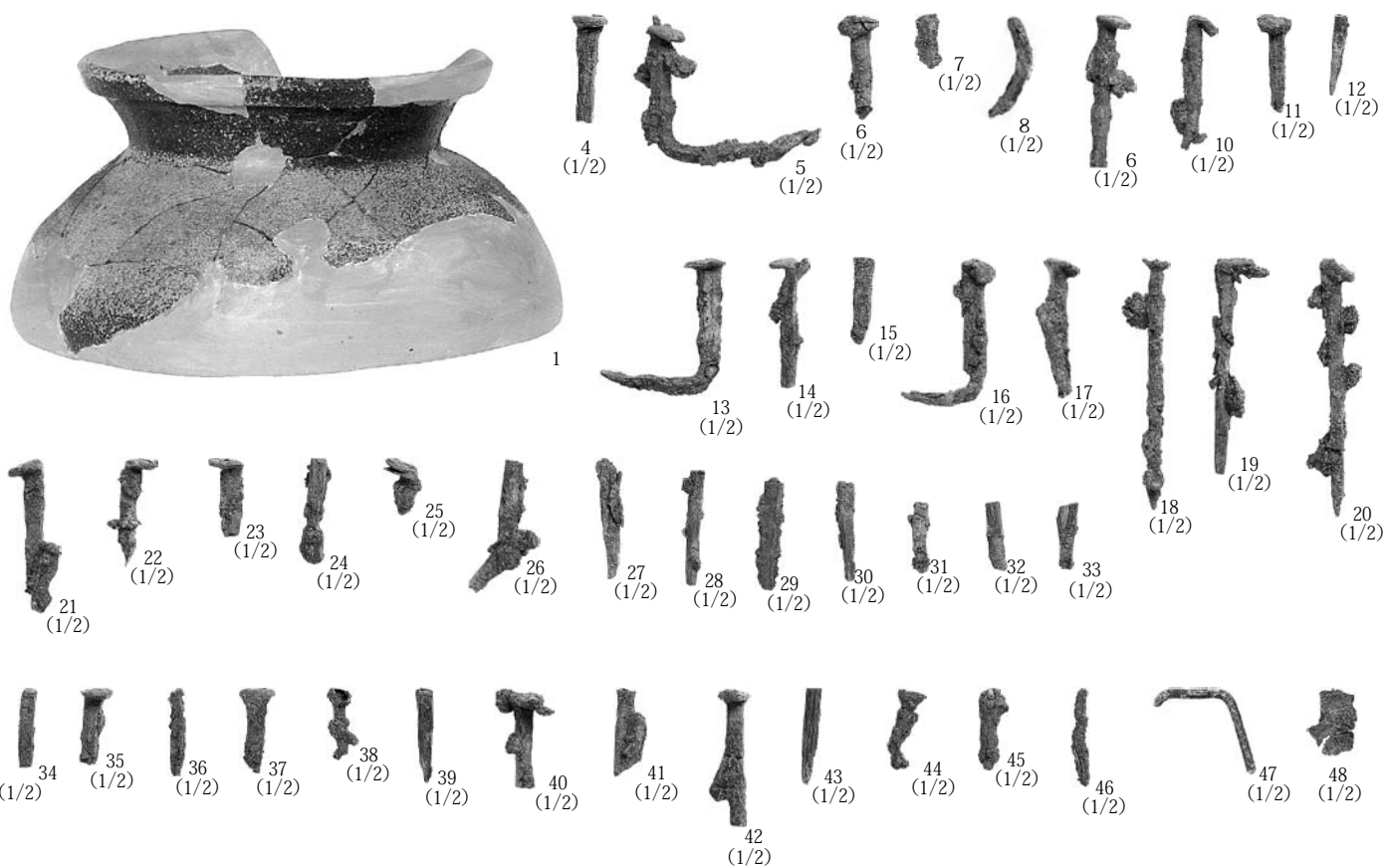
29

9号住居



2

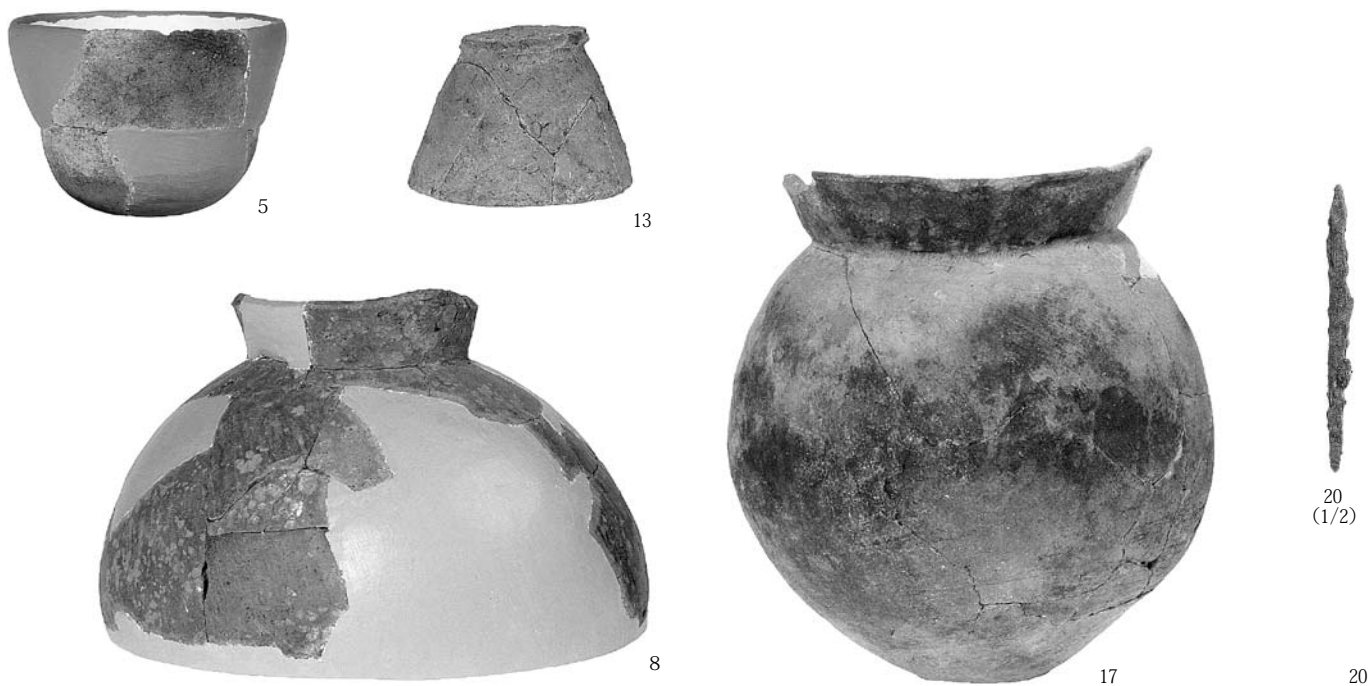
1号古墳



2号古墳



2号周溝墓



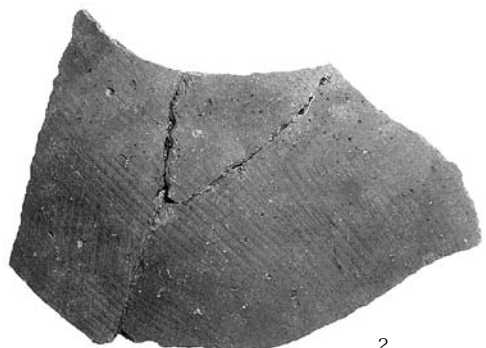
PL.90

2号周沟墓



15

3号周沟墓



2

4号周沟墓



1

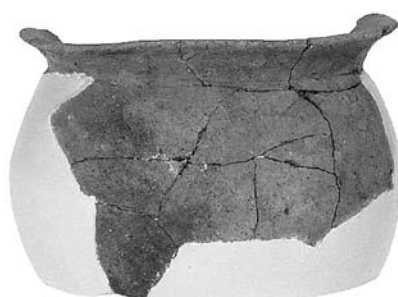


4 (1/2)

6号周沟墓



4



11

6号周溝墓



7



15



13



18

2号遺物集中

122号土坑



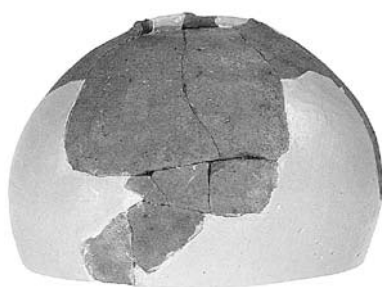
1



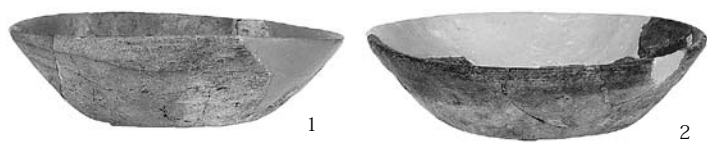
1



古墳時代・遺構外



1号住居



3号溝



5 (1/2)

4号溝



1

平安時代・遺構外



1号竪穴状遺構



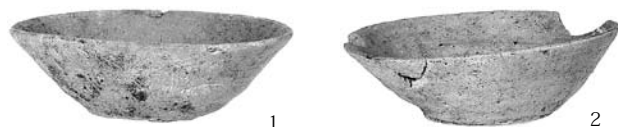
2 (1/2)

3 (1/2)

4 (1/1)

5 (1/1)

1号土坑墓



1

2



3 (1/1)



4 (1/1)



5 (1/1)

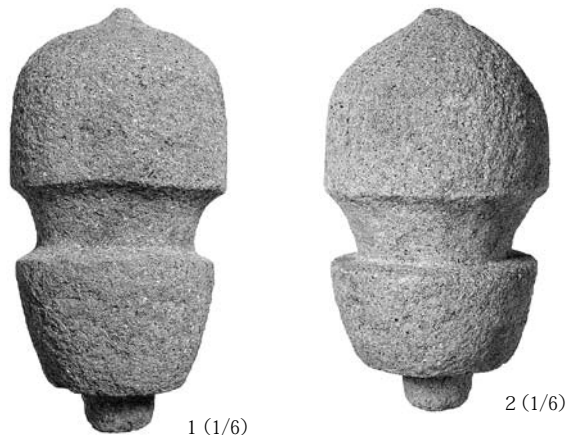


6 (1/1)



7 (1/1)

2号土坑墓



1 (1/6)

2 (1/6)

4号土坑墓



1



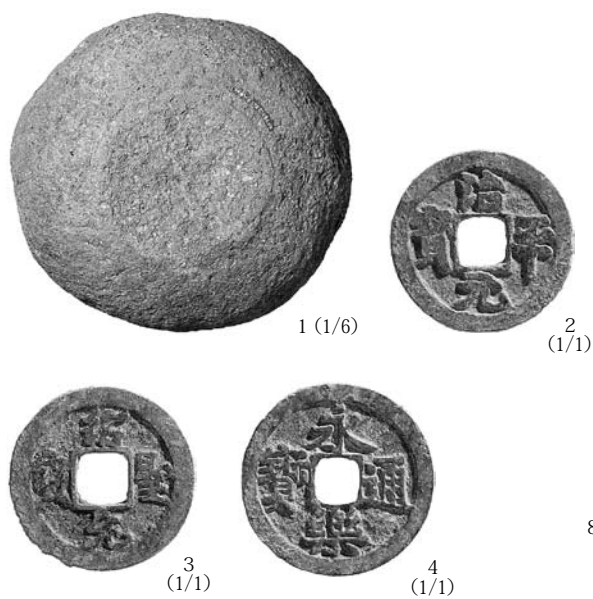
2 (1/6)



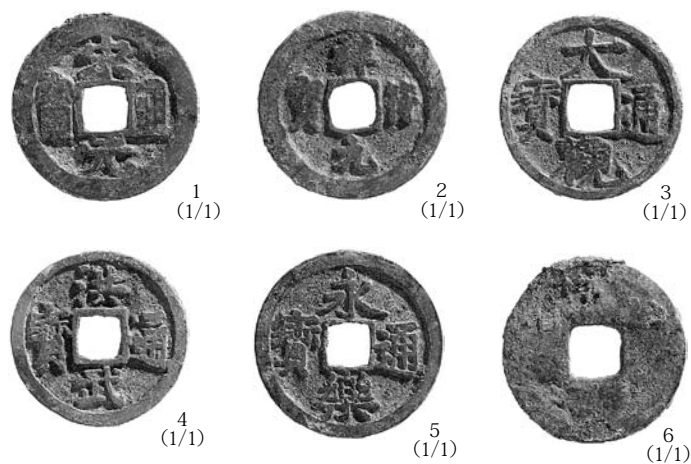
13

PL.94

5号土坑墓



6号土坑墓



8号土坑墓



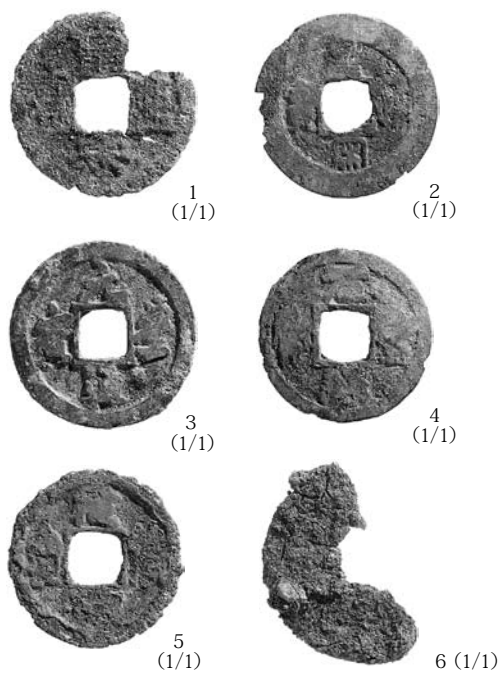
7号土坑墓



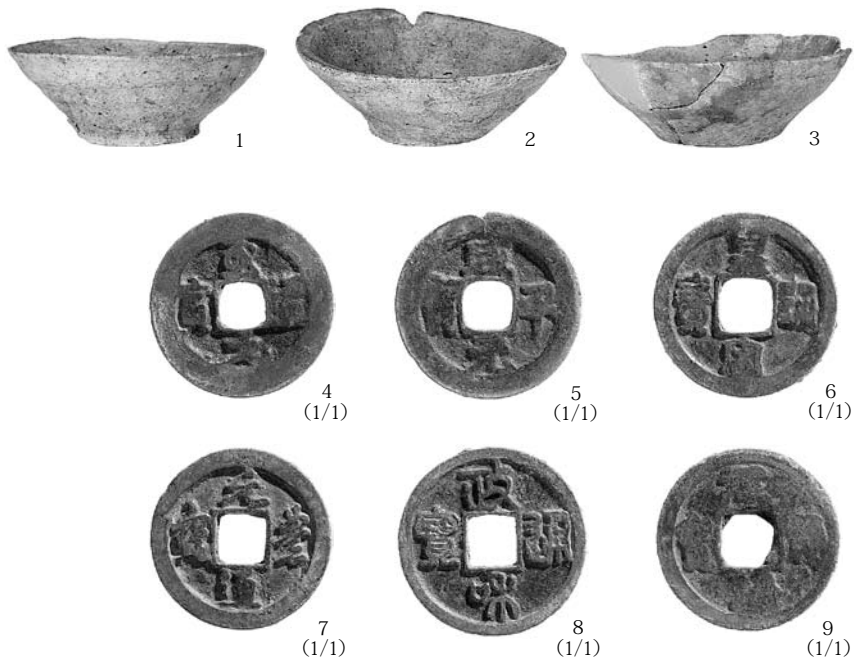
9号土坑墓



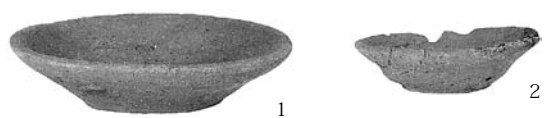
10号土坑墓



14号土坑墓



15号土坑墓



1 2



4 (1/1) 5 (1/1)

16号土坑墓



1



2 (1/1)



3 (1/1)



6 (1/1)



7 (1/1)

4号土坑



1



9 (1/4)



18 (1/2)



19 (1/2)



20 (1/2)



21 (1/2)



22 (1/2)



23 (1/2)



24 (1/2)



25 (1/1)



26 (1/1)



27 (1/1)



28 (1/1)



29 (1/1)



30 (1/1)



31 (1/1)

15号土坑



1 (1/1)



2 (1/1)



3 (1/1)

81号土坑



1



2 (1/1)

63号土坑



2

65号土坑



1 (1/2)



2 (1/2)

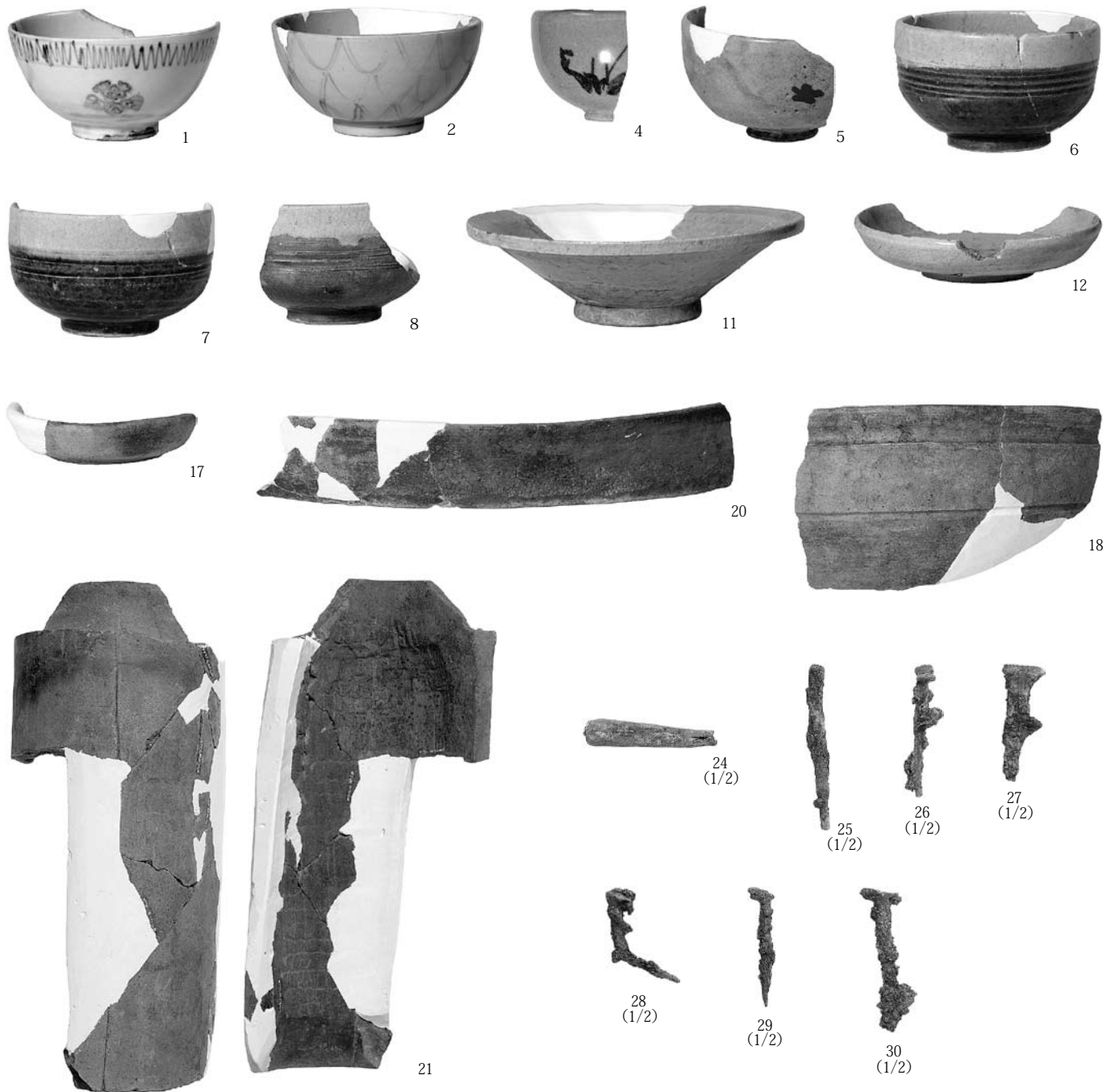
80号土坑



1 (1/6)

PL.96

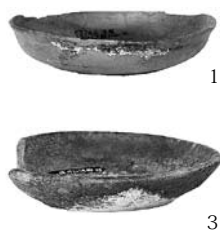
83号土坑



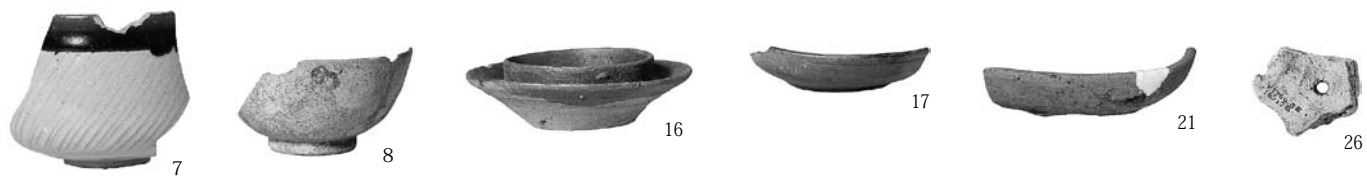
1号集石



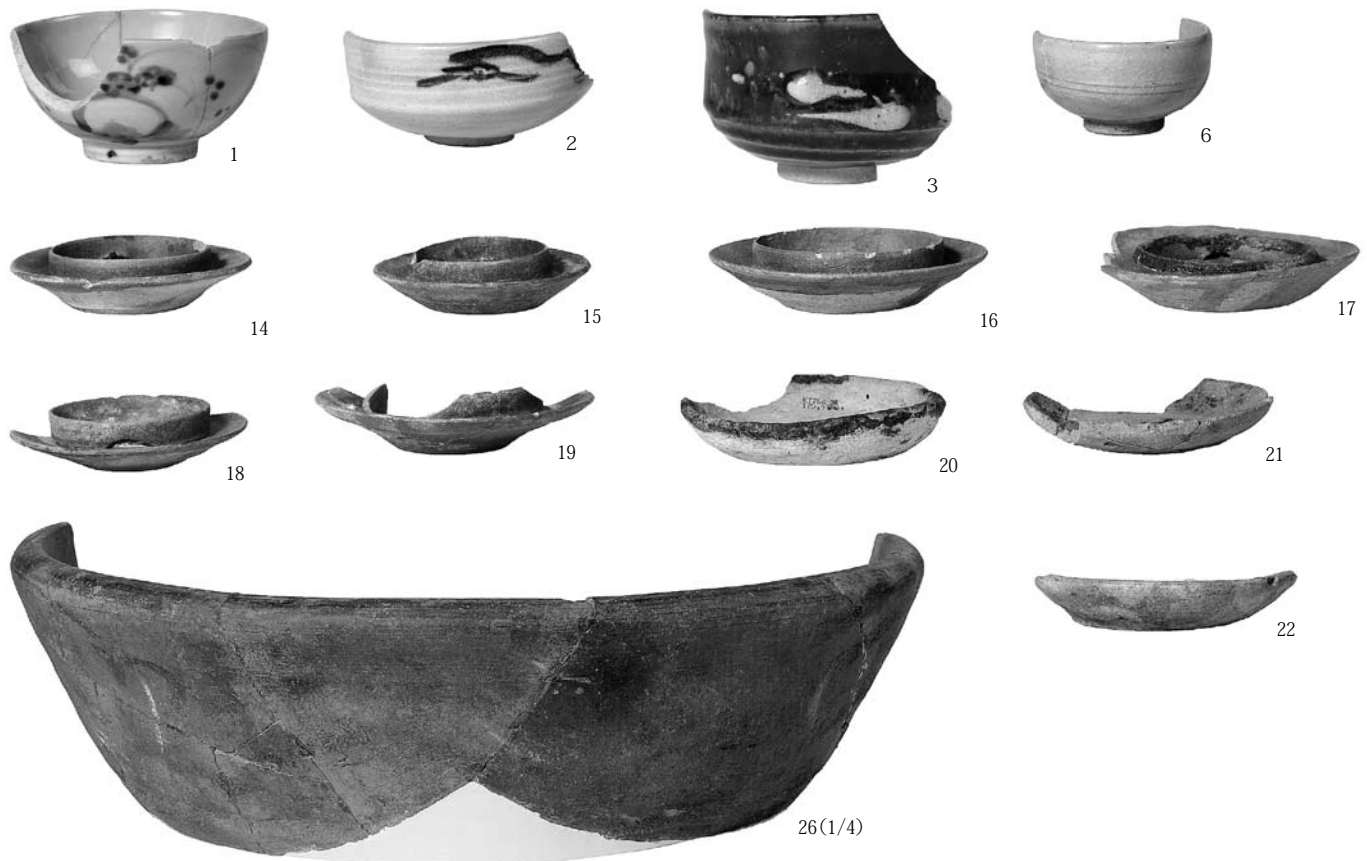
15号集石



16号集石



17号集石



18号集石

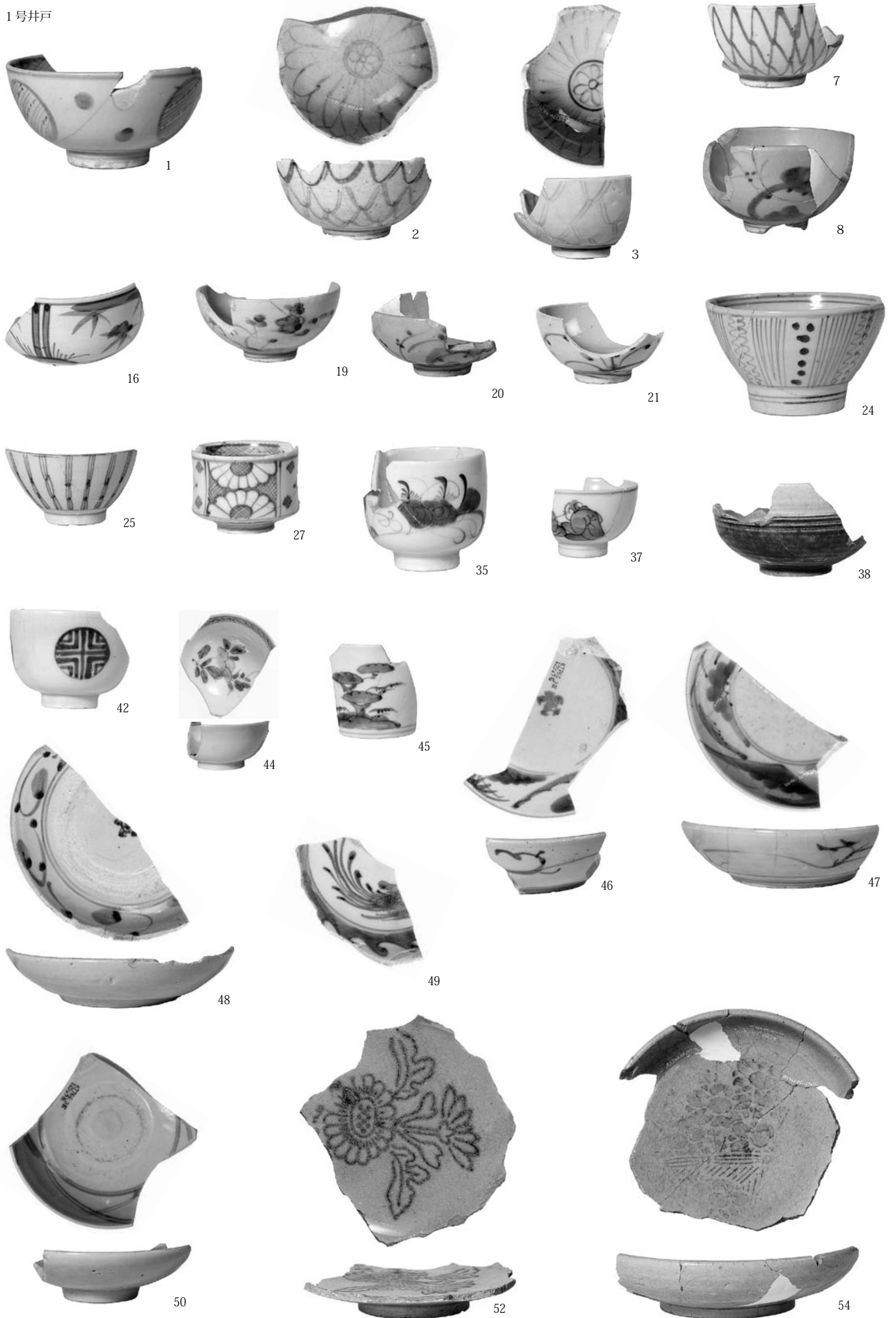


19号集石

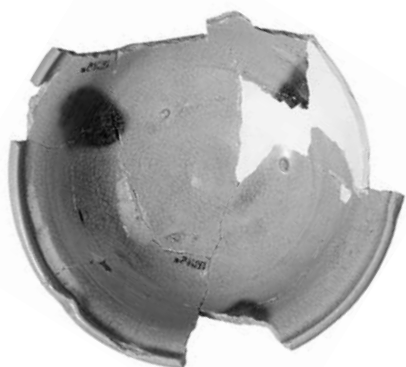


PL.98

1号井戸



1号井戸



59



60(1/4)



61(1/4)



66



57



71



73(1/4)



78(1/4)



79(1/4)



83(1/4)



87(1/4)



89(1/4)



91



92 (1/1)



93 (1/1)



3号井戸

5号井戸



1(1/4)



2



8(1/4)

PL.100

5号井戸



9 (1/4)



10(1/4)



11

6号井戸



3 (1/4)



4

1号堀



1
(1/1)



2
(1/1)

中・近世・遺構外



3



5



7



20



25



26



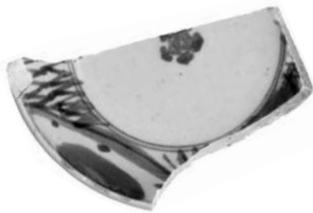
27



33



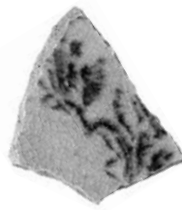
37



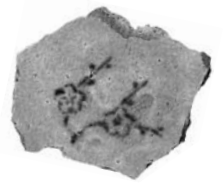
60



64



65



67



70



73

1号道路状遺構

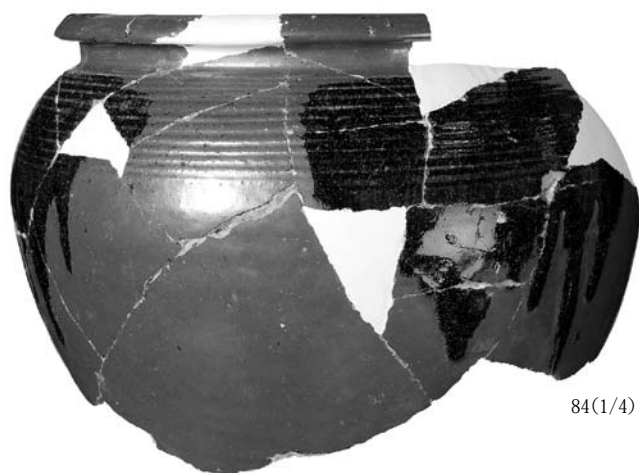


2
(1/1)

中・近世・遺構外



75(1/4)



84(1/4)



87



88



90



98(1/4)



91



96



97



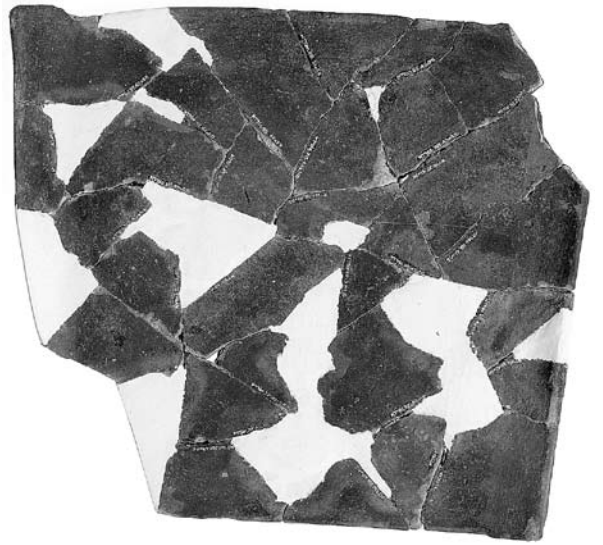
113(1/4)

PL.102

中・近世・遺構外



116 (1/4)



122 (1/4)



118 (1/4)



123 (1/6)



124



125



126 (1/1)



127



128 (1/4)



129



130



131



132 (1/1)



133 (1/1)



134 (1/1)



135 (1/1)



136 (1/1)



137 (1/1)



138 (1/1)



139 (1/1)

報告書抄録

書名ふりがな	どうばらいせき
書名	道原遺跡
副書名	北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	533
編著者名	木津博明/橋本淳/高井佳弘
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	どうばらいせき
遺跡名	道原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしただかりまち
遺跡所在地	群馬県太田市只上町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0289
北緯（日本測地系）	362003
東経（日本測地系）	1392433
北緯（世界測地系）	362014
東経（世界測地系）	1392421
調査期間	20040801-20050331/20050701-20051231
調査面積	9126
調査原因	道路建設
種別	集落/古墳/その他の墓/水田/畠/その他
主な時代	縄文/古墳/平安/中世/近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴住居4+土坑14-土器+石器/弥生-土器+石器/古墳-竪穴住居2+土坑12-土器/平安-竪穴住居1-土器/中近世-竪穴状遺構1+土坑93+溝12+井戸6-土器+陶磁器+銭貨/古墳-古墳-古墳2-土器+鉄器/その他の墓-古墳-周溝墓6-土器/中世-土坑墓13+火葬墓3-土器+銭貨/水田-古墳-水田-土器/畠-古墳-畠/平安-畠/中近世-畠/その他-平安-道路状遺構1-土器/中世-道路状遺構1
特記事項	渡良瀬川右岸に近い縄文～近世の遺跡。平安時代の道路跡は官道の可能性もある。
要約	現渡良瀬川の直近に位置する、縄文時代から中・近世に及ぶ複合遺跡である。縄文時代の竪穴住居は中期に属し、渡良瀬川に近い地域では希少な調査例である。古墳時代前期には周溝墓、竪穴住居、水田といった集落を構成する諸要素が揃う。後期には古墳が見られ、市場古墳群の延長部と考えられる。平安時代の竪穴住居は1軒のみだが、台地南端を通過する道路状遺構は、その幅から見て平安時代の官道である可能性がある。中世には一部が墓地として利用されるほか、竪穴状遺構も1棟見られる。近世には井戸、土坑があり、多くの遺物が出土することから、屋敷地があったものと思われる。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第533集

道原遺跡

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月9日 印刷

平成24(2012)年3月16日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

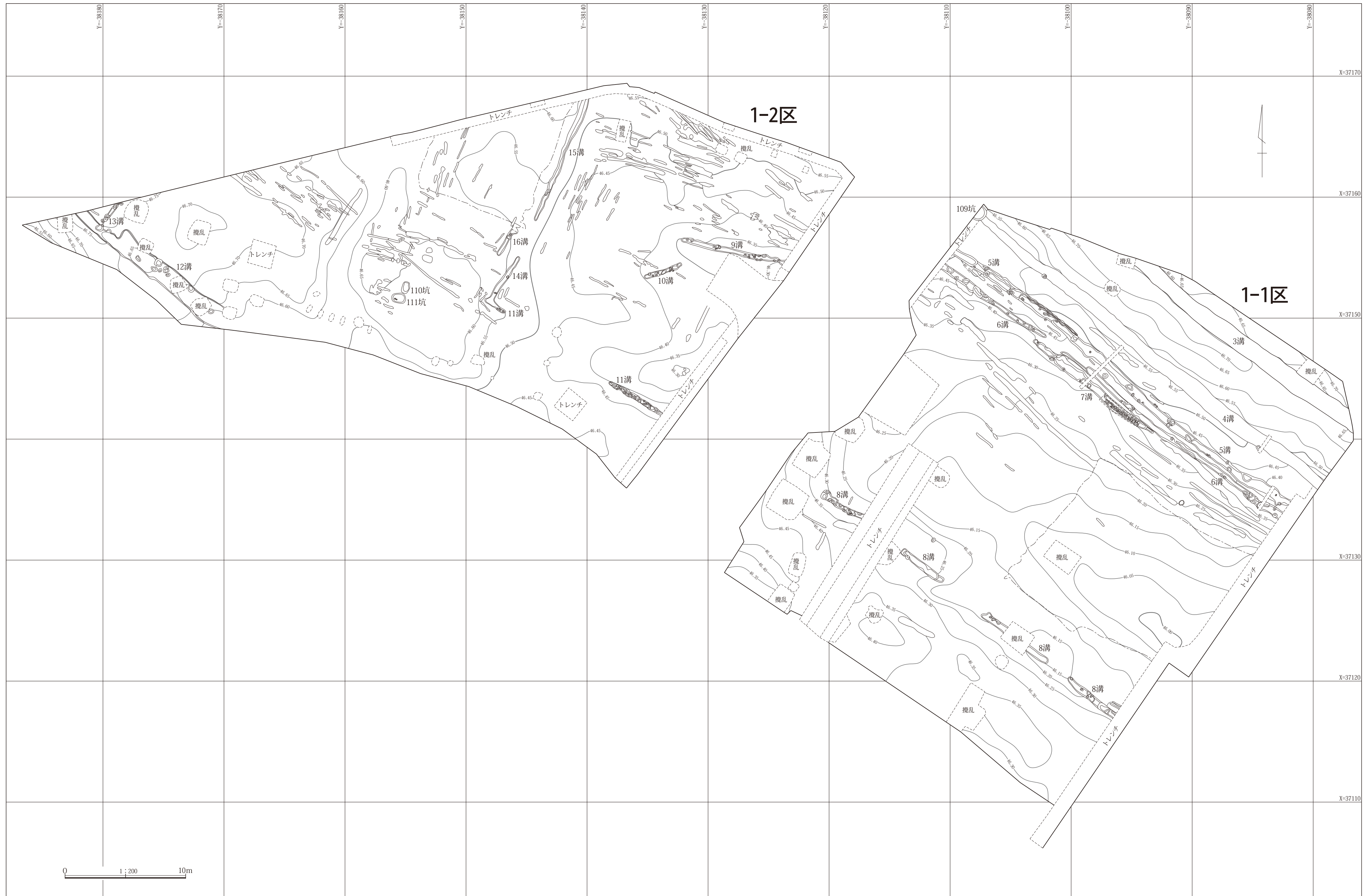
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話 (0279)52-2511(代表)

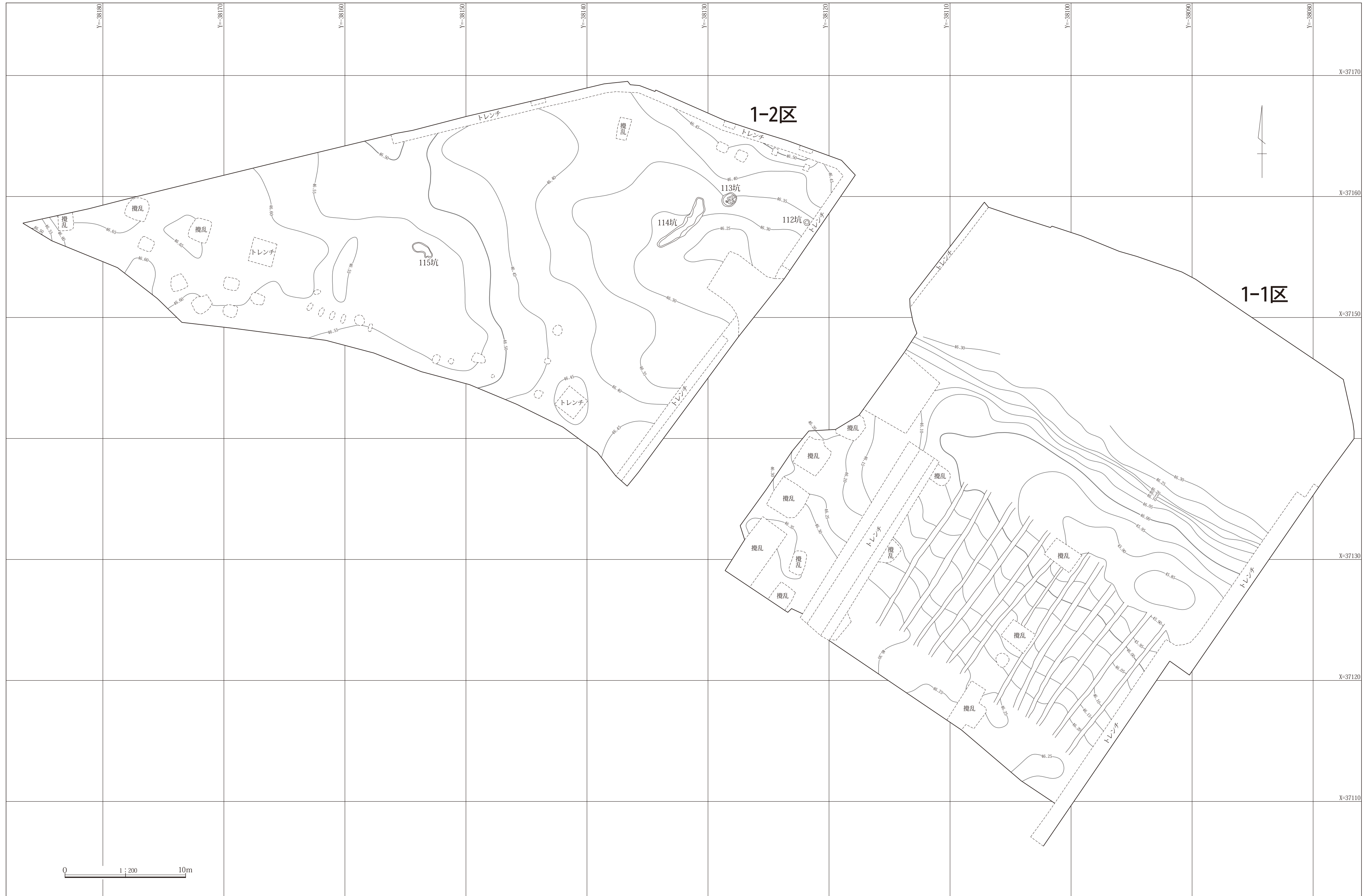
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社 川島精版

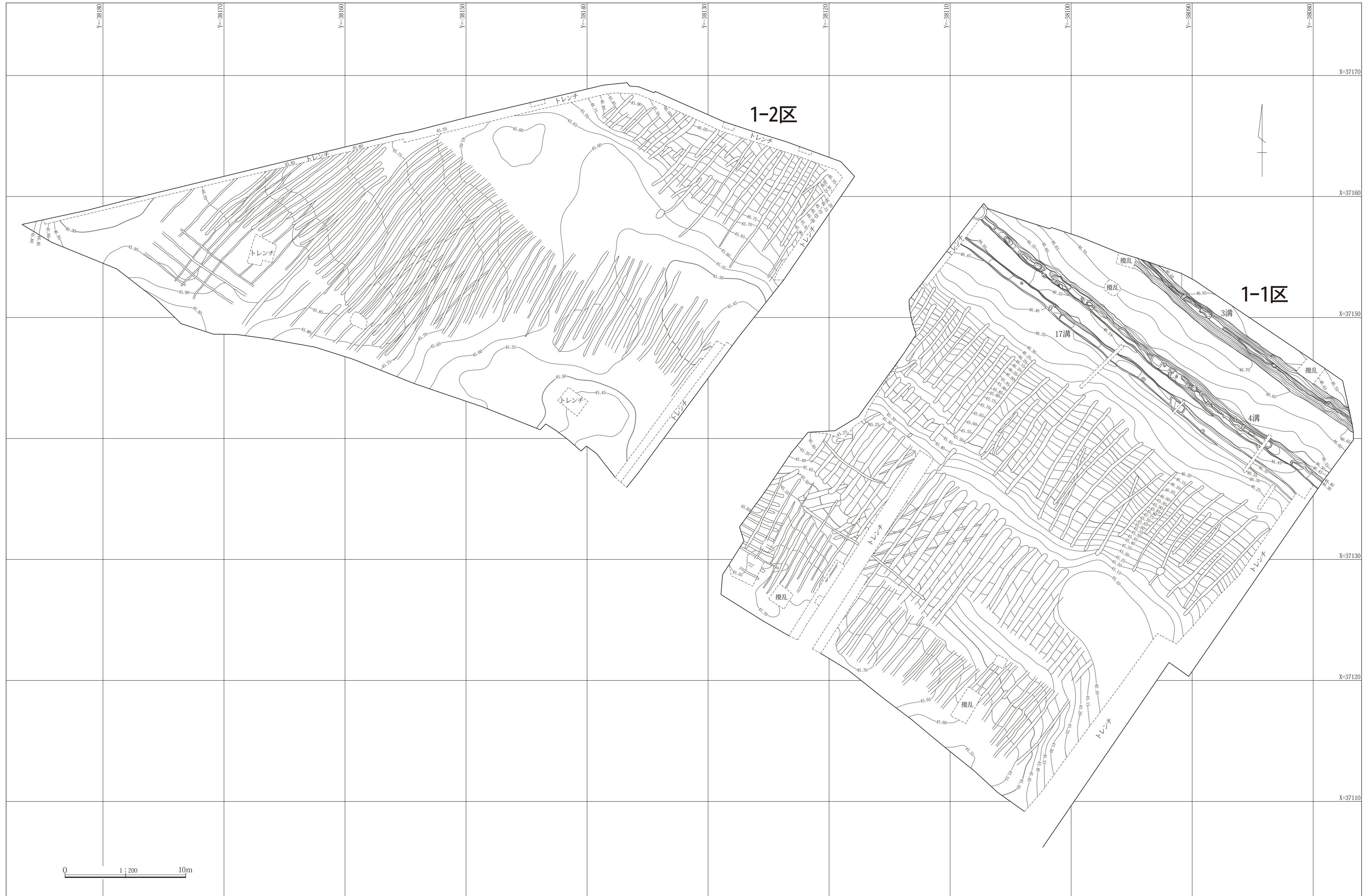
道原遺跡南調査区(1区)第1面全体図 (1/200)



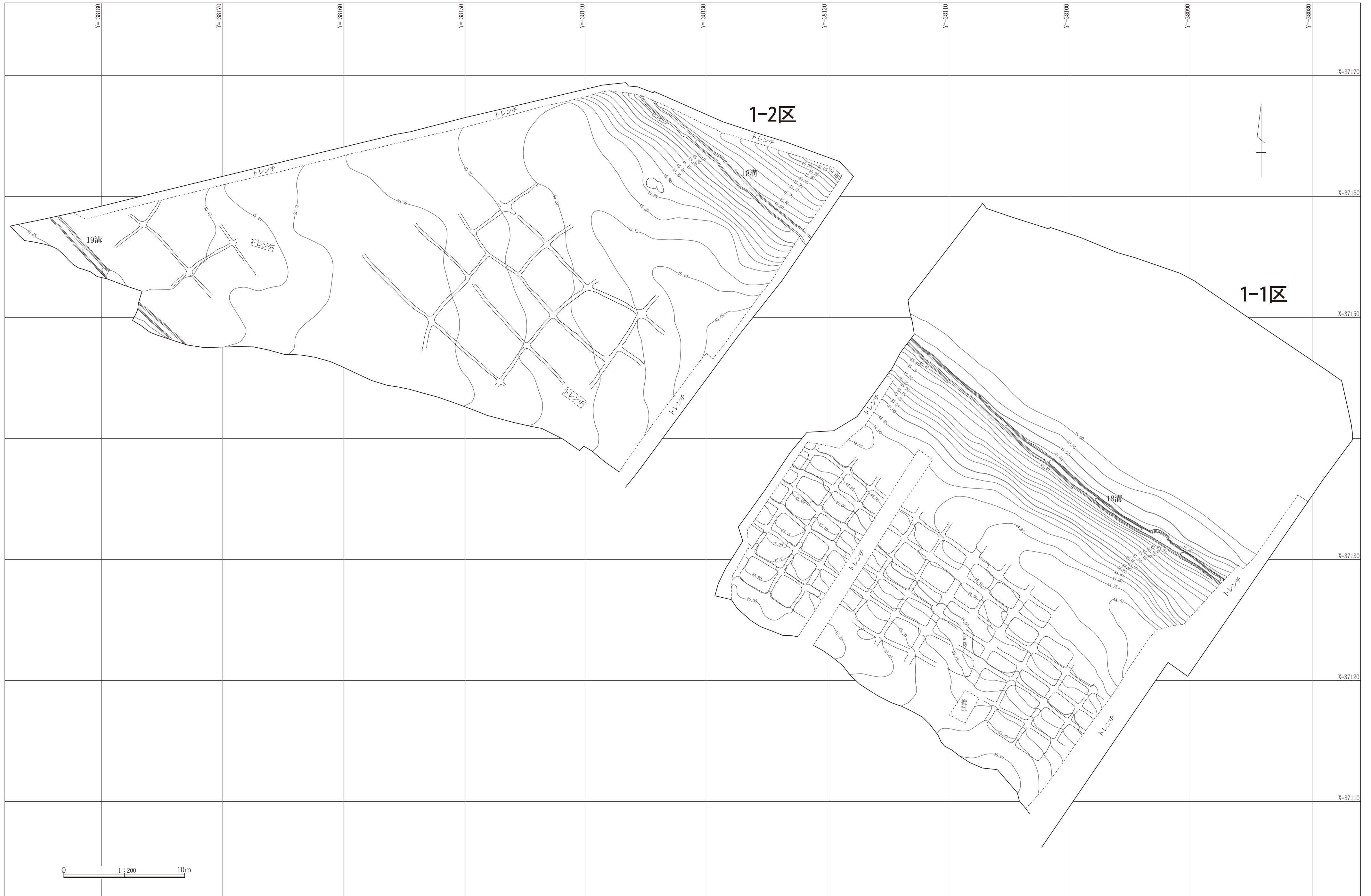
道原遺跡南調査区(1区)第2面全体図 (1/200)



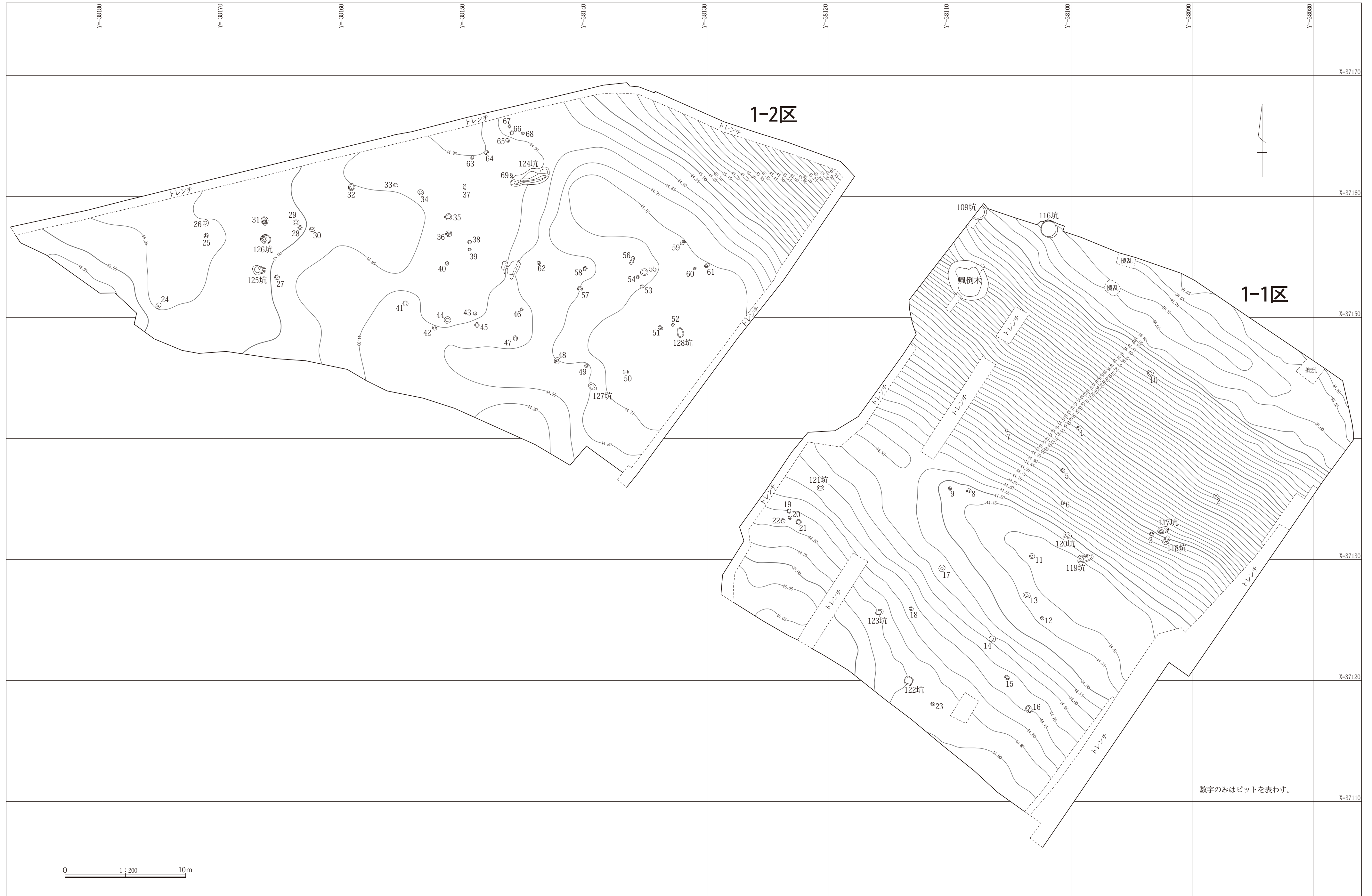
道原遺跡南調査区(1区)第3面全体図 (1/200)



道原遺跡南調査区(1区)第4面全体図 (1/200)



道原遺跡南調査区(1区)第5面全体図 (1/200)



付図6 道原遺跡北調査区(2~4区)全体図 (1/250)

